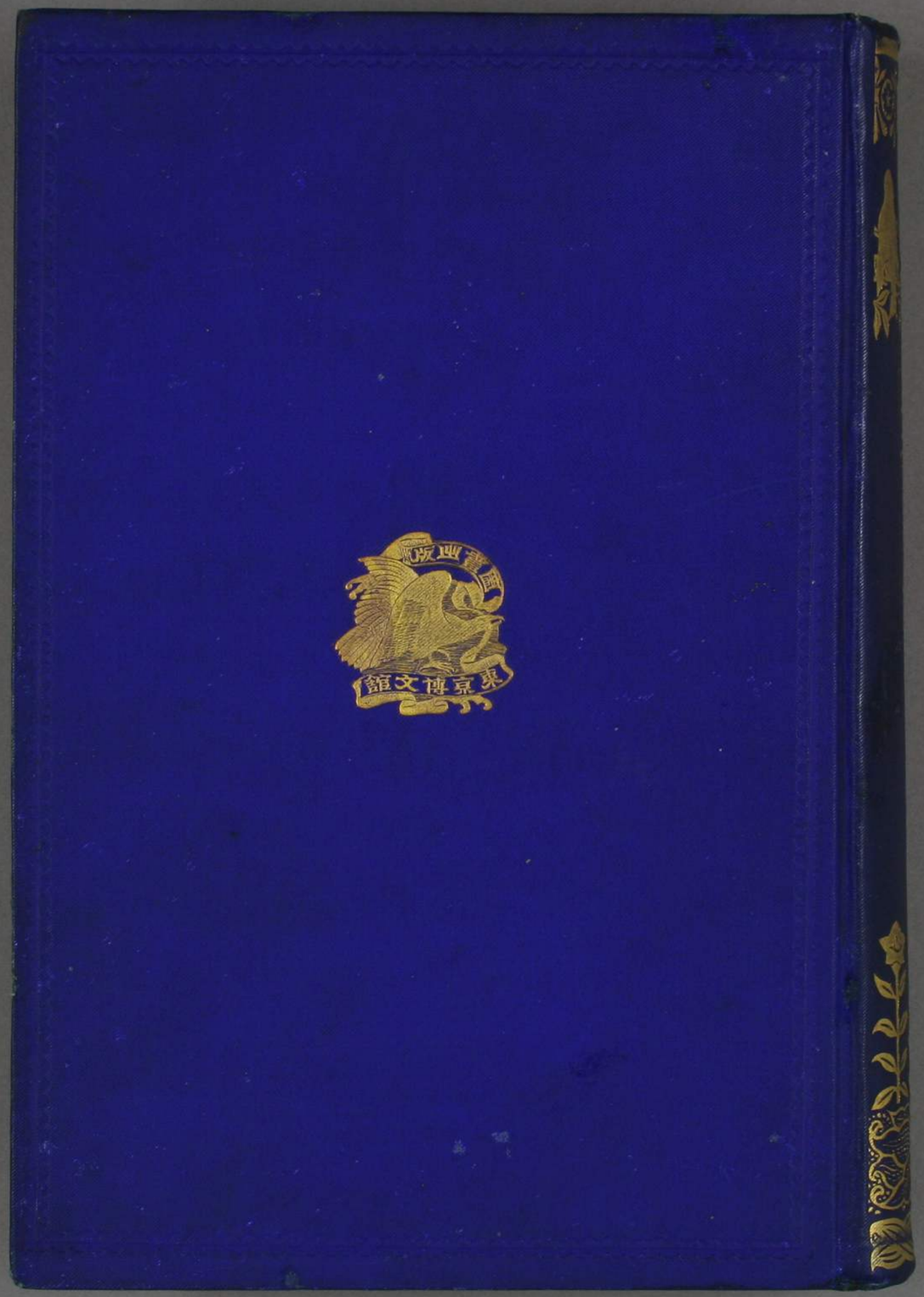
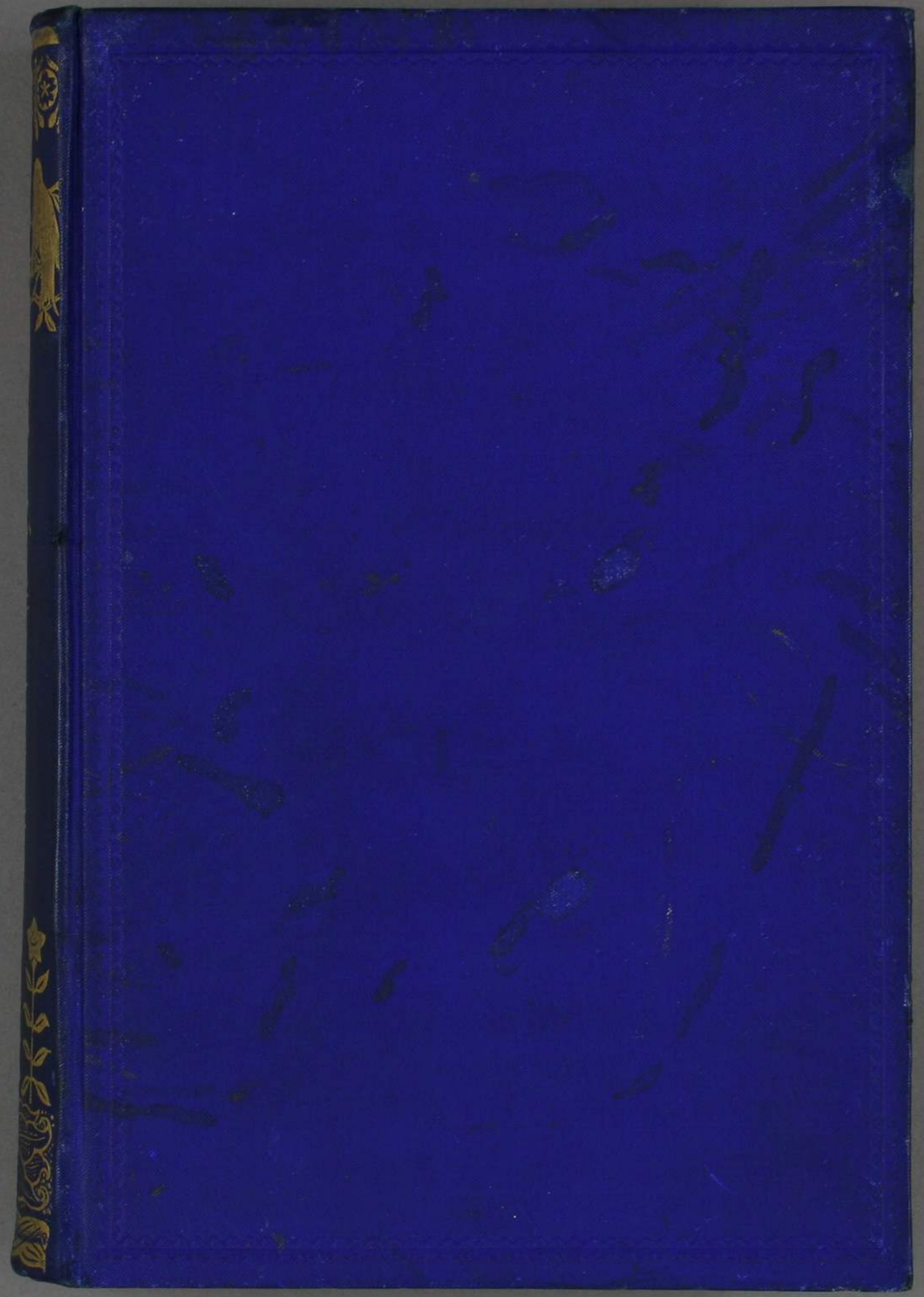

東京博文館

新躰詩詞自在



中部狀[illegible]

新體詩歌自在

[illegible]文館藏版

中邨秋香著

# 新體詩歌自在

東京 博文館藏版

# 新體詩歌自在

## 總論

世の中にある人事わざ繁きものなれば、心におもふ事これを、見るものきくものにつけて言ひ出せるなりとは紀氏が古今集の序のはじめに述べられし歌論ならずや。蓋し事わざなるものは時に隨ひて遷り行くものにて、事わざ已に遷りかはらむには、やがてそれに伴ひておもふ心も、將たこれをいひあらはす言詞も、おのづから遷りかはらざるを得ざるは自然の理なり。たとへば今の世に在る人、故郷にもあれ、他所にもあれ、音信せむとするには郵便あり電信あり、たれか天とぶ雁を仰ぎて、使にえてしがなと喞ち、あまとぶや雁

を使にえてしがな奈良の都に言つげやらむ（萬葉集）蜑の釣舟を望みて「人には告げよ」と歎ずる者あらん（和田の原八十島かけて漕ぎいでぬと人には告げよ蜑の釣舟（古今集）さて已に郵便あり、電信あるに於ては、これによりて又おの〳〵思ふ事見る事きく事の感なかるべからず、さらば又うれにつけていひいだせる歌は姿詞もおのづから遷りかはらざるを得ざるべきなり、故に歌は姿といひ、詞といひ、時世につれてうつりかはらざるを得ざるものにて、言ひかふれば、其時世々々の姿の、直ちに聲にあらはるゝもの、即ち歌なりともいふべく、紀氏が論旨もやがて此意に外ならざるべし。

三十一字の歌　即ち短歌は其由て起るところいと古しと



但八雲立つ出雲八重垣の神詠につきては、古人の說あれば今は姑くこれを措くとせんも、神武天皇の御時既に「葦原の茂こき小屋に」の御製を初め「狹井川よ雲立ち渡り」及び「畝火山晝は雲とゐ」（共に古事記にみえたり）等の歌見にたれば、其起るところはいとふるしといふべし、

其一體の形式をなしゝはいつばかりにかありけん、徵證なければ明かには知りがたけれど、おもふに嬥歌會に於て相互の思想をうたひあらはすに臨み、長歌は長くして頓なる應酬には便ならず、さりとて片歌の如きは又簡單にすぎて意をつくしがたき所あり（片歌とは三十一字歌の上の句の如きものにて、今の世の俳句に類せり）たゞ此三十一字の體の尤も便利なるより、會合する人々おのづから多くこれに

よりて其思想をあらはしたるが、終に形式をなすに至れるならんか。

長歌短歌とも上古以來時世の變遷に伴ひて、やう〳〵進化し來りしに、平安朝に至りて、長歌頓に衰へ、又其中葉に至るに及びて短歌漸く其天然の性を失ひぬ、是に於て長歌に短歌に謂はゆる事わざ繁き世に應じ、心におもふ所を言ひ表すの作用をなし得ざる事となり了れり、蓋し長歌の衰へしは一は遷都以來風土人情及び言語等の改まれりしに基き、又一は短歌の簡單にして且つ如何なる思想といへども、其大要は之をもて述べ得られざることなく、便よき體なるからに、人々多くこれに依りしを以ての故なるべく、又短歌の其天然の性を失ひしものは實に當時歌合のおこかく、盛に行



はれしによらずんばあらず。

抑歌合なるものは同題の歌を左右に組合せ、其優劣によりてこれが勝負を決むるものなれば、おのづから詞花やかにして、姿のうるはしからんを競ふに至るは、おのづからの勢なり、いかにとなれば詞花やかにして姿うるはしきものはおのづから人の心に入り易くして、勝を取るみちに近きものなればなり、さて此歌合の事たる寛平延喜をへて、天曆天德の頃に至り、最も其盛を極め、かちたる者は之をもてこよなき榮譽とすること、恰も武士の戰場に臨みて先登せしが如く、さるからに負けたる者は又うへもなき恥辱とすることと、是又同じく敵に背を見せたる武士の如くなりしなり、されば已に天德の歌合の時、壬生忠見の如きは平兼盛と組み

て負けぬるより、之を恥ぢて病を醸し、終に鬱死せりといふ説さへ傳へらるゝこと、(眞偽は知らねども沙石集に見たり)なれば左右おの〳〵互に競ひ争ひ、力めて我が方を助けて對手を攻むるに至る、さるからに判者は頗る其勝負を決むるに苦しみ、即ち之を典例にとひ(典例とは言辭、および句法等、前人の歌に典例證據あるものをいふ)典例あるものはたとひ秀逸ならざるも之を勝とし、典例なきものは一ふしあるも之を負としてかへりみず、以て其雙方の論鋒を避けしなり、さるは歌合の勝負を定むるの方作者おの〳〵左右に依りて二列に別れ、判者其中間の上位にあり、披講にあたりて例へば左方の歌なれば右方の第一先づ之を論難すれば、左方の第一之に應じて辯護し、右方の第二更に之を論駁



すれば、左方の第二復た之を辯護す、此の如く坐次の順序によりて論難辯護し、終末に至りて判者勝負を決む、されば徒らに此歌はまされり、この歌は劣れりといふのみにては、優劣なるものは人々うの見る所を異にするものにて、寸尺の之を測るべきなきものなれば、動ければ相互の論辯沸騰して終局なきに至るをもて、さてこう典例を古に取り、これによりて勝負を決むるに至りしなれ。

歌は見るものの聞くものに就けて、おもふところをいひ出せるものなれば、華美流麗なるものに對しては、うるはしくも花やかにもなるべく、勇壮活潑なる事に會しては、雄々しくもいさましくもなるべく、すべて其時の情況に從ひて、はかなくもあはれにも、烈しくもさま〴〵なる姿形となるべき

は、言を竢たずして、是即ち歌の歌たるところ也。

さるに歌毎に必ず詞は花やかにして、姿はうるはしからんと期するが如きは、已に之を作りものとなすものなり、志かのみならず言詞といひ言廻しといふものは、時世に伴ひて移りかはらざるを得ざるものなるは、現に上古以来世々に變遷し来り、以て平安朝當時に至れるもの、即ち其時の歌なるを見ても知るべし、されば此歌なるものは專ら當時に行はるゝ言詞、當時に行はるゝ言廻しに依りて、當時の現狀を吟詠し、其時の思想を縦横自在にいひあらはさん事を期すべきなるに、却て之を避け、一に古例舊式にのみ據らんとするが如きは、即ち其天性に悖るもののならずや、故にこれよりしてかの謂ゆる時世の姿の聲にあらはるゝ性は、忽ち變じ



て一種技藝上の作りものとなり、さて此一種技藝上作り物となれるより歌論議と稱するもの起り、續きて諸家の髓腦物世にあらはれて、益々技藝上作り物の根據を固め、これに次ぎて歌道門流に歸するに至り、竟に言語に制限を設けて、典例なき言葉を禁ずるのみならず、古歌に用ひしものといへども、亦自由に之を用ふるを得ざることゝなり、又古歌古文の解釋上には、口傳秘訣といふ事いできて、天下の耳目を狹隘ならしむるに至りぬ。

紀氏の時に於て已に早く歌よむに工風を費し、又其風調をいたはる風の起りし樣は、彼の土佐日記なるくち網もろもちにて荷ひいだすといひ、又かの行舟の綱手の長きの歌の評に、きく人のおもへるやう、なぞ斯くたゞ言なる云々といひ

ひ、船君の辛くひねり出して、などかけるに就きても、之を知るべしといへども、猶この頃及び一條天皇の頃までは貴賤上下を通じて、平語と歌語との間さばかりの懸隔あらざりし事は、即ち此日記中なる舵取の水手が言詞の「みふねより仰たぶなり朝北の、いでこぬさきに船手はやひけ」、といへるが自然に歌の如く聞ゆとある、又枕艸子雪の山の條に、常陸介がうたへる「うらやまし足もひかれずわたづみのいかなるあまにもの賜ふらん」といへるなど舵取および乞食尼の言詞をみて知るべし。

因にいふ、今昔物語にのせたる盜人の觀視上人に贈りし消息の如き、今日より之をみれば純然たる中古の消息文體なり、又これより下りて古今著聞集に見えたる蒔繪師



より坊門院にまゐらせし返事の文體などの如きも、又さまでに賤しき詞とも聞えず、凡て此頃迄は下賤の者の詞づかひも謂はゆる歌詞と甚しき懸隔はあらざりしなり。

然るに歌合の隆盛は遂に前に述べたる如き結果を見るに至り、歌は全く一種技藝上作り物となり、社會の言語及びその言ひ廻しは時世と共に變遷し行くにも拘らず、歌は依然として常に平安朝當時迄の形態を株守し、旅といへば常に艸枕のつゆをかこち、時鳥といへば必ず待つ夜重ぬといへるが如く、事實に於てはゆめにも見ぬ事を徒らに古人の口眞似しつゝ繰返し、却て今日實際みるところきくところにつきて感動する心をば言ひいださず、又言ひ出すべきものとも思ひたらざるに至る。

徳川時代に至り戸田茂睡これら歌道の衰弊を憤り、つぎて古學起りて大に之を打破りしかば、彼の言語の制限、口傳秘訣の陋習の如きは、漸く其跡を絶つに至れりしかど、元來古學の精神は、古意古言をもて之を今日に行はしめむとするにあるものなれば、其思想といひ、言語といひ、却て遠く萬葉時代にさへ擬ふるに至り、ますます〳〵歌といふもの天性とは背馳するに至りぬ。

若し平安朝の當時に於て歌合の事行はれず、よし又行はるるとも、おほかく盛なるに至らざりしならんには、歌論議といひ、諸家膸腦といふ事も起らざるべく、歌論議諸家膸腦の事起らざらんには、歌道門流に歸して言語の制限、口傳秘訣などいふ陋習も生ぜざりしならん、果して然らんには歌は殊更



に歌詞などいふ差別の生ずることなく、社會の言語と共に時世に隨ひて漸次變遷し、今日に至るも猶萬葉時代の如く、貴賤上下を通じて謂ゆる心に思ふ事を、見るものきくものにつけて、たやすくいひだすを得し事ならむ、まことに此の如くならんには歴代の風俗、慣習、思想、情態及び言語等の、時に應じて變遷せし有樣を今日に於て親しく察し得らるべきのみならず、其間幾多の盛衰は免れざるべきも、要するに進化に進化を累ね來り、今日に至るに及びては、非常の發達をもなしたる事なるべきに、泰運却て否運をひらき、終に今日の如き有樣に陷りしものは、實に吾が文學上のためにも、將た史學上のためにも、憾むべく歎くべき限りといふべし、

人は心のおもふ所を十分にいひあらはさではにあらぬものなり、平安朝の短歌漸く其天性を失ふ端緒を開けりといへども、當時の如きは歌道なほいまだ衰へずして優れたる歌人に乏しからず、隨てかの題詠の歌こゝろ力めて作り物となしたりけれ、其實際に當りてよみいでたるものに於ては、猶其天眞を存する者少からざりし世に於てすら、已に三十一文字の調を以ては其おもふところの十分をつくし能はざる所あり、是に於て今様歌なるものは發生したり、蓋し今様歌は其源を佛教の偈、並びに漢詩等の國讀調に發し、七五をもて調をなすものにして、此七五調は尤も後世の歌に適する物なる事は、現に古今集以後の長歌の如き、排列の上は五七におこれりといへども、其口調に於ては即ち純然たる七五なるを以て之を證すべし、是本邦の言語及其言ひ廻しは、平安朝以來漢文國讀の口調大に混和し成るものなれば、歌詞の上に於ても七五調に非れば、十分の思想はあらはし得がたきに依りてなり。

明治の世に至り西洋科學文物の輸入と共に、天地は全く一變し、海には瀛船あり、電信あり、郵便あり、新聞あり、雜誌あり、工業に、商業に、農業に、凡ろ社會萬般の景狀一として新ならざるはなく、隨て其風俗、慣習、思想、情態の如きも、亦之に伴はざるを得ずして、殊に其最も著しく變ぜしものは言語及び言廻しに在り、是に於て彼の天性を失ひたる歌に於ては勿論、今様體を以ても今日の思想は言ひあらはすこと能はざるに因り、更に一種の調を借りて此新天地

の景象、および思想を發揮するの道開かる、是即ち謂はゆる新體詩なり。

新體詩は學校唱歌に淵源するものにして、學校唱歌は今樣歌に淵源せしものなり、即ち彼の「春の彌生の曙に」といひ、「我が日の本の朝日影」といふ唱歌の如きは、全く今樣歌にして、又「あがれ〳〵廣野の雲雀」といひ、「春は花見三吉野おむろ」といふ類は今樣體より變じ來れるものなり、これら唱歌に薫陶せられ、高等の教育以下を受けたる生徒にして、文事思想を有する輩、謂はゆる見るもの聞くものにつけて感動する心を言ひあらはさんとするに臨み、三十一文字の歌は已に其天性を失へるものゝごみなるのみならず、始めより此輩の腦には在らざるものなれば、もとより之に依るべきにあらず、さりとて將其の思ふ所は必ず言はでばえあるべからざるより、即ち曾て學校に於て學びたりし唱歌の口調を借りて、其思想のある所を發揮す、是れ新體詩の起る所以なり、故に新體詩は學校唱歌に淵源し、學校唱歌は今樣歌に淵源すといへるなり。

是故に平安朝に於ける今樣歌と、明治に於ける新體詩とは、等しく思想の自由を發揮せんが爲めに發生せしものなれども、其範圍の廣狹、作用の大小に至りては、全く同日の談にあらず、即ち今樣歌は平語、字音語の如き、之を用ひざるに非らざれども、猶ほ其主として吟哦する所は多く花鳥風月の點にあるものなるを、新體詩は之と異なり、平語、字音語はいふも更なり、凡此體にして能く語調を整ふるに於ては、洋語

といへども之を用ひ得べく、凡べて天地萬有の事物歌に入らざるものなく、調にのぼらざることなくして、實に明治今日の歌謠に適せる天賦の體と稱すべきものなり。

さて此新體詩の稱呼は、外山、矢田部、井上三博士の命ぜられしものにて、そは即ち去ぬる明治十五年の頃、三博士が合著に係る新體詩抄なるものに起れるなり、故に三博士は此新體詩につきては特(ひと)り命名(なつけ)親(おや)たるのみならず、其唱導の上につきても緊切なる關係あるものといふべし、但し新體詩の稱呼の妥當ならざる事は、余が曾て著したる新體詩論中委しく之をいへり、其大要は、詩は字書に志之所之也とも、また在心爲志、發言爲詩とも見ゆ、又歌の字は、詠也、永引其聲以詠也とも、歌者柯也、以聲吟咏上下、如艸木有柯葉也とも見ゆ、又



詩歌の字を併せ說きては、詩言志歌永言とも、詩言其志也、歌詠其聲也とも見ゆたれば、字義よりいへば聲を永くするうた、即ち學校唱歌の如きは歌にして、文字に記して之を讀み、別に吟咏するにもあらざるものは詩といふ意なれば、新體詩の稱は字義に於ては當らざるには非ざれども、我が國には古くより支那風のうた入來り、我が國人も專ら之に倣ひて之を作り、以て思想を述ぶる一種のものとなし、之を名づけて詩と稱し、やがて訓してからうたといひ、我が國ぶりのうたには、歌の字をあてゝ互に之を分ち來れる事なれば、新體詩といふときは支那風のうた、すなはち古來謂はゆる詩にして、其平仄、又は押韻、若くは句法等に於て、新しき格を立てゝ、作り出す者のごとくも聞ゆべし、故にむしろ新體歌と

いふの穩當なるに如かず、といふに在り、然れども今日に至りては此名追ひ〳〵普通稱となりしものゝ如く、或は抒情詩といひ、叙事詩と唱へ、または詩情を動かすといひ、詩中に入るなどさへいふめれば、爾今は正しき字義に從ひ、學校唱歌の如き、聲を永めて歌ふ者は之を新體歌と稱し、其他は之を新體詩といふべく、されば從前詩と稱せしものは、更に之を漢詩と唱へて、これが差別を立つべきなり。

技藝上作り物の歌は、歌と稱すべき者に非ざれば今は論ぜず、天性の歌といふ者は、天然自然の人情に基き、其感發する所を矯めず飾らず直ちにいひあらはすものなれば、心の誠は即ち其聲韻の中に顯はれ、人心を感動し、元氣を發揚するものなる事は、之を史上に徵して明かなる事實也、さればこ



う紀氏も力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はすとはいはれけれ、斯の如く歌は世態人心に緊切なる影響を有するものなるをもて、其發達の如何は、社會の利害得失に關係する事まことに輕小ならず、例へば神武天皇の中國を征定したまふに當り、歌によりて常に兵氣を鼓舞し給ひし如き、平安朝の道義廢頽し、纖弱風をなして、兵權竟に武門に歸せしは歌流行の與りて力ありしごとき、以て見るべし、但平安朝中葉以後の歌は、已に其天性を失へるものなれども、戀歌の如きは專らかの矯めず飾らざる自然の誠より發するものなれば、固より深く人心を腐敗せしむるに足り、又かの技藝上作り物の如きも、其人心を浮薄ならしむるの上に於ては、仍ほ甚だ力あるものなればな

り、斯くて武家の世となりては、戰亂相繼ぎ、社會一般只管武をのみ講じ、文事全く地に塗れ、彼の技藝上のものといひ、今樣歌といひ、共に大に衰微し、僅に餘波を將に絶えんとするの間に保ちしまでの有樣なりければ、利害共に見るべきものなく、德川氏の時に至り、古學に起りて長歌を復興し、短歌を釐正し、以て其範圍は漸くひろまりたるが如くなりしも、其の主となる所專ら擬古にありしを以て、歌其物の性質とはまず〳〵背馳するに至りしと、前に述ぶるが如し。

維新の風潮は滔々として社會を掃蕩し、こゝに全く一新天地をひらきたるに、特り歌のみ舊套を墨守して、毫も世態に伴ふことなく、長歌といへば專ら萬葉時代の天地に跼蹐り、短歌といへば偏に八代集の範圍に彷徨るものは、是畢竟か



の天然の性を失ひ、一種の技藝上作り物となりて、全く社會に無用視せられ、一に社會に關係なしと見とめられたるに依る、古來歌文と併せ稱せられし文章の如き、明治十二三年の頃までは甚だ幼稚にして、當時國文と稱すれば、專ら擬古文即ち謂はゆる侍文の事とし、國學者は此體に非ざれば國文とは稱しがたしと論じ、一般世人はこの體の社會今日の事物を論述するに足らざるを辯じ、漢文書き下し體、又は西洋文翻譯體を以て國文となすべき由を主張したりき、爾來文運日に隆盛に趣くに從ひ、其正要に驅られ、いつとなく擬古文體は、漢文書き下し體及び西洋翻譯體と亙に相混化し、遂に今日の普通文體となれり、此體を以てすれば社會萬般の事、論辯記述し得ざる者なきに至れるものは、是畢竟文章

社會に無用視せられず、社會に無關係のものと認められざ
はりしを以てなり。

技藝上作り物は歌の天性にあらずといへども、慣習の久し
きおのづから第二の天性となり、今日に於ては容易に之を
打破すべからざる勢を成しぬ、されば之に依りてはついに
今日の思想景象はいひあらはし得べからず、さりとて人は
之をいひあらはさではにありがたきものなれば、爰に更に
天然の性を有せる新體詩は發生せしなり、故に今日現在に
行はるゝ新體詩の、果してよく其天性を盡せるものなりや、
否やは、知らずといへども、唯其性質に於ては凡う今日の現
象にかゝる天地萬有の事物は、一も此歌に入りにざるもの
なく、此調にのぼりえざるものある事なかるべきなり。



學校唱歌は今樣歌より變じ來るもの、軍歌は即ち新體詩に
して、唱歌より轉じ來れるもの、これら共に極めて近來の發
生にして、未だ幼稚を免れざるものなり、即ち歌人の作に成
るものは動もすればかの技藝上作り物の臭氣を脫せず、外
山博士の謂ゆる俊基朝臣東下りの風を存し、書生の手にい
づるものは、修辭拙陋にして言語の調和を失ひ、本居翁の謂
はゆる鵺文字の譏を免れざるが如し、此の如く不充分なる
ものなれども、學校唱歌として之を用ふれば、德育薰陶上偉
大の功を奏し、軍歌として之を用ふれば、敵兵遙に此聲をき
く、三軍忽ちいろを失ふに至る(是日淸戰爭に於て親しく實
驗する所なり)ものは、畢竟うの天然の性より成るところ、誠
の貫通に外ならざるなり、夫れ不充分のものすら、尙然り、況

んや能くこれが充分をつくすに至らば、其國家を利し社會を益するもの果していかばかりぞや。

嗚呼一利一害は數の免れざるものなるか、新體詩の發生は斯くの如く悦ぶべき顯象にして、即ちかの國文に在ての普通文の如く、明治今日の思想は全く此體に依りて發表し得らるべしとの倚望を屬するものなるに、近來抒情詩なるものひろく青年の間に行はれ、新聞紙に、將た雜誌に、專ら男女戀愛の情のみを吟哦し、其勢ほと〳〵新體詩は抒情詩にして、抒情詩は即ち男女の戀愛をいふに限るものゝ如く、婀娜奢豔の詞藻をもて、淫猥狎雜の痴情を述べ、道義を破り、風教を害ふもの、實に鮮少ならず、豈なげくべきの至りならずや、夫れ愛は人情の極粹にして、固より尊ぶべく、重んずべきは



言を俟たず、隨て抒情詩の如き決して排斥すべきものに非らざるのみならず、新體詩に主とする所は、寧ろ抒情詩に在りとも言ふべき程のものなれども、是即ち公正の愛の義にして、之を君臣の間に發しては義となり、父子の間に出ては親となり、夫婦にしては別、長幼には序、朋友には信となるもの是なり、豈穴隙を鑽りて相窺ふが如き私欲偏狹なる愛を言ふものならんや。

抑々今日の青年は、他日第二の社會に立ち、社會を組織形成すべき者、即ち爾今以後世界の競爭場裏に立ち、日に月に益々多事多難なるべき我が日本帝國を雙肩に荷ひ、これをして必ず國威を四表に宣揚し、以て世界の日本たる名實を完からしむるの大任に當れるものならずや、豈朧月夜の夢を

たづねて、忘れ扇におもひをなやまし、梅が香寒き春を卿ちて、片敷く袖の月を恨むが如き、桃源洞裏の春に戯るゝ時ならんや、これ畢竟これらの種類は詞藻艶麗に、風姿婀娜たりやすき、去かも作り易くして、讀者の眼をひくを以ての故なるべしといへども、戀歌のふかく害毒を國家に及ぼしたるは、殷鑑親しく、平安朝にあり、果して然らば第二の社會を雙肩に荷ふ者の如きは、深く懼れ、尤も愼まざるべからず、嗟夫幼穉なりし新體詩は、漸く方に生長して、前途有望なる青年とならんとす、而して今忽ちにして偏狹なる抒情詩のために其方向をあやまり、永く有害無益の淵に沈まんとす、是豈第二の社會に立たんとする青年にして、一朝花柳に心を惑はし、竟に一生をあやまり、樂器を携へて食を道路に請ふと



異ならんや、まことに歎くべきの限りといふべし。

抒情詩歌ふべし、皇統一系三千年、君臣の道一日の如く、上下の情一家に似たり、君の臣に臨むは、恰も父祖の子孫に於けるに同じく、臣の君を輔くは、さながら子孫の父祖を慕ふに異ならず、固より他邦の君民の時をもて相合離し、勢に依りて相去就する者の類ならず、されば我日本民族たる者、誰か君主をあふぎ慕ふの情なき者あらん、抒情詩歌ふべし、哀々たる父母、我を生みて劬勞す、匍匐へば立たん事をおもひ、立てば歩まん事を欲ひ、病あれば憂ひて眠らず、癒ゆれば喜びて食を忘れ、すべて父母の我を愛する、我身の我を愛するよりも厚し、此の如き恩をうけて生長せし者、誰れか父母を親しみ慕ふの情なからん、春の山の花にまじりては、手を携へ

し兄弟を戀ひ、秋の野の日に辿りては袖を列ねし朋友をおもふは、人情の常なり、況んやあらがねの土もさくべき日盛りに、流るゝ汗を拭ひもあへず、車を挽きて道路を走り、片側月夜影ふけて、瓦の霜は雪の如く、風の劍は膚を劈く夜、聲も氷りて鍋燒溫飩をうるが如き、勞働社會の狀態、貧民の情況をおもはゞ、誰か惻然として淚を揮はざるものあらむ、これらの情内に動きて、外聲にあらはるゝもの、是歌にして即ち眞の抒情詩なり、故に抒情詩は決して男女間、偏狹なる愛戀の情に限るにあらず、限らざるのみならず、此の如き弊害ある愛は、決して眞正の愛とはいふべからざるなり。

或は言ふ、西洋の抒情詩の如き專ら男女間戀愛の情をうたへり、我國の抒情詩豈ひとり之に違はむや、と嗟夫これ何等



の言ぞや、西洋の名に眩惑して、利害得失を問はず、一に之に僕從したりしは、明治十年代の事なり、洋詩にしてとるべきところあらば、固よりこれに從ふに躊躇すべからずといへど、其取るべからざるもの〳〵如き、豈斷乎として之を遮絶せざるべき、西隣の家もと富饒なり、常に酒宴を設けて醉歌踏舞す、さるに東隣の産なき者もし之に倣ひ、業をおこたり産をやぶらば、果して之を如何とかいはん、まことに笑ふべきの事ならずや。

之を要するに歌の國家に於ける、其關係尤も緊切なるものなり、故に之を用ふる能く其道を得れば、國民の元氣を旺盛にして國家を鞏固ならしめ、其道を得ざる時は、風俗を壞亂して國家を脆弱ならしむ、今や我大日本帝國は戰勝の名譽

を負ひて、世界に獨歩するの時運に際會せり、此時にあたり國民進取の氣象を鼓舞して、富國強兵の素を養成せんとする、歌に竢つ所固に大なり、而して新體詩なるものは實にこれが爲に天より賦せられたるものならずや、されば此新體詩をして寔に其天賦にうむかず、能く其性を盡さしむるを得ば、大に國民の彝倫を養ひて、國家に對する觀念を深からしめ、竟に富強の實をあぐるに至るべきのみならず、更に彼の長歌短歌の如きも、亦之に依り漸次其弊風を脱却して天性に復し、謂ゆるみるものきくものにつけて、心の誠をいひいだすものとなり、相提携して吾が國の德性を涵養する唯一の機關となるべきなり。



## 例言

新體詩は、明治今日の思想を言ひあらはさんが爲に起りしものなること、および其の國家に於る關係の重大なることは、總論中に述べおけり、されば吾人は個人としても又團體としても其の發達を希望すべきは固より論を竢たざるべし、さるを今の世の新體詩を見るに、往々言詞卑しく風調整はず、甚しきは俚謠俗曲とえらばざるものあるは、畢竟りの作者詠歌の素養なく、唯僅に學校唱歌を耳にせし程の口に成るものなればなるべし、此の如くにして新體詩の發達を希ふと云はゞ、謂ゆる木に縁りて魚を索むるの嗤笑をまぬかれざるべし。

蓋し何事によらず、學ばずして爲し得べきものはあらず、況んや天地を動かし、鬼神を感ぜしめ、國民の元氣を鼓舞し、國家の精神を發揮せんとする歌に於てをや、さらば之を學ぶの道はいかにと言はんに、もとより新に起りしものなれば、摸範とすべき佳作に乏しく、階梯とすべき材料なし、是本書の撰著ある所以なり。

本書は新體詩、および學校唱歌を作習せんとする者の階梯として撰著せるものにて、その言はんとする旨趣の如き、之を各部門に就きて渉獵せば、自在にこれを取るをうべし、是新體詩歌自在の名をもて本書に題せる所以にして、新體詩歌名稱の事は總論に述ぶるが如し。

本書は八代集以下代々の撰集より、近來古學諸家の家集及び草野集、紅塵集、馭玉集、大八洲歌集の類、幷に中古以來の今樣歌等を始として、和漢朗詠、新撰朗詠、平家物語、太平記、謠曲、琴歌、長唄、小唄等より、一二句、又は數句を抄出し、二句以上は多く七五、又は五七連鎖とし、又三句以上のものは、往々新體詩歌調に改削し、或は意を取りて詞を改めたるあり、或は詞を借りて意を改めたるあり、又は一二句を存して其他は改削せるもあり、二三字をかへて其他は存せしもあり、又白氏文集、唐詩選、三體詩の類にして、古來遍く人口に噲炙せる句の如きは、是また新體詩歌調として之を掲げ、又現行の音樂唱歌及び新聞紙、雜誌等に見はたる新體詩等の句の如きも、稍取るべきものゝ如きは多少添削して採取す。

男女の戀愛は總論中に述ぶるが如く、害ありて益なきものなれば、本書に於



ては之を除けり、されども夫婦間に於るものゝ如き正しき男女愛慕の情は、本より天眞に發するものなるをもて、これらの類語は夫婦又は情等の部門中に集收せり。

新體詩の句法は必ず七五に限るべきにあらず、又もとより五七にも依るべからず、或は七五或は五七、又は長短交錯等、其吟咏、賦誦する所の旨趣により種々なるべく、又さま〴〵に變轉すべきは勿論なりといへども、打任せては七五調をもて普通とするをもて、本書に於ても多く七五調により、儘五七若くは長短不紀律の句をも編收せり。

本書を繙く者は題下に註する參照の標示に注目せんを要す、例へば新年の題に於ては祝賀を參照し、初春に於ては、鶯、梅、柳、春風の類を參照し、以て其歌詞を擇び、趣意を求めて、詠作の補益をなすべきなり。

本書に收むる各題の歌詞、其の數の多少甚しき差異あるものは、一は題の廣狹に依り、一は參照の門に讓りて之を省くに依る、故に參照の門は必ずこれを參考せんを要す。

從來歌書の題を收むるもの、概して四季戀雜をもて大別す、故に例へば、日と

いひ、月といひ、又は雨風の如き、いづれも春夏秋冬れよび雜に分たざるを得ずして、甚だ煩しく、部類を分つ銓なきに似たり、故に今は之を天象、地儀、人事、動物、植物の五大部に分ちり、りの內季節に係るものは其門に於ておの〳〵類を分つ、即ち月の如き、朝夕の如き、春夏秋冬に依りおの〳〵詞藻を異にするものは、其門中に於てこれを分ち、雨の如き、風の如き、亦春雨、五月雨、驟雨、秋雨、時雨、又は春風、涼風、秋風、木枯等互にりの趣を異にするものゝ類もまた其門中に於て之を別つが如し。

本書に收むる歌詞、舊事物に於ては、多く舊作に原づきたるをもて、歌詞として允當を失はざれども、新事物に至りては、勢おのづから新語を用ひざるを得ず、隨て稍耳新しき感なきに非ずといへども、是即ち新體詩の新體詩たる所以なり。

新題幷にりの歌詞は猶ほ之を缺くものもあるべし、りは再版の時を期して漸次にこれを增補すべし。



# 新體詩歌自在目次

## ○天象部


新年……一
初春……三
餘寒……五
子の日……七
春日……九
春望……一三
春興……一五
遊絲……一七
汐干……一九
苗代……二一
暮春……二三
初夏……二六
更衣……二九
夏日……三〇
早苗……三三
暑……三五
納涼……三六
避暑……四〇
晚夏……四一
立秋……四三
七夕……四五
秋日……四七
秋望……五〇
擣衣……五二
秋興……五四
晚秋……五七
初冬……五九
冬日……六二
網代……六五
晚冬、歲暮……六七
朝……七二
春朝……七四
夏朝……七六
秋朝……七七
冬朝……七九
晝……八〇
夕……八一
春夕……八三
夏夕……八五
秋夕……八六
冬夕……八七
夜……八八
春夜……九〇

夏夜……九三
秋夜……九五
冬夜……九七
曉曙……九九
天……一〇二
日……一〇四
日蝕……一〇五
月……一〇六
月蝕……一〇八
春月……一〇九
夏月……一一二
秋月……一一四
冬月……一一六
新月……一一八
殘月……一一九
星……一二〇
晴……一二一
曇……一二四
旱……一二五
多夜……一二六
雷……一二七
虹……一二九
電……一三〇
風……一三二
暴風……一三三
順風……一三四
涼風……一三六
春風……一三七
秋風……一三九
木枯……一四一
朝雨……一四二
夕雨……一四四
夜雨……一四四
春雨……一四四
五月雨……一四六
驟雨……一四七
秋雨……一四九
時雨……一五〇
雲……一五二
朝雲……一五四
夕雲……一五五
雪……一五六
春雪……一六〇
雪消……一六二
霰……一六三
霙……一六四
霜……一六五
露……一六七
霓……一六九
霧……一七一
火……一七三



烟……一七四
水……一七六
氷……一七七

## ○地儀部

山嶽……一七九
春山……一八三
秋山……一八五
山里……一八六
河……一八七
海……一九二
海濱浦……一九七
湊……二〇二
湖……二〇四
澤……二〇四
宮殿……二〇四
沼……二〇四
入江……二〇四
瀧……二〇六
鳥嶼……二〇七
春野……二〇九
秋野……二一二
田……二一四
道路……二一五
橋……二一七
堤……二一八
都會……二一九
神社……二二一
祭典……二二三
佛閣……二二四
廢寺……二二七
墓……二二八
宮殿……二三〇
樓閣……二三二
學校……二三三
山家……二三五
田家……二三八
漁家……二四〇
閑居……二四一
草庵……二四四
廢宅……二四六
故跡、故鄉……二四九
舊都……二五一
古戰場……二五二
庭園……二五五
眺望……二五七
名所……二六〇
海嘯……二六四
落雷……二六六
地震……二六七
火災……二六八

# ○人事部


人倫……二七〇
君臣……二七五
親子……二八一
孤兒……二八八
捨兒……二九一
夫婦……二九二
兄弟、姉妹……二九六
師弟……二九九
朋友……三〇二
親族……三〇七
愛國……三〇八
慨嘆……三一〇
情……三一五
憐愛……三三〇
快樂……三三二
怨恨……三三四
嘲笑……三三六
稱譽……三三七
憤怒……三三八
恐怖……三三九
亂心……三四〇
悲哀……三四一
哀弔……三四五
衰亡……三四八
離別……三四九
厭生、無常……三五六
死亡……三六三
處心……三六五
勇氣……三六八
天皇……三七一
皇子……三七三
神官……三七四
僧侶……三七五
山伏……三七八
男子……三七九
女子……三八〇
老人……三八二
美人……三八五
詩人……三八九
文人……三九一
學生……三九二
軍人……三九三
官吏……三九六
商人……三九七
農夫……三九九
工人……四〇一
漁夫……四〇三
舟人……四〇五
獵夫……四〇八





樵夫……四〇九
車夫……四一一
遊女……四一二
藝妓……四一三
不具……四一五
乞食……四一六
盜賊……四一八
隱者……四一九
外人……四二〇
富豪……四二一
貴紳……四二三
貧賤……四二四
英雄……四二八
烈士……四二九
仙人……四三一
衣服……四三三
飲食……四三四
宴會……四三八
文學……四四一
歌……四四四
學問……四四五
讀書……四四七
處世……四五〇
名譽……四五七
勉强……四五九
怠慢……四六二
謹愼……四六三
忍耐……四六四
金錢……四六五
立志……四六六
立身……四六七
希望……四六八
慾望……四六九
失望……四七〇
詠史……四七三
國體……四七八
幽寂……四八二
神佛……四八四
靈怪……四九〇
舟……四九二
瀛船……四九三
車……四九五
瀛車……四九五
自轉車……四九八
輕氣球……四九九
電信……五〇〇
電話……五〇二
電氣燈……五〇三
瓦斯燈……五〇三
時計……五〇四
鐘……五〇五

机……五〇七
新聞紙……五〇八
圖書……五〇九
國旗……五一〇
刀劍……五一二
砲銃……五一四
祝賀……五一五
卒業……五一三
留學、洋行……五二五
送別……五二六
戰鬪……五二八
將軍……五四一
兵士……五四三
遠征……五四六
夜營……五四八
水雷艇……五四九
地雷火……五五一
凱旋……五五二
勳功……五五三
教訓……五五五
夢……五六〇
旅行……五六三
山行……五七七
水行……五七九
行脚……五八一
旅宿……五八二
航海……五八五
碇舶……五八七
懷舊……五八八
述懷……五九二
音樂……五九九
琴……六〇五
笛……六〇七
笳……六〇八
琵琶……六〇九
舞蹈……六一〇
神樂……六一一
舟遊……六一三
水泳……六一六
吟咏……六一六
烟火……六一七
狩獵……六一八
漁獵……六二〇
角力……六二一
擊劍……六二二
弓術……六二二
騎馬……六二三
茶湯……六二四
尋問……六二五
書簡……六二七



## ○動物部

鷲……六二八
呼子鳥……六三二
雉子……六三四
雲雀……六三六
燕……六三七
雁……六三九
時鳥……六四三
水鷄……六四六
鶉……六四八
鴫……六五一
千鳥……六五三
鶴……六五六
都鳥……六五八
烏……六六〇
雀……六六一
鴟鴞……六六二
鷄……六六四
鷽……六六五
駒……六六六
犬……六六八
鹿……六六九
猿……六七一
虎……六七三
牛羊……六七五
蝙蝠……六七七
鯨……六七九
蝶……六八一
蛙……六八三
螢……六八五
蟬……六八八
虫……六八九
蜻蛉……六九五
蟻……六九六
金魚……六九一
龜……六九二
鯉……六九三
鮎……六九三
鱸、鯛……六九四
龍……六九五

## ○植物部

梅……六九六
柳……七〇三
躑躅……七〇六
櫻……七〇七
遲櫻……七一〇
落花……七一一
花見……七一四
桃……七一六

杏花……七二七
新樹……七二八
橘……七二九
紅葉……七三〇
楓……七三四
落葉……七三六
松……七四〇
竹……七四四
杉……七四五
榊……七四七
桐……七四八
楢……七四九
草莟……七五一
若葉……七五三
蕨……七五五
菫……七五六
山吹……
牡丹……七五八
藤……七五九
卯花……七六一
菖蒲……七六二
百合……七六四
燕子花……七六六
夕顔……七六七
朝顔……七六八
撫子……七六九
蓮……七七一
薄尾花……七七三
苅萱……七七四
女郎花……七七六
萩……七七八
藤袴……七七九
菊……七八〇
萍……七八二
篠、篠……七八三
芭蕉……七八五
芝……七八六
葵……七八七
芹……七八八
稲……七八九



# 新體詩歌自在

中村秋香 撰著
高橋龍雄
宮本靜 補助
栗島山之助

## ○天象部

### 新年 祝賀之部參照

○新年(にひどし)○あらたまの○むつきたつ○たちかはる○年たちかへる○たつとし○けさよりや○時つ風○照す日の影ものどかに○けしきもけふは新玉の○松たてわたしまめはへて○もろこしまでもたつ年○のどけき空にいかのぼり○羽子つきかはしむつれつゝ○都の空○ひなもみやこも○千代田の宮居○天の戸のあくると共に○萬歳いはふ聲々○千とせの春をちぎりつゝ○千門萬戸○朝賀に急ぐ官人(つかさびと)○かたみに祝ふよろこびの○けさめづらしく○初日影

○としのは毎に珍らしく、向ふや今朝の年ぶなへ。
○千代田の大城年立ちて、萬歳いはふ聲々に、千代ふき添ふる松の風。
○しめゆふ門の松かざり、影をひたして酌む若水に、濡るゝも嬉し今朝の袖。
○不二の高根の初日出、隈なき影を仰ぎつゝ、千島のはても高砂も、今朝たつ年やいはふらむ。
○あやのきぬきてあらたまの、年ことほぐやつかさ人。
○門にはゞめく獅子神樂、新年ほぎて鳥追が、ひく糸竹に聲うへて、萬歳祝ふ門禮者。
○御門につどふ馬車、年をことほぐつかさ人。
○風ものどかにいかのぼり、羽根つくれとも初年の。
○雜煮いはひて屠蘇くみかはし、君が八千代もわが千代も、ことほぎ交す年ぶなへ。
○をしき圍みて父も子も、妻も夫も兄弟も、笑まひにくむや屠蘇の酒。
○門邊に出でゝ見渡せば、松たてわたしまめはへて、けしきかはれる八衢に、年の光はかゞやきぬ。



○千門萬戸ねしなべて、昨日のけしき様かへて、街をうづむ松と竹、軒にたてたる日の御旗、うちなびきてもいはふかな。
○千代田の城の朝日影かゞやくいろも明かに、治まる御代の年の初ぶら。
○浦回の海人が苫屋にも、深山の賤がわらやにも、ひとしく影をわかちつゝ、初年つぐる朝日こそ、明らけき世の光なれ。

## 初春 鶯、梅、柳、春風之部參照

○氷とけゆく○汀によするさゞ浪○かすみうめたる○氷ぶはるのへだてなる○春の初風○てらす日影○かすむうら〳〵○かけひの水も音づれて○つらゝぬし○けふとしいへば○浦邊の海人も春や知るらむ○かすみとゝもにたつ春○春しりうむる○雪の下水○苔の下水○春くるみち○柳のいろも淺みどり○春のくるあしたの原○のどけき空にふく風○とりの聲さへ和らぎて○東風吹きちらす梅梢ノ雪○鶯はうたふ柳枝の風○さすや日影ものどかにて○庭のわか艸萠えうめて○池の氷もとけうめぬ○けしきだちたる山川○暖烟かろく浮びて曉の風ふく○柳眼人に向て靑し○めくみう

めたる春のいろ

○水の底より春やたつ、氷をやぶる浪のはな。

○袂にあまる春のいろ、ふる泡ゆきもなにならず。

○軒のやなぎの淺みどり、春の日數のいろ見せて。

○田面の氷とけうめて、山本かすむ春の日。

○春に入江の泡ゆきは、ふると見るまにかつ消えて。

○軒のつらゝもとけうめて、梅にまづ志る春のいろ。

○一夜のほどにたつ春や、うれしきふしの始なる。

○をつくばも遠つ足尾もけさ見れば、かすみうめたり春のいろ。

○ふりさけ見れば咲く花の、櫻田かけてほの〳〵と、霞が關をこゆる春。

○かすみながれて青柳の、心もけさやゆらぐらむ、風こう春の姿なれ。

○春の日影のうら〳〵と、てりうふ野邊をけさ見れば、恵にあまる艸のいろ。

○かすみもいまだふかゝらぬ野邊のけしきを見わたせば、心ぞまづはのどかなる。

○のきばの梅はいつのまに、綻びにけむ初花の、朝戸あくれば、かをるなり。



○霞の衣たちまちに、野べも山邊も淺みどり、春のいろにもなりにけり。

○かきねの小草もえいでゝ、庭の梢も色めきぬ、いざうちつれて山に野に、春の心をさぐりてむ。

○春の神は東より來つて日漸く遲く、暖なる煙は輕く上つて曉の風まづかなり。

○門の小川のうすらひも、いつしかとけて流るめり、けさめづらしき水のおと。

○春のいたらぬ里もなく、花の咲かざる山もなし、心もけさはのどかにて、なにがめくらすぞたのしきや。

## 餘寒

○また冴かへる○さむげに見たてのこるさむさ○鶯の涙やさらに氷る○花みぬ枝に霞ちる○くれ行けば猶肌さむし○かすむと見しや○なほ肌さむく○殘るこほり○春とも見ねぬ○なかばたつ春○冬はまた雲のいつくに殘れはや○あられまじりにふる雨○うづみ火にまたなづむ○山里

は春もあらしの風吹きて○きのふもけふも雪ぞふる○春やいづこにひうむらむ○さむきあさげ○風急にして更に雪を吹き○雲低くして遂に日を見ず○春としもなき心地○江城寂寞としていまだ花ひらかず○茅舎門をとぢて雨蕭々たり

○春とはいへど吹風は、身に及ぶる心地して。

○夜もふけゆけば春ながら、まだ立ち去らぬ風さむみ、閨の小ぶすま冴にかへり。

○窓うつ風は春ながら、殘るさむさにひかれては、いとど冴にても開ゆなり。

○梅は早くも春きりて、ほゝゑみうめし窓の外に、なごしも殘る風のこゑ。

○また二月の冴にかへり、峯の嵐にさうはれて、花とちりくるきら雪。

○見渡すたかねゆき消えて、松のいろ青くなりにけり、庭にはいまだ風さえて、竹の聲さへ肌さむし。

○流石にひるは春の日の、あたゝかなるをくれゆけば、猶肌さむき風の聲。

○かすみうめつゝやどるとすれど、池の心のとけぬまは、うらにもこほる月の影。



○春もなかばの空の月、かすみながらに影さえて、よるゆくうでにたまるゆき。

○春まだあさみゆきもまた、ふるからをのゝもとがしは、本のさむさにかへるなり。

○なきしうぐひすあともなく、ふるさとさむき飛鳥風、ふたゝび冬にかへす袖。

○ゆきげに氷るうらさびて、春の外ゆく月の影。

○かすみしうらもさえかへり、花れうげにも風さえて、ゆきげにくもる月の影。

○花にまがひてちるゆきに、梅が香さむき二月や。

○かすむかげかと見し月は、やがてゆきげにかげくれて。

## 子の日 松之部參照

○ひきずわづらふ○小松原○ちよにもれたるかげもなし○みどりもふかき○うくひすの、初ねの日○小松ひく手○千世のみどり○曳かるゝけふを

まつが枝○風もいろめく小松原○君が代のためしにひくや○うちはへて
子の日する野に○ひくもかしこきためし○一しほの春のいろ○けふを初
ねとうぐひすの○子の日にあへる○天津琴けふひくまの〳〵○北野の春の
姫小松○千代もへむ○小松が枝にふく風○袂つらねてきてみれば○うち
むれてたつねこし野
○珍らしきためしにひかむけさ松にさく雪のはな〳〵がら。
○子の日せむとて春の野に、ふりはへくれば松にひかる〳〵こ〳〵
ちして。
○君にひかれて萬代を、へぬべき松のいろ見れば、われも八千代をかさぬべ
し。
○根さしもとほき二葉のまつ、初子の野邊にいざひかん。
○けふは子の日かわがいほり、むかふ外山の小松原、あさまだきより人つど
ふ。
○はるきにけりとなくうぐひすの、初ねにあけし山窓を、松引がてら人ぞと
ふ。



○かすみに匂ふ小松原、けふの子の日ぞ人心、のべにひかるゝはじめなる。

## 春日

春風、櫻、梅、桃、柳、鶯、春駒之部參照

○のどけき空○かすめる空○山のはもひとつにかすむ○うちとけてなく
鶯○川邊の柳けぶる○ゆくふねのほのかに見ゆる○ゆき消にてみねの松
風のどかにも○梅のはな笠ぬふとりの○夕ぐれの梅の林にさす日影○花
つむと垣根をあさる○はる〳〵かすむ川面○老木のやなぎうちなびき○
垣根に匂ふすみれ艸○うら〳〵かすむ日の影○野に山にありびつかれて
○わかれかねたる花のかげ○朝戸あくればうら〳〵と○竹のはやしにう
ぐひすのなく音きこにて○柳ふく風○山々かすむ春の日○草のいほりも
春めきて○かきほのさくら咲きうめて○雛まつる日のうら〳〵かに○遠里
小野の花の雲○にしき織りなすつぼすみれ○野邊の細道花咲きて○水は
春の心を見せて蕩(たいらか)なり○片々落花の風○滴々鶯溜の聲○軒の梅が香昔の
春をわくり○松のみどりにいろうふる紅(くれない)の花○あわたゞしくもちる櫻○
雨にをさまる九陌の塵○山川の浪にたゞよふ花○さくはなの行方わくり

て飛ぶ蝶○空にかぎやく日の色に、てりふ花の、うるはしく○永き日かげも傾きて、庭のさくらの夕風に、こぼるゝ色もあはれなり○春はながし桃花の水○はるのしるしや○春のいろ○かすみ棚引く○八重がすみ○もゝとりの聲ものどかに○梅は吐く三更の月○紙窓にのぼるねぼろ月

○行かふ袖も櫻いろに、染むるや春の人心。

○柳さくらをれりまぜて都ぶはるのあや錦。

○駘蕩三月花のいろ、蝶はうかれて香に狂ひ、鳥はむつれて、枝に鳴く。

○春もさかりの花のいろ、梅津の里の夕かすみ。

○春のひかげもうら〳〵と、稍に匂ふはなのいろ。

○春の心のゝどけさを、野山に見するはなのいろ。

○春つげどりのなくねさへ、かすみはてたる朝ぼらけ。

○花の袂をふりはへて、春にむつるゝみやこ人。

○翠をふくむ柳のいとに、いとゆふもゆる春けしき。

○うなゐがうたふ春のうた、花のくもまにひゞくなり。

○花の姿もとり〳〵に、野山や春を描くらむ。



○かすみにむせぶ川波の、音しづかなる夕まぐれ。

○水はみどりに砂は白く、かすめる山に紅の、はな咲き匂ふ春のいろ。

○池塘の柳枝たれて、春の日ながく鶯の、なくねも床しき花の香。

○麥はのびたり畠中に、草莊る少女がひなうたの、聲ものどけく空はれて。

○花の中ゆくわか駒の、ひづめも匂ふ春の野や。

○花のねむりに忘れては、きのふをけふと辿るこゝろ、日永き春の習なれ。

○一聲鳥ないて禁門靜なり、滿地花おちて春の日永し。

○一行の過雁は霞の袖にかくれ、四月の餘花は裾野の雲にあかし。

○ひなの長路をのぼりきて、花さき匂ふ九重の、都のはるにうかれても。

○春さかりなる山里の、かすみにこもる柴の戸を、叩く風にも誘はるゝ、花よりもろき人心。

○頃も彌生の春のうら、かげものどかにめぐる日の、かすむそなたや音羽山、たきの響もしづかなり。

○うの稍ともわかざりし、櫻ははなにあらはれて、山のねぐら立春かぜの、至りいたらぬ隈もなし。

○花の都の春の空、青柳のかげみどりにて、風のどかなる清水寺、音羽の瀧の白糸の、くりかへしてもれもしろや。

○春の榮(さかえ)を松の戸に、年をむかへてたちまちに、うるほふ四方の草も木も、神のめぐみになびくらむ。

○千紫萬紅、啼く鳥の聲は霞に匂ひ、水村山郭、靡く旗の風は人をまねく。

○春は野山にうかれつゝ、大かた家にあらざれば、庭の一木は中々に、さかりも知らずちるもみず。

○雨としもなき花くもり、さくべき頃や二月(きさらぎ)の、半のうらのうらゝけさ。

○氷にとぢし谷川の、水のひゞきもきこえきて、のどかにかすむ春の日。

○桃さく垣のまひる時、長き日うたふ庭鳥の、聲に晝いの夢さめて。

○かすみは消(け)ぬ、李老が青牛の路、風は去りぬ茅君が白鶴のみね。

○あらそひたてる春かすみ、きほひてひらく木々のはな、春は今こそ盛なれ。

○ながき日あかずさへづるとり、みれどもあかぬのやまのけしき。

○よはの春雨けさはれて、小とり友よぶ聲々に、こぼれて匂ふ花のいろ。

○人もやとふとまつの戸に、ながき春日をつく〳〵と、花にむかひてくらしけり。



## 春望 櫻、桃、柳、春野、春山、眺望之部參照

○なかめもあかぬ○うら〳〵かすむ野邊○ながめてくらす○松のみどりに花の色○峯にたなびく白雲○かすみにこめてにほふ明ほの○みわたすうらもうら〳〵と○はる日かすめる山々○都のはる○ちまたのやなぎけぶりつゝ○水は暖かなり春光の外○山は明なり落照の邊○遠の山里○八十島遠くかすみつゝ○かすみはてたる初瀬山○かすみしく春の汐路○みどりをわくる沖つしら浪○柳はら○五百重山○沖つしま山○かすむ川戸○うちわたす○かすみに浮ぶ沖のつり舟○かすみにつゞく志賀の浦○暗花紅雨にひらき○村樹綠烟をふくむ○花は雪にまがひ○草はけむりに迷ふ○春融々○水蕩々○日朗々○ふくやか春風○かすみもやらぬ○瀬々の白浪くれなりめて○ともしびかすむ山本の里○かすみにつゞく峯の白雲○かぎりなきまで○夕月夜○夕日さす○めもはるに○ひとり玉欄によりてしづかに月をながむ○翩々として小蝶とぶ○烟は晩樹をつゝみて人家をめ

ぐる○かすみふきとく夕風○草菁々○柳條々○花片々○風瓢々○とよはたくもにかげさして○夕べのとかにさす日かげ○かすみのいろ○かすめるうちにふじのねの雪より上の春をみる○野山もわかずかすみたなびく○浪路の末にうき雲のうきたつ○芳艸碧として千里○春色菁としてはるかなり

○彩鳳枝にかける桃源の月、藻龍浪にをどる柳岸の風。

○匂ひしめりてとりは囀る花園の露、かをり亂れて馬はいばふ隴塞の風。

○風あたゝかにして東山霞の衣うちかつぎ、月おぼろにして大井川花の下行く水かをる。

○みやこの春を見渡せば、たゞひとむらの霞かな。

○白帆に春のいろ見わたして、沖べをはしる海人小舟、かすみの中に見えがくれ。

○かすみにつゞく海原や、春のながめのうら〳〵と、心も空に遊ぶかな。

○窓を開けばうら〳〵と、ちまたの柳うちけぶり。

○空にたなびく白雲の、たえまに見ゆる青柳の、かつらぎ山に春たちて、淺みどりにもかすむなり。



○梅ちる風にほころぶる、しだれ櫻の花のいろ、春の色こう盛りなれ。

○心はいつか春山の、花のあたりにさまよひて、匂ひこぼるゝ若草の、草の枕にねむるなり。

○花のみやこの春の空、柳櫻のやちまたに、れり交へたる綾錦。

○鄙も都もわれしなべて長閑けき空の春霞、ながめやるだにみやびなり。

## 春興 梅、桃、柳、櫻、胡蝶、鶯之部參照

○たのしき春○うちむれて○野ゆき山ゆき○かすみをくめる春のさかづき○山こだて○山わけて○野にいでゝ○ずがのねの長き春日○れもふどち○花にうかれて○月まちいでゝ○梅が香を袖にやどして○たちいてゞ見渡せば○わかなつむべく○麻の緒の長き春日○わらびつむ手も匂ふなり○はるの日のゆたのゝ原○馬を柳堤に走らして落花を送り○舟を春水に流して行樂を惜む○楊柳の風は吹き送る舟中の笛の聲○鶯語嬌々○柳絮紛々○つきぬたのしさ○あかぬ野遊○花の下かげ○月と花とにあこがれて○たもとつらねてありぶ野○上野の山に日くらしや

○人はかへりてあすか山、月と花とになりにけり。
○雨はれし野にたちいでゝ、土筆たんぽゝつみすさび。
○朝つゆに袖ぬらしつゝ初蕨、つむ手に匂ふはなすみれ。
○春野にいでゝわかなつむ、里のわらべの袖かすむ。
○水は呉娃が箏に似て、花は漢女が涙をよろふ。
○雨は柳の眉を畫がき、露は桃花の唇をうるほす。
○昨日は濱邊今日は野邊、わかな小松にくらしつゝ。
○櫻閣花と鳥とに埋れ、山河錦繡を帶びて人の穿つにまかす。
○庭のさくらにうむきつゝ、遠山里にあうぶこう、浮かるゝ春の心なれ。
○すみれたんぽゝれんげ草、つかねてかへる野遊。
○後宮の花の曙は、松に見はてぬ夢を殘し、御溝の柳の夕くれは、月に糸竹の聲をむすぶ。
○雲雀の歌をきゝながら、つむや小草のとりぐ〳〵に、樂しさつきぬ春の野邊。
○野をなつかしみひとよねて、花もる神とかたらふと、見しはひばりの床のゆめ。



○花さく里にうかれきぬ、なくうぐひすにさそはれて、心もうらにたどりけむ、こし方さへもわかぬなり。
○君はこてふと狂ひつゝ、いづこをさしてあこがれし、われは土筆をつみたむる、興にうかれていつしかも、君がゆくへを失ひき。
○妹がかざしと桃の花、一枝折ればくれなゐの、つゆこぼるかゝれ袖の上。
○君がかきねの白薔薇、いろもかをりもいまさかり、われにはゆるせ其ひとにだを、妹がかざしの一枝に。
○白銀かゞやく梅ばやし、金屑ちらす菜ばたけに、ありぶこてふの身となりて、物おもひなく春の日を、花にうかれてくらしてむ。
○月のかげさす盃に、花のかげをもうかべつゝ、いざくみてましふくるまで。
○花みにこしを春の山、れふるわらびになづさひて、けふの一日をつみくれぬ。
○春ゆく水に棹させば、千里にかけてゆく心、桃さくさとにやいたるらん。

遊絲 春野之部參照

○かすむ末野○ひばりなく野○あるかなきかにあそぶいと○若艸もゆる野○うちむれてこし○ながゝし日を○すみれさく野にきてみれば○いとゆふのはかなき姿○春の心やもゆならん○つくしの末の動くともみゆるばかりに○雨はれし野のふかみどり○つばなぬきつゝ○あるかと見れば○かつ消ぬて○昔こひしき春の野に○みどりもふかき野の末○花もさかりの野邊にきて○きゝてあとなき○あやれるいとのみだれても○春ふか艸の野邊にきて○きゝてあとなき○あやれるいとゆふは○君がやつれしれもかげを○片野のはる○てる日のかげ

○野邊をあやどるいとゆふは、柳さくらの錦れる。

○つくしたんぽゝ花咲きて、野邊れもしろき春の日に、うかれてこれも遊ぶいと。

○袖しが浦のいとゆふは、浪と陸とをぬひてけり。

○土筆つみにとこしものを、あるかなきかの遊糸に、心ひかれてさまよひぬ。

○かすむ末野にきてみれば、うらものどかに遊ぶいと。

○雲雀の聲はゝるかにて、あたりに近くありぶいと。



○花さき匂ふ春の野に、のどかにありぶ遊糸の、はかなきかげぞあはれなる。

○里の童がひなうたの、聲する野邊にきてみれば、のどかに動く遊糸の。

○すみれさく野のいとゆふに、けふもうかれてありびけり。

○つくしたんぽの花ざかり、影れもしろくありぶいと。

○うらものどかにはれわたり、かすむ野末にありぶいと。

○春の野末にもにたつは、みどりのくさとありぶいと。

○かすみにくるゝ春の野に、あるかなきかのいとゆふは、沈む日影をいのちにて。

○日も山の端にかたもけば、野末にもにしいとゆふも、いつしか影のきにはてぬ。

○心のどかにいとゆふの、ありぶも春のこゝろかな。

## 汐干 海濱之部參照

○干潟、渚は遠く○梅のはな貝さくらがひ○天津少女やありぶらむ○汐さしてきぬ○ゆたかに吹くやはるの風○沖の小島○磯山かげのわらや○あ

しまの小舟○舟いうがして○花貝ひろふ少女子○たもとゆたかにふく風
○磯のとまや○海人小舟○いへづとにせむ○さゞなみよする○籠にあま
る○あさりつくして○脛にあげて○かちわたりする○はるかに見ゆる○
眞帆片帆○干潟にあぢふ○聲うちあげてありぶ子○いつしか汐は、さして
きぬ○とり〳〵ひろふ○うかれてひろふ櫻貝○てる日影○かすむ海原○
沖ゆくふね

○干潟にあさる少女子が、たもとゆたかに吹く風。
○梅のはな貝さくら貝、ちり〳〵ひろふ少女子。
○うよふく風ものどかにて、少女が袖をはらひつゝ。
○干潟にひろふ花貝の、匂ひこぼるゝ春のいろ、磯邊のまさごしろ〳〵と、日
かげのどかにてりまさる。
○天津少女や遊ぶらむ、干潟に立てるくはし女の、袖ふきかへす春の風。
○春の心もひとしほの、さしこぬさきと汐干狩、きほひてひろふれもしろさ。
○かすむ沖邊を見渡せば、白帆つゞくや朝なぎに。
○春もなかばのうらはれて、ひがたをわたる朝風の、あり〳〵べる子らの袖ふき



て。
○海原とほくかすみつゝ、ひかたにありぶ人影も、かすかに見にてのどかな
り。
○ちり〳〵ひろふさくらがひ、春のかたみとあらそひて。
○あさるひがたに影さして、てるものどけき春の日や。
○日はかたむきてやう〳〵にしほさしきぬる海のれも。
○しほさしきぬと舟人の、のふしりさわぐ聲々に、れどろかされてかへる子
ら。
○ひろふ得物もはた興も、つきぬはけふの汐干狩。
○よろこびわらひうち興じ、ひがたをあさる子らのさま、みるものどけき春
の日や。

## 苗代 田之部參照

○門田○かきち田○苗代小田○あら小田○蛙なく田○畔の細道つたひつ
ゝ○水せき入れて○かすむ山田の夕けしき○水口まつる○菅笠白く○岩

もる水○御代のめぐみ○川うひ小田にれり立ちて○いさゝ小川の水ひき入れて○あら田かへして水ひきて○青みわたれる苗代○裙野の小田の夕日影○賤が苗代○御代のめぐみにみづ〳〵と○小雨ふる日をれりたちて○水かさまさる谷河の○れり立つ田子が菅笠○いほしろ小田に水みちて○伏見の小田○鳥羽田○竹田

○小田の苗代しめはへて、たねまく頃となりにけり。

○垣根をめぐるいさゝ川、水おとたえぬきのふけふ、苗代小田にやひきぬらん。

○里の小川をせきとめて、水おとしやる田の面に、わたるもゆるき春の風。

○花のさかりもよりにして、苗代小田にいりしめる、民のしわざぐくるしきや。

○なはしろ水のうこすみて、ひくしめなはのかげも見ゆ。

○かはづも花にこゑたてぬ、さくらながるゝ苗代田。

## 暮春



○春のわかれ○花はちり○とまる瀬もなし○木の下に○とまりなるらむ○春ぞくれゆく○花なき庭になくとり○入相のかねにちるはなの○のこりなく○なれきつる○けふをかぎりの春のわかれ路○又もこむ○春寂々○鳥喧々○風蕭々○春くれてゆく空のいろ○里わかず○夕かすみ○花は根にとりは古巣に○なごりなく○鶯聲已に暮春に向て老ゆ○花ちりとりなきて春寂々○花は流水に伴はれて○三春の行樂已につく○殘紅梢にめづらしくして、風又あらたなり○春のくれかた、うぐひすもなきてうらみよ○山にも春はなく、なりぬ○水のまに〳〵奥山の春をたづねて○くれなばなげの花かげ○引きかへさればぬ○かへらぬ波○夕陽人去て春さびしく○よりの春とや○つれなくも行く春○鶯のまれなる聲○飛花園庭にみちて○千古の蘭亭三月盡○とゞめねばぬはるの○ふるのやまだをうちかへし○うらみかねたる春のくれ○よしの山花のふる里○花のかげ○春風力なくふきて○くれぬるか春はこてふのゆめ路を辿る○むなしき枝○水邊の天氣又あらたなり○くれゆくうらの春のながめ○ねむりさめてれぼろく春のくれ○つれ〳〵と花を見つゝ○つく〳〵とれもひくらしして○春のを

しさも○春つくる日の夕ぐれ○この春ものこる日数○常の夕の心地こそせね

○落花流水に伴はれて、三春の行楽已につく。

○なけや鶯一とせに二たびくべき春ならず。

○花こそちらめむつれこし、春だにしばし殘らなむ。

○花をねせきにとゞめおきて、春はいづこに流るらむ。

○木の間に花はのこるとも、春はとまらじけふかぎり。

○花ちりうかぶ谷川の、水のまに〳〵とめくれば、山にも春はなくなりて。

○朽ちしのきばにいにしへの、春忍ばるゝ一本の、櫻ちるなり夕あらし。

○はかなき花の朝つゆに、ぬれにし袖のいろあせて、空にすぎ行く春の日を、引きとゞむべきよしぞなき。

○わがやの庭の花だにも、ちらで別るゝ春ならば、なごかくけふを惜まゝし。

○髪にはうたてちるさくら、顔にはいよゝよする浪。

○彌生の空もけふは早や、夕ぐれとさへなりにけり、春にわかれていかにせん。

○たをればかゝる朝つゆに、花のたもとをぼちつゝ、春のいくかを過しけん。

○雨ふるさとの庭たづみ、浪よる花のうたかたに、すぎにし春や浮ぶらむ。

○流るゝ水にちる花の、かへらぬ春をなげきつゝ。

○ありあけの月を仰ぎつゝ、くれゆく春ぞをしまるゝ。

○花のちるだにかなしきを、春もかぎりとなりにけり。

○いくたび春にわかれけむ、をしきはいつもかはらねど。

○人めたににし山ざとに、春さへけふはくれぬとや。

○さすや日影のなごりなく、春もくれゆく柴の門。

○春のかぎりのけふの日も、又ゆふぐれとなりにけり、花だに殘れいとせめて。

○夕ぬる山の雲さへに、花の色とは何となく、まかひもあへずくるゝ春。

○春はいつとてのどけきを、今はとくるゝ夕ぐれの、空のいろこそあはれなれ。

## 初夏 夏朝、涼風之部參照

○夏をむかへて○けふよりは○わかれし春の○かすまぬうら○さらにこひしき○朝けの風○夕ぬる雲○花のたもとをぬぎかへて○みどりうひゆく○いつしかと○わか葉さす○みどりすゞしくふく風○風わたる青葉の杜○青葉まじり○若葉のつゆ○れくれて匂ふはな○くれにし春○うすきたもとをふきかへし○夏山の青葉の雫○のこれる花○きのふの花の雲消にて○風わたる淺澤水○わかばに匂ふ○うの花垣の盛り○あさみどり○夏にこう咲きかゝりけれ藤のはな○花とりの色音あとなく○蟬の羽衣○風もすゞしく夏たちぬ○ひきかへて○蝶はうらむ三春の別○花はねどろく一夜の風○春わすられぬ○わかばに匂ふ朝日影○ぬぎかふる衣の袖○みづ〳〵と青葉にしげる山○坐に覺ゆ殘春一片の雲○かをるや春の名殘かも○一夜のうちに○夜床のまくら○胡蝶は追はず三春の去るを、○わか葉すゞしく夏のきて、衣手かろき朝風。○はるの霞のなごりなく、はれゆく空に夏はきぬ。



○蟬の羽衣うすけれど、あつさ催す夏のうら。
○かげ見にうもる夕月の、すゞしきほどに夏はきぬ。
○風このましき夏のきて、花になれにし衣さへ、袂重くぐれもふなる。
○鳥はふる巢にかへる手の、梢にうひて夏はきぬ。
○藤のうら葉に風見にて、松かげきよき山のいほ。
○衣手寒き朝風に、若葉の露ぞちりかゝる。
○軒端の梅のはがくれに、なほ鶯のこゑぐする。
○梅もさくらも一つらの、青葉の林となりにけり。
○とぢし氷室を開きつゝ、冬を手にとる夏はきぬ。
○山時鳥なきぬべき、空のけしきとなりにけり。
○いつしか春もくれ竹の、かげにすゞしき風吹きて。
○魚戲れて荷葉動き、老鶯とびて餘花はれつ。
○花たちばなにふく風は、いづれの雲のかへしぐも。
○若葉涼しくふく風に、花ともつれて殘りにし、胡蝶のゆめはさめにけり。
○谷のいほりの櫻ばな、のこれるいろもなつかしや。

○川添ひ柳風たちて、萱のみの毛をうちなびけ、竹の編戸の垣根には卯の花白くさきいでゝ、隣にしらぬ夕月夜。

○槇のわかばに風たちて、夕すゞしく夏はきぬ。

○わかばすゞしき木の下に、胡蝶も花のゆめさめて。

○花もわかれて夏に入る、こゝろうづきのほとゝぎす、きけば流石にあはれなり。

○かすみにこめしそほやまは、いつかわかばの衣きて、朝のきりを帯とせり。

○梅にやなぎにむつれし春の、名殘わするゝころもがへ、花のかをりは名のみにて。

○いさゝかりたちて木の本に、ちりしく花やかきつめん、昨日の春のかたみにと。

○春にわくれし春やある、みやまがくれの鶯は、猶ちりのこる花になく。

○わかばの風もかをりきて、なつもはにある梅さくら。

○れなじみどりに見ゆれども、わかばのいろはうすくこく、庭の木立をいろどれり。

## 更衣

○きならしゝ○たもとに夏は○うめしたもと○衣かへうき今日の空○花の名殘○ちりはてゝ花のかげなき木の下○うす花染○ぬぎかへて○山吹の花いろ衣○しらがさね○限りあれば衣ばかりはぬきかへて○春のかたみ○去年なつかしき○わけなれし野原○衣かへまくをしき○かたみとぞめぬ朝風○かをりのころも○去年忍ばるゝ夏衣○白きにかふる○たちかへて○色もすゞしき○あやなく春のしのばるゝ○今さらをしき花衣○庭のみどりの下涼○心もうすき○わぎも子が○あさ衣○のこさばや○人なみに○かろげに見ゆる夏衣○袖ふきかへす○風ふさわたる○しろきひとへもめづらしき○白たへの袖ふりはへて○殘れる花に袖ふれむ

○花のたもとぬぎかへて、卯月のいろの白妙を、風にかへすや夏衣。

○けさぬぎかふる夏衣、うらなく春のしのばれて。

○風まださむし花ざめの、衣や下にかさねきむ。

○花いろ衣ぬぎかへて、白きひとへのうらめづらしく。

○たもとに夏はたつならし、かろげに見ゆる衣がへ。
○花のたもともぬきかへて、なつにうつろふ人ごゝろ。
○いつしかとなく夏きぬと、けふぬくうでは花のいろの、うつればかはる心かな。
○のやまの春になれきつる、花のたもとをぬぎかへて、また肌さむし夏衣。
○うでにつゝまむうれしさも、たもとにあまる夏ごろも。
○れもへは悔し春花に、なごさばかりはなれにけん、けふのわかれをわすれつゝ。
○何をわくべき香ならねど、取出でゝきれはれのつから、こゝろ忍ばるゝ夏衣。

## 夏日 暑、涼風、夏朝之部參照

○若葉しげりて○もろこゑに蟬のなく○軒ばもくらく○雫ちる木下かげ
○れなじみぎりになりゆめて○片山林しげりゆく○花見し枝のわかみぎり○きかまほしきは郭公○卯の花垣のさき匂ふ○雨ふる空にほとゝぎす
○あつかはしく○庭のくれ竹しげりあふ○端午する日の空はれて○みぎりながるゝ門川○夏めく山○夏も盛りの野邊○衣手かろくふく風○日影まばゆくかゞやきて、塵ばかりなる雲もなし○あやめふく日○池にうひたる高殿○空かきくれてふる雨○卯花くたし○早苗とる田の夕映○うぶねさす○河瀬に下すみなれ棹○日毎にまさるあつさ○けふのあつさ○野澤の水に洗はなむ○閉窓雨すぎて苔花潤ふ○螢とぶ夜○かやりたく火○休らふ蔭なき夏の野は、命をつなぐ笠の紐。
○別るゝ横雲入聲の鳥に、いつしかあけて夏の日の、あしたのひかりさしろめぬ。
○軒のすだれに風たちて、空にかゝれる雲の峰。
○庭の夕風吹き入りて、青葉にくだく露の玉。
○日數ふる野のさみだれに、色こうまさり夏艸。
○日は西山に臼搗きて、杜の木ぐれに蟬のこゑ。
○山時鳥音づれて、葉ざくらすゞしく吹く風。
○花にとひつる山里の、青葉もさらになつかしな。
○杜の下草しげり合ひて、深くもなつはなりにけり。

○涼しき月をまつの戸に、山時鳥れとつれて、軒の橘かをるなり。
○世を空蟬のねにたてゝ、なくねかなしき夏の日。
○きのふの花の雲消にて、わか葉に匂ふ夏の山。
○杜の下風吹きれちて、なくねすゞしきせみの聲。
○むら〳〵見にし遠近の、木立茂りて、野も山も、夏のけしきになりはてぬ。
○みどりもふかき夏山に、一雨すぎてはれゆきぬ。
○けふ水無月の名もしるく、はげしくてらす天つ日の、ひかりに身さへとけぬべく。
○しのぎわびたるあつさかな、業もころもも身にそはで。
○みやこれほぢの八ちまたも、行きかひたにし日のさかり、賤がれしゆく荷ぐるまの、聲はきくだにあつくるし。
○ひるねのまくられどろけば、のきの日ざしは四時すぎぬ、とくよびとめよやよ子供、氷うる子の聲すなり。
○夕立いりぐ心より、うらだのめなるこのごろの、ならひとかつはしるしるも、心にかゝるみねのくも。



○をとめがかざす繪日傘の影ほろなが く日はたけて。
○木々は青葉になりはてゝ、雨すゞしくもはるゝ日。
○卯花かぎにあめすぎて、夕すゞしく月もでぬ。
○またぬ夕をほとゝぎす二聲なきてゆく空の、雲間さやかにいづる月。

## 早苗 田之部參照

○小田のしめなは○山田のを田○わかなへ○夕さなへ○さなへ艸○たまなへ○賤のをとめら○すりわの田井におりたちて○入日すゞしき山かげの○石上ふるのあら田○さみだれのはれまま得て○早苗はうゑむ○千代の初穗○賤がすげ笠○水せきかけて○雨はれし田○とはだの里の夕まぐれ○門田の早苗○みとしろ小田に雨すぎて○山田のかけひ○八少女○手もたゆく○いりぎてうゝる早苗○けふは田毎に早苗とる○峯の松風ふきれちて○夕日さす小田○すり野の小田にとる早苗○なべてみどりにいろめきて○さつきゝぬらし○豊秋いのるわさなへ○白き菅笠いたゞきて○きよげに見ゆる玉苗○うらわかき○朝しめり

○早苗とる田に水みちて、民の手わざもゆたかなり。
○ながれてねつる谷水を、せく水口にいぐしたて、五百代小田にたねまきて、
よき初秋の穂をぞまつ。
○かくる少女が玉襷、菅の小笠をかたむけて、うた ふ田歌もねもしろく。
○きよき山田の玉苗に、水せき入るゝ賤のを。
○あかきたすきをとりかけて、笠かたむけて少女等が、うたふもをかし田植
唄。
○岡の若葉に日はてりて、椹田をわたる夕風に、なびくや田子が袖たもと。
○みづ〳〵しくも玉苗の、ふく朝風になびきつゝ。
○峯に小雨の雲はれて、山本きよき夕風に、すそわの小田にとる早苗。
○けさたちいでゝ早苗とる、門田のけしきながむれば、賤が小笠の數ぞそふ。
○ふる雨にいきつきあへず、早苗とる田子がひとむれ。
○雨はるゝ田の夕げしき、田唄うたひて早苗とる、賤が田わざのねもしろや。
○なく時鳥をちかへり、田わざすゝむるあしたより、賑はふ賤が早苗唄。
○暇つたひわりごはこぶは、早苗とる田子が童か。



○田事めでたくけふ終へて、かへるや賤が一むれの、さゝめくさまものどけ
しや

## 暑

○あせあゆる○けふのあつさ○あきまちわぶる○たのむ扇○うたゝねの
ゆめぢくるしき○日にうへてあつさいやます○庭のやり水○はしぬに風
をまつ夕○日盛りのあつさ○夕されば○きつにはうとき風の音○くるし
きまでに○いかで凌がむ○手ならす扇いうがしく○あつさをうふる蟬の
もろ聲○風さへたにてゝる日○あせのみあゆる○一雨ほしき○青葉のい
ろもあせはてゝ○庭の呉たけうよとだに○風かよふ○くるゝをまてど○
日にうふあつさたへがたみ○ひとへにくるし夏衣○すゞしの衣もなにな
らず○日影あつけく○蒸すにも似たるあつき日○あつさをうへてなく蟬
の○楢の下葉のうよとだに○軒ばの小簾に風たにて
○骨さへとくるあつき日は、扇ばかりをいのちにて。
○庭のやり水かれにけり、あつさを何に凌ぎてむ。

○すゞしの衣名のみして、くらしかねたる昨日今日。
○照りつゞきたる日の岡は、あつさよくべきかげもなし。
○すだれかゝげて風まてど、うよとばかりも音つれで、凌ぎわびたるあつさかな。
○まちにまちつる夕立の、ながれてはれし名殘こり、いはんかたなくくるしけれ。
○氷うる子のこゑたえて、めさへくるめくまひるどき。
○風もたにたる海原に、帆かげさへなきいさりぶね、はげしくてらす天つ日に、うしほもにえてわきぬべし。
○にはの木だちのしげみより、なが鳴るゝ水の一すぢも、あとなくかるゝ昨日今日。
○さもいかめしくてる日かな、もゆるが如き鬼百合の、いろもあつさの一ッにて。

## 納涼

扇、海濱之部參照



○れちくるたき○秋や通へる○涼しさは○夏山の木の下かげ○大伴のみつの濱風○柳のかげの夕すゞみ○清水せく○岩きるなみ○水むせぶ○楸れふる片山蔭○岩まよりれちくる水○風ふけて枕にすゞし○槇の下風○れと冴えて○はしねにみつる夕月○更けゆけば○夕波よする○松がねにすゞしさをまちとる袖に○岩たゝく水○ならの葉かげの夕月夜○たきの白糸○山かげのやど○下葉すゞしく○髪を散らす長松の下○襟をひらく翠竹の間○水清くして柳の影をうかぶ○浦かぜすゞし○秋さへ忍ぶ山かげの○鮎はしる玉島川○夏をよろうなる川つらの里○わすれ水○木ぶかき○いさゝむら竹○柳をわたる夕風○菩路をはらふ松風○春よりもくる人しげき柳かげ○村雨のなごりの空○竹の風枕をふきてゆめすゞしく○水の月樓(うてな)をてらして夜明かなり○くれかゝる池の石橋○其名さへこう流れけめ、ふく風すゞしなつみ川。
○袖につゆちる柳かげ、人こそつどへ夕すゞみ。
○つゆのひるねの涼しさに、ゆめさへぬるゝ心地して。
○水の音して呉竹の、茂れるかげこそふしよけれ。

○ひるまの夏を夕つゆに、はらひはてたる月の影。
○清水のあたりとめくれば、むすばぬ袖にも夏はなし。
○松の下なる苔清水、夏のほかをも流れゆく。
○すだれかゝげて端居せむ、涼しき月もいでにけり。
○夏をへだてし小柴垣、秋はこゝにぞ住みてける。
○いさゝ小川の涼しさに、かへるさをしき夕まぐれ。
○漕ぎいでゝ見れば夏はなし、あつさや舟にれくれけむ。
○船こぎゆけば風よりも、又水よりもひとしほの、涼しさ送る月の影。
○とる盃に影やどる、月の光を浮べては、けづりひよりもひやゝかに。
○浪のうきねのかぢ枕、夏にかなへるふしどかな。
○しげる木蔭は夏の日をさゝへ、岩間の清水は秋の色をながせり。
○夏にしられぬつゆちりて、名殘涼しき夕立の、空さりげなく澄む月。
○あつさを拂ふ松風の、木の下水をむすびては、夏なき年かとれもひけり。
○れももむろにふく夕風に、衣のすゞをなぶらせて、立つも涼しき松の蔭。
○すみだ河原の夕涼み、すだれかゝげて我船に、月影のせてこぎいでむ。



○松かげすゞし夕立の、すぎにしあとのつゆちりて。
○風にしぐるゝ蟬のこゑ、あつさをよろの杜のかげ。
○松の木かげに立よれば、ちりくるつゆのれとまでも、なつをよろなる心地して。
○風のまに〳〵うちなびく、いよすのもとにはしぬして、月まつほどの手すさびに、ねやのつまこそしらぶれば。
○ほたるとびかふゆふやみに、衣手かろく風ふきて、ひるのあつさをあらふなり。
○月かげすゞし風すゞし、松の木蔭に椅子よびて、友とかたればなつもなし。
○さくらの青葉しげりたる、をぐらきかげに一すぢの、しみづながれてれときよし。
○夕しほのぼる川つらの、やどのはしぬの夕月に、かへる白帆をながむれば、なつのゆくへもみゆるなり。
○しほにかくるゝあしの葉の、つゆちるかたに舟よせて。

## 避暑

○山又水○山紫水明○夏より外の旅のそら○ちりの世いでゝ○水のながれも清き里○山秀で河ながし○あつさを知らぬ○夏をよりなる○浮世のなつをのがれきて○夏知らぬ里○秋はやきところ○山をめぐりてゆく水の○月さへ清くてる里の○扇をうごかせば風竹に生じ○床をうつせば月庭に清し○われ仙人（やまびと）の心地して浮世の夏もわすられぬ○ひるは濱邊の風をむかへ○よるはみやまの月をみる○たづねしかひの松の月○たゞなはる青がき山○水近き山本の里○風をむかへて月にふす○ゆめさへすゞし○ぬる夜すゞしく○人まれにして靜なる○磯邊のうてな○竹によれば醉魂きよし○ならせる扇もすてられつ○世ばなれし里

○山うるはしく水清く、むかへばやがて心さへ、浮世の夏ぞわすらるゝ。

○みやこのちりをのがれきて、あつさを洗ふ山かげの、松が根めぐる石清水。

○滊笛の聲に夢さめて、見ればいつしかこの山の、ふもとの里につきてけり。

○山むらさきに水きよく、夏をへだてし此さかひ。



○河邊の樓のおばしまに、のぼりてみれば夏山の、みどりをわたる風のいろ。

○夕は海に釣をたれ、朝は山に鳥を射て、永き日あかず遊びつゝ。

○さすがに夏の色みえて、山はしげれどふく風の、音にあつさはなかりけり。

○足にまかせて分け入れば、山れもしろく河清き、浮世の外に出でにけり。

## 晩夏

○夏ふかく○秋をかねても○秋ちかき○日くらしの聲○くれかゝる夏野のすゝき○衣手すゞし○夏のゆくて○夏たけてねむの花ちる○夕風の身にしむまでに○袖にれぼゆる○あすよりは○月かげも○西ふくかぜ○ひと夜を秋のへだてなる○近づく秋○からころも○螢をさりふ夕風○稻葉のつゆのいろ見ねて○松の下風おとすみて○秋よぶ蟬の聲○河風きよくふく夕○夏のけしきもおとろへて○桐の葉山○行く水も○水にながれて○かつ〳〵見ゆる秋のいろも○くれてはをしき若葉かげ○桐の葉りよきふく風○夏ゆく空○若葉のいろもあせにけり○ふきかはる風○野邊のけしき○夏としもなき夕○夏はいぬめり○ほどなくゝれて

○夏を惜みてなくせみの、涙やあきのつゆとなる。
○ひま行く駒の、くつわ虫、まだきに秋の聲すなり。
○殘りすくなになるものは、螢と夏の日かずなり。
○みぞりもふかく夏たけて、夕は秋のけしきとも、立ちかはりたる昨日今日。
○かきねにうよぐくれ竹の、ひと夜へだての秋のうち。
○にはのなつくさかりのこし、あすこん秋のつゆまたむ。
○うらゆくともさへとぶほたるさへ、うたゝけはひのかろげにて、こんあき
ちかきうらのいろ。
○ねぶの花ちる川水の、はやくもなつはながれゆく。
○水のねとさへ何となく、きのふけふにかはりつゝ、なつもくれゆくあすか
川。
○あかつきつゆのひかりさへ、秋はやちかきありあけの、月をやどしてかげ
すゞし。
○ほたるをさそうふゆふ風に、なつもあまらぬまどのうち。
○たもとすゞしきみうぎがは、ばらへにたつる大ぬさの、風にみだるゝ影み



れば、なつは水にやながるらん。
○夕なみしろきみうぎがは、ぬさにやなつをのせてゆく。
○秋はやちかきまどの外に、きりのはわけの月みかて、みだるゝつゆもいろ
涼し。
○ゆふべすゞしく夜はなりて、あきちかづきしにはのねもの、千くさがくれ
に虫ぞなく。

## 立秋（初秋）秋風之部參照

○秋たつと○秋を知らする○ふく風も○つゆけく○八重むぐら○さびし
き宿○朝戸あくれば○身にしむ風○露吹きれくる○れどろかれぬる○桐
の一葉に秋立ちて○立つ秋の○松ふく風のおとさへに○わさ田かりほす
○葛の葉○萩の上葉○萩の下葉○袂すゞしくふく風○けさの朝け○松虫
の初こゑさうふ○あさぢ原○水ぐきの岡の葛原○いろづきうめて○暑は
退く三更の雨○涼は生ず一夜の風○衣手さむし○うたゝねに心してふけ
○夕さればつゆれき添ふる○杜の下風○初秋のうらにきりたつ○うちつ

けに袂すゞしく○一葉の桐飛んで秋をつぐ○半廊の月白し○ひと葉ちりゆく河柳○末こす風○秋は西よりたちそめて

○不二の高根の初みゆき、いろも光も清見潟、浪より立てる秋の色。

○宮城野の秋なほ淺きつゆの色、月の光は清けれど。

○秋のけしきとなりにけり、萩の上葉の風の音、萩の下枝のつゆの色。

○裙野の茅原秋風のうよめきたてば、尾上にも、影すむ月のいろさむく。

○朝日子のぼる山かげに、秋のあしたの色みにて。

○片野のすゝき穗にいでゝ、さびしさ招くきのふけふ。

○桐の一葉に音づれて、袂にさわぐゆふあらし、たつとばかりにきく秋の、哀をやがてさうひ來て。

○まだ秋淺きこの朝け、風は袂にうらさびて。

○物おもふ袖の露とめて、今朝しもたちぬ秋の風。

○扇もいつかわすられて、にり合はさるゝ夕すゞや。

○世にありとしもしら露に、うづもれはてし八重葎、いかに分けてか問ひ來つる、今朝音づるゝ秋の風。



○賤がのきばに立ちのぼる、朝げのけむりほの〳〵と、さぎりにまがふ秋の空。

○東おもての窓近く、桐のかれ葉を吹き入れて、身にしむ風ぞおとづるゝ。

○春過ぎ夏もくれ竹に、秋くる風のねとづれて、庭の萩原打ちよぎ、天つかりがねなきわたる。

○一葉の桐に三日の月、いづれもわかき秋の色。

○うなゐが遊ぶ川の邊に、蜻蛉とびて秋はきぬ。

○溪間の流水三伏の夏をながし、澗底の松風一聲の秋を催す。

○袂すゞしくふく風に、窓のとちかき桐の葉の、ひとは〳〵に秋告げて、なごり少なき昨日けふ。

○ねざめがちなる閨の戸を、れしあけがたの月のかげ、志ぐれそめたるあしたより、そむるむらごの初紅葉。

## 七夕 情之部參照

○星合の空○こよひばかり○又こもとし○とし〳〵に○あふせはかはら

ず○天の川原にたちつくし○涙やかくる○とわたる船○あけやすき夜○
うらみわびて○星河耿々○雲はかへる天上の客○浪たちさへて○そらは
れわたり
○天の川原にきり立ちて、こよひなあけそ星合の空。
○淺瀬白波たどりつゝ、天の川原の夕ぎりに、覺束なくもまちわたる。
○秋とつげぬる風の音に、君が俤忍ばれて、いつかとまちし今宵ぞも。
○こよひあふてふ、たなばたの、天の川原に秋たちて。
○月もさやけき天の川、逢瀬うれしき星合。
○天の川波立へだて、逢瀬かひなき浮舟の、梶の葉もろき涙には、雨(ふた)の袖やし
ぼるらむ。
○あふけばうらに雲もなし、天の河原にたなばたも、逢瀬うれしくかたるら
む。
○いさ筆とりてたなばたの、逢瀬かはらず天の川、ふかき契をいはひてむ。
○あくるくやしき天の戸を、いかになげきてたなばたの、袖うちつらね歎く
らむ。



## 秋日 鹿、紅葉之部參照

○つゆのいろ見わて○千草の花○野邊にわくつゆ○つゆ吹きむすぶ庭の
萩はら○さ夜ふけて○まもがれわたる○風颯々○雨蕭々○すゞしさまさ
る○馬なめて○枝頭の一葉風にそぶく○人だのめなる風の音○うらめづら
く○昔こし野邊○月かげきよく○柳ちり○水音冴て○山風さむく○鹿
のなくね○紅葉する夕日の岡○日脚短く○秋なる聲○ゆめおどろかす○
れつる涙○うらがなし○けさふく風○夕のつゆのいろすごく○蕭條とし
て秋聲を送る○風わたる眞葛原○江山いろを改む○はしぬして○庭の萩
原○さびしきやど○友まちがほに
○黄金のいろにみのりたる、小田の稻穗の夕日影。
○花咲き匂ふ野路遠く、錦を分くる秋の風。
○風の音さへ何となく、昨日にかはる秋の空、袂に露をさうひきて。
○花てふ花のさく秋は、匂はぬ艸も匂ひつゝ。

○匂ひこぼるゝ萩のつゆ、わけゆく袖にかゝるなり。
○千町の田の實かり上げて、運ぶ車に豐秋の、ゆたけき色もこぼれつゝ。
○麓の野邊を分けくれば、千艸の花の花盛、袖さへ匂ふこゝちして。
○垣根の眞萩つゆちりて、虫の聲こゑふいとたかし。
○星の林は雲晴れて、秋風たかし天の河、艸の露は夜を深み、白露しげし虫の聲。
○鳴ずなくなる秋の田に、夕日さびしくかげおちて。
○秋ふか艸の夕まぐれ、入日さびしくかたむきて、風にうづらのさわぐなり。
○光うずるゝ夕日影、さびしく殘る梢より、木の葉こぼれて百舌鳥のなく。
○夕ぐれさむし秋風に、眞萩かつちる片野原。
○夢は冷かなり、涼風暮雨の天、門はとざす紅葉青苔の地。
○おもひのつゆの白玉は、つゝむにあまる袖の上。
○露はしろし萩のはな、風は清し月のいろ。
○まだき時雨の布留の山、紅葉のかげにやすらひて、はれ間をしばしまつの戸に。



○猿かひに叫んで秋すでに深く、炊烟一抹遠村かすむ。
○虫の聲々うらがれて、月よりひゞくかねの音。
○かりがねさむく秋ふけて、園生の眞萩今ぞちる。
○浮世の秋を身にしめて、もろき涙のゆふつゆや。
○龍田の秋にあちねぎも、波にまかするあやにしき。
○千町八千町つくる田の、ほごとにこぼるゝ秋のいろ。
○胡砂ふく風に霧はれて、落莫萬里秋のいろ。
○桂の葉峯にれちて秋の空色朗かに、松風は澗にみちて晩蟬聲まれなり。
○岡邊の松の樂のねに、尾花が袖をふきかへす、風こそ秋の舞の曲。
○月に紅葉のちる見にて、梢にさわぐむらがらす。
○れくしも白き眞葛原、枯生にれつる雁の聲。
○藜は杖に伐りとられ、のこる千艸に秋風の、わたるも淋し露の色。
○蒼苔道滑にして僧寺にかへり、紅葉林幽にして牡鹿峯になく。
○この夜明けなば、又秋の、半の空も過きぬべし、をしきは月の影のみか。
○青垣山のこゝかしこ、梢もいつか紅葉して、秋のけしきのれもしろや。

○風もしぐるゝ遠山の、梢にみゆる秋のいろ。
○めにこりみねね此夕、ふみよも窓にれとづれて、桐の一葉を吹きさりひ、衣手かへす秋の風。
○霧を破る砧の響露を恨む虫の聲、問はれぬ庭に月ふけて。
○風きよくして月たかく、木の葉みだれて宿鳥さわぐ。
○秋は來にけり昨日今日、桂の枝の月の影、袂は涼し此夕、桐の一葉の風の音。

## 秋望 眺望之部參照

○秋風わたる○夕べのけしき○櫨紅葉○枯尾花○よわる虫の音○稻かりをさむ○つゆふむ細道○夕日かぎやく○一望千里○渺茫萬里○風ふきすさぶ○しもかれわたる末野○山高く水ながし○峯の松風○まきたつ山○牛追ふ童○風さむからし○ながめやる○ながめ見渡ず○かへりみすれば○落日寒雲浮ぶ○雲立ちわたる○はれみくもりみ○しもさむく○水かれぬ○一徑の柳○孤村の烟○れもひわびつゝ○いづこもれなじ秋のくれ○色としもなし○水にも秋の聲うする○つゆの夕ぐれ○さらぬだに○あし



たの原○夕べの山○秋篠の里○こばだの里○うづらなく野○秋深艸の里○浪よる稻の花ざかり○夕ぐれさむく、
○雲は水に映りて秋の色を流し、露は珠をくだきて月の光をみがく。
○水上日に浮ぶ孤峯のかげ、巴陵一望秋またふけぬ。
○夕日かぎやく群山に、おちゆく雁の影見にて、麓の里の古寺の、かねよりいたる夜のいろ、秋のながめのさびしきや。
○狹の上葉をふく風に、ほろ〳〵おつる櫨紅葉、今日も時雨るゝ山のはの、雲の行來のさだめなく、ながめつきせぬ秋のそら。
○たもとかざしてみかへれば、白雲なびく大空に、雁がねさむくわたるなり。
○尾花が末に富士見えて、秋風たかし武藏野。
○きりのたえまに山見えて、たかねの紅葉うめかけぬ。
○蹊にいろづく紅葉のにしき、峯をつゝめる時雨のまらいと。
○稻妻さうふ秋風は、夕のいろを吹寄せぬ、遙けき寺の鐘の音は、空ゆく雲をとゞむなり、ながめつきせぬ大空に、心をたかく放ちてむ。
○並木の柾の夕日影、入江さむけき鹽風に、ふかれてかへる片帆船。

○尾花が末に夕日はおちて、うすぎりにほふ山本の、里の燈火ほの〳〵と。
○野露のうき〳〵り中たにて、尾花につゞく小松原。
○遠里小野の紅葉(もみぢは)の、こきもうすきもさま〴〵に、さやかに見ゆる秋のうら。

## 擣衣 秋月之部參照

○からころも○暁かけて○うつおとも○月にうつ聲○かり衣○わかせこが○千々にくだけて○まきかへすらむ○千たびうつ○音もたに〳〵○衣しでうつ○衣かりかねなきわたる○おとももま遠に○木の葉ふきしく追風○月さにわたる○夜やふけぬらむ○きぬたのひゞき○たゆむきぬた○萬戸衣をうつ聲○長き夜すがら○松風の音○たが秋風を身にしめて○夜さむのころも○砧上殘月のいろ○玉川の里○吉野の里○桂の里○ふるさとさむく○山風さむく○秋さびしくも○ねられぬ夜○聲しきるなり○月かげもかたむく軒○衣うつかた野○つゆもしもとなりゆく○むしの音にまぎるゝばかり○こゑさうふ風
○麻の狹衣うつ聲を、月よりおろすさよあらし。



○いづくの空ぞ里人の、ねぬ夜の數もおらつゆの、霜となるまでうつきぬた。
○いつしか里はあれはてゝ、月やあらぬと恨みつゝ、たれあさぢふの草のやど、つゆにぬれ〳〵衣うつ。
○身をきる霜夜もたが爲に、うちもやすまぬさよぎぬた。
○木の間にふけゆく夜半の嵐、旅寢の床のゆめさむく、ねざめおとなふ砧の聲、かたしく袖のつゆこほる。
○寒き夜頃に打かはす、四方の砧のおときけば、吾にきせむとたらちねの、母が手づから冬衣、ぬひし昔も忍ばれて。
○夜風をさむみふる里に、たれたが爲のさよぎぬた。
○夜半のねざめのそことはに、なれてもさびし小夜きぬた。
○深草のべにきてみれば、うづらの衣月にうつ。
○たびねのゆめをいくそたび、うちおどろかすさよきぬた。
○虫のねのたえまにひゞく小夜砧、たが夜さむにかうつならむ。
○打つやきぬたのをり〳〵に、響たゆるは物おもふ、袖をやしぼるひまならむ。

○たがためとてか霜こほる夜さむの衣よもすがら。
○衣うつ聲なくうづら、秋のあはれのさまざまを、いづれそれとも分きかねて。
○きぬたの響虫のこゑ、てる月のかげ風のおと、いづれ涙のたねならぬ。
○八月九月正に長き夜、千聲萬聲恨をうち合す音。
○うつやきぬたの聲吹きて、君すむ里におくれ風。
○宮樓高く聳ゆて風北にめぐり、隣砧ゆるく急にして月西に流る。
○蘇武が旅寢のそれならで、これは東の旅の空、西より來る秋風に、吹き越えらるゝ山越の、まどほの衣いざうたへに、夢やすからぬ旅まくら。
○聞けば心も吳羽鳥、あやの衣をうつたへん。

## 秋興　秋山、秋野之部參照

○尾花さく○虫の聲する○あはれとや○わけゆく野べ○もみぢみがてらに○目もあやに○山路をゆけば○家づと○秋野のはなにたちまじり○尾花が袖○川上の岩垣紅葉○人の心の千ぐさ八千ぐさ○かへるさは○小萩はら○こまとめて○うちつれて○天廻にして雲遠し○一行の斜雁○もみぢかざして○雨はふりきぬ○夕日影○さすや夕日○虫のなくねに心ひかれて○百草のはな○さまざまに心ぞとまる○金風蕭々として落日あかし○くれなば月に○月まちつけて○ながめはつきぬ○またもきてみむ○たづねむ山○舟下す河○錦れる山○賤が垣根○柴の折戸○千艸にすがる露の白玉○れもしろき野○きりたちわたる。
○松虫鈴虫きりぐ〳〵す、聲ふみわくる秋の野や。
○萩の上葉につゆちりて、昔をうたふむしの聲。
○風きよくして月たかく、木の葉みだれて宿鳥なく。
○下葉いろづく紅葉ばに、うぐ夕べの村時雨、ぬれてやひとり鹿のなく。
○霜ふきわたす庭の面に、木の葉ふみわけかりたてば、月もたもとにかげちりて、かりがねの遠くきこゆなり。
○月きよき夜の松風は、天津少女が琴のねか。
○里の童が艸笛の、聲する方にわけゆけば、裳裾に匂ふ藤ばかま。
○もづはた山のうすかすみ、たちかさねたるきりはれて、牡鹿の影もみゆる

なり。

○紅葉いろこき山路の秋、瀧もみがてらいざとめゆかむ、くれなばなげの月のかげ。

○紅花の春の朝には、山錦繡の衣を粧ひ、黄葉の秋の夕には、水縹縅の色にほこる。

○露をやわぶる虫の聲、とばかり杖をとゞむれば、時雨ふりきぬ薄原。

○分け行く方の山川に、風のかけたるしがらみは、流れもあへぬ紅葉の錦、わたらば中やたえぬべき。

○四方の梢もいろ〳〵に、錦あやなれる夕しぐれ、ぬれてやひとり鹿のなく、聲を知るべに分けゆけば、萩に匂ふ萩の花。

○匂ひこぼるゝ萩のつゆ、矢立にうけてかきながす、言葉の花は中々に、かをる色香にけれされて。

○鹿のなくねに目をさまし、窓うつ落葉の音をきく。

○月にうかれて野邊ゆけば、袖に碎くる露の玉、身に光ある心地して。

○露ふみわけて路に迷ふ紅葉のいろ、風のまに〳〵衣はそまる紫蘭の香。



○紅葉亂れて、高嶺のあらし、濃く薄く、蘆の花ちりて、岸のみゆき、遠く近し。

○夕きりなびく門田の外に、落栗ひろふとたつ子等が、聲れもしろき秋の暮。

## 晩秋 霜之部參照

○またこん秋○ゆく秋○秋のくれ○今はとて○れもかげにのみ○むなしくれくる○秋のいろ○たれ志らつゆ○むしのねほそる○野邊の夕風○心細くもいづる月影○秋ぞすくなき○我袖の上○たもとつゆけく○志もがれまさる○ちりかひくもる○かぎりとて○もろともになきてとゞめよ○紅葉をぬさと手向けて○秋知る神○入相のかね○袖のぬるゝは○影ほそる月○ほのかに殘る月○まがきの虫のね○秋のわかれ○末野の千くさ○秋風千里○黄菊枝頭秋すでに老いぬ○見はつる月○落くる水のいろ見て○草葉もかれて○小雨うぼふる○斜陽山をてらして秋の色老ゆ○秋の別路○うき秋○うらさびしくもくるゝ秋。

○門田にそよぐ稻葉の風、雀の聲も遠そぎて、うちこぼれくる片時雨。

○野わき山わきふく風の、いとゞ身にしむ秋のくれ。

○あはれもつゆもいとせめて、ことわりふかき秋のくれ。
○宮居の紅葉ちりはてゝ、赤きはひとり鳥居のみ。
○秋もうつろふ花のいろ、草の葉末に霜さえて。
○ふけゆく空に月たちて、垣根にわぶる虫の聲、いつしか秋もたけにけり。
○野山の草のいろあせて、紅葉ちりかふきのふけふ、枯野に立てる白菊の、花はさながら紅の、八しほ色こく匂ふなり。
○秋のわかれをかなしみて、空に立田の山姫が、袖の涙の村時雨、ふりて梢やうめぬらむ。
○時雨のあめをたてぬきに、にしきおりかく唐衣、たつたの川の秋のくれ。
○千ぎりしばなく佐保川の、岸の秋きりたちこめて、木々の木の葉の色もなし。
○秋はそれとも見わざりし、松の木の間のはじ紅葉、散てつもれり森のかげ。
○何松むしの忍び音に、よたぎなくらん風さむく、月かげうすき秋のくれ。
○片山里の秋ふけて、牡鹿のこゑもこのすごく、高嶺の松にふくる月、見ぬよの空のあはれまで、袂にぬくるさよあらし。



○蓬が下になくむしの、聲するばかり秋ふけぬ。
○千草匂ひし艸の原、しもがれはてゝ行く秋の、行方をたれにとひてまし。
○雲路にまよふかりかねも、小笹をわたる夕風も、身にしむ秋の末つかた。
○野くれ山くれゆくあきに、われもくれじときほひてや、草木みながらかれてゆく。
○秋はてがたの紅葉ばと、冬のはじめの時雨とは、いづれかさきにふりいでん。
○千ぐさにあまるくれなゐを、もみぢにうつす秋のくれ。
○しかもかぎりのこゑになけ、なれこし萩の花つまに、やがてわかれのけふなれや。
○しかなく野邊の萩の花、ちりゆくころの風さむし。

## 初冬 霜、時雨、木枯之部參照

○冬きぬと○色かはる○冬されば○冬のきて○冬やきぬらむ○梢さびしく○木の葉みだれて○木がらしの風○野べの千草の色あせて○時雨の雲

○さえまさる○うすらひ○冬ごもりせん時○庭のくさ葉にぶもしろく○落葉して○はらひつくして○人めもかれて○つま木こるやど○秋のわかれの袖のつゆ○鳶の細道冬はきぬ○山里に○山ふところに○峯ふきはらふ○涙のきくら霜とぢて○槇の戸すぐるはつ時雨○窓の梅は月を横へ○簷の霜は花をとばす○椎の實ひろふ○楢の月○さむげに見ゐて○ちりもてのこらず○風颯々○落葉みだれて○小山田の○朝風さむし○夕風すごく○ま木の板屋○あわたゞしくも○くぬ木原。

○落葉の聲をさきだてゝ、野にも山にも冬はきぬ。

○外山の楢かきくらし、時雨るゝ空に冬はきぬ。

○こき墨染のくもたちて、かきくもりても時雨るなり、冬また淺き筆の山。

○時雨うめたる人々の、袖ふく北の風さむし。

○人目も草もかれはてし、野中にのこる一つ松。

○時雨をさうふ松の風、冬の調べとなりにけり。

○木々の楢の秋くれて、枝にまれなる紅葉ばに、目かげさびしく殘るなり。

○雪の山口うちしぐれ、けふこう冬のふもとなれ。



○瑠璃の色はかはりて月をこめがたく、纖纖の花はさむくして風にをちる。

○れく白露もいつしかと、志もとかはりてふきあるゝ、山風さむく冬はきぬ。

○時雨しうらもけさはれて、嵐ぢ冬をつぐるなる、今よりさむくなりぬらむ。

○ゆきの山にうちしくれ、けふこう冬のふもと川、氷りうめたる朝ぼらけ。

○神もぬれてやつゞふらん、けさはしぐれのやくもたつ、いつも八重垣たちうめぬ。

○都のうちはれしなべて、衣かへたる神無月、みやまのれくの柚人は、谷のいほにやこもるらん。

○紅葉もいつかちりはてゝ、しかのねたゆる山ざとは、冬さへふかき心地して。

○花の小春の名にあえて、山わけごろもかさねばや。

○小はるのうらのうら〳〵と、さくらかさねの袖かろく、野山にけふやまじりなん。

○くもりぬはれぬとばかりに、時雨るゝうらをながめつゝ、はかなくけふもくれぬめり。

○時雨とゝもにふきれこる、あらしにのりてうきぐもの、あわたゞしくも冬

はきぬ。

○つゆわけころもぬきかへて、けさよりしものしらかさね。

○木のはかつちる大うらの、けしきしぐれてこのあさげ、都もひなも冬たちぬ。

○雲のゆきかひいとまなみ、みやまのさとは冬たちぬ、都もけさやしぐるらむ。

○みぎりの紅葉ませの菊、のこるあはれを吹きすぎて、あらしと共に冬ぞたつ。

## 冬日

落葉、木枯、霜、雪、時雨、氷之部參照

○肌さむく○こほる肌○しぐれにくれて○木の葉ふきまく○さよしぐれ

○かたしぐれ○外山ふくあらし○あらしの聲○のきばにあるゝ風○寒けさは○さえまさりゆく○しもこうむすべ○北山おろし○都もひなも○ゆきふりいでゝ○初ゆきのふる○まどうつ落葉○埋火のはたによりねて○氷とぢねて○筧の水やこほるらむ○庭は木の葉にうづもれぬ○ゆきのみ



つもる日數○窓のくれたけ雪折れて○はげしさうふる○さわぐ木枯○かねの音冴ゆて○犬の聲々○霜夜の月○松ふく風のものすごく○千どりなく河邊○月ものすごく○草かれわたる野○淺茅生のやど○さむしろに○かたしく袖○ねざめがちなる○すさうぶのもとにつどひて○空うちしぐれ都だに、物さびしかるる冬の日。

○なべて深ゆきにうづもれて、世は白妙になりにけり。

○あかつき告ぐるかねの音も、冴ゆるみ空に霜みちて。

○水とりの聲も氷りて、水上の床の山風雪をふく。

○まさきのかつら色付きて、深山のおくの露時雨、今かふるらむ神無月。

○志ぐれてはれて又ふりて、空定めなき神無月。

○軒うつ時雨とたえて、枯野にふくる月の影。

○峯の朝日はさしながら、時雨ふるなり冬のそら。

○月明に星まれに、風いとさむく志もしろし。

○葦のかれ葉に風さわぎ、施餓鬼の塔婆にからすなく。

○人目も草もかれはてゝ、冬の日影の影うすく、窓に落葉の聲すなり。

○時雨れし空はたちまちに、うのまゝくるゝ冬の日。
○風すさまじき夕まぐれ、ふきのまに〳〵みだれちる、木の葉の音もあはれなり。
○庭にひまなく音たてゝ、さわぐ落葉に月のかげ。
○三輪の山もと風さむみ、雪にをれふす柞杉の、聲ものすごくひゞくなり。
○あまりに積る白雲に、たわみはてたる窓の竹、れとさへ今は絶にはてぬ。
○くもりみはれみしぐれゆく、くものはたての夕日影。
○花のはるまつ心には、冬の日ながきまどのうち。
○うきよをよりにくらす身は、くれやすき日ものどかにて。
○庭のあれふに朝なあさな、たつをならひのしもばしら。
○のぼるあさ日のさすがまゝ、あらうひかねてとけつゝも。
○人めかれたる草のいほ、ゆきにこもりて日かずへぬ。
○みゆきふりつむ山ざとの、しばのいほりのいぶせさを、かたらん人もかれはてゝ。
○あらしもこほるきのふけふ、ゆきにとざせるまどのとを、ほと〳〵叩く村雀。
○春まつやどの冬ごもり、あさな夕なに心あひの、友としたのも埋火。
○みねのまつさへさびしくて、あらしたにせぬ冬の日に。
○あさな〳〵のしもばしら、立てるがまゝに日はくれて。
○冬も半は杉の戸の、くるゝもこほる山かげは、いとゞ日あしのみじかくて。
○池のみぎはゝこほりゐて、庭の小草もかれはてぬ。
○れちばが上につもるゆき、きのふの秋はうづもれて、世は白妙の朝ぼらけ。
○みゆきにこもる冬の日は、人のゆきゝもたにはてゝ、こゝろぐまづはきえぬべし。
○としやゝさむし高峯の松は、霜にもかれぬ操をみする。

## 網代

○河風に○浪のよる〳〵○氷魚とる人○よもすがら○宇治の河瀬○てる月の影もこほりて○網代守る人○かぎり火○かげうすき○あしろうつ音○ふけゆく浪○床さむみ○沈むみくづ○夜をさむみ○あしのかれ葉にさ

わぐ風○小夜風さむく○田上の川に夜はふけて○秋のときり○ひをのよる○月きよみ○瀬の音たかし○玉藻にさゆる氷○みやま嵐の吹きすさぶ○山おろしの風○ふきよする紅葉○あじろもる身のあはれ○しらむ夜○明方さむし○ゆめも氷る○川音すみて○水にまぎれて○あじろのかぎり○いざよふ波○うちけぶる○千どりしばなく○さゆくれて○せゞのあじろ木○氷魚のつかひ

○紅葉亂れて流るなる、宇治の河瀬による氷魚は、錦をわくる心地せむ。

○志も夜の月の影さゆる、ながき夜すがらもる袖の、氷やうちのあじろもり、氷魚まつゆめもくだけつゝ。

○瀬々にかけたるあじろ木を、つひのよるせとさだめこし、ひをのちぎりぞはかなきや。

○あやにかしこき大君の、みけにうなふるひをなりと、しるやしらずやあじろもり。

○あじろのかゞりしらむ夜に、なほこがれてもちるもみぢ。

○川上とほくくれりめて、あじろの火影たつきりに、にほふ影さへとほしろ



し。

○ともすかゞりの火をたのみ、守りあかするあじろもり、さゆるよどこのゆめいかに。

○くも井のにはの宮人に、ひを給ふべきころなれや、あじろのかゞり數うひぬ。

○あじろもる子が袖吹きかへす、河風いかに川上の、たなかみ山の夕あらし。

○きぬかさねてもさむき夜を、いかにあじろのとこの風、れもひやるだにうぢの川。

○川上さゆる夜あらしに、ちりしもみぢのながれきて、とまるもをかしあじろ木や。

○日をふるゆきに田上の、あじろもる子が袖さえて。

○うぢのはしひめ、こがるゝいろに、もにても見ゆるあじろもり。

## 晩冬（歲暮）木枯、氷、時雨、落葉、霜、教訓之部參照

○ふりつもるゆき○冬くれて○三冬つき○冬も末なる○あられふる○あ

らしにこほる○風早み○いやまさりゆくさむさ○落葉のおとも○肌さす風のさむさ○月かげもこほりていづる○みるかげもなき枯野原○寒鴉枝になきて冬たけたり○峯にさびしき松○里はしぐれて○春ちかしとや○朝げの風の肌さむき○火のみこひしく○埋火をかこみて○冬木の梅○ふくる夜の風○ひまもる風○さゑこほる夜○かねの音すごく○淋しさまさる○八重山ふかく○小ざゝ原○里わかぬまでふれる雪○ふりおもる○日すがらすさぶ木がらし○冬たけて○冬ふかみ○軒ばにあるゝ松の風○たづねこむ友○道もとだゑぬ○としはつる○日かず少なふ○年浪はやき○年のくれかた○としの末○のこる一夜○人足はやき○としの市○春のいりぎ○をしめども○行く年の矢○こよひかぎり○いたづらに○我身につもる年月○老いきにけり○わがよはひ○れどろかれぬる○あつめてもかひなき雪○早川のみなわに消ゑし○年ぞくれゆく○いとまなき年のくれ○何ごとをまつとはなしに○今年もけふにつき弓○はかなくゝるゝ年○なげきても○頭にのみつもる雪○ねよとのかね○ふけにけらしも○冬の日のかたぶくまゝに○ゆめごゝちして○埋火は灰となりて○いかに消え



ゆく○ふるのゝ小笹しもをへて○世の事にれもひまぎるゝ○門松めせとひさぐ聲

○いづしか冬もくれぬめり、わがまつ人のれとづれも、かれて恨めし冬のそら。

○はるまつやどのいそぎには、まだきにたつや花ぞめ衣。

○木がらしさむく日はくれて、たかねのまつにわしのなく。

○みゆきもとしもふる里の、かれふの庭をふみしだき、なくや小とりの聲かなし。

○はなの春、月の秋、くるゝもかなしまかはあれど、ゆきのうら、としのはて、今はのけふに及ばめや。

○いつしか冬もつきのかげ、しはすをはりのひかりもうすく、松の下枝にかゝるなり。

○はるまつまどのはながめに、さしつる梅の花、のこる日數にたゞへつゝ、かぞふばかりもさきうひぬ。

○木のくれふきまく木がらしに、のやまはなべてふゆがれて、殘るは峯の松

一木。

○ませの小萩の古かぶに、れくまもふかく冬たけて。

○冬も半のそらすぎて、みゆきふりつむ山ざとは、みやこの人のあとたにて春まつ外のわざもなし。

○きのふとくらしけふとすぎ、ことしもいつかくれぬめり、としとはげにもいひしかな。

○上毛のしもは拂ひても、したやすからぬみづとりの、なくねこほりてくるゝとし。

○ねやもる風のいとどしく、身にしみわたる冬の夜は、ゆめぢさへこそこほりけれ。

○ねやのいたまをもる風の、ほねにとほりてたくぶすま、ゆめなりがたき冬の夜の、まどにさし入る月の影。

○むろの梅がえ一ッ二ッ、花さきいでぬあすは又、なほ三ッ四ッやかずうへん。

○あられたばしり風あれて、としの終のうらとはなりぬ。



○今年も末の松山や、なすこと浪のいたづらに、越え行く身こそかなしけれ。

○かれてのこりし蘆のはも、くちてみぎはふいやましに。

○すさまじさのみまさりゆく、冬くれがたの川ぞひみち。

○春のいろぎもなきやどは、はなもあるじにならひつゝ、梅のはつはなほころびぬ。

○すさまじかりし月かげも、今はゝつかのうらとほく、とがまに似たる光あり。

○師走なかばの夜半のそら、神楽の大皷こゑすみて、志もにとぞろくれとすなり。

○木がらしはいたづらに空にうそむき、あられはむなしく枯くさにさわぐ。

○こととしも末の松山に、老のなみこうせきとめぬ。

○よせてはかへすしらなみの、いとなく暮るゝとしつきや。

○としをゝしむと春まつと、さまざまいろぐいとなみは、いとなきに似てのごけしや。

○けふをなごりとくれてゆく、年のゆくゑやいづこなる、共にぞゆかん吾も

いざ。

○はるにこにゆくとしなみは、よれどもおいすらるゝ。

○をしき日かげはいつしかも、きのふにけふにうつりきて、いまはとしさへくれぬべし。

○としといふ名もけふこそと、をしむにつけてしられけれ。

○くれゆくとしはおとゝしも、こぞもことしもかはらねど、こぞこし人はことしはとはず、きのふみし人けふはなし。

○としの光のかげほうく、梢にかゝる夜半の月。

○くれゆくとしにはかげなきものを、など人の身にのこるらん。

○をしむかひなくくれてゆく、年のみなとは老の波、よせきてかへらぬとこ ろなり。

○たれにまたれてゆくとしぞ、みやこにひなにをしなべて、をしまぬ人はあらじ世に。

## 朝

○あさな〳〵○ともしびしらむ○あけうむる○きりたちわたり○朝戸あくれば○朝づく日○朝日子○ひかりのどかに○わかるゝ雲○しらみうめたる空のいろ○小鳥の聲もきこえて○ほがら〳〵○みねの横雲○あさきよめする○夜をのこす○庭のくれ竹うよめきて○鳥の聲にしらみゆく○かけの聲○天の戸のおしあけがた○杜の梢にさわぐとり○朝風きよく○心地すが〳〵しく○心ゆたかに○みねよりてらす日の影○庭の草木にわく朝つゆ○花やかになく庭つ鳥○柴の戸たゝく村雀○のこれる月の影○ねざめゆかしく○かはたれ時

○森の烏も梢をはなれ、夜はほの〳〵とあけにけり。

○霧のまがひに啼交す、小鳥の聲もおもしろく、つゆけき空は明にけり。

○空は霞にあけうめて、旭匂へる窓の外。

○日の大神はむらさきの、くものとばりをいでまして、世界のやみをことむけぬ。

○とりのなくねにゆめさめて、朝いのつみのまばゆくも、枕をてらす朝日かげ。

○夜はあけにけり朝日はいでぬ、とくつとめずやけふのわざ、一日のつとめはこれあした。

○あしたの風に袂をかへせ、朝の露に裳のすそぬらせ、さらずは夕の嘆ずあらん。

## 春朝 雲之部參照

○かすみわたれる空のいろ○山の端○かすみわたれる○花のつゆふむ○芝生にかをる○あかつきしらぬ○百とりのなく音○けさめづらしく○花のいろ○ゆめもはかなき○うぐひすの初音○かをる梅が香○朝風ゆるく○夢の末とふ梅がゝ○夢の行方のうす雲

○みるほどもなき春の夜の、ゆめのうきはしとだにして、みねにわかるゝ横雲。

○庭のさくらの花ざかり、あさとくおきてみつるかな、よべのあらしはいかにぞと。

○よはのあらしにゆめさめて、あくるもしらであさ戸明けて、見わたす庭は花のゆき。

○ゆめの末とふあめのおと、ねざめおとなふとりのこゑ、ぬれてやけふも花はみむ。

○ひるは人もつとふべき、朝こそゆかめ花のかげ、さかりはけふかあすか山。

○あけぬとつぐるもゝちどり、立ちてみぬてみなれも又、花にこゝろやあこがるゝ。

○花のうてなにおきわたす、つゆのあさ日をふく風に、玉とくだけてちるもよし。

○あしたのつゆの玉しげく、柳のいとにぬきたれて、旭のひかりにかゞやけり。

○かすみはてたる山のはに、はなのひかりもさしそめて、おぼろ〳〵の朝ぼらけ。

○花やいかにとあさがすみ、たちいでゝみればとほやまの、まつの木の間にほのぐ〳〵と、匂へるかすみや初ざくら。

○曉しらぬ朝のまど、人くとうたふうぐひすに、おどろかされてねきにけり。

## 夏朝 涼風之部參照

○わかばのつゆ○すゞ風わたる○はしねして○若かへで○玉かしは○木々の朝風○ふかみどり○ゆめまださめぬ○つゆちりて○このて柏○雨もよひなる○空もくもりて○杉のむらだち○朝げの風○すゞしきかぎり○夏もわすれて○袂すゞしき朝風○朝顔の花よりさきに起きいでゝ○蓮の花の開くおと○秋やきぬると○ひとへの衣○たもとすゞしく○ねぐだれがみ。

○つゆに匂へるあさがほは、かきねにみちてさきにけり。

○かばかりすゞしき朝(あした)より、あつさのうらとなることを、草葉のつゆも知らざらん。

○みどりすゞしく生しげる、さくらの枝をふく風に、花のうらみはあともなし。

○みどりにしげるはゝうばら、つゆふきはらふ朝風に、うらにしられぬ雨ぞふる。



○あしたのうらのなかりせば、いかであつさをしのぐべき、朝こうなつのいのちなれ。

○くもるると見つるうらはれて、あさひまばゆく匂ふなり、けふのあつさやいかならん。

○蚊帳にさし入るありあけの月にうかれてみもはてぬ、ゆめをのせつゝにはのおもに、立ちやすらへば。

○まどに、つるしゝ籠のうちの、ほたるのかげもうすれけり、夜もはやいまはあけぬらむ。

## 秋朝 霧之部參照

○ほの〳〵きらふ○尾花が末のつゆ○志も志ろく○つゆれもく○肌さむく○朝露ふむ○朝霧わけて○淺茅が原の朝露○朝の原○河音すみて○桐の一葉にふく風○庭草におくしも○朝さびしく○河きりたち〳〵に○みねのもみぢに朝日さす○ふきたつ風○こぼれくる雨○ねざめぬとなふ○きりの下道○朝日ほのめく○木末もみぢず。

○ほのうちきりし朝の原に、下をれまさるかるかやの。
○まくづがはらのあさぎりに、ぬれつゝゆけば虫のねの、なほたえ〳〵にのこるなり。
○あしたの原にねくつゆは、月のかつらのつゆなるか。
○あしたのきりをはらひつゝ、草原ゆけば一村萩のつゆふかし。
○朝戸いづればうらさむき、野邊の白つゆふかくして、尾花くづ花さきにけり。
○田中のみちをあさゆけば、虫のねよわるくさむらに、つゆの涙ぞねもげなる。
○こぼるゝつゆをこのごろの、なみだにかりて鈴虫の、あしたの原になほもなく。
○よるのあはれに又うへて、なみだをさうふ秋の野の、あしたさびしき風のねと。
○朝ゆくまかやすぎぬらん、しどろに見ゆる苅かやの。
○ねきいでゝみればあさがほの、さきのこりたるいろあはれ。



## 冬朝 霜之部參照

○葉分けのしも○ふみわけて○前の板ばし○さむ〳〵て○うすらひ○氷とぢて○山もあらはに○枕にさゆる雁の聲○みぞれふりきぬ○枯れふす草○嵐の音○ゆめねざろかす○時雨にあくる○朝戸にあたる玉霰○雪もよひなる○夜のまにつもる雪○けさふる雪○こほりはてたる○明けぬとおもへば

○あさ戸あくればかたをかの、ならのはたわにゆきぞふる。
○かれふすすゝき折ふして、ふすぬのとこにのこる月。
○月のひかりはうすらぎて、野べのかれはに朝風の、ねとさびしくもわたるなり。
○かれのこりたる芝草に、しもしろ〳〵とさゆるなり。
○かすみもきりもへだてなき、しものかれ生の末みにて、あけゆくうらぐさむげなる。
○松のみさをはかくれなき、ゆきのあさげの風さえて。

○山かきくもり雪ふりて、けさのあらしのさむきかも。
○かけゆくこまのひづめのあとに、たまる水さへこほるなり。
○枕べちかきまるまどに、ふぶきのれともきこゆなり、うべこそけさは冷えかへれ。
○こほるなみまにたちぬする、羽れともさむき水とりの、朝なくこゑもさゆるなり。

## 晝 春夏秋冬日之部參照

○青雲の○うら〳〵と○てる日かげ○天づたふ日○たなびくきはみ○はてなき空○天てらす日の影○のどかに匂ふ日のいろ○花にてりうふ日のひかり○あらはに見ゆる○まひるすぐ○午すぎにけり○午にやちかき○天もしづかなる○小鳥なくこゑ○てりわたる○風もしづかなる空のいろ○まどぬして○かたりくらさむ○友まちかねて○光もしづけく○かくれぬいろに○雲井はるかに○雲の波たつ○日影さす南の椽○ふみよむまどに○たれこめて○つとめはげみて○いりもむわざ○久かたの光○うら〳〵かにてら



す日○ひざかり○日ざし○まだ傾かぬ日影○ひあしのどかに○ほどなく暮る〳〵○菅の根の長き日○晝もしづかなる○ひるいの窓○眠り催す○氷うる子の聲
○南の椽に日はさして、にはもしづかなるまひるどき。
○梅の立枝にうぐひすの、聲のどかなるまひるどき。
○南のまどに日はさして、のきばにさわぐむらすゞめ。
○車のれともしげくして、ちまたのちりもたちこみぬ。
○わかばかげさすまどの内に、うつ石のれともものどかなり。
○日影はたかくうらはれて、庭のすもゝの花ざかり。
○草の葉もぼむ夏の日の、あつきさかりのまひる時、車れす子の聲きけば、心ずまづは汗あゆる。
○柳は枝ながくして春風かろく、花はいろふかくして日正に午なり。

## 夕 月、星之部參照

○夕がすみ○入相のかね○くれぬとつぐる○夕じめり○烟たつ里○くれ

うめて○くれがたのうら○大路ゆく人のれとなひ○つゆの夕ぐれ○軒ば
にかへる家鳩○雲間にきらめく星の影○けぶる月影○烟たつ見ゆ○うよ、
ふく風○かへるくも○たうがれ時○ゆふづく日影○夕げたく○月まつ人
○さすや夕日の影あかく○細路斜に日のさして○軒の松風○門河の水れ
と○すみのぼる水の音○つゆれく草○しもむすぶ○篠のさゝ葉にうよぐ
風○かぎやきうむる星の色○人影長き夕日○山おろしの風○かぎうつ聲
○夕ぬる雲○さびしき雨○うらかなし○こゝろぼうく○涙をさうふ○花
の夕つゆ○雁の一つら○稻妻のひかり○落葉の聲
○駄馬のけぶりは夕日に消えて、晩鴉さびしく梢に啼く。
○日影うするゝ八ちきたに、花賣る人の聲ほうる。
○雲間の月の影さえて、虫の音さむしこのふゆべ。
○れもひあまりて何となく、いでゝ詠むる夕まぐれ。
○夕映淡く日はくれて、友よぶ鴉の聲さびし。
○並木の松の三日の月、堤の草の虫の聲、いづれ涙の種ならぬ。
○知らぬ山路の夕まぐれ、二聲とりのなきわたる。



○牛ひきかへる里の子が、あとふき送る夕あらし、きらめく星のかげすごく、
やがても來たる夜のいろに、山は早くもつゝまれぬ。
○松の並木をふきすぎて、青田におつる夕風に、とびたつ鷺の一羽二羽。
○野寺の塔を横に見て、杉の下道わが行けば、夕映殘る大空に、はや明星のか
げ見えて、くれゆく森の梢より、ふくろふの聲きこゆなり。
○牛羊下り來る崎嶇の道、雀鴉むらがりなく山麓の杜。
○けふもはかなくくれなゐの、夕日は窓にかげ落ちて、梢にさわぐむらがらす。
○めもはるゝ〳〵となながめやる、そなたのそらは白雲の、早くれうむる山のい
ろ。

## 春夕

櫻、春月之部參照

○花ふぶき○くれゆくそら○こぼるゝ花○かすみもふかく○夕がすみ○
くれはつる○かへる花見の一むれ○さくらに醉ひてかへる人○かろき瓢
○たもとゆたかにふく風○夕日に匂ふ○春もとまらぬ夕風○夕日をのせ
て匂ふつゝじ○柳にそゝぐ雨の音○この夕かげに○蛙なく聲○小田の蛙

の夕ぐれの聲○くれなばなげの花の下かげ○かすむ野山○ねぼろにいづる月影○くるゝわすれて○行きくるゝもよしや○花ふくあらし○五百重山○山たかみ○けぶる柳○れつる椿○小鳥の聲々○をしむ夕○つれなき夕○梅の下風○うこともなく○山ぎはかけて○むかしこひしく

○花のこかげの鐘樓に、吹雪をちらす入相。

○花の光にくれかねて、夕ぐれ知らぬ花の山。

○瓢に花を折りそへて、かへる山路の春のくれ。

○落花吹きまく夕くれの、風にたくひて山寺の、鐘のね凄く聞ゆなり。

○小田の面の蓮華草、堤に萠ゆるつくゝし、つみはてぬまに日はくれて、霞に匂ふ月のかげ。

○いづこの花の下かげに、けふの一日をくらしけん、ちまたをかへる一むれの、袂をれくるねぼろ月。

○物れもひつゝ木の下に、ひとりし立てば袖の上に、花の夕つゆこぼれきぬ。

○春ともしらぬ柴の戸に、たえゝかゝる玉水の、れと淋しくもくるゝ日や。



○かすみにくるゝ春の日の、夕べしづかにちるさくら。

○山寂々と日はくれて、とりがねにちる花吹雪、こし道さへもわかぬまで。

## 夏夕 夏月、納涼之部參照

○涼しの風○そでふきかへす○風をむかへて○卯の花垣○小野の細道○かやりたくけむり○ほたるとぶ見ゆ○河音きよく○ひるのあつさ○白妙の衣の袖○はら〳〵とちる夕つゆ○月かと見ゆる卯花○ならの若立○風ふきわたる○夏わすらるゝ○雲間になくや郭公○かをる橘○夕やみ○鵜舟さす

○磯うつなみの涼しきに、いざよふ月もいでにけり。

○花たちばなにふく風は、いづれのくものかへしぞも。

○むかしゆかしき夕ぐれに、花たちばなも、かをり來て、なくや雲間のほとゝぎす。

○杉の下道かげくらし、梢の蟬の一聲に、やがてくれゆく夕嵐。

○夕日は西に影れちて、東に黃なり雲の峰。

○青葉のつゆの亂れちる、木の下やみの夕まぐれ。
○茅が軒端の蚊遣火を、てらすも涼し夕日影。

## 秋夕

秋月、秋風、秋里、虫之部參照

○さらぬだに○秋ともいへば○ながめすてゝも○いづこもわれなじ○のこる日影○なにとなくものさびしく○われもひわび○こゝろにあまる○風寂莫○雨蕭條○いとゞつゆけき○ならしばの○むら雨○松ふく風○わが身ひとつの○なぐさめかねつ○宿ごとの○この里のみの○いろとしもなく○涙あらそふ○袖ぬらす○とりいでゝなにわれもふとはなけれども○袖ふく風○うらさびし○三日月のかげ○人やはつらき○ゆふべ身にしむ○たゞならぬ

○森の梢に三日月の、心細くもいでにけり。
○吹きたつ風につゆちりて、夕さびしく秋萩の、花ちりまがふ宮城野。
○秋の夕は何故と、わかぬものから。うらかなし。
○心なき身も何となく、あはれしられて袖ぬらす、つゆ深草の夕まぐれ。



○浮世をよその法の師も、秋にはあへずぬらす袖。
○人のとはぬもことわりや、馴れしわれさへつく〳〵と、眺めわびたる秋のくれ。
○秋をかこちてなく虫の、こゑは色にはいでねども、うきは身にしむ夕まぐれ。
○夕ぐれさむき秋風に、眞萩かつちる片野原。
○柴の戸てらす夕日影、庭の千草に露見えて、ほのめく虫の聲すなり。
○紅葉かざやく片岡の杜、夕日匂へる夕まぐれ、たがとぶらひたる此車。

## 冬夕

枯木、冬月、雪、落葉之部參照

○木の葉ふりしく○もみぢ〳〵る○山鳩のなく音もすごく○いかなる風○道たえて○野邊の夕風○身にしむ風○吹きたつ山風○夕日さびしく○しもはらふ○よわる虫のね○風はやみ○小ざゝふく風○夕狩の音○入日の岡○爐によりて○ほだの火見ゆる森かげのやど○夕山ふゞき○雪にやならむ○すとうぶの烟にくもる夕月○ゆきになりゆく○月影すごく○風ふ

きあれて○かきくもり○時雨ふりきぬ○うづみびかきおこして○まどぬして○つねよりも○友はとひきぬ○あつふすまかさねても○ゆきげのそらと○戸にあらく○まどうつあられ○夕日の影もうすれて○森のあなたに

○人目たにたる山里の、夕さびしきゆきもよひ、たれに語らんこのこゝろ。
○夕のくものさにかへり、又もゆきげのうらのいろ。
○庭の小笹におとたてゝ、夕さびしくふるあられ、先づ心こりくだけゝれ。
○河なみたかくれとさにて、網代のほかげみにうめぬ。
○岸の柳の枯枝に、三日月すごくかげすみて、さゆる川原に千どりなく。
○木のまに見ゆる夕月も、ちるばかりなる風のおと。
○あしのかれはに風さにて、夕さびしきなにはがた。
○落葉ふきまく夕風に、時雨もさむくふりいでぬ。

## 夜
春夏秋冬之夜之部參照

○星月夜○ゆふ月夜○卯花月夜○おぼろ月夜○雪つもる夜○風吹きすさぶ夜○闇のうつゝ○まどろまむ○ねぐらにいりぐ鳥の聲○夕ばにのいろ○さよなか○さよはふくとも○夜半のあらし○わびしき夜ごろ○ふけゆくうら○夜のふすま○夜もすがら○夜ぶかき道○ゆめはいづこをかよふらむ○なくふくろふの聲○てる星のかげ○夜ぎりとざして○ひぢまくらにしてゆめおどろかす夜半のかねの○まどうつ落葉○河の水おと○ねざめがちなる○犬のもろこゑ○ものうきな聲さむげなり○瓦斯燈きにてよひのまどぬ○ぬば玉の闇○あやなきやみ○夕べを包むよるの色○色なき色につゝまれて○こにくれて○山路の末○時うつり○かへるさ○電燈すごくふくる夜

○ともしびの光うすれて、落葉ふく風はださむきま夜中。
○松の梢をふく夜半の風、苔路のつゆや拂ふらむ。
○夜はやう〳〵にふけゆきて、ほうるともしび影くらし。
○黒塀つゞく屋敷町、ふけて小ぐらき瓦斯燈。
○大路ゆきかふ車のおとも、いつしか今はしづまりて。
○あはれ數ふる時の鼓、後夜のかねの音暗きをそへて。

○夕をつぐる鐘の音に、火かげきらめく八衢の、たかき樓閣低き家、はしなく來るよるのいろ。

○五層樓上の夕日影、ひかりまばゆくきらめくほど、ちまたはいつかくれりめて、こゝにかしこにともしびの、花三つ五つさきいでぬ。

○れのが家路にいそぐ人、夜のつとめに赴く人、西に東にゆきかひて、十字のちまたにぎはしく、飛ぶ人力車、はしる馬車。

○松風すごくふけゆく山路、伴ふものはたゞ月ひとつ。

○ねやのともしびかつまたゝきて、犬の遠吠聲すごし。

○誰にか語らむ此時の情、またゝく燈火、ひまもるあらし、枕にれちくる遠寺のかね。

○月ぞながるゝ天の川、くもの波たつ夜半のうら。

## 春夜

春月、落花之部參照

○れぼろなる○くもり夜○いつはあれど○花もひとつにかすみつゝ○むかしの人の忍ばれて○影ふけて○にほふ月影○かすみてのこる月の影○むら雲○うすぐも○細江の浪のかすむ夜○はれやらぬ心○物しめやかに○れぼろれぼろにかすむうら○春やむかし○照りもせず曇りもはてぬ○木のまもる○梅が香かをる夜半の風○ながめても○柳にかすむ○櫻ちる○花の雫○水上かすむ○ふるさとしのぶ○かすみの袖○花よりれくに入る月○あめふる夜半○しめやかにふる○れもかげみゆる○ひるみし花○花見にくれて○しなさだめせむ○あはれをそへて○なさけをつげて。

○幾夜うかれて下蔭に、あけやすき夜をかこつらむ。

○かすむ入江のみをつくし、立てるやいづこ春の夜。

○花をあるじのかり枕、はかなく結ぶうたゝねも、花より外のゆめぞなき。

○花は月をまちて光をまし、月は花に入りて匂を加ふ、月と花とはれもぶどち。

○かすみに匂ふ月影に、花の光もてりうひて、木蔭に暗き朧夜の、袂をなぶる春の風。

○更けてはさらに月影の、れぼろに見ゆる庭の面、ちりしく花をふみわけて、木立の下にたゞずめばそこともなき花の香の、夜風にうよと匂ふなり。

○雨もつ空に燈の、うつりて見ゆる花のかげ、つゆ重げなる枝々を、拂ふも床し夜半の風。

○野山は花にうづもれて、うらも匂へる春の夜。

○けふもいつしかくれぬとて、月にぞ人はかへるなる、花のあるじを知らねばや。

○花は簾にちりて蝶の夢を問ひ、月は窓に入りて歌人の句をたづぬ。

○朧月夜にうかれつゝ、花の木蔭にたゝずめば、月の光かとばかりに、袖にちりくるやまざくら。

○盃中の月を飲まむとすれば、落花狼藉春さむし。

○空ゆく月と咲く花の、影をうつしてくむからに、月と花とに醉ひにけり。

○あたら櫻の影くれて、月になる夜の木の本に、一夜假寐の草枕、ゆめもむすばでいざゝらば、ながめあかさむ、よもすがら。

○ひるみし花の下にきて、朧月夜にたゝずめば、身はいつしかも久方の、月の都に來にけらし、只白雲に包まれぬ。

○春の夜ふかくふく風に、月のかげちる花吹雪。



○よしあけぬともなほざりに、立ち去るべしや花の蔭、てらすも匂ふ月の影。

○花ちる庭に月ふけて、風をさまりぬ夜もすがら、いざれりたちてながめみむ。

○磯うつ浪の聲さへも、ふかきかすみにむせびつゝ、沖つしまやまほのぐ〳〵と、てらすも匂ふ月影に、ながめも迷ふ春の夜。

## 夏夜 夏月、納涼之部參照

○夕やみに○よな〳〵○かたぶく月の○ゆめ路はかなき○水鷄なくなり○志のびねになく郭公○空にのこれる月の影○横雲に○目をさましつゝし○橘かをる○むかしを志のぶ○夜半の手枕○うたゝねに○夜はふけぬらし○くるればやがて志らむ夜の○かやり火消えて○庭しろく月のてる夜○わかばくまなす月影○ゆめもむすばで○河風ずゝし○よぶかき空に○この下やみにとぶ螢○卯花垣に月さして○軒ばの竹にそよぐ風○ふすかとすれば○あけやすく○志らみそめて○あくるわびしき○よひやみに○ふす程もなく明くるよ○みじかよ○ねぬにあけゆく○夕立のあとすゞしくもてる月の、かげも流るゝいさゝ川。

○浦島が子の箱なれや、はかなくあくる夏の夜の、かたみに殘る窓の月。
○をしみもあえぬ山の端に、月をのこして夜はあけぬ。
○庭しろたへにすむかげの、霜にもまがふ夏の月。
○ほたるたづねて里の子の、河うひみちをたどりゆく、もすそを輕く吹き返し、汀にさわぐあしの風。
○なくほとゝぎす一こゑに、やがてもあくるなつの空。
○夏の夜ふけて、長柄川、かへる鵜舟の棹のおとに、しのびてかよふ秋の風。
○舟あそびせし夕川の、糸竹の聲しづまりて、すゞしくふくる月の影。
○いさごの月の影ふけて、すゞみにつどひし人かずも、きえてあとなき波の音。
○軒ばの竹の風の聲、うたゝすゞしく夜はふけぬ。
○池をめぐりてよもすがら、すゞしき風をやどしつゝ、袂につゝむ秋のいろ。
○はすのうきばにかげおちて、月をまろばすつゆの玉。
○月はのきばにかげすみて、いよすをはらふ風のおと。
○夕顔棚の下すゞみ、かたりつくして夜もふけぬ。



○かやりの烟うちなびき、むばしはくもる月の影。
○なく虫のねを吹き入れて、風もすゞしきわたどのや、月のかげくむ泉どの。

## 秋夜
秋月、秋風之部參照

○物おもふ○月なき夜○ひとりねの床○涙もうひて○つゆけき床○おきいでゝ○ものかなし○猶あけやらぬ○きりぐ〳〵すなく○まどうつあめにかりの羽風○われのみか○つゆおきうふる○つれ〴〵と○ねざめがちなる○おきぬながら○身にしむばかり○やみをのこして入る月○猶うらめしき○八街の片側月夜影ふかく○露にかたぶく月のかげ○西風吹きうごかす故山の心○ふるあめさむき夜半の窓○銀河のいろのかつ冴えて○空しき庭に月落ちて○夜半に烏のいたくなく○きぬたのおと○燈火の影なつかしくなる○枕の下に虫なきて○寐覺かなしき雨そゝぎ○こほろぎの○長月のきよき月夜○いつのまに○虫のねよわる○長きよ○殘りの星のかげ消えて、あくるを惜むこほろぎの、すだく聲さへあはれ也。

○庭の落葉は窓をうち、中空の月は憂をてらす。
○月に婆娑たり、疊の上に松の影、風に颯々たり夜半の楢の聲。
○雨はさむし盧山の秋、燈はくらし草庵の中。
○秋はてがたの風さえて、夜半の枕にひゞくなり。
○つゆの玉ちる萩の葉に、風の音せぬ秋もあらばこそ、涙の外の月やみむ。
○うつや衣のせきもりは、ねられぬまゝに月やみる。
○月のよごろは宵々に、野ゆき里ゆき、ぬば玉の夢路をたどるひまもなし。
○れしねいろづくきのふけふ、ねられぬいほの夜さむかな。
○草葉にすだく虫のねも、月のあはれは知りぬとや。
○志もにかれゆく虫の音きけば、あはれもふかき窓の月。
○遠ちの里の、小夜砧、草ばにすだくむしのねの聲、夜さむの床にれとづれて、いつれ涙のたねならぬ。
○小鹿の聲もうらぶれて、さむき夕の秋風に、たもとにやどるつゆの月。
○目にはさやかにみえずとは誰かいひけん、秋の夜のあはれはすめる、月影に又なくむし、いちじるくしらるゝ物を。



○ころは秋の夜月すみて、汀のなみも銀の、花ちらす上に舟うけて。
○ふけてはれゆく月の影、のきばの山の松風も、冴えて一入身にはしむ。
○明くるひかりもわかぬまで、月影きよき秋の夜。
○淺茅が庭の月ふけて、霜夜をわぶるむしの聲。
○かべのこほろぎ聲絶にて、松にふけゆく月影に、つゆふきはらふ夜半の風。
○ねざめてきけばながき夜に、れもひはつきぬ露の床、うちかなしくもなくむしの。

## 冬夜 冬月、木枯、雪之部參照

○あらしふく○しもがれの○むら時雨○さむしろに○さえてもいづる夜半の月○芝生におけるしものいろ○夜をへつゝ○あけ近き○窓うつあらし○山おろしの風○ちまたのしもに月ふけて○水とりの上毛の霜もこほる夜○ふけてはさむき○ふきあるゝ風○風わたる浦のみなと○ゆめもこほる○かれし柳○落葉ふく風○庭はらふ風○こほる冬田○小夜風さむくあし間の月○月くらき○さゝの葉に○ゆきふきまぜて○われひとりね

む○うきたつ雲に風うひて○板まより○一しきり○ねられぬ床に○かれ野をてらす○ちまたゆく人の聲○ほだの火○ふくるも知らぬ○唯埋火の友として○暖かに語るすとうぶのもと

○木枯はのきばにあれて、ゆめさへも氷る夜半。

○河原の千どりうらぶれて、さほ風さむし冬の月。

○一だいのこる人力に、てる月さむし柳かげ。

○更けゆく月の影さびて、瓦のしもこ雪とれたく。

○ふけゆく月の影さむみ、夜風にひゞくかねの音は、いづこの寺のごやならむ。

○落葉の枝に月すみて、人かげ長しまきもの道。

○犬の遠吠聲すみて、按摩の笛もかすかなり。

○風は劍の如く肌を刺し、日は棺にかゝりて鎌に似たり。

○枕におつる松の聲、夜さむを風にいましめて。

○あられみだれて霜こほり、冬の夜さむくなりにけり。

○日はいつしかもくれはてゝ、五のかねの聲すなり、今ぞ夜ながき限りなる。



○夜半の衣手さえ〳〵て、はつ雪しろき岡のべの松に嵐の聲すなり。

○うきねわびしき水とりの、上毛のしもこさゆる夜に、ねざめくるしきものおもひ。

○ちまたのしもに月ふけて、ものうるれきな聲細く、夜半のあらしのすさぶなり。

○まどうつあられ聲さむく、夜半のあらしのさわ〳〵て、庭の落葉をふきしまく。

## 曉、曙 （暁月、霧、星之部參照）

○あかとき○あかつきれき○かねのこゑ○志のゝめ○天の戸のれしあけがた○曉告ぐる庭とりのこゑ○ゆめさむる○あけりめて○曉つく夜○ほがら〳〵に○のこれる月○れきいでゝ○あけの明星○ともしびしらむ○ぬば玉のあかつきやみ○あしたの袖○月志づかなる柴の戸○みねの朝日○朝ねがみ○あさげの烟○またふしなれぬあしのや○ねざめさびしくあけるうら○朝戸出○松の葉青き朝ぼらけ○あしたもむなしきわが心○八聲

のとり○あけてとだゆるゆめのうきはし○とよさかのぼる○小とりなく
○峰とほき有明の月○あけがらす○あけぬと告ぐる鳥
○細谷川の水音も、松のあらしも月かげも、暁がたぞすみわたる。
○なくは空音か鶏の、逢坂山は静かにて、また峯たかく月のすむ。
○月明かに風はれもむろに、長汀十里松に聲なく、暁浪の音かすかなり。
○志づけさ破る暁の、鳥の聲、鐘の響、月は西山に影かたむきて。
○枕にひゞく鐘の聲、峯にわかるゝ横雲は、見はてぬゆめの行方かも。
○暁つぐる庭つ鳥、かけの八聲の羽ばたきに、ちまたのちりぞ立ちうむる。
○心苦しき葛城の、夜半の契もしのゝめの、明け行空ぞうらめしき。
○鶏はしばなく茅屋の月、人の跡あり橋の上の霜。
○殘星數點雁は塞をよこぎりて亂れ、長笛一聲人は樓に倚りて憂ふ。
○芝生にれつる花のつゆ、かをるあけぼの。
れしあけがたにながむれば。
○よのまの花のつゆれちて、芝生にかをるあけぼの。
○雲もかすみも花のいろに、匂ひてあくるあけぼのゝ、空にうするゝ月の影。



○花見しゆめのあとさだにて、枕にちかきとりのこゑ。
○かすみにあくる遠山の、かねのひゞきの末きえて、高嶺の松に殘る月。
○有明方の志づかなる、月にとむかふ花の下、心も志らぬもゝちどり。
○袂にさわぐ秋風の、ふけゆくまゝに長月の、有明さむく月もいでぬ。
○庭のをすゝきうちけぶり、きりまだはれぬあかつきに。
○月はくも間にのこれども、あくるにはやきなつの夜の、あかときつぐるとりのこゑ。
○影をさやけみふくる迄、月にうたひし秋のよの、うらはいつしかゝきくもり、あかつきあめとなりにけり。
○しもしろ〳〵とれきそめて、あかつきさむき冬がれの、芝生に月の影のこる。
○うすぎりとざすかたをかの、もりの紅葉のいろさへも、ほのかに見ゆるあかつきの、秋のながめぞあはれなる。
○かのすゝきばなく島山の、松の下枝に月れちて、霜夜にさゆるかねの音。
○置く霜しろきやちまたの、板屋の月に犬のこゑ、夜はあけちかくなりにけ

り。
○河わとばかりすみはてゝ、きりにとぢたるあかつきの、加茂川つゞみわけ行けば。
○枕にかをる梅が香の、をすのひまもるあかつきの、春のふしどぞのどかなる。
○とりもねぐらにさえづりて、ほしかげのこるあかつきの。
○わきよとつぐる山でらの、あかつきのかねひゞくなり。
○冬がれまさるわがにはに、あかつき志ものいろさむし。
○風にわちばのさわぐこゑ、枕にひゞくかねのわと。

## 天

○あまのはら○天つみそら○天の八ちまた○はてもなし○たかまのはら
○くも井はるかに○ふりさけ見れば○天のいは戸○神代のまゝの大ぞら
○たかしるや○うら〳〵と○たなびくきはみ○白雲の○むかぶすかぎり
○天つたふ日○青ぐものそらきはみなく○天しづかなる○むなしきそら



○天のうきはし
○月日のちまた星の宿、行きめぐりつゝ天の原、おのづからなる道はあり。
○いづこをはてとしらくもの、なみたちつゞく天の原。
○天地のむだ限りなく、常にかはらぬ空の色、君が御代にぞたぐふべき。
○とよさかのぼる日の影を、仰げばひろき天の原、かぎりしられぬながめかな。
○雲のとばりを風吹き拂ひ、かゞやき出る日の御影、はてなくてらす天の原。
○雲の波は、月の船を漂す渺茫萬里の空の海、風の聲は、星の林にとゞまる浩々千里の天の原。
○幾代かはらぬ天の原、神の御代より今日までも、ひとつみどりにかすみつゝ。
○雲は迷ひ風はすさぶ、注々として限りなく、蒼々として千古同じ。
○棚引く雲は仙人（やまひと）のかへす袖かと疑はれ、匂ふ霞は棚機女（たなばたつめ）の袂の香かとあやしまる。

# 日

○てる日○日のうら〳〵○日の光○あさつく日○天てらす日の神○とよさかのぼる○あかつきしるき空○天つ日かげ○朝日子○朝ひでり○うらにみつ○光な〳〵めに○匂ひいでたる○天照します○あかねさしいづるひかり○夕山のはに○日の大御神○ひかりを四方にわかちつ〳〵○うすき日かげ○日の光はなやかに○いざよふ日影○夕づく日○うすづく日○いろくれなゐに○ひんがしのうらはなやかに○いつともわかず○ひかりなゝめに○めぐみあまねく○日ざかり○仰がぬ人はあらざらん○土さへさくる日

○天の岩戸をいでし日の、かはらぬ光明に、世界をなべて〳〵らすなり。

○世界萬國わしなべて、春の光や仰ぐらむ、我が日の本の日の光。

○日嗣の位たかしるや、天のみかげ日のみかげ、仰きみるさへかしこしや。

○やゝ明けうむる東(ひんがし)の、青海原の波わけて、ほのぐ〳〵いづる旭日かげ。

○あふがぬ人やなかるらむ、空明けくてりわたる、日の大神のみめぐみを。



○庭のさくらにてりうひて、匂ひこぼるゝ朝日影。

○ひかりくまなき大みかげ、いたらぬくまもなかりけり。

## 日蝕

○くらみゆく○空くれて○まだひるなるを○つかのまに○光うすれて○くもだになきを○かしこむ人もあるならむ○ことわり志らぬ○いぶかしみ○とぶとりも迷ひやすらむ○夜のけしき○きにてさびしく○やみに沈みて

○れなじ御空を渡る日に、月に重(かさ)なる理(ことわり)も御代の光にあらはれぬ。

○雲なき空に日の影の、かぎろひ行けば飛ふ鳥の、闇に迷ひてなく聲も、夜のけしきにことならず。

○まだまひるなる日のかげの、たちまち沈むうらのいろ。

○人の心のはたらきも、このありさまに似たりけり、誠の光は消ねども、迷ひの影にかさなれば、みる〳〵やがてくらむなり。

○日はくれずしてくれうむる、御空のいろのすさまじさ。

○天津日影に月影の、かさなるといふことわりも、明らけき世の光に見ゐて。
○たちまちよるのいろ見えて、星のかげさへあらはれぬ。

## 月 春秋夜之部參照

○月のみふね○くるゝまに○夕月夜○月のかげ○千里をてらす○くまなくてらす○雲がくれにし○ひかりしづけく○皎々として○玉兎はしる○嫦娥のよそほひ○天の原ふりさけみれば○山のはに入る○木立にくもるだてぬひかり
○楫にかゝる○まどかなる○三五の月のひかりきよく○ながめやる○へ
○夜毎にいづる月影は、きことをてらす自然のともしひ。
○あふげは空に月きよし、こよひのかげはいかにぞと、訪ふ人もがな吾が庵に。
○千とせの秋をみかは水、くもらぬ月の影すみて。
○鳥はやどる庭の松、僧は敲く柴の門。
○今宵の月を陸奥の、千賀の浦波とほきよの、あはれを袖にやどすかな。



○月影きよし朝日山、夜たゞめでつゝ山の名の、日いづるまでも遊びてむ。
○天の川風ふきたちて、雲のうき波たちさわぎ、月の御舟ぞはしりゆく。
○團々として、海嶋をはなれ、冉々として、雲衢をいづ。
○さゆるしも夜の天の戸を、おしあけ方の雲間より、神代の月の影きよく、杜の木末をもりくなり。
○月の光は九重も、賤が伏家もへだてぬを。
○心々にたのしくも、又かなしくもすめるかげ。
○月に心は須磨の浦、夜鹽を運ふ海士少女。
○月かげやどる草のつゆ、夕風さむくふくなべに、間なく隙なく玉とちる。
○すみ渡るよの月の光は、庭の小草のつゆをばみながら、てらせども、軒ばの松の色には夜を包めり。
○罪なくて見る影ながら、なぐさめかねつ配所の月。
○楫はなれて月影は、たかねのくもに入りうめぬ。
○氷輪早瀬にたばしりて、玉兎きそひて潮にをどる。
○清光夜水をてらしては、金波ながれて細鱗ををどる。

○戎衣の袖に風冴えて、鞘のしも問ふ月のかげ。
○くまなくてらす月影に、あらはれわたる世の中の、人のみやびのありなしも。
○雲ははれてくまる月色千里の光、風は收まりて半夜萬籟の音なし。
○千里をてらす月のいろ、故郷のうらやいかならむ。
○玉江の水にかげうちて、すみこうわたれつきの影。

## 月蝕

○まどかにてらす月影を○いかなるくもにかくされて○見しやうれとも
わかぬまに○やみぢにかへす○たにぬ光を仰げとも○ほしのみてれる○
またあらて○かくるためし○夜はふけて○さよふけて○あやしきまでに
○れぼつかなくも
○まがしき事とかしこみし、古の人に今の世の、理あかき月影の、かくる例を
きかせばや。
○誠の道は末遂に、くらみはつべきものならず、蝕する月をみてもしれ。



○今宵としらで大かたの、望の夕と見む人は、今消えて行く影を見て、いかにあやしとおもふらむ。
○くまなくてらす月かげの、たゞ時の間にくらみつゝ、世はとこやみとなりはてぬ。
○うらゆく雲もいつしかと、きえて隈なき月かげの、光はやがてみるまゝに、かげのきえゆくすさまじさ。
○雲やかくすと仰ぎても、其影だにも見えぬ夜に、なほしも月のくらむらむ。
○まだ中空にありながら、なにをへだてに月影の、雲の外にはひろむらむ。
○ことわり知らぬうのかみの、人の心にはかりては、げにれうしとれもひけむ、たちまち消ゆる月影の、ゆくへいづこと知られねば。

## 春月

梅、柳、春夜之部參照

○れぼろなる○かすみのまより○ふけゆくそら○むら雲を○あはれをうへて○かすみしく○むかしに似たる○いつはあれど○むかしこひしき月影の○わりなくかすむ○かすみを分けて○影ふけて○れもかげかすむ○

有あけがたに○花ぐもりして○かげなほさむし○おぼろづくよ○そことも わかぬ○うめの匂ひに○ほのかにも○けぶりの外に○かすみの袖○春の一時○花にてる○あやなくかすむ○いでながら○てりもせずくもりもはてず○かすみへだつる○月の匂ひ○はなのあるしか○かすむ雲井に○かすみの底に○ものれもふころ○雪げの水もにごらじを○西の大寺月すみて、光いやまさる七大寺、御法の花も八重櫻、こゝも昔の名殘とて。

○うらはまだ霞みもやらず、風さえて雪げにくもる春の夜の、月すさまじき夕かな。

○くもりもあへずてりもせぬ、春の夕のおぼろ月、げにしくものなかりける。

○花の色香も深翠、かすみこめたる月影に、かげもいろかもほのぐ〳〵と。

○かすまぬ浪もかすみつゝ、うつるもくもるおぼろ夜に、月しづかなる難波潟。

○ふる里急く雁金も、霞に咽ぶ聲すなり、おぼろ月夜のあけがたに。



○霞をもるゝ月影の、花の林にさし入れば、花はさながら萬顆の珠もて、作れる雲にことならず。

○山のあなたもかすむらむ、くもりていでし春の月。

○衛士のたく火の烟さへ、かすみ添へたる九重の、御垣の内の春の月。

○山吹の花ちる川に影みだれて、おぼろにうつる月のかげ。

○くもりもはてぬ朧夜の、月こそ春の光なれ。

○おくつゆさへも香に匂ふ、花の林の春の月。

○かすめる月の影にこそ、春の光はみだれ渡れ。

○野邊に雲雀の聲おちて、山よりのぼる月のかげ。

○浦の松原くれそめて、浪路けぶるや春の月。

○まゝの入江のおぼろ月、昔の春の忍ばれて。

○薄氷とくるいさら川、浪にたぐよふおぼろ月。

○水田にうつる春の月、影をくだきてとぶ蛙。

○濱邊の浪の音はして、かすみにしづむ春の月。

○誰家の横笛ぞ春風にまかする、朗々として艶なり花間の月影。

○曇りもはてぬ春のよは、繪島が磯の浪の上に、うつすともなき月の影。
○月のかつらのはなぐもり、あくとしもなく明けにけり。
○かすみはてたる春の月、雲はたえまも待たるゝに。

## 夏月 水鷄、納涼、螢之部參照

○みじか夜の月○すゞしさに○夏のほかなる○あけやすき○まちいでゝ
○山のはの○ながるゝ月○中ぞらに○すゞしくてる○うたゝね○影もる
○秋ちかき○天の戸○板井の清水○庭しろたへに○ならの若葉○つゆち
りて○まさごぢてらす○みてをあかさむ○行舟の○葉山のつゆに○影す
みて○夕すゞみ○木の下やみ○なつ草のつゆ○いづればあくる○うこき
よみ○すみのぼる○ふけてすゞしき○うすきたもとにやどる月○夏をよ
うなる月のいろ○冬にしられぬ氷○夏の夜のしも○はしゐにいでゝ○れ
なじうらとも
○雨の名殘の庭たづみ、やゝはれて行く松かげの、月をうかぶるすゞしさや。
○わかばの露は雨に似て、空ゆく月はくまもなし。



○蓮のつゆをふく風に、涼しさこぼす夏の月。
○月はさしつゝ水鷄は叩く、世にれもしろき竹の門。
○氷うるやの玉すだれ、ゆらぐもうつる月のかげ。
○庭白妙に見ゆるまで、ひかりくまなき月のかげ。
○葉山のつゆに影ふけて、ひかりすゞしき夏のつき。
○秋かとみゆる月の影、青葉すゞしき片岡の、梢はなれてすみのぼる。
○わかばをぐらき窓の外を、夜な〳〵てらす月影に、庭の砂路しもかとも、見
ねてすゞしき月のかげ。
○月まつうらのすゞしくも、わたる夜風の聲すみて、楢のわか立うよぐなり。
○ほかげながるゝ門川に、水鷄なく夜のうすづくよ。
○むすぶ清水にかげおちて、すゞしくすめる月のいろ。
○袖しが浦にさよふけて、ひかりすゞしき夏の夜の、月にてりうふなみのい
ろ。
○夕立すぐるかゞみ葉を、みがきそへたる月の影。
○かどの板井にてる月の、ひかりながれて夏の夜の、夏をよそなるすゞしさ。

## 秋月　悲哀、紅葉、鹿之部參照

○みねよりいづる○八十島かけて○きよきひかり○くまなくすめる○月やどる○月よみ男○月すむ夜半の○よひ〳〵ごとに○とわたる月○月にむかしの○月夜よし○浦より遠に○つゆもくもらぬ○よもぎふの月○うらゆく月○月のみや人○うちむかふ○月の志も○月の下艸○月のかつらを○月の行方○もみぢして○もりの木の間○木の間もりくる○光さやかに○峯こしの月○やゝふけて○かぎみなるらん○千艸をてらす○まつにふけゆく○ちりもくもらぬ○入方ちかき○なみだにくもる○枕さだめず○影ほのかなる○夕つゆ匂ふ○もなかの月○西になるかげ○あけがた近き○いくめぐり○ねやの戸近く

○秋も半のけふの空、月もこゝろやいうぐらむ。

○たぐひなき名をもち月の、こよひとて夕の空をいそぐらむ。

○うらあけらけくすむ月に、軒のしのぶのつゆみだて。

○月のさかりはよひ〳〵に、いをしもねざば敷妙の、枕にちりやつもるらむ。



○空にたゞよふ浮雲を、はらひはてなる秋風を、松にのこして見る月。

○嵐ふけ行秋の夜の、みそらにすめる月の影。

○心もすめる水の面に、てる月なみを數ふれば、今宵ぞ秋の最中なる。

○團月一輪うらにかゝれり、清光いづれの處にか秋興なからむ。

○三五夜中月影清し、二千里外の故人やいかに。

○桂花さく三五の秋、さやけき影にあこがれて、庭の木かげにやすらへば。

○つゆながら苅る秋草の、葉ごとにやどる月のかげ。

○雨とふる枝の萩の露、袖にくだくる月のかげ。

○すてゝ年へし宿すらも、とり出でらるゝ月夜かな。

○千里の空の雲晴れて、もろこし迄もゆく心、うたへや唄へ夜もすがら、三五夜中の新月色、二千里外の故人の心。

○拭ふが如き秋の空、月はかぎやく清光萬里、渺々としてきはみなき、天の川原のはるけさよ。

○妻戸を押せば月のかげ、たゝみにうつす松の枝。

○つゆの尾花をわけゆけば、袖にこぼるゝ月のかげ。

○池をめぐりて夜もすがら、月にうかるゝ秋の夜。
○かなしきものゝうれしきは、月を片しく旅まくら。
○濱の松風しづまりて、影さだまれる波の月。
○萩の錦をしとねにて、嵯峨野の月の旅まくら。
○琴のひゞき虫のねも、昔ぼねにてなつかしき、嵯峨野の奥の秋の月。

## 冬月 木枯、落葉、雪之部參照

○冬さむみ○あらしふく○しぐれにくもる○しもにさゆく○さゆこほる○まやの軒ばに○むらしぐれ○さゆくれて○木葉ちる○しもよのまくら○衣手さむく○やどるもこほる○光さゆく○ちりはてゝ○木のまあらはに○かれのにさゆる○初しもかけて○れちたる月○むらくも○川音さえて○さむしろに○霜にてる○冬かれの森○氷の下に○すはの海の氷のはし○つらゝの床○よどみにむすぶ○ながれぬ見れば○垂氷してけり○鴉のかよひぢ○さすさほにくだくるかげ○くまむとすれば○あらしを○いく重か氷る○雲の浪間に氷る○松ふくあらしさえ〳〵て○雪さむみ○いく重か氷る○雲の浪間に氷る○松ふくあらしさえ〳〵て○雪



の光にみがゝれて○影すごし。
○さえかへりたる大空は、又ふる雪にくもりつゝ、氷りていでし月のいろ。
○氷りはてたる野中の水に、やどれる月のかげしろし。
○葉もなき枝にかゝりけり、しもよりしろき冬の月。
○氷るしも夜の枯尾花、招くもさむし野邊の月。
○しも夜をつぐる鐘のねも、さえこそわたれ月の影。
○我と影との外はまた、みる人もなし冬の月。
○霜にかれふす村蘆の、葉うらもしろし冬の月。
○瓦のしもにてりわたる、月のひかりにけおされて、瓦斯燈くらき八ちまた。
○氷と見ゆる冬の月、うらさへさえやわたるらむ。
○あられの音に夢さめて、ありあけがたの月をみる。
○川れとさえてきこゆめり、夜やふけぬらむ月かげも、よどみに今かこほるらむ。
○しもかとみれば冬かれの、朽葉にしろき月のかげ。
○ちまたの柳かれはてゝ、月すさまじきさよなかに、犬のもろごえうらすごし。

し。

○ものうる翁かげきにて、柳にふくる月のかげ、ちまたのしもの深き夜に。

○庭の芝生の霜の上に、かげすさまじくてる月。

## 新月

○ひかりあらたに○心ぼそくもいでし月○ものあはれにも○けぶる月影

○空めづらしく○のきばにかゝる○糸をはれる○木かげをてらす○楢に

かゝる○ながれにうつる○川邊の里○川ぞひの里○たりがれ時○かはた

れ時

○水中の遊魚は釣の針と疑ひ、雲上の飛鳥は弓の影をおどろく。

○都にいでし月影か、この磯山の松かげに、細くもかゝる三日の月。

○千里の暮山の柴翠を横たへ、一鉤の新月はたりがれをやぶる。

○むなぎ朽ちたる辻堂の、軒ばにかゝる三日の月。

○ふくろふの聲もきこにて、三日月細し木下かげ。



## 殘月 曉之部參照

○ほのかにのこる○楢にきゆる○はかなきかげ○うすれゆく○雲にかく

れぬ○天の戸のおしあけ方にながむれば○ひかりかすかに○門邊をてら

す○しもにれちたる○花のしづくに○淺茅のつゆに○あるかなきかに○

見るまにきゆる

○花を惜みしわが庭の、楢にれつる月のかげ。

○霜おきわたす軍門の、かどべを獨さまよへば、殘月一片影肌さむし。

○ねられぬまゝに柴の戸を、れしあけ方にながむれは、雲間にのこる月のか

げ。

○たぐひあらしのふもと寺、杉のいほりにありあけの、月おもしろきながめ

かな。

○千艸のつゆをふみわけて、あさたちくれば杜がけに、はかなく月のかげの

こる。

## 星 夕之部參照

○星月夜○星のやどり○星のまぎれ○さやかに見ゆる○あかつきしるき星○かゆきかくゆき○稀になりゆく曉○くれゆくまゝにきらめく○位みださず○いでうふ星○ほしの光に○夜わたる星○つらなるほし○星の位のたかき○うらにみつ○きらめくかげ○めなれぬほし○星をいたゞく○月すむうらにまれなる○やみぢをてらす○西にめぐる○星見にうむる○かゞせをの神○七まずほし○赤星○すまる星○ひこぼし○夕づゝ○夕ぼし○流るゝほし○水なきうらを○雨夜のほし○くるゝまに○さやかにも○あふぎみて○三日月けぶる○いつしかくれて○風ふきわたる○雨はれわたる○月さへいでぬ○杜かげに○川邊をかへる○星合ひのうら○とぶほし○はゝきほし

○水なき空をゆふべ〳〵、ながるゝ星こりあやしけれ。

○しげきれもひのかず〳〵は、むらがる星も何ならず。

○さやけくてらすゆふづゝの、影にむかへば何となく、世の姿こう悲しけれ。



○御空に舞へる佐保姫が、うなじの玉の緒のたにて、ちりかみだるゝ星のかげ。

○雲なきうらに風冴ゆて、たかくかゞやく星のかげ。

○水なきうらをいかにして、夜毎〳〵に星影の、西に東に流るらむ。

○三日月細き松ばやし、梢をてらす星影は、月よりもげにさやかなり。

○畑路をかへる里の子が、一番星とうたふなる、聲にひかりも見にうめぬ。

○西に殘れる夕映は、見るまはかなく色あせて、東のうらに夕づゝの、光さやかにかゞやけり。

○衣手さむき夕まぐれ、仰げば冴ゆる大空に、明星一つきらめきて。

○梢の嵐さにくれて、夕べさやけき星かげの、空にきらめくすさまじさ。

○夕ぐれさむき風の聲、杜の梢にれとさえて、空にきらめく星のかげ。

○水車の音のたど〳〵と、夕べさびしき河の邊を、ひとりたどれば大うらの、雲間にかゝる星の影、心ぼうくもひかるなり。

## 晴 眺望之部參照

○はれわたる○日てりつゞく○くものかげだに○風なごみ○風たえて○氣高くはれて○柳さくらのいろうひて○はれわたるうら○まふとりの○鳩とぶうら○日かげさやかに○雲のなみ○風のこゑ○くれゆくうら○あけゆくうら○うらゝかに○ちりもあがらず○春風ゆるく○海なぎて○山もみどりの○花さくけふ○とりなく空○心もうらに○くもらぬうら○いつまでも○くれをしまれて○風ゆるくふく○うよ〳〵と○遠山まゆも○はるかなり○うらゝかに○めづらしく○けふはれわたる○けさ心地よく○雲きえて○雨やみて○みる〳〵はれて○くまなくはれて○さやけくはれて○れもしろや

○烟は門前に消えて青山近く、露は窓前に重くして綠竹垂る。

○雲は七百里の外に收まり、月は四十五瀑の中に澄む。

○雲はみうらに消えて天の肌あらはれ、風は浪を動かして水の面しわむ。

○鶴は翼を張りてきりをはらひ、船は水に連りてくもに入る。

○山にゆきありて松の操あらはれ、うらに風なくして鶴のみち迷はず。

○雨はれて青山とぼそに近く、門外の川は名殘の濁をながす。



○村雨はれて大うらは、たゞ一點のくもゝなし。

○袖をつらねて都人、けふをはれとぞありぶらむ。

○ちりもあがらぬのどけさに、心もうらにあこがれて、ありびくるゝもれもしろや。

○うよふく風に雲消えて、とりなくうらはうら〳〵と、かすみながらに晴れ渡る。

○ならの若葉に風すぎて、うらにはくものの影もなし。

○海はなぎたりいざ子ども、舟こぎいでゝこけふの日を、波の心にまかせてん。

○のきばの山は一しほの、みどりをうへてけふは又、うらめざましくはれにけり。

○春の野にいでゝわかなつむ、けふのありびのれもしろさ、心もうらに遊ぶ糸。

○あふぐみうらにくもはれて、日影のどけき春の日や。

○ちりもあがらずうらのいろ、うよふく風も心地よし。

## 曇

○くもりはてたる○雲わきいでゝ○雲さわぐ○空かきくもり○をぐらくも○雨もよひ○かきくれて○しぐるゝ空○村雲まよふ○雲の袖○日かげもみだにず○はれむともせず○日もさしこず○心うく○おほゝしく○日影もりこず○うすぐもり○花ぐもり○かすみにくれて○くもりくらして○雨とやならむ○風もふきたに○浮雲まよふ○日すがらくもる。

○花ぐもりする春の日の、夕ぐれいでゝながむれば、物なつかしき空のいろ。

○風ふきたにし大ぞらは、いつかくもりて日もみだにず。

○日かげうすれて雲いでぬ、雨とやならむけふの空。

○友まちかねてながむれば、浮ぐもさわく大空は、くもりくらしてものさびし。

○物見せむとてよりほへば、あなあやにくの雨もよひ。

○くもりがちなるこの頃の、うらのけしきぞものうきや。



○くれぬとばかりれもふきで、雲濛々とたちれほひ、天てる日影のいろも見ず。

## 旱 夏日、暑之部參照

○てりにてる日○てりつぐく○てりまさる○いくかつぐける○日影さやかに○雲のかげだにもなし○つちさけて○石もとけなむ○風も吹きたに○日にけにまさる○つゆだに見えぬ○雨氣づくとも○雨をいのると○村人さわぐ○田の物を○水ひかむとて○池さへかれて○わびはてゝ○ひでりつゝきて○八大龍王雨ふらせ○民のうれひと○ひたぶるに○かひなきうらに

○日毎てりつぐけるきのふけふ、ひとへに雨をいのれどかひなき。

○くもるをだにもいとひしを、ひでりつぐけるきのふけふ、ひとへに雨をいのるかな。

○稻穗はかれて土さけて、みるめ苦しき田の面に、たちもとほりて村人の。

○ちりもあがらぬ日照りさへ、つぐけは民のうれひなり。

○池の水さへかれはてゝ、ひづちに死ぬる魚族は、みるもあはれのさまなれや。

○いかにつゞける日でりかも、八大龍王ねがはくば、めぐみの雨をたれたまへ。

○てりつゝきたるこのごろの、日影につちもさけぬめり。

○うらにひでりのくもいでゝ、つちには水もかれはてぬ。

## 虹 夕、朝之部參照

○たちわたる○かけわたしたる○雨はれしみそらに○そりはしわたす○さま〴〵のいろに○夕日には○大うらにわたせるはし○天つ少女やわたるらむ○うるはしきいろ○ひのひかり○にしきのいろに○きにゆくいろ○しぶきにうつる○うらめづらしく○夕日さす方○くもまにかゝるまばゆきまで

○雨はいつしかはれゆきて、日影匂へる久かたの、空にかけたる虹の橋。

○天の浮橋かけわたす、七つのいろこうくずしけれ。



○夕べの空をうめわけて、たがをりはへし雲の袖。

○瀬田の夕日に雨すぎて、空にもかゝる虹の橋。

○西の山の端くもはれて、東にかゝる虹のはし、南と北の中野原。

○山より山にかけわたす、神のつくれる虹のはし、わたるは雨と風とのみ。

○麓の檜原雨すぎて、峯にまばゆき虹のはし、かけても及ばぬけしきかな。

○そらをいろどる七色光明、あはれとみるまに消えにけり、これも美妙は長からずてふ、世のことわりにもれねばや。

○野川につゞく卯の花の、つゆにうつらふ虹のいろ。

○一むらきほふ、夕立は、青葉のみねにはれゆきて、谷よりいづる虹のはし、なきてわたるや時鳥。

○かへるや蹇のうしろ影、かすめる雨のはれゆけば。

## 雷 落雷之部參照

○とゞろくひゞき○なるかみすごく○くものはたて○れごろ〳〵と○迅雷風雨○電光石火○ものすさまじく○はたゝがみ○雨とゝもにも○ひか

りとよみて○くろくも起り○うづまく雲○霹靂一聲○かぜふきしきり○すさぶあらし○八重雲なびき○しのつくあめ○雲のなみたち○いなづま○とよもすひゞき○天柱くだけ○地軸さく○ひきさきはなち○はたゝく○耳もしふべく

○天地はやみにかきくれて、おどろ〳〵となるかみの。

○烈風一陣黒雲起り、萬雷くだくる天の原。

○きらめく電光とゞろくいかづち、篠つくばかりの大氷雨。

○あやめもわかぬ闇の夜を、晝まとなしてきらめく稻妻、篠つく雨は矢の如く、とゞろく雷(かみ)はたゞ大砲(たいほう)。

○山風あらく吹きしまき、磐石砂礫を空にまき、天地を動かす迅雷霹靂。

○龍は翔て雲うづまき、雷怒りて天地震ひ、大雨は盆をかたむくるがごと、疾風たちまち樹を倒す。

○震動雷電雨あられ、天地ひとつに黒雲ねほひ、長夜のやみとぞなりにける。

○とゞろきわたるはたゝがみ、篠をみだしてふる雨に。

○霹靂一聲天地にひゞき、電光はしる三千里。



○ふきたつあらしに黒雲起り、きらめく光に神なりはたゝく。

## 電 落雷、夜之部參照

○やみをてらして○とゞろくひゞき○ひかりかゞやく○よぶかきそら○きらめくいなづま○まばたくひまに○ひかりのひまに○風ふきあれて○ともしびきえて○夜はふけて○雨ふりうゝぎ○ねたくるひかり○きらめくひかり○風雨暝晦○とびゆくひかり○ぬば玉の闇をやぶる○闇をつく○電火のひかりすさまじく、闇路やぶりて艸の葉に、きらめくつゆの色もみゆ。

○風雨暝晦天地を洗ひ、霹靂一聲電光はしる。

○墨をながせる空のうちに、電光しばし〳〵きらめきて。

○ともしび消えし烏羽玉の、夜半にかゞやく稻びかり。

○空にきらめくたび毎に、胸もとゞろくいなびかり。

○天外たかくとゞろきて、きらめく光ものすごし。

○夜な〳〵てらすともしびも、同じたぐひの光ぞと、おもへばかつはむつま

しや。
○とこよの闇を忽ちやぶり、またも無明のやみとなる。
○震動天地を揺かし、電光宇宙にかゞやき、すさまじかりし大空も、いつしかはれてすめる月。
○雷神一たびうごけば、黒雲動き風鳴りて、光明とびゆく三千里。
○闇の空なるうき雲の、絶間を見せてきらめく稲妻。
○なるかみはげしく、そらかきくもり、きらめく稲妻ものすごし。

## 風

○しなどの風○ねこし山越しふく風○かざれもて○風はやみ○風のかよひぢ○ふきみだしつゝ○葉分の風○木の下風○かへしの風○風のやどり○すき間の風○れろすあらし○たちさわぐ○谷の辻かぜ○風のすがた○袖ふきかへす○風吹きすさぶ○あらしふく○しなとべの神○しなつひめ○あらいそ風○はやちの風○すさぶ聲○ふきゆく方○ふきしをる○立田のかみ○なびかぬ艸○風のしらべ○風のおとなひ○枝ふき折りて○ふきみだす○風をいたみ○風のはふり○烈風一陣○なびけつゝ○木立をゆずり○いざごをとばし○たかくふく
○夕ねるくもゝゝ立さわぎ、汀におちくる風のおと。
○花も紅葉も末つひに、散るなるものをたれかまた、かごとを風にはおほすらむ。
○山松風のさは〳〵と、木の葉さうひて吹きおつる。
○すがの荒野をとふ鷲の、翼もたわにふきしきり、夕くれすごき山おろし。
○今を盛の花のいろ、やがてうつろふ風の音。
○蟬の羽衣吹かへし、うらすゞしくもおとづれて。
○風のまに〳〵川音も、遠く近くにきこゆなり。
○頼めし人もなき宿の、すだれ動かし吹く風に、むねとゞろくもはかなしや。
○嵐ばかりぞれくつきの、松の梢にれとづるゝ。
○松の梢に聲たてゝ、雪の袖ふる天津風、いかなる神かありぶらむ。
○うはの空なる風だにも、松にはかならず音するを。
○みやまの奥の花紅葉、水の流にしるべする、風てふものこそうれしけれ。

○艸の上ふく夕風に、野守が袖のそれならで、つゆの玉ちる旅まくら。
○くれゆくうらにまさきちる、山の嵐の聲かなし。
○まれにとはるゝ夜半も猶、さびしき松の夕あらし。
○菅のあら野をとふわしの、つばさもたわにふく嵐。

## 暴風

○しまきの風○すさまじく○おどろ〳〵に○ふきたちて○砂をとばし○岩根をゆすり○うしほさかまき○なみたちあがり○家おしたふし○空かきくれて○つむじ風○あらしまかぜ○木を抜き家をたふす○ふきあるゝ○吹きしまく○あやめもわかず○黒霧濛々○坤軸をゆする○昏々として○濤々として
○俄におこるはやち風、海面くらくかきくれて、しき波立うひ音すさまじく。
○簷の燈火影消ねて、荒たつ波の岩かむ音、空にひゞきて物すごし。
○吹き起りたるはやちの風、山をうごかし谷をゆすり、砂石をとばして天地暝晦。



○磯山松も吹きたふされぬ、海人のとまやもふきとばされぬ。
○黒雲起るとみるまもあらせず、吹きたつあらしの聲すごし。

## 順風

舟、蒸瀛船、航海之部參照

○風なみよし○ふく風なごみ○おともしづかに○風むきよし○ほてうちて○舟子よぶ○うよ〳〵と○うごろすゞしく○ちりもあがらず○のどかにて○空うらゝかに風なぎて○海おだやかにして浪あぶらの如し○波平らか○うらはれわたり○磯邊にいでゝ
○いざ帆をあげて舟出せん、風なみなぎて庭きよし。
○帆手うちはへてうごろく舟人、にはじづけしとよろこぶ乘客。
○磯うつなみのおとしめやかに、海上萬里風なぎぬ。
○いさみていづる舟人が、袖ふきかへす追手の風、心のどけき海原や。
○朝けすゞしきおひ風に、みだれていづる簸小舟。

## 春風　櫻、柳之部參照

○まふ蝶○吹くとなき○吹ぬるむ○花の香れくる○袖さむからぬ○玉すだれ○かすみわたれる○氷ふきとく○梅が香れくる○うぐひすさうふ○ぬるむ雫○かすみふきとく○なびくばかり○うらゝかに○花やさくらむ○かすみを越にて○あさみどり○やなぎの枝に○ねやの板戸に○かをる○や園の梅の下風○香はみなぎる紅杏の園○波はしはむ綠揚の池○ふく方見ゆる○小艸もなびく○枝もならさぬ○ふくとしられぬ○艸葉なびかし○匂をはこぶ○柳の糸に姿をみせて○柳をたよりにて○花の香ごとに○はだ心地よき○池の面に○汀をあらふ○鶯さうふ○みやまの奥も○みづにをわたる。

○樽の前に醉をすゝむる春の風、花の奥に詩を促す鶯の聲。

○うこともわかぬ梅が香を、吹きれくりきて中々に、人まどはせの春の風。

○柳のもすそ蝶の袖、風の姿ぞ見にけにける。

○柳いろなる川つらの、里ふく風のふかみどり。



○篩とる手に吹うひて、朝きよめする春の風。

○柳の糸の春風は、結ばぬ夢を吹きさます。

○かすみうめたる生駒山、こにてきぬらむ春の風。

○花のひもとく春風は、柳のつゆをふきむすぶ。

○けふ引馬野の小松にも、風ふきわたる春の日や。

○つらきものとも知らずして、花ゆゑいうぐ春の風。

○しだり柳のいとにさへ、しられぬほどの春風に、うごくは春の人心。

○八重たつかすみのひまもれて、吹くともわかぬ春の風。

○心づからやうつろふと、見るをゆるさぬ朝あらし。

○見る人みなの惜むをも、しらず顔にもさうふかな、あな心なの花の風。

○吹くたびごとに春ふけて、やかてのこらぬ花の枝に、うらめしげにもなく。

鳥の聲。

○池の面をふく時は、春の心のあやとなり、花の梢を拂ひては、春の心のいろとなる。

## 涼風
納涼之部參照

○夕されば○しの〻小笹に○風こうまたるれ○たもとすゞしく○すゞしさを○まだきに秋の○まだきに秋の心地せられて○夕立のしづくながらに○波の上○海の面○池のほとり○はちすをわたる○なつ山の○うすきたもと○ねぶの下風○ならのわかばに○楢の葉そよぐ○わたる夕風○竹のおく○春は去て殘紅を掃ふ風○律に應じて風きたる○袖ふきかへす○さほさして○なつふかき○下葉すゞしく○いさゝむら竹○涼は生ず三更の雨○清は入る六月の風○しげみにすゞむ○たちよりて○夏をよろなる○葛の葉かへる○葛衣の袖をふく○はしぬにふくる○秋ふきおくる○夏をふきはらふ

○あふちゝりくる木がくれに、すゞしき風も通ひきて。

○つゆも色めく卯の花に、うよふく夏の朝風は、たもとかへして肌さむし。

○袖にすゞしく吹きうひて、草葉のつゆもきらめきぬ。

○松の下みちたどりつゝ、月にあゆめば川風の、うらすゞしくも吹きかよふ。



○つゆすふ蟬の聲はして、わかばうごかす風の音も、夕すゞしき森の蔭。

○柳の枝をふく風に、つゆちる夏の夕まぐれ。

○ほたるたづねて川添の、わか葉の下をわが行けば、つゆふきこぼす河風。

## 秋風
鹿、月之部參照

○荻の葉に○葉末おしなみ○秋風のこゑ○秋風のねと○秋かぜさむし○秋の夕風○秋たちしより○草木おしなみ○西ふく風○おとづるゝ○物あはれ○月にふく○ふるさとしのぶ○荻の上ふく○夕べさびしく○夕ぎりなびく○夕ぎりふかく○身にしむねと○柳ちる○夜さむになる○ねざめかすらむ○たもともつゆけく○つゆもとまらぬ○つゆもなみだも○つゆ拂ふ○稻葉をわたる○月すみわたる○蕭瑟として○凄凉として夜の雨に西の風急なり○つゆ冷かにして晩風きよし○桐の葉さうふ○衣手さむき○芭蕉にねとなふ風の聲○村くもはらふ○はげしくも○あしのまろや○野分にあるゝ

○一葉ちり二葉ちりゆく秋風に、あはれの夜も見わたして。

○させもが上につゆ見ゐて、あはれといひし秋の風。
○野邊の眞葛はうらがれて、孤客まづきく秋の風。
○物れもふ身にしみ〳〵と、ふくもかなしき秋の風。
○琴かとひぐく松の風、しもかとまがふ月のいろ。
○つゆおく草をふく風に、ちりてくだくる月の影。
○ふけゆくまゝになく虫の、聲になりゆく蓬生の、庭の秋風身にしみて。
○心つくしの秋風に、木の間もれくる月のかげ。
○とふ人もなきふる郷の、蓬が門の秋風に、うきをしらする夕あらし。
○れもひわびてもながめやる門田の秋の夕まぐれ、穗波をよする秋風。
○庭の梢に月すみて、むぐらにすだく虫のねも、心ほうげの夕まぐれ、おとなふものは風の聲。
○月は天地に影こりて松影婆娑たり、風は半空に聲すみて虫吟唧々たり。
○涙なりへそ秋の風、さらでもさびしき夕まぐれ。
○友まちかねて柴の戸を、あけてながむる夕くれの、うらさびしくも風のふく。



○老がねざめのまどひて、なみだをさそふ秋の風。

## 木枯 落葉之部參照

○こゑたてゝ○むなしき枝○風さむし○錦ふきたてゝ○れとたかく○吹たゆむ○一さかり○島やまれろし○こがらし○れちばのこちぬ○吹しをる○きゝわびぬ○ふきとふく○かへもの風○いろなき枝○吹あれて○汀氷りて水に波なく○しも白くして梢にいろなし○しもの林に萬葉とぶ○あらしをいたみ○ふきたゆむ○すさまじく○秋のいろをはらふ○葉守の神か○こゑさへさむし○杉のむら立○梢をさうふ○身をこがらしの○ねこし山こし○れとなふものは○柴の戸叩く○身に及する心地○砭して○空ふきあらす○木々の梢をゆすりては○時雨をさうふ○ゆきふきれろす
○ゆめぢこゝしき谷の戸を、木枯さへぐたゝくなる。
○ひとりふすまの夜の嵐、身を切るごとき心地して。
○せめて忍ばむ紅葉ばを、ふきなはらひひり夜半の風。

○都のうちもさびしきに、こがらしすさぶ山里の、賤がふせやゝいかならむ。
○宵にくみたる濁酒、あとなくさめて木枯の、ひまもるれともさむきかな。
○霜さやく野をふく風に、朝てる日影もうすれつゝ。
○のきばの荻はかれはてゝ、松にれとする木がらしの、夕さびしきながめかな。

## 雨

○こさめ○雨夜ふけゆく○ふりくるあめ○うぼふる雨○雨のいと○一志きり○雨さそふ○雨間まちつゝ○雨そゝぎ○軒もるあめ○かきくらす○かきくもり○村雨のうら○つれ〴〵のながめ○のきの玉水○雨のれときく○つれ〴〵とふる○雨くらき窓の内○志たゝる雨○雨もよひ○雨づゝみ○雨になりゆく○あしとき雨○ふりくる雨○くるしき雨のれと○雨やどり○山うるほひて翠志たゝる○潤みちて新流にごる○うの花くたしふる○ふる里さびし○ぬれし夕日のかげなびく○つゆもまだひぬ○きりあめ○すゞのしのやのあめの音○雨の夕ぐれ○あまもよひ○あまけ催ほす



○あまやどり○ともし火の花も志めりて○あめのめぐみ○笠やどり○あまよにかたる○檜原がれくにふる雨○法の雨
○とひくる人もかれはてし、草の庵の夕まぐれ、音なふ雨ぞなつかしき。
○すゞの篠屋の雨のれと、なれてもぬるゝ袂かな。
○谷のうきくも峯こえて、檜原がれくに雨のふる。
○あと川柳風みえて、音志めやかにふる雨に、ぬれそふ色もうつくしな。
○松の嵐の末きえぬ、たかねのかたや雨となる、雲たちさわぐたゝずまひ。
○わかばにそゝぐ雨の音、夕さびしき庭のれもに、小鳥の聲も志めりつゝ。
○門の柳をふく風に、つゆの玉ちる雨の夕。
○窓志めやかにふる雨に、かゝぐとすれど燈火の、火影もいとゞ志めりつゝ。

## 朝雨

○朝志めり○ぬれてやひとり○小鳥の聲も志めりつゝ○朝つゆのいろもなし○桐の葉にれとなふ○雨戸をたゝく○れきよとばかり○枕も志めるや○軒ばをめぐるつゆの玉○きりや雨となる○あさいの窓に○志めやかに

○あさ戸あくれば片岡の、楢にうぐひすの音。
○なくや小鳥の諸聲に、れきいでゝみれば柴の戸を、たゝくあしたの雨の音。
○庭のさゆりのつゆちりて、かをりみなぎる草むらに、雨靜かなる朝ぼらけ。
○小鳥のつばさをれつゝ、のきばにきなく聲々も、志めりがちなる雨の朝。
○庭の楢にまと〳〵と、れとまづかなる朝しめり。

## 夕雨

○かきくれて○いつしかあめと○垣根につたふ○ねぐらにいうぐひすの聲○しめりがちなる○しづくにぬるゝ○いとゞさびしき○ながめやる○門川の○裾野の小田に○竹むらに○夕風にきほひて○さわぐ雀の○風ふきたえてくれうむる、うらさびしくもふる雨に。
○片山林日は落ちて、夕さびしき空のいろ、いつしか雨もこぼれきぬ。
○小川の岸をわが行けば、夕さびしく水上は、きりたちこめてみにわかず、今宵や雨になりぬらむ。
○夕ぬるくものかげきにて、風にふりくる雨の音。



## 夜雨

草庵之部參照

○ふるさとしのぶ○ゆめのうちにも○枕にひゞく○たづねこむ○友まちかねて○草のいほり○ふるき心を○ふみよむともしび○ねむりゆく○しど〳〵と○夢路にうつゝぐ○夢をめぐる軒の玉水○閨のともしび○寐覺さびしく○遠寺のかね○草むらにふく風○竹むらうよぎ○夜半のひとあめ○むかしのことをかきつめて、枕にれくる夜のあめ。
○草のいほりを詠しけん、むかしのさまもはれて、雨靜なるまどのうち。
○草のいほりの軒の松、雛の竹にふる雨に、音きゝ分けてつく〳〵と、ふみ見る夜のしづけさや。
○遠寺の晩鐘雨寂々、夢はめぐる湖江のわたり。
○軒もる雨にゆめさめて、夜風身にしむ草のいほ。
○殘燈くらく又あかく、窓を隔つる芭蕉の音に、靜なる夜の雨を知る。
○雨ふる夜半もふらぬ夜も、きゝわきかぬる菴の軒、落葉とばかりまがひつゝ。

○草の菴の夜の雨、笠やどりする人もがな、この徒然をかたらはむ。
○夜はいつしかとふけゆきて、庵さびしき雨の音。
○庭の桐の葉ちりうめて、夜半しづかなるわがやどに、さびしさうふる雨の音。
○歸るとみつる故里の夢の末とふ夜の雨、かざこぬ袖にうこぐなり。

## 春雨 柳、櫻之部參照

○春のいろを○雨にうるほふ○ふるともなき○かすみよりふる○花ぐもり○くる人もなく○さびしさは○あまねくめぐむ○はれぬながめ○時しるあめ○かすむあめ○木のめもはる雨○かすみをつたふ○我身ふりぬる○檜原もくもる○れとをもしのぶ○もるともなく○けぶりしめりて○うぼふりくらす○梢かげうふ○山のみどりをうむ○れとしづかなる○くるこうらより○いろづく野邊○雨にうるほひて花涙をうへ○柳にふりてなかば烟となる○心してふれ○花にさはらぬ○こちふきはるこ○風たにて○色うふ柳○花につれなき○露はやかて雨となる○霞むあしたの雨○さくらをる○をやみなく○めに見にて○まきの戸に○つくづくと○春のながめのさびしきに、ひとりつくづくいにしへを信夫(しのぶ)につたふ玉水や
○いとよりかくる靑柳の、下ゆく水にふりかこり、あやれりみだる春の雨。
○常磐の山の岩が根に、みどりをきうふ苔のいろを、さらに染めなす春の雨。
○ふしてはれもひ、れきてはながめ、日數ほどふる春雨に、花もいつしか咲きちりぬ。
○木々の雫の音はして、かすむあしたの春の雨。
○簑きて下す筏士に、かすむあしたの雨を知る。
○かすむあしたの春雨に、のきばのさくらつゆおもみ。
○訪ふ人もなき艸のいほ、れとなき雨の音をきく。
○そぼふる春の雨はれて、遠里小野の艸のいろ。
○あやれりみだる春雨に、岸のわか艸いろうひて。
○軒ばもくらき春雨の、板戸に細くれとづれて。
○軒の玉水間遠にて、ふけゆく夜半のさびしきに。

○花まつ心むすぼれて、はれぬれもひに日をくらす。
○きのふもけふも春雨の、ふるき昔を忍びつゝ、つれ〴〵わぶる艸のいほ。
○花咲きなばと野に山に、契りおきつる言の葉も、且ちりぬべく降る雨。
○江城寂寞として、燕舞なく、春雨蕭々として櫻ちる。

## 五月雨

○日をふる○水かきりふる○まこも艸○れろすいかだ○河れとたかし○八十瀬もしらぬ○日をあまた○谷水の○あけくれわかぬ○くもまも見ゐずは○はれまなき○かさなる雲○さみだるゝ○けふいくか○水まさる○久しくなりぬ○雲くらき○江南の梅正に黄なり○江に接してきりの如くながし
○賤が萱家のゝきくちて、菖蒲につたふ露の玉。
○窓にむかへる山々の、影もかくれて日数へぬ、けふにていくか五月雨。
○人目たにたる奥山の、杉の朽葉も流れいでゝ、人にしらるゝ五月雨。
○一夜ひりかに五月雨の、雲間をもれて山松の、しつ枝にかゝる月の影。



○水かさまさる門川の、水のひゞきもすさまじく。
○白雲埋みて見ゐわかず、谷の水音山よりも、たかくなりゆく五月雨に。
○ふる五月雨のあとみにて、一すぢにごる川の水。
○したしき友も道たにて、うとくなりゆくさみだれに。
○かきくらしふる五月雨の、雲間に見ゆる夏山は、やがても空のみどりなり。
○あふち花さく木の本に、つゆたちうめて五月雨、はれうめにけり風の聲。
○けさめづらしく雨はれて、日影うれしとみるほどに、又浮雲のまよひきて。
○昨日もけふもかきくもり、いとゞ日數をふるころも、ときてあらはん隙もなし。
○斧のひゞきは絶にはてゝ、日數重なる五月雨に、水音たかし丹生の川。

## 驟雨 雷、落雷之部參照

○あはたゞしくも○かきくもり○なるかみの○風はやみ○いなづま○市人さわぐ○一村すぎぬ○けしきをかへて○すぐる夕立○入日さす○水上は○庭たつみ○ふりいでゝ○船人さわぐ○しばしはすぎし○やなせのさ

波○時の間○なごりまで○かつ〳〵はるゝ○にごる河水○はれまの木かげ○苦もふきあへず○はれゆくあとの○雲漲りて風れこる○一しきりむらがりれこる雲の峯、はや忽ちにぬば玉の闇かとばかりかきくれて。
○ふきくるはやちと諸共に、はげしくふりくる夕立の雨。
○みそらを動かす神の音、軒よりれつる瀧の水。
○木葉よりれつる雫は、ぬきとめぬ玉と亂れて。
○露ばかりだにふれかしと、待ちにまちたる民草の、玉の緒ゆらぐ夕立。
○冷風一陣ふき起り、忽ちくづるゝ雲の峯、みうらを覆ふとみるまもあらせず。
○盆をかへす夕立に、きほひてはたゝく神のれと。
○みうらはくもにかきくれて、冷風一陣ふくかとすれば、なぐるが如きつぶて雨。
○庭にたゞよふにはたづみ、木の葉をゆする山れろし。
○夕立はれて庭の雨に、日影うつろふ夕暮の、そらには夏もなかりけり。



## 秋雨

○染つくす○鹿のねさむく○正木いろづく○まどうちすさぶ○風きほふ○風さわぐ○萩の志をるゝ○はれみくもりみ○ふりそぐ○つゆをのこして○きゝあかす○秋のこゑ○たゞならぬ○風のこゝろ○村さめの○つゆをのこして○空かきくらし○色かはる草○朝來の一雨○夢は短し秋曉の雨。
○庭につもれる桐の葉に、うゝぐ夕の雨の音。
○ひとりさびしき草の庵に、袖ぬらせとてふる雨か。
○秋のあはれはかずあれど、芭蕉にうゝぐ村雨の、音志づかなる夕には、まして心もきにぬめり。
○紅葉を誘ふ風の音、片岡の杜に音づれて、やゝ志もがるゝ枯生野に、さびしくうゝぐ夕じめり。
○寐覺れとなふ雨のおと、枕にちかき窓の外の、芭蕉にくだく夢の末。
○鷺のむれゐる岸の邊の、かれし柳にふる雨。

○夕さびしき門川に、うゝぐや秋の雨のおと、いとゞあはれをうふる也。
○心ほそさををだまきの、くりかへしてもわぶる夜に、いとゞしくふる秋の雨。
○桐のかれば にれとたてゝ、心ほそくもふるあめの。
○ものおもひするわがまどに、なみだをさそふ秋のあめ。

## 時雨 紅葉之部參照

○ふりすさぶ○志ぐれ志ぐれて○夕時雨○この葉ふりまぜ○あらしふく○はつしぐれ○空にのこりて○さよしぐれ○志ぐれぬかたも○おとづれて○入日かげ○冬のやまざと○風や時雨の○よるさへさむき○袖にふる○はれくもり○むらしぐれ○嵐にきほふ○はれやすき○袖ぬるゝ○何をそむらむ○うたて志をるゝ○よものやまかぜ○板間もる○山めぐる○俄にもふる○まきの戸○涙やうらにかよふらむ○すりのゝ原に○木末あまねく○ねざめにすぐる○風のゆく手○蕭々としてあかつきに到る○ゆきをともなふ○ならのはづたひおとづれて○志ぐれにくもる月の影○くもりみはれみ○ふりみくもりみ
○曉がたの月消えて、時雨りめたる空のいろ、何とはなしにすさまじな。
○峯に入日のかげきえて、時雨りめたる雲のいろ。
○片山里の村時雨、ふると見るまにさす夕日。
○松の夕日はさしながら、時雨ずぎゆく隅田堤。
○木葉の雨をさきだてゝ、風の姿にふる時雨。
○山はみ笠の名にたてど、うめぬ木の葉はなかりけり。
○むかし忍ぶのむら時雨、さな音たてそみし夢の、名殘かなしきさゝ枕、さらでもさびしきねざめなり。
○夕日うつらふ遠山の、まつをよこぎる村時雨。
○ねざめさびしき柴の戸を、志ばノ〳〵たゝく村時雨。
○誰が涙より時雨きて、時もわすれず年々に、物おもふ人の袖はとふ。
○松原わたる夕風に、やがてふりくる片時雨。
○霧に志めれるいはほより、まづぬれりめて山里の、垣ねさびしくふる時雨。
○三圍(みめぐり)づゝみ月ふけて、待乳の山に時雨ふる。

○片岡の一本杉に、一むらの雲こりかゝれ、初時雨。
○野路の夕日のかげくれて、行く手を送る村時雨。
○山風あらく時雨るめり、今や都も夜さむなる。
○山めぐる雲のいろ、時雨ふるすりのゝはら。
※○にはの紅葉はちりつみて、しぐれのあとをかはりけり。
○時雨がちなる木がくれに、ぬれてや鳩のなきわぶる。
○かねの音すごくきこえきて、時雨ふるなり夕まぐれ。
○れつる木のはのれとかとも、まがへらるゝは時雨なり。
○もみぢの風にちりはてゝ、ながめさびしきわが庭に、さびしさをりふ雨のれと。
○日かげうすれていつまかも、志ぐれは又もふりいでぬ。

## 雲

○朝ゐる雲○朝たつ雲○とよはた雲○夕ゐる雲○あしたの雲○雲のはたて（雲の限の意）○棚引つゞく○ながめやる○雲のまがき○うきたつ雲○八重の



しらくも○雲のゆきゝ○かしこきみうら○雲早き○風にたぐよふ○峰にたなびく○むらだつ雲○雲ゐはるかに○よこぎるくも○あらしの末に○浪路の末○わきたつくも○出入るくも○雲がくれ○うかべるくも○五百※重の雲○はてもなし○あわだつ○風にきほゆく○雲のみを○とばりのごとく○かゝらぬ間なき○月をかくしてすぐも○水まき雲○うろこ雲○ゐのこ雲○天の原たゝよふ雲○空の海に波たつ○れうろしや○雲の峰○雲のたもと○村雨さそふ雲のあし、吹きたつ風もすさまじく。
○行方はいづら、しらねども、たぐふく風は靡きゆく、かなたや雲のやどならむ。
○行迷ふ高嶺の雲を吹く風に、ふもとの松にむせぶなり。
○うらふきわたる風はやみ、すぎにすぎ行く浮雲の、重なるはてやいづこなる。
○月すみのぼる遠山の、麓横ぎる夜半の雲、うつしゑにみるにしきかな。
○峯の梢に有明の、月をのこして別れゆく、雲もつれなき夜半のうら。

○龍形の雲月を呑んで、空たちまちにかきくもる。
○浪路の末にゐる雲は、高麗唐の山々か。
○月影のこる山の端に、夕べの風のあと見にて、吹きよせられし雲の波。
○繪島家島うれならぬ、島かとみにてたつ雲の。
○雨には雨のけはひあり、風には風のすがたあり、うのさま〴〵をあらはして、行きかふ雲のわれもしろさ。
○定めなき世の姿ぞと、打見る雲も夕されば、かへる山路はあるものを。
○こきもうすきもわれしなべて、空とひとつに墨染の、夕をつゝむ雲の袖。
○照るかと見れば又くもる、天つ日影のひかりこそ、空ゆく雲のしわざなれ。
○日影は西にかたむきて、山のは近きうき雲の、うつろふいろもまばゆしや。

## 朝雲

○朝ゐる雲○あしたのうらに○むかしのうらに○とよさかのぼる日○ひかりかくして○朝日うつろふ○帶なすくも○けさもしろく○風もなきうら○よこぐも○朝風に吹かれて○なびくすがた○峯より峯に○朝のとばり○紫に匂へる雲
○朝戸あくればひむがしの、みねにたなびく雲の影。
○日影うつろふ朝雲の、まばゆきうらをながむれば。
○金龍おどる大空に、朝の風の吹きあれて。
○うつぶく虎のすがたとも、見ゆるあしたの雲の影。
○峯にたなびく白雲を、花かと見れば忽ちに、風に吹かれて影ちりぬ。

## 夕雲

○夕ゐる雲○夕さびしく○夕風に吹きなびかされ○奇峰うばたつ○雲のかげ○夕日うつろふ○夕日つゝみて○五彩をうつす○西にたなびく○月まつうらに○心にかゝる○きにてあとなき○夕べを包む袖
○月まつうらに夕雲の、心うとくもいづるかな。
○夕さびしき山里の、麓路くらき雲のかげ。
○遠寺のかねに日はれたちて、西にたなびく夕ぐもの。

○孤雁のかげもきにうせて、夕日をつゝむ雲のいろ、水にうつりてめざまし。な。

## 雪 冬日、冬夜、山里之部參照

○雪ふみわくる○雪しづかなる○雪ふきはらふ○ゆきにうもるゝ○とふ人もがな○雪げの空○雪にこもれる○雪にあとなき○雪をいたゞく○ゆきのひかり○ふりつもる○見るまゝに○花とのみ○菅の葉しのぎ○いやふりしきる○ふるしの掉○雪をれの○とはれぬ庭○松の葉白く○たわむまで○夜のまにつもる○下折のこゑ○野も山もひとついろ○里はしぐれて○梢にかろく○友まつゆき○とよとしのしるし○月とみるまで○風まぜにふる○都人こよかし○くづれおつる○木々の初雪○しもかとまがふ○明ぼのゝうら○皚々として枝にかゝる明かなる瓊○衣につく冷かなる綿○槇の葉しのぎふる○けぬが上に

○よし野の里は何ならず、越路の空のあしたゆふべ。

○雪ふりしきてみちもなし、人めかれにし草のいほ。



○春にしられぬ花ざかり、雪ふるさとのこゝかしこ、昔のさまも忍ばれて。

○岩ほの上も花さきて、見わたしきよき雪げしき、れもしろと見ぬ人もなし。

○うらわにちかくふりしきて、末の松山こすなみの、うれかとばかりつもるゆき。

○世に埋もるゝれく山の、山下いほの雪の空、つもるれもひにきにかへり。

○ふりしくゆきを吹く風に、うらに知られぬ花ぞちる。

○年の終りになるまゝに、ゆきもわが身もふりまさり。

○千とせにほこる枝が枝も、雪にはしばし埋れぬ。

○訪ふ人あらばけふばかり、なしと答へて歸さばや、蹈まくをしき庭のゆき。

○かへさの道はかはらねど、解くれば今朝のゆき。

○松がうら島雪ふりて、またあたらしきけしきかな。

○垣根はゆきに埋れて、野邊とひとつになりにけり。

○園のくれ竹雪を重み、折るゝ響にゆめさめて。

○いづれむかしのすみかとも、わかぬばかりにつもるゆき。

○この初雪をふみわけて、とひこし君が心こそ、雪より深きなさけなれ。
○ふかき山路のゆきのくれ、あとなき道にあとつけて、心細くも辿りゆく。
○雪も山路もふかくして、人あとたえし柴の戸。
○ふかさくらべむ此ゆきを、ふみわけてこし八心。
○降りくる雪をはなとみる、がらすの窓の冬ごもり、まだきに春はきにけりな。
○甲斐の白根の知らねども、雪につけてもれもひやる、旅なる君はいかにかと。
○山の端毎に有明の、月やのこるとおもふまで、つもるや雪の朝ぼらけ。
○朝げの袖はさゆれども、ふりつむゆきを花とみて、拂ひもあへずながむるや。
○都の空の初みゆき、はるゝあしたに見渡せば、小野の炭がまたきまさる。
○松と竹とにふりつもる、雪は千とせの花なれや。
○入相のかねはきこゆれど、くれむともなし雪の窓。
○枯木に花もさきいでゝ、藁屋もたのうてなゝり。



○南天の色こき枝に雪ふきつけて、雀一むれ垣根にさわぐ。
○たどりて來ませ嶺も尾も麓の里もおしなべて、只銀(しろかね)を敷延(しきの)べし、我山里の雪景色。
○峯のしかのねたえはてゝ、けさめづらしき初ゆき。
○豐年しるくふるゆきの、深さぞ君がめぐみなる。
○市人にいざやうらまし、菅笠の、風情ながらに今朝のゆき。
○しば〳〵叩く雪の門、應といらへの聲冴えて。
○雲井はるかに仰き見し、村山近きけさのゆき。
○沓のあとあり朝ぼらけ、たれたが里のゆきかみる。
○一夜の中に築きなす白金の臺(うてな)、またゝく隙に我はきぬ月の世界。
○松のうれ葉にふるゆきは、五百重ふりしけあすもみむ。
○夜半の嵐のあとみえて、遠山のはにつもる雪、明けゆくさまぞおもしろき。
○山本近き住家には、一日もみゆきふりやまず。
○ほがら〳〵とてらみゆく、遠山のはに有明の、月かとばかりみよしのや、高嶺につもる雪げしき。

○よる行く袖にふるゆきは、てる月かげのちりきつゝ、つもるかとのみれもはれて。

○みゆきがくれのわが庵を、けふとふ人の心こそ、ゆきよりふかき情なれ。

○世にはなれたるわく山の、岩垣紅葉ちりはてゝ、柘葉につもる初みゆき。

○樵の子等が眞柴かる、小野の細道あとたえて、ふかくもゆきにふりつもる。

○朝戸あくればかた岡の、楢のひろばに雪つみて。

○さやかにてらす月影の、ひかりまとはしふる雪の、つもるけしきぞれもしろき。

○木毎に花の咲き匂ふ、外山の雪の朝ぼらけ、冬がれとしも見にぬなり。

## 春雪

○春といへど○花さかぬ○かつふるゆき○天ぎるゆき○つもりにし○春しらぬ○水のあわゆき○山かげ○草の上に○ふりてはこほる○れのがふぢき○春の山かぜ○のこりけり○春ともいはず○やゝ消えて○よもの山邊に○枝れもかちぬ○ふれどつもらぬ○春まだあさみ○花とみて○なく



うぐひすの

○峯のときは木つゆれちて、うらに消にゆく春のゆき。

○かすみのれくのあらゆきは、山の端ながら消にけり。

○たれかは春といはしろや、雪だに消ぬ松のかげ。

○庭にはあとなく消にはてゝ、うらにみだるゝ松の雪。

○春ともしらず閉ぢこめし、柴の戸ぼうにれとづれて、けふもふりきぬあわゆき。

○下もにわたる草の上に、つれなくふるや春のゆき。

○綻びうむる梅が枝に、花とまがひてふる雪は、やがて香にさへ匂ふなり。

○風にちりくる春のゆき、花の俤忍ばれて。

○殘れるゆきもむら消にて、梢かろげに見ゆる松。

○春とは知るや山かげに、やせのこりたる雪佛。

○もゆる春野にふるみゆき、見るがまに〳〵消にてゆく。

○やゝ咲きうむる梅が香を、袖にさうひし春の風、北にかへして雪ぞふる。

○ほゝゑみうめし梅が枝に、なきてもむつれし黄鳥の、行方もしらず雪ぞふる。

○春のうらよりふるゆきは、花のちりくる心地して、寒さも更にいとはれず。
○白妙のうでつらねつゝ、わかなつむ、野べの朝風ふきさえて、春のあわゆきふりいでぬ。
○梅にちりては花となり、柳にみだれて絮（わた）となるふれもしろのはるの雪げしき。
○春もあさ野のあわゆきに、あとつけてゆく雉の子の羽（は）たかくもきこゆなり。
○梅さく園の春風に、ちりくるゆきを花とみて、うぐれば袖に露の玉。
○ふるかとすればかつきえて、たまらぬ春の小ゆきかな。

## 雪消

○いつしかきえて○とけうめて○あとなくちりて○門川の水まさる○松にかゝれる玉水の○柴の戸つたふ○かすみうめて○下萌わたる春の野○心ざしふかくうめてし○きゆるはれうき山里の○遠山のはに○きゆるをいうぐ



○うら〳〵匂ふ春の日に、つもれるゆきもとけうめて。
○山のたきつせ音まさり、れちくる響凄じな、今か雪消になりぬらし。
○雪消の水ぞまさるらし、この川つらにもみぢばの、けふしも茂くながるめり。
○遠山眉もうちけぶり、かすみの衣よりほひぬ、谷間の雪もとけぬらし。
○梢かろげにみゆるかな、雪消に色もいやまして、みどりしたゝる峰の松。

## 霰 霙之部參照

○一しきり○あかつきの○玉とくだけて○あられふる○あらしにこほる○玉あられ○板まより○板ひさし○風さむし○たばしる○葉をつたふ○玉をしく○竹の小枝に○れとばかりして○ゆきふきまぜて○小夜ふけて○さゝのはに○月くらき○月にみがける○ねやもるあられ○ぬきとめぬ玉○さら〳〵と
○杉の板戸のひまをあらみ、夜半のあられのもれて入る、音も身にしむねざめかな。

○人も訪ひこぬ蘆ぶきの、庵にふりくる玉霰、れとせぬよりもさびしきや。
○ねざめわびしきまきのやの、落葉が上にふるあられ。
○大路をいそぐ人の聲、このあかつきの空冴て、ふるや霰のしきるにも。
○旅人いそぐ驛路の、すげの小笠に音たてゝ、あられふりきぬ夕まぐれ。
○ねやの上れふ柏の葉に、れとすさまじきあられかな。
○ふみよむまどのさよふけて、月影くるとれもふまに、雨戸をたゝく玉あられ。
○あられふる夜の風さむく、貧しき町は一しほの、冬のあはれぞまさりける。

## 霙 冬朝之部參照

○風さむき○ゆきとはならで○ふしまちがほの○しづくにぞしる○ぬれとほる○けふもみぞれの○みぞれつゝ○こほりもはてぬ○袖さゆる○夜はのみぞれの○風はやみ○たるひつたひに○みぞれする○ふりもたまらぬ○かきくもり○みぞれにかはる○松の葉しろく○ゆきまぜにふる○庭にたまらぬ



○竹のすがきの下さにて、よな〳〵ふれるみぞれかな。
○朝げさむくもれぼゆるは、今かみぞれのふるならむ。
○うきつの里に雲みちて、あらちの山にみぞれふる。
○高根の松に風あれて、ふもとの里にふるみぞれ。
○夕日うすれて我庭の、竹の垣根にみぞれふる。
○雲慘憺とひくくたれ、風飄揚とたかくふく、夕さびしき山本の、柴にみだれてみぞれふる。
○夜はふけゆきてわがやどの、まがきにみぞれの音ぞする。

## 霜 冬朝之部參照

○志もふかし○志もれきまよふ○おく志も志ろく○葉分けの志も○ゆきと見るまで○初ゆき○とくもむすべる○志もふる○落葉が上に○志もけぶる○今朝の初志も○丸木ばし○つもれば風の○消かへる○夜床の志も○淺ぢふ○むすぶ初志も○小ざゝ原○○野べのゆふつゆ○朝日かげ○志もかゝる○前の板ばし○ふみわけて○あかつきつぐる○あかときはやく

○まろ〳〵と○一足つゞにきゐ去りて○葉未のまも○下葉のまも○まもの花さく○むらみゆる○道芝まげく○かねのひゞきも○まがきの萩に○月影ふけて○八街の瓦に白く○夜半さむみ○あとこゝ見ゆれ○庭もはだれに○あかつきさむく○まもばしら

○烏鵲橋頭かりなきわたり、れく霜さむくふくる夜に。

○曉さむくれく霜の、色に千草はうらかれて。

○月かげのこる心地して、れくまも白き橋の上。

○芝生にまもの花咲きて、八目はかれぬ冬の野邊。

○高砂の尾の上のかねの音凄し、曉かけて霜やれく。

○有明の月かげきゐて、れくまもまろし朝ぼらけ。

○日かげまつ間の霜の花、枯生の床にさきにけり。

○千草の花にいろ〳〵の、錦おりつる秋の野も、たゞ一いろにまもがれて。

○つもる木の葉を名殘なく、拂ひにけりと見ゆる迄、庭ひと面の霜の朝。

○樋生(ひうき)ふ野の細みちに、夜ふけてまろき霜のいろ。

○月影さゆる淺ぢふに、まもまろ〳〵と夜はふけて。



○松の葉まろくまもさえて、ありあけの月の影のこる。

○竹の葉末のたわむまで、けされきまさる初しもの、まろ〳〵さえて風さむし。

○有馬の山に風さえて、霜にこゑある猪名の原。

○枯野の末の松一木、さびしくたちてなはて道、一すぢ長し霜の月。

○鍋やき饂飩よぶ聲も、月に氷りてしづかなる、霜夜を破る鐘の音。

## 露 朝之部參照

○しらたま○つゆの玉ちる○つゆばかり○はかなき○ひかりきよらに○艸の上に○つゆけき○みがける玉○つゆのまの○涙のつゆ○雨にまされる○こぼるゝ○つゆしも○あだなるものと○風にみだるゝ○衣手にれくゐ○あかつきつゆ○朝つゆ○夕つゆ○枝もとをゝに○月にさえゆく○さゝわけし袖○吹むすぶ○もろきかげ○月にきらめく○艸ばにすがる○うつりてすぐし○つゆわけ衣○むすびもとめぬ○苦の上のつゆ○秋のまちつゆ○つゆ氷る○朝な〳〵○れきあかしつゝ○ありしにも似ぬ○手にもと

られぬ○外のいろなき○萩もちり○人まつむしのこゑかれて○花野のつゆに

○さゞがにの糸をしぼしのよすがにて、はかなく結ぶつゆの玉。
○艸の葉末のつゆ毎に、みうらの月のかげやどる。
○艸の葉にれくつゆのいろ、月のかつらの雫かも。
○千艸の花にいひしらぬ、ひかりをうへておく露。
○秋も末野の眞葛原、艸木吹きしく小夜嵐、つゆも涙もとゞまらず。
○木賊（とくさ）かる、木曾の麻衣ふく風に、袖につゝまぬ玉ぞちる。
○詠むる袖にいつしかも、月のかつらの露れきぬ、はらはゞくだけむりの白玉。
○野原の風に秋たちて、玉とくだくる草のつゆ。
○小野の篠原月すみて、れくつゆふかみ秋ふけぬ。
○つゆの艸原わけゆけば、袖にくだくる露の玉。
○月の光にてらされて、かゞやくつゆのいろみれば、眞玉白玉あわび珠、かげもれよばぬ光あり。



○月のかつらの雫とも、見ゐてとられぬつゆのたま。
○すゝきれしなみゆくりでに、こぼれかゝれるつゆのたま。
○月にわけゆく艸のはら、もすそにきゆるつゆのたま。
○ふきしく風にはかなくも、きゐてあとなきつゆの玉。

## 霞 春日、春朝之部參照

○淺みどり○かすめるうら○うすくこく○かすみのまがき○草も木も○かすみうきたつ○山のはも○かすみわたりて○かすみ匂ひて○かすみのうら○いく千里○かすみたなびく○あけぬるか○かすみのうこ○千里をへだつ○かすみたなびく○あともなく○なごりなく○みえわかで○かすみをわくる○かすみの袂○波路の末も○春の色○野も山も○横ぎるかすみ○かすみにけりな○れぼろにかすむ○八重かすみ○けぶりにまがふ○朝日もかすむ○淺みどり○遠きながめ○夕ぐもり○月かげかすむ○あかつきふかくたつ○花のれもかげ○れぼつかな○天ぎらひ○春淺み○立なかくしそ○風たゐて○夜をこめて

○鴎の浦回もはる〳〵と、かすみわたりて天つ雁、歸る越路の山までも、詠につゞくけしきかな。

○なごの浦回の夕がすみ、入日をあらふ沖つ波。

○空に聳ゆし宮柱、朽ちてあとなき故郷に、むなしくたてる春がすみ。

○川風さむしみかの原、かすみの衣かせの山。

○霞をかくる葛城や、たかねにかざす春のいろ。

○袖しの浦のあさがすみ、たちかさねたる沖つ浪。

○昆陽の蘆火の夕烟、なほたてうへてうちかすむ。

○かすみて遠き清見潟、ほのかに見保の松の月。

○みどりはてなき草の原、めもはる〳〵とうちかすむ、武藏野の原をわけゆけば。

○花どりのいろにもねにも先だちて、時しも春のかすみかな。

○ふもとはきにてはれうもる、霞の上にほの〳〵と、のこれる山のうるはしき。

○子等が玉手を巻むくの、ひばらのおくもかすみけり。



○昔あそびし奥山の、みてらのかねのひゞきくて、夕べさびしき大空に、月はすみていでにけり。

○かすむゆふべのながめこそ、春は一しほ身にはしめ。

## 霧 朝之部參照

○秋ぎりの○きりふさがれる○朝ぼらけ○入相のかね○初秋の○きりにくもれる○うちしめる○佐保の川ぎり○きりのとばり○浦のともぶね○きりの上ゆく○袖のあきぎり○分けわびて○川上の○こむる朝ぎり○きりよりくるゝ○きりふかみ○たにぐ〳〵に○打きらし○里やいづこ○夜をのこす○きりの下道○きりの海○天つきり○きりまよふうら○夜半たつきりの○立ちわたる○きりたちのぼる○舟よばふ○ふもとの里は○ふもとはくらき○朝ぐもり○ゆくさきたゞる○山路こむる○烟とのみぞ見えわたる○おきうの風に○川瀬のきりのたえ〴〵に○槇のした人○ほのぼの見ゆる○霧のまがき

○柴の戸ぼうを立いづる、袖までしめる秋ぎりの、ふかきゆふべのあはれか

な。

○猪名野をくれば有馬山、家路はるかにたつ霧。

○きりにうぼてるなれ衣、いまだひなくに朝立ちて、ひとりか君が山路ゆく。

○浦回幽に立つきりは、あまの鹽やくけぶりなり。

○くらぶの山ときゝてだに、霧のふかさぞおもひやる。

○千艸の花を折らむとて、出でにしものを秋の野の、霧に惑ひていたづらに。

○駒のたつかみ霧みえて、夜るふけわたる山の下。

○山路の霧をふみわけて、雲の上ゆく秋の旅。

○楸（ひさぎ）の枝を吹きしをる、嵐の末に波見ゐて、たえ〴〵はるゝ河霧。

○山のは離る薄霧を、かたぶく月の影に見て。

○松風たかく月すみて、となせの川に立わたる、霧もはれゆく夕まぐれ。

○山路へだつる夕ぎりに、ゆくへあやぶむ關の戸も、今はなき世ぞのどかなる。

○たごなはりたる五百重山、霧ふかゝらし菅笠の、雫におつる月のかげ。

○秋の日數も深草や、千草のいろも見えぬ迄、ねたくもつゝむ夕ぎりや。



○山もとこもる夕ぎりは、裾野の萩の匂ひかも。

○高根のみ雪うらはれて、たちも及ばぬ富士川の、霧ふきはらふ川原風。

○入江の蘆のほの〴〵と、あけゆくうらに立つ霧の、たゞまに見ゆる海士（あま）小舟。

○逢坂山の關越えて、打出の濱をけさ見れば、近江は霧の海にして。

○隔つとすれど志賀がに、あくる朝日に末きえて、霧のたゞまにほの〴〵と、見ゆる野もせの萩すゝき。

○妹背の山の名やねたき、秋のはつぎりたちへだつ。

○ふもとをこむる川霧に、高根のみこそ見えにけれ。

○河瀬の霧の絶ま〴〵に、遠方人のかげ見えて。

○河瀬も見えぬ夕霧に、横の島人舟よばふ。

## 火

夜、夕之部參照

○石の火○松の火○衛士のたく火○あまのたく火○火をきりいでゝ○宿の燈火○てらす火影○風の前なる○むねの火の消ゆる時なく○殘るもさ

びし○光もうすき○打てたく火○ひかりも細し○もゆるほのほ○しらぬ火○あし火○窓のともし火○電燈○瓦斯の火影○またゝく○かぞやく○壁にうむけし燈火

○海人のたく火か磯山の、まつの木かげにきらめくは。

○もにたつ煽すさまじく、白灰みだれて風にちる。

○夕ぐれいづく里川の、堤に沿へる杜蔭に、ほのぐ〳〵見ゆる燈火は。

○せゞの夕なみくれうめて、ともしびかすむ山里の。

○ゆきゝの人の影たにて、電燈すごく夜はふけぬ。

○外重の庭に日はくれて、衛士がたく火のかげあかし。

○玻瓈の夕日の影くれて、ゆふべの色のほのぐ〳〵と、街を包むとみるほどに、やがても開く電燈の花。

## 煙 山里、山家、夕之部參照

○きにぬべく○朝けぶり○民のかまどのけぶり○かまどの朝けぶり○かげうすくなる○風をいたみ○鹽屋のけぶり○青柳のけぶり○うすけぶり○夕げたく○たなびきうひて○たえ〳〵に○をぐらく○雲井まで○松のけぶり○空につゞきて○里わのけぶり○鹽木の烟○川邊づたひに○ゆたかになびく○山田の里は

○なみ風たゝぬ日はあれど、烟はたにぬしほがまの、浦回のけしきれもしろし。

○風にさわぎし雲はれて、殘るはもしほのけぶりなり。

○片山林日はくれて、あなたの空にたなびくは、たが夕げたく烟かも。

○里のわらべがかきよせし、落葉やたけるうす烟、たなびく杜の夕景色。

○軒端をめぐる夕けぶり、たちのぼりては天の原、たなびく雲とやなりぬらむ。

○梵鐘夕をつげて長堤風悲み、田家かげ消にて薄烟幽に殘る。

○のぼるけぶりを知るべにて、君が住家やたづねても。

○夕ぬる雲に山々の、影かくれゆくうなたより、しるべうれしく立つ烟。

○夕べ〳〵に立ちのぼる、麓の里の薄烟、立て煩へる世渡りの、心細さもかつ見にて。

○竹の中道日はれたちて、はるかになびく薄烟、見ゆるわたりや里ならむ。
○松の一むら末消えて、のこるや里のうすけぶり。
○行方定めずりこはかと、辿る旅路の夕ぐれに、知るべうれしく立つけぶり。
○民のかまどの賑ひも、空にしらるゝ夕けぶり。
○人めまれなる山里の、すがたもみにて、木のまより、柴をり〳〵に立つ烟、うすれていとゞあはれなり。
○御代ゆたかにて賑へる、民のかまどの煙さへ、夕べのいろこうさびしけれ。
○ともしびうつる竹村に、のこるもうすき夕けぶり。
○さびしくゝるゝ山本の、里わをめぐる夕けぶり。
○わかば色ます夏山の、ふもとになびく夕けぶり。

## 水 河之部參照

○水のけぶり○水かゞみ○かけひの水○山の井の水○わきたつ水○きよき水○ゆき消の水○みなの玉水○みなぎる水○いはつぼ○こぐれの山水○岩たゝく水○はしり井の水○やり水○水のあやなる○みかは水○ぬる



む水
○すみてかひある世ならねど、なれのみひとり清きかな、あはれ小川の水かゞみ。
○木の葉をくゞり岩にふれ、苔にうもれて谷水も、うきしづみある世になが
る。
○すゑはのぼりて大空の、龍のみやこに行くみづも、れもへば雲のしづくな
り。
○くむひとまれの山の井は、水の面にかしのはの、かさなりれちてくまもな
し。

## 氷 冬日、冬朝之部參照

○風さむみ○こほりはてたる○氷にけりな○氷りわたれる○氷の上ゆく
○氷のせき○氷のひま○氷の海○あつこほり○うすらひ○氷の床に○氷
のかゞみ○氷をくだく○うれながら○袖の氷をわぶる○垂氷してけり○
落葉ながらに○すはの海の氷のはし○岩もる聲を忍ぶ○棹にくだくる○

月の光をとぢむる
○あしまの氷一重して、よひのあらしの吹きたにし、名殘あらはに見ゆるかな。
○渚のあたり氷るらむ、れどころたゆれ磯の波。
○氷室のれものあときえて、賣りひさぐ世となりにけり。
○氷賣る子の聲ばかり、夏もよろなる市の内。
○氷もとけて青柳の、みどりのかみを洗ふ水。
○池のおもてはさゞなみの、あやれるばかりとけうめぬ。
○岸のやなぎのかげみとも、見えし氷はとけそめて、岩間の苔のひげ洗ふ。
○日もうらゝかに、うちはれて、庭にかげやく光には、池の氷もうちとけて、春の心にまかすらむ。
○ちまたにまきしやり水は、いつか氷りて寒月の、かげやくひかりものすごし。
○夏のゆふべにけづりひを、ひさくちまたのすゞしさや。
○春ふく風にあべかねて、とけうめけりな池水の。



## ○地儀部

### 山嶽 山家、樵夫、獵夫之部參照

○のきばの山○は山しげ山○四方の山々○うがひの山に○まくらの山○遠山の端○めぐりの山○山路辿りて○外山のすそ○草のは山○みやまのおく○みねつゞき○もゝへ山○檜原がれく○竹の下みち○五百重のみねはてもなし○たゝなはる山○外山のみね○浦の柚山○雜木山○みねより峰○雲たなびきて○こだまにひゞく○山彦こたへ○たづきもしらぬ○みねたちならず○たかね〳〵の○山秀で嶺さかし○及もて削る○むかつをの○ふもとのみねも○山ふところ○嵎起する○兀として○鑿もてうがつ○心あてなる白雲は、ふもとの峰にかつきゐて、れもはぬ空にうばだつたかね。
○足柄山よりあふぎても、猶くもねなりふじのみね。

○ふじのたかねに來てみれば、世は天地と分れてより、まだいくほどもたゞざりけり。

○てる日に近きふじのねは、今もかみよのゆき河にて。

○飛鳥哀猿の聲もなく、柴人樵夫のみちもみゆず。

○木がらしの雲追ふ影も遠山のよりにかくれて。

○猿の齒白き峰の月、吠ゆるに似たる谷の水。

○ひとり深山の秋の月、あはれをたれにかたらまし。

○月は小さく山やせて、谷間の水のこゑほそし。

○巖松は天にそばだちて山ふかく、谷めぐりて諸木枝をつらねたり。

○雲ぬる山のわくまでも、うきよの風はおとづれて、妻とひわぶるさをしかの、聲もかなしくきこゆなり。

○峨々たる山のつらなりて、鳥もかよはぬかたうばに、幽にひゞく水のおと、流れの末は浮世かな。

○峰の松原きりはれて、尾上にのぼる秋の月。

○たづきもしらぬ奥山に、友よぶ鳥のこゑさへも、たゞてさびしき夕まぐれ。

○老木枝をさしまじへ、ひるなほくらき山のわく。

○巖峙つて劒の如く、道はうねりて羊腸の如し。

○波濤に似たる山つゞき、幾重かさなる峯と峯。

○ひきのこしたる鋸山、のみもてうがちし斷厓絶壁。

○峯には老松枝をまじへ、朝一片の雲に咽び、谷には瀑川石流れて、夜孤林の月を碎く。

○鹿なき猿叫びて孤雲憺たり、葉れちり泉ながれて片月のこる。

○晴嵐既にかすみをこめて、磵道いよ〳〵春ふかし。

○やみのうつゝの高津山、つたの細道月ふみて、むかしの人のあとゝへば、松風ならで聲もなし。

○みやこをへだつ八重の雲、峯よりわきて空にのぼる。

○かまどの山の名もおもるく、秋はこがれて春はもえ、かすみもきりもけぶるなり。

○松風花にくるひては、ゆきをちりぬくもとなる、哀猿雲に叫んでは、心をなやましはらわたをたつ。

○ときはかきはに動きなき、すがたもたかき山又山。
○わけこし方はいづことも、知らぬ山路に行きくれて、松の木かげにたゝずめば、雲に嵐の聲すごし。
○勝地もとよりぬしをさだめず、水は智者を迎へ山は仁者に從ふ。
○泉ながれて谷の心冷かに、山はみなしみながら秋の聲。
○鹿なきましら叫びて雲のいろかなしみ、葉おち泉咽びて月の影冷かなり。
○みどりのいろは遠く青海原にのぞみ、泉の聲はゝるかに白雲の中に入る。
○連峰の天を去るも尺にみたじ、枯松さかしまにかゝりて絶壁により、瀧のれと萬壑にひゞきてなるかみの如し。
○煙むなしく雲ちりて山またあらはれ、兩崖あをくして谷くらし。
○山の嶺には孤輪の月をかざし、洞の口には一片の雲を吐く。
○山は靜かなり桃花流水の春、人は言はず富貴榮達の事。
○かすみはゝれて風をさまり、山しづかにして花れのづから紅なり。
○ちりもくもらぬ鏡山、としへぬる身の影いかに、いざ立よりてみてゆかん。
○海原とほくきりはれて、波にきらめく影きよく、月も眞澄のかゞみ山。



○れくも知られぬ山なれや、かすまぬみちもまどひつゝ。
○木の葉みだれてあらち山、みねのあわゆきふりしきり、うふわびしらに鳥のなく。
○三保の入海田子の浦、向ひにたちて眞白なる、ゆきのたかねにさし登る、朝日匂ひて。
○山の小額眉黛（まゆずみ）の、際なき空にほのぐ〳〵と、片われ月のさし櫛や。
○こゝは名を得し大江山、生野の道はなほとほし、天の橋立よさのうみ、たゞめの下に見ゆるなり。
○ふたらの山のみやばしら、たてしむかしをしのぶれば、天つみそらの日の光、たぐひなかりしいさをしや。
○やまとしまねにふたつなき、たからとなれる不二の山。
○春は花のくもをかざし、秋はもみぢのにしきをきる。
○みねの松原きりはれてふもとにかゝるしらくもの。

## 春山 春望之部參照

○かすみのうちに○うら〳〵と○淺みどり霞む○山はみながらさくら花
○白雲とみしは○山のかひより○春知る山○春立つ山○かすみにこもる
○山より山に○山本かすむ○さくらさく○遠山眉○そらはれて○とりな
きて○春きにけりと○花のはだれに道はとぢ
○かへさわすれて○けふはたをらで○さくらふきまく○山おろしの風○
枝もたわゝに○花をふみゆく杣人○百千どりなく○雪の中ゆく心地して
○かすみのころも○みどりひきなす○帶なす川の○白雲の八重たちつゞ
く○岨の細道つたひゆく○斧の柄も朽つ○朝日匂へる○雲間にかすむ。
○春山人なくひる靜かにして、伐木丁々山又ふかし。
○春風さむくとりなきて、山寂々と日はくれぬ。
○鹿子まだらにきえのこる、雪もしろしはるのやま。
○花のさかりはよしの山、里までかゝる白雲や。
○腰のひさごに伴ひて、わけ入る山は白雲の、八重たちつゞく岨つたひ。
○ひかり匂へる春の日の、三笠の山の朝ぼらけ、かすむみうらのほの〳〵と。
○たなびく雲と見わつるは、高嶺にさける櫻ばな、匂みなぎる春の風。



○かすみの衣ひきまとひ、花のかざしをよりひては、ゑまひをかしき春の山。

## 秋山
秋望之部參照

○もみぢかざす○きりはれわたるたかねより○木の葉まじりに○紅葉ふ
みわけ○みねろす谷○峯のまつばら○紅葉々たきて○月影さゆる○たか
ねにすめる○梢をつたふ月の影○山下いほ○山のはに○をち方白き一す
ちの流○山路のきく○谷川のねとさえて○風あらく○しもれきりめて○
山風に○山ねろしの風○かさなる峰○夕ばにまさる○紅葉てりうふ○か
りなきわたる○山めぐりする○ふりうゝぐ○あはれはまさる○秋山あは
れ○秋風さむみ○正木いろづく○涙もよほす○ぬるでの梢○つまよぶし
かの○みねたちならし○さよふけて○月白く○立ぬる雲の○猿ないて○
一行の斜雁○あきのしるし○風さわぐ○あはれすゝむる
○峯にあらしのこゑあはれなり、ちるかまさきのかへらきや。
○一行の斜雁は峯をよこぎり、萬朶の紅葉はふもとに匂へり。
○月に狹ぎりのはれゆきて、みねあらはなる秋の山。

○泉ながれて谷の心冷かに、山はみながら秋のこゑ。
○あらしのさうふ紅葉ばに、時雨の柾もいろづきて。
○分け入るまゝに色うひて、山路と共に紅葉々の、ちしほも深き秋の嶺。
○一時雨せし片岡の、はしの紅葉のぬれ色を、照らしもあへず日はくれぬ。

## 山里

○山ずみ○山のたつける庵○隣にうとき○すむ山○柴の門○よろめさびしき○住めば都のこゝちす○つま木の烟○山のいほ○いはほの中○松の戸○松の門○世のうき事もしらず○谷の戸○柴垣○杉の下庵○壹の垣根○竹の柱柾のとぼそ○苔のむしろ○眞柴の軒○軒の松風○さびしさは常なるやど○妻木こる斧のひゞき○軒ばにかへる雲○片山里○のがれ住む○外山の里○前の柴橋○とふ人もなし○軒ばを下る柴人○木こりの歌○うしろの山○軒ばの嶺○山ふところ○瀧の音○松のひゞき○よりにれもひしさびしさ
○ぬれて妻とふ小雄鹿の、聲を知るべの山里に。



○ふしれもしろき馬子歌は、山下道に聲きこえて、殘るは峰の松の風。
○薪をくだく柚人の、斧のひゞきに花ぞちる。
○秋の山里月ふけて、鹿のなくねに紅葉ちる。
○うすきけぶりは帶に似て、山路の腰をめぐりつゝ、茜のいろの折々に、小川の水にうつるなり。
○山に聲あり人やある、みれども見えずきりふかし、椎の木の下をめぐれば、さゝやくものは岩清水。
○衣手さむく風さえて、ゆきげもよほす山里に。
○世をのがれたる山里は、雲をやがてもまがきにて、隣を雲がへだてける。
○世をのがれずむ柴の戸に、嵐のれとの身にしみて、みやこゝひしき山のれく。
○谷の鶯ねになくは、なほ浮世なる山里の、風やつらしとかこつらむ。

## 河

舟、蒸瀧船、橋之部參照

○底のみくづ○水のみなかみ○瀬々のぬぐひ○谷川○山河○小川○野川

○杣川○瀬だにの水○あゆふす川○うづまく川○田川○いさら小川○月
ながるゝ○河よどに○よどむとも○川隈に○川わだ○川かみ○川しも○
流れのすゑ○みなわさわぐ○たぎつ河内○白ゆふなして○くひなゝく○
まこも茂る○みなぎる○川やしろ○河上かすむ○空に入る○空をまきて
走る○水旱き○ながれするどく○石をながす○いきほひつよく○さかま
きて○橋を流す○岩たゝく○かはぎし○はや瀬に○瀬をはやみ○いはに
せかるゝ○水遠くより來る○石間をくゞる○夕日のかげ○汀の柳○春ゆ
く水の○ゆきげ○ゆきぞけの水○すさまじく○矢よりはやく○水勢滔々
○淙々として○浪立ちて○水れとすみて○月もながれをたづねて○岸と
ほく○舟うけて○花のいかだ○花の白波○ふき入るはなも○月影うつろ
ふ○かもめゐる○みやこぢうく○去つてかへらず○東に走る○一日も
とゞまらず○愁人のためにとゞまらず○ゆく水のはかなき○ながるゝ水
と月日○あけくれに○足をあらふ○にごれる水の○くみて知る○あゆこ
さばしる○砂いきて走る○たぎつ瀬の音○なみのあやれる○いづこのは
て○すむ水の



○竹村うよぐ夕風に、釣の糸なびく川づら。
○なみにきらめくかぎりびは、うぶねやさせる長良川。
○水上かすむ隅田川、簑きて下す筏士に。
○水はたぎちて白ゆふをながし、玉は碎けて花をちらす。
○ながるゝ水はたにねども、しかもれなじき水ならず、流れに浮ぶうたかた
は、消にかつむすんでとゞまらず。
○我袖ひちてむすぶ手の、影さへ見ゆる山の井の、ながれにうつる老の身も、
わかがへりたる心地して。
○柴のいほりの西南、めぐりてながるゝたきつせに、里のわらべがたはふれ
の、すさびにかけし水ぐるま。
○簾の川上はこゝなれや、山そびえ岸たかく、あらしも波も聲々に、物すさま
じきけしきなり。
○ながるゝ水も隅田川、きよき波間に月うがふ。
○かならず春にあらねども、山本かすむ水なせ河。
○月はかたむく松の蔭、川遠白し月の舟。

○月は氷の如くひかり砕けて、水のながれに黄金をちりばむ。
○小川の水のねとふけて、田のもにきよき月の影。
○音羽山みねの下枝の滴にも、にごることなき清水の、ながれをたれか汲まざらむ。
○岩にせかるゝやま川の、水もうきせはある世なり。
○むかしの波はかへりもやらず、瀬となりふちとかはりつゝ、流さだめぬあすか川。
○ふるきながれのあとゝめて、ありし昔もくみてまし、よし野の川の夕まぐれ。
○水のながれのいとゆるく、拍子もれそき水ぐるま。
○江樹むなしくしもにおちて、江上布帆のかげとほし。
○棹歌數聲夜闌に、影は清し明月峽、松琴萬曲風冷かに、露は白し潯陽江。
○とねの川づら引きのぼる、舟子の袖に春の風。
○淀の川舟さす棹の、雫さへひて河うひの、柳をわたる春の風。
○春ゆく水の末とほく、白帆かすむや朝ひらき。



○水のながれもきよき瀬に、ちりうく花の二ひら三ひら。
○里のわらべが下りたちて、小魚あさされる早き瀬に、ながれよりくる花の枝。
○かゝる水車のねとゆるく、流れもきよき川岸に、さくや李の花盛り。
○谷の川れと雨とのみ、きこゑて松の風もなし。
○影見し水もこほりつゝ、月もながれぬ冬の川、たが心をか碎くらん。
○背となり腹となる山又山、淵となり瀬となる水又水。
○春の風は山祇の髪を梳づり、秋の水は河伯の心をあらふ。
○長江遙にながれて天際にみなぎり、孤帆遠くうごきて碧空につゞく。
○水上遠く帆影かすみ、兩岸の青山夕日に匂ふ。
○花ふきおろす山風に、櫻にうつむ大井川、こぎゆくふねのあと見ゑて。
○みねのしらゆき消ぬらむ、春行く水のちくま川、ながれの末もすみぬめり。
○神代ながらの末うけて、すめる宮居のみたらしや、ながれも清き五十鈴川。
○たかねのみゆきとけぬらし、清たき川の白浪の、花とさやかにもまさりゆく。

○山もとかすむ水無瀬川、夕は秋とたれかいふ、春のけしきのねもしろさ。
○岸の青柳風ふけば、水のうこにも殘みどり、春のいろなる浪ぞたつ。
○月もながれをたづねてぞ、影はすみけるいさゝ川。
○ながれもはやきたきがはの、瀬はとしつきのたぐひなり。
○こぎゆくふねの影きえて、きりたちわたる河のねも。
○夕日は水にうつろひて、にしきをあらふ水のねも。
○都どりうく大川の、きしのさくらはちりはてゝ、なみにたぐよふ花いかだ。
○雨に水かさもいやまして、岸うつなみもたかまりぬ。

## 海 漁家、漁人、舟、蒸滊船、舟人之部參照

○海原○八重のしほぢ○沖邊○海わたるふね○わだの原○わだづみのかざし○沖つ汐風○世をうみわたる○千ひろの海○潮瀬○うらの入海○沖とほく○しほさゐに○ありそ海○海の中みち○こしの海○潮のさかひ○なぎさ近く○磯山あらし○貝ひろふ○五百重なみ○北の海○氷とざす○潮のみちひ○青海原○浪靜かなる○海のねもて○わだづみのかみ○つり



ふねあまた○沖つしまやま○汐の八百會○とわたる舟○碧波とほくして○白帆風にうごく○ながめやる○四方の海○あらしほさわぐ○なだの汐風○山下海○汐げの烟
○大海原のゆふまぐれ、島山うすくかすみつゝ、こぎかへるなりあま小舟。
○八重の汐路もはるゝ〳〵と、みわたせば、月代さしぬ和田の原。
○波は岩間をかみてゆき、洞は鹽吐くあらいその。
○海原遠く打かすみ、入日はなみにいざよひて。
○ゆたのたゆたにこぐ舟も、庭しづかなる海原の、ひろき心のめぐみなり。
○浪路のどかに春の海、白帆かすみてゆく舟。
○見わたし遠き砂の上に、のこれる人の足あとも、渚にきよき月影に、さやかにみへて。
○汐路をはしる眞帆見れば、船はあらしにのれるなり。
○前なる海には千どりなき、後のまつには風あるゝ。
○遙かに見れば夕陽の、影はのこりて紅に、浪路をそほくそめわたす。

○沖の小島による浪の、たちゐに見ゆる海人小舟。
○沖の鴎やいそちどり、しばなく浦に汐みちて。
○いなの港のあけぼのに、きりたちこむる昆陽の松。
○夜ふかき波に月さえて、沖邊をとほく舟ぞゆく。
○盡きぬなげきに長きよを、れもひあらしの浦の月、みるから袖にかゝる波。
○空たかし月のかげ、海とほし浪のいろ。
○よせてはかへり返りては、又よせてくる沖つ波。
○岩間は波にぬはれけり、波の衣をきる岩は、綻びて又ぬはれつゝ。
○氷のひまを行く小船、波にも道はある世かな。
○とわたる月の影すみて、海のれもてはかゞみのごとく、
○月の出汐の沖つなみ、かずみのうこをこぐふねの、海士の呼こゑ里ちかし。
○淡路島山島がくれ、明石の浦の浦傳ひ、遙につゞく印南野や、浪もつかなる播摩灘、いづこを泊と定めまし。
○月海上にうかびては、波濤黄金を碎きつゝ。
○沖をかざれる島山の、松のかげにやなりぬらむ、まほには見わぬいさりぶ



ね。
○はなれ小島と見わつるは、浮べる沖の鯨なり。
○五百重なみたつ沖邊にも、かもめのあさる庭はあり。
○みどりいろこき島かげに、櫻鯛つるゆさんぶね。
○春のどかなる海づらに、ちるさくらだいつり上げて。
○白鴎ねむる春の海、浪路の末もかすみ合ふ。
○かすみわたりてのどかなる、春の夕の波の上。
○入日をあらふ沖つ波、かすみがくれに帆もみわて。
○かりのすがたもれぼろ月、うつす繪島の島かぐれ、こぎゆく舟のほのかにて。
○屏風の如き山、むしろの如き海、舩を叩いてうたふ月明の中。
○蒼波けむりて水漫々、舟は鳥の如くとびて天をかすむ。
○八十もまかけて和田の原、八重のしほ路をこぎゆけば。
○風歸帆を送る萬里の程、江天渺々として水平なり。
○八重の汐路の沖つなみ、立かさねつゝはるゝゝと、緑の空をあらふなり。

○雲井にまがふつりふねのうきつ沈みつみにがくれ、沖つ志ほ風ふきあれて、磯山おろしおとたかし。

○うしほみちくる春の海、浪平かに風なぎて、かすみがくれの沖の島、ゆきかふくねものどかなり。

○水やうらなる和田の原、千ぶね百舟にし東、かゆきかくゆきゆきかひて。

○沖つ志ほかぜふきたにて、日かげのどけき海の面、みだれていづるつり小舟。

○ひかげ幽に残るなる、肥路の遠山見にうめて、かすみわたれる海原の、はてなきいろや幾千里。

○西吹きすさぶ武蔵の海、あはの遠山かつきにて、沖にむらがる雲の波。

○相模の海のゆふなぎに、みだれていづる海士小舟、はたのひろもものいざつらむ。

○水やうらなるわだづみの、うこともしらぬなみ間より、ほのぐ〳〵いづる月の影。

○かすめる海のとほじろき、夕の庭を見わたせば、入日をあらふ沖つなみ。

○すゑのまつ山ほのぐ〳〵と、浪にはなるゝ横ぐもの、うらと水との末きにて、たなびくかすみとほしろく。

○なみもたゞさる朝なぎに、こゑうちあはせこぎいづる、海人が小ぶねの櫓のひゞき。

○いろうつなみのこゑあれて、うらかきくもりあらしふく、大わだの原みわたせば、さかまく大浪うち合ひて、すさまじなんといふばかりなし。

## 海濱
浦、汐干之部參照

○濱きよみ○濱の眞砂○わすれ貝○濱のとまや○濱ゆふ○はま松が枝○濱づたひ○干がたのふね○うちよするなみ○砂に白き月の影○小濱のしみ○濱ちかく○漁家數軒○浦のとまや○浦づたひ○浦なみたかく○うらなつかしみ○うらのとまや○うらの玉藻○浦のともしび○浦こぐふね○浦のまつばら○八百日ゆくはま○濱田の穗波○濱ひさご○はまのとまや○あらき濱べも○浦のとほ山○うらわの里○うらさびし○浦風さむみ○貝ひらふ少女○干がたをさして○浪の花さく○白砂青松○烟はよこたはる

漁家の濱○平砂千里○岩にくだくる波○よする浪○玉と砕けあられとちりて○月いづる濱の夕ぐれ

○漁火ひかりさむくして波をやき、驛馬聲とほくして山をすぐ。

○夕日波平かにして漁歌遠く、秋風岸はるかにして客帆さむし。

○雲はれわたるとほ山林、朝日はれゆく海邊のひとむら。

○いその松が根あらひては、岩にくだくる白浪。

○しるべも波のそなれまつ、幾世へぬらむみどりのいろ。

○夕のうらの雲の波、月の行くへの末消にて、かすみに浮ぶ鹽濱の、松の一むら影くらし。

○春の濱邊の夕あさり、海人もかすみの衣きて。

○沖つしほ風をさまりて磯のまつばらなみ白し。

○秋の夕の浦さびて、渚に白き浪のはな、さくまもあらずかつちりて。

○磯山越にて見かへれば、わがすぎきつる足跡は、砂地さやかに殘るなり。

○たれこゝもとに須磨の浦、濱手傳ひの通路も、心ぼうしや小松原。

○長汀砂深くしてゆくもかへるが如く、萬松枝茂くして風波聲をあらうふ。



○花も紅葉もなか〳〵に、それもひけたれて哀なり、浦のとまやの秋のくれ。

○みなぎる水を天にひたし、むらだつ雲は浪にうく。

○漁夫のいさり火ちら〳〵と、星か螢か影うすし。

○今しもみちくる潮さゐに、月のみふねやうかぶらむ。

○この浦にては春たてど、みるめのなみのそとばかり、花のさくべき卯もなし。

○松はみどりに砂は白く、風きよくして浪たかし。

○みるめだになきあらいそに、波はかすみのいろもとむらむ。

○高砂の松のはる風吹きくれて、尾上のかねもひゞくなり、波はかすみのいうがくれ、それとこゝろしほのみちひなれ。

○海路はるかにすぎくれば、木の葉に似たる釣小舟、よせてはかへる浦波に、かもめとぶなりこゝかしこ。

○いづこはあれど鹽かまの、浦こぐふねの海士人が、ひくや網手のそれもしろさ。

○海人（あま）のしわざのかず〳〵に、いとまも浪に身をよせて、かすみわたれる海

原に、つりする舟もかすかなり。

○羽衣のむかしがたりも、まぼろしの三保のまつばら。

○花と浪とのいろわけて、朝日のぼるや磯の山。

○志岐津の浦の春の浪、たつ朝かすみあはぢしま。

○月と花とのおぼろ夜に、ひとりかすまぬ浪のおと。

○住の江の浦の松風ふきたえて、かすむや春の海原。

○富島の磯屋昆陽難波、うつし繪しまの名はあれど、いかでふでにも及ぶべき。

○けぶりになるゝ浦人は、かすむもしらで月やみる。

○きりのまがきの島がくれ、いざや一葉の舟うけて、昔のあとをみちのくの、千賀の浦わに棹さゝん。

○沖つ島山うら〳〵を、かすみの遠にかげきにて、うよふく風ものどかなる、鴎のゆめをやり〳〵は、わどろかしてもよするなみ。

○月も出汐になるみがた、浦風きよきよひつきの、うらさびわたるけしきかな。



○わびつゝ辿るみちのくや、からきき浮世の鹽竈の、うらみてわたる憂身には、よるべもいざや定めなく。

○鹽なれ衣袖さむき、うらわの秋のゆふべかな。

○なにはの浦の春のくれ、潮路はるかに見わたせば、かすみにうかぶ海人小舟。

○しばなく千どり聲ふけて、ふけひの浦の濱風に、月かたむきぬ繪島潟。

○松ふく風にまかせつゝ、明石の浦の海人小舟、せとのりいるゝ朝なぎや。

○あまのとまやのうすけぶり、まれなるうらの夕げしき、靡ける末もさびしきや。

○遠里小野は名のみして、昆陽住の江の浦づたひ。

○松風ふくや磯邊の老松に、浪の鼓もうちりひて、よにれもしろき浦づたひ。

○日もゆふぐれのしほけぶり、立うふかたや漁火の、影ほの〳〵とみわたせば、げにおもしろき鹽がまの、うらめづらしきながめなり。

○しもにをれふす蘆原に、つのぐむほどの春の風。

○しほみちくらし夕月夜、蘆の葉こゆる浪のおと。

○彌生のうらの花ぐもり、かすみをつゝむ袖の浦。
○芝浦かすむ春の夜の、月もおぼろにさす棹の、なみにまかする漁ぶね。
○浦の松原けさいでゝ、なみぢはるかに見渡せば、白帆かすむや海人小舟。

## 湊 海、舟、濱浦、舟人等之部參照

○湊のせど○みなと田どほく○みなとの入江○みなとの洲○みなとわかれて○みなと入のふね○みなとをいづる○うでのみなと○みなとの沖にて○みなとこぎいづる○百舟千舟きよる○みなと風吹あるゝ○舟はつるみなと○八十舟よする○汐もかなひぬ○舟いだす○荷づみするこゑ○大ぶね小ぶね○みなと風○月まてば○ふるさとのゆめをあつむる○橋は林の如く○碇をろして○軍ぶね○沖合とほく○うちよするなみ○出ふねいりふね○内外の國の船○帆舟黑舟さま〴〵の○波止場○波止場の波のよるひる○なみあらき○こゝろくにのふねの○ともづなときて○れひてに帆をあげて○百千船はつる湊○五つの港横濱、神戸、長崎、新潟、箱館朝びらきこぎゆく舟○烟はよこたはる○濱笛のひゞき○はるかになりて○あつまる舟○はしけぶね
○もゝふねはつる湊江は、舟子のこゑの夜一夜、さわぎてうらもあけぬめり。
○たちわかれこしふるさとの、ゆめをあつむる湊江や。
○濱笛一聲なみにひゞきて、はやくもいでたつ蒸濱船。
○碇をおろす大ぶねの、あたりにあつまるはしけぶね。
○いはほの如き大ぶねに、ちりばふもゝちのさゝぶねは、木の葉のうかぶにさも似たり。
○烟は沖に横つて月ほのぼのらにかゝり、濱笛はみなとにひゞきて波やうやくさわぐ。
○なみも立たざるみなと江の、月のでしほに舟出して。
○日毎夜毎にでいりする、大ふね小ぶねのかず〴〵は、みくにゝとみをはこぶなり。
○いづこのふねの舟人か、月にふきなす横笛ぞ、こゑはなみ間にすみわたる。
○空にも風なきみなと江の、あなたこなたに舟人が心やりなる舟子唄。
○弦月一片ほのぼのらにかゝりて斷雲風に收り、波濤一聲ふなばたをたゝき

て、月光雲にかゞやく。
○湊のせとに月ふけて、荷づみするこゑかすかなり。

## 湖澤 沼、入江、鴨、水之部參照

○玉江○れもひ入り江○流れぬ沼○みさび江○菅かる澤○さゞ波よする○底のたまも○みなと江○ぬまのふる江○澤の水かげ○野澤かぐれ○夕日うつる○すみわたる○まこもかる○魚ありぶ○河骨の花さく○うこひなき○鴛のうき巢○大わだ○よどむ水○しほならぬ海○浪たちわたる○ながめは廣し○一望の金波月たゞよふ○汐瀬に似たる○いざりぶね○みち山なき○みるめなき海○氷のはしをわたる○氷の上の通路○いざはまつどに○からきうき世も○一面の平湖月滿山○月のかゞみ○さもいさぎよき湖の、水滔々として波悠々たり、ながれてちりの世にいづる

○こけのひげは波に洗はれ、柳のかみは風にくしけづらる。
○雨をふくめる漁村の柳、夕を送る遠寺のかね、ながめはひろし水の面。



○天つみそらにかゞやきわたり、湖水のれもてのさゝなみも黄金のいろにきらめきて、くまなき月はいでにけり。
○比良のたかねもからさきも、かすみにもるゝかたもなし、春のどかなる近江の海。
○月かげふくるにほの海、とほく栗津の杜みゆ、いやそほじろき湖のれも。
○棚引くゝものあさぼらけ、のどけき風のれとはやま、けさこえくればこれやこの、名にれふしがの山越や、湖とほくかすみつゝ。
○淀のさは水ふかけれど、底まですめる月影の、千とせかはらぬひかりかな。
○汀に生ふる眞菰草、ほげりひろごりなびきつゝ、水にみどりのかげろひて、月にさやけきつゆやどす。
○底のさゞれもこけむして、いくとし波をかさぬらん、みどりもふかき澤水に。
○山のみどりのかげさへも、うつりてすゞしき湖の、渚をあらふさゞれなみ。
○かくれかたゝのいざりびの、かげもきらめく水のおも、比叡山れろしふきたちて、なみたちさわぐ琵琶の海。

## 瀧 河、山之部參照

○萬仞の山よりおつる瀧の水○雲わきのぼる○きりたちこめて○岩根とよもし○山うごかして○谷にこたへ○千丈の谷間○布をさらす○青雲をひきさき放ち○あめあられ○ものすごく○山ずみのおらぶ聲○山嶽鳴動○こだまかへして○花さきかゝり○栗の花ちる○瀧壺は○天ゝりたつ○たきのおと○岩にせかれて○末はいづこの○瀧の白糸○雲よりおつる○木がくれおつる○おちたぎつ○たきつ瀬○匂ひのふちと○たゝむ岩かど○雲にあまぎる○たきちながるゝ○岩根ゆすりておつ○早瀬川○落下る三千丈○銀河さかしまにかゝる○わかれておつる

○山ふところはつゝめども、たかねにひゞくたきのおと。

○佛のゝりの名に負へる、たきの白玉ぬき亂だし、華嚴阿嚴の水のおと。

○雪とくだけ花とちる、清たき川のたきつせは、春と冬との中をゆく。

○うきよへだてゝうきふしの、ありとも見えぬおく山の、たきの白糸なになれば、くりかへしてもみだるらむ。



○山路にうへる谷川や、見にゆくたきの末ならむ。

○萬仞名を得て瀑布とたぎち、ふりさけみれば天台の山、五雲の中におちくるありさま。

○谷よりのぼる白雲の、ひまより見ゆる山あひの、たきのしらいとくりかへし、みれどもあかぬけしきかな。

○山もとゞろにおちたぎつ、早瀬のたきのおとすさまじく、とほくのぞめば布の如く、近く仰げばなるかみとゞろく。

○天つ少女やさらすらむ、うらよりおつるぬのびきの、瀧の白いとほつれては、天ゝりたつ大いはに、くだけてちゞに亂れつゝ。

○をとたなばたのをるはたの、手玉みだるゝ瀧の糸、天よりおとす水なれや。

## 島嶼 海之部參照

○志まねの松○沖の小島○八十島○はなれじま○島風あらし○志まおろし○沖つ志ま山○百しま千しま○志まかげに舟よせて○沖のとほじま○島山もとに○ゐぞの千島○池の中島○島がくれ○志まめぐり○浪よする

○鴎すむ磯の○あらしま風の○志まづたひ○いざふねよせて○蓬が島も
近き○うきつ志づみつ○見えがくれする○すむ人もなき○山たかくして
水ながし○椰樹の林は志げり合ひ○南の海に○土人の一むれ○見志らぬ
ところ○島人にとへば○海人少女らが○島のさくらの花盛り○夕日てり
うふ○大島○浮島○まがきがしま○大和島根のゆるがぬは○志まべ〳〵れ
ちなく○浪にかくれて○島のともしび○うるまの島の○碁布する島○散
りわかれたるしま○沖にけぶりたつ○水とめむとて○錨れろして○島の
名とへば○ことばかはりて○あけくれに○よせくる波の志ば〳〵も○梶
とりむけて○島とはいへど○人すまぬしま○鬼界が島○浪あらく○舟か
くる○舟路のたより○水天一碧○雲かと見ねて○はやての風にふきよせ
られて○ゆくりなく○島のならはし○砂路白く○志まをさに○野も山も
本土にかはらぬ○土地肥ねて○沖にうかべる○目いづる方に○東の海の
たゞ中に○志まのかたちも
○まつ人もなきはなれ島かよふすさきの澄千どり、波の立ぬになくこゑも、
腸をたつさよあらし。



○すめるはかもめよるは浪、人げもあらぬ島なれど。
○磯山松のつきふけて、岸うつ浪の聲とゝもに、え志らぬとりのさわぐなり、
あはれなりへそ沖つ風、旅ねさびしき曉に。
○いうつなみのねとよりは、さらにねとなきはなれじま。
○なみまに見ゆる沖つしま、わたつみかみのかざしかも。
○きのふはみねしあはぢ島、けふはかすみにかきくれて。

## 春野 胡蝶、菫、櫻之部參照

○野づかさ○野べの夕風○野べはみながら○かすみたつ○野寺のかね○
野がひの牛○垣ほの野路○心のどかに○野べをなつかし
み○野べのうぐひす○すみれさく野○れもふぢ○うちもれて○わかな
つむ○花の下蔭○若草もゆる○袖をつらねて○めもはるに○かすみをく
む○家ぢわすれて○うすみどり○萩のやけ原○芝草ふ
みて○ひばりの床に○花たばつくり○野なる艸木○のどかなる片野○ゆ
きくれて○うかれ心地○若艸しきて○一望みどりを描く○花のやどかせ

○むぎの畑吹く風の聲、てる日をおほふ雲のいろ。

○春の野面にとぶ小蝶、花より花の香に迷ふ。

○すみれかたしく花むしろ、おもふ友ごちうちむれて、ながき春日をくらすかな。

○大みや人の袖つれて、ひくやかすみの小松原。

○春日のどかにいとゆふの、ありぶ花野になくとりの。

○焼野の原になく雉子、小笹が岡にいばふこま。

○鈴菜すゞしろれんげ艸、野邊ごろ春のにしきなれ。

○淡ゆきうにし野邊ゆけば、うらめづらしき初わかな。

○すみれ咲く野に立つかすみ、うすむらさきになつきひて。

○すみれさく野の春げしき、土筆たんぽゝれんげ艸。

○春も末野の花すみれ、つみつゝかたる少女子の、ふるやたもともかすむなり。

○いろさへ香さへなつかしき、すみれの床をけふも又、ひばりにかりて遊ばまし。

○すみれたんぽゝつくゝし、はゝこうちつれ春の野に、あそぶ芝居ずむつまじき。

○雉子なく野に花のかげ、やすらひ居れば炮れとの、森のあなたにひゞくなり。

○いろありねある花ざりの、春のしらべにうかれつゝ、かへさ忘るゝ嵯峨のれく。

○かすむ春野にうかれきて、かへさ忘るゝ少女子が、つめる花束よみつゝも、なほみちとほくわけてゆく。

○裾野の春をわけゆけば、すみれたんぽやれんげ草。

○かすみもふかき春の野の、花の下かげたづねつゝ、わか艸もゆる細みちを、胡蝶の羽袖にひかれゆく。

○ありびくらして花の野に、かすめる月もみてしかな。

○妹とあそびし春の野の、むかしのあとをたづぬれば、すみれにねむる雙蝶の、ゆめよりさめてくるひとぶ。

○かすみにくるゝ春の日の、なごりもあかぬ野ありびや。

○あそびくらして春の野の、花にひとよのやどからも。

## 秋野 秋草、虫之部參照

○いろ〳〵の○千くさ花さく○むしのね○かたみにすれる○萩のさく○秋はいろ〳〵○ふすゐの床○小さゝが原○野守○野守のかゞみ○野に出(いで)て○れもひやる○虫のねしげき○眞萩○ゆきすぎがたき○心ゆく○かるかやのつゆ○一夜ねて○尾花が末○夕つゆに○聲にひかれて○夕ぎりに○紅葉も見ゆる○うづらなく○つゆをわけて○秋の野は○心みだれて○いろかはるくさ○八千草のいろ〳〵○かりのなみだや○匂ひなきあら野の小かや○きりはれて○月もいでにけり○水かれて○つゆをのこして○風のゆくてに○鹿のねさむく○ふりそゝぐ秋の雨○あわたゞしくも○風のこゝろ○なみださそふ○尾花くづはな○花の下紐うちとくる○なほゝのめかす○おくまもに○夕ぎりふかく○朝ぎりとぢて○ほのうちきりて○ながめはてなき○わけつくす○かたみに摺れる○月ほろく○風うよぎ○千艸にれけるつゆの玉、風にいろもある秋の野邊。



○風にいろあり廣野原、つゆも匂へり八千艸の、花のひもとくこゝかしこ。
○野邊の細みちゆくこまの、すゞのねとほくなりゆきて、夕づきうつる里の川。
○月かげは水にゆらぎて、川添のすゝき原ゆく人の影。
○三日月のかげにたどれば深くさ野、爪先冷にてつゆしげし。
○つゆをやわぶる虫の聲、とばかり杖をとゞむれば、時雨ふりきぬすゝきはら。
○風にひもとく萩桔梗、秋にいりたつはなの野邊。
○松の木かげにこまとめて、艸かひながら見る月の、かげすみわたる秋の野邊。
○すゝき生ひたつ野の末に、白帆のかげのうごくなり。
○艸苅るわらべかげうせて、牛ひくれきな迴りくる。
○うでふきかへす夕風に、むしのねさむき小萩原。
○桑條わくる秋の風、艸白くして狐兎をぞる。
○千艸吹しく秋風に、つゆも亂れて秋萩の、花の波よる宮城野や。

## 田 田家、稻之部參照

○すきかへす○すみれ花さく○春の田○なはしろ小田⊙山のすり田○馬ひき入るゝ○れんげ艸さく○ほなみよる○みわたすかぎり○いねかりちらす○雁なきわたる○かすみひきたつ○花やみざらん○山田もる身は○田ぶせのいほ○田守がいほ○なる子ひく○とりさわぐ○かゞし立つ○はつあきの○とよとしの○をとめらがおりたちて○さなへとりしか○秋風ふく○いつのまに○いつしかも○小とりあさる○つゝのねとする○片へのはやし○千町の小田○しめゆふ○とりいれて○あけくれに○鍬とりて○田のあぜみち○たどりゆく○田中のもり○田中の寺○すきかへしたる田のおもに、さきみだれたるれんげ草。○里わの田ねにたりたちて、野ぜりつむなる少女子。○青田くれゆく夕がすみ、たつ志らさぎの志ろ〳〵と。○畑の細みちわけくれば、菜のはな盛り匂ひ合ふ。○はるかにつゞく菜畠の、ほなみの末に雲みえて。



○裾野の田居に夕日さし、こがねいろづくたなつもの、新穗ゆたかにふく風や。○由田のねもに村すゞめ、むれちぼひろひてたちさわぐ、こゑもゆたけきそよぎしの、志るしと見ればにぎはしな。

## 道路 車、流車、旅行之部參照

○つゆの下みち○こけの下道○川添のみち○道のながて○あぜの細みち○ねどころのみち○谷の下みち○わけわぶる○道ゆきぶり○道ある御代○みちのべの○岩根ふむみち○さかしきみち○里の中みち○竹のなかみち○道すがら○さゝわくるみち○もとこし道○里とほみ○玉ぼこのみち○千代のふる道○あぜつたふみち○小車のわだちのみち○ひらくるみち○世わたるみち○世を治むる道○心ぼそくも○わかれぢ○まがねのみち○まがねぢ○ひとりゆく○末遠く○はる〳〵と○あとにして○ゆきかふ人の○つれだちて○みちは松原幾十町、吹きくる風もいと清く。

○關路をたどる馬れひが、鈴のひゞきを先だてゝ、松原こゆる一ふしや。
○前途林かすかにして、僅に青芥の梢を臨み、後路山遠くして白雲を埋む。
○志げる松原かげくらく、くるゝもまたずまづくれぬ。
かへり行くへを見わたせば、ほの〳〵かすむ松並木。
○日もいつしかと入相の、かねてなれにし通ひ路の、關守る人はとがむとも。
○たそがれつぐる遠寺のかねひとりゆく手のみちとほし。
○ひらけゆく世のうれしさは、わりなきこひの道にだに、とざむる關はなしときく。
○すみれ咲く野の細みちを、辿れば果は花の山。
○はやほの〳〵とくれたけの、伏見の里の春がすみ、鳥羽のなはてをゆく人の、影もほのかにかきくれて。
○あなたや花の野につゞく、遠方かすむ日のひかり。
○身は久かたに天さかる、ひなの長路やとほつあふみ。
○奈良の御世よりふみわけし、木曾の御阪よ今もなほ、行くてになやむ旅人は、今のうつゝにうのかみの、ひらけぬさまや忍ぶらん。

○百くまさかる箱根路を、けさこゆるぎの、磯うつなみも遠白く。
○みゆきたにし芦川の、千代のふるみちあとはあり。

## 橋 河之部參照

○水のうきはし○谷のいたばし○みねのかけはし○橋ばしら○わたりゆく○橋の橋もり○朽木のはし○くもの梯○行合のはし○ふし木のはし○打わたす○苔にうもれし○あやふげに○波のうきはし○岩ばしの○ながき橋の○まがねの橋○川上に○川下に○いかめしく○人志げくゆく○うかぶが如く○名だかき○丸木ばし○つぎはし○りりはし○いづこまで○そらに入る○雲井にかゝる○舟つなぐ○舟よする○浪たゝく○つみあげて○石もて築く○つりばし○水の勢ひ○ながれても○みなぎる水に○わたらぬ人の○日毎夜毎に○月もわたる○きりにかくるゝ○すみ繪に似たる○ながゝしくも
○かすみわたれる大橋の、欄干ながき春の日を。
○滾々としてながれつゝ、夜晝やまずゆく水の、心をくむや橋の上。

○礎ゆるがぬ鐵橋の、下をながるゝ大川の、水も幾世にたゆせじな。
○水上白く月ふけて、水やそらなる秋の夜に、虹をわたせる橋の影。
○ゆきゝは絶ていふけわたる、月かげたかし瀬田のはし。
○はまなの橋は言のはに、かけてぞ今も殘るなる。
○うちわたしたる大橋の、下ゆく水のすさまじな。

## 堤 河之部參照

○池のつゝみ○堤くづるゝ○つゝみむかひ○ねでつゝみ○つゝみつく○袖のつゝみ○つゝみもあへぬ○池の堤にさすやなぎ○長堤十里○風ふきわたる○月影ほうし○心ぼうくも○風かなしみ○日はくれて○ながきつゝみの○はる〳〵と○たちつゞく○風ふきあれて○いづこにか○柳の影に○堤上の落花○花のつゝみ○わかばつゞく○みわたせば○人影みえず○河ぞひの○水よする○堤とほく○末遠く○かすみわたりて○きりにかくれて○ひとりゆく○たゞりゆく○花ふゞき○牛ひくおきな○うまおふわらべ○みやこにかよふ○とぼ〳〵と○堤上日暮じて○田にうひて○林の下を。
○悲風白日暗じ長堤人のかげたえぬ。
○繩手數町はる〳〵と、かすむ日影に馬引きて、唄ふや馬子がひな唄も。
○三圍(みめぐり)堤目はくれて、月も隅田の河瀬ぶね、こぎゆく人やたれならむ。
○つくばおろしに空冴わたり、おもよさびしき墨陀(すだ)堤(つゝみ)、千どりの外は聲もなし。
○鎭守の森に日はおちて、馬子影とほし繩手道。
○わたし守呼ぶ聲さえて、三日月ずでしかれ柳。
○吹くともわかぬ春風に、袖にみだるゝ花吹雪、雲の中ゆくすだつゝみ。

## 都會

○みやこ路○大宮どころ○こゝのへ○君がみさと○都大路○内日さす○あづまの都○ひんがしのみやこ○西のみやこ○外つ國人のよりつどふ○玉しきのみやこ○みやこの手ぶり○山とほき○山めぐり水よこたはる○都人○都となりぬ○花のみやこ○大君のしきます都○いにしへの○大みや人○錦ゐりなす○花のやちまた○都のにしき○四通八達○名にしおふ

○月のみやこ○みやこのうら○みやこのさかひ○人つどふ○さゝめきて
○にぎはひて○玉をかざる○たぐひなき○あやなして○人しげき○みや
このありさま○のぼりきて○玉をみがきこがねをかざる○流行にはしる
○心ときめきして○華奢（をごり）にほこる○世界に名だかき○國々の人つどひて
○うすきなさけ○いつわり多く○れもてをかざる○心にもあらぬ○電燈
のひかりまばゆき○時じくに花さきて○蟻のごとくむらがり○時ならぬ春○時
り○西に行き東に走り○いうがはしく○車をかりて○馬車のひづき○市
にかくるてふ大隠者○こがねも玉も何ならず○財を重んじ○榮譽利達を
むねとして○夜を日につぐ○不夜城のひかりまばゆく○雲に入る金殿樓
閣○黄塵萬丈○ちまた〳〵の○楊子が亡羊の嘆○心ことにひきつくろひ
○われもひとも○家たちこみて○大路の柳あやなれりて
○人里とほきみやまにも、すめばすむ世とれもひとしは、みやこをしらぬ程な
りき。
○春のひまゆく駒形や、たれをまつちの山越ゐて、車をかへす馬みちや、れり
ねてともにかたりなん。



○上野の花をわけすてゝ、急ぐ心のほどもなく、淺艸すぎて吾妻ばし。
○西に東に花みるそ、人は野山にあこがれて、都さびしきゝのふけふ。
○花のみやこの春のうら、空をさまりて風もなし。
○花の都の春のうら、柳さくらのやちきたに、れりまじへたるあやにしき。
○山は動きなき形をあらはして、古今にわたる神道をあらはし、里は平安の
姿を示して、鼓腹謳歌のこゑ街衢にみてり。

## 神社 神官、榊之部參照

○神のみむろ○神のみあらか○神のいがき○神まつる○神やしろ○太し
きたて○みづの玉垣○川やしろ○氏の大神○天つ社○みづ垣○國つやし
ろ○庭火たく○玉垣きよく○いはひ杉○榊葉のかげ○太しきたてゝ○千
木の行合○みしめ縄○神の廣前○ますみのかゞみ○神のはふり○神の大
御酒○いはひきよめて○白ゆふかくる○宮ばしらうごかぬ○かつを木○
すがこも○かたりぎ○あけの玉がき○田中の杜○みてぐら○玉だすきか
けて○もりの梢○はふりこ○うぶすなの神○五十鈴の宮○山田が原○と

ようけの宮○御裳裾川○男山○賀茂のみあれ○八幡のみねの○春日山たかく○杵築のみや○住吉のやしろ

○花咲き匂ふ瑞垣の、雲間をわけて拝殿の、みすふく風もものどかなり。

○神の宮居のゝきたかく、うびゆる榊　椎　槻、

○柏手ならす宮守が、烏帽子姿もかむさびて、高く尊き神の徳。

○和歌の浦なみかへすゝ、玉つしま山うちめぐり、神のたすけや祈らまし。

○君を守りの神がきに、わきてちかひもふかき夜の、月影すめる石清水、たにぬながれの末ながら。

○夕山松にふく風も、神さびわたるあたご山。

○朱の玉垣神さびて、心をすめる御手洗の、ふかきめぐみを頼むなり。

○花は梢のしらにぎて、松は立枝のあををにぎて、神もめづべきけしきかな。

○みむろの山の木ぐれにも、見にまがまぬは神垣や、たかきみいづのひかりなり。

○かけてぞいのる、ゆふだすき、いつの玉垣うらさびて、神ましけりとれもふにも、いとぞたうときみあらかや。



○引く鈴のねと神さびて、うつかしは手の音たかく、こだまに遠くひゞくなり。

○たつ燈籠のひかりさへ、心のやみやてらすらん、星影たかき屋のむねの、千木いかめしく風に鳴る。

○天と地とにかたぎりて、立てる鳥居の二柱、誓ひもたかき宮居かな。

## 祭典 神社之部参照

○にぎはしく○いはひまつりて○あけの玉垣○榊葉のいろ○みづ〳〵と○たむけとて○神主（カムヌシ）祝（ハフリ）○神楽のねとも○神代の風も○のどかにも○鳥居にさきかゝる花○神鼓のひゞき○かしは手のねと○れもしろの舞楽や○まうでくる○玉串たてまつる○日影もかすむ○幟立てゝ○ひく鈴のねと○かまびすしく

○ゆふとりつくる玉ぐしの、葉におくつゆに天てらす、日かげ匂ひて何となく、神代の空ぞしのばるゝ。

○神まつる日も二月の、空何となく春めきて、心もをどる鼓のねと。

○年に一度の里まつり、今日こそはれときかざりて。
○けうとしいへば殊更に、むかしの春ぞ忍ばるゝ、けうとしいへば殊更に、ありしうの世ぞなつかしき。
○軍の庭に雨とちり、風とくだけし玉の緒も、今日のみあへは嬉しとや、天がけりてもみまするん。
○すめらみくにの武士が、折れずたわまぬ魂を、けふのまつりになぐさめむ。
○うつやまつりのつゞみの音、神の心はいざしらず、人こうまづはうかれけれ。
○うつや太鼓のねとたかく、村のよろこびまでひゞくなり。
○うつやつゞみのねにつれて、うちまう神子の袖ながし。

## 佛閣

鐘、幽寂、僧侶之部參照

○ふるきみてら○すみぞめの袖○かはらの松○ふみよむこゑ○松よりひゞく○菩提の月○眞如の影さにて○あか棚の花○みねのふる寺○あか井の水○尾上の寺○野寺○あかの水くも○秋風わたる○入堂伽藍○香烟たにて○梵音をきく○初夜つくかね○午夜つくかね○しもよの月○ともらふあとも○涅槃のくも○紫雲のうち○來迎のひかり○みねにたてたる五重の塔○野寺の塔○のぼりゆく○峯のとひしび○法の燈影あきらかに○南の廊の○解脫のゆめ○夜半の日影○香華の雲に○佛法僧なく○れくふかく○蓮の花さく朝まだき、よも經文のこゑすみて。
○夕すゞしき月影に、つきいだすかねのれとすみて。
○南面（みなみたて）の僧房に、ちかき小池は紅白の蓮の花のさきみちて。
○夕ざりふかき小笹原、くれわたるうらにきこゆるは、いづこの寺の鐘のこゑ。
○樓門たかき山寺の、松の木の間にほのぐ〳〵と、心ぼそくも立ちのぼる、烟は木のめやにるならむ。
○千年の苔みどりふかく、觀法の座西に靜かなり、仰げば蓮華に似たる山、山又山の上にたかく、俯せば法水を湛へし谷、谷又谷のうこふかし。
○松のあらしのなかりせば、雲に埋れむみねのてら。

○夕べのあらし吹く毎に、かねの音れてつるみねのてら。
○くものれてくなる山寺の夕べのかねの聲きけば、わがよつきぬる心地して
○山寺のかど叩かばや、この名月の影ふみて。
○山影門に入て推せども出てず、月光地にしきて掃へども消えず。
○花の白くもふみわけて、山路の春をたづぬれば、鳥なき花れちて心をいたましむ。
○老いたる僧は箒をやめて昔をかたる花のかけ。
○かすみの底にこもりくの、はつせの寺のかねの聲、月の影さへれぼろにて。
○御寺にひぐくかねのれと、つきぬや法のこゑならん、きけば心がすみわたる。
○春の夕の法の庭、入相つぐるかねの音に、花は吹雪をちりみだる。
○覓の水の末とひて、みちこうあれと分け入れば、谷底ふかき山中の岩根に立てる一つ寺。
○みねの紅葉々ちりかひて、夕さびしき秋風に、入相のかねの聲すごし。
○れろ〳〵すあらしに木葉ちり、しかなく秋の山寺に、さびしくひぐく鐘のれと。



○御法のこゑは入相の、かねのひぐきにうち合ひて、谷にこたふる風のれと。

## 廢寺

故跡、幽寂、衰亡之部參照

○あれはてゝ○とぶらふ人もたにて○香烟たにて○山門やぶれ○幾世の月に○杉の下みち○あれまさる○法の泉のたにはてゝ○艸のみしげる○わけ入るべくも○本堂たふれ○月もる軒に○つたかつら○月常夜の燈を捧ぐ○梵唄の聲たにて○誰かとむらふ○松のこずゑに○雨蕭々として○ふもとのてら○人去りて○こけむす石に○みやのれくの○つゆしげく○よもぎにとざす○狐狸のすみかと○れらむ○とぼうくちて○柚人のやすらふところ○谷川のれとのみすみて○朱ぬりの門も○雨にはげて○老僧ひとり○みるかげもなし○すゝき生ひたち

○三體即世の秋の月、くもにかくれてかげもなし。
○のきもる月は法のともしび、艸葉のつゆは華鬘の玉。
○軒はやふれて月佛前に燈をかゝげ、扉は朽ちて風室廊の簾となる。

○四教五時の春の花、今年は匂はずなりにけり。
○眞如の月に夜もすがら、結跏趺坐せし人はいづこ。
○杉の梢にありあけの、月さやかなる庵のまと、たぐひあらしのふもと寺。
○雲にうもれてとふ人も、あとたえはてしふるでらや。
○かねのひゞきはたにねども、とぶらふ人のあとたにて。

## 墓 哀吊之部參照

○苔の下みち○松風さむく○むかしを忍ぶ○あはれとばかり○忍ぶにあまる○一葉一落○ゆめのはかなさ○つゆときにて○艸葉のつゆと○幾世の風雨○風雨三百年○英魂さまよふ○石ぶみのみは○名のみのこりて○春艸生ず○蝸牛が篆書○月すみて○月すごく○雨さびしく○嵐のねとばかり○ともらはむ○道はたにて○艸わけて○すがる胡蝶のゆめの世の中○あとはかもなく○花ちり鳥なきて○何とかいはむ○功名富貴も○一朝のゆめ○雨とふり風とふきて○夜半の月影○知る人もなく○十萬億土の○末とほく○少年の人○搖落の果○已に秋のこゝろあり○無常のことはり



○苔にうづもる
○幸堵婆をてらす月影に、松風ふきてものすごし。
○をろがむ袖をふきかへし、淺茅にさわぐ松の風、せめては苔の下にます、君がねむりをねどろかせ。
○魂黄壌に歸して幾年ぞ、かばねは白沙にうづもれて朝露冷かに、名殘の幸堵婆こけむして。
○身をねくつきの朝つゆふかみ。をろかむ袖にくだくる玉。
○萩が花ちる秋毎に、きてをろがめばくれなゐの、なみだぞ露とちりまがふ。
○眠るゆめぢやいかならん、のでらの塚の艸の下。
○れなじながれにいとたれて、ともにつりせしうの君は、あはれこけむすみねの墓、松の子れちてれともなし。
○あはれはかなき人のよや、今かく語りかくこと、ふも、やがては苔むす塚の下、人の涙となりぬべし。
○松風松に入りて涙袖に亂れ、青苔泉を封じて故人少からず。
○壘々たるこゝらの塚は、老いて死にしは少なくて、多くは是れ少年の人、こ

の少年に時をかさば、偉人も多くありつらむ。
○くちぬ名のみをとめおきて、身をばくつきのこけあをし。

## 宮殿 貴紳、富豪之部參照

○雲の上○雲ねの庭○清く涼しきうてな○日のみかど○むらさきの庭○戸の上○九重の庭○みがくひかり○近きまもり○青雲に入る○あふぎみる○たてつらね○みうのふ○玉をしきこがねをちらす○しろがねの瓦○瑠璃の柱○金殿玉樓○月宮殿○水晶殿○めくるめきて○りびにたつ○朝日夕日にかゞやきて○かすみにきにて○雲をまねく○うきぼりの○欄間にちりばむ黄金瑠璃○仙宮のありさま○雲のかけはし○のぼるべき○山を負ひ○水にのぞむ○空近く地とほし○はるかにみゆる○たちいでゝ○雲井のどけき大内山、朝日たゞさす大みやどころ。
○治まる御代の春のうらゝくも井の庭ぞゆたかなる。
○錦のとばり玻瓈のはしら、珊瑚の垂木に瑪瑙のうつばり。
○雲を凌ぎし大とのは、みそらをわたる雁かねも、袂の下に見ゆるなり。



○雲にうびゆる阿房宮、銅柱すべて三十六丈、みな金銀をかさねたり。
○瑠璃のませ垣瑪瑙の橋、いらかの上に鶴なきて、池の汀に龜遊ぶ。
○のぼれば玉のきざはしに、かざる金銀きらめきて、たゞ日月の影ふみて、みうらをわたる心地せり。
○庭の砂は金銀の玉をつらねて敷たへの、五百重の錦や瑠璃の扉。
○池には鴛鴦玉すだれ、かゝる軒際の蘭燈の、光まばゆき金殿玉樓。
○複道雲を凌ぎて金闕に接し、樓觀煙にかくれて翠うらに横はる。
○珠玉のとばりは月にかゞやき、水晶のすだれ旭に匂ふ。
○西の臺に月おちて、花の木の間の曲をきゝ、南の壺に燈ふけて、竹にこもれるこゑをきく。
○月は木の間をてらして夜のさま靜かに、花は園中に匂ひて春いまだ深からず。
○風吹きたえて大庭の、おとゞしつかに日はくれぬ、みはしの櫻さきみちて、小簾のすけきにほのみゆる、人のたまともかをるなり。
○風にえたへぬ桐壺や、一葉々々にちりすぎて、大庭ちかき前栽の、草のしげ

みにれくつゆの、ひかりすゞしく月いでぬ。
○めぐみにあまる豐年の、しるくもふれる大庭の、ゆきかきよせてとねりらが、つくりたてたるゆきの山。
○ほの〴〵あくる大庭の、みはしのもとにれりたちてこゑほがらかにうたふなる、大宮人のことばには、ゆきの光もりひぬべし。
○のどかにかすむ春のみや、かねても千世のいろ見えて。

## 樓閣

○虹のかけはし○山よりたかき○水にのぞむ○流を下にみる○雲に入る○月の桂も折らるべき○きづきあげし○瓢揚として○衣かろく○獨立羽化○下界はとほし○五層樓上○烟波とほく○たかきにのぼる○のぼりたつ○古しへの國見のさまも○袖ふきかへす○山又山の○雲ゆきはゞかり○脚下にみゆる○すゞしき風に○花の梢を下に見て○海ちかし○日影はのこる○日をまねく○山によりて○雲の上人○いかづちの雲より○月球ちかく○星の林も○玉をちりばめこがねをみがき○水烟劈



脩として○山にむかふ○十二層樓○鳥のつばさも何ならず○飛仙の術も○玉もてみがくたかどのに、影すみのぼる秋の月、あふげばたかきをすのうち、音樂ひゞく夕まぐれ。
○複道雲間に横はり、金闕煙の上に聳ゆ、驪山の宮の奥ふかき、春にあらうふ桃櫻。
○水樓のすだれうごかす河風に、つれてきこゆるものゝねは。
○水煙半うるほひて、綺羅の袖もる山の月、ねぼろにてらすたかどのに。
○水殿に風かくはしく、玉のすだれに月きらめき。
○若葉のみぎりかさなりて、見るもすゞしき水樓に。

## 學校 師弟教訓之部參照

○うなゐ子も○をしへ草つむ○里のわらべも○れひさきしるき○なでしこの○竹馬すてゝ○なにはづ○わけこうのぼれ○をしへの庭○しげりもゆくか○日ごとにすゝむ君が代○うひの山口○きりひつゝ○文よむこゑあまねき○二葉のわか草○つどふわらべ○まなびの庭○ふみのあやし○

をさな子が○庭のれしへに○数の庭ふみならす○千種の花○いづれまさ
れるいろ○れのがじ〳〵○つぼめる花○ふみまなぶ園生○れくれさきだつ
○むつまじく○をしへ草こそ○茂りあひにけり○れほしたてつゝ○れだ
しきこゝろ○人のみちゆく○人たるみち○神代もきかず○わざをゝさむ
る○庠序のまうけ○國のため○心をみがき○くさ〴〵の○人をたすくる
○君のためとて○みるめよりげに○をしへの園○月のひかり○玉のいろ
○めではやす○文よむこゑ○窓のうち○學の海の底しれず○前途はとほ
し任重し○あらしも○ふかぼふけ○なぞかは折れむ○梓弓ひきかへさむや
○れくふかく○月のかつらも折るぼかり○月桂冠をいたゞきて○錦をか
ざり譽をれひて○智恵の棹梶○むちのなびきに○花さく春に○底の眞珠
もひろふべく○朝日に匂ふ○数のみちは多けれど○國のまことに○てらす
かゞみのひかりにも

○数の庭の撫子は、れくれさきだちれひたてど、花さく春はことならず。
○文の林を分けてこそ、いろかすぐれし花も折れ。
○竹馬すてゝ里の子も数の庭につどふなり、みよのめぐみぞありがたき。



○数の庭の眞砂には、言葉の玉もまじるなり。
○文の林の木かげには、心のはなも匂ふなり。
○数の庭に敷かれてこそ、石も玉とかゞやける。
○数への庭の若松に、國のはしらやまじるらん。

## 山家 山、畑、尋問之部參照

○松の戸あけて○つま木の煙○よりめさびしき○世をよりに◉ちりの外
なる○人めまれなる○みねのいほり○たにぐ〳〵かゝる雪げの水○柴の門
叩く○白雲に埋れて○西はゝれて○山又山の○うのふの山○山かけのい
ほ○うもろのやま○外山のさと○山の下いほ○松風を友として○あらし
もなれて○ゆめの世を○心しづかに○いはほの中○とふ人もなし○雲の
戸ざし○片山ざとの○のきばの雲○まがきの山○のがれすむ○夕べさび
しき○窓に入りきたる○山ざりの聲○空山鳥ないて○山寂々として○谷
のまし水○ましらなく○苔のむしろ戸
○山にすむ身は朝な夕な、袂の露の起伏に。

○立ぬもれもき磐戸のうち、あくるわびしきかつらぎの、神の契をたのみつゝ。

○山は淺きにかくれがの、ふかきやたかき心なる。

○峯の嵐に谷の水、れもひを洗ひ心をすまし、むすぶゆめこそのかなれ。

○浮世に通ふゆめも亦、嵐に消にて山ずみの、ねざめさやけき水のれと。

○浮世いとひて山ふかく、かくれし人の心にも、なびかぬものは烟にて、ありとしらるゝ峯の庵。

○軒端の松に風たにて、れとなふ人もなきゆふべ、れとなき雨の音凄し。

○瀬の音きこゆる里つゞき、かけぢにそへる谷の戸に、つらなる軒を絶々の、霧間に望むゆふべかな。

○松のおち葉は世の中の、ちりのほかなるちりにして。

○けふもはかなくくれにけり、松に吹き立つ山かげの、あらしばかりを友として。

○のがれて入りし山窓の、前に流るゝ谷川に、うきよのちりやながさまし。

○世を隔てたるれく山に、何をうしとか山水の、流れていづちゆくならん。



○のきのかけひの水のみは、れもふまゝなる山ずまひ。

○ちりのよりなる山里は、かけひの水もきよくして。

○ふもとの里のさよきぬた、尾上の松のあさあらし。

○すぐる月日もはやまの庵、分け入りしより年月は、木の葉と共につもりつゝ、今は世にいづる道もなし。

○わが山窓の松かげに、風たにし日はものいはぬ、友にむかへる心地して。

○夜なくねむるゆめにのみ、人はとひきてわが門を、叩くはみねの松の風。

○落葉かく子を友として、柴たく冬の山ごもり、烟をとめてくる人もがな。

○軒ばの山の松風に、心すまして汲む釜の、水をたづねてやどる月。

○山雲柴門をめぐりて幔をかゝぐるが如く、澗月窓に臨みて燈を捧ぐるに似たり。

○朝に落花をふみて風に伴ひていで、くれに飛鳥に隨ひて雲とゝもにかへる。

○松の嵐を身にしめて、たれかねざめに月はみる、この山本のさびしきに。

○みねふきれろす山風に、まやのあしぶきあれはてゝ、枕をてらす夜半の月。

○世にすみわびてのがれこし、この山里の柴の戸に、あまり隈なき夜半の月。
○浮世のちりをはなれきて、心をあらふ水のおと。
○くゆるかやりのなかりせば、ありとも知らじ山本の、茂みかくれの賤の宿。
○行住座臥の行ひに、座禪の床をもる月も、西にかたむく暁に。
○谷よりのぼる白雲の、ひまよりみゆる山あひの、木ぐれにたてる一つ家。
○夕日は西にかげれちて、なくとりのこゑ物すごき、夕のうらのいつしかも、
月になりゆく山かげの、物しづかなる柴の庵。
○さひしき友となかく〳〵に、したしきまるゝは峯の松風。
○夕ぐれふかくなりにけり、外山のむくの松ばやし。
○世をいとふにはあらねども、すみてはやすき山かげの、岬のいほりのこゞけさよ。
○みやまにろしにゆめさめて、よくもねられぬ山の庵。
○なれては山のむくながら、心のごけき柴のいほ。
○すめばすまるゝ世のならひ、三とせをこゝにやごしめて。

田家 稻、農夫之部參照

○山田もる、○落穗ひろふ○かきねの小田○いなむしろ○刈田のいほ○畔づたひ○むらすゞめ○稻葉の風○秋くれて○たうがれて○ふきちらす○風のこゑ○なるこひく○しぎの羽がき○ねざめする○田中のいほ○けぶりにぎはふ○いなぶきの庵○外面の小田○さゝのいほり○里わつぎき○いなしきの伏屋○たづらのいほ○たぶせのいほ○もりすてしいほ○あぜ道ながく○夕日さす○雨はるゝ○山ちかく○水をほし○かゞしたつる○いろづくれしね○とりのこゑ〳〵○ぞく○月のよな〳〵○いなばをわたるつゝのれとする○かり人の○野につしくて○門田にあさる
○竹の柱にかやの屋根、かをり床しきこのめ蔭て。
○門田のいねの夕の風、つまとふ志かの曉の聲。
○田中のふせや風たかて、のきばをめぐるゆふけむり。
○風たかくふきて柳の葉まばらに、雁遠くなきて炊烟うすし。
○ゆたのたゆたにうちなびく、田づらの庵の夕けぶり、のどけき御代のさまみねて。

○村雨かすむ小山田の、田ぶせのふせや風たにて、のきばをめぐる夕けむり。
○片山小田の畔づたひ、道一ずぢはありながら、ゆきゝまれなる柴の庵。
○のぼりてみればとのたまひし、ひじりの御代のおもかげも、ほのぐ〳〵みにてうちなびき、民のかまどにたつ烟。

## 漁家　海濱、漁人之部參照

○浪のおとする○漁村のやなぎ○風あれて○枕にひゞく○磯山あらし○まどろむ夜半○風なまぐさし○ゆめなまぐさく○うらぶれて○いりちかく○あらなみよする○磯つたひ○網の目に夕日かゞやく○網干す○夕日うつる○あびきづな○魚籠の二つ三つ○舟つきぬとて○父も母も○つまも夫も○渚に立ちて○磯山ざくら○月しろく○砂路をほく○沖つしほ風○夜もすがら○窓にちかき○山によりて○ずゞしきは○おとなふものは○浦のとまや○海人が家○あさりする○ともしびくらき○とぶほたるかな海人がたく火か○簷のよびこゑ○しほたれて○かづく海士の○海人がくろかみ○貝ふきの小屋



○岩をまがきの一つゐほ、波より外のおとゝもなし。
○夜すがらあるゝ浪の音に、ゆめなりがたき海人がやど。
○磯山あらしをちかへり、ふきゆく果やわだの原、なみ立ちあれてものすごし。
○磯の松原きりはれて、砂に白き月の影。
○磯邊にちかき海人が家は、夜毎枕に浪あれて、はしなく夢や破るらむ。
○浦べにちかき海人がやの、ともしびかすかに見わたりめて。
○浦ふく風もきゝなれて、ねざめもなさぬ海人がやど。
○ともしびほうくなりゆきて、まくらにひゞく浪のおと、磯山おろしの聲たかし。

## 閑居　隱者之部參照

○ひともと柳○たれこめて○心のどかに○かくれすむ○とふ人もなき○門のさくら○春はくれぞも○庭のおちば○月を友なる○とざゝぬ門○しづかなる○ようめさびしき○月すむやど○垣根の小田○はにふのこや○

きのいたや○すみか○かくれがの○わびしらに○うき世を知らぬ○つれ〴〵と○友なき宿○なぐさむる○人目かるゝ○あかの水○鏡(かゞみ)の水に○かりねのやど○のきばの月に○かはらの松○こけむす板戸○すむとだに○れとなふ風○すみあかぬ○我が門の五もと柳○やどしめて○こけのかよひぢ○なれてもさびし○たれをまつとも○心しづかに○花さくやど○

月さす門

○花はほゝゑみ柳はまねく、よにれもしろき竹の門、昨日もけふもいたづらに、ながめくらせり只ひとり。

○世のうきこともれしなべて、きかじとおもふ心には、訪はれざるこうれしけれ。

○あなめつらしな門の戸を、たれかたゝくとみしゆめの、さむる枕に松の風。

○瀟湘の夜のあめ、遠寺のかねのこゑもれとつれず。

○風雅をつくしゝ閑室の、軒ばに近くさくはなの。

○柴門さびしくとぢて風扉を叩き、南窓夜静かにして月ふみをてらす。

○浮世の秋を身一つに、とりあつめたるわびしさに。

○とはぬを人のなさけにて、かくれすむ身の友といへば、あしたの嵐くれのあめ。

○かりにさしたる槇の戸を、みやまれろしにたゝかれて。

○春はすみれの花匂ひ、夏は清水のいときよく、秋風やどす松の聲、冬はゆきにも風情ある、艸のいほりのひとりずみ。

○とふ人もなき柴の戸を、風ならずして叩くはたゞ。

○何ごとゝなくとりすべて、足らぬがちなるわがやどに、あまれるものは月日なり。

○雨やみてつゆれちず、風はとほし虫の聲。

○人めかれたる艸のやの、夜ふかきとぼそれとなふは、風の響か村雨か。

○れとなふ人もあらしふく、かべのくづれに月もりて、静かにゆめをてらすなり。

○山をうき世のへだてにて、ちりをよりなるあしたゆふべ、ゆめもみやこを忘るらむ。

○柴のあみ戸にれとづれて、叩くは風とする〳〵も、尚おかすがにたちいで

こゝみれば隈なき月の影。
○ひとりさびしきおく山の、谷間を傳ふ岩清水、こゝろ細くもながらへて。
○入日のさすにまかせてむ、はかなくけふも蜩(ひぐらし)の、聲うちしきる柴の門。
○芭蕉葉うよぐませのうち、わらやに上る茶の烟、いかなる人のすみかぞも。
○人の榮耀は因縁ふかく、林下の幽閑は氣味ふかし。
○跡をくらまして獨り苔逕の月に嘯き、喧をさけて且竹窓の風に臥す。
○風枝をうごかして松花かぐはしく、雲は山にみちて窓に入りきたる。
○門外の長江むなしく東にながれ、閑庭の鳥雀いたづらにのきばにさわぐ、
月色あはくしてゆめ冷かに、華燭くらくして曉に但たり。
○れとなふ人はまれなれど、なぐさめらるゝ草のいほ、夕のあらし夜半のあ
め、心にかけてきくときは、わが世の友にもれはせじ。
○軒ばにれつるかしのみの、ひとりさびしき柴のいほ。

## 草庵 夜雨、幽寂之部參照

○すゞのかりいほ○かりほのいほ○笹のいほ○心ぼそく○尾花かりふく



庵○夜半のあめ○蘆山のむかし○黒木作りの○柴のかど○たゝくはたれ
か○まどのくれ竹○いほむすぶ○田づらのいほ○かりうめの○すむとだ
に○人知れぬ○落葉に埋れて○つゆのかりいほ○あはれなる○ふりはへ
て○山めぐる○かしのみのひとりねて○月影ほろく○門川に月くらくし
て○かけひの水のれとなひ○あちしふく○田づら見はらす○月のさすに
まかす○雨はもり○月に隈なく○かくれすむ○のがれきて○あまりくま
なき○ありとばかり○しづけき夜半○軒端かたむき○垣やぶれて○水聲
ゆめを破る
○人里とほき野邊の末、松風はげしく吹きあれて、月の影もる軒のつま。
○風もさはらぬこけの庵、つゆのすみかのはかなさを。
○春はすみれの花匂ひ、夏は清水のいとときよく、秋風やどす松の聲、冬は雪に
も風情ある、草のいほりのひとりずみ。
○草のいほりにつゆの床、虫より外の友もなし。
○たのしき春を山かげの、草のいほりにれくりつゝ。
○軒端にれつる橙の實の、れとしづかなる夕まぐれ。

○草のいほりのよるのあめ、たれふりはへてれとづれむ。

## 廢宅 幽寂之部參照

○雨にくちて○風にあれて○のきばかたむき○屋根れたちて○見るかげもなき○月もりて○草生ひしげり○やぶれ○住みずてゝ○あれのみまさる○むかしを殘す○むぐらのみしげりて○みちさへたにて○つたかつら○たちよりて○昔たれ栖みけむ○桃李ものいはず○烟霞むなしく○ものすごく○狐兎のすみか○まやのあしぶき○いたびさし○かたむきて○吹きれちて○むぐらの垣根○ぬしやたれ○さびしくも○かとうつれちば○月にあらはなり○あばれはてゝ○庭とも見にぬ○しるしの杉は○半はくちて○山風のあらくふく○となりにつぐく○門の戸もなく○秋風すごく○れとなふものは○あれたる宿の軒朽ちて、もる月影ずくまもなき。○月はよな〳〵さしつれど、詠めし人はあともなく、花はいろ〳〵匂へども、めづべき人の影もなし。



○壁のくずれをもる風に、なくきりぐ〵すなれも又、むかしの秋やしのぶらむ。

○甕簞屢むなしくして艸顏淵の巷にしげり、藜藿ふかくとざして雨原憲が扉をうるほす。

○舊苔みちをふさぎ、秋の艸門をとぢ、傾垣つたしげりて瓦に松生ず。

○ことゝふ人もなきやどに、萩吹く風のさわがしく、むかしをとづる淺茅生の、つゆぢたもとをぬらしけり。

○杉の板屋のくきくちて、時雨もつゆもれくしもゝ、洩る月影にあらりひて。

○時しもあれや秋のくれ、むしの怨もたに〳〵に艸の戸さしもかれにけり。

○かべは風雨に洗はれて、のきもる月の影あかし。

○昔のあるじはかげもなく、はるをわすれぬ花一木。

○のきばにかゝるさゝがにの、いとあれはてしあばらやに。

○庭は艸のみ茫々と、板戸にはりし貸家札、風に半はめくられて。

○夏艸の心のまゝにしげりあふ、野中のわらや月もりて。

○庭もまがきもさながらに、野べとあれにし淺ぢふや、軒もる月のかげとめ

て、あるじがほなる露の床。
○月の光と時雨の外は、もるものもなきやどの秋。
○あやしきこどのあればとて、すむ人もなき一つ家。
○たれまつやどにあらねどもむぐらの門はさしもせず、月の入るにがまかせたる。
○すみすてにたるあばら家の、かたむきくちし板庇、夕さびしき秋風の、たゞくさへいとあはれなり。
○片山里の柴の戸を、あるじいかにとれとなへば、答ふるものは松の風。
○くちにしこけの板庇、つたひてれつるしづくのみ、しづかにゆめをたづぬなり。
○柱かたむき屋根わちて、扉にまどふかつらのみ、心のまゝにしげるなり。
○風はまぎに入りて燈火きに易く、月は軒をうがちてゆめなりがたし。
○わびてすむ身はよの中をうづらとなりてなきをれど、かりにも人のとひこぬに。
○あれのみまさるみやのうち、としへてすみしあまのこの、ふねながしたる心して。
○君かうゑてしうのかみの、一もと薄生ひしげり、野となる庭にふく秋の風。
○書棟あしたにとぶ南浦の雲、朱簾くれにまく西山の雨。

## 故郷 懐舊之部參照

## 故跡

○むかしを忍ぶ○むかしを見する○つゆしげき○しのぶ草○里あれて○知る人もなく○ふりすてゝ○人めもかれて○淺ぢのつゆ○庭のいしずゑ○あれしまがき○むぐら生○たづぬれば○苔むすかはら○野となる庭○庭のなつ草○いにしへの○くむ人もなき眞清水○かくこうしげれ○涙をさうふ○秋風わたる○としふる里○ふりにし里○むかしみし松○あれのみまさる○むかしのゆめ○むかしがたり○むかしながら○むかしの友○れもかげばかり○さうふ嵐に○すみけむ人は○雨にくちて○風にやつれて○青苔なめらかなり○たづぬるにあとなく○むかしのうてなあとあれて、春をこそわるあをやぎの、いろみどりなる胡

蘇のうてな、菱とるわきなのこゑさびし。
○もとより所も名を得たる、ふるきのきばのしのぶぐさ、しのぶかたゞ〳〵しげゝれば。
○只ふる里の戀しくて、忍ぶといふにはあらねども、くれゆく汐路ながめつゝ、何とはなしに哀れなり。
○ふるさと寒く月さえて、むぐらにかるゝむしの聲、むかしのいらかもちゝりて、苔路にしげきつゆの玉。
○琴のねきゝし古への、妻屋のあとやこゝならん、野となる庭の松の風。
○越鳥南枝に巢をすくひ、胡馬北風にいなゝくも、みなふるさとを忍ぶなり、まして有情の人なるを。
○芳艸の香あれはてゝ、朱殿玉樓かげもなし。
○とくかへりぬと故郷に、まちこうまさめたちちねの。
○別れて年をふるさとの、野となる庭にむかしわれ、妹とすみれの花さきぬ。
○栗の穗たるゝ路狹み、かの森かげの火影こう、わがやにともすひかりなれ。



## 舊都 悲哀之部參照

○あれたるみやこ○むかしながら○むかしを忍ぶ○猶玉しきの○いにしへの宮居○むかしへ○忍艸生る○つゆの玉○荊棘生ず○狐兎はしる○八重むぐら○いづこむかしの○たましけるの○松のみのこる○まづ涙なる○うらさびしく○大みやどころ○こゝのへの○雲居の庭○大みや人○かげだに見ぬ○長つぼね○つかさ〳〵○しかのふしどゝ○見る影もなし○月のみすみて○かはらの松は○雨にやつれ風にやぶれて○花ちりて○鳥なきて○あれしみやこの○松風のこる○しもきにて○櫻かざしゝ○春日のどかに○烟霞三月○いづれ昔の玉しきの庭○吹きあるゝ○夜くらく○むかしこひしく○こゝやむかしの○草生ひ茂る○ふるき都をきてみれば、野となる庭に虫の聲、こぼるゝつゆに月の影。○月はすむ宮苑のあと、秋かぜさむく菱歌遠し。○月はぬしなきやどにてり、虫はよもぎの庭になく。○左に火燄の輪塔あり、翠帳紅閨の粧ひ昔をわすれず、右に古寺の舊跡あり、

晨鐘夕梵のひゞきたゆることなし。

○丘陵むなしく喬木しげり、むかしのあとやいづこなる。

○つゆおきまどふ淺茅原、よもぎが杣とあれはてゝ、虫のふしぞゝなりにけり。

○池の鏡に影うつす、岸の柳のみだれがみ、粧閣妓樓たちならびし、むかしの春ぞ忍ばるゝ。

○世事さまらず水むなしく流る、垂楊徒らに拂ふ舊門の欄。

○むかしの春はゆめなれや、入相つぐるかねのねに、をしむ人なき花ぞちる。

○孤花つゆをつゝみて殘粉になき、暮鳥風にすみて廢離をまもる。

○日くれて宮中つゆしげく、夜すがら殿裏に虫ぞなく。

○桃李は語らず、昔の春やいかなりし、烟霞あとなし、すみけむ人は今いづこ。

○ひなのすみかに年をへて、かへる袂をふるさとの、都のはるぞにぎはしき。

○ならのみやこをきてみれば、しかのふしどとあれにけり。

## 戰場
戰闘、悲哀之部參照



○むかしを弔ふ○雨寂々○かれのばら○月影すごく○艸むせるかばね○秋風さむし○風愁々○鬼哭愴々○ものゝふが○つゆときえにし○矢叫の○虫のこゑ〳〵○しろあと○まつふくこゑ○今はたなびく○はたすゝき○虫風に○あはれをつくす○夕日さす○白骨朽ちて○かつくちて○尾花が末に○月すごくすむ○寶刀折れて○こゝやむかしのあと○むかしを忍ぶ○忍ぶなみだ○志も白き○しもさゆる○ときのこゑ○矢玉はあられと○つゞみのひゞき○のこる昔のけしき○血潮のあと○雲漠々○あはれをのこす○鳥飛んで下らず○夢のあとゝふ松風○はかなきあと○石ぶみにこけむして○つゆふく風も身にしみて○かれ尾花

○名もなき艸に花咲きて、昔の春をよぶ子ぐり、なみだに咽ぶこゑさびし。

○曠野人まれにして古墳累々、かばねをあらりひし獸さへ、れなじきほねとなりはてゝ。

○艸虫つゆにこゑかれて、秋をたつぬるに形なく、老松梢に風たえて、むかしをとふによすがなし。

○苔生す石のおもてには、蝸牛むなしく篆書して。

○ふる春雨に石塚の、上にちりくる花つばき。
○俠骨かをる花の香に、狂ふ胡蝶は英雄が、ゆめの名殘やたづぬらむ。
○よろづ代までもたにぬ名を、殘すあふぎの芝原や、なみだのつゆのわきどころ。
○むかし忍ぶの草の葉に、露の光や劍太刀、折れて碎けし名殘かも。
○人の涙のつゆわかぬ、草のたもともなかりけり、湊川原の秋のくれ。
○白つゆしげき草むらに、うづもれはてし城跡は、野水ながれて虫啾々。
○城外風かなしみてくれむとふるうら、萬馬旌旗のあとといづら。
○寶刀は黃土にうづもれ、白骨にすみれ花さく。
○松の木かげの塚のこけ、むかしの人の夢のあと、あはれを今にとぶめけり。
○匹馬秋風に嘶きて、戟とり立ちし將軍が、れもかげまねく薄原、うれかと見れは舞ひくるふ、尾花が袖の秋の風。
○うの夜のゆめの稻妻と、きにてあとなきすゝき原。
○古來の白骨收むる人なく、新鬼はうらみ舊鬼は哭し、天くもり雨しめりて聲啾々。



○流水今なほ楚歌をうたひ、青血は化して原上の草となる。
○かもめのねむる松みれは、ありし壽永のたゞかひに、なびきし旗をみゆるなり。
○寶刀はむなしく黃土にまみれ、名將はいたづらに白骨と化す。
○みわたすかぎりのひろのはら、こゝやむかしのゆめのあと。
○草の葉がくれにもゆる火の、かげものすごき古戰場。

## 庭園

樓閣、宮殿、山家、田家之部參照

○庭つくり○山かけの庭○庭の面しろく○ひろくかこみて○庭もせに茂げる○こけむす庭○庭の眞砂路○むらさきの庭○玉しきのには○よもぎの庭○淺ぢふのには○むぐらふの庭○花さきみちて○五步にして一樓○十步にして一閣○はひりの門○九重の庭○ほとなき庭○うのふの松○みうのふの○柴のみぎり○築山のかたち○玉のみぎり○鳥このむ○園のやり水○かけひの水ひきて○木立物ふりて○池の心深く○泉水の心廣く○八重垣めぐらす○庭の立て石○雪見の燈籠○鞍馬の大石○青桐の立木○

淺茅生のつゆ○すきをこらして○とりつくらふ○はらはぬ庭○花ちりしきて○綠樹に鳥啼く

○庭の眞砂にてる月は、さながらしもの光あり。

○こがねを碎く菜のはなに、しろがねちらす梅の花。

○胡蝶のくるへる花畠、うかれはてゝもなくとりの。

○芝生の床に落花のふすま、胡蝶のゆめをしばしみむ。

○庭園てらす電燈の、ひかりにきほふ花のいろ。

○眞珠樓閣花さきみちて、身にしむばかりかをるなり。

○月まつほどの夕まぐれ、池の汀の青柳に、ふく春風もゆたかにて。

○春の夕の風たちて、日影うつろふ山桃の、花もいろまさる庭のおも。

○百日紅の秋のしも、なほちりがたのいろ見にて、風も冷たき庭のにわも。

○君が家飾る萩すゝき、秋もさかりのながめかな。

○秋海棠の花さきて、葉蘭にうよく風のにわと。

○萩の花つまさきしより、しかのなくねもかよひきて。

○道芝のつゆふみわけて、あしたの庭にわりたてば。



○あれてさびしき秋の庭、いとゞあはれはまし水に、やどるもあはれ月のかげ。

○月の影ちる草の道、つゆわけ衣しほたれて、たどりいくよの秋のうら。

○鳥は池邊の樹にやどり、魚は月下の波に伏す。

## 眺望 圖畫、秋望、春望之部參照

○うちわたす○いねかりわたす○眞帆片帆○水天一碧○ながめやる○月ものぼりぬ○みわたせば○千町田の○いりのまつばら○ふたなみ小島○はるかに見ゆる○末とほみ○なごりなく○かすみこめたる○きりたちわたるなり○かりなきわたる○千里の外も○一望千里○雲きにて○川とほしろく○河遠くよりきたる○瀬のねときよし○みはらかす○なみまのかもめ○沖のたかいは○空はれて○車のけぶり○流車走る○沖ゆくふねき○はるゝ〳〵と○はるかなる境○ほのかになびく○雲井にまがふ○雲を

かぎりの○はてこそ見ねね○雨にくれゆく○一村なびく○みるがうちに
○ながめはてなき○きりのたねま○はなれ小島○霞がくれに○浪間にみ
ゆる○遠山のはに○むら山とほく○野づかさ○朝なぎに○朝ぼらけ○夕
さびしく○漁村のくれがた○山村水郭○寸馬豆人○尺楚寸吳○山もいく
へ○海原とほし○沖合とほく○村雨のはれゆくうら○筆もおよばじ○繪
にも似たる○海ごしの山○ながめにあかぬ○とほ里みゆる○袖ふく風に
○ひとりたちねて○うらさびしく
○四十五丈の瀑きよく、三十六峰の花白し。
○右には漁村左に樵徑、みわたすかぎり、みなうたまくら。
○三五夜中の月きよく、萬里の長天秋たかし。
○湖上はるかに船をのぞめば、心うぞろに興到り、野徑に馬ををどらすれば、
手はれもむろに鞭を按ず。
○たかねにかくる白雲は、ちりにし花のかたみなり、あをばにしげる梢には、
春の名殘のいろもなし。
○湖邊の人は三分のみどりをふみ、塞外の馬は一道の煙にいばふ。



○かすみはあをし湖寺の路、嵐はみどりなり洞庭の砂。
○芝浦ちかくうちよせて、東へつゞく波のはな。
○征客うぞろに腸をたち、詩人はやがて心をなやます。
○巖は碎く波のはな、峯はふくむ松のみどり。
○いづれか山なるいづれか水、くもより外のかげもなし。
○心すゞしく氣朗かに、くもにのるべき心地して。
○一條のみち庭前の艸に白く、三條のけむりは瓦上の松にたかし。
○馬なべてとほくも見さけ、つゞつきて峰にのぼり。
○風白浪を飜せば花千片、雁青天をわたれば字一行。
○山の半は雲の間に入り、家はこと〳〵く烟の内にかくる。
○一行の雁は雲に入りて幽かに、數點の花はつゆをおびて匂へり。
○峯平かにして萬里のくもへだてなく、千里に隈なき月の夜に、天女がうた
ふ神の曲、ほのかに送る松の風。
○南をはるかになかむれば、雲につゞける紀の路の小島、由良のとわたる早
ふねの、汐追風の吹上や、遠浦ながら住よしの、松こう見ゆれ海ごしに。

○野邊のかすみのうすぎぬに、つゝまれながら咲くはなの木のまにいづる月の影。

## 名所

○花白く山あをし○河ながくして○名だかきところ○砂あきらかにして○山ひいで○月にきてみれば○ながめはあかぬ○花紅にもにんとす○山むらさきにして水明かなり○みわたせば○海ちかく○山はるかにして○水きよくして○里の名も○みやびのところ○花さくはるは○月てる秋は○紅葉のいろにあらはれし○都に近き○峨々たる山○淙々たる河○ほこるもうべ○ありぺとあかぬ○やき人とわれやなりけん○千とせふとも○千代やへなまじ○月あかき夜の○春は花夏はわかばに○秋は月冬は雪見に○四季のながめ

○富士の高根（駿河）○伊香保の沼（花かつみ 上野）○をばすて山（月信濃）○小倉山（鹿山城）○わか草山（鹿大和）○たかを山（紅葉武蔵 山城）○かつらぎ山（全上大和）○くらぶ山（梅山城）○飛鳥山（花武蔵）○吉野山（全上大和）○比良の峯（全近江）○志賀の山越（全）○飛火野（雲雀 和）○大原野（雉子 山城）○字陀野



（全大和）○佐保山（大 呼子鳥 和）○六田川（柳大和）○廣澤の池（全山城）○布留野（全大和）○月が瀬（梅伊賀）○蒲田（全武蔵）○根岸の里（鶯武蔵）○伏見の里（全山城）○男山（女郎花山城）○眞野入江（濱、尾花近江）○高圓野（萩大和）○玉川（全近江）○伊勢の濱（秋伊勢）○なつみ川（蟬大和）○片岡の杜（全山城）○不忍池（蓮武蔵）○菅田の池（全大和）○江戸川（蓼武蔵）○長柄川（鵜舟美濃）○竹田の里（水鶏山城）○淀の渡（時鳥山城）○初瀬山（全大和）○生田杜（全摂津）○堅田浦（雁近江）○芦川（鳴山城）○吹上濱（菊紀伊）○加茂川（子鳥山城）○佐保川（全大和）○三島江（永鳥摂津）○宇治川（網代山城）○奈良志の岡（鹿狩大和）○八瀬（炭かま山城）○墨田堤（雪武蔵）○しがらきの里（雪山城）○忍岡（若菜武蔵）○根岸の里（全上）○淺澤小野（全摂津）○布留の中道（全大和）○飛火野（全大和）○芦川（全）○鳥羽田（全上）○小倉山（鹿山城）○深草の里（全上）○音羽川（全上）○春日野（全上）○龜井戸（梅武蔵）○蒲田（全上）○小向井（以上全）○木下川（以上全）○梅津の里（全山城）○御垣が原（全上）○隅田川（柳全上）○佐保川（全大和）○あすか寺（全上）○布留野（全上）○桂川（全山城）○住の江（全摂津）○鴨川（全山城）○向島（若草山城）○さが野（全山城）○ふかき草（全上）○水無瀬川（全上）○三笠野（全大和）○ふるの中みち（全上）○老曾の杜（全遠江）○小野山（蕨山城）○春日野（全上）○飛火野（全大和）○片岡山（全上）○信夫か岡（全陸奥）○しめぢかはら（全下野）○奈良山（大 呼子鳥 和）○象の中山（全上）○習志の岡（全上）○吉野山（全上）○淀野（春駒山城）○美豆の御牧（全上）○いわれ野（全大和）○みがきの原（全上）○穂坂の牧（望月の牧 信濃）○小野の牧（全常陸）○荒のゝ牧（全陸奥）○交野の牧

(全)河内○難波江(全)攝津○三島江(上全)○さが野(雉子)山城○大原山(上全)○小鹽山(上全)○春日野(全)大和○粟津(全)近江○猪名野(全)攝津○片岡(雲雀)山城○比叡山(上全)○美豆野(上全)○岡田の原(全)近江○小金井(花)武藏○靖國(上全)○向島(上全)○御殿山(上全)○日暮の里(上全)○嵐山(全)山城○朝日山(上全)○くらま山(上全)○天の香具山(全)大和○泊瀨(全)大和○須摩の浦(全)播摩○さくら川(全)常陸○越が谷(桃)武藏○桃ろの(全)山城○くらぶ山(上全)○天の川(全)河内○紫野(菫)山城○伏見野(上全)○日の岡(上全)○布留野(全)大和○引馬野(全)遠江○淺野(全)淡路○竹田(苗代)山城○ふるの早田(全)大和○井出の玉川(蛙)山城○初瀨川(全)大和○五十鈴川(全)伊勢○大久保(躑躅)武藏○日暮の里(上全)○常盤山(全)山城○双の岡(上全)○岩田の小野(上全)○昆陽の池(杜若)攝津○いかほの沼(全)上野○六田の淀(山吹)大和○神南備川(上全)○清瀧川(全)山城○山吹の里(全)武藏○小くら山(藤)山城○男山(上全)○宇治川(上全)○龜井戸(全)武藏○清見潟(全)駿河○加茂川(卯花)山城○宇治の里(上全)○桂の里(上全)○岩陰山(上全)○玉川の里(全)陸奥○住吉の岸(全)攝津○那良志の里(郭公)大和○隅田川(全)武藏○三輪の里(全)大和○片岡の杜(全)山城○繪島(全)淡路○常石山(全)山城○堀切(菖蒲)武藏○益田の池(全)大和○住の江(全)攝津○玉江(上全)○淀野(螢)山城○志賀(橘)近江○五月山(全)攝津○牛窓(水鶴)備前○大井川(鵜舟)山城○戸名瀨(全)大和○夏箕川(全)大和○れとは川(螢)山城○猪名野(全)攝津○狛野(撫子)山城○内野(上全)○劔の池(蓮)大和○日下江(全)河内○衣手の森(蟬)山城○石清水(泉)山城○走井(全)近江○若の浦(萩)紀伊○遠里小野(全)攝津○萩寺(全)武藏○小倉山(薄)山城○伏見の野べ(女郎花)山城○朝の原(全)大和○御垣が原(蘭)大和○入谷の里(朝顔)武藏○秋津野(苅萱)大和○往來の岡(上全)○道灌山(虫)武藏○鏡山(月)近江○隅田川(全)武藏○嵯峨野(全)山城○田簑の島(雁)攝津○立田川(全)大和○佐保川(上全)○根岸(鴫)武藏○芹川(全)山城○大原(鶉)山城○深草(上全)○粟津が原(小鷹狩)近江○伏見山(鹿)山城○たかまどの野(全)大和○桂の里(擣衣)山城○秋しのゝ里(全)大和○玉川の里(全)武藏○染井(菊)武藏○戸難瀨(全)山城○布留の山(紅葉)大和○稻荷山(全)山城○守山(全)近江○淀川(千鳥)山城○明石○須摩(全)播摩○加茂川(全)山城○天の橋立(全)丹後○比良の湊(水鳥)近江○鹽釜の浦(雪)陸前○愛宕山(全)武藏○御茶の水(全)武藏○上野(上全)○三熊野の浦(全)紀伊○秋風になく虫の聲、なくしらつゆにほゝゑむ萩、名さへ床しき姫が井の里。

○行く水きよきなめり川、むかしのながれたれか汲む。

○この里は月のなどころ、水白く山あをし。

○名にながれたる長良川、うぶねのかゞりきらめきて。

○かたりつたふる言のはの、歌の中山清閑寺、今熊野とはこれぞかし、名どころ多きうが中に。

○音にきゝつる宇治のさと、げにすぐれたる山水や、はるかに見ゆる里のはし、近くはめぐるもりのいけ、いづれみあかぬけしきかな。

○みやこに近き名所は、りの名もたかくきこえたる、雲の林の夕日影、うつろふかたは秋くさの、花むらさきの野をわけて、かものみやしろふしをがみ、たがいつはりか糺の森。

○山たかくして水長く、ふもとにつゞく松並木、かへりみすれば和田の原、八十島かけてゆくふねの、風を孕みてはるゝ〳〵と、ゆく〳〵へもしらずはてもなく。

○うらも一つにすみだ川、月にこゝふ袖のつゆ。

## 海嘯 海之部參照

○みるがうちに○吼たくるふ○○あなやとばかり○山よりたかき大浪○山を崩してよせくる○さかだちて○逆巻きくるふ○まきあがる○勢すさまじく○あはだちて○うらくもり○曇りはてゝ○海のあたなに○わきたつ雲の○心づかひ○迅風一陣○巖を碎き砂をまきて○三千丈○天をひたす○あやしきひゞき○いざりぶね○木の葉に似たる○うつまきめぐる○れどろきあわて○にげまどふ○漁村一帶○草木はかれて○いさごはら○昨日までありをかりし野も○咫尺を辨せず○たちまちに○つかのまに○いつこのはても○五百餘村の○子なく妻なく○れやのなきがらとりまきて○めもあてられぬ○くがはみるまに海と化し○桑田のためしも何ならず○磯濱近き海人が家は○のこるものなく○けぶりも見ず○みちにたふれて○一夜のうちに○かはりはてたる○いづこわがやと○みわたすかぎり○海嘯ありし村々は、見渡す限り石河原。

○巖に打上げ浪間にゆられ、のこる屍のかずしれず。

○海にあざりし海士の子は、ことなく濱にかへりきて。

○妻をたづぬる夫あり、れやをさがしてなく子あり。

○磯邊にたかき觀月樓、濱手にうばたつ駐春館、よせくる海濤たちまちに、龍の都にうつしけり。

○磯べの漁夫が夢の中、噫とひゞける物れとに、れどろくひまもありうみ、激浪吼に立つ三千丈。

○れやなき幼子夫なき女、こゝの山陰かしこの濱に、天に訴へ地になきたふれ。

○夜は丑三つのやみのうら、しきりにきらめく稻妻に、百雷れちくるれとは

げしく、たちまちよせくる大海濤。
○雷電一聲山岳さけて、うしほうづまく百餘村。

## 落雷　雷電之部參照

○くもおこりきて○なりはたゝがみ○かみとけて○はたゝがみ○なるかみの○黒雲はしる大空に○風よぶくもの○雷霆怒りて○なりひゞく○すさまじくも又おりろしや○ものもいはれす○おちかゝり○黒雲まきのぼる○ひらめくひかり○きらめくいなづま○なるよりはやく○天の原○空の海原○雷車のひゞき○いかりくるふ○梢も見わず○山もかきくれ○山にこたへて○水にひゞきて○暗夜をてらす○すきもる光○ゆめやぶられて○夕立はげしく○暗黒世界○咫尺も辨ぜず○五層樓上○百雷おちて○萬雷とゞろく○雲間を走る○風を起し雲をよびて○一閃三千里○轟々とし て○般々として○おどろく枕に○雲のあなたに○雲はれて○霹靂一聲○あはやと見るまに○流石きづきし樓閣も○雲ゆきはゞかり○くもたちさへて○見る〳〵に○杜の梢に○たかき木はうたれ○粉微塵○くだかれて



○影だにとゞめず○稻妻のひかりするどく○雷火みだれて○耳おほふまもあらばこそ
○豪華をほこるたかどのも、はゞかる雲のあらばこそ、忽ち落つる百雷の。
○杜にうびゆる五層樓、くろ雲かゝると見るまもあらせず、霹靂一聲きらめくいなづま。
○くろくもかゝるとみるまもあらせず、おちかゝりたる百雷の。

## 地震

○なゐふる○大なゐ○しば〳〵ふるひて○つぶれふして○たふれかさなり○あわてふためき○まろびいでゝ○たすけをさけぶ○すさまじのれと○はしらかたむき○屋根おちて○大家小家のわかちなく○喧々とばかりに○ゆするゝひゞき○右往左往に○とびちりて○高きうてなも○ひくきわらやも○やうやくに○あらうひ走る○地神のいかり○地軸碎けて○天變地異の○日毎につゞく○夜半ばかり○ともしびたふれて夜暗黒○幼は長をよび老は壯にたすけられ○押しつぶされて○大磐石も○あとすさま

じき荒野となりて○空合あしく○風もふきたち○雨さへこぼれて○目のひかりもうすれ○地球はくだけ○海鳴り山ゆすれて○かたむく家○たふるゝ人○人畜うこなはれて○すくふすべなき○空とぶとり○つばさなければ○あらしの聲に○金城鐵壁も○もろくも崩れて○名だかき家も○賤がふせやも○風ふきませて○子を失ひて○兄は弟をよび○母のなきがらにはひつく稚子

○空かきくもりむし暑く、あなねぐるしとうめくまに、地軸をゆする大地震。

○北斗かたむき月球飛んで、天地崩るゝ大地震。

○さしも堅固の城廓も、地神の怒にはかなくも、みぢんとなりて崩れけり。

## 火災 都會之部參照

○ほのほのひかり○やみをてらす○やみぢにかゞやく○あたりをてらして○もえのぼる○高樓大厦○やけおちて○警鐘一番○とぶ火○炎のいろ○天をやきて○空にながるゝ火○天の川原も水あせむ○風にふきちる○風にもたつ○まなかに○夜をこめて○夢ぢろく○夥しくうつかねに○まとをひらけば○辰巳の風にあふられて○全市は灰となりはてぬ○風にみだれてとびちる火○又もに移る○さばかりかたき家藏も○ぬりごめも○富華をほこりし○黒雲むらがり○烟なびきて○空にうつりて○くれなゐの○あわてふためき○家財運びて○われさきにと○きのふまであとはかなくも○萬金の財も○烏有となりて○財をしまず○黄金も珠も○風伯のいきほひかりて○ゆめのうちに○いづこと知らず○はやちの風に○扇の如く末廣がりて○縦横にもにほこる○東西南北もにひろがる○あられの如くとびちる火のこ○花のみやこも○あはれといふも○たからをしみて命をすてし○ゆめのあと○警鐘一番迅風叫びて、天にひらめく炎の光。

○猛火燄々赤龍狂ひ、滿都烟ともに上る、空に嵐の聲すごし。

○風に氣づかふ夜半ばかり、忽ちひゞく警鐘の。

○とびちる火花はすさまじく、風にふかれてもにうつる。

# ○人事部

## 人倫（道徳）情、教訓之部參照

○世のみち○人のふむべき○たゞしきみち○れもきは正義のつとめ○我が日の本の道○神ながらの道○敷島のやまと心○恭儉をもて身をゝさめ○いのちも何かせむ○二つなきみち○教への庭のみち芝○うごかぬこゝろ○學びを修め業を習ひ○智能を啓き徳器を成す○義勇をもて上にまつろひ○をゝしき心○君につくす○親にむくゆる○妻をたすくる○友のなさけ○國につとむる○ますらをの道○うつすみなはの一筋○かたき心は金鐵

○學ひの道を勉めつゝみちある友にまじはりて、君にまことをつくさまじ。

○山は裂くとも海はあすとも、世に二心われもたじ。

○義は山嶽よりなほたもく、死は鴻毛より猶かろし。

○上を敬ひ下を恵み、すべて禮義をつゝしみて、上下一致し王事につとめむ。

○我々皇國の同胞は億兆心を一にして、君に事へてよく忠に、れやにつかへてよく孝に。

○兄弟は友夫婦は和、友には信もて交りて、恭儉この身を修めつゝ、博愛をもて衆に應ぜむ。

○家にはゝしき妻子あり、里にはしたしき友がきあり、されども國に事しあらば、いかでうしろをかへりみむ、進みてとらむ忠義の名。

○君をたすけ民をゝさめてうるはしく、たゞしくなほきこのみち。

○わが身をまもるむらざもの、心のれきてし正しくは、世にまがごとはなからまし。

○こゝろの道しなほからは、人めをいとふ關の名のはゞかる事もなかるべし。

○光まばゆき勳章は、人のさづくるものとかや、正しきみちをふむ人の、徳はたれよりうけにけん。

○まことの道はひろけれど、よろめせまくぞれもはるゝ、こみちはもとよりせまけれど、よろめにひろくみゆるより、世に立つ人のともすれば、こみちにのみぞ迷ひ入る。

○物の本末かけくらべ、始終をたづねつゝ、つばらにねもひくはしくとひ。
○天下を治むる方法は、徳にやぶれて徳に成る。
○人の心は畠なれや、よきたねまきて養はゞ、なぞか實入のあらざらむ、よしよきたねはまきぬとも、艸をからねばたなつもの、はたいかにして收むべき。
○悪にかたるゝことなかれ、善もて常に悪に克て、利に制せらるゝこと勿れ、義をもて常に利を制せよ。
○人の心のよしあしを、分析すべき術もがな。
○ちぎりし言葉の花ちらぬまに、約束の實をむすべかし。
○望みはてなき海みても、もとの流れなわすれそよ。
○渇してものまじ盗泉の水、うゑてもやどらず勝母の里。
○みちにはづれてかたむより、こゝろやぶれてもむ。ことわりたてゝやぶれてもむ。
○瓦となりて全からむより、玉とくだけてちりてまし。
○正義の人をいたむるは、天をあざむくものとがいはむ、水の流を山にのぼせ、砂もて索に綯ふべしや。
○不善を樂しとするものも、善をくるしとするものも、共に誠の人ならず。



○人を欺くいとやすし、欺かるゝも欺くも、れのれを欺くことなくば、欺かるべきこともあらじ。
○世のことぐさは知るといへど、れのれを知らぬ人もあり。
○功名の念外に盛りに、道義の心内にむなし。
○黄金しあらば大方の、物みなあがなひ得らるべし、たゞかひがたきは人の徳。
○世にほめらるゝは損ありて益なし、世にうしらるゝは益ありて損なし。
○移ろひやすきいろ香より、さきてもちらぬ心の花の、匂ふかぎりを匂はせよ。
○人のふむべきみちの外、世をわたるべきみちはなし。
○こみち枝みち多けれど、人のまことにふむみちは、たゞ一筋と知るや君。
○西に東にうられもて、ふもとのみちは多けれど、仰ぐはれなし峯の月。
○まことのみちをふまむには、世にすてらるゝものならず。
○利慾の念をかり去らば、世に欺かるゝことなからむ。
○げに世の中は玻璃のかゞみ、よきもあしきもをのづから、つゆかくれなく

あらはれぬ。

○海のおもには波たてど、底には水も靜にて、眞珠の光かゞやけり。

○言葉常にすくなくば、おろかならむもかしこくみゆむ。

○かをりゆかしきうばらの花、手折らばとげの身をさゝむ。

○文をよみつゝ太刀はとれ、おもきをのせて遠きをゆくも、二つの車輪のあるが爲。

○まことの草のしげゝれば、つながぬこまゞはなれざる。

○敎への道のすぢとめて、ふみなたがへそあだしみち。

○心のまことは大ぞらに、ひかりくまなき月の影、上下萬年縱橫萬里、つゆもかはらずてらすなり。

○迷ひのくもを拂ひなば、眞理の光はあらはれむ。

○あだなる花の香にうみて、うかれ心のはてしなき、春のみいかでつゞくべき。

○すゝめ正義の旗たてゝ、不義の魔軍（マグン）のつくるまで、社會の上をかりはらへ。



## 君臣 勇氣、國體之部參照

○民やすかれと○つかふべき○君にさゝげしこのむくろ○天つ日嗣○しろしめす○國しづかに○たかみくら○うつのみこ○神のみすゐ○朝政○すめらぎ○われもまた○大みやどころ○大君のみたてとなりて○國のねや○九重の○大内山○もゝしき○一すぢに○つかふるみち○草むすかばね○君をねもふ心のいろ○つかふるみち○まけのまに〳〵○君にふたごゝろ○關の藤川たゞずして○めぐみあまねき○四方の民草○みづくかばむる○我身のための世をはいのらず○昔も今もためしなき御世○つかふてまづふみわくる○うけて久しき○ねく山の柳葉○くもりなき○空にかゞやく日の光、君がみかげにたぐべつゝ、仰ぎまつらふ天が下。○かひなき賤が身にもなほいのるは君が千代の末。○人にしられぬちりの身の、山よりたかくつむよはひ、何ながらへてかひあらむ、君がみために死なざらば。

○君がみかげにくらぶれば、つゆのうてなにすむ月の、きよき光もなにならず。

○わが玉の緒はたにぬとも、君を守りの神となりて、國につくさむ末永く。

○薪にふして肝をなめ、ありとあらゆる苦の數をつくしてたゆまずうまず、つとめはげむも國のため、つとめはげむも君のため。

○千ひろの海も何ならず、雲ゐる嶽も猶ひくし、君がめぐみにくらぶれば。

○世のためにこり身はれもへ、身のため世をばれもはじと、れもひさためてをこたらず、つかさの庭にわがたてば。

○秋の夜さむにうつきぬた、とわたる雁の聲にさへ、民のさむさをれぼしやる、君がめぐみぞかしこきや。

○九重ふかき宮の内、のぼる旭のごとくにて、治まる御世のみひかりは、世界にあまねくかゞやけり。

○花も紅葉もようにして、いろぎなれたるまつりごと、いとまあれやとよの人は、いひもいはずもひと筋に、心のまことをつくすのみ。

○大御心をかしこみて、猶世にしらぬ人もやと、みやまのたくの松の門、さしもふかくやさぐるらむ。

○天津日つぎのきはみなき、大和しまねの國民は、ふみな迷ひそ外國に、又たぐひなき此道を。

○千島高さご沖つ島、八十しまかけて浪風の、あらびなかれと國民を、れもほしたまふかしこさよ。

○御代のめぐみのつゆうけて、さくやみくにの櫻花、ちるも惜まじ君ゆゑは。

○天津日影のくもりなく、民安かれとてらします、皇命の大御いづ、ようへまつらむものぞなき、ゆめなわすれそ國民よ。

○民安かれと天地の、かみにちぎりをかけまくも、あやにかしこき大君が、代々のめぐみいかでかは、むくいまつらでやむべきぞ。

○つくせますらを君のため、ふみをよまむも太刀とりはくも、汝が心にまかせつゝ。

○やまと男兒の眞心は、君が代まもる國の楯。

○人りては御國の柱となり、いでゝは御國の城となる。

○乾坤萬劫に動かず英雄の志、名節千歳にたかし日月の光。

○うもいくたびか雨風の危き世をばのがれけむ、皇國の寶は鐵石の、心ゆるがぬ大和魂。

○城外敵せまりて天日くらく、殺氣蕭條として神をたうふ、修羅の巷に飜りても、風にみだれぬ正義の旗。

○松柏歲さむくして綠ます〳〵さかえ、雪霜凛々として戰氣いよ〳〵固し。

○名をかへりみるものゝふは、たふれて後の草の原、朽ちにし骨に花ぞさく。

○廟堂みちありて春風穩かに、門舘私なくして白日靜かなり。

○世にためしなき大みよの、ゆたけきいろも幾千里、つらなる野邊の春ふかみ、嗚歌のどかにきこゆなり。

○さやけき德は秋の夜の、月の光もいかならず、高きいさをはうびに立つ、五嶽も更に及はじな。

○化は禹貢が山川の外に行はれ、德は周公が禮樂の源をなせり。

○風もうよがぬ九重の、うらのどかにも春の日の、光くまなくてらすかな。

○御世をいかにと沖つ浪、八十島かけてれもふには心の底にさわぐ風。

○みやまの奥の松の戸を、なほくまもなくたゝきみも、つかへむ人やこもる



かと。

○宸宮の朝には百官の政をきゝたまひ、清涼の夕には蒼生の心を汲ませらる。

○仁德の鳳詔一たびくだれば、義勇の臣子闕下に拜舞す。

○國はれごりかなり三歲の禮、恩はあらふ萬家の春。

○聖主德ひろくして萬物春にあひ、賢相朝にみちて百事こゝに新なり。

○巍々たる聖德乾坤大なり、永々たる皇圖日月ながし。

○金枝ひいでたり千年の聖、玉德さかんなり萬乘の君。

○くるしむ民をくるしめば、やすきわが身もやすからじ。

○榮ゆる君がみよの春、ひろき惠の白つゆに、よの民草がいやしげる。

○枝もならさぬ時つ風、土もやぶらぬ雨つゆの、めぐみに育つ民草の、さかゆるいろこそめでたけれ。

○梢の花はよろこびのいろに咲きうふ春の風、うよぐ青葉のすゞしさも、君がめぐみのひかりなり。

○加茂の社のゆふだすき、かけていくよかつかへなむ、めぐみあまねき君が

世に。

○豊あし原の千五百秋、天地のむだかぎりなく、君が御楯とものゝふが、仕ふる御代にあひにけり。

○千代田の松の蔭しげみ、君が千とせをいのるにも、甲斐ある御世の姿かな。

○山はさけ海はあせなんよともいはじ、二心なき眞心は天てる神やしりまさむ。

○御國の民と生れきて、此大御世にあへる身の、なほ何事をうしとてか、かこちがましくうたふこゝろ、うたてわりなき心なれ。

○くだしたまへる大みことのり、わが目の本の大御寶が、よるべき道はこゝにあり、ゆくべき道はこゝにあり。

○ひとりの君にまつろひて、二たりのれやにかしづきて、忠孝完備の名をのこせ。

○せばきたもとの程なきに、つゝむずべなき君の恩。

○君とれやとの二見潟、なみ〳〵ならず仕へつゝ、ひくしめ繩の一すぢに、心つくしてまつろはむ。



○妻にも子にもいのちにも、かへらるべきか君の恩。

○君は舟なり臣は水、水よく舟をうかべつゝ、舟よく水をわたりつゝ、千歳さかゆく大御代や。

○しげきめぐみにむくいむは、たゞ忠をこそ筑波やま。

○君に仕ふるはじめとて、まづこうわくれ大庭の、みはしの下のゆきのみち。

○民のためとて大君が、いのるもかしこ雨祭、しらでや田子の早苗とる。

○君につかへて忠ならば、れやにつかへて孝ならむ。

## 親子 情之部參照

○れほしたてゝしなでし子○這へばたてと○生れし日より○わが手一つに生ひたてし○あはれならぬはなかりけり○ひざにはひよる○我子人の子○ほゝゑみて○心のふかさ○やどの竹の子○れひさきながく○ふかきめぐみをれもひつゝ○はゝき木にすがるつゆ○老らくの杖ともなれと○庭のわか竹○母の言葉を守れかし○添寢の母が○雲井にきこゆるつるの聲○孝のみち○反哺三枝○鳥にも劣る○玉にもまさる子寶○なさけのつ

ゆ○れきどころなき恵○れもふれもひは多けれど○はゝりの杜の形見と
て○愚さまでも似よとては○れやよぶとりの聲きけば○いりしむわざも
子ゆゑなり○よき實をまつも親心○れなじねになく
○やけ野のきぎす、夜の鶴、親の心はやみなれや。
○甘き味にもあきはてゝ、綾の衣もなにならず、足はぬふしなき人も猶子ゆ
ゑはくだく心かな。
○椎の木の實を兄弟が、ひらふ袂もわかちなき、姿をれやの見ましかば。
○月影きよき和歌の浦、子ゆゑのやみに鶴はなく。
○親の恵は人の子の、親となりてゞ知られけり。
○反哺の孝に三枝の禮、烏さへ道をふむものを、われいかなれば人として、一
人の親の孝養も、れもふがまゝにはなし得ざる。
○たけき心のますらをも、二つはあらぬ親子の道、愛にはしぼるなみだかな。
○門田のわせのひつぢぼを、見るにつけても親ぞれもふ。
○はゝりのかげは枯はてゝ、雨にこのめやうるふらも。
○山の端くらく日はくれて、秋の野いそぐ駒の聲、聞くにつけても故里の。



○子をれもふなる心もて、れやに仕へよ人の子や。
○秋風さむき此夜頃、寝冷なせそといとし子を、れもふ心の暖かさ。
○げに父のみの父のため、また母りばの母のため、ふむべき道はこのみち。
○はゝりの森のもみぢ葉は、ちりてもも心に殘りけり。
○忘れがたきは撫育の恩、海より深く山よりたかし。
○ちゝぶの山に風たちて、たのむ木かげはかれにけり。
○はぐゝむつゆのなかりせば、子萩のいろ香やなかるらも。
○小蝶のゆめをうつら〳〵、結ふ翼にれもるつゆ、はらはぬ風を身にしめて、
幼き人はねむるらも、母のなみだのふところに。
○失せにし人の面影と、れもへばいとぞせまる胸奮の如きかんばせに、うゝ
ぐ涙の村時雨、紅葉の手もてかきはらひ。
○れやとなれもひう子にあらず、れやのいさめにさからはぢ。
○艸木は雨露のめぐみをうけて、やがても花をひらくなり、まして有情の人
の子の、人となりつる恵の露の、なさけはなにゝくらぶべき。
○汝が學びのためならば、何かいとはむ金銀珠玉。

○うのはらにこうあらねども、わがはゝきゞとたのむなり。
○れろかになれと父母の、などかはわれをうだつべき。
○子をれもふ闇(やみ)はくらけれど、猶君の爲國の爲、身を顧みず盡せよと、願ふ心はつゆ惑はず。
○子をれもふ田鶴の一つがひ、れなじねになくゆふまぐれ。
○二葉の松の遠永く、榮ゆく末をれもふにも、けふぞ千とせの始なる。
○ねにこうたてね子をれもふ、思はれなじ夜のつる、しもにもなかば中々に、心のやみもはるけんを。
○さはべにさわぐ蘆だづの、子をれもふ聲は久かたの、雲の上にもきこゆなり。
○世に生れてはかず〳〵の、れもひはあれども子をれもふ、思ひにまさる思ひなし。
○心はやみにあらねども、子を思ふ道にふみまよふ、人の親こうあはれなれ。
○神の社の日かげ艸、はひまついれて榮によと、このよをかけて祈るかな、
○安らかに世をゆづる葉の、常盤の色にあやかりて、茂りゆく世を祈るかな。



○世に願なき老が身の、寶となるは只子のみ。
○おやのまもりとあひうふる、心はよしや五百重波、たちへだてぬる外つ國の、はてといふともれくれじな。
○おほしたてゝしなでしこの、花さく頃をいつしかと、まつの千歳のこゝちして。
○かしらにつもる白ゆきも、ひたひによする年波も、かつ忘れつゝまたるゝや。
○吾世の花は今盛り、莖をつらねて撫子は庭の面にさきみてり。
○ふる枝の藤の枝たれて、木末の花をならべ見る、老の身こうはうれしけれ。
○月をみてだになぐさまむ、子ゆゑにまよふやみのみち。
○いとけなき子を人の手に、れきて別れしうの夜半の、俤今も身をさらず。
○風をまつまのつゆの身に、れもひれかるゝなでしこは。
○ようへてみれど露ばかり、なぐさめがたき撫子の、花のゑがほをいかにせむ。
○れやのいさめもいまさらに、つく〳〵れもひ忍ぶずり、袖にみだるゝつゆ

の玉。

○教への庭にゆきかよひ學ぶも親のめぐみなり。

○反哺三枝はとりすらも、知る世の中にたらちねの、親をわもわぬ人の子よ。

○電光石火の光のまだに忘るゝよなく忘れぬは、子をわもふわやの心なり。

○野こ山こ里こにて千里の路はへだつとも、隔てぬものはふるさとの、父母わもふこゝろなり。

○わがふる里のはゝそ原、この秋風にいかならむ、わもひやるだに夕ぐれの、うらさびしくも見ゆるかな。

○つまとふ雉子のなくねより、子をわもふたづの聲かなし。

○雲に入るべきたかどのも、のぼりて見ます父母の、なき世なりせば、何かせむ、山海かぬる味ひも、きこしめすなる父母の、なき世なりせばかひあらじ。

○けふ錦きてふるさとに、かへる袂の春の風、父と母とがよろこびの、柳の眉にふきうひて。

○榮譽富貴はかりうめの、世のまぼろしとわもひても、わほ捨てかねつたちねの、わやの心をくみゝれば。



○我が此かひなをさすりても、我がたけだちを思ふにも、わほしたてゝし、たらちねが、心つくしやいかなりし。

○まがきが下の撫子の、わもふことなく生ひいでゝ、花さくばかりなるみても、わほしたてつるたらちねの、つゆのめぐみがしのばるゝ。

○入相つぐる鐘の音に、かへる烏の三つ二つ、門にむかへてまつ母の、めには いかにかうつるらむ。

○高き雲井にのぼりつゝ、月のかつらの一枝を、手折りてかへれわが爲に。

○雲居にたかく名をあげて、龍のあぎとの玉もとれ。

○窓のあらしのすさぶにも、なほふるさとの空さむく、板間の風にねざめして、われをまつらむ父母の、老のなみだがしのばるゝ。

○旅路はるかにへだてきて、北風さむき日すがらに、わもひこりやれふるさとの、この手かしはの一本を。

○窓に螢をあつめよと、いさめし父がみことばは、又きくよしもなき魂は、あはれいづこにわはすらむ。

○さむき夜毎のうひぶしに、めぐみの肌へあたゝけみ、ゆめの程だにしたは

れし、母のみことよいまいづこ。
○膝下にすゑて生先(おひさき)を、いさめし父が詞にも似ぬ世の今となりにけり。
○門に赤衣の聘使なく、堂に白髪の慈母ゐます。
○母がたまひしふり袖の、花の色目はかはらねど、きるにはつらき衣かな、うの世のことの忍ばれて。
○父と釣せし青淵に、けふきてみれば底ふかき、めぐみのほどは何となく、水のれもてにうつるなり。
○たけきにほこる虎だにも、子ゆゑはよわくなるものを。

## 孤兒 憐愛、悲哀之部參照

○あはれの身○あはれをかけよ○なさけのつゆにもれし身○とりのこされて○たのむはゝうの蔭もなし○みの虫もちゝとなく○たのむ木蔭もなくばかり○樫の實のひとり○めぐみにあまる○つらにれくれし雁の子○いかにせむ○父をこひ母をしたふ○すがる力も○たのむ梢○まとふかつら。



○あはれ大方世の人は、ふたおやなきものを、いかにわびしき我身ぞも。
○あな〳〵あはれ母うばの、母にはれくれ父のみの、父にわかれしみなしごの。
○かなしきことのあるたびに、うれしきことのある毎に、父いまさばとれもひつゝ、母いまさばとれもひつゝ。
○世界はひろし人はおほし、あはれむ人もなきにあらず、めぐむ人はたすくなからねど、なほしたはしきは父と母。
○れや子うちつれ行く人の、うのたのしさはいかにかと、うらやましくもゆかしくも、天にかこち地になけど、今はた何のかひあらむ。
○頼むかげなきなでしこの、しもれもげなる秋の野邊、あはれをかくる人もなし。
○つぎれのきぬのやれめより、身をさすさむさいかならむ、飢になきつゝ小女子の、世になきれやをやたづぬらむ。
○こがねのはしら玉の床、錦をまとふ人もあるに、あはれこゞにしをとめ子

よ、つぶれの袖は肌をおほはず、身をよせつべき軒もなし。
○秩父の山に秋くれて、はゝそりの杜のつゆ志もに、たのも本かげもなかりけり。
○八重山吹のかなしさは、花のいろ香もあせはてゝ、みなしごといふ名こそ立て。
○おちてはかなき樫の實の、ひとりおくれしみどり子の。
○乳をたつねてなくちごの、母なき身とも志らずして。
○身をうき艸のとまるべき、たよりなき身はいかにして、浮世の浪をわけつべき。
○うらとぶとりの一群も、ねぐらにつくとおやと子が、おくれさきだちゆくものを。
○たのむ椙のかれしより、たちよるかげもなき身には、いづこによらも命ぞ。



## 捨兒 悲哀之部參照

○すてゝゆく○鬼ともいはむ○なくねこぞにて○野邊の千艸○門邊にすてゝ○よりにみるだに悲しきを○親の心やいかならむ○捨てられしものとも志らず○ほだしとて○おやとはいはじ○あはれにも○ねにたてゝ○よき人にはぐゝまれよと○乳ぶさもとめて泣く○みにがくれ志のびてやみる○いかに忍びて捨てし○腸を斷つ○血潮を志ぼる○世わたりかねてなさけを知らぬ
○伴ひゆかばほだしとならむ、ずてゝゆかむか忍ばれず。
○麻の狹衣つゝめども、夜つゆにたへぬみどり子を、心つよくもたがすてし。
○たからともいふはしき子を、捨てぬる親の心こそ、あはれにも又かなしけれ。
○夜半にすて子のなきやむは、母に添寢のゆめのうち、ちぶさにあくと見る程か。
○世にすみわびてうき時は、おやさへ子をもすつるなり。

○籠にすてられしみどり子の、乳ぶさたづねてなくこゑに、大路のちりもさ
めるなり。
○こゝろつよくもすてゝゆく、母は鬼とも知らずして、さたひなく子のこゑ
かなし。
○世にしられじと、朝ぎりの、たちわかれけむ名殘さへ、つゆけき野路のなで
しこや。
○野邊のかれ生に月さへて、風ものすごき秋の夜に、なく虫のねのそれなら
で、あるかなきかにわなゝきて、乳よぶちごの聲すなり。
○世に寶ともゝてはやす、子をすつるまでなりにしよ、神も佛もなきよぶと、
思ひわびての末ならむ。

## 夫婦 情之部參照

○わぎも子○わがせのきみ○君をおきて○いもとせのみち○たえぬ契○
月花と共に○朝な夕な○へだてなく○めをと○新手まくら○ゆく末とほ
く○かはりなく○かねてが契る○なれ〳〵て○むつまじき○水もらさじ



と○をしどりのつがひはなれぬ○わがつまの○まことの心○こひしきを
○いもせやま○くろかみの○みだれぬ心○萬代までも○枝をかはして○
比翼のとりと○つらなる枝○志ものれくまで○いへなる妹を○志のばれ
て○後の世かけて契る○夫は外をつとめ○婦は內ををさむ○琴のしらべ
とゝのふ○女郎花くねるもよしや○かさねこし○ちぎりはかれじ○もろ
しらが○枝さしかはす松が枝○ひな鶴をやどす○小松姫松生ひしげり○
わがふる袖○いもせの道のはてまでも○心そへつゝ○君につげなむ
○翠帳紅閨うちとけて、千代を契りし妹と背の、いつの間にかは隔つらむ。
○かばかり疲れしわが足の、輕くはこぶは何ならむ、家に歸らばつまと子が、
迎ふるゑみのあればこそ。
○忍ぶ草をも摘みわびぬ、形見とみべき子もなくて。
○年に一たびあふ星も、あればあるよになにになれば、かばかりうときわがな
かぎ、めをとてふ名はありながら。
○君にわかれていつかたに、こひしきかげをたづぬべき。
○今よひばかりの命とも、知らでや妻の故里に、指をりかぞへいつしかと、立

かへる日をまちぬらむ。
○むなしき床にさす月の、さびしきかげをいくよみる。
○八千代をこむる玉椿、かはらぬいろを誓ひつゝ。
○ちぎりあだなるつまごとの、ひきはなれてはいづくにか、わが忍びねをもらさまし。
○君にわかれて今更に、いづくの浦にかあくがれむ、よの仇浪の上越にて。
○むかしを忍ぶ床の上に、みだるゝつゆのしづくこそ、さらに甲斐なきかたみなれ。
○匆々たる盃盤は笑ひの間に供へられ、熒々たる燈火に平生を語りてあかず。
○のこるもつらき水莖の、あとさやかなるすみのいろ、姿もうつる文詞。
○君が手ならでにとかじと、ちかひし髪もれちほうり。
○あはれ我つまいかなれば、さばかりながき年月を、音づれ絶てすぐすらむ。
○君が千とせを松がにに、ながくもかくるつたかつら、さかにむ時もゝろともに、かれなむ時も諸共に。



○たちぬふわざも子の守りも、一人する身はなまじひに、心もしらぬ人の子を、つかふばかりもなかりけり。
○とれる柄杓の懸水も、夫(つま)がひるねの夢をだに、すゞしくせむの心なり。
○したしき中にわかちあり、誠の中になさけあり、心の花のいろかにぞ、ゆたかに吹かむ家の風。
○むつべるいもせは榮のもと、さかゆく家こそ國のもと。
○妹背の中垣へだてなく、むつべる家こそさかにゆけ。
○いつか拂はむかへりきて、此年月につもりつる、我床なつのちりのつゆ。
○今宵ばかりの命とも、しらでや妹がわれをまつ。
○妻なき床のねざめには、秋風ならでも身にはしむ。
○たまきにあらば我妹子(わぎもこ)を、わがれくの手にまかましを。
○夫がかへりをまちわびて、門邊に立ちてつく〳〵と。
○わかれし星も逢ひぬめり、などたぐひなきわが中ぞ。
○みつゝ忍べと妹がうゑし、庭のなでしこさきにけり。
○夜わたる月にあらませば、家なる妹にあはましを。

○うつろひやすき花衣、又こといろにひかれつゝ、つまな重ねそ世のをのこ。
○わするゝ時なくこひしきは、君が雄々しきすがたなり、わするゝまなくこひしきは、君がやさしき心なり。

## 兄弟
## 姉妹

○はらから○枝をつらぬる○ひとつらの○へだてぬ中○まちかき○なつかし○ゆかりもふかし○共に世にたつ○れなじ枝なる○同じ根ざし○血をわけし○あひおもふ○いつくしみ○なさけをかはす○たすけかはして○ゆかりのいろの○まとゐ○おやのおもかげ○ひとつたね○かしは木のかげ○かれゆく枝も○つらにわかるゝ雁金の○春日野のはらから○世の中のうきたのもり○竹の園生のよゝの風○埋火のあたりのどかにまとゐして○たのむのかり○力ともなりなられもしつゝ○おくれても○むらさきの○かたえかれぬる○たのみすくなく○おやのいさめ○はなれがたきも○あねいもと



○春野の菫つむ少女、色よき花の一本を、姉に與へてほゝゑむ顔に、心のいろも匂ひつゝ。
○兄をいつかとまちわびて、門邊にたてる弟の、心のいろは山の端に、今さしいづる月の影、兄がかへさやてらすらむ。
○兄は都にもの學び、いでゆきしより、みとせ越し、姉は家なる父母の、あしたゆふべのかしづきに。
○國をへだてゝ千里のゆめ、枝をつらねて百年の心。
○兄弟へだてぬ酒もりの、こゝろくみかふこよひこそ、つきぬこの世の興なれや。
○連枝花さく兄弟の樂、橘林實なくして子孫多し。
○冬の夜すがら埋火の、ほとりのどかにまどゐして、かたらひし夜ぞこひしきや。
○はらからかたみにむつまじく、家の爲とてつとむるは、やがても親の心なり。
○はらからの身と我身とは、ともにこれみなおやの身ぞ、されば心もたらち

ねの、おやの心にたがはずよ。
○父なきのちに何事も、わが身にかけてもむつまじく、語りあはむはたれなるが。
○根ざしひとつのみきなれば、おなじき春にさかえなむ。
○世にはらからのなかりせば、心へだてぬ友にすら、いひのべがたき事艸を、いかにしてかはかたらはむ。
○あねはの松の千代かけて、風のたよりはかよはなむ。
○千代をうかべてくみかはさむ、つらなる枝の花の盃。
○片枝かれぬる一つ松、いつまでとてかのこるらむ。
○世にうきことともかたりあひ、たのしきこともいひかはし、へだてぬものはらからの。
○冬の夜すがら埋火の、あたりのどかにまどゐして。
○むつびかはしてもろともに、たのしみくらすはらからの。
○船に立てたる帆柱の、つながる綱の多ければ、あらしも浪もゝのならず。
○つゆにしをるゝ朝かほも、たのむまがきのあればこそ、いろにもいでゝ匂ふなれ。
○根ざしもよわきやどり木は、たのむ梢のくちしより、今はゝかなくかれにけり。
○くるしき時もたのしき時も、かたみにかたりなぐさめて。
○まだ土くろきわくつきに、たがたむけたる撫子ぞ、枝もたわゝなる夕つゆは、親がこぼしし涙川、よりめもむねのせきかねて。
○水にあそべる魚だにも、うのはらからはありときく。
○うらをとびゆく鳥だにも、うのともがらはありときく。
○つるひとすぢに千なりの、ひさごの數はわかれつゝ。

## 師弟 學校之部參照

○れんぼしたてゝし○教の庭に○撫子の花さき匂ふ○めぐみに育つ○めぐみのつゆ○道のしをり○道しるべして○人のゆくべき道ふみわけ○正しき道のしるべ○よきみちふみて○あふげばたふとし○影だにふむな○れやにもまさるめぐみ○しもと高がや刈りうげて○道びく○みづからふみ

て○をしへいざなふ○朝の庭のしらつゆに○教のはやしれくふかく○海
よりふかく○山より高し○教のれやや○をしへ子○教の窓○をしへの道○
教草つむ袖○學びの道をふむ○みちびくみち○忘れぬ恩○いかにむくい
む○あふぐひかり○れやにかりて
○あをうめりしは母君ぞ、あをりだてしは父君ぞ、あを教へしは師の君ぞ。
○教の庭にれりたちて、りのなでしこをあさよひに、れほしたてつゝとりど
りに、花をもさかせ實もむすばせて、國内にあまねく匂はせむ。
○わがとるむちの先をみよ、曲れる道へは導かじ、いさ子らきたれ教のはや
し。
○いざうちむれてきたれ子ら、教の庭の言の葉をかたみにつみて遊ぶべし。
○ふでとるすべはかくぞとて、教へたまひしりのこゑの、今さへみゝにのこ
るなり。
○あふげばたふとしわが師の恩、教の庭にはやいくとせ。
○おやにかはりてはぐゝむは、世にたぐひなき教の君ぞ。
○六尺去りて影をだに、ふまずといへる教草、入りたつ道に先づは摘め。



○教への庭にさくはなの、いろはとりぐ〳〵匂へども、いづれ色香の深からぬ。
○朝な夕なに水やりて、ひらくれうしぼまつ花の、いろ香につけてわづらふ
もうだつる人のまことなり。
○れやにもましていたづくは、學びのみちにおりたてる、教への親のつとめ
なり。
○おほくの子らのおやとして、教への庭に立つ人の、心づかひはいかばかり。
○まがれる枝はたわめて正し、ゆがあるみきはれさへてのばす。
○むかしこひしき學びやに、又なつかしき師の君の、今はたかはらずましま
せば。
○仰げばたかし日の光、俯してはふかしわたつみの、底ひもしらぬ師のめぐ
み。
○學びの園の千代の春、めぐみあまねき師の君の、たかきずがたをあふぎつ
ゝ。
○みとせのまなびけふ終へて、いづる教への庭のかど、めぐみにあまる師の
きみの、たかきみかげをあふぎつゝ。

# 朋友

○われもふどち○われもふとももどち○友がきの○へだてぬなか○したはしきうき事は共にうれひ○嬉しきふしはかたみに喜び○水と魚とのまじはり○友だち○友ちどり○心の友○心ひとつに○わするなよむつびかはして○うちとけて○心へだてず○君とわれ○共にかたらふ月ゆきはなも○友よびかはす○心かはるな○なつかしみ○ともなひてわれなじ机にふみよみかはし、ひとつ硯にすみすり合ひて、學のまどのあけくれさらず、むつびし友よ今いづこ。

○なにはの事のよしあしも、つゆへだてなき友がきの。

○あしたに落花をふむで伴ひていで、夕に飛鳥に從つて諸共にかへる。

○つぎれのたもとあやの袖、かはらぬちぎりを忍ぶ草、忘れぬ友こううれしけれ。

○學びの窓の明暮に、むつびし友よ今はいづこ、雨ふる夕風ふくあした、おもひいでざる時もなし。



○花の宴月のむしろ、むつびかはして年もへぬ、君がためにはうきも猶樂しかるべくうれしからむ。

○かり田にたてるいなぐきの、いなとはにしもいはしみづ、結びし契ふかければ、わが心をもくみわけて。

○はじめて君と手をとれば、袖の梅が香々もたかし、行末ながき春こめて、ふたゝび君と手をとれば、若葉の梢風きよし。

○うれしきものは友なりけり、たのしき時もうきときも、共にたのしみともになき、なぐさむも友、はげますも友。

○故さと遠き旅のうら、秋風ふきて月さむし、友てふものゝなかりせば、いかにかなしきあきならむ。

○きのふはかなた今日はわれ、と…はれつ問ひし友垣も、鄙とみやこに行きわかれ、折々かはす玉づさを、今はせめての心やり。

○あしき友とし交るは、石もてふちにのぞむなり。

○かたきは多くつくるとも、まことの友をひとりえよ。

○求めずとても友はあり、徳は孤ならず隣あり。

○形によりて交る友は、貧しき時になりぬれば、暁の星かとはかりに、消えてあとなくなりぬめり。

○心によりて交はる友は、わびしき時はこそさらに、時雨の空の日の光、ぬる〻袂をかわかせり。

○規諫は友に玉を贈り、甘言は人に病を與ふ。

○鳥は古巣に花は根に、春もいつしかくれぬめり、契りし人よ今いづこ、れとづれたにて三月越。

○ふでに誠のあらはれて、ゆかしくにほふすみのいろ。

○うれしきけふの書を得て、心のれくもしられけり、疎くなりぬと恨みしを。

○花さきぬべく生ひ立てる、友のかたみの撫子に、ぬれこそまされ袖のつゆ。

○あたら此よの月花や、あはれをしらむ人もがな、袂つらねてみるべきを。

○いろをも香をも知る人に、折られて見ばやこのさくら。

○このて柏のふたれもて、うらうへかへぬ人もがな。

○學びのまどにあつめたる、雪をばとはで月花を、めづる友のみいと多し。

○かざれる心やあらはれも、なれてぞ人はこづかしき。



○互にいさめいさめられ、かつはなぐさめなぐさめられて。

○友にとはれしうれしさは、わかれてのちのいやまさる。

○朝な夕なにあへどなほ、ゆめぢにさへもみまほしき。

○もろともに見ぬもみぢばは、心のやみのにしきなり。

○わかれし友よこのゆふべ、この月影をいかに見る。

○遙にれもひやる心、雲のあなたにゆくとしも、れもはれざるをいかなれば、君がゆめぢに入りにけむ。

○莫逆の友とむすびては、金蘭の香天にたかし。

○うれしきことも又うきことも、共によろこびかたみになげき。

○山川萬里をへだつとも、互にかよふ心のまこと、信義のみちこそあやしけれ。

○よしやれもひはかはるとも、なさけはわれもしりぬなり、汝が眞心をきかむとき、注かざらめやわが涙。

○かなしかるべき秋の月、君としみればいと樂し。

○影れもしろき春の月、君いまさずは何かせむ。

○久しく君が訪ひこねば、庭の徑は草ふかし。
○手をたづさへて諸共に、君と見ぬまは紅葉ばも、心のやみの錦なり。
○なにはにつけて君こふる、涙のふちに沈みつゝ、身をつくしとぞなりぬらむ。
○君をおきてはたれをかも、しる人にせむ高砂の、松もむかしの友ならず。
○月雲花のをり〳〵は、とぶらひ來ませきもこゝろは、學びの道にいたづかめ。
○事なき時はかたみにつくさむ。
○うれしきことは共によろこび、かなしきふしはかたみになげき、心を合せ力をともにし。
○月をしみれば何となく、君ぞこひしき君も亦、われなじ心にあらずとも、こよひの影に我をばおもはむ。
○ひとりながむるこのよはの、月と花とをわなじくは、君とかたみに見ましかば。
○まことにまさる味方なし、まことにかつべき敵はなし。
○神の心も人の身も、まことにこうはうじくなれ。



○しもかとまがふ月のいろ、仰ぎてみればふるさとの、友の俤忍ばれて。
○契りし言葉の花の色は、先づうつろひぬ花さかば、必ず問はんと言ひし友。

## 親族

○うからやから○ゆかりのいろ○たのむのかり○力艸○すがるかつら○同じながれ○根ざし同じき○むさしのゝゆかりの色○一もと○むつまし○かたりあふ○つながるにほにし○むすぼるゝいと○まごゝろをつくして○朝がほのすがる籬○艸のゆかり○したたしき中らひ○枝ともたのむ○紫の色にいでゝはいはねども、艸のゆかりはわすれずよ。
○艸のゆかりのかずならずとも、言葉のつゆだにかけよかし。
○したたしきうからやからこう、家をたもたむ柱なれ。
○つらなる枝におのづから、根ざしもかたくなりにけり。
○つゆよりもろき身なれども、うからやからを力草、すがりてむすべあかる玉。

# 愛國

國體之部參照

○國のためとて○わするゝな○かたみにちかひはげまして○立てよ人々
○國につくさむ○なぞかはたゆむ○立てよ日東の男兒○行けよ世界のは
て迄も○國をおもはぬ人やある○つくせよつくせ○朝日のみはた○あや
にかしこき○死はかろし○義はおもし○まことのみちにいそしみて○萬
代までも○はらわたを斷つ慷慨悲憤の聲○たぐひなき國○ひいでたる國
○よき國がら○たぐ國のため○たづの一聲○龍のふるまひ○たふれてや
まむ○心ゆるすな○心をごるな○鬼となりても○死して護國の鬼となら
む○神やしろしめす○光をかゞやかせ○まがらぬふしはくれ竹の
○むくろも魂も何かせむ、すべてを君にさゞげつゝ、皇國のためにつくして
む。

○ゆきも螢もたが爲に、あつむるものぞ武士の、太刀をまなぶもふみよむも、
つくす心は國のため。

○死にかはりまたいきかはり、鬼となり且臣となり、國を護らん萬代に。



○人はいかにもいはゞいへ、國につくせる眞心は、たゞ神こそは知りまさめ。
○よのためかけしぬれ衣、恥もしのぶのすりごろも、みだれて物をおもひつ
つ、いくよ明石の浪まくら。
○かゝげ盡くして燈火の、影は消ぬれど消えせぬは、國をおもひの烟なり。
○にくしうらめし口をしと、涙にむせぶも國のため。
○淺香のぬまの花かつみ、かつみし人ともろともに、うれふることも國のた
め。
○千引の岩も何ならず、國家につくす義ぞおもき。
○國家のために守る義は、金鐵よりも猶かたく、國家のためにすつる身は、毛
髪よりもかつかろし。
○我身も家も何ならず、國家をまもる義はおもし。
○開國以來三千年、君と臣とのなからひは、おや子にひとしき國がらの、めで
たきみくにたぐひなき國。
○濱の眞砂はよみつくすとも、いかでつくべき國のため、おもふ心のかずか
ずは。

○國のためとてますらをが、つくすまことはかぐはしき、さくらのはなも及ばしな。

○たふれてのちにやみぬべし、なぞかはたゆむ人心。

○世界に國は多けれど、やまと島根のうごきなき、三千年の國柱、ふとしきたて、萬國の、上にいでたる國柄は、いづこにたぐひあるべきぞ。

○つくせ人々心をあはせ、世界の進歩に後れずすゝめ、つとめてやまぬ心こそ、國を愛するまことなれ。

## 慨嘆 烈士之部參照

○なみだにむせぶ○なげゝとて○千行の血の涙○月みても○結ぼるゝ心をわぶる○むつかしの世や○心ゆくまで○いたづらに○わが世ふけゆく○世○はかなしや○世にふれば○ゆく末は○なにれもひてか○世のためと○歎くべきをば歎かずに○歎くに足らざる事を歎く○眼に國なし○心に家あり○心つくして○袖のみぬるゝ○あはれとだれもふ○かゝるうき世○



四千萬人みな醉へり○誰か眠をよびさます○春の夜の夢たけなはなり○なげかぬ時のまもなし○心のはてなし○世にうづもれて○心をよする○友もなげく○れなじき友の○なぐさめて○慨嘆の聲悲憤の色○なきつくさねば○我が日本の御國をいかに○○國には國の姿あり○いかでか彼が顰に倣はむ○世に聞にざる名○枯はつる艸○くちぬる木○思ふにも叶はぬ○たゞ西洋の名に醉ひて、よしあし問はずひたすらに顰に倣ふうれたきや。

○かなしき秋の夕くれに、なみだなうへそ峯の月。

○世をかこちてもかひぞなき、きゝ知る友もあらざれば。

○うはのうらふく風にとぶ、ちりよりかろき人ごゝろ。

○今よりのちの月日をば、空しくせじとちかひつゝ、いひつゝやがて徒らに、くらすや何の心ぞも。

○安達の眞弓ひきはへて、とるとはすれど鏑矢の、よに聞にざる名を慨く。

○手もふれざりし梓弓、今はれきふし身になれて。

○すてゝかひあるものならば、み國のために君の爲、何をしからむわが命、すめら皇國の武夫は、正義に死ぬこそほまれなれ。

○かたはら去らず朝な夕な、わがとりもてる梓弓、もとの都にかへさずて、たゞに死ぬべきこの身かは。

○春宮の中花いとうるはしく、秋苑の裡月また凄し。

○秋は半に身は老に、たかぶく月の影みつゝ、ふけてゆくよをかこつかな。

○つもればこれもとなげきけむ、月にむかへば月かすみ、花にむかへば花はたゞ頭のゆきとふりにふる。

○花も紅葉も月ゆきも、心の外になが めつゝ、はかなくすぐす月日かな。

○世にうもれ木の人しれず、朽ちはてぬべき名ぞをしき。

○れく山の落葉が下のうもれ水、うもれはてむぞくやしきや。

○松風さむき秋の旅、草をかりねのとこことはに、住みかさだめぬ身のうさを、つゆ分衣うらみつゝ、世をかこてどもかひぞなき。

○なれてふす猪の床の上、なみだかたしく狹莚に、れもひかさぬるつまなれや、夜さむの衣うつたへに。



○風になびけるあをやぎの、糸にたまめくしらつゆの、しらずいく世の春をへて、わが身の秋とちりぬらむ。

○つきぬなげきの涙より、いろもあせたる唐衣、かさねノ〳〵もはかなしや。

○れほうちやまの山守は、木がくれてのみ見る月も、廣野の末にながめては、親しく袖のものとして。

○ねられぬまゝに見る月を、物れもひなき窓の戸に、すごしくたれかながむらむ。

○われにのみうき影なるか、こよひの月を我ならぬ、人にも見せてとひてまし。

○花さく折もしら樫の、身をれくやまのかひもなく、埋もれはてゝいつの世か、のどけき春にあひぬべき。

○三十餘年のとしつきも、れもへばあだになれりけり、腰のつるぎもいかばかり、世をかひなしとおもふらむ。

○谷よりいづるうぐひすに、いざとひてまし深山にも、世を春になす人はなきか。

○王侯將相いかでか種ある、艸鞋とりし人天下をつかめり。
○はらへ君父の仇、何かはあらむ數萬の敵、神は怒り人は惡む、いざゆけいざ討て。
○ありしむかしをゆめにみて、うつゝにかへるまくらべに、かはりはてたる世をかこつ。
○なげ木のもりのつゆちりて、袂に月もやどる也、れもひのけむりうちけむり、身を浮雲ゞなびくなる。
○いつまで草のいつまでか、ながらふならむ野に山に、れきどころなきつゆの身の、なに中々にきゐもせで。
○山田を守るうぽつの身、秋はてぬればしづの男も、かへりみぬこりかなしけれ。
○秋風松に入りて涙袖にみだれ、青苔いづみを封して故人少からず。
○一將功成りて萬骨枯る、兎を追て得し犬は、つひに兎の後の肉。
○天地はさばかりひろけれど、無道をいるゝの餘地はなし。
○氷の如く潔く、みゆきの如く清くとも、人のうしりはのがれねず。



○誰かいふらむ人の世に、こがねにまさるものなしと、誰かいふらむ人の世に、名利にこゆるものなしと。
○われはなにしに此世にいでし、もし封侯を得ざらむには、死して閻魔の王となるらむ。
○いつかさやけき影はみむ、袂にやどる秋の月、涙のはれぬ世にいでゝ。
○榮利にほこるにせ者の、時を得顏も心うき、末世にあひしさちなさよ。
○世をれもふ心、さみだれの雨にもまさる涙かな。
○涙のかぎりつくしても、心れなじき人なくば、たゞに女々しきふるまひと、世にうしられてやをはるべき。

## 情 悲哀、人倫之部參照

○れもひのけぶり○うちいでかねて○なさけは人のまことなり○つゝむにあまる○れもひこがる○こぼるゝ涙○うつろふ色○あさき心○ふかき契○ちぎりにくだくる○もらしかね○なさけにあへぬ○むかしはものを○わかれかねても○かた糸の結ぼゝれ○あひがたみ○命をかけて契る○時

のまも忘れず○いとせめて○まことをあかす○みしやゆめ○うれしさの
○袖にあまる○夏野の草のかりそめにも○れもひやる心○ゆかし○ゆめ
のまもわすれがたし○つゆのなさけ○心のそこに○うちあかし○かたみ
にれもふ○心ひとつに○月につけ又花につけ○月花のをり〳〵ごとに○
袂つらねしそのかみ○袖つれし○なつかしみ○ちぎりし末の○そでの月
○こゝろから○人やりならぬれもひ○もろ共にあひみし月○月は昔の月
ながら○月やあらぬとながめても○きよきなさけ○れもひのいとの○な
みだ川○かたりつくさぬ○たのまるゝ○昔こひしき○昨日のゆめ○見し
よの春○たがためぬらす袖ならむ○思ひあまり○袖のいろの○ねたくや
人の○いかにせむ○仇なるいろ
○ねてもさめても立ても居ても、むねにこがるゝれもひの烟。
○月につけまた花につけ、たゞひもしらずすべもなく、戀しきものは古里の、
たらちね思ふ心なり。
○れもはず落す一雫、いくそのれもひかこもるらも。
○こひしかれしのれもひねに、ゆめも夜風に破られて、枕に殘るれもかげや。



○梭をとゞめて悵然と、夫の上れもふ夕まぐれ。
○三五夜中の月のいろ、人のれもかげ忍ばれて。
○ほゝゑみにける俤の、がやて身にうふ花の香や。
○れもひわびつゝ礒の邊の、いはほの上にたゞすめば。
○霜より霜に朽ちはてゝ、世々にふりにし山藍の、袖の涙のかわくまもなし。
○維摩の室に昆耶の城、れもひはこゝにこもるらも。
○つゝむとすれどれのづから、袂にあまる思ひの色、人もいかにと問ふばかり。
○包むとすれどあだし野の、草の袖よりもるゝつゆ。
○ねられぬまゝに夜もすがら、身の行末をれもひつゝ。
○いはぬはいふにいやまさる、思はこゝにこもりけり。
○忍ぶ車の下すだれ、心にかゝる夜半の空、月の光も幽にて、行方やいづら秋の雲。
○朝風さむき窓の戸を、細めにあけて此雪に、いかでといひしれもかげの。
○思ひかねては又更に、肌にそへても歎く哉、かたみに殘る黒髪を。

○心の波のよるべなく、ふかきもひにしづみては。
○下ゆく水の下にのみ、かくれて戀ふる心には、うちいでがたき心かな。
○戀しき君が水莖の、あとはみるだに袖ぬれて。
○よに耻かしき仇し名の龍田の山の紅葉(もみぢば)の、ふかき色香をうれとだに、見む人もなきうき身かな。
○よしや境はへだつとも、今宵の月のこの光、君もあはれとながむらむ。
○君とみるめもあらいうに、碎けてかへるあだ波。
○知らねばこうあれかくばかり、知りての後をいかにせむ。
○今はたゞなんながらへば、忍ぶる心よわりゆく、我玉の緒の苦しさに。
○胸のもひを松風に、ずまずとすれど、ともすれば、心の雲の村時雨、袖にかゝるぞあはれなる。
○君と相見て諸共に、かたりし後はともすれば、あひみまほしくもひつゝ、苦しきもひぞいやまさる。
○鄙の住家のうきふしを、心のかぎりつくしきて、雲井はるかにこふる身は。
○柳さくらの春の日を、たれこめてのみくちしつゝ。



○れもひたゞにし古の、人に再びあふ坂の、關の清水をむすびつゝ、契るか清き眞心。
○逢ふは別の種ぞとは、且つしりながらたのめてし、昔も今は恨めしな。
○今日の逢瀬もれなじ身の、昔なりせばいかばかり、よにうれしくはれぼえましし。
○むぐらの下にいにしへを、忍ぶ草こそ生ひしげれ。
○契りしこともかはりゆく、世にこそうらみのかぎりなれ。
○岩垣ぬまの浮ぬなは、ふかき戀路にみだれつゝ。
○君がれもわの昔しわが、契りし人に似たるより、いとなつかしくれもはれて。
○昔ちぎりし我妹子が、かきねにしげる忍ふ草。
○ねられぬ床に長き夜の、曉まちし夜やいくよ。
○なさけにおぼれ愛に酔ひ、正しき潮路にこぎゆけど、よるべも浪にかへさ れて。
○萩の葉末にむくつゆの、もろきは人の涙かな。

○戀しき人の筆の跡、見わかぬまでに汚すなる、わが涙こそうれしかなれ。
○結びあふせをねたしとか、ちらす嵐の花吹雪。
○ほのほにむねをこがすなる、れもひをいかで消ちてまし。
○しもと結ふ葛城山にふるゆきの、間なく時なく時じくに、君をのみこそうれもひをれ。
○わを見て泣きしをさな子も、いつとはなしに親しみて。
○情の水棹愛の舟、れもひをつなぐ一條の綱手は長くたゆせじな。
○空頼めにもまちし夜ぞ、今は中々こひしきや。
○あやしきとりのあとゝめて、たどるもやさしはづかしな。
○西施雨に泣く春恨の涙、昭君朝に笑ふ百花のかをり。
○甲斐なきことはれもはじと、れもふもやがてれもふなり。
○鏡にうつる姿さへ、かはりはてたるちぎりかな。
○身をうきふねの浪をあらみ、うらかなしげに聲たてゝ、こがれ行く社あはれなれ。
○月にれもひのますかゞみ、うつるかげさへはづかしく。



○はるかに空をみてもれもへ、夕の雲のたなびかば、これやなげきのけぶりぞと。
○夕の時雨朝のつゆ、あらしふく日も風の日も、忘るゝひまはなかりけり。
○忘れねばこう思ひもいでね、よし絶えまなく思ひいづとも、忘れてしがな時の間も。
○かたへ離れぬれもかげの、なき世なりせばあひみての、後の心も安からん。
○袖は涙にくちぬとも、胸のれもひの消ぬまは。
○月に向へば月につけ、花に向へば花につけ、君のみ思ひいだされて。
○せめて命をかけてたのむ、夢のあふせの浮橋も、とだにがちなる此夜頃。
○人にしられぬ涙をば、袖につゝみてたどひとり、つれ〴〵にふるながめかな。
○たぐなつかしき友そのみ、れもひしき春は昔にて。
○情の雨に袖ひぢて、むねの水かさぞまさるなる。
○いかなる故とも知らなくに、涙あふれてとゞまらず、何故なりともれぼにぬに、心くるひて堪へがたし。

○月よりれろす鐘の聲、ふけゆく夜をばれどころかで、きよき光にむかひても、
かたぶく影のみまたれつゝ。
○かの佐用姫の松浦潟、又橋ひめの宇治の河、人を忍ぶの袖のつゆ、いづれか
淺き契なる。
○うれしきふしもうきふしも、いざ白糸のみだれつゝ、うまるもあやしわが
心。
○うはのうらなる人心、袖のつゆとはなりにけり。
○ひとりねざめのまどのうち、むかしこひしくふるしぐれ。
○れやにむかひていひがたき、心はかつてなかりしを。
○れもひなやめるくるしさは、くるしきうちにたのしくて。
○千夜を一夜にかさぬとも、名殘のはてはつきざらむ。
○すみれつみける友がきと、おもひし昔に似ざりけり。
○ちりのみつもるよるの床、いかに枕のれもふらむ。
○神のいさめぬ道芝の、露をいつより我が袖に、かけてもれもひしらざりき、
○花なくば春もいかでか春ならむ、君なくば我もいかでか我ならむ。



○人の心の淺瀬川、わたしもりめたるまろきばし、ふみかへされてぬれまさる、
袖のなみだのつゆ時雨。
○心なき草木も秋はあはれる物を、まして情ある人にして、誰れかあはれを思は
ざる。
○あひ見る事はかた糸を、かなたこなたによるの夢、そをだにとけて結ばゞ
や。
○たれとも志らず見し人の、こゝろにかゝる玉すだれ。
○春のものとてながめつゝ、夕ぐれのそらに立いでゝ、入相のかねもつくづ
くと。
○柳の糸の春の風、肌ごゝちよき朧夜に、うかれ〳〵て小柴垣、窓のと近くた
ゝずみて、君が小琴をきゝし夜を、思ひみだるゝはじめにて。
○れもふ人にもしられじと、れもふはたれをれもふらむ。
○れもひすてゝもともすれば、目にこそうかべよそながら、みしれもかげの
さながらに。
○柿の森のつゆしぐれ、志ぼりかねたるたもとかな。

○月にちぎりし言の葉も、かれてさびしき秋の風。
○人目つゝみのたかければ、かはとみつゝもりれとだに、目にも示さずことばにには、ましていはねの山つゞし、こがるゝむねぞくるしきや。
○うれしとれもへどれとろへし、すがたはさすが羽束師の、杜の下草下にのみ、つゝむにあまる袖のつゆ。
○れもひもうけぬうれしさに、やがて心もまどひつゝ、やつれし姿はづかしの、洩りてこぼるゝなみだかな。
○端山しげ山かき分けて、奥山ふかく思ひ入る、心もしらで行く月の、うはのそらなるけしきかな。
○直山の雲はたちまちに、陽臺のもとに消にやすく、湘江の雨はさばく〳〵も、楚畔の竹をうむとかや。
○影さへみゆる山の井の、淺くはたれかれもひ草、かりそめにやはたのむべき。
○紅葉いろこきまぜのふけふ、君まつむしのねにたてゝ、ひとりなきつゝくちすなり。



○みれば目もくれ心もみだれ、なほもれもひのまさるかな。
○阿漕が浦の引くあみの、度かさなればいつしかも、ほにあらはるゝ糸すゝき。
○人のなさけの夏衣、うすきちぎりぞかなしきや。
○おなじ心にあらずとも、今宵の月と詠めけん、昔の秋も志のばれて、君をいかにとおもひやる。
○おもひに沈むわが袖の、涙たづねてやどる月、いつさやかなる影は見む。
○なにつながるゝ心ぞも、またにとばかりたのめつる、日はいつしかも過ぎつるを。
○かとりの衣うつたへに、今はゆめのみたのみつゝ、枕のちりも恨みにず。
○疎きはいとゞ遠くなり、まだきに秋の風たちて、ねになく虫もかれ〳〵に。
○嫡鴉のよるの聲、ねぬよの友とれとづれて、よすがらともす螢火の、きにかへりつゝものれもふ、なれも胸をやこがすらむ。
○なびくや小野の夕けむり、行方もしらずさまよひて、はては消えゆくれもひかな。

○月ごろやどせ袖の上、さりとて君がれもかげの、うつろふとにはあらねども。

○雲のはたてをながめつゝ、それとはなしに物れもふ、心をたれにかたらまし。

○ちぎりしことはゆめながら、みしよに似たるありあけの、月にれもなき我姿。

○岩がねまくら草の床、なにかいとはも君とし住まば。

○まつよながらの月影を、かへる袖にやゝどすらむ。

○のどけき春はめぐりきて、のきのつらゝはとけぬれど、猶とけがたき我がれもひ、袖の氷もさながらに。

○とほく故郷をながむれば、雲漠々として空長し。

○人の心の淺瀬川、昨日のふちもけふの瀬と、忽ちかはるうき波に、たゞよふ身こそかなしけれ。

○朝な夕なにきかよひて、仕へしものもいつしかと、過ゆきぶりにあひみてもかほそむけつゝすぎぬめり。



○唉き匂ひにし花の袖、ひきつる人もけふは又、つきしろひてのしりうごと。

○さむくつめたきよの中の、人のこゝろにくらぶれば、冬の氷も何ならず。

○かへるの山は名のみして、こえにし人のおとづれも、たえてつもれるしらゆきに、きえんばかりのわが心。

○かすみのきよりほの〳〵と、みつるたかねのさくらばな、いかにしてかは折りてきし。

○天の戸わたるはつかりの、はつかにこゑをきゝしより、うはのそらなるこゝろかな。

○こなたかなたにかた糸を、よるのゆめぢにあひみるを、なぐさめにしてたえぬべき、うの玉の緒をつなぐかな。

○夕さりくれば久方の、雲のはたてをながめつゝ、心もそらにあこがれし。

○加茂のやしろのゆふだすき、かけてぞしぬふ君がうへ。

○芝浦のなみたゝぬ日も、君をれもはぬときぞなき。

○人やりならぬみちなれば、うしとていかでかへるべき。

○なみだはやがてあひれもふ、いもせの山の村時雨、秋のもみぢとうつろひ

て、れのがちり〳〵わかれゆく。
○せまるれもひにせきかへる、なみだのつゆの玉だすき、かけてもいかでれもひきや。
○いつまで草のいつのよに、れもひをほさむ衣手の、杜の下つゆれきもせず、ねもせでよるをあかしつゝ。
○そらに流れて妹と背の、中ゆく川ときゝにける、吉野の山は何處ぞも。
○忍ぶもぢずりたれゆゑに、みだれそめにし我からと、藻にすむ蟲のねになきて。
○人の心の仇櫻、うつろひやすき花衣、かさねく〳〵ぞうらめしき。
○巫峽の水は早くして、舟をくつがへすと聞けども、君が心にくらぶればなほ安かるべし。
○ゆめにもむすびし巫山の雲は、さむるまくらの袖のあめ。
○ありのすさびのにくさゝへ、ありての後はこひしきを。
○あかでわかれしれもかげは、何時の世にかは忘るべき。
○賤のをだまきくりかへし、昔の春のしのばれて。



○橋塲の里の薄がはら、れもひくだくる心かな。
○とほつあふみのあはゝ山、ふる里人にあはずして、濱名のはしのたえやせむ。
○うすき袂につゝめども、かくれぬものは夕殿に、とぶや螢のわがれもひ。
○清き昔の君にこそ、わが命をも捧げたれ、汚れし今の君になど、二つなき身を許すべき。
○事なき時は香だに焼かず、事ある時は御佛の足を戴く人の情。
○取らは消ぬべしよしさらば、つれなき人にそれながら、見せばや袖にあまるつゆ。
○月の光をまつほどに、わが世はいたくふけゆきて、人の心もうらぶれぬ。
○あなつれなしとうらむるも、こふる心の外ならで、れなじ涙ぞせきがたき。
○たぐわれひとりみなれざほ、しづくも袖の涙河、あふせもしらぬ仇なみぞ、立居につけてぬれまさる。
○ゆめにも人を見るべきを、まどうつ雨に目ざめつゝ。
○あはれはかけよ山賤の、垣ほにさける撫子の、つゆもかわかぬ袖の上。

○今しもたてる旅衣、しばしと袖をとゞむれば、流石岩木にあらぬ身の、心よわくも立かへる。

○又世にふたりたぐひある、君ならませばいかでかく、よにたぐひなき物思はんや。

○言の葉しげき戀草の、葉末のつゆのひる間だに、せめて忘るゝ程もがな。

○年に一たびあふ星の、長き契りにあにてまし。

○人のなさけの糸の緒に、つながれはてしいのちかな。

## 憐愛

○あはれみて○なさけのつゆ○なさけの風○いたはりて○春ふく風○やぶしわかぬ日の光○春の日のひかりあまねく○草木もゝゆる○天津日の光○めぐみあまねき○めぐみの露○花の梢も○わか葉にそゝぐ雨○心のまことをつくす○なさけのいろ○野邊のわか草○神もうけなむ○あはれはかけよ○枯れし千草も花さく○朽ちにし枝のめもはる○むきあまるめぐみの露○よわきをすくふ○ふかきなさけ○あつきめぐみ○れほしたて



○野にも山にもむきあまる、廣きめぐみの白露に、かれし千草も花さけり。

○東風は普く枯木に吹きて、百千の枝に花ぞさく。

○めぐみにそだつわか草の、いろこうまことのひかりなれ。

○霜かれはてし枯生の床も、春のめぐみの風吹けば、みどり色こく生ひしげる。

○かきほにさけるなでしこの、花もなさけのつゆにそびて、うれしきいろにさきいでぬ。

○うゑにさけびさむさになく、まづしき人をすくふこゝろ、人のまことの情なれ。

○なさけのひかり、めぐみのつゆ、ひかりにあたる民草も、つゆにうるほふなるなり。

でし子も、みなみづ〳〵としげるなり。

○かれ木の杜に春風の、めぐみあまねくふき入れば、やがて梢に花ぞさく。

○あはれをしらぬ心には、あだなす鬼もやどるなり。

○なさけは人のまことなり、めぐみあはれむなさけこそ、まことの中のまこ

となれ。

## 快樂 處世、勉強之部參照

○たのしさ○くるしきあとの○たのしみくらす○うきことはうれしき種
○うれしくも○きのふのつらさ○けふのたのしさ○春は花にあこがれ○
秋は月にうかれて○友どちとうちつれて○心のどかに○心しづけく○あ
くまでも○うつゝともなく○やすきねむり○あたゝかきゆめ○たのしき
まどゐ○れもふとち○むつびかはして○いつまでも○かぎりもしらず○
野山にまじりて○醉心地よく○のびやかに○心あひたる友○千代までも
○わが世の限り○うらやすく○苦しきことはたのしみのもと○春のよの
ゆめ○樂み去つて悲みきたる
○魚をみれば波をどり、蝶をれへば花笑ふ、野べに河べにたのしきながめや、
心ゆくわがこの世や。
○霞に沈む月みれば、うき世はなれて心ものどけく、雲間にかゝる影みれば、
この世の濁も忘られぬ。



○くるしみありてのちにこそ、まことの樂しきことはあれ。
○うたがふ時の苦みこそ、やがてもさとる樂みなれ。
○萬舟の汗もて千曳の石の重荷はからくもれろしけり。
○人生五十世の中を何かなげかん山櫻、花みてくらす心にて、我世の限りれ
くりてもむ。
○煙波萬里の浮雲に、縦横飛行のはねうちかはし、大海のそらうちわたり、星
の林に遊はゞいかに。
○うきをうき世の常とし思へば、樂しきことこう樂しけれ。
○風にまかせて花をめで、雪をゆるして月みれば、心はとはにいとたのし。
○樂みを知りて樂しめば、苦みのうちに樂みあり、樂みを知らで樂めば、樂み
を得ても樂しからず。
○春のあしたは花に醉ひ、秋の夕は月にまふ。
○たのしきことはかなしみを、やがてもまねくもとぬなり。
○一日のわざをなしはてゝ、心のどかにいこふこう、こよなきこの世の快樂
なれ。

# 怨恨

悲哀之部參照

○うらめしな○いかに晴さむ○つもるうらみ○なかきうらみ○くちをしくも○骨に徹る○生きかはり死にかはり○はるゝ時なく○れもひむすぼれ○八千だひうらみても○なみだにくれて○あさましの人の心や○つらきは人の○かくごとは○わすれはつべき○心ゆくまで○れそくも人を○風にくづ葉のうらみても○衣の袖のうらみつゝ○いつかむくいん○からきめに○斷腸のれもひ○悲憤の聲○嗔恚の炎○むねはうらみにむすぼれて○立ちてもねても○心にかゝる雲の影○きえやらぬ○なぐさめがたき○くるしきいきを忍びつゝ○めぐりあひても○つれなくすぐる○かごとばかり○ゆく末は○まことなき世に○れもひやれども○幽愁のれもひやまず○あなうとのみも○かゝる憂世○すがたもかはり○れさへがたく○人を殺さば殺さるゝ、むくいをかくとも○れもはずや。○昔忍びて松虫の、なきあかしたる秋の夜の、ながき恨をふりいでゝ、かきくどきつゝかこてども、つゆあはれとも、きく人の、なきうき身こうあはれなれ。



○木の間もりくるかたわれの、月のひかりのほのかにも、誰か我身をれもふべき。

○天をうらみず人をもとがめず、れのれ自らかへりみる。

○人に知られぬれく山の、花はうらめるいろもなし。

○神はいかりて人はうらめり、國のかたき君の仇。

○なさけをうらみにひきかへて、さこうつれなくれもふらめ。

○落花は枝にかへるとも、破鏡は再びてらすとも、この妄執の嗔恚の焔、きはてむ世はよもあらじ。

○頼みしこともゆめなりき、ちぎりしこともゆめなりき。

○君主の寵と諸共に、身にあつまるは三千の恨。

○身には錦をまとへども、世にれふけなきぬれぎぬを、かつきし事もいくたびぞ。

○うらみてもなほうらめしな、身を秋風のふきかへす、野邊のくずの葉うれならで。

○十年の遺恨今ぞはらさむ、君父の仇共に天をいたゞかず。

○修羅の巷による浪の、淺からざりし業因。
○つゆも時雨もまちあへず、忽ちいろのかはりゆく、大方人の言の葉は、秋にしられぬ紅葉なり。
○むねのほのほのもにかへり、くやしなみだにかきくれて、れもてもあげずなきふしぬ。
○うらみはふかしみさび江の、底のたまものみだれても、れもひになやむわが身かな。

## 嘲笑

○あざわらふ○あさましと○ゆびさして○にくみそしりて○のゝしりあざむ○たはれたる○口をきはめて○聲をはなちて○かくさずつゝまず○ひう〳〵と○袖ひき合ひて○ひやゝかに○から〳〵と○憚らず○れめずれくせず
○肩ゆるがしてほゝゑみつゝ、いとにくさげにあざわらふ。
○いかにかざれる世なりとて花にいろさす人やある。



○かざらざるは英雄の心、かざるはこれ奸臣の情。
○ほめられぬるもうれしからず、うしられぬるも悲しからず、毀譽褒貶の外にこそ、まことの道はありときけ。
○乳の香のうせぬ嘴をもて、利害をとくこうをかしけれ。
○見るめもさらにはゞからず、ゆびさしてこそわらひけれ。
○れのがこゝろのつたなさは、かへりみもせでいたづらに、人をわらふろかなる。
○あざけるこゑもにくさげに、どよめきてこそわらひけれ。
○さすがにはらに据ゑかねて、いかりてたつをさへぎりて、又にくさげにあざければ。
○さゞめきわらひ袖ひきて、あざける人の心こそ、わらふにたへし心なれ。
○口をきはめてあざければ、こなたもひかずあざわらひ。

## 稱譽

○めでたしと○聲々にいふ○心ひとつに○あつぱれと○感嘆のむねをひ

らき○ありあふ人○しばしはなりもやまず○あつばれ無雙のはたらきやと○あはれとばかり○うるはしき名に○かくはしき名に○ほまれは千世も○口々にいふ○心から○うちあけて○たぐひまれなる○世にもすくなき○空前絶後の○何とかいはむ○いふべき詞も○あきるまばかり○しばしは聲も

○誰か其名を白河の、なみ〳〵ならぬほまれかな。

○髀をうちて稱嘆の、聲も調子をふりたてゝ。

○ひや〳〵の聲坐にどよめきて、しばしはなりもやまざりけり。

## 憤怒

○すさまじく○むろしく○いきまきて○血氣にはやる○勢あらく○いかりのまゝる○聲ふりたてゝ○大音聲に○れのれとばかり○悲憤淋漓○坐にもたまらず○吼えくるふ○拳にぎりて○きばかみならし○腸をたつ○朱をそゝぐかほ○目皆(まなじり)こと〳〵くさけ○怒髪さか立ち○破鐘の如き聲○天地も動けと○眼をいからし手を拱ぬき、物をもいはできゝぬたり。

○血ばしる眼にちるなみだ、紅葉にうゝぐむら時雨。

○忽ち顔に朱をそゝぎ、クヮッとせきたち物をもいはず、刀れつとり立ちあがる。

○血ばしる眼は夜叉の如く、怒髪さか立ちハッタとにらみ。

## 恐怖

○おのれをのゝく○ふるひかへりて○身もきにぬべく○肌もさむく○身の毛もよだつ○あなやとばかり○心おくれて○いつはりのある世○れまぢふ○世わたりの道○身をせむる○惡鬼羅刹の○さいなまれて○とられほかみも何ならず、和らかにしていろ香ある、人の言葉ぢれそろしき。

○とちふす野邊にふく風の、めにこそみねれそろしな。

○れもはぬ事を口にいふ、妄舌のつみぢれそろしき。

○みる〳〵かほのいろかはり、みをふるはしてぢれそれける。

## 亂心

○みだれ心○われもひきはめて○わりなくも○ことわり知らぬ○なさけの末○竹の葉の末葉みだれて○何ごともわきまへ知らず○玉ざゝにみだるゝ霰○こゝろさわぐ○眞如の月の影くれて○ふみまよふ○身もかへりみず

○ちるやあられのたま〳〵も、みだれ心のわりなくて、何にれもひをくだくらむ。

○こゝろにさわぐ浮雲に、胸の月影々くれて、うつゝの闇をたどるなり。

○れもはじと、れもふ心もよわりつゝ、こゑもかれ野のきり〴〵す、みだるゝ草の花心。

○いとのみだれのくるしくも、ほつれはてたる心かな。

○心のまことはかげくれて、みだれはてたる常やみに、さまよふ人ぞあはれなる。

○笹の葉しのぎ降るあられ、聲さわがしく亂れつゝ、たばしりくるふあさま



しさ。

○人のうしりも耳にはいらず、仇なることに目はくれて、みだれうめにし人心。

○ゆかりに匂ふ春日野の、わかむらさきのすり衣、しのぶのみだれかぎりなく。

○ひるはちまたを狂ひゆき、よるはゆめ路にまどふ身の、心のみだれわりなしや。

○何それをしも分けていはむ、世はれしなべて名のために、はた利のために狂へる人。

○心はうつゝとなりはては、夜は夜もすがら、日は日もすがら、みだれくるふぞあはれなる。

## 悲哀 情之部參照

○われのみ袖をしぼりつゝ○胸こそいため○まかせぬものは涙なり○なみだあつむる秋の夕○かわくまもなき袖たもと○かぢをたにたる海士小

舟○涙川○よろのあはれ○我身の上○はかなきものは○かなしくて○さもはれまなくふる涙○あるかなきかの身○うきぬしづみぬながれゆく○うきよの海○草葉にすだく虫のね○あまるは袖の涙○心のうちのかなしさ○あだしのゝ露○鳥邊野の烟○身ずつらき○さやけき月をめづるまもなし○うき雲にかくれはて○神も佛もなき世かや○かひもあらしの庭の花○かゝる涙のむら時雨○頼む木かげに雨もりて○なにたのしみにいそしまむ、何おもひでにはげむべき。○世を秋風にうらぶれて、むれゐる田鶴のねにぞなく。○くれゆく秋の村時雨、ふるから小野のさびしくも、人や見るらむうき身のほど。

○世をうきふねの楫をたに、よるべ定めぬゆくへかな。

○芹つみにけむ世の人も、かくや宿世のつらかりし。

○げに心なきあま衣、さらでもぬらす我袖を、雨もなみだも降りにふる、うき身のはてをいかにせむ。

○懐舊萬望一片の月、腸をたつ秋の風。



○花新に開くれば、朝暾つゆにうるほひ、鳥老いてかへれば、暮月きりに咽ぶ。

○さやけき月よ何なれば、心の底はてらさざる。

○たへぬおもひのかなしさに、泣くより外のわざもなし。

○ゑみもてつゝむ涙をば、いつまで袖にかくすらむ。

○世をうみわたるあまの身も、今こそそれもひ志りにけれ。

○蹈みくだかれし花さうび、世はなれのみの浮世かな。

○つながぬ舟の楫をたに、よるべの岸も白浪の。

○なみだひまなきうき身ぞと、志らでしぶきのかゝる袖。

○花わらひ鳥うたふ世に只ひとり、かなしむはりも誰が子なる。

○あれし軒端の月の影、袂のつゆぞもりやすき。

○頼む木の下雨もりて、袖のひるまもなかりけり。

○つながぬ舟となりしより、よるべも岸のなみ枕。

○月日はこゝをてらさずして、涙のあめのみふりしきる。

○目もくれ心も消ねはてゝ、涙はさらにとゞまらず。

○かゝる姿にならかしは、ふるや時雨のあめが下、身をかくすへき便なき、う

き身のはてぞあはれなる。

○よしそれとてもはゝ木々の、あるにもあらぬ身にしあれば、きにはてぬべくれもふかな。

○腸をたつ、慷慨悲憤のこゑ、風は冷かなり、三更月明の時。

○心づくしも深き夜の、木の間にくらきれぼろ月、雲井にかへる雁がねも、心うらにぞ鳴き渡る。

○柳のかみのみだれても、などさはものをれもふらむ、ふるやなみだの春雨に。

○世にわびてすむ我宿の、かきねのすゝきふく風の、こゑをもたてず忍びねに泣くばかりなる身をいかに。

○むせぶれもひの烟より、くもりがちなるむねの月、いつをまちてかなごりなく、きにてさやけき影はみむ。

○春やむかしの袖のつゆ、涙と知るや月の影、なぐさめ顔にやどるらむ。

○夜さむの風の身にしみて、草葉の虫の聲かなし、おもひかへしておもへども、末はかならずなみだなり。



○かけのたれ尾の亂れつゝ、ながき夜すがらねになきて、つらき心のはてもなき、れもひのうちになやむなり。

○うきもつらきもおかすがに、わすれて年をへしものを、又古にかへるなみ、立ち居くるしきふけふ。

○むねのけぶりのほのほにもせび、叫べど聲もいでやらす。

○いろなき風ぞ身にはしむ、物れもふやどの夕まぐれ。

○世にながらへてかひのある、身にはあらねど命あれば、今年の秋の月も見つ。

○ふるさと人はこしかども、花はあらしにちりにけり。

○午夜の猿月にさけんで秋天かなしみ、胡雁一聲行客のゆめをやぶる。

○うきは浮世のならひぞと、れもひすてゝもうきはうし。

## 哀吊 故鄕、故跡之部參照

○れなじ烟ときにかへり○なげゝどかひはなきものを○命のちぎりかひなくて○まれにとひくる○かなしき夜半○君やきくらむ苔の下○花の上

なるつゆよりも○かげろふの○けふきる藤衣○なく〳〵かたる言の葉○我をとぶらふ心地して○ありその波と消にし跡○年はめぐれど○花のごと匂ひし君

○かきながしたる水莖の、跡は涙にかきくれて、胸のわもひざもゆるなる。

○君が手づからうつしうゑて、わほしたて〳〵し菊の花、手向にとなにわもひきや。

○秋をさかりの八千草は、野もせ山もせ匂へども、君に手向けむ言の葉は、つゆより外になかりけり。

○生者必滅會者定離、なに常住のものならむ。

○君が御墓の手向にと、折ればこぼる〳〵はぢもみぢ、もろき涙はつゆしぐれ。

○花のさかりもまちねずて、かれにし草にかゝるつゆ。

○かきすさみたる筆のあと、みるに目もくれ心もまどひ、只偖の忍ばれて。

○學の窓に年をへて、みがきし玉の緒をよわみ、きれてみだれし人はりも、いかなるそらの夕けむり。

○なき人こふる秋風に、ちりてはかなき玉ゆらの、露もなみだもいろぐなき。



○闇路に迷ふうたかたの、かへらぬ水の泡とのみ、消ににし人のわもかげを、ゆめぢにだにも見てしがな。

○悔の八千度百夜草、かれてふたゝび生ひきつる、例も且はありときく、魂かへすたきものも、いかでとさへにわもふかな。

○浪路遙かにゆくふねの、あはれはかなき人の身や、かへらぬなげきをいかにせむ。

○花みんとうゑけん人もなきやどの、櫻よ去年の春さかば、いかにうれしと見たりけむ。

○末葉に結ぶ露をだに、せめてかたみの藤衣、志をるゝ袖をふくあらし。

○玉ゆらのつゆもなみだも、とゞまらで、わもひみだるゝ袖のうへ。

○ねざめがちなる秋の夜の、枕にいかゞ思ひ出る、はかなく消えし春の夜の、ゆめのうつゝのはかなさを。

○空しき柩にふく風を、苔の下にやたにずきく。

○尋ねゆくべきまぼろしの、道得てしがなつてにても、魂のありかを知りぬべく。

○手向くる水のひとつぎを、たれかあはれと汲まざらむ。
○苔のむしろに法の聲、さもすさまじき山陰の、嵐と共にれとづれて。
○人まつむしのわが袖の、つゆをたづねてなくよかな。

## 衰亡 懷舊、夢之部參照

○芙蓉のすがたさまかへて○あはれといふも○つくもがみ○みだれしすがた○昨日の花はちりはてゝ○ありしにかはる○春の夜の夢○霜にやつれし女郎花○花の顏ばせ○一夜の程にうつろひて○盛者必衰のことわりの春の色○むかしのすがた○ゆめときゑて○烟霞あとなく○のこるつゆ○あとゝふ○なげゝとて○てらす月○花のかほばせ○一朝のつゆのあとも○あはれといふも
○花のかほばせ柳の眉、たぐひなかりしれもかげも、いつしか霜にさまかへて、むかしの春はあともなし。
○れもひの床に伏柴の、つゆところせくれく袖に、やどす命の月の影。



○うつるむかしの眞清水に、影はづかしき我身かな。
○むかしにかへすよしもなく、賤の緒環中たにて、千々にみだるゝ心かな。
○翠帳紅閨消にうせて、はにふの小屋の葦すだれ、黃爐のかをりさまかへて、海士の藻鹽火たくけむり。
○春去り秋來て花とび葉はちる、時うつり物かはりて、樂去りかなしみきたる。
○さしも榮にし花紅葉、れもはぬ風にさそはれて、芥にまじるからにしき。
○つながぬ舟のよるべさへ、波のうきねにさすらひて。
○龍頭鷁首のあけ舟に、詩歌管絃の樂も、昔となりて今はたゞ、浮きて漂ふ海士舟の、水郎の假寢のゆめがたり。

## 離別

○わかれがたき○なみだ川○ゆきてかへらぬ○生別死別○なげゝども○雲居のよりに○心をきみに○ひきとめて○白雲のたなびく方○つきぬなみだ○よしわかるとも○君にわかれ○心たゞへて○君をれきて○袖しぼ

る○わかれ路の○かへらん時を○この世のわかれ○なけどもつきぬわが
涙○つゝがなく○よそにても○わすれじと○ちぎりはふかき○かへりみ
がちに○はしけぶね○八重の汐路に跡を殘す○一すぢの烟殘る○汽笛の
聲○はる〳〵と○われもひれきて○まさきくて○われもひいでよ○わかつた
もと○汽車の烟○一すぢの烟殘して○殘る烟ぞなごり○ひれふる○帽子
うちふる○西と東に○ちり〳〵に○死別にまさる○松としきかば○必ず
よ○かりそめの別○復あふまで○まだきあふせを契る○波止場の浪のた
ちかへり○いざさらば○木の葉の風に○行く先を○れもひくらして
○今をかぎりのこのわかれ、なごか涙のなからめや。
○月も雲間にきにうせぬ、このわかれぢをあはれとて、れなじ心になげきて
か。
○秋の夕にあらなくに、なごしもつゆけきわがたもと。
○さらばといへどわかれかね、なほ立ちとまるわかれぢ。
○よにたぐひなきいさをゝたてゝ、かへります日をまつべしと、いふもなみ
だのうるみごゑ。



○けふのわかれのかなしさを、ねにこうたてね松むしの、草のたもとのつゆ
になく。
○共になが雨し秋だにも、なぐさめかねし山里に、ひとりのこりて有明の、月
に泣きつゝあかすかな。
○なれし雲井の月の影旅ねの袖にへだつとも、とわたる雁の聲にだに、風の
たよりはもらさなむ。
○踟手にたぎつ山川も、流れあふ瀬はありてふを。
○幾重の浪はかさぬとも、心へだつな旅衣。
○さらば今宵はふけぬとも、かたりあかさむ君とわれ、明日は別れの身なら
ずや。
○日數はゆきとつもるとも、忘れでかへれかへる山。
○秋のわかれをかなしとや、なれはたかこつ虫のこゑ。
○舟出しばしとよぶ人の、かひもなぎさの松の風。
○ちぎりしことはゆめにゝて、つらき別れぞうつゝなる。
○ゆくへも知らぬ別路に、さきだつものは涙なり。

○昔もへは風寒き、かの易水もよろならず、死別にまさるこのわかれ。
○われ荊軻にはあらねども、壯士一たび今去らば、ひきかへさんや梓弓。
○君のかへりをいつかはと、まつにつれなき初雁も、雲路はるかに影きえて。
○沈む月影ゆくたもと、西と東へ別れつゝ。
○花の蔭の半日の客、月の前の一夜の友、りれだに別れはかなしきを。
○またあふ時を玉の緒の、命にかけて旅衣、涙ながらにわかれゆく。
○人め忍ぶの浦にだに、うこのみるめはあるものを。
○ひなにあまたの年ふとも、みやこの手ぶりなわすれそよ。
○君がたもとにわが袖の、つゆわけれくる旅のうち。
○君が雄々しきこのかどで、なに涙にてわかるべき。
○都にかへるけふの袖、とぞゆがほにもふく朝風。
○伴なふ人もなき旅の、わかれ路さむき秋の風。
○けさの別れのかなしさは、そらにも知るか村しぐれ、雲の袖よりこぼれくる。
○天涯茫々みちなほ遠く、三千里外に月影あかし。



○一樹のかげの別だに、別るゝ名殘はあるものを。
○かへりこむ日はいひがたし、定めなき世に定めなき身。
○膝に涙の玉あられ、心を碎くいとまごひ。
○たゞに先立つ子のみちの、いづくの國にかありといふ、れもへばつらき別れ路の、くるしき涙に袖しぼる。
○すみれさく野の朝つゆを、けさはわけてもなぐさまず、昨日の春をれもひでに、いざやわかたむ袖と袖。
○野山の末のつゆわけば、かけてもへわが袖を。
○相見るけふのわかれだに、かばかり君のこひしきを、袖分ちなばあすよりは、いかにしてかは日を送らまし。
○かつみなからにこひしきよ、わかれてのちは天雲の、よそにへだつとおもへばや。
○けふをかぎりとたちわかれ、いなばの山のみねのまつ、まつとしきかばかへりこむ、旅ならませばいそせめて、なぐさむふしもあるべきに。
○心はあとに殘りつゝ、先立つものは涙なり。

○千里の外のたびごろも、たつ日はきかじあさつゆの、おきてしゆかばけぬべきを。

○たぐふ心は雲井にも、おくれじものをよりめには、あひ別るとや見たぬらむ。

○なきてとゞめよ諸共に、かたるゆうべのきり〳〵す、秋のわかれやをしからぬ。

○あしたのきりとあはゝ山、あはれけふしも立ちていなばはれぬれもひにこひしなむ。

○越の白山しらねども、ゆきのまにく〳〵あとゝゞめて、心を君にたぐへばや。

○わかるゝ袖のしら玉は、やがてもきみがゝたみなり、つゝみて行かむ旅の空。

○ふるさとにしもあらなくに、なごかく別れのをしからむ。

○わかれのことにかなしきは、おやのわかれと子のわれ。

○わかれのことにかなしきは、をとこをみなのわかれなり。

○天晴れて一雁遠く吟情を送り、海ひろくして孤帆たゞく詩材に入る。

○再會期しがたし樽前笑成らず、人事違ひ易し月下淚萬斛。

○君と別れて三千里、心はたどる亞米利加洲。

○死別よりげにかなしきは、生きて別るゝけふのみち。

○かすみがくれに行く舟を、したひて別れし父君の、おもわもよくは白波の、かへらぬむかしがなつかしき。

○あかぬわかれのみちならば、をしむ涙にかきくれて、絞るたもとの秋のつゆ。

○つひのわかれの道よりも、なほかなしきはけふのこの、いのちの中のわかれなり。

○別れて共に命さへ、且惜しまるゝ、今よひかな、あはむとれもふ心より。

○蓬坂山のかすみと共に、けふたちいづる雲の上、めぐりあふべき月影を、秋のたのみに殘しつゝ。

○たかねの月ともろともに、西へというぐこの旅の、わかれを惜む袖のつゆ。

○唯苟且の別ぞと、おもひかへせど、白川の、せきとめがたき淚かな。

## 厭生

### 無情

○ゆめの世○はかなき身○あだしのゝつゆ○鳥部山のけふり○世をいと
ふ○はかなしや○世をのがれて○松風の身にしむ○つゆのみの○あした
のつゆ○夜半のあらし○花よりもろき○如露如電○人のこの世○虫のな
くね○つゆよりもろき○ゆめの中なる○こぎゆくあとの白波○けふやゆ
め○うらに消ねつゝ○むなしき影○流るゝ水○かくれがに○世をうしと
○心をすます○うきよをよりに○たのまれぬ人の世○まぼろしの○かげ
ろふの○紅のちりの世の中○あしたのしも○きえを爭ふ○かりのやどり
○あとなき雲○あすか川きのふの淵は今日の瀬○あるにもあらぬはゝき
木○風を待つまの露○うつせみの世○明日知らぬ○かへらぬ水沫○ある
かなきかの世
○おきどころなくわびつゝも、何なげくらむ野に山に、思ふまゝなる露の身
を。



○散りにし花の木蔭には、かりにも立寄る人ぞなき、世はかゝれこう悲しけ
れ。
○淵瀬さだめぬあすが川、かはる思へば夢よりも、はかなきものは現なり。
○とてもきゆべきつゆの身の、なにながらへていつまでか、世を浮草にやど
るらむ。
○よしやこの身はすてぬとも、尚よの外はなきものを、何處か遂にわがすみ
か。
○何をよすがとみち芝の、つゆのこのみのおきどころ。
○人げまれなるおく山の、岩のはざまに身をよせて、志づかに物やおもふべ
き。
○れとになたてそ秋の風、世にふられじの柴の戸を、よしたづねきてたゝく
とも。
○山上の墳塋長へに苔のいろ青く、丘前の松柏いたづらに風の聲かなし。
○とてもかくてもうつし身の、ながらへ果てぬ人の世に、名さへ埋れて苔の
下に、ながき恨みやのこすべき。

○かはりゆく世のあぢきなさ、昔ながらの橋ばしら、うれも朽ちぬる世なりけり。

○ふけゆくうらの月みれば、うのこそなくわが袖の、志めるは露かはた涙。

○花さく春もいたづらに、よりにきふても過すかな、世をうぐひすのねになきて、身のかひなさをなげきつゝ。

○ひまゆく駒の春のみち、いつしかとなく夏草の、志げるとみれば忽ちに、草葉にわけける秋のつゆ。

○たま〳〵人と生れきて、うむくは何の心ぞも。

○浮世のちりをいとひつゝ、つゆの此身をわくやまの、松の木かげの草のいほ。

○みそらにかゝる虹のはし、きにをあらそふ人の身に、わたるもあやしあやしまで。

○見る目の前に何事も、むかし〳〵となりはてゝ、うつゝなきよぞあはれなる。

○あと志らなみのきえやすき、露のいのちよいかにして、この世の風にあへ



ぬべき。

○去年みし花は今年又、いろもかはらず咲きにけり、去年花かげにみし人は、今年はたにて影もなし。

○のきの忍ぶのみだれつゝ、志のぶかたく〳〵志げいとの、くるしと世をばかこちても、行くべき里もわぼにねば。

○うき世にうへる影なれや、すつれどさらにはなれざる、浮世の中のほだし草。

○ゆふべの月は志きたへの、まくらの上をてらしつゝ、むすぶ小蝶のゆめのまに、枯野の志もとなりにけり。

○悲風吹きて清華のゆめをたつね、霓裳ちりて羽衣むなしく、麋鹿庭にあづびて猿鶴聲うらむ。

○春の夕ぐれとひくれば、滿地の落花砌をうづめ、いらかはれちて苔青し、むかし清華のみやのあと。

○この世の中をのがれいでゝ、山に入る人山にても、なほうきときはいづちゆく、はかなの人の心かな。

○は山しげ山立つゞく、つくばの山はふかけれど、れもひ入るにはさはりなし。

○昔は絲竹管絃の宴に醉ひ、今は樵歌牧笛にゆめをさます。

○身を浮艸のよるべなく、世にすてられてさまよへる契はかなき宿世かな。

○やどり定めむ家もがな、うき身は海人のすて小舟、げにうみわたる世なりけり。

○桃李松柏こと〳〵く俗塵造物の深意いづこにかひりむ。

○桑田變じて蒼海となり、少年頭をめぐらせば忽ち白頭。

○清くうたひゆるくまふ落花の前、朝來の病床ゆめ冷かに、三春の行樂たが家にか去る。

○のりの佛も梅檀の烟をまぬかれず、天津乙女も五衰の日にあへり。

○この世のすまひはことなれど、たかきいやしきれしなべて、れなじく赴く土の中。

○人のこの世はぬば玉の、ゆめと悟りてふみやぶる、道の草鞋うちすてゝ、のがれ入る身ぞうらやすき。



○われさめたりとほこれるも、なほ醉ひ泣きにこそならず、われ世をいでぬと悟る人、大方名利をいとなめり。

○人の命は春の夜の、只手枕のゆめの間や、夜半の嵐にちるさくら。

○たゆたはず流るゝ水の面に、數かく如き身をいかに。

○老少不定ときく時は、わかきいのちもたのまれず、老いしも殘る世のならひ、飛花落葉の理や。

○共に浮世にたち花の、花にもむかしをかたるのみ。

○榮華のゆめのさめし春の朝、欄干のさくら風なくてちる。

○人もうらめし世もあぢきなし、人にも世にももしら雲の、千重にかさなる山のおく、谷ふところにのがればや。

○人生七十あしたのつゆ、夕日もまたでずみれはしぼむ。

○末世一代敎主の如來も、生死の掟はのがれ給はず、況んや凡夫衆生の身、さらぬ別のなくてやは。

○うき世はかりの草まくら、むすぶも本のつゆのひま。

○一陣の風、土をまき、花よりもろくちりにけり。

○一生は只風の前の雲、三界はこれ水の上の泡、ゆめの間に散りやすく、ひかりの前に消ねんとす。

○千々の寶をつみ立てゝ、北斗の星はさうふとも、死出の旅路をさうひくる、無情の風はふせがれず。

○野にも山にも月はすむ、浮世にしられぬやどもかな。

○うれしきふちは忽ちに、うきせにかはるなみだ川。

○うき世の中をうしといひて、ちりのけがれをいとへども、うがひに立てる由すらも、ちりひぢよりこそなれりけれ。

○あはれはかなき世の中に、はかなき人を頼めつゝ。

○ふちせ定めぬ世の中は、けふさへ知らずあすか川、流の末やいかならむ。

○榮華はまことに春の花、あしたに咲きて夕にちる、人世はたゞ秋の月、きのふはみちてけふはかく。

○北邙山下のちりとなる、人の命は朝ぎりの、風をまつまと知るや君。

○かならず死ぬる此世とは、此世にたてる人みなの、知りがほにして知らぬかな。

○今はなげかじれろかなる、心ながらに求めなば、うき世の外の月もみむ。

○月白くして風清し、永夜清宵の景色も、また五濁惡世のちりひぢのみ。

○なぞたのまれぬ世をたのみ、なぞ立ちがたき世には立つ、思へばあやし我ながら。

○いろもかも終に仇なる花紅葉、いつをいつとか定むべき。

○朝かほの花の上なるつゆよりも、はかなきものはかげろふの、あるかなきかの身なりけり。

○たゞ何事もちりの世の、ちりに交はる身をしりて。

○なつの夕の雲間より、はしるひかりは人の身の、きにてあとなき世や示す。

○國を思ふ我が萬斛の涙もて、穢れたる世を洗はゞや。

## 死亡 墓之部參照

○むなしきけぶり○はかなきつゆ○さゝ葉のつゆ○もろきすがた○かげろふの身○ものがきくるしみ○八重ぎりふかく○ものも見ず○あやめもわかぬ○身にうふものはなかりけり○今日を限り○くらみゆく○よべ

叫べど○ものゝひゞきはたにはてゝ○やみに沈みてれともなし○だんまつま(斷末魔、死に際のこと)○影くらきり○死出の山路○三途の川○わたり川○きえゆく日影○ゆふべのけぶり○つひにゆく道○かぎりのみち○あらざらん世○本の雫末のつゆ○れくれ先立つ○今はの旅○ともしけち(死ぬる事)○ちりし木の下○草葉のつゆと○たのみし人も○老少不定○いつかとまたむ○うつろひゆきし花ざくら、風をまつまとかねてより、れもひしかどもいまさらに、おどろかれぬる夕かな。

○おもへは今は三年のむかし、たゞかりそめにいさといひて、ひきわかれにし妻琴よ、つひの別れとなりにけり。

○萬籟たえて天地は、昔のやみにたちかへり、空に知られぬ八重ぎりは、やがても魂をつゝみ去る。

○照る日の光月の影、みながらうせて常闇の、やみの中道たどりつゝ。

○千金の富萬巻の書、携へがたきのみならず、わがむくろさへ從はで。

○生れて死なざる人やある、とても死ぬべき身ならもには、かひある死をこ



そなすべけれ。

○はちすのうてな法の雲、半座をわけてまちやせむ。

○唯一遍の手向艸、うけつゝまたむ後の世に。

○日影にしぼむ朝顔を、何はかなしとれもひけむ、人をも花はさこう見め。

○虚空をつかみ足ふみならし、あがきくるしむ斷末魔。

○くるしきいきはせまりきて、物のあやめもみにわかず。

○まなこかすみて耳とほく、くらきに沈む心地して。

## 處心 幽寂之部參照

○すみのぼる○うらすゞしく○心たかく○ずが〳〵しく○眞如の影を○時につけてうつろふ心○うつろひ易き人心○水の心○空の心○風のこゝろ二ッなき心○あふぐ月影○氣はれて○雲きえて○風かろく○眞清水にやどる○心の底○心の鏡○心の奥○くもる心の月○目にこそみえね○人の心のあだ櫻○心の花○ちりもけがれぬ○いやたかく○神のみこゝろ○佛のちかひ

○秋の夜すがらすむ月の、光も清き眞清水に、人の心をうつしつゝ。
○心の底にすむ月は、實相の影とみゆるかな。
○心のうちにかへりみて、いかにとわれもふ心こそ、心をはかる心なれ、心のおきてに心して、心と心はみがきてむ。
○はらふあらしの風たちて、眞如の月やすみぬらむ、空しきうらぞあふがるゝ。
○聖人はゆめなしとかや、ゆめあるものは現に迷ふ、眼華風たにて三界空しく、心頭曇なくして一生ひろし。
○げにうしとみし世のゆめも、つらしとわれもふ幻も、いづれあとあるくもきりの、消えてはかなき人の世を、心のどかに送りてむ。
○大かたの世にうもれ木の、人しれぬ身を沈めども、心の花は匂ふなり。
○心はわざにあらはるゝ、こゝろわりしらで世の人の、つゝむよ何の心ぞも。
○おのが心のおきての外、のりとなすべきものぞなき。
○しらぬほどこう命なれ、志りての後は何事も、樂しきことはなかりけり。
○此妄執をひるがへす、心は眞如の玉かつら、長きゆめぢはさめはてゝ、佛果



を得たる尊さよ。
○心からこう生死の海はありけれ、眞如の月の光隈なき夜半のうら。
○水の心のきよければ、うこのさゞれも數ふべし。
○世はみな醉へり無明の酒、われはさめたり眞如の影。
○心舟朝にこぐ、未だ大洋萬里の波に棹さゝず、意馬夕べに馳す、なほ關山千程の雲に鞭うたず。
○塵の此身は拂へども、拂へども猶妄執の、心の闇は黒髪の、結ぼれつゝも絶ねやらで。
○うこひしられぬ海原の、なみの心をてらす月。
○かすむゆふべの月みても、心はやがてすみわたる。
○空すみわたる月影に、心もいとゞさわやかに。
○うしとたのしと人毎に、むかふ心はかはれども、影はかはらぬ秋の月。
○月のれもてのくもらねど、むかふ心しくらければ、はれて物をやれもふらむ。
○人の心は水なれや、月のてらせば影やどり、風のさわげばなみをどる。

○かたちの花はそしつきに、うつろひゆけど、村ぎもの心のはなはそことはに、いろも匂ひもことならず。

## 勇氣

烈士之部參照

○いさましく○をゝしく○たけく○ますらたけを○われずすゝめ○堂々の陣○正々の軍○敵はよしや多くとも○われくるゝな○何かわれらむ○めざましや○力のかぎり○日本男兒のまごゝろは○國につくせる○國の守り○八十伴の男の○かたき心は○碎けても○玉とくだけても○あくたとなりて○骨かぐはしく○名をたてゝ○ふみをてらす○ながきほまれ○たぐしき人○義を見てすゝむ○つるぎとり志ばり○あとへはひかぬ○一歩もゆるがぬ○われもひこみては○幾百萬の仇なりとも○けやぶりてゆかむ○つぎけ人々○たぐしきみち○神の心にかなふ○いかり猪の○ひたすらに○中堅につき入りて○死してかひある○ふかき心○われぬたましひ○山をもぬかむ○鬼神とても○いくさの庭に○ことあげもせで○千よろづの○なぎたてゝ○血ぬちぬ及○朝日に匂ふ○花よりかんばしく○ひかりかゞやく○名だて○われどろかすべき○つゝとりて○いさみはやりて○まつろはぬもの○彈丸雨飛の間○血しほの海も○かばねのやまも○つるぎのはやし○護國の鬼○よみがへりても○忘れはてむや○金鐵よりも○岩をもくだく○たばしる水の○さかまく浪の○ふきたつ風の○すさまじさ

○秋の尾花のそでにちる、つゆよりもろき涙あり、肥にしかひなをなでゝこゝろ、やせたる脾をなげきけれ。

○しゝおふ獵夫は山をみず、つりする海人は海をみず、世界の日本もて期する、ますらたけをは敵を見ず。

○とぎにとぎたる我がこの太刀、ひるともいはず夜ともなく、ねりにねりたる我がこのかひな、いざこゝろみむ彈丸雨飛の巷。

○風はたかし旭日のみはた、しもはさむし日本刀。

○生きてはみくにの楯となり、死しては護國の鬼となる。

○あゝますらをと生れきて、國に死すべき時はきぬ。

○怒濤さかまく萬里の海に、萬死を犯していざゆけ君よ、虎穴に入りてず虎

子も得む。

○義は金鐵よりなほ重く、いのちは鴻毛よりかつかろし。

○敵は豺狼、治安の仇、我國のあだ大君の敵。

○神世このかた一度も、外つ國のはぢうけざりし、我が敷島のますらたけを。

○往けわがやまとますらをや、これ千載の一遇ぞ。

○鍛へにきたへし我このかひな、いざためしみむ日本刀。

○死ぬるは今の時なるぞ、時失ふなこの機會。

○苦にかばねをうづみてぞ、雲井に名をばあげつべし。

○あだにはさゝじ秋水三尺、ちかき守と身にそへて。

○とびこめ矢玉の雨のなか、ふみこめつるぎの霜の上。

○たゞひとすぢにいかりねの、かへりみもせぬいさましさ。

○あさひのみはたれしたてゝ、すゝめやすゝめつはものよ。

○かたき心の一徹は、いはをもとほす桑の弓。

○石をつらぬく矢のためし、いかでおろるゝことあらむ。

## 天皇 國體、愛國、教訓之部參照

○大君は神にしませば○すめらぎの○みかどへに○大みやどころ○大内山の日の光○九重に○國ゑろしめす○おほみこと○すべゑらせたまふ○天地の共限りなき○千代も○いひつきゆかむ○つがの木のいやつぎ〳〵に○雲井はるかの○いく世さかえむ○あふげばたかき○さしいづる日の○ひいづる國の○照る日のひかり○やぶしわかぬ○日のめぐみ○あら人神○あまつみかみ○くもりなき世○日のみかど○君が御代○みこの命○神ながら○かすみの洞○大君のゆかり○めぐみにもれぬ○かぎりもあらぬ○いかにたとへむ○はこやの山のおくまでも

○雲井はるかにうばだてる、大内山の峯のうら、仰がぬ人こうなかりけれ。

○我が大君は天てらす、大御神のみ子なれば、其みくらゐを日嗣と申し、ましますの宮を雲井とたゞへ、仰ぎまつろふ四方の民。

○天つ日嗣のたかみくら、月日の光照さむ限り、いやますゝ〳〵にさかゆかむ。

○わが大君は神なれば、雲井にたかくまし〳〵て、天の下をばてらしまします。

○あふげばたかし、日の光、君がみいづにたぐへつゝ。
○世界萬國多けれど、あら人神とたゝへきて、いつける君はわが國の、みかど
をおきてほかにやある。
○いざ人々よ諸共に、みかげのみまへにかしこみて、今日の御誕辰をことほ
がむ。
○天照らす日の天が下、てらさむかぎりきはみなく、さかえますべき大みす
ゑ。
○めぐみの露にうるほひて、千とせの春にのどかにも、いやしげりゆく民草。
○大内山の山松に、ひかりくまなくすむ月。
○水上清きさゝ鈴の、五十鈴の川のたぐひなき、ながれの末をくむ民は、心の
色もまたすめり。
○上にありて照臨ましまず萬世一系の君、下にありて忠勇なる四千餘萬の
民。
○めぐみのつゆにさかえつゝ、民の小草の月に日に、さかれる御世こうめで
たけれ。



## 皇子

○春の宮○日つぎのみこ○竹の園生○枝をつらぬる○まけの宮○二葉の
かをり○めでたきいろに○めぐむ春より○まづかぐはしき○たふときみ
かげ○人の世のたねならず○千とせのはるにあはましを○生ひたちたま
ふ若竹の○かぐはしき名を○いく千世かけて
○園生の竹のよをこめて、生さき長き春のみや。
○春もまれくある九重の、庭の呉竹かげたかし。
○春のみやまのみねたかく、いづる日かげのくもりなき、みよを千歳といは
ふかな。
○この花もとこれ人の世の種にあらず、崑崙山の麓に生へる、瓊樹の種とぞ
聞にたる。
○竹の園生の一もとは、金枝玉葉よりれひたてり。
○今よりのぶる春の日の、ひかりやいかにあきらけき。
○二葉ながらにかくはしく、匂へる花の高き香は、あふがぬ民こうなかりけ

れ。

○かくれぬ君がみひかりは、まだきに世をばてらすなり。

○竹の園生のわか立は、春のめぐみにみづ〳〵と、たぐひまれなる蔭しめて。

○あふげやあふげわが君の、光をわかつ日つきのみやぬ。

## 神官 神社、神之部參照

○かしはでうつ○いつきまもる○宮守が清きすがた○神殿ふかく○ひろまへ○さかき取る手○のりと誦む○ねぎごとかく○清きこゝろ○御代安かれと祈る○あけの玉がき○こけの香匂ふ○神や知るらむ○ぬさ手むけ○八平手の聲○ふとたすき○はふりこ○神づかさ○きねて○かみわざ○つかふる大前○鈴ふり立てゝ○弱肩に○朝な夕な○ゆふかけて○かみの心○世をしづめて

○つゆもけがれぬむら肝の、心のいろを身にまとふ、衣に見する神はふり。

○あけの玉垣うのいろに、つかふるはふりがいつはらぬ、あかき心もかつみ



○こけの香匂ふ玉垣の、さびたるいろは世の中の、ちりにけがれぬさまみにて。

○鳥居はくちて玉垣に、苔の香匂ふ御しめどの、いつきまつろふ宮もりが、浄衣の姿すが〳〵しく、ひざくかしは手たふとしや。

○白き浄衣の袖ふきて、みはしの小簾に入る風に、神の心もうごくらむ。

○杉の下みちかげくらく、やみぢたどりてみあかしの、ひかりまつらふ宮守が。

○朝にはらふひろ前の、いがきのもとのちりほこり、夕にいはふ奥殿の、御帳のもとのちりとごと。

○朝な夕なにおりたちて、つかへまつれる大前の、砂地きよき宮守が心ぞいともたふときや。

## 僧侶 佛閣、佛之部參照

○世をすてゝ○苔の衣に○行脚に送る年月○ちりのうき世○しきみ摘むあかくみて○のりの師○すみぞめの袖○野ふし山ふし○ゆきめぐり○

雲水に住する身○行雲流水身は心と共に輕し○野に臥し山に宿る○心哀の雲の影はれて○花は紅柳はみどり○涅槃の雲の影をみて○十二因縁○三千世界○松風の聲に心をすまし○月のひかりも身にしみて○ほのほの家を出づ○法のともしび○法力高大○神通力○無明のやみをてらすなり○世をすくふとて○むらさきの雲をまつ身○世にむさぼらず○眞柴とる○身こそやすけれ○夕ぐれのかねつく○水くみがへて○眞如の月○心の月○如法のやみ路○秋月たもとにやどる○花のかほり袖にあり

○思ひとぢめぬ假の世に、斗椒行脚の旅の空、わけゆく先は紀路の山、高野の奥の山ごもり。

○東雲まだて烏羽玉の、やみぢにたどる峯の雲、御法の花の露わけて、折りこりかへれ峰の寺。

○眞如の月のかげを見て、うのまゝはらふ心の雲、つゆもくもりやなかるらむ。

○山門の松風は煩惱の雲をふきはらひ、寶塔の月影は菩提の光を示すなり。



○山下蔭の苔のいほ、むすびすてたる露の身は、ちりも心は世にとゞまらず。

○春花樹頭に上る時、上求菩提の機をすゝめ、秋月水底に沈む時、下化衆生の形を見ず。

○法の師の、三つの袂に影うつる、和光の誓たふとしや。

○世わたるわざもかた糸の、あふさきるさにまつはるゝ、ほだしをれもひ切かみの、ながらへはてぬ人の身。

○家をいでたる法の師も、かへる野寺はある世なり。

○ゆめもうつゝも幻も、共に迷ひの雲烟、そむきはてたりほのほの家。

○心はすめり十二因縁の月、袂にかろし三千世界の風。

○この世にしばし黒染の、袖に眞如の月うけて、紫雲まつ身のたのしさや。

○敎坊にれもひをこらす顯密の敎、戒壇に心を碎く緣覺の道。

○野にふし山を分けすてゝ、又もうき世にすみ染の、はらひはてたる苦衣。

○苔の衣の袖はらふ、嵐も今はつらからず、れもひすてたる人の世は。

○世にすみぞめの袖あげて、くもれる月をはらふ風、ふきもふかずも心には、ちりもくもりはなかりけり。

○たけにあまりしくろかみも、いろのみのこる墨ぞめの、袖にあはれをとゞめけり。
○かねのひゞきにいろぎつゝ、眞柴をかりつ水くみつ、
○この世はかりにすみぞめの、うでにつゆけき草のつゆ、やどる眞如の月の影。

## 山伏

○山にふして○つくる斗巾（ときん）○つゆもはらはぬ○すみぞめの袖にはあらぬ○山にかくれ○身をいたつぎにはふらかし○雲わけのぼるみねの月○法の心に○身をすてゝ○かくる篠かけ○あうんのいきに○八葉の蓮華をふま○いく重の山○野にふし山にわけ入りて○心をてらす月の影○むかしのあとへ○役のうばらく○山わけ衣○野ゆき山ゆき○旅ねの月に○れもひをこらし
○假に出てたつ山伏姿、兜にかへていたゞく斗巾、よろひにあらぬ篠懸や、兵具をさめし笈を負ひ。



○苔の衣のいろふかく、法に心はすみ染の、袖もさながら白砂の、雪にうもれてわりなしや。
○木の下つゆに袖ぬれて、ふすべくもなき山かげの、苔のしとねにまどろめば。
○むく山ふかくわけ入りて、行ひすまず山伏の。
○聲ふりたてゝ咒文をとなふる、すがたもいとゞ凄しく。
○鬼神羅刹もれうるゝばかり、丈すさまじき山伏の、行ふさまぞれうしき。
○蘿（つた）を結びて衣となし、木の實を採りて食にあて、いく年月か送るらむ。
○ひるはこゞしき山阪をこえゆき、よるは木ふかき下かげにやどる。
○つゆにぬれにしすゞかけの、たびの衣をいくかきて、山又山をわけにけむ。
○木の間もりくる月影に、かりねの床をてらされて、むすびもあへぬくさまくら。

## 男子 教訓之部參照

○をのこ○ますらをと○たけき人○いさましく○正しきみちに○いりし

みて○君につかへて○れやにつかへて○心すぐなる○心きよく○よわきをたすけ○つよきにあたる○義にいさみ○勇にほこるな○われも人も○國のみたてと○かたき心○生れ出でゝは○名をのこす○朝日に匂ふ山櫻

○外にいでゝ

○男子此世に生れては、信義を骨とし武勇を肉とし、入りては父母にいでゝは君に、つゝしみつかへてほまれをあらはし、死して青史に名をとゞめむ。

○朝日に匂ふ山ざくら、うるはしくしていさぎよきは、日本男兒のさがにやあらぬ。

○義勇の鎧に身をかため、天壤無窮の皇運を翼けまつりて他をかへりみず、只一すぢに進むこそ、日本男兒の務なれ、日本男兒の職分なれ。

## 女子

○やさしく○しとやかに○をとめ子が○うるはしく○徳のひかり○操のかゞみ○教への道に○心ひとつを○みどりはかへぬ○姫松の色かへぬ○すなほなる○心をみがく○ねやありて○桃のいろ柳のしなひ○梅の匂ひ



櫻のすがた○家をゝさむ○ものやはらかに○風の柳のさからはず○くろかみの○雪霜にれそれぬ○あいらしく○めでたき○家のまもり

○見目も修めよ心もみがけ、みめと心は女のひかり。

○和かにして靜けきは女の徳、しとやかにしてやさしきは女のふるまひ。

○吹く春風に爭はぬ、柳の糸を姿にて、降り積む雪にほゝゑめる、梅の操を心とせよ。

○貌をよろほひ姿を飾るは、禮讓てふひとつの外ならず。

○さすがに千代のねひさきもこもる二葉の姫小松。

○かつらの眉ずみ、あやの袖、すがためでたきをとめ子が。

○人は女子と生れずもがな、一生の苦樂人にこうよれ。

○女は五障のつみふかき、法の咎の呪咀をねひ、くるしき葛に身をまとはれ、猶三熱のくるしみあり。

○昔の人もうしといひし、男山になきまじりそよ、風はなまめく女郎花。

○心に松の操をとりて、貌は花のいろかもたかく。

○兵士の力は腕にあり、婦人の力はかたちにあり。

## 幼童

○あそぶにも○となりを撰ぶ○白きいとの○なびくもはやき○ふりわけがみ○學びのみちに○父のみのみことに○母うばの母の教へに○かしづかれ○世のうさしらぬ○なよ竹の○まだ窓の内なる○わかばの匂ひ○つやゝかに○れのづから○すぐれたる○わか竹の○めばえの○みづえすぐしき

○れひさきこもるまどの内、ふりわけがみもよわ肩に、かゝるともなきをさな子の、

○れぼしたてつる人こうなけれ、れのづからなる春風に、いつしか花は咲きにけり。

○竹馬にのり鞠なぐる、外にはうさも知らざりし。むかしの春のなつかしや。

## 老人 衰亡之部參照

○ゆめは六十路の花をめぐり○板橋のしも○眠早くさめて○いつしかも



○かしらの霜○れとろへて○みるかげもなし○さらばひて○杖を力に○昔のはるの花の俤○長安昔日の春○つもれば老いと○杖にすがる○腰もふたへに○まなこかすみて○みづはぐむ○ながらへて○つくも髪○老松の枝○れきなぐさ○千とせの春

○あさな夕なにいにしへの、姿はかはりもてゆきて、たゞ老のみづますかゞみ。

○かしらのゆきはいやつもり、ひたひのなみぞよせまさる、腰にはくるや梓弓、ひきかへされぬむかしかな。

○立ねにつけてやすからず、けふも日ぐらしつら杖を、つく〳〵れもふ昔かな。

○いろかはりゆくくろかみの、みるめあやしき姿かな、ひとのいとふもことわりや。

○かく眉ずみのいたづらに、心ぼそくも老いはてゝ、昔のはるはあともなし。

○花のいろ香もあせはてゝ、かゝるもくるし九十九髪（つくもがみ）、など中々に絶にもせで。

○みどりのかみもいつしかと、牡鹿のつのゝつかのまに、うつろふ野べのはたまゝき、れくはつ露にうらぶれて。

○花と匂ひしもとゆひも、けふれくしものいろさむし。

○花の裝ひれところへて、しをるゝつゆの床の上、ちりの鏡にみる影もうらはづかしきこの身かな。

○つやゝかなりし双蛾の眉も、遠山のいろを失ひて、ひと年たらぬつくもがみ、頭にたるゝあさましさ。

○花にやどる春の烏、千草にねむる秋の蝶、ゆめばかりなる此世かな。

○なみよむまどのゆきほたる、やみはてらさでいたづらに、頭にのみや積るべき。

○鏡のかげも白ゆきの、つもれば人の身にふりて。

○わが黒かみに年くれて、かゞみのかげにゆきぞふる。

○冬もいつしかくれはてゝ、年のかたみにれくものは、わが元結のしもばかり。

○鬢髪は山かげのいくとせのゆき、榮花は花のもとの一夜のゆめ。

○影はむかしにかはらじを、むかしの光にかはるかな、老いて今見る秋の月。

○送りし眼の秋の波、額によせんとれもひきや。

○松風に呵し蘿月に嘯き、翠帳紅閨に銀燭を掲げ、むすび〳〵てゆめの末、花も紅葉もちりはてゝ、朝のくもはあともなく、夕の雨のれとかなし。

○かしらの雪のれきりひて、この歯もゝろくちりぬめり。

○三千丈のしも白く、ゆめか長安一日の春。

## 美人

○芙蓉のまなじり○丹花の唇○花のすがた○露にほゝゑむ姫百合○みうのゝ芙蓉○つゆになやめる○蓮歩ゆたかに○たぐひもあらじ○袖の香かをる○千草の色のさまゝ〴〵に○風になやめる○こがねの小櫛瑠璃のたま○袖の香ゆかし○かざれるすがた○袖には花の香をとめて○あやのたもと○雪の肌○色はゐて○月のひかり○ゑみこぼれたる○緑のまゆずみ○柳はりむき花は愧づ○一時くねる女郎花○霞に匂ふ花の姿○春のかすみをりめてきる○袖ふる毎の追風○たか袖ふれしやどの梅○小簾（をす）のすき影

○いくりの國か傾かん○まみの匂ひ○うらなつかしき袖の香○匂ひこぼるゝ○さしかざす扇○れもはゆげ○誘ふ風あらば散りやせん○霞に醉へる山櫻○匂ひこぼるゝ○露にやつるゝ姫百合○心ときめく○花の光もけれされて

○世に似ぬ色香はかくれても、かくれざりけり夏草の、まげみが中の姫ゆり。

○情を柳糸の色に染むれば、春の思亂れやすく。

○心を蘭質の手に移せば、秋のつゆいよ〳〵もろし。

○秋の最中の空の月、雲にかくるゝこゝちして、かざす日傘のなか〳〵に。

○佳人を携へて明月に吟すれば、逢歩遲々として秋風きよし。

○霞に匂ふ花ざくら、時雨にもせぶ薄紅葉、紅ふかき顔ばせは、此世の人ともれもはれず。

○ほゝゑむ眉にこぼるゝ匂ひ、只久方の天津姫。

○姿はやよひの櫻花、雨にしをるゝ風情あり。

○をすの内には誰がうゑし、こぼれて匂ふ花ざくら。

○しのぶもぢずり誰ゆゑに、亂れし柳の糸ならむ、かよりかくより春風に、なびくもうれもひありげなり。

○たとへむ方もなしの花、雨になやめるうのけはひ。

○三つの緒琴のしのびごと、ほの〳〵うたふ一ふしに、空ゆく月もや醉ぬらむ、袖ふく風もや迷ふらむ。

○柳の黛うるはしくして、紅粉の粧をからず、羅綾の衣かぐはしくして、桂房とこしなへに春を占む。

○春のかすみをうめて着る、袂の松の藤ねずみ。

○細くすゞしき眉の月、風になびける青柳の、糸にやどれるれもひあり。

○色こき桃の唇に、言葉の花のさきいでゝ、匂ひこぼるゝ春の風。

○巫女廟の花は夢の中に殘り、昭君村の柳は雨の外に踈なり。

○丈にあまれるくろかみの、みどりの色もとり添へし、花のゑまひのうるはしさ。

○姑射の山松美人とあらはれ、羅浮の梅花佳人となる。

○簪の玉のしろかねの、光をさへに取添へて、まばゆきまでぞうつくしき。

○うきにやつれし雨の花、浮世の秋のかからにしき。

○紅顔色あざやかにして白粉媚をつくり、容貌品こまやかにして蘭麝の匂なつかしく。

○嘯伽の聲やはからに、仙女の袂ゆたかにて、天津少女かとばかりに。

○楊貴妃が花のかもわ、李夫人がはちすの睫。

○夏野の萩の風になびく姿、緑の山に月いづる裝ひ。

○かすみの中のかばざくら、さやかならぬが中々に。

○翠翹金雀とり〳〵に、かざしの花もにほふなり、雨になやめる海棠の、ねむるさまにやたぐふべき。

○楚雲にうつらふ青娥の粧、石榴の裙帶馬上に匂ふ。

○飛燕が粧班女が姿、一枝濃艶つゆかをり、風また匂ふ春のあめ。

○沈香亭北欄干のもと、名花笑ひを競ひて春來ることはやし。

○水殿風かをりて玉簾を捲き、一朶の芙蓉はつゆに笑ふ。

○花のたもをふく風に、なびくともなくなまめきて、立てるや野邊の女郎花。

○數行の暗涙は孤雲の外、一點の愁眉は落月の邊。

○嬋娟たる雨鬢は秋蟬の翼、宛轉たる雙蛾は遠山の色。



○秋の月の貌は山をいづる光あり、蓮の花のけいひは水を穿つの姿あり。

## 詩人 文學之部參照

○心のはなはときじくに○いく世かはらぬ○錦心繡腸○かぐはしき名○いくよの春か匂ふらむ○心の月にかげうつす○言葉のはなの匂ひ○めでたきいろはたぐひなき○天地のながめくまなく○心のまこと○詩の泉○ながれていづる○たぐひなきひと○神も心やうごくらむ○麻のころもの袖せばみ○心はにしきの花ぞをる○心にとみをたくはへて○千代萬世もかぐはしき○天地のむだきはみなし○なつかしき名○うたひいでたる○れのづからなるあやにしき○蛙だになくく○鶯だにもうたふ世に○花にあはれのいろをうへ○月にうれしき光をまして○名は埋れぬ○ねざめてむかふうた人の、まどにさし入る月の影。

○月につけ花につけ、又世につけて涙萬斛、萬斛の涙はこりて影となる、此影いづこいかなる處にかうたはむ、耳ある人のなきこの世。

○きよき心のきよき時、きよき言葉の花はさく。

○れもふまに〳〵いひいづる、ひとつ心の言の葉が、やがても人のまことなる。

○身には繿縷をまとへども、これが錦心繡腸の人。

○春の花野にあくがれて、雲雀にうたふ天地の、あはれをたれかきく人が。

○天地の美妙をさながらに、うたひいでたる人のこゑ。

○花にむかへば月くもる。

○人の心の底ふかき、なさけのいとのひぐきころ、あやあるうたの聲となれ。

○とみも位も何ならず、一たびうたふ心の聲、千歳にながくきゝぬこそ、人のこの世のほまれなれ。

○人の心の詩の泉、いくとせくももかれせじな。

○歌のために貧を招く昔の歌人、富のために詩を作る今の詩人。

○心けだかき詩人（うたびと）が、まなこにうつる花とりは、人に知られぬつやあらむ。

○れなじく春の花ながら、詩人が目には一入の、ねもいひしらぬ色香あり。

○れなじく秋の月ながら、詩人が目には一入の、ねもいひしらぬひかりあり。

## 文人 文學之部參照

○讀むふみ○かぎり知られぬ學の海○筆もては詩情あふれ○視の海のかわく迄○花にたはむれ○月にもつれ○うき世としもいはじ○心のどかに○文車の○ふみの林のれくふかく○花のいろかをたづねつゝ○千卷八千卷○ものまなぶ窓○いにしへ今の○○からやまと○まきかへしつゝ○みちのれくが○わけ入る方は○心をこめて○紙れしのべて○かきちらす○ふでのあや○ふでのはな○うるはしく○かぐはしく○くすしきまでに○人の心をにがく筆○春は花○秋は紅葉○のどかにも○世のちりにうまず○くちぬ名○名たがきほまれ○世のために○濱千どりふみれくあと○讀書萬卷をやぶり、文筆千古をうごかす。

○身に黄金の飾こうなけれ、心にかさぬるあやにしき。

○あとかぐはしき筆の花、匂ひたづねてまなべ人。

○螢をあつめ雪をつみ、學びの窓のあけくれさらず、つとめしいさを且つ成りて。

○書よむよりも名を買るに、いたづく今の文人は、書あがなふには價を問へど、名を買ふ爲には價を問はず。

○くるしき中にありとても、たのしき中にありとても、まことをかへぬ心こそ、文よむ人の心なれ。

## 學生 勉強、立身、教訓之部參照

○まなびのまど○たゆまずうまず○たゞ一すぢに○國をいで〻三年となりぬ○ちかひていでし○心はかたき○都にのぼるけふのかとで○父にわかれ母にうむき○こひしき國をあとにして○つとめはげみて○名をあげて○身をたて〻

○この靜なるふる里に、われは老いもとおもひしを、名利の韁にはしなくも、意馬は都にかけいでぬ。

○功名の念とゞめがたく、故郷を去りて都なる、學のみちに、はや三とせ、心をくだき身をやつしぬ。

○夜はふけていね朝はとくおきて、つとめはげむも國のため。



○螢あつめし窓の邊に、又ゆきつみて此冬も、つとめはげまむ文のみち。

## 軍人 戰鬪、勇氣之部參照

○皇國のために○弓矢とりて○あだ討ちきため○日のみはたれしたて〻○すゝみて退くことなかれ○むねにかゞやく名譽の光○きよき名のこすを心れこし○あだとりひしぎ○すめらみくにのもの〻ふ○みがきし劍○太刀とりはきて○たゞ一すぢに○あだの軍は○まつろはぬ國○末の世かけて○錦のみはた○秋のしも○君のみたてと○たふれてやまむ○駒なべて○白馬金鞍○國のみいづを○うちいだす筒の音○太刀ぬきかざし○國のためとて○身にれふせめ○筒のけぶり○死をも恐れぬ○心はかたきいさましく○男子と生れては○やまとだましひ○雄々しきすがた○都大路の春の日に、白馬金鞍いさましく、一騎かけたりものゝふが。

○ちまたのちりをひつめにかけて、一隊すぐるつるぎのひかり。

○老いたる母にかなしき妻子、あとに殘してかへりみず、いさみ進めるものゝふの。

○うなちを貫く彈丸ありとも、うびらに疵をばいかでかおはん。
○いよ〳〵とぐべし劒太刀、みがきたゆむな大和魂。
○肉は艸葉をこやすとも、屍は月にさらすとも、死してかひあるこのいのち。
○我おくれじときりひつゝ、くつばみうろへ河水に、ざんぶとのり入る二騎の武者。
○筆さしおきて劒をとり、ふみなげすてゝ甲をつく。
○こがねをとかす日かげにも、肌もさくるゆきの夜も、きみと國とをわすれぬぞ、大和男子が心なる。
○とりはく太刀の束の間も、君をわすれぬ忠義の益荒雄。命はをしまじ一度は、とてもかくてもしぬる身を。
○小敵と見て侮らず、大敵と見てまた怖れず、たゞりの任をつくすのみ。
○ゆめおろかにおもひてゆくなますらをの、つとめいりしみゆくべき道ぞ。
○山をぬくべき手力も、身にはおもはずさばかりの、猛きをやがて心として
ん。



○つゝのひぎはたえぬとも國をまもりの大丈夫が、心ゆるすなつかのまも。
○血汐にうみし腹卷を、よろひの櫃よりとりいだし昔をかたる老武者。
○秋水三尺光りぎろにすごく、精神一到事忽ちになる、ますらたけをのいさましさ。
○三尺の劒光氷は手にあり、一張の弓勢月は心にまどかなり。
○丹ぬりのさやの大太刀を、つか破るゝ迄うち叩き。
○君にさゝげし六尺の身、はた何をかはをしむべき。
○腰に劒あり秋の水、身に寶あり大和魂。
○嵐にきうふさくら花、ちるをゝしまぬ心こそ、御國に生れしものゝふの、めでたき心のいろなれや。
○むねにかゞやく勳章は、君と國とにまつろひし、心のまことの反射なり。
○風にも雨にもあらしにも、たゆまむものか君がため、我國のため守る身は。
○きゝつぐ人もかたりつぎ、いひつぎぬべくますらをは、たかきいさをゝつたふべし。

○人生まことに意氣を重んず、功名榮利に目をとめば、何かは事をなしうべき。

○彈丸雨飛の間にも、まもるは君が大みこと、瘴煙毒霧の中にても、いかでわすれん大皇國。

## 官吏

○君のみことをかしこみて○朝に立つ○大宮仕へ○心はさらにたゆまねど○つかさの庭に立つ時は○身に錦繡をよろひて○國をわすれぬまごゝろは○國のいのち○よき官人は國のたから○御國の安危に身もわすれ○さくらかざせる宮人は○九重のむくふかく○君がみかげをあふぎつゝ○雲風さわぐ世の中の、あらき浪路に取るかぢの。

○人はうらやむ玉樓の內、ゆめあたゝかに眠れるを、人はとがめぬ朝庭の上、春猶さむき色あるを、いかでか知らむ寒してふ、春は中々暖かにて、暖かげなる夢冷かなるを。

○むねにかゞやくほまれの光、肩にはになふ御國の安危。



○國のためには二つなき、身をなきものと、なしはてゝ、つかふる上に猶いかで、君がみためにまごゝろを、つくさんことぞねがはしき。

○朝には入る九重の雲井の庭の鳳凰闕、夕には出づ百敷の都大路の朱雀門。

○つくす心のまことをば、神ぞしるらんくまもなく。

○大路をやすく平らかに、はせゆく馬車にのる人の、心やいかに行路難。

○國のためにてますらをが、つかさの庭に立つからは、死をも恐れぬ鐵石心。

○國のためには身をわすれ、君のためには家をもわすれ、いりしむ人の心こそ、みくにをまもる力なれ。

## 商人

金錢、處世、勉強、教訓之部參照

○うつまの市○市人さわぐ○市にたちて○あたへやまたむ○よきあたへ○うりかふわざ○神代のむかしより○わざいうしみて○れこたりなく○れもひたくみて○わたらひの○心ほりくもけふの日を○さかゆる御代○富のみなもと○國の富○賤しき業といひしは昔○外つ國にれくる○たからゆたかに○國のため○あきなふ人

○うの目〳〵に世をわたる、心ほろさもれのづから、糸うる業に知られつゝ。
○よるひるわかず賑へる、市のすめきの様みても、榮ゆる御代のいちじるく。
○幸をかへける海山の、ふるき例よ是やこの、世のあきなひの初めかも。
○袖ふりはへて市人の、伴ひいづる道のべに、むふる卿葉のふかみどり、みどりにあけにいろ〳〵の、みのしろ衣うちかつぎ。
○かたみにてらひたちさわぎ、うりかふ見れば市人の、あきなふみちもやちまたや。
○心すなほにかたいとの、よりとよりくる客人の、情をつなぐあきわざや。
○つとめていりしもなりはひの、つらきみすぎを世の人は、たゞ貪ると嘲けりて。
○千町の田よりをさめくる、秋のみのりも何かせん、うりかふ人のなかりせば。
○はかりいてたるたなつもの、さちある秋のしるしとは、かふ人々は知るやいさ。
○海幸ひさぐ店先に、むらがる人もむき〳〵の、さちをかひにてかへるなり。



○綾に錦にさま〴〵の、いろあるぬのに商人が、心もさこりこもるらめ。
○世をわたらひの心うき、つらきしわざも忍びつゝ利にはわが身を忘れつゝ。
○國のためとてものひさぐ、よきあき人の心こそ、實にまさるたからなれ。
○たゞ世の人はあきなひの、むさぼるさまをあざけれど。
○うりかふわざは神代より、つたへてかはらぬみちぞかし。
○志かまの市にきてみれば、うりかふわざに市人の、のゝしる聲もかしかましし。
○よき利にむとて市人の、右に左にかけめぐる、姿ぞいともいとなきや。
○たからは得てもむさぼらぬ、心ぞまことに市人が、つゆわすられぬ心なる。
○をみさかにたるあきびとの、さはにあるこりめでたけれ。

## 農夫

○門田にたちて○みなわかきたり○みくさかりつゝ○かりほすいね○田うたうたふ○秋をまつ○鍬とりて○鋤とりて○馬おひくらし○牛おひく

らし○田にれりたつ○田子のいろしみ○草とる○草きる○水ひきて○みのりきつ○國のたからのうましいね○雨にきごかひあらしにさわぎ○新翠○うたふ田うたもあはれなり○ひでりにあひて○うちつれて○ひつぢ田○かきつ田○山のすそ田○わら葺つゞく○民の心のゆたかなる○萬歳の聲○めでたき秋の○とよどしいはふ○ほぎかふ酒○にひしぼり○秋風まちて○田わざも終へて○つどめてやまぬ○たゞひとすぢに○門田のをしねかりあげて、心のれもにやれろすらむ。○ひるのあまりのいとまなみ、小田の竹垣折かへし、よる〳〵繩のいとなみも。

○かりほさびしき雨の夜は、守る袖いかにひぢぬらむ、賤がうき身ぞあはれなる。

○雨にはひづち風にはやぶれ、れもひみだるゝ簑笠の、下に生ひたるうましいね、げに粒々はみな辛苦。

○苗代水にかげうつる、身こりやつるれほしたてし、いねは日毎に肥ゆけり。



○苗とるうたをもろ聲に、うたひつれつゝ植うるをみれば、れもしろげなる田わざかな。

○鍬とりあへず種をれろし、鋤とりあへず艸きりて。

○末はるかなる千町田に、秋のたのみをかけくれば、心もろへてまく種子（たね）の。

○艸かりはてゝたねまきて、水まく夏のつとめさへ、たのしと賤はうたふなり。

○畠に立ちては鍬の手やめず、田にれりたちては馬れひくらす。

○日でりつゞける夏の日を、あつさわすれてあけくれに、うらうちあふぎ神に乞ひ、佛にちかひて雨をぐいのる、心のまこと。

○門田のいねのみのりたる、穗波ゆたけきさまを見て、よろこびうたふ聲々の。

○やすむひまなきいたづきも、秋のみのりを得んがため。

## 工人

○うつすみなは○飛彈のたくみ○本たくみ○岩ほもとほす○人の力とれ

もはれず○あつき日もさむき日も○れくれずすゝむ○とる槌のねと○いそしみて○いきつきあへず○心をこめて○たゞしきみちに○れもひをこらし。

○うつすみなはの一筋を、五百すぢに千すぢにわりなして、みつばよつばの殿造り。

○只一筋に墨なはの、正しきみちをつゝめつゝ、御國のとみをはかれかし。

○ひきてまがらぬすみなはの、正しき筋をつたへつゝ、千代も絶にせじ此みちは。

○あつき日ねもすうつ槌の、たゆぬひゞきのねときけば、つとむるさまが知らるなる。

○かたきくろがねうちまげて、うつはにつくるわざみれば、人の力があやしきや。

○うつすみなはの一筋に、たゆまぬわざにすなほなる、たくみが心も且見にて。

○かたきをまげてわがれもふ、心のまゝになすわざは、人を教ふる道にさへ、



且かよひてもたふとしや。

○山をうがちて道となし、水をうづめて陸となす、人の力は天地に、れしかつものとやいひつべき。

○こがねをふくも綾れるも、ひとしく人の心より、れこすしわざのしるしなり。

## 漁夫 海濱、漁家、舟之部參照

○舟れしならべ○こげやこげ○波風れうれず○浦づたひゆく○磯邊に立ちて○あまのとまや○つりいとの○あくる浦邊○こゑうち合せ○浪のぬれぎぬ○沖つしまやま○かまめのむれ○いろべの岩○かわくまもなし○網ひく手さへ○夕なぎに○朝なぎにも○もしほやきけんいにしへの、にしきも空にほの〳〵と、けぶるや浦の夕なぎに。

○かすみこめたる夕なぎに、ひくや手繰のあみのつな、くりかへしつゝいさりする、海士がぞめきのかしましさ。

○ほす隙もなき海士衣、うき身の秋やわびぬらむ、あとなき波の波とめて、親の教ふる鹽道を、たかへでたどるあまの子や。

○さも心なき伊せの海士の、みるめかひなき身なれども。

○海士のたくもの夕けぶり、身をやくばかりこがれつゝ。

○聲うちかはし夕波に、こぎつゝかへる海士小舟、あすの日和の外にまた、もの れもふこともやなかるらん。

○釣のいとなみいつまでか、ひまもなみ間にあとつけて、棹さしなるゝあまな小舟、わたりかねたるうき世かな。

○須磨の浦囘の海人は、若木の櫻手折りつゝ、かすむなぎさにうかるなり。

○ほの〴〵立てる朝がすみ、ゆくてもみねぬ潮さゐに、伊勢をの海人の舟出する。

○木の葉の如き釣舟も、板の一重をいのちにて、八重の汐路をこぎわたる。

○伊勢をの海人が夕波の、うちとの山の月にうたひ、濱荻の風の秋になく。

○死ぬことを知らぬ生き樂、もとむとはなき舟人も、海路に年をつみてけり。

○月の出しほに舟うけて、天とふかりの影みつゝ、すなどる海士のうらやすさ、世をうみわたるとたれかいふ。

○かわくひまなき袖たもと、うき世の涙やかゝるらむ。

○水路百里のはてとほく、いのちをまかする一葉の、舟よりかろき海人の身や。

○幸のせかへる渚には母やまつらむ妻やまつ。

○海を入日のいろどれば、よせくる浪もかゞやきて、沖こぎかへるいざりぶね、たが詠にか入りぬらん。

○つなきあつめし網手繩、心ほうくも世をへつゝ、くるしき身をばいかにせむ。

○浪に心を碎きつゝ、風に心をさわがせて、いのちをのする木の葉ぶね。

○浮き立つ雲に心を碎き、末立つ浪にれもひをなやます。

○八重のしほ路をこぎめぐり、魚あさりする海人の子が、なりはひこうはあやふけれ。

## 舟人

舟、海之部參照

○みなれざほ○流れも早き川舟○舟わたせ○とまやのうちに○あしまによせて○袖ぬるゝ○たもとつゆけき○櫓拍子うろへ○かぢとりて○聲うちあはせ○浪路はるかに○入日をあらふ沖つ波○なぎたる海○嶋かげに舟よせて○かすむ海原○世をうみわたる○世のなみ風に○れうれぬさが○馴れても袖のぬるゝかな、八重の汐路のかぢまくら、苦うつ夜半の雨の音は。

○あけぼの白き河なみに、たかせさし下すみなれ棹、袖ふきかへす朝風に、うたふ小唄の聲さだて。

○こく櫓拍子に浪をどり、聲うち合す舟唄に、風もしろくひゞくなり。

○陸にはあらしのしまくなり、この島かげにふねよせて、うきねながらに世はすぎむ。

○かすみの袖のひまとめて、花の下蔭こぎゆけば、かひの雫もかをるなり。

○筑波おろしの身にしみて、水上しろき富士が根を、仰ぎて唄ふ舟唄も、聲すみ田川こぎのぼる。

○水に夕日のかげたちて、舟子が袖を吹く風に、玉をくだくる棹のつゆ。

○岸邊にさやく蘆村に、棹さしいれてながむれば、水上とほくかすみつゝ、人の望みのはてなきに、やがても似たる流れかな。

○白帆かけたり夕なぎの、入日をれへる蛋小舟。

○潮は早潮風は早手、怒濤逆まく迅雷暴雨、大海原に木の葉の舟、いのちをしまぬはやりをが、

○雲はれて月さしいづる青海原、銀波を碎く舟人。

○月に合するかいの手に、一聲たかきいざりうた。

○風にまかする浪枕、ゆめは千ひろのわたつみの、底のみやねやめぐるらも。

○妻がぬひつるぬのこさへ、あら潮風にふかれては、いろばかりかはたてぬきの、糸亂れたるやつれかな。

○我ふる里は千里の外、風のまに〳〵葦の葉の、舟に命を任せつゝ。

○蘆間のとりのうきまくら、ゆめもとろかすみなれ棹、立つ瀨はかなき世渡りや。

○あしまによするさゝ舟の、棹のひゞきにねむりぬし、鷺の一むれとびたちぬ。

○世をうみわたる人はみよ、浪風あらき大なだに、木の葉に假たる舟うけて、
れそれずわたる舟人を。
○よもぎが島に生くすり、もとむとはなき舟人も、うみぢにとしは老いにけ
り。

## 獵夫 狩、山嶽之部參照

○鹿れひくらし○兎れひて○さつ弓たばさみ○仙人のすみかたづねて○
れひ下すけもの○山彦○こだまこたへて○山づみのむらぶこゑ○矢はげ
て、○つゝとりて○眞弓が岡に○山ふみならし○みかりたつ○谷のほりみ
ち○矢さけびに○谷くらく○山ふかく○ふみまよひきぬ
○木ぶかき山の山かげに、まぶしさしつゝけもののまつ、獵夫の身よいかにき
く、しかのねれくる秋の風。
○眞弓が岡にさつをらが、うちだすつゝのねも近く、うらとぶ鳥の影もなし。
○雪ふる路をふみわけて、猪かりいだすあらをらが。
○こゞしきみちをふみわけて、嵐にもせぬ雨にぬれ、けものに交る朝夕の。



○山わけ野わけとるつゝの、ほりくもたつるかまどの烟、消えぬまでなる命
かな。
○情は人のまことなり、まことを捨てゝ朝夕に、いけるをころすあさましさ。
○森の下かげゆきくれて、肩なる小炮奥山に、得物まつまのかりまくら。
○げにあさましき世わたりや、花に鳳のなさけなき、業を日毎のつとめにて。
○あられふりしく奥山の、菅のひろ葉をふみしだき、風に鹿笛ふきなせば、こ
たふるこだまのこゝろ凄し。
○まゆみがをかの矢さけびに、うらとぶかりのかげもなし。

## 樵夫 山嶽之部參照

○眞柴苅る○山人の○柴人の○谷のほそみち○山のうばぢ○なげきこる
○こりつむわざ○妻木つむ○月やどる椎柴○きこりのうた○かへる木こ
り○春は花をもをりそへて○秋は峯の月をながめ○朝な夕な○杣木こる
○丁々と斧のひゞき○山にひゞきて○日はくれて○みちとほみ
○朝夕となくわけ入りて、こるや眞しばの重みにゞ、やがてわが身の老をし

る。

○たかねのさくらをりうへて、たきぎやれもき春の柚。

○かへるやいづこ峯の雲、もすりにわけてれたちこちの、たづきもしらぬ山中に、れぼつかなくもたぞひとり。

○たかねの眞柴苅りくらし、かへる山路に日は入りぬ、家路はとほし子らやまつ。

○とりし眞柴もれもりつゝ、嵐をれひてかへるみち。

○星の光に朝まだき、共にたちいでし峯の雲、夕ぬる谷にかへるなり。

○たかねにかりしまきもと木の、つゆをれくりし月影も、谷間にれちてみちくらし。

○うき世の中にすむ人は、たれもなげきはこるものを、れもひかへしてれもふにも。

○かよひなれたるみちも猶夕べはたぞる谷のおく、てらせる月もなきころは。

○日はゝやくれてたくやまの、木の下くらき苔のみち。



○いきつきあへず○車ひき○ひくうきけむり○霧夜のちまた○柳のかげに○車の○めぐる車の○世のなりはひに○ほる車の世の因果○いうしもわざ○汗となながれて○身をくだきつゝ○いそがはしく○まつしくら○足にまかせて○ひとすぢに○力のかぎり○冬の夜も○夏の日の○霜をふみ○嵐にむせび○雨にあらはれ

○息つきあへぐいたづきを、れもへば車の軸にさす、うれやゝがても身の油。

○ひくや車のいとまなく、めぐりてやまぬ世の輪回、きのふのりしもけふはひく。

○冬の朝げも汗あせて、ひきゆくほどこそ寒さもしらね、巷に立ては忽ちに、こほるさむさにこゞえつゝ。

○志も夜のかねの聲さえて、柳のかげにさびしくも、一だいのこる人力車。

○家にはつまやまちわぶる、子やうちもれてうゑになく。

○世わたるみちもれほかるを、れもへばあやし我ながら、かゝる道をばなど

たぎる。
○めぐる因果か世の中に、わたりぐるしき道とめて、汗あはぎつゝ車ひく。
○夏の日ながも冬の夜も、たゆまずうまずひく車。
○ながるゝ汗をふきもえず、いきせきゝらしてひく車。
○わたるにかたき世の中を、めぐる車のいそがしき。

## 遊女

○仇まくら○仇なみのよるゝ〳〵○うき川竹の○身を志づめて○大ぬさのひくてあまた○よるゝ〳〵かはる枕○身を浮草の波にまかす○ながれの末○いつとかまたも○ちぎりかひなき○世をわたる○まかする身○よるべなぎさの捨小舟○あけくれもふ○いかになりゆく○はかなきいのち○身を浮舟のうかれつゝ、よるべも浪のみをつくし、身をつくしてもかひなき。
○身を浮草のけふはまた、かしこの岸に根をよせて。
○ゆきかふ人を明くれに、送りむかへて世をわたる、關守の身に似たるかな。



○れもひの淵の底ひをば、よどもと人は白波の、消ぬかごとの身ぞつらき。
○よるゝ〳〵よする仇浪に、まつせはてたる浮草の。
○昨日の端山けふのみね、うらも定めず行めぐる、行方やいづこ秋の雲。
○いつうかむ瀬に身はよらむ、よるゝ〳〵よする仇浪に、まかせはてたる捨小舟。
○人のなさけも宵々に、かはるを常の仇浪に、枕さだめむかたもなし。
○よ毎日毎にくる人の、情のかずはさはなれど、まことを運ぶ人はなし。
○いかにせよとの身の末か、いきてかひなきわがいのち。
○身をうき草の根をたえて、よるべも知らぬ行末や、さうふ水にもまかせにで。
○よるべさだめぬうきくさの、たゞよふ身こそはかなけれ。

## 藝妓

吟詠、舞踏之部參照

○たちまふ袖○うたひはやして○糸竹のねと○みやび心の○うたれもしろく○三つのをごと○ひきつれて○誰に心をよするらむ○さはらばちら

んけしの花○たもとゆたかに○袖うちふりて○足拍子○かきならす○ふきらなす○つまびき○人まにとよする秋の波○なよ〳〵か○たをやか○志のびねにかきならす○聲うち上げて○酒さしすゝめ○金燭の光まばゆく○わらひさゞめく○なまめきたてる女郎花○まねぐ袂○つゆとみだるゝ人心○なさけのたね○心迷はす一ふし○つやめく聲に○立ちまふ袖もれのづから、なびく姿をあらはして。○かへす袂に招かれて、つゆとみだるゝ人心。○うたひはやせる聲々は、なさけをこぼすおらつゆの、さはらばきえむけはひなり。

○うたひはやしてたちさわぐ、宴の中にたちまぢり。○ほのかにうたふ一ふしは、花にさへづる春の鳥、しづかにかへす衣手は、柳にやどるよはの風。○まふや少女の袖ふりて、こゑもしろみうたふうた。○柳の姿うるはしく、まふや胡蝶の袖かろく、ひるがへしたる花ふぶき。○糸竹金石笛つゞみ、ふしもしろきうたにつれ、袖をかへしてまふすがた。



○酒たけなはに舞ひめの、立ちまふ袖の花の香に、人の心の春ふかし。

## 不具 憐愛之部參照

○あはれなる○めなし鳥○くちなしのはな○みゝなしやま○いはでの森○御代のひかり○學の庭にれりだつ○神代もきかず○心をみがく○みるめよりげに○言の葉の花ひらく○ふみのはやし○しをりあるみち○みるもなみだ○生みにしれや○うだてし人○なさけのつゆに○をしへの園に生ひたてば、目なし蚓さへ花さきぬ。○浦のみる目はからずとも、龍のあぎとの玉はえむ。○折にふれつゝまちをしも、月ゆき花をよろにきく、身こうなかゝのどかなれ。○世にあることのさまゝゝを、見ぬにつけてはなげかねど、きけば流石にあはれにて。○光ある代にうまれきて、指もてふみをよむからに、心のまことはくらからず。

○世の事ぐさをいとひつゝ、山にさへいる人あるを、見ぬや中々さちならむ。
○かなづるものゝ音によりて、昔のことをしのぶなる、わざをせめての慰めに。
○さくゝちなしの花のいろ、敷への庭にうゑられて、言葉もいつかしげるなり。
○いはでの森の下かげに、さくゝちなしの花のいろ。
○杖にすがりてゆく人の、足はなゝめにまがつみの、身にまつはりしあぢきなさ。
○みぬめの浦の浦人も、たまひろふべきみちを得て。

## 乞食 憐愛之部參照。

道になく○うゑになく子○すてられてつぐれの袖○衣もなしに○霜をむしろ○艸の上に○かたね○かへりみるらむ○つゆの床にねきふして○草の夜床○うきになれたる○やぶれ笠○やぶれぬのこ○涙にくちし袖○つらきをしのぶ



○露のめぐみを玉鉾の道にゆきかよふ人に請ふ、かたねのこゑは虫のねか。
○やぶれ布子に破笠、かくす面にふりかゝる、涙はやがてつゆしぐれ、ぬぐふたもとともあらばこそ。
○行かふ袖にすがりつゝ、なくねもほろき野べのむし。
○うゑにたゑたる手足をば、のばさむ家もなくばかり、あはれかひなきすくせ哉。
○柳に月の影ふけて、ちきたの霜になく聲は、うゑにくるしむかたねかや。
○犬のもろこゑすさまじき、冬の夜すがらさまよひて、あはれをさけぶかたねの子。
○今はうきにもなれし身の、耻もなさけもわすれては、かたねする身もなにならず。
○門邊に立ちて飢になく、かたねのこゑのいまはしや。
○ゆきゝのたもとにすがりても、めぐまぬ人し多ければ、ぬかづくことの中々に、いたづきとなるばかりなり。
○霜がれわたる夕ぐれに、なく虫の音のうれならで、かごとがましくつぶや

くは、あはれをよべるかたぬなり。

## 盗賊 冬夜、木枯、冬月之部參照

○みどりのはやし○もらなみ○たからむさぼる○しれもの○丑みつどき
○みたり四たり○ひろみて入りし○太刀ぬきもちて○ゆめわどろかし○
夜中ばかりに○木がらしある〻○吹く風さむき○すごき冬の月○月影沈
む○追ひゆく人の○柳のかげに○たゞずむ人影○夜半によせくる白浪
○木の葉もねむる丑滿の、星の光も影くらき、やみにまぎれてぬりごめの、や
じりをきりて忍び入る。
○夜半によせこし白波は、かへりて後ぞ諸人の、こゝにかしこに立さわぐ、
○木がらしある〻闇のよに、聲をひうめて何ごとか、さゝやきかはす柳蔭。
○われのれ盗人のがさじと、わさふる小手をうちはらひ、やみに紛れて逃げ失
せぬ。
○すは盗人よとさわぐまも、あらなは早くとりもあへず、一類みながら高手
小手。



○慾にあくなきぬす人が、毒及きらめくやみの夜に。
○垣根とびこゆ練塀の、忍びがへしをゝどりいで、一目散に逃げうせぬ。
○折らばやとおもふ一枝の、花の香とめて闇の夜に、心をちゞにちらしつゝ。
○一たび道をふみたがへては、心の月も光なく、闇よりやみに迷ひつゝ、くら
きが上にくらきをたどる。

## 隱者 幽寂之部參照

○世をいとふ○かくれすむ○われくやまの○いほりしづけく○山下庵に○
柴の戸○人もこぬ山かげのいほ○世をそむく○世をすつる○うき世のそ
とに○竹のあみ戸○小柴垣○世に埋もる○人にしられ
ぬ○ありとしられぬ○かくれがに○世すて人○こけのころも○あかざの
あつもの○麻のふすま○むさぼらぬ○みやまのわれく○かすみをきて○心
をすまします。
○人もとひこぬみやまの奥に、ひとりさきつゝちるさくら。
○底ひ知られぬあをうな原に、千とせのかみよりひかれる眞珠。

○日西山に傾けば遙に京洛をおもひやり、風松が枝をふく折は、つねに心を渭濱によす。

○世をあぢきなくおもひ入る、深山のおくの柴のいほ、みねにのぼれる月影の、きよきをおのが心にて。

○山下かげの柴のいほ、たれとふ人はあらねども、春はみやまの花にうたひ、秋は尾上の月をめで、心のどかに世をおくる。

○木の葉にうづむ山かげの、板やさびしき柴の門、いかなる人のかくれかぞ。

○八十島遠くのがれきて、世をうみとしも思はねば、心にさわぐ浪風もなくてあまたの年もへぬ。

## 外人

○外つ國人○から人○こま人○西の國人○四海はいづれも兄弟（はらから）○むつびかはして○心をよせて○世界の平和をたもつべし○國はさまざまわかれぞ○、心はともにまことあり○兄弟とちぎりかはして○文明開化○文物進歩○日にけにすゝむ○世のありさま○わたくし心○心なごめて



○おきつ島山たつなみの、おとかぜばかりせめつゞみ、うちとよもして博多潟、唐人多くよせくめり。

○誠を推して交らはゞ、異國（ことくに）人もなどてかは、わが兄弟とこゝとならむ。

○亞細亞、亞米利加、歐羅巴國こうかたみにことなれど、善をよみして惡を憎む、人の心はみなおなじ。

○異國人とへだてつゝ、何かうとまむ今日のこの、文明開化も大かたは、りのもたらしゝめぐみなり。

○外つ國人をもへだてなく、わが兄弟とむつびつゝ、世界の平和をたもつべし。

○朝日に匂ふ山櫻、やまと心の花の香に、外つ國人をも醉はしめよ。

○事に善惡（よしあし）の別（わかち）はあれど、人に內外（うちと）の差別（けぢめ）はなし、よきは取るべし、惡きは舍（す）てよ、只我國は我國の、おのづからなる道あれば、能く其道をかへり見て。

## 富豪 金錢、貴紳之部參照

○とみさかえ○たからあまりて○白馬金鞍○門前市をなす○めざましく

○冬をもしらぬ○あつさをよろこぶのすみか○あたゝかき毛衣○にしきのたもと○あやのうで○うめしふりうで○榮華のかざり○青聰肥にて○玉のかざり○眞玉白玉○うるはしく○たとへむものもなく○かゞやくひかり○れもひあがりて○兩驂れごりて車轔々○世わたるみち○平らか○浪もたゝねば○風もふかず○たかきうてな○雲に入るたかどの○いろ〳〵の衣○願ふ事成らぬはなく○思ふ事とげざるなし○心をごりて○朱頓の富も○五斗の米だに○れもねる人の○ぬりごめに○すきをきはめし家作り○めでたやな

○青牛白馬車はせちがひ、金鞍青衣人去りきたる。

○金鞍は連りて門市を爲し、娥媚むらがりて堂に集る。

○龍は寶蓋をふくみてあさひをうけ、鳳は流蘇を吐きて霞を帶ぶ。

○青聰肥にて金鞍ひかり、龍腦散じて羅彩かをる。

○たかやすしづのいたづきも、はたれる子らのいとなみも、知らでねむるか、にしきのしとね。

○位は雲井の上をきはめ、黄金は北斗を撑へても、浮べる雲のさだめなく。

○錦のふすま重ねつゝ、さむさをしらぬあで人に、見せばや賤があさごろも、のきもる月をしも氷る、袖にやどしてぬるさまを。

○生來よきまゝ半行のふみ、たゞ黄金もて名譽を買ふ。

○富より得たる不幸こう、不幸のうちの不幸なれ。

○富よりにたる幸福は、一夜の程もたのまれず、心より得し幸福は、千とせをかけてうごきなし。

○雪にもはえある黒羽織、わたあたゝかくきる人の、身には冬をも知らず顔。

○華奢をよろほふ生地姿、心のいろもかつ見にて。

○不義の富貴はうかべる雲、槿花一朝のいろあはれ。

## 貴紳 富豪之部參照

○たふときすがた○たかきくらゐ○人のたねともれもはれず○たぐひなき○あやをりなせる衣の袖○仰きて敬ふ○いつきまつらふ○なびきよる○星の位も三臺の○たかき家居○ほまれは千世に○かぐはしき名○絲にまじる紅のかくれぬ名○れのづとうなはる威儀堂々○けがれぬすがた○

きよきすがた○けだかき○たれうらやまぬ○いつきかしづく
○威儀堂々と立つ人の、けだかき姿はれのづから、たかき人とぞしられける。
○錦をかざる袖袂、さらでも高き姿をば、ひかるばかりによりほへり。
○二葉よりかぐはしき、梅檀ならぬ人の身の、天よりうけし位地門戸。
○たれうらやまぬ人かある、れのづとうなはる威儀風彩。
○人のかざみとれのづから、この世にいでしうま人の。
○うなはる威儀の雄々しきは、怒れば鬼神もれぢれうれ、笑へばみつ子もなれむつぶ。
○匂ふや花のいろ衣、たもとゆたかに立つ人の、きよき心はかほばせの、眉のあひだにうごくなり。
○れのづからなる威儀堂々、かざらぬ姿も何となく、いとうるはしく見にけり。

## 貧賤

悲哀、處世之部參照

○まづしく○あはれにも○やせさらぼひて○みるかげもなく○朽ちにし板戸○鳥追笠も色ふりて○麻の狭衣○あかざのあつもの○むしろ屏風○涙のたね○世にからきめを○みるもなみだ○きくもなみだ○世にすてられて○わびはてゝ○さむき夜すがら○あつき日すがら○あざみきらはれ○鳥追笠のいろふりて、見るめあやしき荒妙の、袂につゝみあまりつゝ、やがてこぼるゝ身のうさや。
○すきまの風も寒き夜の、大路に立ちて物ひさぐ、賤をしみればげにやげに、身はならはしのものなりけり。
○れほひかねたるつゞりの袖、肌にさむき秋の風、かたしく袖につゆちりて。
○身によきゝぬをかざらずも、心に錦をかざれたゞ。
○口にはうまきをくらはねど、心にやすき味ひあり。
○一字千金のふみよめば、とみはます〳〵そらゆく雲。
○まづしき身こそうれしけれ、われもし富みてあらむには、かくまで心をみがゝむや。
○軒端かたむき屋根やれて、ふせぐにかたき木枯の、うき世の風も身にぐしむ。

○富貴にほこる人の子の、すがたを見つゝうらやみて、われにもかくとせがむ子の、心をくめば人しれず、胸は千すぢにさかれたり。

○障子やぶれてかべおちて、見るかげもなきやどなるを、いかにとゝへる人もなく、たゞ宵々の月の影、心ありげにさすばかり。

○あけなば何をかてにして、からきいのちをつなぐべき、はかなき世ぞとれもふにも、こよひの月のかげおちて、西のみ空に消ゆる時、あはれわが身もさうへかし。

○しばし浮世をよそにして、ねむらむものとまどろめば、ゆめのうちにもかゝらき世の、はかなき影はうつりきぬ。

○しばしはうゑをしのびてよ、なく汝よりなげかるゝ、母が身こそは死ぬべけれ。

○あけのかねつくれとすなり、きのふはことに紛らして、かへしやりたる市人の、けふを限りとはたらむを、いひとゞむべきすべもなし。

○夜やふけぬらし犬の子の、おやをもとめて軒の下に、さまよふ聲のきこゆなり。



○はぐゝもれやはありながら、うゑになかするみどり子の、ね入りしかほをながめても、いとゞすくせぞあじきなき。

○父はかぬちのつちとりて、火中に身をばこがすなり、母は水仕にやつれては、日毎夜毎に世渡の、からきになくも知らずして、こま竹馬とうかれつゝ、遊ぶわらべぞかなしきや。

○さくらは咲きぬ梅ちりぬ、うぐひすきかむ友もがと、さゞめく人よねがはくは、一日歩みの道かへて、賤がふきねに春知らぬ、青人艸をたづねみよ。

○月中空に影すみて、人あしたにしさよ中に、貧しき町をきてみれば、まだねもやらずおのがじゝ、のきばにいでゝいりしめり。

○貧しき中の友どちは、心の富みのたからなり。

○細き烟を立てかねて、賤がうみをのよるまでも、世わたるわざこう物うけれ。

○麻の狹衣袖せばみ、やつれはてたる面影に、つゝみかねたる涙かな。

○塵の苧に清き井の、水まきちらす賤の男が。

## 英雄 學問、處世、教訓之部參照

○雲を起して○雨をよびて○池中のものならじ○たけ〳〵しくも○鬼神のふるまひ○電光石火○ふるひおこりて○世をなげく○世のために○おろかに見ゐて○たつのあぎとの玉もとれ○月の桂も折るばかり○天地をうごかす○風に乘り○龍に御して○千とせをてらす功名の○亂れたる世の英雄は、治まれる世の姦賊とかや。

○賢哲は閑靜のところに身を置き、英雄は風雲の裡に產す。

○氣は虹霓を吐きて天地を呑み、辨は大河を決して世界を覆ふ。

○あふぎて君がいさをしの、埋れぬ名をしたふかな。

○風に乘り龍に御して、宇內に馳驅するありさまは、人のしわざとおもはれず。

○鬼神もおもうるゝ剛膽の、天地をうごかす大手腕。

○たふれてのちにやまむのみ、なにかはなかばに梓弓の、ひきかへさむやわが事業。



○世はかりごものみだれより、みちはやぶれてすくふべき、神の力もつきはてぬ。

○劍に杖つきて立つ大男兒、叱咤す風雲濛晦の中。

○はらわたを斷つ慷慨悲憤の淚、はふりかつるをはらひもやらず、神にちかひてふるひ立つ勇氣勃々義氣凜々。

## 烈士 勇氣、國體、君臣之部參照

○たゞしきみち○ひとすぢに○まげぬ心○やまとだま○おもひこみたる鐵石心○忠肝義膽○心ひとつに○死をも恐れぬ○かたきこゝろ○いさをしたてゝ○ほまれは千代に○つきぬ績○名を竹帛にたれむ○朝日に匂ふさくらばな○なにおそれむや○かへりみもせぬ○國のため○君のために○大君のまけのまに〳〵○さくらと匂ふ○心の匂ひ○名は末代○不朽の名○いひはやさも○國のいしづゑ○日本のをのこ○日本刀のひかり○すさまじく○ちりてこう○月のひかりも○日月とてらす○海のうとまで○めさましや

○たわまず折れぬ利心(とごころ)を、あやふきことにあふごとに、みがくぞやがてものゝふなる。

○あまたのてきのあるものは、まことの友も亦多し。

○瓦となりて全からんより、玉とくだけて世にしたはれん。

○ますらたけをにあらざれば、ますらたけをの心を知らず。

○かたき心の一徹は、いはをもとほす桑の弓。

○家をも身をもわすれては、國に君にとつくすなる、心のまことぞたぐひなき。

○かたきにあたりてひるまぬ心、つよきにむかひて恐れぬこゝろ。

○從容笑うて死にこうつけ、魂魄いかでか賊をゆるさむ。

○ひとやの裡のゆめさめて、赤き心をてらす月。

○國のためには命も何ぞ、たゞわれに老母あり。

○世道すたれて忠臣たふる、臆をたつ慷慨悲憤の聲。

○從容死につく落花の下、血しほは櫻をうめて赤し。

○君のためにとつるぎ太刀、みをすてゝこそ名はのこれ、

○てる日の本の花のひかり、やがて世界にかゞやかさむ。

○曇らぬ心をてらしつゝ、御空に月のすみのぼる。

## 仙人

○仙家の酒○千代もへぬ○山路のきくの露○ちりの外なる○世はなれて○春を常なる山窓○ときはの春○桃のみなもと○雲を呼び風に乘る○千代の春○山ふかく○心すみて○若の衣○清風朗月○きりを吐き○雲を起し○飛行自在○霞を吸ひ露をねぶる○老はず死なずのいく藥○瓢の中に身を寄す○心にまかす○不老のくすり○雲とぢて○藥をとりに去る○きりたちこめて○雲に臥し風に眠る○雲と風とをすみか○雲の通ひぢ○霞のしとね○空ゆく雲○わたりゆく○泉聲きよく○松風心を澄す○仙洞ふかくして

○誤つて仙家に入りて半日の客となれば、舊里に歸つて七世の孫にあふとかや。

○心にまよふちりもなし、天つみ空をたてぬきに、とびかふ道を得てしより。

○うはのそらなる道ふみて、雲井はるかにゆきかよひ。
○霧にうそぶく仙人が、袂にうるほす菊のつゆ、うちはらふにも千代やへむ。
○こゞしき山の岩床に、吹き來る風もかぐはしく、松桂の枝をひきむすび、流れに耳をあらひつゝ、世をすてはてし仙人の。
○瓶には溪間一滴の水を納め、鼎には青山數片の雪を煎る。
○崖よりおつる千丈の泉、林をめぐり石をめぐり、岩に碎けて花圃に入る。
○風は花を吹きて空うらゝかに、雲は窓をめぐりてうでに入る。
○雲は雨を送りて山靜かに、風は塵を拂ひて窓淸し。
○桃花流水とこしなへに春を占め、鶯歌蝶舞常に、日のくるゝことをおそし。
○流めぐりて山百轉し神仙武陵の山ずまひ、花とこしへの春のいろ。
○煙むなしく雲ちりて、木の葉の袖も千仞の、崖路の上にみゆるなり。
○湖上帆は月をのせて風千里、洞前人はかへりて鶴一雙。
○つばさや得たる心ぞかろき、わが身は空にやかけるらむ。
○北に峨々たる靑山あり、朧月松閣の中に映じ、南に寂々たる瓊門あり、斜月竹竿のもとに透けり。



○三十六宮めぐらす大庭、眞珠の砂瑠璃の岩、黃金の上を立ち列ね、長生不死の日月も、絶えずめぐりて輝けり。

## 衣服

○みけしの袖○むらさきの衣○あけのころも○にしきの衣○月卿の花ずり衣○花のたもと○毛皮の外套○初花ぞめ○しのぶのすり衣○天の羽衣○まうでかたしく○せみの羽衣○羅紗の織物○ゆかた姿のすゞしく○法のころも○雲の羽袖○つるの毛衣○袖うちふりて○尾花がりで○かとりのきぬ○大口はいて○洋服のかいぐるしくも○きら〳〵しく○さしぬきて○水干姿○狩衣のたもとしぼりて○おるや連理の枝の上に、をしの姿をあらはして、君がみけしとたてまつる。○貴族ねずみの縮緬に、繻珍の帶のなりふりも、世にすぐれたるさまかたち。○花ずりごろもいろはにて、夕日匂へり袖の上。○ありしむかしを忍ぶずり、みだるゝいとのたてぬきに、にしきをかざる故郷の。

○こき指抜も床しくて、昔忍ぶのすりころも。
○朝日に匂ふ花ごろも、いろも香もあるたちすがた。
○そでもゆたかにたちしきぬ、君がみけしとたてまつる。
○むらさきすりごのはかまつけ、こきくれなゐの衣きたる、人の姿のうるはしさ、花にたとへばもふさくら。
○まばゆきすがたにあらねども、きよげにつけしきぬはかま。
○こけのころものさむげなる、人の姿ぞはかなきや。

## 飲食 宴會、菜の湯之部參照

○つみ入るゝ○このめのかをり○松風の聲○春の木のめ○うま酒くみて
○木のめにて○うさわすれ○酒ほがひ○とよみき○うきもわすれて○肉
のはやし○酒の泉○つれ〴〵と人とはぬまの○ゆきのあしたも○月の夜
も○海の物○山の物○里に名だかき野菜とて○さくらたび○鯛ひくあみ
○すゞきのなます○入江のすゞき○鮎子煮びたし○小川につりし魚煮て
○盛り爲して○菊のさけ○金翅の鳥の肉ならむ○舌うちならし○よりね



つゝ○箸とりもちて○くむや今年のにひしぼり○灘の酒○茶はかぐはし
く果子あはし○綠の酒○一壺の酒○佳肴のはやし○花にくみつゝ○月に
むかひて○二つぎ三つぎくむ酒に○霞をくみて月に醉ふ○盃にくむ春が
すみ○宇治山の春のこのめ
○軒端をてらす月の影、くむ盃にやどるなり。
○裏の畠の芋掘りて、地酒やくまむ君と我。
○瑠璃の大皿、黃金の鉢、肉うづだかくもりなして。
○肴は君にまかすべし、酒は町までわれゆかむ、いざこの月によもすがら。
○庭の紅葉をかきよせて、酒あたゝめむ人もがな。
○笑ひの波を盃の中にたゞへてとりかはす、酒の宴のたのしさは。
○一壺の酒はともしくとも、この鮮なる海の物。
○青苔の上にまとゐして、月にくまばや菊の酒。
○肴は庭のさくらばな、酒はうすけれど樽にみてり、いざ木の下にまとゐし
て、春の心をくみてまし。
○李白が一斗の盃に、匂ふや詩腸の花紅葉。

○七人がめでし竹の葉の、つゆのなさけの醉心、さめずは千代もへぬべきを。
○のめば心は春めけど、かほはもみぢのいろにいづ。
○吉事にのめばさかゆといひ、又まがことに酌みかはしては、さけてふ名こりをかしけれ。
○美酒は泉の如く、佳肴は林に似たり、立ち舞ふ袖に春かへり、うたふ春には月すめり。
○庭にみのりし果實を、枝ながら盛る塗盆の、蒔畫床しきあるじぶり。
○きのふの雨に釣り得たる、前の小川の鮒と鯉、こよひの膳にのぼりきて。
○影さやかなるこの月夜、酒なくてやはよし酒あるも、また肴なしいかにせむ。
○君が料理のこのさかな、金翅の肉とはこれならむ。
○いさめの道は多けれど、酒をば殊に戒めて、邪淫妄語と同じとし、亂れ心の花かづら、くるしきことをますといふ。
○月に酌みては千古の友と語ふべく、花に酌みては萬斛の憂を滌くべし。
○酒てふ星のあるみれば、空もさけをばめでぬらむ、酒の泉のわくからは、地



もまた酒をこのむなり。
○酒の德を知る劉伯倫、酒の功をさとる白樂天。
○浮世のがれて詩にかくれ、家園をわすれて酒に伴ふ。
○海の得物を鱠とし、山の得物をあぶりつゝ、仙家のむまざけいざくまむ。
○鰭のひろもの庖丁の、巧みのみかはかぐはしき、言葉の花もとりうへて。
○つくす山海のもてなしに、いたりつくせる心もみねて。
○かをりゆかしき木のめにぞ、心もいとゞ匂ふべき。
○庭のはなれの閑室に、ほのかにたてる茶のけむり。
○玉露の味のかぐはしく、しばしはうきよもわすれけり。
○枝ながらなるくだものゝ、あぢはひふかきもてなしに。
○くみかはす酒のうすからぬ、なさけはいかゞむくゆべき。
○浦にあざりし海のもの、山につみにし果物に、君がなさけをとりうへて、ねこうあぢはひつくされね。
○にしきをかざるさま〴〵の、うつはさへ世にたぐひなく、心つくしゝこのうたぞ、何にたとへむうれしさを。

## 宴會　飲食之部參照

○月にくも酒○れもしろの宴（うたげ）○花の下のまとゐ○柳のかげに○むしろ開きて○くむや霞（かすみ）は酒のこと○さかうたげ○葡萄の美酒○夜光のさかづき○とり〳〵に○くみかはす○かたむくる○夜すがら○うるはしく○菊のさけ○酒池肉林○うまきあつもの○醉心地よく○うたひはやして○のみあかす○玉山たふる○陶然として○月をうかべて○花ちりかふ○王郎の舞をなす○劒をとりて○ざれうたうたふ○つゞしりうたふ○口々にうたふ○興も夜もいとたけなは○月のひかりもさしうひて○うたひつれて○聲はり上げて○狂言れもしろく○あざやかなる魚○心あひたるどち

○一夜うたげの花むしろ、君と初めて相見つゝ、さしかはしたる杯の、つきぬなさけの言のはに、我心地よく醉ひにけり。

○あはれもふかき花のかげ、いざ夜とゝもにかたりつゝ、東雲のあけゆくまでもうたげせむ。



○今宵の月にいざくまむ、春をかもせる灘の酒。

○よにたぐひなくれもしろき、けふのうたげよかたりつぎ、いひつぎゆきてながらへむ、わがよのかぎりたのしまむ。

○酒たけなはに宴たけて陽關うたふまずらをが、腰の劍にひざきあり。

○とほく故郷をながむれば、雲漠々と口々に、うたふもをかしきよるのさま。

○糸竹の調べ聲ふけて、さす盃もかさなれば。

○うらゆく月の盃に、みちたらひたる影うけて、くむや千とせのきくのさけ。

○酒はみどりなり鸚鵡の盃、歌は朗かなり鳳管のうち。

○高歌酒は闌なり花のちる夕、紗窓月はなゝめなり風の來る時。

○洞簫聲は絶えて月明かに、花下人去つて風れももろに吹く。

○百年三萬六千日、一日三盃をかたむくるも、十萬盃にすぎず。

○清風明月一錢を要せず、玉山自ら倒る人の推すにあらず。

○漢に變じて春酒とならば、麴もて糟丘のうてなをつかも。

○青燈くらく夜はふけて、肴のこらず酒つきぬ。

○盃とりて月にむかへば、影とみたりになりにけり、我はうたへど二人は和

せず。

○我うたへば月たもとにあり、我まへば影又亂る、れもしろの此夜や、樂しのこの夜や。

○人生五十只これゆめ、醉生夢死の世の中は、只ゑひてころくらしてめ。

○一つきにして心をはるけ、二つきにしてうさをわすれ、三つきにしては道に叶ふ。

○一席の傲遊うも幾萬金ぞ、舞袖翻々として五雲たなびき、絲竹洋々として、梁塵飛ぶ。

○金燭てりてひるの如く、酒池肉林の大酒宴。

○物のねいろのをかしさに、ます〳〵めぐる盃の、醉にすゝめばいとゞなほ、さながらわれをわすれつゝ。

○嚢中錢ありいでや君、この花かげにさけかはむ。

○葡萄の美酒をくみかはし、興闌にして王郎の、舞れもしろき月の宴。

○人の心のともすれば、亂れがちなる笹の葉の、つゆもうけじとれもひしを、君がめぐみの杯は、さすがに強ひてもいなみにす。



○花の木蔭にさけくみかはし、ゑひのすさびによむうたの。

○ちるか正木のかつらぎの、神のちぎりの夜をかけて、月の盃さす袖も、ゆきをめぐらすたもとかな。

○いざ酒かはむこの月夜、砧のれともにむしのこゑ。

○三十六旬一夜のこゝろ、琴詩酒の客千家のれもひ。

○十二街頭ひとしく萬頃のしもをふみ、千萬の家々各一團の月をえたり。

○とり〳〵うたふさかづきの、中にもやどる月のかげ。

○花にくみかふさけのあわ、かろくきてふけ春風よ。

## 文學 文人之部參照

○心のはな○文のみち○文のはやし○ふでのはな○すゞりのうみ○筆の句ひ○やまとにしき○からくれなゐ○金玉の聲○つきぬ心の泉○詩の泉○やさしき心○花にも鳥にも○美妙の影○花鳥のいろね○風月の雅懷○天心をひらく○うるはしき心のあや○錦れる心のいと○雲を吐き○月を呑む○言の葉の句ひ○詞のはやし

○くめどもつきぬ流の末、いくよたねせじ文のみち。
○たゞ一むらの花もなほ、筆の匂ひにいろりひて、尾上にかゝるしらくもゝ、
れもかげふかくかをるなり。
○紙にむかへばあふれいづる、心の底の眞清水や、玉をまろばすふでのあや。
○みるものにはたきくものに、石は變じて金となり、瓦は化して珠となり、言
葉の花ぞ實をむすぶ。
○骨は瓦礫と共に、長へに土にうまるとも、聲は金玉となりて、常に世にひゞ
かむ。
○陳琳が文は曹操がやまひをいやし、相如が詞は武帝のなげきを深からし
む。
○善美うなへし文あらはさば、身は萬世に死なざらむ。
○詩(からうた)といひ、又歌といひ、人の心の言の葉の、花に咲きたる匂ひなり。
○花鳥風月は心の友、文人の筆の花なれや。
○むかし男に身をなして、殘る言葉の花の園、春やむかしとたどりつゝ、れば
ろ月夜にさまよへば。



○筆をれとせば風雨さわぎ、歌成りて鬼神をなかしむ。
○花の香にめで月のいろにまどひ、只いたづらに月花の、あはればかりをれ
ふべしや。
○文のまき〳〵くりかへし、昔の人とかたりつゝ、又後の世の人々と、かたる
言葉やのこすべき。
○春花秋月の匂ひふかく、清風香露のれもむき長し。
○文の林のれくわけて、花のいろ香やたづねまし。
○やまともろこしさま〴〵に、咲き匂ふなる言の葉の、花折りとりて、うたま
くら、さぐる旅路の杖にぎり、いざやうかれむ花に月。
○言葉の花八千艸も、心一つの根ざしより。
○野中にあさるひとむれの、雁もみうらにとびたてば、文字のかたちをゑが
くなり。
○馬上折り殘す江北の柳、一枝の春を惜むなり、雨中袖にふるゝ江南の橘、萬
朶のむかしを温(たつ)ねつゝ。

## 歌 文人之部參照

○うたのはやし○心の聲○心のかたち○心の色○言の葉○かざれることば○あやなす詞○こととたまのさきはふ國○鬼神もあはれと○天地もうごき○花になくとり○水にすむ蛙○花鳥風月○みやび心○筆の匂ひ○言葉の花○かはす言の葉○心のまこと○涙にあまる○まことをかたる○れもひあまる

○言葉の林榮ひつゝ、咲匂ふ花のこくうすく、あはれならぬはなき中に。

○天地をうごかし鬼神を泣かし、男をみなの中をさへ、和らぐるてふ此うたよ。

○二聖のめでたき調には、天地をうごかす德をうなへ、六仙のまさりし言の葉には、鬼神をなかする不思議ありき。

○林に茂き木の葉のつゆの、いろにうみゆく歌人の、心は花になるとかや。

○濱の眞砂の數よりも、まさりて多き言の葉の花、いろ〳〵ことに匂ひいでゝ。



○花に囀るうぐひすも、水にすだける蛙のこゑも、いづれかうたにあらざらむ。

○言の葉艸のつゆの上、心をみがくたねとなりて、生とし生ける物みなの、もひのいろぞあらはるゝ。

○繪にやうつさむ春の花、歌にやよまむ秋の月。

○生としいけるものみなの、聲は天地の自然のうた。

○やさしき心の匂ひこそ、あやあるこゑとあらはるれ。

## 學問 學校之部參照

○まなびの道○まなびの庭○物のことわり○からのやまとの○老莊の道○ひちりの敎○佛耶老莊○からどりのあと○敷島のみち○からたましひ○國のため○心をみがく○身を立てゝ○みちを行ふ○智恵のかゞみ○みちをきはめて○學の山のおくまでも○學びの海の底ふかく○御代の光に○學ばぬ人も

○まなびのまどにゆきをつみ、ほたるをあつめて宵々に、心のやみをてらし

つゝ、手にとる筆のつかのまも、うまずたゆまずすゝみなば、文の林の奥もみむ。

○ひかりくまなき君が代の、めでたき時に生れきて、何みがくではありぬべき、ますらたけをの心のかゞみ。

○教へのすぢをたがへずば、學びの道に迷はじを。

○わが子の教の爲めにとて、何か隣を撰ぶべき、まなばぬやどもなき御代は。

○まなびの海の風をいたみ、こぎゆくふねのかぢたえて、浪路に迷ふ我身かな。

○やまとにはあらぬからとりの、あとのみ人のみちをやいはむ。

○たゞからとりのあとをのみ、人のみちゞとれもへるは、ゆめにゆめみるたはわざゞ。

○西に東に國々の學びをひろく修めつゝ、みくにのためをふみわくる、人のしをりを立てよかし。

○まなびの道は春の山、ゆけどもくれもしろし。

○あく世なく、詞の林は秋のゝべ、みれどもくれもしろし。



○世にさまゞゝのふみはあれど、み國のあとをしるしたる、ふみこうまづはよむべけれ。

○言葉さちはふ皇國人、外國々のふみといへど、まなぶにかたきふしやある。

○西の東の國々に、生ひぬさくらをこゝろにて、學びの道を修めてむ。

○天を動かし地を碎き、已往を考へ未來を知る、學びの力ぞあやしきや。

○國を平げ世をしづめ、心をなびかし身を立てしむ、學の力ぞくすしきや。

○ねながらに知る地球の上、まのあたりみる千古の人。

## 讀書 机之部參照

○ほたるのひかり○まどのゆき○夜をこめて○さむき夜も○あつき日も○燈火をかゝげつくして○學びのまど○つれゞゝと○文よむ毎に○うきもわすれて○文の林にわけ入りて○文机にむかひて○まどの下○古人を友とす○たれこめて○窓のあけくれ○窓のをざゝ○ふみのしをり○くりかへしても○心ひとつに○萬巻の書○蠹魚のむれ○ともしびの下○心のやみも○あきらけく

○國のためにとまなばずば、千まきのふみもかひなからむ。
○よむかず〳〵のふみの中、一つ〳〵に忠孝の、みちしるべせぬものもなし。
○學のまどのゆきほたる、あつむる光は身の爲か、はた世の中をてらさむ爲か。
○ともしびかゞげて夜ふかき窓に、いにしへ人をおとなへば、代々の姿は明らけく、心のかゞみにうつるなり。
○書見て事に感じては、我もいかでとたけり猪の、たけき心をおこしつゝ。
○まどのともしびかゞやけり、まだねでたれかふみはみる。
○貧しき人はふみもて富み、富みぬる人も書もてたふとし。
○おろかなる身もふみよめば、やがてかしこくなりぬべし、かしこき人もふみよめば、ますゝかしこくなるとかや。
○田はありとても耕さゞれば、倉庫は遂にむなしかるべく、寶はありとも敎へねば、子孫は貧をまぬかれじ。
○燈火やう〳〵したしむべく、梧葉は飛んで書窓をうつ、夜學の時は來にけりな。



○あうぶいとまのある人は、いとまなしとてふみよまず。
○とりのあとゝめ玉ひろひつゝ、かひある浦やあざるべき。
○神代のことゞもくまもなく、うつしてけふに示すなる、ふみこそみちのかゞみなれ。
○むかしの人を友として、ふみにはむかしもなかりけり。
○むかしの人の言の葉は、ふでの林に花さきて、うつろふよなく香に匂ふ。
○しらぬ境のことのはも、ふみゝるからに花咲きて。
○むかしかたりの友のうち、ふみにまされる友はなし。
○南の椽のはし近く、文つくゑすゑてよむ文の。
○花さく山の松の蔭、草のいほりによむ文の、聲ものどかにきこえきて。
○歌の卷々よみつくし、机によりてれもひやる、今ともむかしの人心。
○みぎりしたゝる木の下に、ふみよむ聲のさわやかに。
○まどの火影のあかるきは、まだねでたれか文はよむ。
○文のうちにはとことはに、かをれる花もよるひるを、わかずてらせる月もあり。

○みなみれもてのいよすだれ、たれこめてよむ文のこゑ。
○いかなる人のすみかぞも、月すむうらをようにして、聲ほがらかに文をよむ。
○一たび文をひらきみば、かしこきむかしの人々と、ひぢを交へてかたるべし。

## 處世 教訓、悲哀之部參照

○世わたる道○浮世の海○浪風のたゝぬ日はなし○いたづらに○世をわぶる○やすくれくらむ○世にもふるかな○心のどかに○うき草の○身をまもる○よしや身は○心のせきの○むつかしの世や○れもひいづる○世をなげく○あなう世の中○いりしみて○まどふ心○かずにもあらぬ身○わが世くだちぬ○心つくして○かずならずとも○ひたぶるに○世をいでゝ○わたりつくして○なげくとも○かたき心は○海より廣く○たゞよふも○れもひあがりて○なすをもなく○わが國のため○石となりても○心づよく○世のちりも○わが世もふけぬ○などかたゆまむ○みのるべき秋の○花さく春○ながきいのち○わかばもしげる○さかりひさしき○かくてやむべしや○すゝむとも○あとへはひかじ○うちつれて○ちりひぢの身は○鐵石心○水にまかする捨小舟○一葦の水に任す○漂々として○漫々たる○名を成して○業未だ成らず○精神一たび到らば○岩をもとほすあゝいかにせむ拂へども、拂へどつきぬ世の中の、塵は拂はでれくべきか。○雲のれりおるたかねにも、すめばすまるゝ此世かな。○行方いづことしらなみの、ながれによどむうたかたの、はかなき世こうかなしけれ。○たれ世の中をひたすらに、うしとつらしとなげくらむ。○昨日は今日のゆめにして、今日はやがても明日のゆめ、ゆめの夢路をたどりつゝ、うつゝなきよぞあはれなる。○沖に浮べる一葉の舟、柳が浦の秋風に、帆上げてゆきしあとのなみ。○たかきいやしきれのが身の、ほどにつけつゝさま〴〵の、世をわたりゆく人の世や。○難波の蘆の名もやがて、こゝには伊勢の濱をぎと、所によりてかはるよを。

○今もあらしの山風に、ちりゆく花の大井川、流れゆく世のふちいづこ。

○水の上なる萍の、うきてたゞよふうき身には、なに世の中のつらからむ。

○水にたゞよふ萍の、うきよの中をしりながら、のがれもあへずさすらひて。

○身をばいづこに沖の海、うのぬる岩も白浪の、かゝるはやがてよの中の、なちひとかねてしるものを、

○身にうきことをつみてこそ、大かたのよにふる人の、心のねくもしられけれ。

○われとわが身のものながら、心にまかせぬ世の中に。

○生前の功名死後の文、百年ひまなく萬世いうがはし。

○たのむる人をたのめずて、たのめぬ人をたのめなば、何ごとをかはなし得べき。

○實に世の中は學のまどよ、困苦は師たり難艱は友。

○くるしみあれば樂あり、たのしみあれば事を勵み、事をはげめば望み成る。

○自由を好むは人の性、自由はやがても天のみち。

○自由は貧しきものと居ず、さりとて富める者ともすまず、自由は自由の人とすむ。

○足ることのなき世の中に、足ることねがふ人心、足らはぬ心といひつべし。

○げに人の世は闇の夜の、街に立ちてともしびの、光求めてまどひつゝ、なく稚子にことならず。

○おのれを知る人すくなきは、世に其人の少きなり、人を知ること多くして、ます〳〵人のなきを知る。

○上なる人を見るにつけ、下なる人をみるにつけ、心をいたむること多し、中なる品こゝろのどかなれ。

○衣食につきては上をみよ、これ世渡りのみちぞかし。

○吾身のけふをかへりみて、あすまたれなじ過を、なさじとふかくちかひつゝ。

○世のうき波をわたるには、道理はやがてこれが檝、情慾これがあらしなり。

○獨立獨行いさぎよき、世をわたらんとれもひなば、先艱難の山をゆけ。

○わが身に仇の逼らぬ時、心してゆけ人の道、近きによせてはふせぎにし。

○世わたるみちの栞には、忍耐にます者はなし、世渡るみちの友垣は、勉強にしくものぞなき。

○窓に入りて書を學び、窓をいでゝは、事を學ぶ、いづるといると世の中は、すべて學の庭なれや。

○曲れる枝のしげゝれば、直き梢もかくろひて。

○人生五十短きも、つとめて事にいりしまば、千とせのいさをたてつべし。

○人のよはひは野べの艸、うがさかにこり一さかり。

○花のいろ香にあこがれて、五十年の世をいたづらに、胡蝶のゆめとなさんとか。

○人の一生果していかに、あやまちて倒れ、競ひてやぶれ、老いては悔ゆることばかり。

○世のうき浪はしらであれ、たゞ知らであれ知らざらむ程こそ人はとふとけれ。

○世をわたるうつる聖さへ、うかむ瀬かたき世の中に、ましてはかなき世の人の、ゆくての道にみなぎるうき浪。



○世をうみわたる栲縄の、ながきいのちもかひなき。

○わらひの果てはなみだにて、涙ぐむ人のまことなる。

○筒井の蛙世の中を、せましと見るもあはれなり。

○身はすて小舟うらみても、かいなきや世の姿なる。

○富貴は春のよるの夢、さむるまくらにあともなく、榮華は秋の夕のつゆ、こけのむしろに消えはてぬ。

○空しく馬に喰はれむより、人に折られよ百合の花。

○人とうまれて徒らに、飢ゑて死なむかねむりてやまむか。

○樂み去つて苦の世界、因果はめぐる火の車。

○矢瀬の小舟はゝやしとも、いそがばまはれ瀬田のはし。

○うき世の中はねてもゆめ、さめてもゆめの心地して。

○炎天につち持つ鍛冶、寒風に車ひくをのこ、怠りゆるさぬ人の世を、ひたぶる身をなうらみそよ。

○風もふきあへずうつろふは、人の心の花ごろも。

○月にむらくも花に風、れもふにまかせぬ世なりけり。

○往事のゆめに似たるをなげき。今のうつゝにあらざるをうたがふ。
○うしとそれもへぼうかりけり、うれしとけふをおもひつゝ、心ゆたかに世をばへん。
○業はさま〴〵ことなれど、わたるはれをし浮世の海。
○かはりゆく世のたゝずまひ、人の心をいかにせん。
○心の關したゞしくば、世をわたりてもまがことの、いかでか通ひきたるべき。
○人生五十かくてのみ、あるべきものか、かくて唯、やむべきものか、わがしわざ。
○笑みをつゝみしたもとより、やがてこぼるゝなみだかな。
○れのれをよわしとはげむこう、つよきにのぼるはしごなれ。
○人をうしらずあなどらず、心すなほに世はわたれ。
○世のあらなみにくらぶれば、阿波のなるともものならず。
○世のうなばらをわたるには、まことの舟にちゑのかい。
○世をいつはりてわたるこう、わが身をうしなふはじめなれ。



## 名譽 凱旋、卒業之部參照

○ほまれは千世も○いくよかれせじ○たにぬひかり○仰ぐかな○めざましき○ほまれのひかり○まばゆき迄に○世をてらしても○たとへ身は朽ちぬとも○かぐはしき名○めざましき名○梅の香かほる名のほまれ○月よりあかく○千代も八千代も○さくらと匂ふ○雲にかくれぬ月影の○ひかりはもるゝ○名譽の旗○むねにかゞやく○あやにしき○いひつぎゆかむ○かたりつぎつゝ○埋れぬ名○骨となりても○人生わづか五十年○みぢかき世にも○ながきほまれの○ほまれをかざる○世をこうてらせ○萬歳までも○うまごの末までも○金鵄のひかり○天てるひかり○たぐひまれなる○名譽を肩に擔ひつゝ○たかきくらゐに○つゆとけぬべきいのちの○のこる譽○ときはかきはに○いさをし立てゝ○よき名をあげて○父のよろこび○母のよろこび○家の名あげて○ほまれの袖○世にとゞろく○後の世までも○楠のかぐはしき○花のいろ香も○ほまれをむさぼる○名に驅られ

○生きて官位の榮をうけ、死して祭祀の典をうく。
○野末のつゆと消ぬとも、ほまれはくちじ千代八千代。
○つとめすゝみていさをゝ立てゝ、よき名とゞめよ千とせまで。
○我身の恨にれほけなき、譽求めて世の人の、うしりも知らず友とぢの、いさめもいれず。
○誰かこの世にほまれは求むる、死にてのちこそほまれはとれ。
○古人のいさをゝ見るにつけ、いかでわが身もかくばかり、世にしらるべき名をなして、千とせの後にしのばれん。
○ふみゝる毎にれもふかなく、いかでれのれもかばかりの、功を立てゝ後の世に、朽ちはてぬ名をとゞめんと。
○嵐の花と身はなりぬとも、千世にうつらぬいろ香をとゞめむ。
○桃李は人をかたらねど、花の下みち人こゝろつどへ。
○なき身の果ては淺茅生の、しもに屍は朽ちぬとも、名をば朽さじ萬代に。
○わが身一つはいかにもあれ、ながくのこらむ名ぞをしき。
○千ひろの底に沈める白玉、冠のかしらにかざられて、輝く光といづれぞや。



○骨は龍門の土にうづむとも、名は鳳闕のくもにとゞめむ。
○ほまれはあだにうべからず、まことある人これをうく。
○まことをうたふ詩人こそ、月桂冠をかつぐべき。
○けふにしきゝてふるさとに、かへる名譽のかちいくさ。
○男子一たび世に生れては、なにかほまれを身にうけず、名を竹帛にとゞめでやまん。
○むなしくほまれをもとむるは、たかねの花をのぞみゝて、手折らんとれもふにことならず。

## 勉強
教訓之部參照

○つとめはげみて○ひとすぢに○つとむる心○まごゝろ○たゆしくすゝめ○れこたるな○たゆみぞ○れくるゝな○つとめて後こう○よき名を得む○春のつとめ○秋の收め○梅が香のかぐはしき○雪にれそれず○風に折れず○あらなみわけて○しもを凌ぎ○雨にぬれて○ひとりだちて○花のかをり○月のひかりも折るばかり○すゝみに

すゝめ○學びの道も○敎の庭に○世わたる上も○身を修め○わざをはげみて○國のため○君のため○いそしみて○心を碎き○れもひをひそめ○夜もすがら○日すがら○ほたるをあつめ○ゆきをつみ○ゆきのまど○仇なるいろに迷はで○やすき眠にふけるな○いそしむ蜂の○あそぶ蝶の○つとめなば○牛の歩みのれそくとも○はやき馬の運びも○つとめてやまず○神もめでん○玉をみがく○とぎけづり○光はそはむ○心を込めて○神のひめてし智惠の庫、ひらかむ鍵は學問ぢ、學べや習へ怠らで。○花はちりても實をむすぶ、月はかけても又みてり、きにてかへらぬ光陰の、光を空しく失ふな。

○國の名汚すな雄心ふるひて、祖の名れとすな眞心みがきて。

○他山の石もてみがくべし、仇こそ、れのが友なれや。

○つとめに追ひしく敵はなし、ながとる太刀の短くば、一歩をすゝめて敵を切れ。

○敗北したる時にこそ、かつべき機會はありときけ。

○神は幸を携へてつとむる人をまつ、神は福を荷ひていそしむ人を追ふ。



○安逸無事の生涯は、人のこの世にあることなく、神の世にさへなしときく。

○閑居するなかれ不善來らむ、つとめて常に怠らずは、不善の來るひまはなし。

○韋編のふるくなるまゝに、智識はあらたになりぬめり。

○千とせの松は二葉に生ひたち、羅馬のみやこは一日に成らず。

○艱難辛苦の世にあひて、心をためしゝ人にこそ、誠の力はのこりけれ。

○機會は鳥にさも似たり、とばざる先にこれをとれ。

○事に怠る人の心は、只時の間も安からず、安き心はつとめてのちぢ。

○吾人共にけふあるは、皆これ祖先の賜ぢ、いざもろともにはげみつゝ、學びの窓を曉にひらき、工夫の門を夜ふけてとざし、身を立てみちを行ひて、遙かに祖先の恩にむくいん。

○さかまく川はふかしとも、みづちをなりて潛るべし。

○梅蕾春にさきだてば、ゆき又しものくるしみあり。

○心をこらしれもひをひりめ、ひるは日ぐらし夜はよもすがら。

## 怠慢
教訓之部參照

○心をごりて○身をもかへりみず、○をこたりがちに○うつら〳〵と○花にうかれて○蝶のゆめのさむるとき○かなしみしらぬ○うつけもの○れろかといふも○仇し心に○さうふあらしに○行さきいかに○はふれ果てゝ○やがては秋の○つゞれの袖○ふひしれて○たはれはてゝ○つみおろし

○たをやめが取る杯に、心も酔ひて、まづらをが、ねむる無明のゆめのみち、いつさむべくも見ぬかな。

○花前の酒に酔ひしれて、ひざに眠れるたはれをは、國をは何とおもふらむ、身をば何とかおもふらむ。

○榮枯盛衰めぐりてやまず、今日は花前にねむれども、あすは枯野にうらぶれむ、よのさま知らぬたはれ男や。

○心のちりのつもりては、机のちりもはらひねず。

○とこしへに月日ゆくとか、今日は月あすは櫻と、よるひるにはかなくすぎすぐはかなきや。



○あすをまつ身の心こゝろ、まづをこたりのはじめなれ。

○花のいろかにゑひはてゝ、うつら〳〵とながき日を、くらす心は一とせを、をこたるみちのはじめなり。

## 謹愼

○つゝしむ○しとやかに○仇なることは○いたづらに○れもひはかりて○言の葉もしげからず○たゞしきわざに○身をかへりみて○ゆづり合ひて○三たびその身をかへりみる○身を守るべず○むさぼることなく○かりそめに○うしろことなき○まめやかに○のどけく○身に媚びず○ひきしめて○神のをしへに○人のさとしの○心を入れて○世をやすらかにわたるには、身をつゝしむぐみちならむ。

○光まばゆき金剛石も、著にかけてはいかにせん、とぶよりはやき滾關車も、レールの上にあればこそ、物は地位こそかなめなれ。

○道に叶はぬことのはぞ、劍にまさりてれうろしき。

○幾千萬のこがねにも、かへがたきものはまことある、人の言葉の花の枝。
○足らざるをもて足れりとせずば、足れる上にも足らざらむ。
○朝げ夕げの箸とるごとに、粒々辛苦を味はゞ、口にをごりはたこるまじ。
○あざむかるゝとも欺くな、あざむかれても正直の、かしらにやどる神はあり。
○技にほこらぬ言の葉に、花をもたせてうるはしく。
○うたがひつゝも、つゝしむは、ちゑある人の心なり。
○うつ墨なはの一すぢに、まがらぬみちをわたりつゝ、身をつゝしみて世をすぐせ。
○あだなることに身をよせず、かりにも時を失ふな。

## 忍耐

○忍ぶ心○心うごかず○かたき心の一徹に○つよきをくじき○心亂れず
○心をこめて○たへしのぶ○ゆきをも風をも○みさをかはらぬ○松のみどり○梅のきよき○そこゝろはに○身のまもり○くじけぬ心○心おびたゞ
○ひきかへさんや○つゆもたゞれぬ○心の掟○徳の基○つかのまも○す



さぶ嵐もゝのならず
○つゆに時雨にうめやすき、紅葉のいろはたのまれず、嵐凌ぎて冬枯の、峯にりびゆる松こゝろは、千代たのむべき友ならめ。
○うきにたへぬる心こそ、徳の中なる王なれや、快樂の基權利のたね。
○流れて末は限りなき、海となるべき山川も、しばしは木の葉の下くゞる。

## 金錢

○世わたるすべ○たからとて○たふとくも○ひかりまばゆく○位をもかふ○こがねの花○しろがねのゆき○つみためて○つかひはたして○むさぼりて○うらみとなる○人にゝくまれ○心やすからず○みちのくやまにくたより
○難波のあしの○あらうひ立てる○身をも忘れて○山とつみて○ちりあ
○こがねはつかふ道によりてたふとく、貯ふる道によりていやし。
○こがねのために死ぬる者は、疫やみにたふれ戰に、死ぬる人より世に多し。
○かぎみよりげに世の中の、人の心は隈もなく、見えこうわたれこがねには。

○兎にも角にも金ばかり、人の中さくものゞなき、借る身ときみはなる勿れ、
又貸す人となる勿れ。
○黄金こう世のかゞみなれ、心の影も見にぬれば。
○鳥は餌によりて人にとらはれ、人はこがねによりて身をあやまる。
○ものいはぬてふ山吹の、花の光のいかなれば、さばかりうすき世の中の、人
の心をむすぶらん。
○黄金にこそは世の中の、人の心も見にけれ、かゞみにまさる光かな。
○人の心もたのまれず、こがねのひかり瑠璃のいろ、そみにひかるゝならひ
とは、あさましき世のためしかな。

## 立志

○こゝろざしを立てゝ○身をたつるもとぬ○國を去つて○郷關をいづ○
かたくちかひて○はじめの心○よき道に心をむけて○心かためて○業も
し成らずば○れもひ起して○ふるひたちて○ひとすぢに○ひたぶるに○
橋に題して○うつゝみなはの○天つみ柱立てうめて○ゆるがぬ心
○身はうき草のうきぬとも、心はいかでかあだ浪に、たゞよはされん。
○ひだの工のをのこらが、ほめて作れる眞木柱、立てし心の一筋は、何うごく
べきたふるとも。
○男子一たび立てつる志、百折千挫いかでかたわまん、倒るゝまでは勉めて
やまじ。
○蘆間の蟹のあとゝめて、しをりとなさば末つひに、あらぬみちにや迷ふべ
き。

## 立身

○名をあげて○錦きて○うれしやけふの○ことなりて○業とげて○花さ
く春○みのなる果○みのりのゆたか○よき名を流
す○ほまれは千世も○うたひはやせや○志こゝに遂げて○ちかひの如く
○立ならびたる花の木の、さかりにあへば谷かげの、松もはしなく世にいで
ゝ、千とせのいろぞ見にぬめる。
○きよき心とかざらぬ徳は、高きにのぼる翼にて、やがて至らむ雲の上。

○あからめもせず一すぢに、學びの道の西東、つとめはげむは青雲の、たかきに登るふもとぢぞ。

## 希望 處世之部參照

○のぼるべき○雲井にたかく○われもひ起して○のぞみはとほし○空たかく○月のかつらも折るばかり○いざさらば○われもひのいと○われもひたたにせず○短きいのち○花みむと○月みむと○足ることしらず○あくまでも○隴を得ぬれば又蜀をわれもふ○われもふ事一つかなへば又一つ○むさぼる心○のぞみの影を○名をあげて○のそめどあかぬ○のぞみの幻
○雲のかけはしたちまちに、ふたゝびのぼるみちを得て、雲井に袖をかへすかな。
○短き人の玉の緒に、かくる望みは長くして、雲の上なる神にさへ、われもひのいとをつなぐなり。
○はてなしといふ武藏野も、つひの境はありときく、人の望ぞ限りなき。
○涙もて迎へしことも怠らず、希望をたて〻勤めなば、終には笑(えみ)もて送るべし。
○花を手折れば柳をたづね、隴を得ぬれば蜀をわれもふ、人の望みぞはてしなき。
○人は望みのあればこそ、此世の中にもながらへて、望みしなくば、死ぬると何かわかつべき。
○人の希望はかげ法師、つひにはなるゝものならず。
○身にわほけなきのぞみこそ、うの世をあやまるもとゐなれ。
○花をしみれは月をこひ、月にもかへば花をこふ、人のこゝろはこゝてもなく、あくことしらぬものなれや。

## 慾望

○いのちをすてゝ○むさぼりて○心ひとつに○なほ足らずとて○あらそひて○人よりわほく○こがねのひかり○玉のいろ○よきにうつり○利に走る○血をながして○骨を碎き○肉をうぎ○汗をしぼり○われもひをこがし○隴を得ぬればまた蜀と○ねがひはやまぬ人心○人をも身をも○わ

がために○あきはてぬ○あるが上に○はてしなき
○身もかへりみず命をも、かつ忘れつゝ人毎に、われ〳〵くれじといろぐなり、
黄金の海の島をみて。
○たるがうへにもなほなげく、人の心のあさましさ。
○ある時は色に染み、貪慾の思淺からず、ある時は聲をきゝ、愛執の心いとふかし。

## 失望 悲哀之部參照

○いかにせむ○のぞみのいともたにはてゝ○なにゝすがらむ○あはれと
も○かげきにて○うき草のたゞよふばかり○よるすべをなみ○風にまか
せて○ちりの世に○のぞめどかひなき○かくまでとは○力もたにて○心
もなにて○れもひつかれて○なくより外の○くさむらになくむし○秋の
しらつゆ○けぬべくば○すてられて○世をうみわたる○たなゝし小舟○
捨小舟○かぢたにて○浪のまに〳〵○いはむすべせむすべもなく○たす
けをよべと○はかなき望○とてもかくてもひあきらめ○ずてし扇



○すがるつゆの○一夜の夢○思ふにたがふ世○七ころび八おきとは聞く
世なれど○つゆのよすが○いのちをかけて○今よりは○ゆめさめて○
きのふはけふの○みなわときにて○すがるかつらの○山に入らむか○世
をいでゝ○むかしにかはる○れもひかけきや○仇なるれもひ○くちをし
き○なさけなき○花はあとなく○月はくもりて○うきにたへぬ○頼みが
たき世のさま
○れもひし事は水にかく、文字にも似たりあだし世や。
○花の下かげふく風に、のこりし春の夢さめて、はだへに寒き秋の霜。
○身はうたかたの水鳥の、うきね定めぬなみまくら、ながれ〳〵て末つひに、
いづこの泡ときえぬらむ。
○夜遊の友に馴衣の、袖にやどしゝ月かげの、うつろふ花のかんばせは、むか
しのさまにひきかへて。
○君はなにをか嘆くらむ、君よりわびしくうき人の、世にはいくばく多から
む。
○はかなき事をなげきつゝ、はかなき事に身をよする、人こうはかなき人な

れや。
○たのも梢の枝かれて、今はあらしに折れぬべき、身のはかなさをなげきつゝ。
○身は朝顔の葉がくれて、日影まばゆくなりにけり、ひるもたもとのしらつゆは、ところせき迄ぬきまぞふ。
○人の心の秋風に、ちぎりしことばもちりぬめり、ひとりふすまの手枕に、やどる月こそわりなけれ。
○身は老づるの音に立てゝ、泣くより外のことぞなき。
○何かはねにもなき澤の、もりの下艸ねくつゆの、はかなきものと知りながら。
○下にれもひし花すゝき、ほにいでゝ人にむすばれぬ、心さびしき秋の日に、うさは一しほまさりけり。
○飢極まりては飢をわぼえず、わびつくしては悲みもなし。
○人めのせきの白雲も、もれてはいとゞ身につもる、人の恨みのとけやらで、くも井のよそにうちなびく。



○春にもあはず花さかで、身のなる果はあきのつゆ。
○人めかれゆく我やどに、なげき艸こそ生ひまされ。
○月は今宵も影きよく、ひかりをわれにそゝげども、むねのけむりにくもりつゝ。
○悔の八千たび百千たび、かき口説くともかひなき。
○とてもつれなき世なりけり、とてもかひなき身なりけり。
○迷執の海に溺れては、失望の山峙てり。
○うすき衣のうらむべき、かたもなさにかへる浪、かけてもみばや人の身に。
○今は用なき身となりて、悔の八千たびくやみては、かひなき涙にくるゝのみ。

## 詠史

國體、烈士、勇氣之部參照

○武士の八十氏川○千歳へも君が○民もやすけく○とよさかのぼる○玉とくだくる○世をなげく○身をにへとして○大内山の月の光○世の秋を

かこつ袂のつゆ○うの名流るゝ○千とせをてらす○天つ日影○うらやすの國○位山のぼる○嵯峨のゝ松の秋の風○さかのゝれくの秋○大きその
あら山れろし○粟津野の原○劔太刀○かまくらやま○なつかしき花のちぎり○十かへりの花さく松○和田つみのみやぬ○蛭が小島にひそむ○しこのしこ艸生ひしげり○同じみなもと二すぢに○君のため○小野の秋萩
○あらたへの藤原○三笠の山○むかしながら○そのかみの○いにしへの弓削の川風○衣川さかまく水○あしかしのゝみやの春たけて○室町○江戸○里内裏○比叡山れろし○ちりかふ花のせきの春風○まきつるゆきの玉すだれ○かぐはしき名○よき名をたてゝ○徳川のながれ○足利ぎぬのすそほころび○源きよき水の尾○花たちばなの末かをる○青葉の笛の○波のはなちる○白川の清き流れ○弓はりの月

○名もたかくらのみやのうち、くも井のよそにありあけの、月のみやこを忍びいでゝ、かひなき時に近江路や、三井寺さしてれちてゆく。(高倉宮)

○保元の春の花、忽ち移りて匂をとゞめず、壽永の秋の紅葉、いつしかちりて



あともなし。(源平時代)

○心つくしのみうらより、ふきれこりたるはやちの風、やまとしまねに生ひしげる、しこのしこ草吹きなびけ。(神武東征)

○橿原のみやにみやばしら、ふとしきたてゝ皇祖の、天壌無窮の神勅、うけもち玉ひ萬代に、ゆるがぬ基たてまもりゝ。(同御即位)

○大和しまねのゆるぎなき、いしづゑ据ゑし神わざを、仰かぬ人ぞなかりける。(同上)

○山をぬくわが力、たれかまさるとほこりたる、男のむねをけやぶれる、たぐひまれなる大丈夫。(野見宿禰)

○すまひてみよとおしいだす、かいなをとりて一ひねり、とりひしぎたるめざましさ。(同上)

○十つかのつるぎきらめきて、みだれはびこるしこ草を、あとなくかりて浦安の、大和の國と萬代に。(治平)

○天そゝりたつたかちほの、みねよりおろす山れろし、野吹き山吹き海ふきて、やまとの國にたちまよふ、八十のむらくもふきなびけ。(神武東征)

○西のうなばらくもはれてのぼる朝日のみひかりは、うらみつやまとのかしは原、みやぬほがらにてらすなり。（神武即位）

○逆まくなみの瀬戸越にて安藝路吉備路に軍だて、たつやなにはの浦の浪。（同上）

○やまとなでしこ花さきて、さながら春のたにぬ世や、めぐみあまねき八代の、君の心ぞのどかなる。（八代將軍）

○神につかへてまことあり、民を治めてなさけあり。（崇神天皇）

○神のしるしは神ながら、けがさぬためとかしこみて、みやぬけだかくまつりたる。（同上）

○みくさのたからかしこしと、うつしまつりて、かさぬひの、里に立てたる宮柱。（同上）

○西に東に雄たけびの、あらき夷をことむけて、めぐみをしけるいさをしは。（日本武尊）

○劍の光ほこゆげの、さわぎたちたる諸人が、心を更にしづめつゝ。（同上）

○深草山の夕けぶり、はかなくきゆるをみつるより、佛になびく身となりぬ。（僧正遍昭）

○世をうぢ山の木のまより、かすかにもらす一こゑも、よにだくひなき時鳥。（喜撰）

○ふでの匂ひのめでたきは、ちたのこりたるあき萩の、花の色にぞ知られける。（道風）

○ゆきにかゝげしたまだれに、からくれなゐにさきにほふ、ことばの花のかをりさへ、世にかぐはしく匂ふなり。（清少納言）

○なこうといひしものゝふの、ことばのはなは千代かけて、ちることを知らずそこしへに、香にこそ匂へ關の風。（義家）

○浪しづかなる浦やすの、たひらのみやをなになれば、風ふくはらにうつしけん。（清盛）

○よしのゝ花の蔭ならませば、たちまふ袖もかひあらましを。（靜）

○この手かしはのうらもて、れのが心にまかせつゝ、しげりはびこりあめつひの、ひかりをさへにさゝへけり。（尊氏）

○こぎゆくふねはあともなく、むなしきなみにうらぶれて、獨音になく濱千

ぎり。(俊寛)

○ふしみの山の月の影、くもかくれずは、もろこしのはてもさやかにみるべきを。(豊太閤)

○賤がかき手のなりひさご、松の木かげになりいでゝ、天が下さへれほふかな。(同上)

○うのうもれ木のことのはを、千代にのこしてちりにける、みのなるはてぞあはれなる。(頼政)

## 國體 詠史、勇氣之部參照

○三千年のむかしより○人はさはに○まもりにまもり○國のひかり○國の華○國の精華○とりはく太刀のつかのまも○國はしづかに○たぐひまれなる○皇統連綿○かけぬ月かげ○うらやまぬ人○浦やすのくに○しろしめす○民やすく○國たひらかに○わが身わすれてつかふ民○めぐみのつゆ○すめらわが○みこのみこと○國の大本○しづめなる○民卿うるほふ○世界をてらす日のみはた○八大洲にかゞやきて○敷しまの名にはひて○くわしほこちたるの國○みづほのくに○いひつぎて○君に忠○れやに孝○夫婦はむつび○はらからしたしみ○上をうやまひ○下をあはれむ○國の掟にうむかざる○ことあげもせず○無爲の化政○地球の上に國といふ國はあれども○生れいでたるさち○日本だましひ○千代萬代も○かはらぬものは○すめらみくにの○徳政大八嶋の外にあふれ○國ぶり○まれなる○國のすがた○上下相和し○國のいしづゑすわりたる○ゆるがぬいしづゑ○かたきもとゐ○いはほなす國のもとゐ○花よりもげに○うるはしき人のみち○國はとみて○民は多く○惟一の國○ひるめの神○神の末なる○とみさかに○いやつぎ〳〵に○かしこしやかけんもかしこかし原の、宮の御代よりしきしまの、大和の國は外國に、まされる國とすめらぎの、天地のむだかぎりなく、しらさん國と。

○一系の君上に仁、歴世の民下に忠、君臣の親は父子の如く、一國の情はこれ一家。

○浦安の國うらやすく、をやのをやより八十つゞき、傳へてとはにうちあふぐ、天てる神の日のみかげ。

○青人艸もしげりつゝ、いやさかにゆく豐葦原、千秋五百秋ゆたかなる、瑞穗の國ぶたぐひなき。

○金剛の石つみかさね、北斗の星を撐ふとも黄金のかはらしきつめて、太平洋をおほふとも、また得がたきは敷島の、わが日の本のみくににがら。

○神のかためし國なれば、天つ日嗣は天地と、いや遠永くうごくよあらじ。

○おるやにしきのかず〳〵に、高麗もろこしのしなはあれど、やまとにしきにまさらめや。

○もろこし人もこま人も、西の國なる人々も、よりてつかふる君がみよ。

○月日の影をみる國は、もとつ國なる日の本の、光あふがぬ國やある。

○みくさのたから天つち人、うち和らぎて天地人、あらんかぎりは榮ゆべき、國のすがたの寶なり。

○九鼎大呂も何ならず、みくさの神のみたからに、まさるたからのあらめやは。

○やまと男兒がみがきたる、太刀の光のしものいろ、みてをのゝかぬ人やある。



○すがたやさしきはなさくら、花の匂ひをさながらに、心にそりしやまとをのこ。

○いづれの國にたぐひあらむ、たぐひなきこそたふとけれ、いづれのくにゝためしあらむ、ためしなくてぞめでたきや。

○てるひのもとにありながら、くもる心の人やたれ。

○ゆきもほたるもあつめては、國の光となりやせむ。

○山には富士の根水にはびは湖、花にさくらの匂ひある、國の姿がたぐひなき。

○風平らかに雨したがひ、治まれる世をかさねつゝ、めぐみにもれぬ民草は。

○東海なみたつ三千丈、飛龍に似たる國がらを。

○神人ともに和らぎて、例もきかぬ日の本の、くにゆたかなるあきつしま、なみもれとなき四方のくに。

○きよきみくにの史の上に、けがれし名をばながさじな。

○その水上は高千穗の、みねよりいでゝしまし水は、千萬川にながれては、青海原にうづまきても、きよきみくにのすがたなる。

○忠なる臣は親に孝、孝なる子こそ君に忠、すらゆくそりの千里にとぶも、二つのつばさもてるが故ぞ。

## 幽寂

草庵、夜之部參照

○さびしく○うらかなしく○夜寂莫○しづけき夜半○月影くらく○山ふかく○山かげの庵○松吹く風○月のひかりも○由門夜ふけて○殘月一片○あかつきの○雨のおと○おちばの風○人なくして○人しづまりて○萬籟絶にて○心すむ夜○眞如の月○棺にかくる○陰々として○鬼氣人にせまる○松影娑婆○あり明の

○夜霜林を動かしては落葉とうたがひ、曉天籟をきいては心をすます。

○月はひとつの影なれど、やどさぬ水はなかりけり。

○雨中涙あり何に由て拭はん、月下人なし誰に向て語らむ。

○なにまどひけむ夜がらすの、聲さびしくもよはに鳴く、ともしびくらき竹の庵。

○朽ちにし苔の板庇、つたひて落る雫のみ、傘にさびしく音すなり。



○花びらかくるさくらがにの、よすがのいとのあみやれて、風にさびしくゆらぐなり。

○そぞろに心をいたましむる、有明の月の影、うたゝ涙をもよほすなる、ゆふぐれのつゆのいろ。

○よるもすがらにおもみあかす、經文のこゑも松風と、ともにすみゆく丑みつ時。

○夜氣陰々として風なまぐさく、馬蹄蹇々として響はとほし。

○松の嵐の聲ふけて、たかねにさむくすめる月。

○山影門に入つてれせどもいでず、月光地にしきて拂へども消ず。

○空山寂寞として夜猿さけび、古木鬱蒼として寒烏さわぐ。

○月あかくして風きよし、夜半のあらしに鳩ねむる鎭守の杜の神木に、神やまふらむ午夜の天。

○月はいつしか影れちて、杜にふくろふの聲ずする。

○芭蕉葉にふる曉の雨の音、叢にふくゆふべの風の聲。

○松ふく風のれとたえて、月影すめる庭のれも、何をわびしとなくむしの、こ

ゑより外の聲ぞなき。

## 神佛 神社、佛閣之部參照

○たふとしや○千木高知りて○ゆふかけて○天つ神○八百萬の神○國つやしろ○神のみまへ○神のまに〳〵○ますかゞみ○あけの玉垣○神さびて○神風や○手むけする○天照す神○瑞垣に○八ひら手の聲○神や守らむ○ひろ前○はふり子○しめはへて○矛杉○宮柱○森の燈火○榊葉に○かけてぞいのる○みほとけの○つるの林○わしの高根○鹿の園生○法の道○法の燈○峯たかく○法の舟○りの曉○ちかひの海○むらさきの雲○心の蓮○かねのひゞき○法の道芝○法の門○西の空のみ仰ぐ○法の水たにて○あか井の水○法の師○すみぞめの袖○法性眞如○有待の身○五濁の境○涅槃○梵音○妙法の聲

○神もあはれみ見そなはせ、心も清き岩清水、木がくれてのみありふるを。

○世々に濁らぬ岩清水、これもたふとき大神の、盟ひなるらむかしこしや。

○國平らかに民安く、國威ます〳〵かゞやきて、榮ゆくみよをいのるなり。



○わが大君のしろしめす、御世をいのれば神垣に、曉つぐる庭とりの、聲ものどかにきこゆなり。

○神と君とのみめぐみを、心にかけてみしめなは、ながき世たえず仕へても。

○みも裾川の底すみて、玉藻をてらす月の影、にごらぬ末の流れかな。

○御世安かれといのるなる、清き心を神やしる、つゆも濁らぬ五十鈴川。

○川れと清きさく鈴の、五十鈴の川の河水の、すめる流れは神代より、つゆもにごらず今日までも。

○ながれての世のけふも猶、つゆもにごらぬ五十鈴川。

○清きながれの五十鈴川、溜ることなき神の末。

○にごれる末の世となりて、神をたのまぬ人心。

○神のいがきの榊葉に、ゆふかけうへしゆきのあさ。

○君をいのれば神かきに、こゝろかゝらぬ時もなし。

○みむろの榊さしうへて、君をときはといのるなり。

○神路の山にさす月日、夜とひるとの分ちなく、君がみよをやまもるらむ。

○しらゆふながらねぎごとを、榊の枝にかけまくも、かたじけなしや加茂の

神。

○菩提の道のかねの聲、御法の光もかげそひて、心の月ぞすみまさる。

○後の夜つぐるかねの聲、れほふ五障のくもはれて、眞如の影をあふぐかな。

○晴たるうらを仰ぎては、和光のみかげあらたなり。

○北斗の星の影あきらかに、御法の花もひらくなり。

○神のみいつも三輪の山、しるしの杉の神さびて、たてる姿もたふとしや。

○いく年月を流れきて、東にうつる法の水、ながれの末やいづこなる。

○蓮華花ちる極樂世界、長く苦界をこえすぎて、輪廻の古郷隔りぬ。

○大慈大悲の春の花、十惡の里にかぐはしく、三十三身の秋の月、五觸の水に影きよし。

○池のほとりの法の水、ふかくも頼む唱名の、こゑすみわたる夜の月、讀經の功力ありがたや。

○提婆が惡も觀音の慈悲、槃特が愚痴も文珠が知惠、悟れば善惡煩惱菩提、一つにまはる環の輪。

○くるや千手の經陀羅尼、讀むもたふとき普門品。



○三千世界もまのあたりに盡き、十二因緣は心にもなし。

○たとひ業因れほくとも、照らさざらめや日の光、大悲大慈の誓ある、法のともしびあかければ。

○護法の數珠に降魔の利劍、眞如の闇をてらすなり。

○難波の寺のかねの聲、異浦々にひゞきて、普き契溝潮の、れし照る海山皆成佛。

○唯是大地水火風、かりにしばらくまとまりて、生死の海にめぐるのみ。

○空に花ふり光を放ち、音樂の聲すみわたり。

○松ふく嵐も岩たゝく、瀧の響も聲すみて、みそらにきこゆる音樂の音。

○鳩の嶺越しきてみれば、三千世界もよりならず、千里もれなじ月の夜に、あけの玉垣ふし拜み。

○宵々毎の閼伽の水、むすぶたもとをもしほるゝに、あかつき起の風さえて、山路のつゆもしもとなる、法の道芝ふみわけて。

○笙歌はるかにひゞく孤雲の上、聖衆來迎す落日の前、仰きみる莊嚴淨土の庭。

○おもへば尊き法のみち、ふみわけてとふ人は只、即身成佛ときくものを、まよひの霧にさまよひて。

○唯一念の功力だに三惡の罪はきえぬべし、まして妙にも說く法の。

○無緣の布施をなすことも、これみな他生の緣なれば、思の珠のかずくりて、ともらひまをす讀經の聲。

○池の仇波よるとなく、ひるともわかではれまなき、心のやみにたぐりつゝ、修羅の卷にまよふ身の。

○いざ白木綿をかけまくも、かしこにこゝにみめぐりて。

○心に大悲の名をとなへ、利劍を額にわれしあてゝ、一心不亂に祈誓せり。

○ゆふ波千どり友寢して、所も須磨の浦づたひ、野山の風もさわかへり、心もすみの衣手に、讀經の聲のひゞくなり。

○玉垣くらき杉むらの、わくこゝろ今も神代なれ。

○淺艸寺の經の聲、祇園精舍もようなりならず、待乳の山の花のいろ、沙羅雙樹のことわりあり。

○うれ西方は十萬億土、とほく生るゝ道ながら、こゝにも心は彌陀の國。



○五衰の眠を無上正覺の風にさまし、光の影を法性眞如の月にみる。

○女體の神とおぼしくして、玉のとばりに玉の輿、ひかりかゞやく玉かづら、袂にまつふ小忌衣。

○久方の月の桂の男山、さやけき影は所がら、紅葉の錦てり添ひて、月もかげろふ岩清水。

○異香薰じて白雲一むら、うづまき下るとみるまもあらせず。

○はかなき人のことのはや、まづ生身を助けてこそ、後に佛身も願ふべけれ。

○面向不背の玉ゆらも、姿はなれぬ佛陀の俤、拜み奉るぞかたじけなき。

○志ある手向艸、花の蓮の妙法に、成等正覺を得たるしるしとて、淨土の莊嚴を示すなり。

○神と尊み佛と仰ぐも、唯これ水波の區別のみ、衆生濟度の方便のみ。

○和光同塵は結緣の始め、八相成道は利物の終り、佛の化生はうつしよの、衆生濟度の方便なり。

○前生又前生、かつて前生の先を知ず、來世又來世、何ぞ來世の終りをしらむ。

○五濁の人間をみちびきて、濟度の舟をよすといふ。

○知るも知らぬもわたさばや、彼國へゆく法のふね。
○心をすます峯の月、眞如の影をあふぎつゝ。
○わしのみやまの月の影、いく永劫のやみをかてらす。
○たきぎはつきぬ鶴林の曉、月はあきらかなり鷲嶺の夕。
○紫雲たなびく天上に、妙音美響のきこゆなり。
○法のともしびあきらかに、無明のやみをてらすなり。

## 靈怪

○あなすさまじや○れそろしや○みる〳〵○猛火は消えて○いづこともなく○燈火きえて○萬木ふるひ○山鳴り谷こたへ○身の毛のよだつ○物すごく○月くらく○雨うぼふる○風腥く○屋なり震動して○ふき起るはやちの風○うらぶれて○爪をあらはし○血しほに染みて○曉のともしび○風に姿は
○れそろく枕に雷火亂れ、天地一時に震動して、眼はくらみ心は亂れ、世にれそろしき限なり。



○夜嵐響すさまじく、松の梢におとづれて、惡鬼の姿はたちまちに影をもとめずなりにけり。
○恨みつめたる一念の、れもひはふかき蔦紅葉、いろもこがれてはひまとひ、れそろのかみのむすぼれて、とけぬれもひをいかにせむ。
○冷風おもてをうちて火は青く、山氣肌を犯して物凄し。
○妄念は恰も地獄の如く、のがれんとすればなみたてる、劍はやがて身をとほし、磐石忽ちほねを碎く。
○口は血をもる盆に似て、牙をならし爪を張り。
○あらはれ出でし異形の神、雲をつかむで宙になげ、梢を動かし岩をけて、砂の如き雨をふらし、電光石火とあれまはる。
○曉湘水を汲むで楚竹をたきしも、今に知らるゝ猛火の影、ほのみにそむる物凄さ。
○ふしぎや今まで有りつる女、たちまち化生の姿をあらはし、巖に火煙を放つとみれば、やがても虚空に炎をふらす。
○眼は百錬の鏡をとぎ、髮はさながら枯野のすゝき。

○風なまぐさくして鬼氣陰々、黯々として叢にもゆるあやしの火の影。
○迅風雷霆天地もうごき、かきくれみだれぬ暗黒世界。
○朱を吐く口はみえまでさけ、きばかみならしこゑあらげ。
○怪風一陣ともしびきえて、靈火一團もえのぼる。

## 舟
海、河之部參照

○はし舟○天のいはふね○舟をさが○世をうみわたる○たなし小舟○追手に帆を上げて○浪わけてゆく○岩樟ぶね○つながぬふね○ゆくふねの○とりぶね○うらかけり○鯨なす○沖つしらなみ○雲井をわたる○あるふうなばら○こがれ〳〵て○わだのはら○ちほの八百會（あひ）○よき風に○くろぶね○黒がねの船○軍艦（いくさぶね）○うき城○なみたつらしも舟人の、さわぐや磯の夕まぐれ。○山田矢瀬のわたし舟、夜毎にかよふ水なれ棹。○日影のどかにかすみつゝ、あさ庭きよき和田の原、千舟百舟こぎつれて。○海原わたる沖つぶね、手向すらしも岩波の、立てるありにそほしろく、かくるもながき白木綿や。○せとの入日の末はれて、うらよりかへるおきつぶね。○弓張り月の西の空、行くへさだめぬ海人小舟。○舟さしよするみなれ棹、うかぶ河瀬にかまめなく。○浮き沈みある世にくらぶれば、中々やすし舟の上。○水天渺々萬里のみち、唯一帆の風にまかす。○帆をあげては秋の風に送られ、棹をめぐらしては夜の月に隨ふ。



## 瀛船
海、旅行之部參照

○沖にかゝる○くろぶね○けぶりたてゝ○なみさわぐ○烟をのこして○浪路蹴たてゝ○跡なき浪にあとつけて○一むらの烟のこして○はしけ舟○あらなみけたてゝ○たゞ中に○いつのまに○瀛笛一聲○なみ立ちわさぐ○波止場の浪○はそばに立ちて○帆を上げて○舟をさ○はし舟○なるふねの○あとの志ら浪○鯨なす○棹かぢもなくて○海路はるかに○あとなみ路○わたのはら○千里をかけて○島がくれゆく○と

ほき境も○みる〳〵すゝむ○八重の汐路○夕さぬに○くろしほさわぐ○沖合とほく○港をいでゝ○風あれて○汐の八百路○雨ふり風さわぐ○外國をとなりにして○ゆめのまに○ひらけゆく世○波風もゝのならず○海あれて○いさましく

○みる〳〵船は浪路にきえて、煙たなびく大海原。

○浪を蹴たてゝ行く舟の、行くてにみゆる島の影、みる〳〵船はかすみつゝ、島かくれゆく浪の上。

○白浪をどりて玉をくだき、黒烟なびきてみうらをれほふ。

○雲なきうらに雲さわぎ、あとなき水にあとつけて、見る〳〵雲井にゆく舟の。

○帆げたにすさぶ夕あらし、なみまにをどるこゝたのうろくづ。

○浪にとぞろくいかづちのひゞき、鰭ふるわにやれうるらむ、うらに渦まく黒烟天翔るたつやれびゆらむ。

○いま横はまをたちいでゝ、はやさしかゝる大なだの、志ほ路の風もあるゝなり。

○いづこの島かとながむれば、なみぢの末の雲の影。

## 車 道路之部參照

○下すだれ○ゆきめぐる○よする車のをと○おどろ〳〵と○糸毛の車○牛のくるま○わだちの水○車を下すみちの車○馬立てなめて○雨驂騑馬○轜々として○殷々として○からびさし○馬にかはれる○すゝむ車の早くして○あじろ車○方車○小車○わたりゆく○手引(たびき)の車○めぐる車○めぐる輪

○加茂のみあれにひきつゞく、糸毛の車又檳榔毛。

○千さとのはても小車の、あとはかはらぬ君が代や。

○ちまたをいりぐ小車の、ひゞき賑はふ音きけば、ひらけし御世のさま見にて。

○ゆけばあとより又つゞく、力車の八ちまたに、ひゞきとゞろく賑はしさ。

## 汽車 旅行之部參照

○まばたくひま○烟のごとして○鐵軌の上を○たつけぶり○ゆげの力○くろがねのはし○ゆきちがふみち○しばしはくらく○土手の松原○いろぎゆく○ゆめの中に○ふるさとの山○あとになびきて○なるふねのひゞき○汽車のひゞき○汽笛の聲○ゆりとゞろかし○音もとゞろに○海さり山來り○いく山坂を越ゆ○車のとゞろき○山又水○野も山も○岩きりとほし○山送り川迎へ○近きはめぐり遠きは追ふ○停車場（すてーしよん）にとゞまる程○汽笛一聲黒烟吐きて、走るや鐵軌三千里。

○煙草くゆらし語るまに、たちまち走る十里のみち。

○いく山坂もつかのまに、こゆく火輪の軋りのうち。

○つきぬとさけぶ車長の聲を、きゝしは今とれもふまに、車聲殷々天地をゆりて、いこひし驛は雲の內。

○なく一聲に窓の戸あけて、かへりみすれば時鳥、社の森は雲の末。

○一聲高き笛の音に、車のひゞきとゞろきて、忽ちやみぢにすゝみ入る。

○吐き出す烟に月くもり、めぐれる車に地とよむ。

○烟は横はる幾千丈、鐵軌はとゞろく幾百里。



○つきぬとさけぶ聲の內、われおくれじと旅衣、ひきつくろひて下るゝ人。

○山又川畑又野、花あるところ水あるところ、驛路遠り谷むかへ、港は去りて森きたる。

○こがね花咲く菜畑を、よこぎり去ればくれなゐの桃の花さく山に入る。

○けぶれる山かすめる川、崎嶇羊腸の山坂も、たゞ時の間によぎりゆく。

○とりの翼もれろかなり、魚のひれも何ならず、山を越ゆ行き水をわたる、蒸氣の力のすさまじさ。

○とびゆく一瞬數千里、野ゆき山ゆき里ゆきて、花の都につきにけり。

○驛の鈴をしるべにて、雲わけ行きし箱根路も、むかしとすぎて滊車のみち。

○龍かも翔るとみるばかり、雲をれこして磯ぎはを、はしりくるまぢめざましき。

○三保の松原よこぎりて、れきつの濱もまばたくなかに、岩淵過ぎて富士川や。

○浦わを過ぐれば山又水、野をよこぎれば里に入り、里をすぐれば山に入る。

○けさふるさとをたちいでゝ、はや都へも近づきぬ、窓よりみれば、れほゞら

に、いまだてる日の影たかし。
○のりあふ人はさはなれど、いづれもむすぶともなき漲車の中。
○居ながらにして世にしらぬ、けしきをさぐるれもしろさ。

## 自轉車 電信、漲車、車之部參照

○ふむまゝに○れのづからすゝむ○心にのりてふむ○わが身をのせて○坂路になやむ○ゆきめぐりつゝ○人の力をからで○ひとりめぐりて○一文字○まつしぐら○風よりはやく○ちまたをはしる○鈴のれとたかく○くもをかすめて○矢よりもはやく○とぶに似て○馬も及ばじ○車も如かじ○こゝろみに○足にまかせて○つかのまに○風をきりて○なめらかなるみち○わきめもふらず○一足つゞに○ちゑのちから○砂の上も○めもくるめく○とりのつばさも及ばず○とぶよりはやき○世わたるみちも○行路難○二輪の車○心のまゝに○とるかぢの○いりぐみち○かよひなれたる○めぐる小車



○とりのつばさも及ばじな、とぶよりはやき車輪のはこび。
○知恵をちからにふむ足の、まに〳〵めぐる車こそ、ひらけしみちのうつはなれ。
○一瞬千里の言の葉も、いつはりならぬすみやかさ。
○人の力もからずして、れのづとめぐる小車の、わだちのあとぞひらけゆく、かしこきみ世のしるしなる。
○とびゆくまゝに風ふきれこり、まばたくひまに影きえうせぬ。
○あなやと叫ぶつかのまに、まのあたりゆく自轉車の影はゝやくも雲かすみ、あとかきゝえて地にのこる、轍のあとは一文字。

## 輕氣球 天、漲車、漲船之部參照

○人のたくみをかぢにして○みうらをはしる○うらのうみわたるふね○くものなみ○たゞよひのぼる○うらの上ゆく○人の心を帆にあげて○うらをかけゆく○くも井にのぼる○月のみふねも○しばしのほどぞ○うちとぶとりも○かろ〳〵と○見るがうちに○くもにかくれて

○人のたくみを力にて、のぼる雲井にかくれなき名をのこしたる輕氣球。
○みるまに影はかきくらぬ、きりにとぢられ雲にかくれ、大空たかくのぼりけむ。
○うらゆくとりもこのならず、つばさにまさる輕氣球。
○みうらを心のまゝにする、輕氣球こうひらけたる、世の飛仙ともいふべけれ。

## 電信 尋問之部參照

○ふみかよふ○雁をは待たで○とほつ人○天はせづかひ○一瞬千里○かちだより○昨日のたより○千里をも○たゞときのま○いまは隣となりぬ○文のつて○一すぢに○はりがねに○時の間の○千里の友も○千里をかけて○かねの糸すぢ○いなづまの○かぜのねと○矢よりもはやく○ゆく針金はほりけれど、いさをはふとき八千柱。
○空にかけたるはりがねの、千すぢの糸はかぎりなき、人の心をうのまゝに、世に織りいだす策なれや。



○世のひらけゆく力にて、たゞひとすぢのはりがねに、五百すぢ千すぢ限りなき、人の心をいはせつゝ。
○便の糸にことつげて、今みるよしのゝ花のさま、千里の友にかたらばや。
○かりを使ひと詠めけむ、昔の人にみせばやな、ならのみやこは何ならず、こゝもろこしもまたゝくひまに、ことゝひかはすけふのさま。
○都の花のたよりさへ、たゞつかの間に古里の、友につたふるねもしろさ。
○今まのあたりよみいでし、歌のけしきを歌と共に、千里へだつる友垣に、れとづれやりてかへしや求めむ。
○たゞ一筋の糸によりねもひ亂れし心のもつれ、ときしめすこそうれしけれ。
○一瞬千里風よりはやく、はしる力のすさまじさ、
○一すぢ動くはりがねの、ひゞきはうらにとよみつゝ、水なきうらに浪たてゝ、くものあなたにはしるなり。
○雲をさへぎる大山も、みうらをひたす大海も、たゞつかの間にひゞき去る、たよりのいとの力こそ、くすしといふもねろかなれ。

○雷霆とび去る三千里、迅風かけゆく幾萬程。
○只一筋のはりがねに、千々の思ひをまのあたり、人に知らするくすしさや。
○今朝とひやりしみよしの、花のたよりはこたへきぬ。

## 電話 電信、書簡之部參照

○いとにたよりて○かねのいとすぢ○ことばかよはす○たゞ一すぢの○
ひかりのまにも○いなづまのそれよりも○いとももあやしき○ちさとにか
よふ○時のまに○矢よりもはやく○かたりあひつゝ○人こそ見ねね○雲
井のよそにへだてゝも○ねながらに○千里の友と○かたりかはすも○花
のたより月のしらせ
○ひらけゆく世のたまものは、ほどをへだつる友にまで、たゞつかのまに言
寄せて、月よ花よとのどかなる、ことばを通はすめざましさ。
○空にひらめく稻妻の、うれよりはやきこのたより。
○雲井をよそにへだつとも、この糸筋の通ひなば、日毎夜毎にかたりあふ、そ
のたのしさはかはらじを。



## 電氣燈 夜之部參照

○やみの夜も○みよのひかり○夜もひるも○ひるよりも○ちまたをてら
す○月もいろなき○月にまがへる○いなづまのひかり○みやこの大路○
かねのいとすぢつたひきて○いなづまのかげをとゞめて○いさごのかず
も○あり〳〵と○ひるにもまがふ○葉櫻のかげ○ふるあめもふく風も○
あらはなり
○やみ路をてらす電燈の、ひかりはみよのしるしなり。
○濱の眞砂のかず〳〵を、よむにもやすき光りかな。
○花みる山に日はくれて、たち去りかねし木の下を、たちまちてらす電氣燈。
○ひるを欺く電燈の、ひかりをみればげにやげに、不夜城とこういふべけれ。

## 瓦斯燈 夜之部參照

○ちまたをてらす○夜はふけて○たゞりがれより○てらすひかり○ともし
びの花○石のあぶら○まばたきて○ちまたのしも○きえのこる○かすか

なる○花のごとく○やみもなく○つゞく瓦斯燈○みやこ大路○月のひかりもうばはれて○ありあけがたの○風のふく夜も○雨はふるとも○もゆる炎の

○かたらひゆけば夜はふけて、瓦斯燈くらし柳原。

○きねのこりたる瓦斯燈の、ひかりにさむきしものいろ。

○あかつきちかきうらのいろ、瓦斯のひかりもまたふきて。

○一時にともる瓦斯燈に、都大路に闇はなし。

## 時計 勉強之部參照

○時つぐる○くさ〳〵のたからも○みよのひかりに○業をすゝむる○柱にかけて○時ばかり○ふところにして○たが作りてか○十あまり二つの時○斗鷄のねと○うちもたがへず○こがねしろがね○かぞやかしつゝ○時のかず知る○やすむ間もなく○たづさへゆくも○なかきみぢかき針○めぐり〳〵て○をやみなく

○時計の針のたえまなく、ときのまたゆまずつとめなん。



○めぐる月日のはやさをも、針のうごきにあらはして。

○まなびのみちも時計（ときはか）る、器の針のをやみなく、めぐるが如くいうしまばいかでならざることあらむ。

## 鐘 佛閣之部參照

○かねのねと○ねよとのかね○ひゞきわたりて○午夜つげわたる○夜さむくして○しもよのかね○とりなきわたる○夕のいろ○つゆねきまさる

○さびしき空○風ふきあれて○花ふぶき○月三更○月ふけて○あかつきに○あけぬとつぐる○つらきかねのねと○なみだなりへそ○月にねちくる

○月靜かなる柴の戸に、野寺のかねの聲ねちて、見はてぬゆめの末さむし。

○光さやけき月かげに、街のちりも靜まりて、月三更のかねのこゑ。

○磯山松に月ねちて、霜夜をやぶるかねの聲、誰が故さとのゆめかとふ。

○契りし人をまつ宵は、ふけゆく聲をかこつなり、あかぬわかれの曉は、つれなき響をうらむなり。

○ねさめがちなる老の身は、むかしを今に思ひねの、ゆめぢをたどるかねのこゑ。

○世のはかなさをつくづくとれもひ入相のかねの聲、諸行無常とひゞくなり。

○名もたかさごの尾の上のかね、曉かけてれくしもに、さえまさりてはきこゆなり。

○御寺にひゞくかねのおと、つきぬや法のこゑならむ、きけば心ずみわたる。

○庭の松風れとたにて、しづかにふくる大ぞらの、月よりれつるかねのこゑ。

○三井のふる寺かねのおとに、むかしのこゑもひゞくなり。

○あしたのひゞきは生滅々已、入相の聲は寂滅爲樂。

○長樂のかねのひゞき、匂へる花の外に音づれ、龍池の柳の色、けむれる雨のうちにふかし。

○ゆきゝもたにてしろ〳〵と、しもれきわたす橋の上、いづこのてらのかねならむ、諸行無常をつげわたる。



○あらしのみちのそほければ、いたりいたらぬかねのれそ。

○かねのひゞきに月はくれて、ねぐらにいそぐとりのこゑ。

○吹雪に月の影ふけて、さえかへりたる鐘の聲。

## 机

讀書之部參照

○ならべてし○文机によりて○まどのたるあつめし○つく〳〵と○ひぢおきて○ふみひろげて○くりかへし○日影さしうふ○ひろげし紙に○かきつくる○むかふ机○れしやれば○南の窓○ずうる○よる○ふづくゑ○明くれさらず○朝夕に親しむ○夕日うつろふ窓の下、つくゑならべてふみよみし、むかしの友よ今いづこ。○學びのまどの文机に、よるともいはずまどろむや、やがて身にれくちりならむ。

○友があたりにやるふみを、かきさしおきし机の上に、もれてさしたる夕日影。

○梅さくまどに机をよせて、やぶうぐひすのねをぞきく。

○ひとり机につらづゑを、つく〳〵れもふ行末の、世のうきふしのかず〳〵を。

## 新聞紙 讀書、學問之部參照

○よしあしを○日ごと〳〵に○ふでとりて○ふでのいのち○かきしるすことと國かけて○ねながらにして○一方にかたよらず○世のことしげきよきたねを○あしかるたねも○たねひろふとて○みのなりはひを○はやきゝ知りて○世の人の耳目○日々にあたらしき○ふりうりありく○なには江ならぬ○よきもあしきも○あすはいかにと○日ごと開くるふみの道○ことうるはしく○清き言の葉○たゞしきみふみ○うましふみ○國つぶみ○ふでのすさび○すみかき○にひぶみ○けさめづらしき○天の下あめりのことと〳〵○もらさずのする○ねながらにして○たゞ一ひらの○朝めづらしくとるふみや、たゞ一ひらのものながら、天の下なること〳〵を、もらさずのせてねながらに、たよりつたふるねもしろさ。○手に取るからに世の人に、才と智を授くなり、是やまことにかけまくも、か



しこき思金のかみ。

○けに久延比古の神ならむ、ねながらにして天の下、ありのことと〳〵知らすふみ。

○まちてかをれる梅が香の、かぐはしきよりうれしきは、あしたのまどにうちひらく、世のことと〳〵を知らするふみ。

○ねながらにして天の下、ありのことと〳〵しられけり、こや久延比古のかみならむ。

○かくれしことも耳敏川、きくよりはやくかきなして。

## 圖畫 眺望之部參照

○ねながらに○なかぬとり○とびさらぬ○ちらぬ花○千代のはる○風も吹かぬ○水やうら○雲を起して○筆よりなれる○ふでのはなさく○山のたゞづまひ○水のながれ○山あをく○水もろし○みどりのいろ○たがかきし○一望千里○あぶら繪○すみ繪○蘆手に似たる○から繪○やまと繪○山とほくして水長く、めもはるの野のわか草の、みどりにつゞく松並木。

○花とこしへにさきて春つきず、樹は常にみどりにして秋をしらず。
○咫尺の中に千里をたゝみ、一沫の淡墨水天を分つ。
○花瓶のうちろ仙境あり、ちる花はちらざる花と光をあらそふ。
○河ながく山ふかくして麈平らかに、人はわたる山本の丸木橋。
○あはれ天邊の十二峰、君がとばりの袖にあり。
○寒松枝を交へてこゑあるごとく、陽臺かすかにして情あるに似たり。
○方寸の小天地、蝴蝶は常にとびて去らず、桃花長へに咲きて實を結はず。
○一片の石幾もとの松、とほきはあはく、近きはあざやかなり。
○机によりて一歩を運ばず、觀つくす江山千萬里。
○居ながらにしてみる異鄉の山、水にのぞめるたゞずまひ。

## 國旗 國體之部參照

○かゞやくひかり○東の海よりさしのぼる○朝日子の○きらめきて○波間をわけて○國のみいづ○治まれる世に○萬國の上にかゞやく○日章旗○われしたてゝ○いたらぬくまもなかりけり○世をこうてらせ○めぐみのひかり○まばゆきまでに○世界のはてまでも○のぼるいきほひ○御國の旗の朝日かげかゞやきわたらぬ國やある、六大洲中れしなべて。
○東の海よりさしのぼり、光まばゆくかゞやきて、世をこうてらせ朝日影。
○朝日の光のきらめくところは、やがても御旗の匂へるところ。
○草木禽獸れしなべて、めぐみ仰かぬものゞなき、皇國の旗の日の光、光にもるゝものゞなき。
○ひるとよるとの分ち知る、國のことく〳〵れしなべて、我が日の本の朝日の旗、仰かぬ國はよもあらじ。
○天てらす神の大みいづ、光まばゆくきらめきて、たなびく旗ゞ目のみはたかりけれ。
○たかくかゞやく日のみはた、あまねく世界をてらしつゝ、仰かぬ國こそなけれ。
○春猶寒き野蠻の城に、皇國のはたの光ゞきらめく。
○星の光月の影、けものゝ姿鳥のさま、旗てふ旗はさはなれど、生きとしいける物みなの、めぐみをうくる日のみはた、光仰かぬ物やある。
○千里へだてし外國に、とゞまるわれらがはらからは、みふねの旗の日の光、

あふぎて心やなぐさむる。
○世界無比なる國なれば、旗の光もふさはしく、地球をあまねくてらすなり。
○朝日の光に及向はゞ、眼くらみてたふるべし、皇國の旗の立つところ、いかで仇するものあらむ。
○目のいづる國の秀てたる、すがたをゑがく日のみはた。
○きらめく光はあらひと神、あきつみかみの大御稜威、こき紅はやがてわが、陸海軍の心のいろ。

## 刀劍 國體、勇氣之部參照

○きらめくひかり○秋水三尺○しも白し○風さむし○金龍はしる○腰の一ふり○ぬけば玉ちる○肌さむし○水もたまらぬ○妖魔をはらひ○日本男兒の荒魂(あらたま)○閃々晃々○かゞやくいろ○匂ひみだれ及○うちかざし○さやのうち○やきばのにほひ○やき太及○御代の光○みがけやみがけ
○わがこの腰の一ふりは、わが身のためにぬくものならず、只君の仇國の仇、きりすてむためのずかむため。



○秋水三尺しものいろ、日本男兒のたましひ。
○水もたまらぬ秋の霜、一たびふれば風起り、二たびふれば雷電(らいでん)とゞろき、三たびふりては一天清し。
○はくや十つかのこまつるぎ、一たびぬけば鬼神退き、二たびふるへば妖雲をさまる。
○閃々晃々きらめく稻妻、水もたまらぬきたひの名刀。
○月れつる時星ながれ、雨かつはれて虹あらはる。
○神の敵人の仇、ほふりつくせ日本刀。
○腰にとりはくつるぎ太刀、事しあらばとみがきても、翁さびゆく身をいかに。
○光はたかく雲をつき、北斗にかゞやく影すごし。
○朔風雪をふき送り、沙水遙に布をさらす。
○ぬき放ちたる秋のしも、きたをあらふ人のいのち。
○刀は利器もて旨とはすなれ、かざりありとて何かせん、人は德もて旨とはすなれ、技藝ありとてたゞへむや。

○國を守りのこの刀、身の私にぬくべしや。
○秋水三尺妖魔を拂ふ、光にかゞやく北斗の影。
○ぬけば玉ちる氷の刃、きら〳〵きらとかゞやきて、走る稻妻流るゝ星、きらめく光に似たりけり。

## 砲銃

○とりもちて○さゝげてつかふ○天地にひゞく○萬雷れちて○けむり逆まく○村田銃○嵐のひゞき○天柱碎け地維かたむく○うちたつる○はたゝがみ○電光きらめき○黒雲れこり○天をゆすり地を動かす○矢玉の霰○破裂丸○日本男兒の○城角くずれて○烟うづまく○大づゝ小づゝ○とゞろくひゞき○雲はれて○はらひつくして○賊巢めがけて○一發適中○御代をまもりの大砲小砲、よのうきぐもをうちはらひ、常にさやけき空をみん。
○敵の城郭めがけて放つ、一發適中さかまくけむり。
○百雷〳〵づるゝ大砲小砲、どつとあげたる鬨のこゑ。



○大和男兒がとりもてる、世界に類なき村田銃。
○敵壘めがけてうちはなつ、つゝのひゞきのすさまじさ。
○ねらひたがはぬつゝ先の、うごかぬ心はますらをが、み國につくすまことなり。
○發矢一發空をきり、おとにこたへて敵將は、馬よりおちて死にてけり。
○攻城砲の一發に、流石にかたき敵城も、けむりの中にくづれけり。
○空なりひゞき風ふき起り、百雷とゞろくつゝのおと。
○けむりに四方も見えわかぬ、修羅のちまたの砲の音。
○精をすぐりし一隊の、射手のねらひはあやまたず、猛りてすゝむ白馬の隊は、物のみごとにたふされて、殘るは風にちりとちる、秋の木の葉に似たりけり。

## 祝賀

鶴、松、新年之部參照

○明らけき○み代のめぐみに○すみよき○四方の民草○國つ民○たのしかる世○めぐみあまねき○あふがざらめや○わが君は○いのるかな○神

もしらじな○すみまさる○御代のためしを○うるほふ御代○かぎりなき
○ますかゞみ○秋つしま○かぎりもあらじ○大八しま○あし原や○浦安
の國○千代のためし○ゆたけき○みち代長月○神代より○ひらけゆく代○
ひじりのみよ○神のまもり○時つ風○御代を八千代○つぎ〳〵に○えぞ
が千島も○さかゆべき○めでたき○千世萬歳○松風のねと○國ぶり○氏
やすく○曇りなき○かけてぞあふぐ○ときはかきはに○いく世へん○つ
きせぬよはい○百千たび○千世の數○とはに榮へん○いくかへり○なが
き世の○あそべる龜○まふつるの○千代までも○萬代よばふ○千世のあ
りかず○八千代の椿○まつ竹の久しき○濱の眞砂と共に○よはひ久しき
○位山のぼる○とよさかのぼる○朝日のどか○うごきなき○みねの松風
○唉花のかをるが如く○梢のつるも千代をよぶ○猶こうあかね○風しづ
かなる○十日の雨五日の風○風枝をならさず○不二がねの高く尊き御世
○新高山の高きめぐみ○千しまの末高砂のはて○雨つちくれをやぶらず
○逢が島に○雲井につるの○正木のかつらくりかへし○もろしらが○と
もしらが○ためしなき此大御代○高砂のしま○霜雪の白髪までに○天地



のいやとほながく○いはふかな○動きなき
○來る春毎に一しほの、色まさりつゝ十返りの、花さくまでと契りても、松に
よそふる君がよや。
○けふを千とせの始めにて、いやさかゆかむやどの松。
○浪もをさまる四の海、三つの御寶よろづ代に、動かぬ御代こそめでたけれ。
○千島たか砂れしなべて眞砂の數をあつめても、君が」よはひはよみあへじ。
○雲井のどかにてらす日も、光をそふる君が御代。
○てる日の本の名もしろく、君がみいづは東の海、かぜやきのぼる朝日影。
○都鄙圓滿の雲の下、四海八州の外までも、波の聲萬歳のひゞき、長閑なる君
が代や。
○道直くしてわたる日の、東南に雲をさきり、西北に風靜にて。
○よろづのわきてあきらけく、普くひろきみめぐみの、つゆにうるほふ君が
代の、はるにあふ身ぞかしこきや。
○生く藥とも菊の酒、千代のほぎごとたぐへつゝ。
○菊のつゆ、つもりてつきぬこの泉、つきせぬやどの主かな。

○ゆうだすき千とせをかけて、足曳の山あゐいろのかはりなく。
○ゆたかなる代にすみのえの、濱の眞砂をふむたづも、久しきあとをとゞめつゝ。
○年に生ひそふくれたけの、よゝにかはらぬいろふかし。
○千とせふるてふ尾の上の松、ふく秋風にこゑこそかはれ、色は常盤のふかみどり。
○萬世ちぎる山人の、折るうで匂ふ菊のつゆ、うちはらふまに千代やへむ。
○紅葉ももらぬときは木に、よろづよかぎる峯の雲。
○千とせにすめる水の面に、やどれる月を大御代の、かゞみとしてやながめまし。
○生ひそふ松の枝毎に、千とせの數やこもるらん。
○末の榮も大原や、をしほの山の小松原、いまより千代をたのむかな。
○みがきの内の小松原、幾本となく生ひしげる千とせはよりの物ならず。
○今をさかりの君が代に、あへるはたれもうれしきを、花はいろ香にあらはれて。



○めぐみあまねき天の下、しげる草木のめもはるに、かぎりもしらぬ御代の末。
○千代萬代もいひふりぬ、何とうたはん君が代を。
○君が代は千世ともいはじ天の原、さすや月日の限なく、はてしなければ八百日行く、濱の眞砂をやがてうの、ありかずにしてかぎへばや。
○あさ日の里の日影草、とよのあかりのかざしにて。
○あふげばたかくこもりなき、かぎみの山の月みつゝ、明らけき世を祝ふかな。
○月日にうへて開けゆく、世には望みも大江山、こえていくのゝ末かけて、道ある時にあひてけり。
○久しかるべき君が代の、例にやせむ住の江の、幾千代しげる姫小松。
○はこやの山はつきせじな、さき匂ひたる玉椿、ふたゝび色はかはるとも。
○藐姑射の山のみねの松、ふるき木かげをあふぎつゝ、ときはかきはにかざりなき、御代をかけてもいはふかな。
○君が千とせを松の風、松は神代のものながら、春立つ毎にいくかへり、花を

さそひてさかゆらむ。
○我君のため國の爲め、祝ふ心は神やしるらむ。
○苔生(こけむ)す岩根うごきなき、世としるしるも猶こそいのれ君がみよ。
○君が千とせのみ榮を、松の尾山の千代かけて、常盤かきはにいのるかな。
○いやしげりゆくあし原や、千秋五百秋かぎりなく、しみ榮えゆく水穗の國。
○櫻かざして紅葉ば折りて、春と秋との折々に、遊ぶもみよのめぐみかな。
○のどかなる代にあふさかの、せきの清水の濁りなき、國のおきてにあみしつゝ。
○松ふく風もをさまりて、なみしづかなる浦安は、げにのどかなる國なれや。
○千代の始の春されば、やどにまづさくうめのはな、君がゝざしとをりそへて。
○千とせのためしわが君に、さゝげまつらむいにしへに、ありきあらずは知らねども。
○鶴といひはた龜といひ、千代萬世の限りあり、何にたとへん君がよを。
○松の常盤に萬代を、かけてぞ君をいのるなる。



○とにもかくにもながらへて、君が八千代にあひてまし。
○枝をつらぬる鳩のみね、くもらぬみ代は久かたの、月のかつらの男山、つゆもくもらぬ影みつゝ、君萬歳といはふなり。
○千代萬代と松風も、ふけゆく月の夜神樂に、合せて君をいはふなり。
○浪しづかなる四の海、八州のくもゝをさまりて、千歳をまつに吹く風も、枝をならさずのどかなる、此大代ぞたぐひなき。
○松のみどりのときは山、うらも千とせのいろはにて、君が代いはふ風のれと。
○龜の尾山のみねの松、君がよはひにくらぶれば、千代の影うふ心地して。
○春はのどかなり長生殿、月日は遲し不老門。
○光ある世の玉川の、川上すみて下濁らず、のどかによする河波の、かへすがへすもたふとしや。
○四海波なく風和ぎて、げに蓬萊の神の國。
○庭の小松はやがてその、梢にたづの巣をくひて、苔むす軒に朝日影、匂へる春の千代のかげ。

○いく春秋をかさぬらん、常盤の山の花紅葉。
○濱の眞砂をかぞへても、君が齡ぞかぎりなき。
○いさ延命の酒くみて、みよことほがむ千代八千代。
○昔よりいふ豐葦原、瑞穗の國の名もまるく、たゞ假初に生ひ出づる、草木もたちまちしみ榮につゝ。
○濱の眞砂の數もなほ、いかで及ばん君が代に。
○めでたきみよに逢坂の、關の杉むら千代かけて。
○風もまづかにならかしは、枝もならさぬ風きよく。
○國富み民もゆたかなる、秋津島根のうまし國。
○玉のさかづき延命の、仙酒にくまむ千代の春。
○羽根うちのしてとぶつるも、君が千とせをうたふけり。
○安達の眞弓本末も、よりてつかふる君がみよ。
○御うらにあふぐ朝日影、やどるもかしこ民のそで。
○せまきたもとにうれしさうへて、つゝみあまれるめぐみのつゆ。
○正木のかつらながき世の、ためしなりけり君がみよ。



○千とせを松の島臺に、行末いはふ鼠斗昆布。
○幾萬世を松山の、うの松の葉を君が代の、かずにかぞへて。
○棟木に鶴は舞ひあうび、池には龜やあそぶらむ。
○長汀十里の白砂のかず〳〵、幾萬代の末かけて、よむともつぎじ君がみよ。
○みやまのおくのつたかつら、かゝるためしに岩角を、なづるもつきじ萬代も。
○馬を華山の陽に牧ひ、牛を桃林の野につなぐ、めでたきみよぞたくひなき。
○うれしさあまる心のすさみ、一さしまはん高砂の、ふしおもしろきこの宴。
○千とせを契る姫小松、君し引きなばわれも又、八千代ふるのゝ若葉づな、つみていはゝん御代のはる。
○五日の風に十日の雨、時にあたがふこの大御代や。

## 卒業
學校之部參照

○けふしも折る桂の枝○まなびのわざ○をしへの庭を○花さきて○みのりをまつ○錦きて○父やまつらむ○母やまつらむ○ほまれをまひて○敎

の門をたち出で○世の海原にこぎいづる○けふのほまれ○うたひはやせや○ひかりかゞやく○いやさかにませ○前途は遠し○任重し○わか葉の匂ひ○月のかつらも○たつのあぎとの玉○雲井にのぼるきざはし○時をえて○いはふことばも○何とかいはんの○うれしさあまりて○いよ〳〵はげみて○ゆく手は長し○學の海を○山阪こえて○こゞしき路も○いさをは千代に○千代も八千代も○けふをりかざす○桂の枝をしをり○險しき道○高嶺の桂○桂のはやし○まさきくあれ○さちある世○わたりゆく世○富士のたかねも○琵琶の湖も

○學のまどのあけくれに、そゞてみがきしますかゞみ、きよき心の光をば、世にあらはさむ時はきぬ。

○國の光は日本の、もとよりくもりはあらねども、みがく心はますかゞみ、益々うへよ國のため、

○橘かをる園生にも、若苗生ふる田づらにも、君がめでたき卒業を、まちもむかへつゝいはふなり。

○つゞれぬのこに引かへて、錦の衣あやの袖かゞやける名を荷ひつゝ。



## 留學、洋行　航海之部參照

○萬里の波をしのぎつゝ○外つ國人にほこれ○匂ふ櫻の花のいろ○波平らかに○別はさすがにをしけれど○海なぎて○烟横たはる○名たるゝ灘を○名譽の光仰ぎつゝ○かへりこん日○學びのみちを外つ國に○めでたき歸朝○まさきくて○いざさらば○海つ御神も心して○國のためをて○ますらたけをの○わかれもをしからず○ゆけ快男兒○太平洋もなにならず○いさみすゝみて○外つ國迄もかゞやかせ○このほまれ

○君今去りて三千里、浪平らかに風清く、我が東洋の朝日のかげ、幾浦々のはてにかゞやく。

○帆綱にぎりてかへりみる、大海原の浪の穗に、わきたつ雲はやがて我、れもひのけぶりたち上り、うらになびくと見よや君。

○巴里のみやこの花ざのに、さきほころぶるいばらの花、里昂の町のおりもろに、ちはた八千はたれるきぬの、うのいろ〳〵をえらびきて、みくにのいろにうめよ君。

○君がいてゆく大ぶねを、うびらにれひて、うろくづは、めざすみなとにいざなへや。

○さらばとばかりともづなを、ときていでゆく大ふねの、けむりは海によこたはる。

○ほまれをれひてかへる日を、ゆびをりかぞへてまちぬべし。

○いへなるいもがひきなせる、みどりのまゆか山のはの、なびきて見ゆる海の上。

○たにぐゝみえしふるさとの、山もいつしかくげきにて、なみ又なみの海ばらを、いく日かけふはかさぬらむ。

## 送別

○たちわかれ○めでたきわかれ○壮圖のかどで○送る言葉は○いさみゆけ○うれしきわかれ○心よわくも○馬のはなむけ○心うすけれど○心のかぎり○一杯の酒○をしむとて○とくかへりませ○めぐしくも○道とほけれど○わかれを送る○空うちながめ○萬歳の聲うち合せ○かへりみぬ



○ますらをのとも○又めぐりあはむ○あふ坂山の○こゝめにぬ○いさましの君○わするなよ○ほまれを負ひて○單騎の旅に○心ひかれて○かぐはしの名○わがまつと○いつしかと○しるしばかりの○あかつき早く○風のたより○波止場の波を袖にかく○袖うちふりて○領巾ふる○帽子ふる○上野のかねの聲すらも、きりにしめりて何となく、心しをるゝ袖と袖、あわたゞしくも吹きたつる、滊笛のこゑもうらめしな。

○勇心勃々○たゞ萬歳をいはふのみ○かすむ春野にむつれし雲雀、へだてぬかげも只今宵のみ、のこるやつらき行やうき。

○みれくる波止場、みかへるふね、さらばの聲も浪路のをち。

○うちふる帽子もほのかにかすみて、みれくるたもと見かへる袖。

○西陽關とうたひつゝ、共にながむるうらの月、たゞれもかげにのこるべき、あすのうらこそかなしけれ。

○君と袂を別ちなば、誰にむかひて琴ひかむ。

○君がしらべし琴のねは、唯松風にやのこるらむ、あれみよ北へ行く雁も、友

の數にはゝなれぬを。
○雄心勃々壯士のかぎて、愉快に吟せよ陽關の曲。
○劒を杖きて行く雄圖の出途、萬歳々々手をうちて、たぐいさましく別れなむ、
○君は筑紫にわれは越、くも井はるかにわかれても、雁の使は忘れずよ。
○共にまなびし秋の窓、共に遊びし春の山、あゝなつかしき昔かな、けふのわかれを思ふにも。

## 戰鬪 古戰場、軍人之部參照

○うちいだす炮のひゞき○咄喊のこゑ○電雷風聲○きり入る味方○みだれぬ太刀風○なびく旗○あぐる叫喚○筒のけぶり○弓とりもちて○烟の中も火の中も○うちだす彈丸雨あられ○こまうちなめて○獅子奮迅の勢○かちどきあぐる○縱橫無碍○無二無三○たゞ一文字にとび入る一軍○右往左往○ならびて進む一聯隊○雨にそぼち嵐にふかれ○こまのいなゝき○大筒小筒○雷電霹靂天地を動す○太刀のひかり○死地にとび入る○



枚をふくみて○風雹露宿○風掃電擊○猛進奮闘○奮迅突馳の一大隊○電光石火と切結ぶ
○打ち出すれとは天地を動かし、うづまく煙は乾坤を沒す。
○蜘蛛手かくなはとり索も、爭ひかねてたじろくのみ。
○さしもかためし敵の陣、みだれてなびく旗のあし、散りぐ〳〵はつと磯千鳥。
○日もはや西にかたむけば、海陸二軍の敵味方、相引になりて引汐の、あとには聞の聲たえて、磯の松風れとすごし。
○劍をぬいて待ちかくれば、敵もれられて近よらず。
○味方の軍勢いろめきて、今かくづれんとみるほどに。
○切り込む刀うちれとし、難なくれさへてからめけり。
○浪路ほの〳〵明けりめて、仇とみにしはむれぬる鴎闘の聲かときこにしは、浦ふく風のひゞきなり。
○舟にはあまる闘の聲、陸には逆まく楯の波、月にきらめく劍の光、潮にかゞやく兜の星影。
○矢叫の聲闘の聲、天地にひゞきてものすごく、海山共に震動す。

○我れくれじと舟にのり、波にゆられて漂ふさまは、滄浪のうちに浮き沈む、水禽の群にさも似たり。

○心はれなじ忠魂義膽、屍は異にす河と陸。

○砲煙うらにくらくとも、赤きこゝろぞしるべなる。

○もののしやと大丈夫が、ぬく手も見せぬ手練のはやわざ。

○丁とうけたる刀のいなづま、生死をわかつ秘訣の刀法。

○縦横無得の太刀風に、木の葉の武者はちりにけり。

○抜合したる手練の切先、一上一下ときりむすぶ。

○由河をうごかす関のこゑ、天にひゞき地にみちて草木青山動揺せり。

○嵐にちるや花吹雪、かをりも深き苔の上に、朽ちぬ名のみをとゞめけり。

○うたれ〳〵今はたゞ、僅にのこる五百人。

○肥馬長鬣にむちあぐれば、旌旗十萬忽ち動く。

○大旗小旗翩翻と、朝風に吹なびかせ、野にみち山にあふれたる、雲霞の勢はしづ〳〵と、こなたをめがけてれしよせぬ。

○芒みだるゝ澤水に、馬に水かふれち武者。



○風のつゞみは片岡の、松の梢にひゞくなり。

○雲の旗手の夕日影、ありし血しほの色みせて。

○馬嘶きて風蕭々、晴兵線裏篝火まろし。

○白馬金鞍七八騎、蹄にかくる野分の風。

○遠方白き木枯に、血しほのつゆの玉ちりて、風にいろある末野原。

○一上一下手練の大刀風、れとらずまさらず見わにけり。

○れとろのかみをかきあげて、髻みじかく引きむすぶ。

○かねてなき身とれもひつゝ、國にさゝげしこのむくろ。

○獅子奮迅の勢に、ふみやぶらるゝ狐羣の軍兵。

○血をもていろどれ目のみはた、骨もてかためよ國の基。

○とるものゝふの雄心を、ひきはる眞弓梓弓。

○嵐にのこす矢さけびの聲、昔ながらの弓張の月。

○名こりれもけれ武士の、いのちは毛よりもかつかろし。

○遠くはなれし唐土に、月はいくよかゝよふらむ。

○一上一下一進一退、かたみにれろかはなかりけり。

○大刀をまくらの野べの秋、かたしく袖のさむけさよ。
○飛鳥の如くかいくゞり、ひるむをすかさず礑と斬る。
○修練の早業鷙鳥の如く、よるを蹴倒し打たふす。
○拳のさゐは稻妻の、いからを走るにことならず。
○たゝみかけたる太刀風や、拔つらねたる刄のいなづま。
○二龍雲間にたゝかひて、雨は忽ち金鱗をふらす。
○はやる心は春ごまの、とりつなぐべきすべもなし。
○すはやよせくる仇浪の、いくへ備へし舟の陣、いざ一もみに押流し、底のもくづとなしてみむ。
○しぼむかれ野の草の葉を、むくろのちしほにひたしつゝ。
○うがひにきづは負はねども、帽子のひたひに玉のあと。
○はしる血しほのたきつせに、ふりくる雨もいろあかし。
○一上一下縱横虚實、手練をこらす太刀風の、
○れのれとばかり一念を、こらしてうちこむ手練の早業。
○さゝ穗のやりを十文字、蜘手かくるや稻妻の、ひらめくばかりにつきいだ



す。
○轟然一發谷なりこたへ、煙なびきてあたりはみゐず。
○すはや大事といふまもあらせず、一時にどつとぬきすつる、衣の下には用意の小具足。
○帽子とびちり袖ちぎれ、血にまみれつゝたふれふす、屍は數へもつくされず。
○多くの屍あまたの血、のりこえふみこゐ逃げゆくかたき。
○大筒小筒れとたゐて、あとには虫のこゑもなし。紅うめし草の原。
○驚きあわてゝ逃げゆく敵は、風聲鶴涙浮島が原、我れれくれじと遁るゝさまは、斷指滿舟一の谷。
○たてし野營の旗の手に、秋風たかく吹渡り、はりしたむろの幕の上に、夕つゆ白くれきわたす。
○ふきなす喇叭のひゞきに、三軍の兵氣肅々、四山唯軍令のおとを返す。
○朝日のみはたうちなびき、忽ちれこる勝鬨は、天を動かし地をゆすり世界にあまねくとゞろけり。

○互にひかぬ獅子奮迅、鎖をけづる呵毘叫喚、伏屍累々鮮血流れ、この世ながらの修羅の巻。

○敵の作るやりぶすま、くりだす穂先は秋野の薄、味方の合する劒の光、閃く切先雲間の稲妻。

○血は涿鹿の河にうづて紅波楯を流し、濁浪屍を捲く。

○蝸牛の角の爭ひも、消ねて跡なき電光石火。

○水の逆巻くところをば、大岩ありと知りぬべし、弱き馬をは下手にたて、つよきに水を防がせよ、流れむ武者には弓弭をとらせ、互に力をあはせよと、いとこまやかにさしづして。

○大砲小銃れとたえて、かばねをてらす寒月の、影ものすごき荒野原。

○月ふけわたる小夜中に、ほことりもちて見わたせば、はるかにつづく敵營に、たくやかがりのかげすごし。

○草のそよぎもたゞならず、あたやひうむとかへりみて、足のはこびもはかどらず。

○なきつる虫のこゑやみて、長堤十里の風さむく、ほこのりよぎか枯あしの、しどろもどろになびくなり。

○天柱碎け地軸さけ、百雷一時にれつするかと、れもふばかりの筒の音、白烟みなぎりうづまきて、呵毘叫喚の軍の巻。

○松風濤々山鳴り谷こたへ、たちまち切り入る夜襲の敵軍。

○兜をとつて足につけ、鎧をとつていたゞく狼狽。

○つなげる馬にまたがりて、氣をいらちたるあてむちに、馬はをどりて主はれつ。

○かゞり火くらき陣營は、油斷をしめす計略か、はたをこたりを裝ふか。

○今夜の風雨は天のたまもの、篠つく雨にやりぶすま、ふきまく風の太刀あらし。

○この機はずすな、いざすゝめ、決河破竹の勢するどく、しや中軍をふみつぶせ。

○家をも身をもひたすらに、わすれつくす勇士の心、國家といへる二字の外、やどるはひとり死の字のみ。

○風ふきやみて小夜ふけぬ、今かたなも拾かゞり、夜襲の敵か人影うごく、

歩哨のつとめはこゝなるが。
○頭髪逆立ち目眥さけ、駿馬にむちうちはせのぼる。
○いさみてあぐるかちどきに、山なり谷もこたへつゝ。
○やがてとぎろく砲のねと、忽ち起るときのこゑ、時こう來れとものかげよ
り、ひうみし伏兵あらはれぬ。
○風の剣は吹雪をつんざき、硝烟むせび砲門氷る。
○一隊こと〳〵く倒るとも、みはたは立てむ敵の城。
○よし戰は利なくとも、みはたの下にわれしなむ。
○無明のやみの敵營を、朝日の御旗にてらすべし。
○敵も味方も入りみだれ、筒の煙に見わかず。
○きりはらひても拂ひても、なほ數まさるあたのむれ。
○忠勇無雙の大丈夫が、縦横無碍に切りまくる、獅子奮迅の太刀風に。
○太刀はをるとも矢玉はつくとも、敵の中軍つかではやまじ。
○敵軍魚鱗にうなふれば、味方忽ち鶴翼となる。
○河ふかくして舟みえず、秋たかくして馬肥えたり。



○みわたすかぎり野に山に、みちあふれたる雲霞の軍勢。
○篝火のかげかすかなり哨兵線、銃剣光はすごし秋のしも。
○ふきくる嵐は肉をさき、彈丸ほねをくだく。
○身を切るばかりのさよあらし、駒のたてがみれくしもの、氷の月をふきちらす。
○吹きしく吹雪にまたふくかぎり火、士卒をごらぬ兵營に、いなゝく軍馬のこゑたかし。
○空にとぎろくいかづちか、浪にきらめくいなづまか、煙は海にみなぎりて、天つ日影はいろもなし。
○あまたの傷はれひぬれど、みくにをれもふまごゝろは、りの玉の緒をつなぎけむ。
○わが事をはりぬいざ死なむ、敵にわたすなわがこの首。
○霞かきりかはた雲か、はるかに見ゆるうすけむり、まちし敵の船なるか。
○はしなくうちだす彈丸に、怒るは人と神のみか、浪さへあらぶる青海原。
○打いだす大砲あやまたず、みじんとなりて碎くる敵艦。

○一壘やぶれ二壘やぶれ忽ちみなぎる血潮の河、俄にきづく骸の山。
○仁義のいくさに敵かある、天心順ひ、人心むかふ。
○萬歳となふる勝どきは、山をうごかし谷をゆする。
○ひまなくうちだす大砲小銃、火花をちらす浪の上。
○霹靂一聲ねらひはたがはず、見る〳〵沈む敵のふね、うづまくなみの水のあわ。
○白旗たかし敵のふねぎきうたふなみのおと。
○血しほはながれて川をなし、かばねはつみて山をなす。
○時こうきたれいざすゝめ、かつべきいくさは今日なるぞ、勝つべき時は今なるぞ。
○すゝめや士卒、みくにを思ふ赤き心の其いろに、そめよふりつむこのゆきを。
○戰のにはにいさぎよく、花とちりにしまずらをが、心のいろのかぐはしく。
○わけゆくみちもしらゆきの、つもる野中の松かげより、はしなくいでくる敵の一隊。
○うちだす銃丸雨よりしげく、つきだす鎗先すゝきの如し。



○太刀の目釘のつぶかむかぎり、縦横無碍にきりまくる。
○日本男子の魂みよと、大音聲にのゝしりゝ、敵軍にらみて突立ちたり。
○さかもぎくぐり、虎口を犯して、すゝむや必死の一聯隊。
○とぐろく砲のねとすごく、きらめく稻妻かげまばゆし。
○山河にとぐろく銃のひゞき、天地にみなぎる黒けむり、軍はいまこう半なれ、味方のさまやいかならむ。
○天もこだまにかへすや勝どき、御祖の神もよろこびますらむ。
○わが日の本のやまと玉しひ、ます〳〵みがきて世界をてらせ、いよ〳〵みがきて地球にかゞやけ。
○いざ心よくゝみかはさむ、さけに別れの血潮をゝぎて、忘るな誓ひし今のこゝのを。
○ウラルの山は高くとも、越ねばなるまじ、みくにの旗のねひ風に、吹かれて上れますらをや。
○夕日かゞやく大旗のもと、劒戟の光枯野に冴ゐて、五千の兵士隊伍をゝゝのへ、軍令一聲大山うごく。

○天にとゞろく炮のねと、百雷一時にわちかゝり、地を動かす関のこゑ、山野ひとしくなりひゞく。

○家につたへし太刀はきて、げふ初陣の門出には。

○打ものとりては叶ふまじ、組みて勝負を決せむと、太刀なげすてゝ大手をひろげ、とんでかゝるを引きはづし、しさりて諸膝なぎたつれば、切られてがつばとまろびたり。

○渤海灣にさかまく大浪、福州の沖にあれたつ暴風（しまき）、何かはおよりれん日本男子。

○威海灣内夜寂々、劉公島邊燈火かすかなり。

○見渡すかぎり野に山に、あまる貔貅の幾十萬、一度にあぐる鬨のこゑ、天地もために震動す。

○むかふかたきの幾百萬、馬蹄のちりとふみにじらむ。

○大炮小銃天地にとゞろき、千軍萬馬縦横にさわぐ。

○天地を動かす百雷のひゞき、雷光走り剣光ひらめく。

○弾雨を冒し硝炮を拂ひ、奮迅突馳の一聯隊。

○喚喚の聲はいかづちと、とゞろきわたる修羅のみち。

○きりつきられつ阿毘叫喚、血しほにうむるからくれなゐ、仆れかさなる屍は、敵と味方のわかちなく。

○よせつかへしつ敵味方、しばしは勝負もわかざりき。

○たちまちひゞくせめつゞみ、どつとあげたる吐喊の、こゑの下よりれしよする、雲霞の如き大軍は。

○きりつきられつれひれはれ、しばしたゝかふほどこそありあれ、どつとあげたる吐喊の、聲のうちよりきりかゝる、いきほひはげしき敵の伏兵。

## 將軍　軍人、勇氣之部參照

○劒太刀手にとりもち○一軍をごらず○つるの一こゑ○すゝめと叫ぶ○柳のいほり○ものゝふの臣のたけを○武士の大まへづきみ○千萬の軍師ねて○けだかき姿○威儀堂々○金覆輪のくらおきて○こがねの太刀をさげはきて○松のこかげに身をよせて○れのづから清く秀でし○采（ざい）うちふりて○軍旗みだれず○朝風に○夕あらし○鬼神もれうる○山を抜く○天

地を覆ふ

○殺氣に動く八千艸の、葉末にさゆるしものいろ、駒をとゞめて將軍が、ながむる方に白旗の、風いさましくなびくなり。

○軍容たかき將軍が、威令になびく陣營の、ゆるがぬさまぞいさましき。

○佩きたる太刀のこがねの光、つけたるよろひのをどしの色。

○一たび下す號令に、壯士をどらず馬嘶かず、麾下三千の旗風は、みだれずうらになびくなり。

○萬馬いなゝかずして號令をきゝ、諸營こゑなくして耕耘を樂む。

○天地をめぐらす指揮號令、鬼神を動かす練磨の強兵。

○日もくれがたのうらあかく、なびく旌旗は野に山に、みち〳〵たりし劒戟の。

○風にこゑある五萬の大軍、ひきぬる人はうも誰ぞ、天地に名たるゝ鬼將軍。

○兵法武略にすぐれたる、勇膽斗大のますらたけを。

○けうしも故郷にかへる波、よるの錦の直垂に、萌黄匂ひの鎧きて、黄金作りの太刀佩けり。



○雨とふりくる彈丸を、右に左にかいくゞり、聲を限りにすゝめと叫ぶ。

○大將軍のいでたちは赤地の錦の直垂に、紫裾濃の御着長。

○一聲さけぶ軍令に、百萬の兵しづまりかへり、隊伍みだれずすゝみゆく。

○小たかき岡の松蔭に、馬をとゞめて見渡せば、敵の旌旗の朝風に、みだれてみゆる廣野原。

○大波かへしてせめくるかたき、必死となりてさゝふる味方、すゝめ〳〵と聲かぎり、命のかぎり叫びつゝ、眞先かけてすゝみゆく。

## 兵士 勇氣之部參照

○つはもの○ますらを○金鐵の心○鐵石の心○かたまつゝ○天地を動かす鬨の聲○秋高くして馬肥ゆ○、曜叭のひゞき○つゝとりて○矢玉のあられ○矢玉の雨○つるぎの霜○切りこむ敵陣○騎馬の兵○歩兵○撒兵○輜重兵○魚形水雷○水雷艇○旗手○先鋒隊○恥をしりたる○矢竹の心○ひきかへさむや○匂ふ櫻の花の武士○太刀とりて○銃(つゝ)とりて○とり銃○ほことりて○きらめくいなずま○國のため○君を忘れぬ○

いかり猪の○電光石火と切りむすぶ○晴兵線○篝火くらき夜營
○糧うち食ふひまもなく、ぬれたる衣ほしもあへず、進みたゝかふますらを。
○矢玉の雨を冒してすゝめ、太刀の稻妻くゞりてすゝめ。
○忠義のかぶとかしらにいたゞき、いのちをすてゝすゝめやすゝめ、雪にみちなきやまなりとも、浪にはてなき海なりとも。
○屍を馬革につゝむとも、名は竹帛につたふべし。
○ますらをの名を殘さむとには、もとより死をも辭すべきならず。
○ひきてかへらぬ梓弓、矢竹心の一すぢに、思ひつめたる精忠義烈。
○進むで額に痛手は負ふとも、逃げてそびらに手疵はおはじ。
○いつか我が、草むすかばねてらすらむ、戈とりてみる今宵の月。
○黑髮けづる朝あらし、肌をあらふ夜の雨。
○馬上にくるゝ秋を送り、露營に來る春をむかふ。
○神のたすくる御いくさに、あだなす國のあるべしや。
○いざ事あらば國のため、高きいさをゝあらはして、千歲朽ちせぬ名を殘さむ。

○我が日の本の大丈夫は、いでやたゞひもあらしふく、木末のさくらいさぎよく、ちりてゞ殘すはしき名を
○大御心をやすめずは、生きてはかへらぬますらを。
○執りしつるぎを握りつめ、拳かためてゆるがざる、忠義にこれる鐵石心。
○ふみこめ人々水火を犯して、世界に秀でし氣象を示せや。
○戰へ人々火花をちらして、世界に類なき忠義を示せや。
○玉ちるつるぎはみさをの姿、いざふれ一太刀秋のしも。
○わが魂は大君に、捧げまつりしものなるゞ、水も炎も何かある。
○とびこめつるぎの霜の上、進め矢玉の雨の中。
○萬夫無當のものゝふが、縱橫無碍にきりまはる。
○れつるゝなかれれつるゝな、敵は幾萬ありとても。
○よし幾萬の兵にもせよ、敵は烏合の軍なるゞ。
○男兒一たび國をいでゝ、君が御楯と戈とるからは、いのちはもとよりなきものぞ。
○かしこきみことをあふぎつゝ、すゝむも雄々しき義烈のつはもの。

○力の限りつくしつゝ、のちにたふれてやまむのみ。
○丈夫のみちはたゞひとつ、身をすてゝ家をすて、たゞ大君につくすのみ。
○かばねを曝していさをゝのこせ、血をもていろどれ戰地の草葉。
○敵軍亂れ敵の旗動く、進むはこゝぞいざすゝめ。
○日本男兒の眞心は、君が代まもる國のたて。
○いざ〳〵すゝめ、とくすゝめ、今こそ勝つべき機會なれ。
○日本刀の味ひを、見よやとばかりにふりかざし、敵陣さしてきつしぐら。
○國のためとてすてし身の、かばねは骨とくちぬとも、其の名はくちじ千代八千代。
○御國のためにすてし身の、かばねに生ふる千草には、大和錦（にしき）の花やさく。

## 遠征 旅行之部參照

○征衣のうで○ながめやる○馬いなゝきて○かへりみる○ふるさといづこ○かばねをてらす○百萬の征客○月をながめて○錦をかざる○狼のこゑ○虎吼ゆる○荒野の末に○こまもろこしの○ウラルの山風○シベリヤ嵐○駒をたてゝ○落日あかし○弓をまくらに○ゆめやいづこ○妻子やいかに

○秋風寒く馬空に嘶き、月きよくして劍腰にをどる。
○征衣の袖にしもさだて、雁がねわたる秋の山、故郷のうらにさも似たり。
○いざゆけ丈夫、死するはこの時、ほまれの旅路ぞいざやゆけ。
○進め日本の快男子、飛び入れ皇國の大丈夫、わが神國の秀靈なる、稜威を示すは今日なるぞ。
○あしたに浦しほの海をわたり、夕べにウラルの山をこえ、たゞちにさすや魯國のみやこ。
○北洋氷りとざして寒風肌を刳き、曠野ゆきふりつみて、罷熊ひる吠ゆ。
○馬を風霜氷雪の野にはせ、船を南天欅金の港につなぐ。
○征衣はさもし北の風、故郷をとほし敵の國。
○喇叭一聲ほがらかに、さゆるしもよのゆめさめぬ、遠征萬里征衣かろく、傾く月に故郷をおもふ。
○蒼波路とほくして雲はてもなく、まらず征客の涙數行なるを。

○道なきみちをすゝみゆく、心の駒のひとすぢに。
○虎ふすこまの野に山に、いくよ夜營の月をみし。
○あつき境もさむき地も、ますらたけをが、金鐵の心を碎く力なし。
○戈をとつて月にうたふ征客の淚、軍門霜みちて斜雁とぶ。
○征衣の袖に霜さえて、ながめかなしきとつ國の、荒山陰の秋のくれ。
○喇叭一聲ゆめやぶれ、戈とりてたつますらをの、かみふきみだすさよあらし。
○金門の胡角夜半になりて、征鼓のひゞき杰きりなり。

## 夜營 夜之部參照

○夜はふけぬ○野込のつゆしも○友よぶ狼○ものすごく○ふけゆく月○あらしのひゞき○野分の風○天幕(てんと)にかゝる弓張の月○ゆめやいづこを○わぎもこと○國をいでゝ○家路をゆめの○つゆふけて○寒月すごく○風あれて○志も杰ろく○きらめくひかり○すは夜討○故郷いづこ○かゞり火消えて夜蕭々、夜營の兵もふる里を、けむりの末にゆめむらむ。



○篝火あをく月ふけて、友よぶ狼聲すごし。
○青葉の血しほ風なまぐさく、月は夜營の上にくらし。
○屍あさる狼か、夜襲の敵の攻めくる聲か。
○かゞりびきえて夜寂寥、夜營の床をてらす月。
○夢はいくよかふるさとの、山又水をめぐるらむ。
○夜半の喇叭の一聲にすはやとばかり身を起し、枕をけつて立つますらを。
○風のひゞきに夜はふけて、天幕(てんと)をもるゝ月の影。
○晴兵立てる軍門の、夜半のかゞりび影くらく、斜雁數行こゑかなし。
○ゆめにもわすれぬ忠勇の、かたき心は山をぬく。
○夜營の床にねざめして、つく〳〵われもふるさとの、妻子やいかにすぐすらむ。

## 水雷艇 勇氣之部參照

○浪を凌ぎて○風雨にまぎれ○すゝむ數艘の必死の一隊○おくれずすゝめ○風のひゞきか○わたつみの神やいかれる○百雷のひゞき○咄嗟のあ

ひだ○さかもぎ木やぶり○闇を破りて漕き入る○あめあられ○速射炮○炮
門凍る○寒月うらに影冴えて○志づ〳〵と○あなやとばかり○ならびて
すゝむ○死地にのり入る○暗潮さかまく
○闇にまぎれて沖とほく、夜半のあらなみうちやぶり、數艘の艇隊枚をふく
み、蕭々として進み行く。
○黒潮さわぐ灣内の、夜半のあらしに紛れつゝ、必死となりてのり入る一隊。
○逆茂木やぶり浪わけて、敵船近くすゝみよる。
○劉公島か軍艦か、浪間にひかるともしびは、風ふきあるゝ灣内の、やみをや
ぶりてゆくふね。
○やみをやぶりてゆくふねの影もいつしかくろひて。
○霹靂一聲電光みだれ、石火はしるとみるまもあらせず、浪間にをどる鯨鯢
は、敵の旗艦の沈むなり。
○必死をきはめし三十人、敵艦間近くすゝみより、一發はなつ水雷火。
○わたつみかみやれをどろける、こゝだの魚もをどるなり、浪間をくゞる稻妻
の、ひかりはすごき水雷火。



## 地雷火

○をゞろくひゞき○地盤をひきさく○土砂まき上げて○けむりにきゆる
一隊○天地ふるひ○虚空はるかに○はやちの風○なゐふるひゞき○一發
二發○一度に起る○敵壘間近くすゝみより○神ならぬ身の○風よりはやく○みぢん
となりて○碎けちる○すさまじな○れうろしき○肌さむし○こだまかへ
して
○敵壘めがけてすゝむ一隊、あなやといふ間もしら雲の、逆まきのぼると見
るばかり、をゞろきあがる地雷のひゞき。
○勝にのりたる一軍の、追ひくる勢すさまじく、さゝへかねたる折しもあれ、
足下に起る百雷のひゞき、天地忽ち震動して、みぢんとなりぬ三十騎。
○敵の進路をはかりつゝ、こゝにかしこにふせおく地雷火。
○時分はよしと火をきれば、地軸ふるひて風起り、かなたこなたの敵軍は、
一時にみぢんとなりはてぬ。
○草のかき葉の末わけて、心をくばる一隊は、地雷のあとをさぐるなり。

○天日くらく雲漠々、風ふき起りてものすごき、地軸のひゞきはりも何か。
○いさみてすゝむ神軍の、たけきみいづにけれされて、地雷のたくみもむな
しくなりぬ。
○土砂ふきまきてたちのぼる、炎の光は神龍の、みうらにをどるかとばかり
に、見にて身の毛もよだつなり。

## 凱旋 祝賀之部參照

○いはへいはへ○錦の御旗かゞやかし○かちどきあげて○うちつれて○
父やまつらむ母やまつらむ○いはひの酒○軍がたりに○功名ばなし○あ
かきこゝろ○ひかる名譽の勳章○うたへやうたへ○朝日に匂ふ山ざくら
○萬歳あぐる勝閧○朝日の御旗なびかして○しこの夷を平らげて○仇う
ちかへる○かゞやく日影○ほまれをになふ
○大君のため國のため、死ねといはれし父母は、此かちいくさきゝまして、い
かによろこびましまさむ。
○あなうれしよろこばし、このかちいくさいざ祝へ。



○戎衣の上に錦きて、かへる故郷の春のうら、桃も櫻も色うへて。
○かへる御國にかちどきの、聲うちあげてはらからは、こをどりしつゝまち
ぬらむ。
○かちどきあげてむかへとる、凱旋門下の春の日に、ひかりくまなき日の本
の、譽を負ひてますらをは、國旗の下につどふなり。
○ほまれのひかりよろこびの、かちどきあげてかへりくる。
○旌旗みだれず百萬の、忠勇義烈の皇軍は、萬歳の聲に送られて、花の都に入
りにけり。
○父やまつらむ母やまつ、にしきをかざる凱旋の、たぐひまれなるよろこび
を、いつかとをよび折りつゝも。

## 勳功 名譽之部參照

○たかきほまれ○ひかりかゞやく○たぐいまれなる○國のいしずゑ○勳
章のひかり○世界にかゞやく○やまとますらを○故郷さして○功名とげ
て○日のひかり○朝日の光○いさをゝ立てゝ○金鵄のひかり○世をてら

す○ほまれは千代に○千代かけていはへ○いさほを仰ぐ
○清きみさをは日の本の臣のかゞみと輝きて、世をこう照らせ御靈代。
○たかきいさをは天つ日の、てらさむ限りきはみなし。
○いさをし立てゝかへりなば、胸にかゞやく金鵄の章、ほまれは世にかゞやかん。
○むねにかけたる勳章は、ほまれの光をかゞやかし。
○ほまれは千代もかたりつぎ、いひつぎゆきて生の子の、はや八十つゞき傳ふべし。
○むねにかゞやく勳章の、あかき光はほまれのひかり。
○硝烟彈雨の間をも、おそれぬ義勇をあらはして、むねに輝くほまれの光。
○うたへうたへ君がいさを、祝へいはへこのかちいくさ。
○雨にうたれ風に吹かれ、書はひねもす夜は夜もすがら、つくす力はけふこゝに、ほまれの光ときらめきて、千古萬世をてらすなり。
○とよさかのぼる朝日子の、光くまなき君が身の、譽は千代も消えせじな。
○千代に八千代にかたりつぎ、いひつぎゆかむ君がいさをのほまれの光。



## 教訓 學校、男女、勉強、處世之部參照

○さして敎へよ○あまるめぐみを忘るゝな○たゞしき道をふみてゆけ○心の道○幾千萬の言の葉○唯一すぢの道○小みち枝道數多けれど○怠たらずたどれ○心の駒をれさへつゝ○うつすみなはの一すじに○なほきを竹の心にて○後れずすゝめ文の道○たゞ怒り猪のひた道に○いさむ心をはげまして○惠の露のれきあまる○をしへの道をふみわく○敎草しげる道○心まどはで○をれぬ心はくれ竹の○いうがばまはれ瀨田の橋○たゆまずうまず○ゆたかなる世の春の道○花になれたる人心○世をうみわたる○涙なき身の人かある○れごれるものは久しからず○こゞしき山のみちとても○しきしまのやまと心○神ながらの道○敎の庭○庭の敎○れほしたつ○撫子○鐵をも碎く○千辛萬苦○葉かへぬ松のみさをにも○雨にさらされ雪にうたれ○日本男兒（やまとをのこ）○日出づる國のますらを○學の道の奥○敎の道は多けれど
○弱きは強きにまさるなり、柳の枝には雪折れなし。

○唯怠らす勉むべし、愚公も山を移すなり。
○げに楊震が四知の戒、壁にみゝある世なるをや。
○山に黄金の花ざさく、換へむか君が位記官職。
○海に眞珠の實あり、換へむか君が五斗の米。
○毛をふき疵を求めやせむ、むやくのことをゆめなせそ。
○勞して功なきのみならず、艸うち蛇にねどろかば、後悔ほぞをかむとも及ばじ。
○笑みの中にも及をかくす、うばらの花にこゝろせよ。
○天に向て唾せば、勞して功なきのみならず、うの昏忽ち身にいたらむ。
○上みれはかぎりなき世ぞ、星よりもあかき月影、月よりもあかき日の色、上みればかぎりなき世ぞ。
○子を養ひて教へぬは、父がつとめの怠りぞ、教へてねごそかならざるは、教ふる人の怠りぞ。
○心の駒にむちうちて、うまずいそかず怠らず、學の道にすゝめかし。
○苗代小田に引く水の、うるほふ程こそよろしけれ、あふるゝばかりせき入



れば、畔さへ遂に崩るべし。
○守るは即進むの初め、進むはやがて守るの基。
○烈しく防ぎてきびしく拒みて、弛まず守れ撓まず護れ、ひたすらに。
○學のちまたは路廣く、西に東に別るれど、いたるきはみは一筋の、皇國の道の外ざなき、たゆまずうまず學べよや。
○君には忠に親には孝、文事を修めて武技をも習へ。
○七たびころび八たび起き、くじけぬ心もちてこそ、つひには名をもあぐべけれ。
○身のなほざりに怠りて、月日をあだにすごすなよ。
○日本男兒は大海原の、八重の潮路もひたわたりゆき、雲の向伏す孤島のきはみ、白波さかまく荒磯の限り、八十綱かけてひきよせきたれ。
○よし人ごゝろうもくとも、むかふかぎみのうらみずよ。
○さし出る月のくまなき影は、いづこのはても皆同じ、都もひなも海山も、へだてぬ光に做はぎや。
○八重山吹の一重だに、人のゆるさぬ枝折るな、花こそものはいはねども。

○我がみのれもくなるまゝに、うつむくいねの心もて、渡らましかば世の中を。

○互に助くる世の中の、なぞことはりにたがふらむ、勝つも負くるも打つ石の、白きくろきはれのつから、しらるゝものをあなあはれ。

○花の吹雪に道たにて、柳のいとの西東、亂れにし世を春風の、ゆたけき御代に忘るなよ。

○波風あらきわだの原、走る濱船を見ても知れ、常に針路を定めなば、いかでか世にはたゞよはむ。

○あまるは足らぬを補ひて、救ふが人のつとめなる、あはれむべきをあはれみて、世を益するは人のみち。

○千辛凌ぎて、萬苦を犯して、撓まずすゝめ險しき山道、危きしほ路。

○よき程々にふしありて、つもるゆきにも撓めども、さすがに折れぬ呉竹の、直き姿にならへかし。

○人のこの世をふるころも、針目曲げては縫ふべしや、袖つまあはぬわざなさば、れのが肩身やせまからむ。





○しもに葉かへぬ松が枝は、千とせの色にぞ榮ける、辛苦にたふる人こそは、終にいさをゝたつべけれ。

○開けゆく世の人の道、すゝむを遮る關はなし、心の駒にむちうちて、ちさとの外の富も得よ。

○矢瀬の舟はゝやくとも、いそかばまわれ瀬田のはし、正しき道によらねば、盧わけ舟はさすらふる。

○人をくだせば最上川、みもいなぶねのいつかまた、くつがへる瀬にあはじやは。

○海となるべき山水も、しばしはくゞる岩のかげ。

○底ひ知られぬ青淵に、浪やはさわぐ山川の、淺き瀬にこそ浪はたて。

○水底きよみさゞれ石の、かずもよまべく見えぬるは、水の心のすめばこそ。

○誰かりの身をかこつらむ、人のこの世にたつ者は、世をかこちてぞ身もたゝむ。

○一たび叱咤する時は、三軍なびく大丈夫も、なほ彈丸の一つには、斃るゝ人の身ならずや。

○われはむすばん松の枝、常磐のいろにちぎりつゝ、大かた人は八千草の、仇なるいろにうつろへど。

## 夢

處世之部參照

○ゆめのたぐち○ゆめのうきはし○こてふのゆめ○みじかきゆめ○ゆめてふもの○ひとよのゆめ○うき世はゆめ○老のねぶり○夜をのこす○ゆめもくだけて○夢路にさはる○ゆめの世とうべもいひけり○うつら〳〵○みはてぬゆめ○夢の名ごり○まどろむゆめ○さめはてぬ○ねざめの床○ゆめのうちの夢○ゆめかたり○ながきゆめ○春の夜のゆめ○手まくらの○はしなくも○のきばの松にふく風○はかなくさめきにてあとなき○夢の末とふ○むすぶともなく○なつの夜のゆめ○華胥の國○莊子がゆめの○南柯の一夢○仙鄉に入る○黃粱一炊のまとてもみるべきゆめならば、などうるはしきゆめはみぬ。

○とてもかくても人の世は、いづれか夢の外ならぬ、いざ花影にひとねむり。

○春苑の朝にゆめみる漢宮の花、秋風の夕にわびしく吳宮の月。



○三千里外の友どち、肱をまじへてかたりつゝ。

○むかしの世々の人々と、席を列ねてかたりつゝ。

○ゆめかうつゝか故里の、山又水のまぼろしは。

○吹きくる風におどろけば、かりねのゆめはさめてけり。

○悠然として肱枕、身は驅々とゆめの國

○いつ故鄉にとれどろけば、忽ちさむるよはのゆめ。

○その夜のゆめにゆくりなく、われはたのしくうるはしき、園生の花にむつれけり。

○夢路の舟は汽車より早く、いつしかゝへる故さとの、山又水の末きにて、身は早くあり父母の前。

○春の野邊ゆく心地して、れもしろくさく菜の花に、くるふこゝろや夢の蝶。

○松風おちて夜はふかし、ゆめの行へもまどひつゝ。

○菜花の香に醉ひて眠り、桃李の風におどろきてさむ。

○春のながめのつれ〴〵に、やがてもあそぶ邯鄲鄉、むすびしゆめの末とへば、軒ばになびく炊のけふり。

○こはめづらしやいづこより、君はたづねてきたまひし、しばしとひけば袖きれて、はかなくさむる夜のゆめ。

○ゆふげの煙ほのぐと、むすぶ枕のゆめのまに、やがて頭につもるゆき。

○ぬるともわかぬうたゝねに、戀しき人を見てしより、頼めうめたるゆめぢかな。

○うらみをさへに結びうへて、むすぶなみだのゆめぢかな。

○盧生がゆめはさめはてゝ、いくとせすぎし春秋の、榮華は軒の夕けぶり。

○つらきを常の世の中は、ゆめぢばかりぞのどかなる。

○月をかたしくつゆのうで、ねむる巫山のゆめのみち。

○石山寺のかねのこゑ、ゆめもあとなきさよあらし、きゝしはうれかともしびの、あかしのうらの波の月。

○ふみを枕にまどろめば、昔の人に立まじり、我も治亂の中にたつ。

○祈るしるしと身延山、尾の上のかねにおどろけば、さめてあとなき迷のゆめ。

○をさなき時は未來をゆめみ、ますらたけをは今をゆめむ、昔ばかりをゆめにみる、老のゆめこそかなしけれ。

○母がのべたる床の上に、ゆめあたゝかき兒が顔。

○ねられざりけり秋の夜の、月のひかりやゆめの雲。

○うつせみの世を春のよの、ゆめとはたれか名づけけん、とてもかくてもゆめなれば、うれしきゆめをわれはみむ。

○はしねにめでし月影も、いつしか雲にかくろひて、われもゆめ路にたどり入る。

○閻浮の故郷をはる〳〵と、去つて久しき年波の、よるのゆめ路に通ひきて。

○かたみに心のかよへばや、よなく〳〵わたるゆめのうきはし。

○かつらぎ山にすむ神の、夜毎心にわたすらむ、あけてとだゆるゆめのはし。

○きのふかめでしはなとりの、いろねはけふのゆめのあと。

## 旅行

山、河、舟、蒸滊船、蒸滊車、碇舶之部參照

○旅まくら○かりねのゆめ○なれぬあらし○めづらしき野山○たびころも○野くれ山くれ○立のいろぎ○ひなの長路○なみまくら○道はる〳〵

○客窓の下○松籟のおとをきく○かぢまくら○志らぬ國○國を去つて三
裘葛○瀛車の窓○夜瀛車○夜ぐるま○停車場(すてーしよん)告ぐる聲○波止場(はとば)の浪の立
かへる○日の入る國○ゆめさめて○ゆきくれて○やどりはとらむ○いづ
このそら○西の國○太平洋○わだ中○瀛船の道○烟のこして行く船○行
くかたに○ふるさとのゆめ○みやこのかた○白雲漠々目はくれぬ○志ら
くものみちゆきふり○幾重の山の○ひとりぞこゆる○こひしきうら○た
ちいでゝ○ふるさと人○とりのはつねに立ちいでゝ○やすらにかよふ
○都のゆめはあともなし、鹿のなくねも月影も、すみわたる夜の旅枕。
○道も田のもゝわかちなく、杖を志をりにたどりつゝ、ゆきふみわけてはや
幾里。
○はつる舟路の空の月、ひとりながむるかぢまくら、ゆめ路の末もかすむな
り。
○きつゝ馴れにし旅衣、ひもゆふかげに吹く風に、かへすたもとの夕時雨、う
ちがなしくもふる里の、便とだにて三月越。
○夢の名殘か故里の、空にたなびく薄煙、草の枕の夜寒なる、旅ねの床のうき



涙。
○九重の雲井をいでゝゆく月の、南にめぐる小車。
○鳥は林にかへれども、われはねぐらもさだまらず。
○都の長路の旅衣、ひもゆふぐれのうらの月、雲井のようにながめむと、何時
かはれもひかけたりし。
○風をやどせる松本や、雲雀れちくる粟津野の草の茂みをふみわけて。
○水の音清き溪川の、岸にそひつゝわけ入れば、旅猿三聲腸を斷ち、やつれし
袖につゆぞちる。
○袖もやつるゝ旅衣、ひもかさなればいつしかと、名にのみきゝし秋しのや、
外山の里につきにけり。
○都の空にすみ佗びて、月もろ共に出でゝ行く、大内山の山守も、かゝる憂身
はよもしらじ。
※○袖の朝霜起伏の、岩根の枕松が根の、衾重ねて峯つゞき、山又山を分けゆけ
ば。
○長途の旅に身はつかれ、飢餓にせまりてこひまろび、わびつゝいこふ旅人。

○東路さしてゆく道に、あばしやすらふ逢坂の、關の戸さしのいつしかに、明けゆく雲にかすむ山、都路とほくへだてきぬ。

○末はるかなる旅の空、つゆけき袖をはらひつゝ、ひまゆくこまのあしはやく。

○今日をはじめの旅衣、日もゆふぐれの風さむく。

○森を心のしるべにて、花とふ旅にたちいでん。

○夜ふかき野路の霧晴れて、瀧車のまどよりてる月に、海邊の蘆のほの見えて、松の木の間によする波、海士の家居もほどちかし。

○野分け山わけわけゆけば、かぎりびきえて夜はあけぬ。

○宵には金の波を碎く、溪流の月をながめ、曉には薫れる雲を漲らす山上の花をみる。

○淀山崎をうちすぎて、昆陽の池水生田川、いづこをはかと須磨の浦。

○野に伏し又は谷にいね、山をよぢかつ海に浮び、雲に伴ひ霞をれふ、旅路のうらこゝろ物うけれ。

○名にれふ宮の古言を、思ひつゞけて行末は、石上寺伏拜み、神のみいつも三



輪の杉、初瀬の里につきにけり。

○山遠くして雲行客のあとを埋め、松高くして風旅人のゆめをやぶる。

○出ぶねを松の下かげに、しばしたたちよる旅衣。

○れもひたちぬる浦の波、舟路のどけき春霞、へたつやいく〳〵白雲の、はる〳〵きぬる旅路かな。

○旅の衣の朝な夕な、雲を伴なひ風をれひ、山又山をこゆすぎて。

○あゆひの紐のとけがたみ、結ぶやつゆの草枕、ゆめもはかなき旅ねかな。

○山又山のみねつゞき、風にまかせて時雨つゝ、はてはいづこと白くもの、立さまよへる一人旅。

○いろ香もさゞなふか草の、野邊のさくらをたづね見む。

○都いづれば日もすでに、竹田の里をうちすぎて。

○深草のべの旅まくら、かたしく袖のつゆとめて、やどるもあはれ月のかげ。

○なれもみやこを立いでゝ、末知らぬひのつくしがた、いつしか跡にこぎすてゝ。

○めなれぬやまやしらぬ里、なさけをかくる人もなし。

○いづくをはかと定めえぬ、旅路のうらのうき雲や、月をともねの草まくら。
○小原の里を立いでゝ、猶行末は深草や、木幡の關をけさこえて、宇治の中やど井手の里。
○かへるうれしき旅ころも、うらさびしくもわれもはれず。
○鐘の音さゆる曉に、きこゆる里のとりの聲、渡しの舟にしもしろく、鞋とけとや月の影。
○古里の春なつかしき花園に、胡蝶をれひしは昔にて、いまは旅ねにくるゝ年、げによの中はゆめのゆめ。
○草はむすばぬ旅なれど、かりねする夜の袖のつゆ。
○伊勢の濱荻をりふせて、浦のとまやの旅まくら。
○よしや旅ねのくさまくら、今宵ばかりのやどからむ。
○旅ねの床に風冴て、軒ばの竹のとりのこゑ、起きいでゝみれば雪白し。
○車の窓の明くれに、都のうちに月影を、さこりとおもひやる方も、雲井はるかにへだたりぬ。
○やがていかでとわれもひたつ、あしたの雲の旅衣、いづくをはてと知らねど



も、足にまかせていでゝゆく。
○歩行より行かむ眞砂道、車はなか〳〵はかどらず。
○雲立つみやまふみやぶり、曠野のつゆをわけゆけば、糢糊たる遠村煙立ち、そほくきこゆるとりの聲。
○しげき人目をはゞかりの、せきとめがたき心の駒を、しばしつなぎて玉ぼこの、道ゆきぶりの旅衣。
○夜をこめて立つ旅ごろも、有明の月の影ふみて、先心ゆく小松原。
○並木の松の下風は、夏ゆく人のいのちなり。
○姿やつるゝやつはしや、分けゆく末はそほつあふみ、濱名のはしをうちすぎて、さやの中山中々に、心にさむき秋の風。
○かすみの關をけさ越えて、果はいつこと白くもを、分けくらしつゝ末と遠き、山又山や水又水。
○關城に月をふむこと一千里、故郷を雲やへだつらむ。
○浪路はるかに有明の、月みながらの梶まくら。
○伊勢のはま荻をりしきて、みやこ戀しき月影に、旅ねの床のゆめさむし。

○時雨にぬるゝ旅衣、しをるゝ袖を心にて、うきてたゞよふうきぐもの、さだめなき身ぞあはれなる。
○苔の衣をかたしきて、岩ねの床に夜もすがら。
○雲とも〳〵にたちいてゝ、野くれ山くれ里くれて、はる〳〵きつる旅ごろも、たちかさねたるとしつきや。
○一夜かりねの草莚、むすぶ夢路のつゆちりて、枕にれつるかねの聲。
○安倍の朝きりわけすてゝ、日たけて越ゆるうつの山、うつゝも夢とたどりつゝ。
○昨日はひがし今日は西、ところ定めずむすぶ夢、草の枕のつゆばかり、なぐさむうらも浪のれと。
○身を浮雲の定めなく、行方もしらぬ身ながらも、伴ふ人はありあけの、月日ほどなく遠々し、越の山々打こねて、みすゞかるてふ信濃路の、道の口にもつきにけり。
○行末とほき旅衣、日もゆふぐれにゆきくれて、むすぶ葉末の草まくら。
○思ひたちたる旅衣、ひとへにいうぐ心より、千里をかけて雲をわけ舟路を



わたり山越ねて。
○千里の末も一足に、はじめてすぐる海山の、けしきに心をなぐさめて、あしたゆふべをかさねつゝ。
○都の秋をよりにして、月のあはれも見ぬさとに、幾明くれをすごしつゝ。
○樒の原をよりにみて、月にならびの岡の松、みどりのうらものどかなる、都のうらをあとにして。
○月にこねゆく高嶺の道、あゆひにかゝる白雲を、分けつゝのぼるつゞらをり。
○まだ中空にありあけの、月のみやこをたちいでゝ、行方定めぬ旅の空。
○八重の汐路をはる〳〵と、分けこしなみの淡路かた。
○國にとゞめし妻と子が、夜さむのねざめおもふにも、われもねがたき旅のうら、となりにひゞくさよきぬた。
○ふるさとこふるわが涙、ひとりゆく野の草のつゆ、まなくも袖にかゝるかな。
○空ゆく月の末遠く、はるかに見ゆる峯の雲、あすはもすうにわけてや越ね

む。

○ならはぬ野邊の草まくら、むすびさだめむかたもなし。

○むすぶたもとのつゆの上に、ねざめむとなふ月のかげ。

○しばしやどりをかりまくら、草葉の床にねくつゆは、故さとおもふ涙かも。

○岩がねまくら草の床、すさぶあらしをかたしきて。

○木の間をもるゝ日のひかり、夕さびしき森かげに、故さと忍ぶ旅心。

○とほ山どりのしだり尾の、ながき長夜をいくよはか、あかしくらして草まくら、たひねの床に月もへぬ。

○旅路のうらのわびしさも、うへて一しほしみ〳〵と、みやこ戀しき夕まぐれ。

○ゆく〳〵みればふるさとの、山又水はかきくもりて。

○野くれ里くれ山くれて、こゝまできつる旅衣、うらかなしくも吹く風。

○いつしかとのみたどりこし、みやこも今は近づきて、朝日まばゆきうらのいろ。

○木々のしづくにうぼぬれて、山路こゆく明方の、たもとを送る空の月。



○ゆきゝもたえて誰にかは、父栗津野の夕あらし、むかしのあとをふきとぢて、白雲ふかし志賀の山。

○ふかき山路に日はくれて、つゆをしとねの草まくら、月のともしび影あかし。

○ころもうつなる聲とめて、からばや草のつゆのやど、くれてわびしき深草野。

○知らぬ野原にゆきくれぬ、月やいづこの山よりと、ながむるうらも夕ぎりに。

○ねざめのまくらうばだてゝ、山松がえの月みつゝ、都やいかにとおもひやる、心の末にふる時雨。

○遠里小野の夕風に、吹かれていうぐ旅人が、袖さむげなる眺かな。

○山路をゆけば大ぞらに、あふぎし雲はわが袖の、下くぐりてぞゆきかよふ。

○昨日は東今日は西、世をうきぐものさだめなく、風のまに〳〵身をよせて。

○けふこのころの磯づたひ、濱風あらくふく方に、さうはれゆくとみやこなる、友には告げよつくしぶね。

○すみなれてこうさてもあれ、旅路にきてはひたぶるに、こひしきものをふるさとの。

○山路に染むる紅葉のいろ、畔路(あぜみち)わたる稲葉の風、秋れもしろき旅路かな。

○とくかへりこと朝な夕な、まちまし、まさむたらちねの。

○たよりいかにとまちわびて、こころやつくすはらからの。

○うれしさかなしさとりまぜて、袖はかわかぬ旅衣。

○うきねのゆめの末とひて、枕にさわぐ荻の風、ねられぬ夜半をなぐさめて、心をあらふ波のこゑ。

○越路のうらにまよひきて、都いつらとこゝへば、うこともさらにしらゆきの、つもるれもひにきにかへる。

○ふりさけみればふるさとの、山のかひより見しかげに、かはるともなき窓の月。

○みやこをいでゝ、みかの原、いづみの川にあらなくに、身にしみわたる秋の風。

○いづれみやこのうらとしも、知られぬまでに、立こめぬれもひくまなきか



すみかな。

○くさのまくらにねきふして、いくよ旅ねにあかすらも。

○空ものどけき春のいろ、かすむ行手は花園の、志賀の山越うちすぎて、眞野(まの)の入江の道さして、鴛の浦風袖さむし。

○すみこしやどをいでいなば、あとはうつらの床あれて、ふかくさ野とやなりぬべき。

○篠(しの)田の森のまのびこし、松原見わたして遠里に、たれ住の江やなにはがた、蘆屋の里をすぎくれば。

○風にまかせてゆく雲の、旗手も見えぬ夕ぐれの、空を心の旅衣、はるかにへたつふるさとや。

○都の春をよそにして、嵐につるゝ夕波の、淀の川舟こぎすてゝ、いつかは又もあふ坂の、關の此方のあさかすみ。

○つゆも時雨もこゝる山の、紅葉をさうふ夕あらし、身にしみまさる旅衣。

○伏見の里もとほからぬ、鳥羽の細みちあとにみて、淀の繼橋かけまくも、あやにかしこきあつさ弓、八幡の里をすぎゆけば。

○男しかの角のつかのまも、ねられんものか秋風の、松の下ふし夜もすがら。
○強てもやどをかり衣、かたしく袖のつゆふかき草のいほりのたびまくら、かりねの床ぞ哀なる。
○雨ふりうしぐ夜あらしの、ものすさまじき山陰に、月まつほどのかりまくら、かたしく袖もつゆふかし。
○故郷に母あり秋の風、旅館に人なし夕邊の雨。
○あづまの都にながめてし、月を夜毎の友として、親しくむかふ旅のうら。
○知らぬ野原に行きくれぬ、いつれの山より月はいでむ。
○河れとばかり音づれて、うことともみねぬ夕ぎりに、まどひ立ちたる旅衣。
○行けども秋のはてなき、むさしの原の秋のたび。
○ならはぬ旅に奈良坂や、かへり三笠の山かくす、かすみも春はうらめしや。
○窓うつあめはゆめをやぶり、松ふく風は腸をたつ。
○今宵いつこの雲にねて、ゆめをわが屋へかへすらむ。
○客舎の窓にたちよりて、ちまたをみればたにまなく、ゆきかふ人は多けれど、故さと人はかげもなし。



○こゑもふけゆく浦風に、松が根まくらゆめさめて。
○あしたの原をまだきたつ、かすみのころもはるゝ〳〵と。
○わがのる駒のたつかみに、月こそやどれ秋のつゆ、いく〳〵への霧かへだてきぬ。
○いたはり知らぬ峯の松風、夜な〳〵の草のまくらにねとづれて。

## 山行

○山路こゆく○雲も幾重の山○しらぬ山路○やへたつくも○千さとの外○よぢのぼる○つゞらをり○けはしき路○險し○岩根ふみこゞしき路○木かけにやすむ○仙人のあとゝめて○しをりして○帽はつゆにしをれ○昏は苔にすべる○こゝになづむ○行きなやむ○谷のかけ道○うはつたひ○草しげる山の細道○切りかけ小屋の○山々みねにて○うらとぶとりも行なやむ○高嶺○麓みち○山口○裾野○山ふところ○谷水○岩間の清水○いこふ○休らふ○雲わけのぼる○おくふかく○つたかつら○狐兎のみち○狼月になく

○菅路をふめば足辷り、葛をつかめば根ざきるゝ。
○かよひ馴れたる杣人も、雪にはたどる峯の道笠も薪も埋もれて、くるふ吹雪に惑ひたつ。
○茂れる枝は帽を奪ひ、千草のつゆは袴をうるほす。
○樵歌牧笛こゑたえて、しらぬやま路に目はくれぬ。
○がけ路のさかしき岩橋を、心しづかに渡りつゝ、いはほにこしかけ瀑布をみれば、心もやがてすみわたる。
○霧にまよひ雲をわけ、たつきも知らぬ山中に、れほつかなくもふみまよふ、みちの行方やいかならむ。
○しらぬ山路に日はくれて、降りくる雪に道たにぬ。
○柴とるみちのかへるさに、ふみなれにたる通路も雪のはだれにかきくれて、家路をたどる夕まぐれ。
○神の昔のあとゝめて、葛城山にわけ入りぬ。
○肩の上には無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花をたをる。
○はや夜もいつかあけぬとて、野邊より山に入る鹿の、あとふきれくる風の



れと、駒の足なみいさむなり。
○篠懸衣汗にまさる、標(しるべ)をあつめ柴をたき、寒風ふさぐ葛城の、うの山伏の名にもれふ、かたしく袖の枕して。
○さらでも嶮しき嵓かげを、雪にたどればいとゞ猶、笠は重し吳山の雪、靴は永る楚地の霜。

## 水行

○波風のこゑ○白波のみちはるゝ〳〵○かぢのおと○八重の汐路○なみまくら○霞を分けてゆく舟○島こぎめぐる○いくさ艦(おね)○艨艟○浮べる城○怒濤を破る○ふなばたたゝく○八重の海坂○磯のうきね○浪路をてらす月○友舟○きりに迷ふ○燈臺見ゆて○蒸氣の雷○浪路に殘る烟○跡なき浪にあとつけて○浪にあとある○烟を殘す浪の上○大灘の潮路にかゝる○八重の潮路をはるゝ〳〵と、末はるかにも行く舟の、とまりや雲のいつくぞも。
○さす汐時もはやすぎて、ほのゝ〳〵いづる月影に、ともづなときてこぎいで

ぬ。

○かよふ千ざりのなくこゑに、いくよのねざめ須磨の浦、關路をあとにかへりみて、阿漕の浦につきにけり。

○磯邊の松に目はれちて、よせくる浪のいろ白し、澤ぎ行く舟のとまりやいづこ、行手にきらめく星の影。

○曇りもはてぬ春の夜の、おぼろ月夜にしくものも、なみにゆらるゝかぢ枕。

○一葉の內に身をよせて、こぎはなれつゝ和田の原、いづくとまりと白波の、ひゞきの灘もこぎすぎぬ。

○あしまの小舟にさほさして、こぎのぼるなり隅田川、むかしの人の浮名さへ、ながるゝ水に忍ばれて。

○黃河はるかにのぼる幾千里、千疊の群山萬仞の城。

○しばしうきねのゆめをだに、せめてはゆるせすまの浦風。

○觀音崎の燈臺の、光もいつかゝげ消えて、潮路やうやく立ちさわぐ、相模のなだにやかゝりけむ。

○玄海灘になみあれて怒濤逆まく數千丈、舟は木葉かそばかりに。



○波風いつかをさまりて、浪路の末に月かげは、かゞみの如くてりのぼる。

○誰りやこよひの甲板のうへ、劉々として陽關を吟ずるのこゑ、月白くして風清し。

○太平洋のたゞ中に、かゝる景色は今日こゝろはじめ、濤は山よりたかく立ち、風は怒りて虛空にさけぶ、あなものすごのありさまや。

## 行脚

○行脚の身○修行のみち○風雅のたび○月花にむくりむかへられ○時雨にうぼち雪にこゞえ○山又山のながめ○水又水のけしき○法のみち芝○料檢の行體○順禮すがた○つゆわけ衣○すゞかけ衣(修驗にいふ)○つゆにうぼち○雲に伴ひ水に從ふ○昨日はつくし今日は陸奥○野分け山分け○雲水に任す○風にふかれて行方定めず○心をうらに○釋門のならひ○教のみちを

○風に任する浮雲の、そきりはいづくはてもなき、山又山に立まよふ、浮世の外の行脚の身。

○世にすみぞめの旅のうで、時雨にうるむ月の影。
○捨身科懺の行體は、山伏修業のたよりなり、熊野順禮廻國は、皆釋門の習なり。
○法心れさへがたくして、今ぞいでたつ旅のうら。
○世にすみぞめの旅ごろも、心はきよく氣はたかく、風に任せて行くうらは。
○風雅のみちをたどる身は、月を花とにあこがれて、この山里にはや七日。
○れもへぱはかなきつゆの身や、草葉をわけてまよひ來し、旅路の末ぞうつゝなき。
○飄々としていづる修業のみち、たづぬるれくは白雲の、いくへかさなる法の山
○法のともしびかげくらき、佛のみちにたどりいでゝ、和光の影をあふぎつゝ、行脚する身ぞはかなきや。
○芭蕉の雨に雅懷やみがたく、風流のみちに行脚のすがたをつくる。

## 旅宿



○かりのやど○しばしかりごろも○つゆれくうでをかたしきて○時雨のれとにゆめさめて○護謨のまくら○むかしにかはる○一夜のほども○ふるさとこひし○あけくれに○柴の戸近く○いで入る旅の人々○中々に心ぞはるゝ○名だかき家としられけり○あるじが心もあつぶすま○隣にやどる人々の○やうやく人のしづまりて○見し山水のものがたり○心なぐさむ旅の窓○心のどかに○ゆきくれて○やどらむ方は○しらぬ旅路○なれぬやどり○旅ばかり心慰むものはなし○あひやどり○話しがたき(ハナシアヒテ也)○かるべきやども○窓に近き山々○行くかたに○いづこのうら○ふるさとの夢○夢の末とふさよ嵐○結びさだめぬ夢○都の夢○うき旅をいひしは昔○うらぶれて○なつかしき○床の山風○こひしきうら○雨にやどかる
○難波浦にゆきくれて、蘆火たくやにやどかれば、すゞろにれつるわが涙。
○片しく袖に浪ちりて、ゆめれどろかすはまちどり。
○柴門月靜にして霜天に白く、旅宿風さむくして浪ゆめをやぶる。
○草の枕にうらぶれて、うきをかこちしいにしへは、假寐の夢となりはてゝ、

今は樂しき旅の窓、都の空もわすれつゝ。
○もとより住家もあしのやの、草のまくらの山ねろし、くだくるつゆのそれならで、結びもとめぬよるのゆめ。
○峯の嵐の聲ねちて、假寐の袖のつゆくだけ、灣水のひゞきれとづれて、結ばぬゆめの末をとふ。
○峯の夜あらし枕にねちて、ねざめの床にたぐるなり。
○夜半のあらしにゆめさめて、客窓さむき床の上に、何とはなくてぬるゝ袖。
○枕にさむき夜あらしに、めざめてみればさまかはる、旅のかりやのさびしきに、今更家路の忍ばれて。
○耳かしましき馬屋路の、聲もいつしかたえづまりて、やどかる人はさま〴〵の、夢路たどるか音もなし。
○窓のとてらす月影に、雨戸をれしてながむれば、空に一聲夜がらすの、ものかなしくもなきわたる。
○きりまだふかき朝ぼらけ、旅屋の門をたちいでゝ、又も野山のつゆぞふむ。
○舟つきぬとて旅やどり、かどさゞめきて人々の、出入のこゑがかしましき。



○草をかりねの露のとこ、むすびかねけんいにしへの、夢をいかにとれもふにも、ひらけゆくよの旅まくら、ゆめ路のすゑのものどかなり。
○磯山かげの海人が宿、枕によする浪の音に、あしの末越す浦風の、すきまもるだにうらさむき。
○結びもとめぬふる里の、夢の行方かあかつきの、峯にわかるゝ横雲は。

## 航海 海之部參照

○八重のしほ路○あらなみも○いく浦々の○とまりのみなと○なみあれて○風ふきて○あらしふきすさぶ○雲荘々○山もみえず○雲の影○きりはれて○浪平らかに○風なぎて○はしるふね○長汀曲浦のながめ○日はくれて○海原とほく○やみよの海に○燈明臺のひかり○浮標をたよりに○かくれ岩
○雲海荘々として一堰の山くれむとし、孤舟極浦の波わけて半天の雲にのぼらむとす。
○浪三千里風あれて、一葦あやふき大海原。

○朝日にときし港のともづな、青海漫々萬里の波上、早くも月の影うかぶ。
○れとにきゝつる鳴戸をも、つゆつゆがなく越えぬれば、心にかゝるくもゝなし。
○島よ〳〵とうれしくも、ながめやるまにうすれゆく、はかなき雲のいろ見れば。
○絶海に風あれて浪はさかまく三千丈鯨吼にて白龍をどる。
○渺々たる千里の海原、一むらくものかゝるとみるまに、ふりくる大雨さかまくあらしほ。
○かすみこめたる春の海、浪あを〳〵とうりまろく。
○行けば程なく津の國や、あはれ淡路の島近く、鳴戸の沖に音するは。
○迅風に帆手をうちて、一瞬千里浪の上。
○瀧笛のひゞきは水とりの、浪間のゆめをおどろかし、火輪のおとは水りこの、こゝたの魚をさわがして。
○雲間かすかにみわたせば、こぎゆくふねの波千里。
○見る〳〵波止場はわだつみの、浪路の末に消えにけり。



○見渡すかぎり島もなし、東も西も南も北も、たゞ茫々たる青海原。
○見る〳〵船は浪路にきえて、一すぢのこる蒸氣のけむり。

## 碇舶 湊之部參照

○ときりぶね○かぢまくら○磯まくら○なみまくら○舟はつる○大みなと○舟をめて○うきねのたもと○磯邊の松に○あらき磯邊に○ゆめぢの末に○こゝをときり○磯まつ風の音○八重のしほぢ○いり山でらのかね○汐風さむく○こぎくれて○舟路のとまり○一夜の友ぶね○あらき湊○沖つしま山○あとなき浪○こぎわかれゆく○出入る船の○日かずふる○ときりやいづこ
○志ほ風さわてなくちどり、うきねのゆめもこほるよの、枕をてらす月の影。
○三とせの月日ふる里の、夢やすからぬ浪のおとに、いくよ心をくだくらん。
○苦もる月の影さえて、心に寒き沖つ風、むすびもあへぬふるさとの、ゆめの末とふはまちどり。
○あはのなるとは今日こぎはてつ、あすのふなぢやいかならん、身はうきふ

ねの浪まくら。

## 懐舊 故郷、故跡、情之部參照

○ふる事忍ぶ○すぎしむかし○いにしへねもふ○むかしこひしき○かへりこぬ○うの世のこともの○ありしながらの○ふりにし世○むかしがたり○みし世の影○れもひいづればの○ふるき世のみも○ともしびのかげに○つくづ〳〵と○あとゝふ人も○ゆめになりぬる○とはずがたり○をしめざも○かへらぬ月日○すぎはてゝ○まぢのもと○涙にのこる○わすれがたみに○とりいでゝ○なみだかきやる○月にとはゞや○涙あやなき○去年のこよひの○かわかぬ袖○くりかへす○ひとりねのゆめ○むかしに似たる○世はゆめなれや

○裳裾つゆけき古陵のあたり、むかしたづねてとぶ小蝶。

○昔の秋をまつむしの、聲につけても忍ばれて、袂にかゝるくさのつゆ。

○風月の友にさそはれて、春のやまべに秋の野に、うこともしらずあこがれし、むかし戀しき夜半の月。



○形見ぞ今は中々に、あだの大野の秋風に、さきてかつちる萩の花、つゆわすられぬつまなれや。

○れもひいでゝは草の菴に、折たく柴のゆふけむり、むせぶもはかなさまざまの、忘れかたみをしのびつゝ。

○思ひぞいづる去年の秋、紅葉のかげにやすらひて、峯の小鹿のなくこゑを、ともにきゝつる夕ぐれを。

○てる月影は水の面に、うつれど忍ぶいにしへの、姿は見ねでいたづらに、清きひかりぞくもるなる。

○今みる月も夜のさまも、ありしむかしにかはらぬを、みしよの人は影もなし。

○むかしうゑにし梅の花、ともに老木となりはてゝ、すぎにし春ぞこひしき や。

○洛陽城裏の花盛り、大宮人の管絃のあそび、榮華の夢とさめはてゝ、なごりれとなふさよあらし。

○燈を背けてむかふ半宵の月、花をふみてをしむ少年の春。

○涙のなみのうつぼぶね、こがれてしのぶいにしへも、今はた何のかひかある。

○机ならべて袖うちかはし、そもにまなびし難波津の、をさなき春こうこひしけれ。

○すぎにしかたの事草を、れもひつぐけてつきせぬは、袖にながるゝ涙なり。

○去年のこよひは都にて宴（うたげ）のにはにみし月を、今年のけふは薄原、尾花が末になながめつゝ。

○都ときけばなつかしや、我も元はといひさして、やがて涙にむせびつゝ。

○共に學びてれなじ世に、たゝんと契りし人はしも、れほく昔になりにけり。

○忍べばかへる昔とて、今はこの世になき人の、うのれもかげも見ゆるかな。

○世にながらへて昔をかたる、友の少くなるまゝに、かずうふものは嘆なり。

○うせにし友が水莖の、むかしのあとにながるゝは、うの世を忍ぶ涙なり。

○昔みなれし君がやど、庭は花野となりはてゝ。

○一夜伏見のゆめにだに、れもひたゐにし別れ路の、末こそ知らねふかくさの、花は昔やしたふらも。



○うはの空なる月影を、やどすもはかな袖の上。

○共にかこちてながめつる、昔の人もなき宿に、唯かげすめり秋の月。

○よしや稀代の功名負ふも、苦路の下にくつる身。

○さては疑あち磯の、なみときえにしあとなれや。

○さらぬわかれのなくもがな、千代もといのる人の子の、ためとよみにしいにしへの、ことさへれもひいだされて。

○まつらむ人はなけれども、月にこひしき都かな。

○野邊のさくらし心あらば、この春ばかりぬば玉の、すみぞめにさけと詠じけむ、むかしもいとゞ忍ばれて。

○軒もひさしく朽ちはてゝ、門にはおふる八重むぐら。

○れもひぢいづる昔の春、月も今宵にめぐりきぬ、本の渚はこゝなれや。

○忍ぶ涙の袖の上に、いつ又人のれもかげを、やどしてもみむあなかなし。

○昔は花の朝日影霞にこうは醉ひにしか、いまは夕日の一つ松、きゆるひかりをまつばかり。

○忘れかねたる古を、心の奥に忍ぶ山忍びて通ふ道芝の、つゆのよすがを命

にて。

○はかなく過ぎし年月も、又今更にれもひいつる、言の葉草のつゆの世を、いとふまでこうかたからめ。

○花にうかれてよのうさも、知らず過ぎける昔こそ、今は中々こひしけれ。

○みし世の秋も忘られず、月にむかしのかげやうふ。

○草苅笛のねをうへて、吹きくる野風もありしよの、月にあうびし俤を、袖にうかぶるつゆの影。

○草の名にれふ忍ぶ草、むかしの野べは袖のつゆ。

○住すてたりし家なれや、間寂として戸はさせり。

○とびかふほたるのひかりにも、なきわが友がむかしさへ、れもひだされてあはれなり。

○きのふのゆめとれもふまに、けふもすぎぬるかねのれと。

## 述懐

○世のうき時○人とあるよを○うもれ木の○花さく春もなし○うもむかば



や○いつまでか○人にしられぬ身○世にうつもれて○心しる人もなき世○心とたがふ世のさま○心ゆくまで○はづかしく○わがよつくさむ○いたづらに○身をうきことの○かひもなきよ○とし頃いだくわが志○れもけゆく○世をわぶる○いたづらにかくてやはてむ○世をてらすべき玉をいだく○昔の春の花ごころ○さま〴〵に○ゆめさめはてゝ○かくしつゝ心のどかに○なげくかな○窓にはつまで頭にのみふる雪○うき草の○世のうきふし○れもふことの○はづかしの森○よしや身は○末にのみなる世○ひとりのみ○玉とくだけて○むづかしの世や○ともすれば○こゝろのせき○れもひいつる○しつめる身には○われながら○世をうみわたる○物れもはしき○心づよくも○人も知るべく○いのちをしまず○青雲のたかきによせしこゝろ○風のまに〳〵何かまかせん○たかきほまれを○心づくし○をゝしき心○とつ國人も○家の風○身はならはしの○やまとの國の○わがすめ國の○わが世くだちぬ○いとはしき世○まごふ心○君をれもふ○いたづらにすぐす○心くだくる○雲の上迄○あなう世の中○の

がれにぬ○いうしみつとめて○心せよ人○なぐさめがたき○さりあへぬ
○いざや子ら○かずならぬ身○世のために○身をもわすれて○心に叶ふ
○やまとれのこの名○きよき名をのこす○こと國迄も○君が代に○ほま
れをあぐる○まなびのわざも○あはれてふ
○かよりかくより和田つみの、藻にすむ虫のわれからも、よるべの岸こうわ
かちえね。
○秋の初風たちそめて、蔦のうらばはかへれども、かへるすべなき昔かな。
○濁りはてたる世の中を、こぎも離れでいつ迄か、身をうき舟のつながるゝ。
○げに古き世の物語、きけば涙もこもり江の、こもれる情をくみわけて、あは
れむすべも人もがな。
○男子志ならずして鬢すでに白し、劒をとりてなげうつとも、何のかひかある。
○くもらぬ御世にあひながら、心のくもはなどはれぬ。
○老やかくると梅の花、かざすとすれどかひもなく、かしらのゆきぞふりま
さる。
○つもりつもりし年月は、かしらのゆきとぞなりにける。



○月よ花よと春秋を、送りむかへていつしかも、頭にゆきぞつもりける。
○羊のあゆみのごとくにも、覺(おぼ)ゆるはしるは昔にて、今はひま行く駒のあし、う
つりて早き月日かな。
○人もとひこぬふるさとの、花の木かげにたちよれば、風にちりくるつゆな
らで、袂ぞいとゞぬれまさる。
○我いたづきにねくしもを草にとのみもれもひけり、ねろかなりける心か
な。
○かゞみの影を見るにつけ、かはりゆくなるわか姿、おいその森の紅葉ばの、
つもるよはひをいかにせむ。
○富貴榮華も一時のゆめ、ありはつまじき人の世に、せめては朽ちせずかぐ
はしき、名をぞとゞめむ史(ふみ)の上に。
○酔ひて落花に向へば心れのづからしづかに、さめて茶をすゝればおもひ
たゞきよし。
○世の路かたし山路より、世の道かたし浪路より、山にのぼるは杖こそあれ、
海をわたるは船こそあれ、人情反覆なにもてふせがん。

○春ふかくして花はとび蝶はおどろく、ふみも劍もまなびて成らず。
○俗骨蓬萊の雲をふむべからず、庸才は臺閣の月をよぢがたし。
○何をしてかは老いぬるとゝはれん人にこたふべき、只一ふしのわざもがな。
○わがくろかみのうつろふは、月ゆきはなの染めしなり。
○ありしにかはる姿かな、心ばかりはむかしにて。
○秋に後るゝ老葉は風なきにちりやすく、愁を吊ふ涙滴はとはざる袖にまづもろし。
○なきて古巢をとふべきか、はたちりて根にかへらんか、花と鳥とをわきかねて、定めかねたる身の…ゆくへ。
○世をなげきつゝいたづらに、かひなき月日をおくりなば、なしのまゝなる天地に、心せましと笑はれむ。
○かひなき悔をすまの海人、あまる思ひに碎けつゝ、よりくる浪に袖しぼる。
○うき世の風にさそはれて、心のはなはちりにけり。
○よの仇浪のさすらひに、身をうき艸の根を絕ひて。



○浪のうきどりすむほどを、下やすからぬ心かな。
○いざ山ざくらわれはたちらん、さかりのゝちはたちまちに、うつろひやすき世の中を。
○功名期しがたく年人をまたず、あはれいくばくの我世のほどぞ。
○れもふに任せぬ世のうさを、かこつ夕の草むらに、かごとがましきむしのこゑ。
○木々のしづくも末つひに、れなじ清水となが流るなり。
○信田の森の楠の、千重にや物をれもふらむ。
○人の心の水底は、濁江にしてかげ見えず。
○人に知られぬれくやまの、花にもさかりはあるものを。
○なにはの浦はうしとても、なほすみよしの岸あらむ。
○今はた賤がうむいとの、ながきいのちのつれなさを、おもひあかしの浦千どり、ねをのみひとりなきあかす。
○とはゞこそひとりわぶともこたへまし、松の嵐に浪のれと、今はうれさへきゝなれて、うき世をよりにすまの浦。

○もしほたれとも知らずして、年もへにけりすまの浦、わくらはにだにとふ人の、波のぬれぎぬかつぎつゝ。

○たが秋風を身にしめて、あやなく物をおもふらむ。

○ところもくらまのくぬぎ原、みる人もなき山里に、年へてすめる月の影。

○うき世のほかをゆく月も、しばしはつゆにやどれるを。

○うき世をわたるあまをぶね、あらしま風に任せつゝ。

○故國をいでゝはや三年、いく春秋をあだにのみ、すごして又もこの春の、花に耽づるやわが心。

○ゆめなりけりとさとりても、けふの現はあすのゆめ、ゆめはやがても現にて、現はやがてもゆめのよや。

○誰をかも知る人にせん、松は昔の友ながら、見し世の人は跡たえて、わが身もゆきとふりがゆく。

○昔ながらの花みても、年月すぎていやふりに、ふりゆく身こそあはれなれ。

○かぞふればたゞとし〳〵に、我身につもるとし月を、送り迎ふと何いうぐ。

○惜む心のなかりせば、仇なる風もつらからじ、何にさくらとわれもふらむ。



○ひまゆく駒の足はやみ、我も昔のわれならず、うきはいづこも秋のくれ。

○めでたき御代になが〳〵へて、老を重ぬる身のさちを、何とうたはん。

○つれもなきよになが〳〵へて、生けるを今はなげくかな、うきは命のとがならねど。

○窮鳥ふところに入るときは、獵夫もこれをとらずとかや。

○野べのわかばにみをかへば、かりにも人につまれんを。

○あはれともひの玉かつら、かけてもいざや知らざりし、心つくしの木の間の月、こよひかたみに見んものと。

○世にすてられしわび人は、したしき友さへうむきつゝ。

○人界に生をうけながら、かゝるうき世にさすらひて、身をくるしむる悲しさよ。

○げに空蟬の世の中は、電光石火のつかのまや。

○我身の嘆きもとりへて、花もひましばをたくけむり。

## 音樂 遊伎、快樂之部參照

○とり〳〵に○しらべ合して○大珠小珠銀盤にまろぶ○おもしろ○たかきひゞき○ゆるきおと○ふきならず○しらべのどかに○みあうびの聲○月にすみゆく○いとたけ○ふにたけ○ひあの○をるがん○ばいをりん○いとのひゞき○ふきならす○こゝろもうらに○すまごと○つま琴○三すぢのいと○三つのをごと○胡弓○月のこと○つま音○亮々のひゞき○流泉の曲○九皐に鶴なきて○うつばりのちり○行く雲もたゆたふ○風のひゞき○雨のねと○みやびなる○やさしくも○たがすさび○月にしらぶるこゑ〳〵しきる○月にすみのぼる○梅ちる風に○花の下蔭○うれしくも○をとめらが○かきならす○波のおと○摯々として○天つ少女もまふらむ○さえかへり○ねぼろ月夜○磯づたひ○たれをまつまの○たがためのの○大絃小絃○うらむが如く○かなしむが如し○ねともかなしく○月すむ夜半○いづこともなく○近づく聲○秋風にうき合す○ものゝねやみて○庭の面に○銀盤まろぶ瑠璃の聲○心のかぎり○月下の曲○春宴の樂○あらしによするさゝめごと○こゑそよむ○風にたぐひて○合奏の一曲○れとらぬしらべ○うぐひすの聲○うちかへし



○銀管ふけば鶯のひゞきあり、玉繊彈ずれば鳳和鳴す。
○たう〳〵として松風の、わたるときけば涼々と、流れあやつる妙音美曲。
○やかたのちりもとびぬべく、うら行く雲も漂ひぬべく、かなでいでたる瑠璃の曲。
○笛のひゞきか琴のねか、秋風松をはらつて鍊韻おつ。
○忽ちおこる軍樂の、喇叭太鼓のこゑたかし。
○窓うつ雨はゆめを破り、軒ふく風はねざめをとふ。
○忽ち早く忽ちたかく、或は訴へ或は泣き、秋風たかく雲ちりて、みそらの月の影白し。
○いづれの緒よりしらべけむ、松にも通ふことのね。
○行きゞ憚るそらゆくくも、れちやかゝらむうつばりのちり。
○峯のあらしか松風か、さが野の秋のつま音か。
○あらぶる神もなごむらん、ひゞめる龍もをどるべし。
○嵯峨野のおくの秋の聲、想夫戀にはあらねども。
○花のふゞきの春風に、吹きまかれつゝをすの内、糸竹のねもみだれつゝ。

○春風さそふ笛の音は、いづこ誰が家のすさみかも。
○花のふゞきの春風に、吹きまかれつゝ久方の、雲井に高くすみのぼる。
○笛のねさむく風氷る、志士憂國のうらみや深き、琴のねたかく月ふけぬ、齊女斷腸の情や切なる。
○斷えてはつゞくものゝねに、はれてはくもる月のかげ。
○むしのなくねもかつやみて、調べ合する糸竹に、月のひかりもすみまさる。
○細き玉手にさら〳〵と、かなづる絲のひゞきには、美音の神もかたむきて、雲のあなたにきゝぬべし。
○はやし立てたる笛太鼓、ふしもしろき神樂まひ。
○月にすみゆくつゞみのひゞき、風につたふることの聲。
○梁塵うごき水雲たゞよひ、風なきに草なびき、神の心もなごむべし。
○花間鶯語を賞する如く、月下鹿鳴をもてあそぶに似たり。
○匹馬北風にいなゝきて聲亮々、南風桂樹を亘つて響洋々。
○ふけゆく月ともろともに、大ぶらたかくすみのぼる、琴のしらべはたがわざか。



○くもる空より村雨の、ふるかとばかりかきならす、時のしらべの夜半樂。
○ふしまち月のよひのほど、あからさまなる爪音を、とめてねとなふゝに竹の、ふしもしろき夜半樂。
○鼓のねとは磯うつ波の聲、琴のしらべは松ふく嵐のひゞき、あなおもしろの舞樂やな。
○鳳管のしらべは秦嶺の雲をうごかし、霓裳の曲は侯山の月を送る。
○みねの松風のきばにたちて、かきねの虫もなきいでぬ、つまごといざとれふにふかむ。
○遠征途上の胡笳の聲、たけき武士の腸を斷ち、れぼろ月夜のことのしらべ、春閨愁婦のねもひをなやます。
○陶然として醉へるが如く、心は直ちに俗塵を脫離し、遠く天外に逍遙す。
○金殿花深くして鶯春をうたひ、紗窓月きよくして風竹に入る。
○調彈數曲をかきなせば聲松風にかよふなり。
○しらべは松のあらしのごとく、ひゞきはなみのねとにかよふ。
○かきならしたるいとたけの、ふしもしろき夜遊のむしろ。

○花の下かげうぐひすの聲なめらかに、氷る瀧津瀬ながるゝ水のねとなやむ。

○忽にして颯々たるは、いづこの山の松風ぞ、既にして又蕭々たるはたがまくらとふさよ時雨。

○桃李の花の琴曲は、春をよろこぶ柳花園、玉樹後庭の雷のねは夜もたけなはなる想夫戀。

○節にこめたる妙音を、吹きいだしたる尺八の、音色の底に吹く人の、ねもひのひゞきやひゞむらん。

○暁山がつが心なき、袖の上にもつゆさゝふ、ねいろは人のなさけより、あふれいでたるひゞきなり。

○しらべこめたる四つの緒の、一すぢ毎にいひしらぬ、あはれをこめてきく人の、袖になみだをさゝふなり。

○松の聲は竹の林に入り、風のねとは玉のすだれを動かす。

○ときはのまつの風さへも、しらべにかよふ一ふしや。

○月のかげにもかよへばや、そらにしらべのすみのぼる。

○花にさにづるうぐひすの、こゑも及ばぬひとふしや。

## 琴 四季の月之部參照

○琴の下ひ○あづま琴○つくし琴○琴柱にむせぶ○かきならす○調はやき○月にむかひて○手なれの琴○中の緒○すがゞき○風のしらべ○六段の曲○水のしらべ○心ひかれぬ○峯のまつ風○つまひく聲ゆかし○をとめらが○なかばの月○琴の緒たちし○たへなる調○なつかしき○みつの友とは○夜半の玉琴○ねざめして

○なげきに沈む長きよを、あかしかねては枕べの、手なれの小琴とりいでゝ。

○峯の風か松風か、人まつよひの琴のねか、嵯峨野の秋のうれならで、袂にかゝるつゆのたま。

○船木になりし琴なれば、波のひゞきもかよふらむ。

○一葉に秋をしらすなる、桐にて作りし琴なれば、しらぶるからに何となく、袂につゆをさそふらむ。

○たがつま琴のしらべぞも、心ぶかいとぞひかるなる。

○小山田のしづくの田井に、ひき入れし生田の流れの手なれ琴。
○夜色濛々として月影うすく、彈琴亮々として風聲汙にたり。
○春やむかしのわぼろ夜に、なくうぐひすのねをこめて、しらべいでにしつくし琴。
○花の下かげ風たえて、しづかにくるゝ春の日に、ゆるき調の手なれ琴、れもふ心をねにこめて、糸にたぐへし想夫戀。
○ふけゆく月ともろともに、大うらたかくすみのぼる、ことのしらべのおもしろき。
○あづけきおとは春の雨、さびしきしらべは秋の風、忽にして瀧のおと、忽ちにして浪のおと。
○吾妻てふ名のつまことは、逢坂山の岩間もる、清水にこゑも通ふなり。
○琴のしらべのすみのぼり、うらゆく雲やとゞむらん、たちまち月の影くらし。
○みうらをわたるかりがねも、おちやきぬらむ琴のねの、すみのぼりたる月の前。

○いづれの緒よりしらべけむ、みねのあらしの松のおと、妻琴のねに通ふなり。

## 笛 春夜、春月之部參照

○狛笛○横笛○草苅笛○ふえのしらべ○うなゐがふく笛○おつる梅○聲清き○うきふしも○笛竹に○いにしへの青葉の笛も○かよふ松風○すみのぼる○梅ちる風○こゑたにて○有明かたの○くれたけのもとの霜夜○さわたる○鶯のさへづり
○をり〳〵笛のきこゆなり、月みてねぬはわれのみか。
○笛の音を風やかどへる、吹く風を笛やさそへる。
○ふきならす笛の聲すみのぼり、月影あかし秋のそら。
○つゆにかたぶく有明の、月の光にかはりても、草かりぶえの音ぞすむ。
○玉笛一聲樓上におこり、江城の梅花ちることはやし。
○落梅の曲よる汙にて、窓に衣たつ少女子が、誤て剪る一片の花。
○梅ちりて唇ゆきをみなぎらし、柳を折りて手に烟をにぎる。

○浪も音なき浦安の、國ふりしるく萬代に、くだてふ笛の音をたにて。
○吹きなす笛の聲さにて、花のつゆさへちりぬべし。
○風にみだれてひゞきくる、ふねのねいろはすむ月の、うちよりわたるもひあり。
○賤の童がこゝろなく、吹きすさぶなる草笛も、時にかなへばまずらをが、袖に涙をさそひけり。
○里のわらはゝ笛とりて、草のしとねにふしまろび、うきふし志らす朝なゆふな、心をのべにふきすさむ。

## 鼓 神樂之部參照

○うちならすひゞき○月にむかひて○夔々と○天上の神の鼓○われとすきまじく○うちとゞろかす○われどころ〳〵にうつ大鼓○すまひの大鼓○こゝろすみて○うつやつゞみ○たかどのに○風に鳴る○せめつゞみ○舞に合する○時のつゞみ○波のつゞみ○ならすつゞみ○こゝろせわしく○しきりにならす○つゞみのわれと○時守が打なす○われとしめやかに



○雲井の庭の舞の袖、五つのふしもつゞみてふ、物のねなくばいかでかはうちも別れんそれともも。
○治に居て亂を忘れぬ世には、いくさのつゞみも苦むさず。
○喇叭に合はする大鼓のひゞきは、桃源洞裏にともすれば、春を尋ぬるよの人の、心の眠をさますなり。

## 琵琶 悲哀之部參照

○かきならす○琵琶一聲○半れもてを掩ふ○紋をはらつて○日をまねく○なかばの月○かたわれ月○つまびき○村さめりこぐ○私語の聲○桃花の月に○馬上にとりて○離別の曲に○鏘々として○金鐵鳴る○四つの緒琴○一曲の平家○ほろきはうらむが如く○急なるは雨に似たり○はやちの風○金線を張る
○馬上に琵琶をとつて撥をはらへば、行雲たゞよひて月色さむし。
○雲井のかすみ九重の、春のしらべも定まりぬ、ちりかきはらふ四つのをに。
○雲井はるかにすみのぼる、よはのしらべに大空の、なかばの月もかげさに

て。
○風は疎竹に入りて聲ます〳〵恨み、雨は芭蕉をうちて音いよ〳〵佗し。
○はやき時は急雨の如く、ゆるき時は私語（さゝめごと）の如し、四聲一絃はらつてひゞき亮々。

## 舞蹈

○袖うちふりて○足拍子○きほふいろ○五節の庭に○桃さくら袂つらねて○かへすたもと○立ち舞ふ袖○袖ひるがへす○風にみだるゝ糸柳○わたる春風○樂のひゞきに○聲うち合せ○ゆたけき袖をうちふりて○雨にむせぶ花の色○かへす袂にこぼるゝ匂ひ○月下の舞○王郎の舞○劍の舞○電光はしる○めざましき○月に清くうたふ○天の羽衣○東遊の駿河舞○花の羽うでをかへしつゝ、舞ふやうに○霓裳羽衣の曲。
○月宮殿の舞の曲三五夜中にかなでつゝ。
○雪を廻らす雲の袖、かざす桂の枝のつゆ、光を花とちらすなり。



○色めづらしき薄衣の、日もくれなゐのさし扇、さしかざしてもまひあうぶ、花の蝴蝶のゆめの袖、うつゝにかへすよしもがな。
○鼓のこゑもとう〳〵と、なくうぐひすのゆめおどろかす、陽春樂の歌の宴。
○日數ふりつむゆきの夜に、廻雪の袖をひるがへし。
○濃艶一枝の花のいろ、月にむかひてまふうでも。
○ありし雲井の花の袖、むかしを今に返すなるうの舞姫の小忌衣、うらめづらしき姿かな。
○賤のをだまきくりかへし、昔を今にみよしのや、花のたもとをふりはへて。
○立ちまふ花のたもとより、色もかをりもいひしらぬ、匂ひこぼれてほのぼのと、かすむや人のはるごゝろ。

## 神樂 鼓、舞樂之部參照。

○月にすみゆく○夜のみかぐら○ふに太鼓○朝くらや○白にぎて○神のみこゑ○うつや鼓○けがれなき○たへなる調○かきあはする調○たちまふ袖も○神子の袖も○杜にとよみて○ふみならす○神のみいづ○神のみ

## 撃劍

○聲するどく○切先ふかく○うちこみて○ひらめく光は○雲間のいなづま○つるぎの霜○ひかりみだれて○あしらひかねて○こゑもろともに○發止とうけとめ○うけうんじて○たじろく○にたりや○一足ふみこむ○かちいろ見にて○いつはてむとも○れとらぬ勇士○火花をちらして○光をとばす劍のかげ、四方にひらめく稻妻や。

○發止とうちこむ太刀先に、光みだれてたじろくを、えたりやれうと電光石火、切り入る太刀をふせぎかね。

## 弓術

○ねらひはたがはず○まなかとほして○的は碎けて○風をきりて○ひきめの矢○まとかく○的のたぎ中○引きしぼり○はなつ○箆なかをせめて○なりかぶら○すさまじな○つよき弓ひく○弓張月の○いるれとたかく○ゆがへりして○矢ごろはよしとひきはなつ○ぬり塗藤の○白羽の矢○



㊀朝くらうたふこゑすみて、小忌の衣にもしろし。

○うつやつぎみのこゑすみて、杜のあなたにひぐらしはじむなる。

○老若男女貴賤都鄙、むらがりつどふみやしろの、庭にまつらふ舞蹈殿、うつや太鼓のれとたかく、今みかぐらずはじむなる。

○たちまふ神樂の拍子こゑ、いとれもしろくきこえけり。

○庭火のひかりきよらかに、しつらひたてし舞蹈殿、つぎみのひぐきふにのこゑ、よるの神樂のれもしろや。

## 舟遊 海、河之部參照

○れひかぜまちて○舟人うたふ○たかせさす○舟つなぐ○みなといで〻○ふなくらべ(和名鈔に競渡、布奈久良倍とあり、今の競漕の事なり)○こぎうふ○ゆきゝのふねの○いかだを下す○朝なぎに○朝びらき○岸のあをやぎ○まけじときうふ○れくれ先立ちこぐ舟○浪を散らしてこぐ○屋形舟○屋根舟○花ちりうかぶ○青ぶちの○れもしろや○ふなうたうたふ○夕ぐれすぎし○月影のせて漕ぐ○つながぬ舟○聲うちあはせ○さほさし下

す○葦わけ小舟○あさぎりに○夕ぎりふかき○うちつれて○くるゝも知らで○たのしくも○心あふとぢ○流をわたる○いざゆかむ○ねむるかまめの○ふなばた叩き○はやせをわたる○日影さす○夕日ながるゝ○柳たれし○川添の里○渚つたひに○いざりして

○月かげうかぶいさら川、ながれにうぶねいださゝむ。

○夕日のかげもすみだ川棹さす舟も水まかせ。

○まがきの島の松のかげ、さやけき月に舟うけて、行方も浪にまかせつゝ。

○さす棹のしづくもかをる花のかげ、流れはゆるく風なぎぬ。

○早瀬をくだすみなれ棹、さすや舟子か舟唄に。

○かをりゆかしき木蘭に、かいとる袖もきらめきて、銀波をわたる月のふね。

○波にまかせて舟やれば、風飄々として帆影かろく、興に乗じて聲を發すれば、響亮々として金龍をどる。

○岸の山吹さきみちて、こがねのいろに水よどむ、さゝなみわけてこぎゆけば、とるかいさへも匂ふなり。

○夕日のいろにうつろひて、燃ゆるに似たる花の色、水のおもてにあやなし



て、こぐかいの手もたゆまれぬ。

○汀の柳枝たれて、春あたゝかき里川の、淺瀬にさすやみなれざほ。

○合圖の炮聲ひゞくとひとしく、梶音合する端艇競爭。

○ありし昔の河逍遙、月の夜ふねの行末は。

○秋の水漲り落ちて行くふねの、月も影さすさほの歌。

○吹く夕風にうちなびく柳の影に舟よせて。

○かたかけ小舟帆をよわみ、追手あやふき夕庭の、波にたぐへる舟唄や。

○月かげきよき河水に、物のねひゞく舟あそび。

○錦のともづな蘭のかぢ、桂の棹の舟唄に。

○花のかげうく里川の、ながれにまかせてやる舟の、春のあそびのどかなる。

○みやこぎりうく大川の、ながれに舟をまかせつゝ、春にうかるゝ都人。

○春ゆく川の舟ありび、さすや舟子の棹にまで、ちりうく花の香がしもる。

○金波はつゞく幾百里、月にこぎだす舟あそび、うかれ心のはてもなし。

## 水泳 河之部參照

○はやき瀬に○わたりゆく○やす〳〵と○しらゆふたぎつ○水はやき○水れをたかく○ぬき手をきりて○みなわをびちり○うきつしずみつ○さかまく浪に○かろ〳〵と○身をたゞよはす○魚よりもげに○ひれなき身○鵜にも似たり○みるがうちに○れしながされて○くゞりぬけて○れぞろきさわぐ水とりの、羽風もなみに玉そへて、うきつしづみつ渡りゆく。

○ぬき手をきりて大川の、水上わたるめざましさ。

○かつく浦邊の海の子が、鵜よりもなれし水の中、やすげに身をばをどらして、水底ふかくくゞりゆく。

## 吟咏 音樂之部參照

○月すむうらに○心すまして○聲はり上げて○うたひはやして○よをこめて○たれをまつかげに○月にうかれて○うゝぶく○風にひゞきて○劉々として○拍子とりて○いざやうたはむ○ほがらかに○空たかく○くもこかくらぬ○こゑのかぎり○うれしさを○推しつ敲きつ柴の門、さやけき月によもすがら。

○月よみ男きけわが歌を、いざ山彦よもろともに、なれとうたはむよもすがら。

○千里をてらす月かげに、心もすみてうたふこゑ。

○花のさかりのあらしやま、木の間にうたふ一ふしに、花のこのめもうごくべし。

○醉のまぎれに人々は、みなもろこゑにうたふなり。

## 烟火 夏夜、河之部參照

○うらに花ちる○ながるゝ星の○ひかりもはやく○電光石火○みるまもあらせず○うち上ぐる○空にたゞよふ○ほめうやす○風にゆらぎて○川上も河下も○橋の上に○舟うちならべ○火影きらめく○やみそしもなし○川びらき○かみそろき○龍をどる○天つ御神やれそろくらむ○大ぶ

ね小ぶね○月がたちぬと○星がふれると○たつまきのぼる○めざましさかふる

○玉屋かぎやの聲々○闇にとぎろく一聲○空にくだくる聲○闇を月夜と

○闇にうちだす揚花火、ひらかぬさきに人聲の、うらにとぎろく川びらき。

○闇はたちまち月夜となりて、空に知られぬ花さきぬ。

○舳艫つらなる大ぶね小ぶね、風にゆらめく提灯の、火かげすゞしき川つらに、きらめく花火人の聲。

○たかくとぶ火のわざにさへ、柳櫻をこきまぜて、都の空をかざるなり。

○とぎろく空を見あぐれば、星の林に花ぞちる。

○流れ下りて水よりも、空にとぶ火のかげすゞし。

## 狩獵 獵夫、山嶽之部參照

○ふかくわけ入る○小笹原○きりにまぎれて○さつ矢たばさみ○志かれひ下す○かりくらす○山かり野かり○手にすうる鷹○とがり○たか狩○かりばの鳥○千草の花に○ふす猪の床に○つゝれとたかく○れとろきさわぐ○得物やある○荷ふ小銃○小銃とりもち○身がくれてまつ○ねらひたがはず○手馴のたか○岩根ふみさくみ○つゞらおりのみち○つゆわけて○肩なる小銃○山かげに○てなれの犬○かけゆく犬の跡れいて○野山を志のぎ○分け入る山

○武夫が矢竹心の梓弓、入野のすゝきつゆ分けて、行方もとほき山かげの、鹿垣の道のさがしきに、落來るしかの聲すなり。

○妹がまつらむ家つゞに、野邊の千草も折るべきを、小鷹すゑたるこの拳。

○狩にのみこり人はとへ、千草の花のつゆのいろ、あはれのさまはまさりけり。

○かへるかた野の月ふけて、をぶさもさやに吹く風に、小萩花ちるれもしろさ。

○野末にさわく村雀、聲をしるべにかりゆけば、日はくれはてゝ風さむし。

○甲斐の黒駒かけならべ、野末山本わかちなく、日ねもすかるは誰が子ぞも。

○吹雪もしぐるゝ荒野邊に、夕日の影はかくろひて、鷹さへ空に迷ふなり。

○かりくらしたる獵夫らが、野邊に一夜をかりのやど、女郎花こうをかしけ

れ。

○尾花みだれて狩人の、袖ふきかへす夕風。

○あしたの風もはやぶさの、手ばなれにちる萩のはな。

○かよひなれたる山のみち、こぐしきかけぢもこのともせず、得ものたづねてわけのぼる。

## 漁獵 海、漁人之部參照

○あみうちて○夕川下る○あゆ子さばしる○かぎり火に○海原をほく〇遠志ろき川○さほめぐらして○うぶねさす○すごしき風も○さざなみよする○岸のやなぎ○得物こに入れて○あさりつくして○うちわろす○ひき上ぐる○あみもれて○舟のりいだす○月もよし風もよし○心のまゝに○鵜舟にともすかゞり火の、後のやみ路をいかにせむ。

○水底てらす篝火に、よりくる魚をあさりつゝ、罪ももむくいも忘るなり。

○あなあさましのかはがりや、罪ももむくいも後の世も、皆ぬば玉のやみとして。



## 角力

○あしらひかねて○ためらひて○力よわくも○れぼつかなくも○よろめきて○かたみにもみ合ふ○たじろく足をふみしめて○こともなくなげいだす○れしだす○力のきはみ○たふれふす○金剛力○山をぬくちから○めざましき○ほで(大關なり)○まけずれとらず○すかさずかくる足がらみ○脇の下よりかいくゞり○どつとばかりに○むづとくむ○起きも上らず○あなやとばかり○龍とあがれば虎とをどり○四十八手の秘術○一虚一實○たぶさきとりて(たぶさきは褌なり)○むかしのさまも○すなをけたてゝ○あらりふさまぢ○すさまじきまで○すかさずかゝるを引はづす○れのがが力に餘されて○とぐろ走りて倒る

○走りかゝつて儘とうつ、うつ手にむづと組みつきて、えいや〳〵と諸共に、上に下にともみあひつゝ、互にあらそふ金剛力士。

○一上一下一虚一實、四十八手の秘術を盡して、たがひに揉み合ふ其樣は野見の宿禰と當麻の蹶速か、又谷風と小野川か。

心志づめむと○神のこゝろ○聲きよく○たかくうたふ○八少女がかへすたもと○鈴のひゞき○聲々うたふ○小忌衣○ふき合す松風の聲○かうがうし○夜をこめて○あたりにひゞく○杜のあなた○いつきます○たかきひかり○砂地ひかる○庭火たきて○ふみとゞろかし○むかしのことも○偖にいでゝ○めでたしや○いさぎよき○禰宜がうつ鼓の音○神樂のひゞき○神の鼓とりて

○よるの神樂の聲すみて、たかまの原の磐戸の舞、天の香具山ほの〴〵と、かすめる月にみねすみて。

○月影しろくゆきしろく、白き夕に白妙の、ゆふとりしでゝまひあそぶ。

○たつる幟もかすみつゝ、社のもりをもれてくる、れとれもしろき里かぐら。

○よしやよしのゝ山かつら、かけてかよへや岩橋の、高天原もようならず。

○八少女の返す袂のいろ〳〵に、禰宜がつゞみも音すみて、神さびわたる夜半のこゑ。

○あふぐみうらに月かげも、さやかにいでゝ隈もなき、ひかりと共に淺くらの、聲すみのぼる夜神樂や。



中黒の矢○風になる○ひやうそばかりに○百發百中○神のしわざか○あづさゆみ○しげどうの弓○十二束の矢(一束は指四本を伏せたるをいふ、之を十二束なるが其人の矢丈相應なり、之よりのひたるを二ぶせ三伏といふ)○弓づるのひゞき凄しく、發矢とあたる的の音。

○たぐひまれなる強弓に、ほこりげもなく襟かきをさめ、ほゝふむ人のうつくしさ。

○み空に向きて放つ矢の、さかしま事は身にかへる、ためしに引かむ梓弓。

○よるひるわかず武士の、引きもたゆまでとる弓に、むかふ仇なき大御代や。

○開けゆく世は體育の、具にばかり引く梓ゆみ。

○手にとり持ちてきりひしは、昔がたりにひくのみにて、空にぞめづる弓張月。

## 騎馬

○一文字に○砂をけたてゝ○天馬の勢ひ○はやりうま○くつわのれと○花のあらしに○風を起して○風に駕して○月毛のうま○栗毛のうま○鹿

毛のうま○佐目のうま○あし毛うま○むちあてゝ○ひづめのねと○たづなゆるめて○いばふこゑ○たてがみふりて○をどりあがりて○鞍つぼに○あぶみふんばり

○のりたる駒にむちあてゝ、花の下かげかけゆけば、春風一陣梢にねちて、ちるや櫻の花ふゞき。

○虞氏の涙の雨あがり、騅はかぎらぬ野路の暮。

○一たびあつる鞭の下、やがてもはせてゆく駒は、人の心にのるならむ。

○一聲たかくいばひつゝ、夜風にゆらぐたてがみも、白き月毛の二歳駒。

## 茶湯 飲食之部參照

○心しづかに○たぎる湯の○一つきの○風爐のもと○あしやがま○むきく〳〵の○釜の松風○うちよする浪のねと○静かなる窓のあけくれ○窓のすさみ○流れを汲て○水あまき○このめの匂ひ○やさしき手つき○心さわやかに○宇治山のこのめ○心のねくもくみてしる○世を隔てたる竹のねく○さびありて○世ばなれて○かぐばしく○なつめ形なる○茶筅の音



○釜はなにはの蘆屋形、たぎるそのねも時ならぬ、千草にすだく虫の聲、

○松ふく風に、よる波に音はかよへど、釜の湯のわきてしづけき窓のうち。

○鼎のうちに天地の、すべてを納れし窓なれば、せまきに似たれど狹からず。

○庭のはなれの一室に、あるじがたつる茶のけぶり。

○いつしか釜はたぎりぬと、ねぼへてひざく松の風、まだきに秋の聲たてゝ。

○世はなれてすむ草のやの、窓よりもるゝ茶のかをり。

## 尋問 電信、電話之部參照

○たづねゆく○たよりゆく○わけ入りて○こゝとばかりに○ねとなへば、

○とめゆく○袖ふりはへてとふ○あさぢふわけて○松ふくあらし○風のたよりのうよとだに○柴の折戸を○たゝくまも○そひやれば○こたへまてども○こたふるものは○人なくて○山ねろしの風○秋ざさびしき○山里に○山ふところに○人やりならぬ○ゆけど〳〵○花の下庵○君をみむとて○われやゆかむ○さゝぬ板戸○水鷄なりけり○たゝくは水鷄○あざむかれ○いでゝみれば○友垣のほとり○風のねと○めづらしく○よき知

らせ○かひあるたより○うれしくも○たまさかに○草しげり○あくる戸の○かくれすむ○たづねても○とふ人もなし○世ばなれし○君がゝど○ことよせて○ことさらに○草わけて○あれはてし○君やいます○人知れぬ山のいほり○ふりはへて○こと〳〵しくも

○稲負鳥（いなたはせどり）なくなるを、君が叩くとれもひつゝ、ふけてかどべの戸をれせば、月影さゑてしもれきぬ。

○蓬がもとの虫のこゑ、なにれぼろげにたづねきて、草葉にすがる白つゆを、かひなき裾にはかけぬべき。

○馬を君が門邊の柳につなげば、庭上靜かにして鳥のねのどかなり。

○れもふ心は朝倉や、木の丸どのゝうれならで、いかでこたへむ浮き身の上。

○忍ぶもぢずりたれぞとは、ゑしも知らせじ唯道のべの、便に立よりたまへかし。

○沙にしるしをきざむ鳥、萩のかれ葉にさわぐ風、ことゝふ便もなかりけり。

○風による君がたもとの露の上に、今宵の月や宿るらむ、れとづれたゑし秋のそら、たゞかくぞとは戀ふるのみ。



○晴嵐ねむりをやぶりては、蝶のゆめ、たづぬるに人なし。

○かすみこめたる春の月に、たづねむ君が花の門。

○ほと〳〵叩く月下の門、いらへば松の音ばかり。

○れもひがけきや松虫の、ねにだに立てぬ奥山の、草のいほりをゆくりなく、とはれてかばかりかたらむとは。

○月のひかりのくまなきに、いざや叩かむ友のかど。

○かきねにさける夕がほの、花の匂ひのゆかしきに、主やあるとれとなへば。

○志ば〳〵柴の戸をれせど、風の叩くとれもひてや、こたふる人の聲もなし。

○たゝく水鷄にゆふべ〳〵、はかられなれしやどなれば、れとなふ門やあけざらむ。

○花にれとづれ月にとひ、日ごろかれせぬ君がゝど。

## 書簡

○かりの玉章○筆のまに〳〵○海山へだつとも○わかるとも○千里をへだつ○野山をこゑてかたらふ○端書のふみの一こと○とる筆○心の底を

○花のたより○風のたより○れとづれ○たよりもたえて○うれしき便○言の葉草の○みだれぬあと○匂ひあまれる○なさけをこめし○筆の心に任す○いつとかも○まつにつれなき○水茎のあと○かへすゝ〳〵も○かきながす

○雲山萬里をへだてゝも、れもひをはこぶ雁のふみ。

○ふかき心の底のいろも、つゆのこりなく水茎の、かき流したるふでのあと。

○海は漫々としてひろく、天は漠々と長し、君がたよりをいつとかまたむ。

## ○動物部

### 鶯 春日、梅、柳、櫻之部參照

○うぐひす○梢にうつる○まどちかく○ゆきのふるす○わがやどの○なくにつけても○谷の戸いづる○ふるすをいでゝ○梅にうつり○誰かはつげし○梅の小枝に○きく人も○竹のさ枝に○きけばまつ○れのがねに○きぬる鶯○こゑすなり○よはにやきつる○ねやちかき○ねぐらさだめよ



○風のたより○すみかへて○春しりうむる○ふるすより○風のたよりに○香をやとめまし○朝な〳〵○春の里とふ○きこゆなり○香をやとめこし○こゑきけば○ごゑほのかにも○朝夕に○初ね○うつりゆく○朝けのまどに○朝戸あけて○この春も○れのが羽風○里なるゝ○ちぎりわすれず○しばなく○聲ぞ春なる○人さうふ○初ねならはし○このうちに○人來となく○ゆきになく○こほるなみだ○今朝きなく○なれてぞきなくふしなれて○れきいでゝ○なきてやすらふ○さへづる○さへづりかはす○日影と共に○花ぞの○身にしむこゑ○うひ〳〵し○朝けのまど○晴もとむる○春まちつげて○春をあらそふ○ふりいでゝなく○はやきなけひとり春しる○あくがれいづる○南にうつる○たかきにうつるなびく○身をうぐひすの○春つげそむる○春まちつげて○れのれ時しる○香をたづねきて○さびしさをとふ

○春にうかれてうたふにか、花を惜しみてなくなるか、梅ちる枝を木傳ひて、しづ心なくさへづるは。

○花にうつろふうぐひすの、こゝろのいろもねにしなく。

○ながき日影もくれ竹の、ねぐらにうつるうぐひすは。
○谷のふるすをいでうめて、たかきにうつるうぐひすの。
○谷よりいづるうぐひすも、まつこうたへみよのはる。
○柳さくらのけしきのうちに、なくうぐひすの聲のあや、花ざかりまじへたる花園や。
○朝日にはれし竹のゆき、きてはさへづる鶯の、聲の雫となりにけり。
○ふるとはすれど小笹原、ゆきはたまらで鶯の、聲が日毎にうちとくる。
○のべの白ゆきうちとけて、いつうぐひすの聲きかむ。
○雨もいとはずうぐひすは、梅の花がさきつゝなく。
○花前にてふまふ紛々たるゆき、柳間に鶯なく霏々たるあめ。
○梅の立枝をしるべにて、ことしもきなく鶯の、こゑもうれしき朝ぼらけ。
○梅はゆきにもまがへども、ふるものもなきうぐひすの、聲こそ春の心なれ。
○春を名のりてうぐひすは、谷のふるすをいでにけり、すだちし梅をのこしても。
○人里とほき山のおく、世をうぐひすの友はあり。



○霞みこめたる小松原、ひく手になるゝ鶯の、聲よりほかはいろもなし。
○竹の林にうぐひすの、ふしもしろくきこゆなり。
○みどりに狂ひ花にまひ、しらべ妙なるねにいでゝ、なくうぐひすの聲さへも、心のどけきはるのうら。
○春の心になりにけり、うぐひすきゝしあしたより。
○初聲きゝぬ山かげの、竹の中みちたどりきて。
○よをこめてなく鶯の、聲の雫となりにけり、朝日にとくる竹の雪。
○梅をたをればうぐひすの、なみだが袖につゆぢちる。
○連理のうめにうぐひすの、さゞめくこゑものどかなり。
○梅の花笠きたればや、雨にもこゑはしめらざる。
○なきて木づたふうぐひすの、羽風にちるはなみだかつゆか。
○なけやうぐひすよの人の、花のねむりのさむるまで。
○梅が香かをるをすの戸に、はつねゆかしきうぐひすの。
○梅の花がさ春のきて、ぬふてふとりの聲きよく、松の葉いろも時めきて、十返りふかきみどりかな。

○梅のはな笠ぬひをへて、柳のいとをくりかへし。
○くも井をこひてうぐひすの、のきばのかごになくこゑは、春にも似たるさびしさよ。
○黄金のかごにかはれても、猶ほこひしきか久かたの、雲井をしたふ聲すなり。
○梅の梢にうぐひすの、里なれうめし初こゑを。
○風ふく門のにひやなき、花田のいとをよりませて、たえずもなくかうぐひすの。
○梅林風かぐはしくして蝶のゆめ迷ひ、桃下みちとほくしてうぐひすの聲閑なり。
○花は片々として流水にしたがひ、鶯は翻々として晩風にとぶ。

## 呼子鳥 春山、春日之部參照

○ひとりなく○夕ぐれの聲○こたへせぬ○かすむゆふぐれ○山びこの○有明の空○山中に○人よぶこだま○花になく○君よびかへせ○たれさそ



ふ○たづきもしらぬ○春山の○みちふみまよふ○あはれなり○くる人もなき○花のよすが○れぼつかなくも○心ぼそくも○もりふかく○春よびかへせ○なけやなけ○おくやまの○ぶもさびしき○花ちる山の○雨よぶ子どり○うらさびしくも○いひしらぬ○うらくれて○ゆふべさびしく○木立のれくに○聲とほくして○よぶこゑに○山かげにして○春とも知らぬ○山下いほに○花をくしみてよぶ子どり、よぶかひもなきねにぞなく。
○春よびそめよくぶ子どり、二度あらむや花のそら。
○かひなきねにもよぶ子どり、かた山ばやし花ちりて、日影さびしき春のくれ。
○かすみにくるく山かげに、なによぶ子どり春の日を、とりかへせとかねにはなく。
○古陵の春はくれにけり、松のしげみによぶ子どり。
○春の山邊に日はくれて、ゆく手こぞしきりばづたひ、心ぼそきをなどかまた、ねにたてくよぶよぶ子どり。

## 雉子　春野、春日之部參照

○椿さく○なるゝ野原に○立ちかねて○すゝのゝきぐす○かり人の○きぎすなくなり○みかりせし○やけのゝきぐす○たつきじの○かすみもふかき○春ふかく○山ぢのきぐす○やきすてし○かすみのをちに○ほろゝうつ○朝日さす野○かすみつゝ○春の山道○ほろ〳〵と○子をれもふきぐす○春の日に○むかひの岡に○たちさらで○ありとも見にず○朝がすみ○かくれもやらで○かたをかの○八尾のきぐす○すだつ○しのびかねてや○すぐろたつ○こゑしきる○羽うつれと○烟の下になく○羽たゝく○朝な〳〵なく○どよむこゑ○しばなく聲○れとになく○ゆきまにあざる○つまどひ○ねぐらのゆき○朝月夜○すゝのを去らず○あさふむみちに○むらすゝき○かきねのみち○尾花がはら○れのがつま○子ゆゑにまどふ○つまこひて○こゑかすかなり○芝草がくれ○れのがありか○みかりのあとに○つゝれとたかく○もろこゑになく○とび去りて○草ふみれこす○きりたちて○あさつゆふみて○空たかく○天くものあなたになく



○山わけのぼる○あさりはてゝ○足元よりたつ○一つがひ○片山はたの村つぎ○たのむかげとて○かくれもたへず○はしたかの○またふるゆきに○旅人にやとかすがのゝ○わかくさのつまごもりする○あけぬとてなく

○ねよげに見ゆるわか草の、つまをたづねてなくきぎす。

○狩場のけふの春の雨、つまとふ雉子のいのちなり。

○子をれもふやけのゝきじの聲きけば、のどけきものゝ悲しくて。

○花さく野邊になく雉子の、こゑもかすみにつゝまれて。

○みかりの野邊の春のゆき、そこゝとなくのこれども、うちとけてなく雉子の聲。

○つまとひかねてなく雉子、かすみはれてはいづかたの、草にかくれてねにはなく。

○巨勢のみかりば雨はれて、かすみこめたる草がくれ、なくや雉子の二聲三聲。

## 雲雀　春野、春日之部參照

○うらくれて○かすみもふかき○ひばりなく○わかばの芝生○のどかなる○かすむ末の○春の野に○聲のみあがる○床しむる○かすみにまがふ○ひばりたつ○つばさやすめず○みちくるは○又あがるなり○今はとて○聲ぞれちくる○たつひばり○夕ぐれのころ○聲々に○朝日にのぼる○くるゝ日の○うらにさへづる○おちくる○聲のみはして○空たかく○床のすみれ○あくがるゝ○野澤の氷○雲に入る○子を思ふ○夕ひばり○芝生の床に○雲わけて○のどかなる空にとびたつ○影はみえず○草にはなかぬ○このひばり○心うらなる○夕日さすのべ○うら〳〵とてれる日○末とほきわかばの芝生○春の夕ぐれ○淺ぢにれつる○かすみをわけて○高くあがる○ふかくかくれて○雲に聲ある○何をかつぐる○うらにことつぐる○れもひのまゝに○根ぜりつむ澤○をとめ子が袖にれちくる○あがりもゆくか○天雲にすむ○うこはかとなく○野べちかきかきね○かすむ軒ばにれつるひばり○今かおつちし○野をなつかしみ○畔道づたひ○



春ふけたりと○かすみたつ野に○おもひあがりて○名をあげひばり○花より上に○なくともみねぬ○こゑはかくれぬ○み上ぐればゝさわらびのもゆる春日に○朝しめり○聲うち上げて○わかなつむ野のこゝかしこ、心もうらになくひばり。○櫻が岡の夕ひばり、れちても花のくもになく。○みうらにばかりあこがるゝ、ひばりや花をいとふらむ。○かすみはてたるみうらより、こゑはさはやかにれちくなり。○夕日匂へる春の野の、かすみのうちになくひばり。○朝日まつまを片岡の、木ぐれになくかもろこゑに。○れもひ上りてなくひばり、聲はれちくと知るやいざ。○かすむかたのゝ夕ひばり、あがるもれつるこゑときく。

## 燕　霞、春日之部參照

○つばくらめ○妻とふつばめ○つばめくる○ちぎりわすれず○つばめなく○軒ばぢなれず○なくつばめ○友よびかはす○つばくらの○つがひは

なれぬ○むれくる○あひはゝなれぬ○かへりくる○心かはらず○春ごと
に○ふるすたづねて○くもゐより○あるじわすれぬ○柳がいだに○つば
さかろげに○いとゆふ○つばさならぶ○のきのはに○ものわすれせぬ
○ふるさとの○きなれしやどの○つばめ三つ四つ○今年また○ふるやの
ゝきに○とびかふさまも○玉だれのをす○とこ世より○かりかへるとき
○時しもあれ○かよひくる○花のあひだを○ひるがへりても○友よびた
てゝ○をりしりがほに○山がつのやど○わすれもせで○山なしの花のち
かくに○かろ〳〵に○なれてもきたる○うれしきものは○いつかきにけ
む○わがゝどの苗代小田に○たもとかろげに○立まふをとめ子がすがた
に似たる○まふもをかしき○おのづからちる花の○風かよふ○いとまな
くこゑもみだれて○とふもかろげの○軒ばゝなるゝ○子をよびて○日影
にあうぶ○あそぶものどか○聲たゆずちる花の○春の夕ぐれ○枝
をはなれて○なかぞらにとぶ○つかのまも○かへりゆく日を○やどなわ
すれそ○又もこよかし○わすれぬものは○ふたゝびきませ○糸とりむす
び○むかしのためし○又あはも日は



○花の梢をかすめては、風にたはるゝつばくらめ。
○花の下かげとひめぐる、つばめのつばさ匂ふなり。
○春雨にぬれてとびかふつばくらめ、羽風に花もさそはれて。
○物いふ友にはあらねども、なれてきぬるはうれしくて。
○風にちりくる花かとも、見ゆるはつばめの一つかひ。
○ふるすわすれてかへりこし、つばめの聲のうちとけて、春のひかりぞ長閑
なる。
○片々として花間にひるがへる春興の舞。
○柳をわたる春風に、ひるがへりても燕の、かろきつばさもこゝちよし。

## 雁 霞、春日之部參照

○雲井はるかに○かへる雁がね○ひとつに見ゆる○とぎまらね○行へも
知らぬ○ながむれば○つばさしをれて○まてしばし○かへるならひと○
春さめに○道もやまどふ○いづくとも○おのがこしぢの○なきかはす○
きゝこうわかね○天つかり○かすみをわけて○かへるとも○花のさかり

を○春をうしとや○ゆくかりは○かすめるうらに○折もわすれて○しの
ゝめに○うきぐもに○つばさにかゝる○はねうちかはし○あけぼの○秋
きちぎほに○夕ぐれの○かすみわけつゝ○いうぐなり○かすむ夕の○こ
の朝げ○かへりうめても○かすむ日に○きゆるかりがね○いつしかと○
花のしらくも○かすみしく○こゑ吹きれくる春風○くもの衣○あひもれ
もはで○夜ふかくかりの○沖めかりがね○中やどりせよ○みれくる月○
さ夜やふけぬる○有明がたに○わさ田かりがね○あらはるゝ○こゑをほ
にあげて○天とぶや○れほひ羽○初こゑを○田のもにれつる○いくつら
○月におつ○たまづさかけて○さよふけて○やども定めず○こしぢにい
りぐ○いなばにおつる○朝ぎりに○眞砂の上に○ねざめて○いまだ旅な
る○ねざめとふ○月にうかれて○月になく○都にむかふ○とわたる○天
つたふかり○來るかり○れのが羽風○この秋も○きゆるれもかげ○玉づ
さかけて○つらもみだれて
○なにいうぐらむ春の雁れもひでもなきふるさとのうらに心のあくがれ
て、みやこの花をみすてゝも。

○かすみこめたる浦わをさして、かへる雁がねなきわたる。
○蘆のくちはのしもの上に、むれねしかりようら〳〵と、かすみうめたるき
のふけふ、今はとうらにれもひやたてる。
○ゆふべのうらのうすぐみに、文字なしてゆくかりのつら。
○こゑもかすかに影きえて、かすみにまじる雁のつら。
○うはのうらなるたまづさを、かさむ雲路にかきつらね、いつくをさしてゆ
く雁ぞ。
○道なきうらの道とめて、いつくの空にかへるらむ。
○夕日をつゝむくものいろ、はるかにきこゆる雁のこゑ。
○花の香しめるれぼろ夜の、かすみをわけてかへる雁、なきつれてゆくあけ
がたは、あきにもまさるあはれかな。
○ふるさとさしてはる〳〵と、かへる雁がね小夜ふけて、かすみにまよふこ
ゑすなり。
○春をみすてゝかへる雁、今はのこゝろありあけの、月と花との中ぞらに。
○雲井の雁はかへりきぬ、たがたまづさかつたふらむ。

○こゑもかすみてゆくかりの影だに見ぬ夕まぐれ。
○ふりさけ見れば和田の原、八重のしほ路にとぶ雁の、つばさの風に波やたつ。
○たなばたつめの梭のねとか、よぶかくわたる雁のこゑ。
○花なき里にすみなれて、越路にいうぐかりがね。
○花を見すてゝゆくかりの、ふるすの花やいかならむ。
○ゆく雁がねも大ぞらの、かすみをわけてはるゝと。
○たびをつねなるかりさへも、かへるうらにはねをぞなく。
○うはのうらにや筆とりし、かきみだしたる雁の文字。
○うらゝかすむ海原に、聲をほにあげてかへるかり。
○野にも山にもたちこむる、かすみがくれにゆく雁は、聲のみうれときかれつゝ。
○たれにいうぎて雁金の、よどのわたりの夜ぶかきに、かすみをわけてかへるらむ。
○かすみはてたる春の夜の、ねぼろ月夜になきつれて、心づよくもかへるかりなほふるさとのこひしくて、花の盛もすてぬらむ。

## 時鳥 夏月、夏日、夜之部參照

○ひとこゑに○まちつるものを○こゑぬれて○杉のむら立○鳴かぬ夜もなし○ほのめく聲を○そほざかる○うのはな蔭○きくたびに○かたらふこゑを○夕づくよ○聲のにほひ○なきすてゝ○うつゝともなく○さよふけて○花たちばなに○うたてなく○きけどもあかず○人づてに○なぞかきかぬ○あこがれて○一聲もらす○夜をかさね○くもになくなり○うらみても○雨はるゝ○きくや初ね○むらくもの○いくたびとひつ○をちかへり○ねにあらはれて○よこぐもに○人しれずこう○しのびねの○かたみに名のる○五月雨に○われもうき世の○やどごとに○くものあなたに○五月やみ○ねたくも外に○そことなく○うはの空なる○れのが五月○いくよのなつを○さやかにも○なみだはみにぬ○里ちかく○目をさましつゝ○今はなけ○いづちゆくらん○枕とふ○ことのはうれし○ねもやらで

○ゆめにもきゝつ○さよふけて○月のみのこる○あかつきむきの○ねざめわびしく○まちわびて○くもにかくれて○一聲殘月白し○あとはかなくも○いづかたに○夜ぶかきうらに○血になくこゑ○月は細し杜鵑一聲の空○なきすてゝ○たそがれに○ひとふ人もなき○はなたちばなに○きなけやきなけ○卯花月夜○河うちの里○月はゝかなくかげきにて○あめもふりきぬ

○橋かをる夕まぐれ、初ねきかせよほとゝぎす。

○月はすめども時鳥、姿は見ねぬ一聲に。

○蜀山萬里月白く、血になく聲も肌さむし。

○山時鳥なく聲の、はるかにきゆるくもまより。

○さつきの軒のあやめ草、句ふ夕べの村雨に、山子規なきてゆく。

○くる年毎にまたれつゝ、とけてもなかぬ時鳥、こゝらの年もあかぬかな。

○草の庵の夜の雨、むかしのことの忍ばれて、たもとつゆけき折からに、なみだなうへぞ時鳥。

○このゆふぐれの村雨に、まちにてきかばほとゝぎす。



○月にまたれし時鳥、花もはぬやみのよひになく。

○子戀の森のほとゝぎす、人しれずのみなきわたる。

○はれまもみねぬさみだれの、空もくれゆくよひやみに、いづちにかゆく時鳥。

○弓張月のくもまより、いる矢ねぼえてなきわたる。

○殘れる月のかげみよと、おどろかしたるほとゝぎす。

○ものゝあはれもあり明の、月に一聲ほとゝぎす。

○楊花は散りて村雨の、雲間の月に一聲の、花もむきうふる時鳥。

○なきてすぎゆく時鳥、死出の山路のしるべせよ。

○きなかぬよひを知らませば、ぬる夜も一夜あらましを。

○こゝひのもりのほとゝぎす、五月のうらのあめになく。

○まつ程とこゑもひつれ、きゝてのゝちは中々に、いとゞねられずなりにけり。

○ひるは雲間をながめつゝ、夜はよもすがらまどろまず、まてどきなかぬ時鳥。

○なかぬ夜なく夜れしなべて、いやはねらるゝほとゝぎす。
○またるゝよその夕ぐれの、うらのあはれも村雨の、ふりいでゝなく時鳥。
○をしみし花もわすられて、けふはまたるゝほとゝぎす。

## 水鶏 仲庵、夜、夏月之部參照

○あくるまで○たゝくゝひなの○くゝ○あけぬと叩く○あけがたの○しばの戸叩く○ねざめとふ○月にうかるゝ○さよふかき○ひまなく叩く○夜もすがら○老のねざめに○くゝひなかと○たがゝど叩く○やどごとに○ゆめれどろかし○れとすなり○たゞずおとなふ○人をはかる○田づらのいほ○みじかよの○夏の夜のうら○心みじかき○また夜ぶかきに○天の戸の○淺ざは水に○れどろかす○まこもがくれ○やみゆく水の○里の小川に○草のいほりに○ほかげさして○くもる夜の○月もさしたる○松の板戸を○ゆめの中にも○ほとゝ〳〵と○こゝろのとまる○門毎に○柴のかりやに○させりともなき○あけてれとせぬ○いぶかし○さりとも人の叩くかと○ほのかに叩く○老のねざめ○あけぼのゝうら○あやめれ



ふる野ざはの水に○人をはからぬ○叩けばらもあくる夜に○夕月もしばしはかげをとゞめ○人まつ月に○さらでしも○さらぬだに○氷をたゝく○やり水になかるゝ月
○叩く水鶏のなかりせば、あけても開けじ柴の門。
○涼しき月のかげやどす、淺澤水になく水鶏、氷を叩くにさも似たり。
○月影ながるゝいさゝ川、あしの葉がくれ水鶏なく。
○里川の眞菰のうちに聲たてゝ、水鶏なくなり夕月夜。
○人もとひこぬわが門に、よるゝきては叩くなり、心知りなる水鶏かな。
○人は水鶏をうたがへど、叩けばうらもあけにけり。
○何にくひなの叩くらむ、人まつ月に槇の戸も、さゝでねにけるわがやどを。
○月もながるゝ門川に、夜ごゑずごしくゝひなゝく。
○老のねざめもあけぼのゝ、うらさびしさのまされとて、ほのかに叩く水鶏かも
○野澤の月にうかれては、くひなは夜毎なきあかす。
○夜やふけぬらむてる月は、眞こもがもとにかげすみて、まぎれぬ聲に水鶏

なく。

○やみゆく水のしろ〳〵とみゆるあたりになく水鶏。

## 鶉 秋野、秋日之部參照

○うつらふす○うづらの床○あはれにも○下葉やさむき○うつらなく○田中のさと○夕まぐれ○きりのまがきに○小萩はら○床しめつらん○あれはてし○秋をうづらの○ふしわびて○庭のかや原○をがやが下○夕ぎりなびく○身にしみて○露のまくらや○尾花ちる○むのがふしど○あれにける○つゆふく風○秋ふけて○尾花がもとに○うらぶれて○秋風さむし○したつゆに○こゑしきるなり○風さむみ○はらふあきかぜ○たつうづら○うづらとやなく○ふりはてゝ○たがため秋を○入江のあきを○ふかくさのさと○眞野の入江の○夕べさびしく○秋風あれて○あれたるやど○身にしむ風の○あだにちるつゆ○露のまくらにふしわびて○とこのやま風○あはれもつゆもふかくさの○さとゝふものは○たちうひて○いとどさびしき○野寺のかねも○野べの夕ぐれ○かりくらし○やどかれば



○庭の小萩に○野守がやどに○巨勢のしのはら○夜はあけたれや○なきたつ聲○なれても秋の○ふるさとさむく○たれにかこちて○野分せしあしたのはら○あらぬ方にも○日はれたちて○尾花が末に○つゆふかみ○わけゆけば○秋をへて○あれのみまさる○このごろきけば○ちかごろすみしさとの夕○衣うつさと○こ萩がもとに○つゆにうぼち○川ぞひの野邊に○われひとり

○床の山風はださむく、よるもずからになくうづら、

○あれのみまさるふるさとに、むかしながらの聲はして、うづらなくなり夕まぐれ。

○野分のありしあしたより、秋をうづらの床をなみ、きりのふすまによたぞなく。

○床の山風さむきよの、つゆの枕にふしわびて、鶉なく野の月の影。

○秋の野守のやどゝへば、庭の小萩に鶉なく。

○巨勢の篠原見にねぞも、夜は明けぬらしうづらなく。

○なれても秋の夕ぎりに、たもとつゆけき折しもあれ、鶉の聲のきこゆなり。

○ふもとの野邊に秋ふけて、草の葉がくれうづらなく。
○あれたるやどの淺茅生に、うづらなくなり夕ぐれの、風も身にしむきのふけふ。
○夕ぐれ近くなりぬらし、のべの秋風身にしみて、うづらの聲のきこゆなり。
○わがすみすてゝほどもなき、やどはいつしかあれはてゝ、うづらぞやがて主なる。
○あしたの原にのわきして、軒もまがきも秋の野べ、あらぬ方にもなくうづら。
○あはれもつゆもふかくさの、里とふものはうづらのみ。
○野末のいほの秋のくれ、かごとがましくうづらなく。
○なれても秋の夕ぎりに、猶ふるさとゝなくうづら。
○人にわかれて秋の野の、尾花がつゆをわけ行けば、夕さびしくうづらなく。
○片山林日はれちて、かたへの野邊にうづらなく。
○野風をさむみなくうづら、聲より秋はふけぬらむ。
○君がれとつれかれてより、かりにだにとふ人たにて、うづらの床となりにけり



## 鴫 秋田、秋野、澤之部參照

○はねれと○鴫のふしど○たつしぎ○かずかくしぎ○いくもゝ羽○羽れともさむく○のぼり羽○鴫たつかた○もゝ羽がき○月にはねかく○あかつきの夕ぐれ○月すみて○わびしかりけり○小山田の○澤べの床に○きくまゝに○かたしく袖に○かきあへぬ○鴫の羽風に○袖ぬれて○しづが門田に○ふすしぎの○あはれ身にしむ○あはれなり○れもひづゝはる○あかつきさむく○さわたる○れもしろき○月のかげさす○淺澤水に○のざはの水に○牛叱る聲にれどろきたつ○秋のあはれも一しほの○身にしみ〳〵と○きりにむせびて○つゆはらふ○背面の小田○門田のけしき○田づらの澤○さはべの床○物こひしらに○根岸のさとに○芹川つゞみ○伏見の澤の○猪名野の秋の夕まぐれ○れもひかずうふ○かずかきあかす○月のかげこぼるゝ○月けぶるなり○松原つゞき○尾花みだれて○秋の

千草のいろ〳〵と○あさるあしべに○月はくれはてゝ○月ぞほのめく○三日の月影○大澤のあしまの月○影もさわがず○つゆおきあまる○風ふきいでゝ○夜やふけぬらむ○人影みにず○たどるともなく○ものおもひつゝ○うちしほれ○月もかたむく○折しもあれや○秋のけしきは○袖のつゆとふ月影に

○あけゆくうらのいろみにて、鴫は野澤を立ち去りぬ、あしまの月をのこしても。

○鴫の羽ねがきもろはがき、かきあつめたるあかつきの、寢覺の床のあはれかな。

○猪名のふし原さびれたる、鴫の羽根がきもしろく。

○しきたつ澤に日はおちて、水もくれゆく秋の聲。

○あかつき近くなりぬらし、鴫の羽ねがきしめるなり。

○いつにもおなじ夕ぐれの、あはれをうふるしぎのこゑ。

○しづが門田にたつ鴫の、羽かく音こそきこゆなれ、川ぎりふかきあかつきに。



○風さわたる澤べの床に、いくよか鴫の立あかす。

○牛叱る子のすぎゆくに、おどろかされて淺澤の、草より鴫の一羽二羽。

○木のまをもるゝ日の影の、おちてきらめく淺澤の、みぎはにあさる鴫一羽。

○ゆふぐれさむきあき風に、野末にさわぐ鴫のこゑ。

○ながきをかこつ秋のよの、おもひかずふもろ羽がき、しぎも夜さむやわびぬらん。

○猪名のふし原たつしぎの、羽風にこぼるゝつゆの月。

○あさ澤水に影みにて、羽ねうちならしとふ鴫の、行方におつる夕日影。

○夜やあけぬらむわがいほの門田よりたつ鴫のおと。

## 千鳥 冬夜、河之部參照

○夜をさむみ○きりのあなたに○なく千どり○友なし千どり○もろこゑに○千どりむれたつ○川ぎりに○八千代となく○冬されば○つまとふ千鳥○よひ〳〵に○をちかへりなく○風をいたみ○ねざめてきけば○夕されば○行かへり○磯山千どり○わたるなり○こゝろとさわぐ○浦風の○

千代となく○浦波に○かたもさだめず○わたる○波をちらして○よびかはす○川島がくれ○夕ぎりに○沖のしらすに○浦づたふ○とほざかるこゑ○朝さらす○あとふみわけて○ゆふかけて○月にむらがる○川ちどりなく○こゑさだまらぬ○いろ千鳥○夕かたまけて○はまちどり○聲うらぶれて○浦ちどり○こほらぬこゑ○さよちどり○むれたつ千どり○しばなく○霜ふかき夜○友ちどり○聲もさむげに○夕浪に○なみのよる〳〵○加茂の川原に○佐保の川ぎり○天の橋だてきりはれて○久木生ふる清き河原○うば玉の夜のふけゆけば○冬の夜すがら○たがためか○あさみつ汐に○聲ぞきこゆる○浦より浦に○なみのほにとぶ○いはこゆるあらいそなみ○心ならずや○立居は浪のこゝろなりけり○すぎうかる河原の月に○みなとふきこす汐風に○月ふけぬらむ○うちわたす大川のべ○瀬をひろみ○沖つかぜ雲井にふきて○よるの山ねろし○さむきをわびて○心ほろ江に

○かひもなぎさのむらちどり、なみのよる〳〵ねにぞなく。

○松がねあらふ沖つなみ、立ちさわぎてもなくちどり。



○島山松に月れちて、こゑのみのこる濱ちどり。

○くる〳〵川邊になくちどり、きりにまどへる友やよぶ。

○あしのかれはに風あれて、入江のちどり月になく。

○朝みつしほにたつ千どり、浦づたひする聲きけば、なにはの冬もたけにけり。

○あらしをさむみ夕波の、たかさごのはまのはまちどり。

○きりのあなたになく千どり、こゑはへだてぬ佐保川原。

○いうつなみに聲うへて、月より上をゆく千どり。

○みなと吹きこす汐風に、浦づたひゆくさよちどり。

○夜やふけぬらむすむ月に、聲うちあげて千どりなく。

○ありその波に月碎け、銀波たゞよふ海の原、千どりの聲もかすかなり。

○なみにまぎれてはる〳〵と、ゆくかた知らぬ浦ちどり。

○こゑうらかけてかよへども、またこちかへるむらちどり。

○前の小川の水かれて、心ぼそくも千どりなく。

○舟まちかねて隅田川、川下とほくみわたせば、月に千どりのたちさわぐ。

## 鶴　松、祝賀之部参照

○まなづる○よるのつる○たづがね○子をれもふ○あしたづ○萬代のこゑ○たづかける○たづの一聲○あさりする○天とぶ○月になく○つばさのしも○浦わたり○つるのもろ聲○天つみ空に○毛衣をかさねゝて○よはひをゆづる○八千代をよばふ○月すむうらに○たづの一むら○千代の友づる○聲たかく○天にきこゆる○九皐になく○れりねるつる○たづがねすみて○月によばふ○松にあそぶ○松のときはも○蓬萊宮の○さぎりをわけて○とりのつかさ○君が世のためし○治まる御世の○くもゐをつるの○友よびかはし○のどけきうらに○さはべになく○雲井はるかに○あさひさすれほづら○玉のみぎりに○にるものもなき○翅のしもゝはらひては○子にはなく○なさけにも○玄裳縞衣○丹烏のつる○つばさを張りて○かけゆくすがた○朝日をせのて○まひかける空○一聲たかく○ことぎりよりも○たちまさる○月すむ夜半に○すだちする○松にやどる○月宮殿の庭のれもに○玉を砂としく○池のみぎはに○めでたきためし○ことぼかん○いく世かはらぬ○千代萬代の末かけて○羽れともたかく○ひなづる○子づる○風に御して○雲うちはらひ○久しきあとを○かげは盃にうかふまどの月、聲はまくらにおつ夜のつる。

○つばさはしろし庭前落花のあたり、こゑはきよし池上月明のとき。

○たづもけだかき丹烏の、鶴の姿を水かゞみ、うつす澤べも底すみて。

○月はくまなき夕べにも、子をこひてなくたづむらの、聲のいろこうくもりけれ。

○玄裳縞衣のすがたには、けだかさみえて百とりの、れよばぬさまもめでたしや。

○浪の音たかくなるみがた、あしべのたづのさわぐなり

○あしまによばふつるのむれ、今しも汐やさしぬらむ。

○雲井はるかにまふたづの、一聲毎に千代しめて。

○つるの毛衣たてぬきは、千よのしもこてれるなり。

○れもひあがりて空たかく、のどかに遊ぶあしたづは、猶むらごりに似ざりけり。

○千とせへぬべきやどなれや、庭の松が枝たづぞすむ。

○久しきあとやとめぬらむ、濱の眞砂地ふむだつは。

○たつもめでたきすがたかな、頂にうくる朝日のいろ、翼にかくる月のひかり。

○君が八千代をことほぎて、みそらにたかくつるぞまふ。

○はじめてすだつひなづるの、千代よぶ聲もうらわかく。

## 都鳥 河、春日、櫻之部參照

○花のさかり○すみだかはべの○浪のうきね○うきねのゆめ○さざなみよする○花のいかだ○花ふぶき○花の下ゆく○浪にゆめみる○かすみながるゝ○ながれもれうき○春ゆく水に○つがひはなれぬ○うきねにむすぶゆめ○岸のやなぎに○水ぬるむ○名にしおはゞ○こゝろ人も○花ちりすぎて○あし間にねむる○さほさし下す○みなれざを○舟子が唄に○



一つがひ○むつまじく○みやびをながす○わがれもふ人はありやなしや○舟とめて○舟つなぐ○たかべのむれに○まぎれぬ鳥の○水の上ゆく○やすげにみゆる○のどけきうらに○春もさかりの○大川の水にたぐよふ○なみにうきねのみやこどり、水の心に身をまかせ。

○花のいかだをうかべては、水もかをれるすみだ川、あそぶもをかし都どり。

○つがひはなれぬみやこどり、浪の枕にいくよねし。

○さすやかはせのみなれ棹、ながれもかすむ春の日に、うきねの夢をみやこどり。

○春の光にてらされて、心のどかにみやこどり、ありぶすがたもゆたかなり。

○花のかげゆく里川の、ながれの末にみやこどり。

○名にれふ花のみやこどり、花のたよりを知らせてよ。

○ゆめにも花をみやこどり、春の日あかぬ浪まくら、うきねのとこもたのしきや。

○春もくれゆく水のれもに、をしみもあへずみやこどり、猶もうきねのゆめやみる。

## 烏 夕之部參照

○やもめがらす○里より里にとびかける○ねぐらいでゝ○明けぬとつぐる○友がらす○月夜がらす○子もちがらす○朝がらす○ねぐらをいづぐ○うかれがらす○こゑもかしましく○かまびすしくも○枯枝にとまるからす○夕さびしく○ほしきらめきて○月にうかれて○こゑよりしらむ○一聲たかく○かげきゆる○三つ四つ五つ○松の葉がくれ○ねぐらあらうふ○山ふかく○やみよがらす○をかのべの梢にすくふ○まづくれりめて○月もほのめく○月にひとこゑ○志も夜をさむみ○うらぶれて○里のともしび○鎮守のもり○聲うちあはせ○もろこゑになく○こゑ〳〵さわぐ○片月影さむくして

○ゆふ山がらす一こゑを、けふのなごりのくもになく。

○雲井はるかにとぶからす、一聲ごとに日はくれて。

○ねぐらをしむる岡のべの、松のいろより日はくれて。

○かくてや遂に山烏、かしらばかりは白けれど、れもしろからぬ世にたちて。



○烏は反哺の孝をあげ、鳩は三枝の禮をふむ、とりとはいへど中々に、人に敎を示すなり。

○四つ三つ五つかへりくる、聲もかなしき夕がらす。

○れくれ先だち、ともよびかはし、かへるからすのむつましな。

## 雀 朝之部參照

○こゑもあけゆく○すだつ雀のひなの○ちよ〳〵と○ねぐらもとめて○竹をねぐらの○千代となきつゝ○ふしごの竹に○ふせごにいれし○のきばにうだつ○あけがたしるき○ほのぐ〳〵あくる○夕つげわたる○れちぼをひろふ○田のもにれつる○あさりねる○友よびかはし○友なきやごに○きてありべ○まがきのもとに○いなむらに○梢にさわぐ○竹村ごとに○ねぐらもとめて○とびたつあさの○風にたへぬ○あさりかねてや○ゆきのあしたの○すごもるひな○まだうらわかき○あはれなる○すごめいろどき○夕まぐれ○里わの田わに○ほなみよる門田のくれに○すごめのこゑの○はれてもけふは

○わが文まどのくれ竹に、ねぐらさだむるむらすゞめ、友にとはるゝ心地して。

○竹の林のねくしめて、安きわが世を千代となく。

○八千代の竹にやどしめて、さへづりくらすむらすゞめ。

○山田のねもにむらがりて、ねちぼをひろふいなすゞめ。

○ひくやなる子にねどろきて、とびたつあきの村すゞめ。

○みどりの竹にやどかりて、千代とこほぐすゞめの子。

○すゞの〳〵小田にむれてとぶすゞめの聲にとよさしの、しるしも見にてゆたかなり。

○夜やあけぬらむねくにはの、竹のしげみに聲たてゝ、なくや雀のもろこゑに。

## 鴟鴞 夜、幽寂之部參照

○夜ぶかきうらに○ねざりをあさる○梢にさわぐ○血にこがれては○血しほをよびて○血をすゝる○林のねくに○杜のあなたに○風ふきあれて



○星月夜○明星かゞる眼の光○眼光煌々○れうろしき○よこしまなる○うらさびしくも○杉のむらだち○野寺の塔の○夕月ほうく○黒くもはしるやみの夜に○ものすごき○山あらはなる○冬の月さえて○しもよりさゆる○風うよぐ○山ふところに○山かげのいほ○落葉をわくる○落葉をしまく○ふきあるゝ風○いづくにかなく○杜のくちきのねくふかく○木のうろふかき聲のかぎり○ひるはかくれて○杜のくらくに○さびしさをよぶ○くれうむる

○ふくろふのなく落葉の里は、夜すがらのゆきにうづもれて。

○野寺の塔を横にみて、杜の下みちわがゆけば、なくふくろふの聲きこゆ。

○月あきらかに星まれなり、夜やふけぬらしふくろふの聲すさまじくきこゆなり。

○杜のこぐれにまだきより、夜をよぶゝくろのこゑきこゆ。

○ねざりの巣をやみとめけむ、羽れとゝもたかくふくろふの、杜のやみぢをわけてとぶ。

○雨になりたる夕ぐれの、木の間にさけぶゝくろふの。

○ものすさまじき冬の夜の、月を時とやふくろふの、聲をかぎりに叫ふなり。
○三日月けぶる古寺の、み堂のうきになくふくろ。

## 鶏 庭園、晝之部參照

○かけなく○夜をのこす○ながなきどり○にはつどり○はつこゑ○里より里につぐ○ねぐら○はなやかに○めざまし○とさかふりたて○爪あらはして○羽ばたいさぎよく○一聲なきて○ときつくる聲○夜やあけぬらむ○老のねざめ○八こゑのとり○函谷のせき○夜をこめてなく○よにあふ坂の關のとざし○夜ぶかきこゑ○とりがねにおどろく○をしきゆめさめて○時をつげつゝ○またねずる○はねうちひろげ○花野にあうぶ○もろともに○天の戸あくる○くだかけの○神代ながらの○ながき聲して○ひなよぶめざましの聲○うらの草屋に
○枕のもとのともしびは、くらくなりゆくあかつきを、さやかにつぐるとりの聲。



○ゆふつげどりか唐衣、たつたの山にをりはへて、なくねもいとゞ花やかに。
○とりのなくねにおきいでゝ、みれば夜ふかきうらのさま。
○日は山のはにかたむきて、夕あさりする庭つどり。
○とぐらにのぼる庭とりの、聲よりくるゝ空のいろ。
○うきあかつきの聲々も、老のねざめはなか〳〵に、なぐさめられぬ庭つどり。
○旅のかりやの軒の月、ひかりやうやくうすれつゝ、長なきどりの聲ぞする。
○ひるねのゆめのさめはてゝ、庭にいづれば艸むらに、夕あさりしてかけのなく。

## 鷺 河、冬日之部參照

○しらさぎ○淺瀬にたどる○雪にまふ○池のみぎは○みの毛のきゆ○雨にしをるゝ○あしのかげに○入江の松にねる○洲のさきに○心とけてねぶる○川原の朝風に○みの毛みだれて○うごかぬすがた○何をかあさる○川上のしげみの中に○やゝしらみゆく○夜はあけて○青田のうちに○

よせてかへらぬ○鷺のひとむら○ゆきかとまがふ○あしのかれはに○魚あさりかね○たちすくむ○かたつあし〳〵て○何をかおもふ○水白き瀬の○柳はかれて○水石清きなぎさ○三日月ほうき○山のみどりにあらはれて○田のおもに下りて○波のよするか○白ゆふはなの○志づかにあゆむ○みの毛ぬらしてたつさぎの、ねぐらはやがてかのみゆる、和田の笠まつうれならむ。

○かもの河原の朝風に、みのけみだれてさぎのたつ。
○さぎのねぐらはまづあけて、一すぢ白き川のおも。
○雨もふる江の夕ぐれに、みの毛ぬれつゝたてるさぎ。
○あしのかれはにしもさえて、たてるや鷺のたゞ一羽。
○夕風わたるみなと江の、あしまにひとりむさぎのむれ。
○沖の淺洲の白〳〵と、みゆるは鷺かよるなみか。

## 駒 騎馬、春野之部參照

○ふみたつる○さはべの艸の○とりつなぐ○ところもさらず○春の野の○あれのみまさる○手になるゝ○人もつながぬ○春ごまは○艸はむこまの○あさりして○ところ〴〵がほに○春の馬の○こまがいばゆる○ながき日も○かすみの中に○わかごまの○ふみしだくなり○あらごま○風にいばゆる○たなれの駒○友よぶこまの○いとゆふ○おきたちて○立ちめぐる○おのがゝげにも○あさりゆく○わかくさなづむ○かすみがくれ○さはべにあさる○尾花あしげ○野がひのこまの○かすみにむせぶ○たちはなれ○澤べになるゝ○まこも艸つのぐみわたる○はなれざりけり○つながぬ駒も○かすみにのみや○いはれ野の○みかきの原に○けしきも春めく○あしのわか葉に○ねうげなる○かげろひのもゆるあら野○うちわかくさに○野がひのこまの○野をひろみ○ありぶいとにづつながるゝ○いきほひつよく○風にのりて○花ふみしだき○迅風の如く○蹄のちり○くもをかすみと○裾野の原に○たてがみふりて○一聲いばふ○花のにあるゝ○のどけきりに○かすみのひまの○つどふこま○かすみをはらひて○若草の床にむれいて○ゆめもかすみて○なれよりて○木の下かげに○一つがひ○たはれくるひて○ゆくかげも○いさましな○花ふぶき○あらし

にのりて○すみれのそこに○尾がみに見えて
○匂ふ下かげゆくこまの、ひづめにれこるはなふぶき。
○ひづめにれこる土けぶり、やがてかすみに入るこまの。
○尾がみに春の風みえて、花ふみしだきなくこまの。
○ねよげに見ゆるわか草に、なれては狂ふ春のこま。
○くれなゐ匂ふ花の野に、春風一陣ふきすぎて、雲井にゆくと見えたるは、狂へる駒のすぎしなり。
○櫻の木蔭に狂ひつゝ、尾がみをふればゝなふぶき、きほひかゝるもめざましや。
○一聲たかくいばひつゝ、花の下かげゆくこまの。

## 犬 冬月、木枯之部參照

○月にほゆる○とほ吠の聲○ものすごく○しもよの月に○按摩のこゑの○月よりれつる○聲はるかなり○風にきこゆる○さよふけて○かねのねの○をかべのさと○ちまたの月に○のきばの霜に月ふけて○さまよひあ



りく○わすれぬ思○一日のめぐみは三とせもむくふ○義にいさむ○かりばをはしる○聲するどし
○するどき犬のこゑきこゆ得物や得たる狩くらの、まつ手始に心ちよや。
○しもよふけゆく月かげに、何にれぢてか犬のなく。
○門もる犬のこゑさへも、風にむせびてさむげなり。
○岡べの里をよるゆけば、我をとがめくほゆる犬。

## 鹿 秋山、秋野、秋月之部參照

○月になく○あらしにたぐふ○ひとりなく○こゑもまちかき○さをしかの○秋はぎしのぎ○夕ぐれて○ふしどさだめぬ○かのこ○みねたちならし○いほちかく○夜はのくさぶし○きくまくに○いなばをわけて○あかつきがた○あさふす小野○ふすしかの○何をかひよと○草にふす○萩をしがらむ○ねにたてゝ○鹿ぞなくなる○吹風の○花ふみしだき○さむき夜に○しのびもあへず○たつしかの○あかしかねてや○ゆめさめて○身にやしむらん○うらかれて○枕にちかき○きく毎に○山下とよみ○あき

の風ふく○月とゝもにや○つまこふと○こゑすみのぼる○さがのゝ夕ま
ぐれ○聲ぞはるけき○しげくちる萩がはなづま○鹿なく山○つまとふし
か○ふすしかの○みねゆくしか○うらがれてなく○つゆわけてなく○秋
ぎりしのぎなく○月下鹿鳴の聲○中宵月白うして○こゑも時雨れて○小
野の草ぶし○枕になるゝ○入がたの月○風にたぐふ○ゆめもねどろく○
きりにまどへる○聲はまぎれぬ○月よりおつる○山のあなたの○しみじ
みと○いく夜の友○みわたせば○かきほにきては○したしむしかの○草
わけてゆく○心細くも○朝ゆく鹿の○かるかやの下をれまさる○つゆに
うぼち○朝な夕な○小倉の山○やみ夜のこゑの○涙をさそふ○袖をかた
しく○つゆけきは○何となく
○男じかなく野の末きりて、つまこもるてふうのはらや、伏屋にねふるはゝ
きぎの、あるかなきかにうちきらひ、あしたをかしきけしきかな。
○めぐみあまねき春の日の、神のみいづに春日山、あさたつしかもうれしげ
に、かひあるよをぞよばふなる。
○きりのまがきやふかゝらん、つまよぶしかのこゑすなり。



○しかのねしげくきこゆなり、秋野の萩やいたくちる。
○しかたちならす斷崖の、下よりいづる月のかげ。
○月は尾花にかげおちて、朝たつしかのこゑぞする。
○小はぎのつゆをふみしだき、小鹿なくなりよしの山。
○しかのなくねのかれしより、ゆきのみつもる山里や。
○ゆきかふ人のあと絶えて、しかのね近しうつのやま。
○紅葉はつとに折りもせん、いかぞはすべき鹿の聲。
○かたしくうでもぬれにけり、しかの聲には露やふる。
○高嶺にすめる月影に、すみこりのぼれ鹿の聲。
○まはぎ花さく野べにきて、夜な〳〵なけるさをしかの。
○さびしさまさる山かげの、草のいほりの垣近く、きては牡鹿の何をなく。

## 猿 秋山、旅行之部參照

○木の間のさる○三聲なくなり○子をおもふこゝろ○人まねす○腸をた
つ○木のみたづぬる○なげきまさる○月のかげとる○人まどはす○峽に

叫ぶ○殘月影くらく○れくやまのしげみのうちに○月にさけぶ○峰の月かげ○木の間の月に○かしこげに○ましらしばなく○人のふりまなぶ○ましらのちゑ○さがしらたちて○木のみむさぼる○きりはれわたる○月小にして○山たかくして○猿の齒白し○いつかたに○れほゞらは○くれうめて○旅人の袖ぬらす○心ぼそく○一聲なきて○むれてゐる○兩岸の木の間に○さけぶ一聲○月くもりて○道くらく○つゆしげし○ものまなぶ○たちまふ姿○をかしきさまに○人なれて○たはむれて○尾ながざる○手長ざる○さるはしかけて○谷より谷へ○木の間つたひて○楫つたひて○風ふきたえて○きりのれくにて○こだまにひゞく○山より山に○ものすごく○人の影なし○深山みち遠くして○巴陵の月に○衣は輕し○旅情ものすごくして猿聲遠し○林しげみ…○わけのぼる○つゆちりて○人の肩にもすがる○なれむつる○こざかしな○つなつけて○まひくるふ○むかしがたり○れもあかく○むくつけくして○山ふかくすみかくれて○哀猿こゑかれて○月はくもにかくれて○一聲の悲猿月三更○うらぶれて○ならのかれ葉をかきわけて、枯木にのぼりなくましら。



○入さの山に月れちて、しもこほるよの旅まくら、ゆめぢを破る猿の聲。
○なにをうれしと秋の山、しもにいろづく木葉ざる、こゑうち上げて叫ぶらん。
○旅寢の床のかなしきを、月影くらき山のはに、腸をたつ猿のこゑ。
○夕のくもは日に映じて紅葉もゆるが如く、暮の風は林をふきて巴猿しばなく。
○月は木の間に影くらく、山のあなたにましらなく。
○哀猿こゑかれて月みねに白く、秋風林をゆすりて夜まさに三更。

## 虎 山、旅行、恐怖之部參照

○山ふかく○谷ふかく○みやまのれく○木立しげりて○一聲月に吼ゆ○からやまれろし○片月一輪かげくらく○血にかわくこゑものすごく○山風をこりて○林ゆすりて○砂石をとばし○てがひのとら○とらも人には○虎ちふかみ○さかはぎて○もろこしのとら伏すのべ○ふしぎの竹のはやし○山にとぐろく○龍虎のあらそひ○いかりくるひて○ほのほを吐き

て○とらの尾をふむ○とらの口をのがるゝ○あやふきみちを○手ごりに
なして○むかしの人も○巴提便の臣も○から人のむかしも今も○むかは
ぢむかへ○山路のくれに○くまざゝわけて○山又山○わけのぼれども○
岩根ふみならし

○ふもとの里の風あらく、尾上に吼ゆるとらのこゑ。

○寒月一片風さえて、猛虎一聲百らいとゞろく。

○みねに起れるはやち風、いはもやさくる山もやくづるゝ。

○深山夜ふかくして風ふき起り、片月くもをやぶりて猛虎うそぶく。

○風ふきあれて砂石をとばし、天地忽ち震動し、吼ゆるひたるあら虎の、い
かれるこゑどうものすごき。

○一聲たかくなくとらの、こゑものすごくこだまして、山谷一時に震動す。

○いかれるまなこは百練のかゞみ、とぎたつ爪はきたえしつるぎ。

○まよひいりにしから山の行手も見えぬ木の下やみ、もてる松火もきえう
せて、あなたの杜にいばふとら、聲もものすごくきこゆなり。

## 牛羊

○きりわたるみち○山より下る○牧場の春○くさくらふ○たはむれて○
すなほなる○まきばにいそぐ○牛羊ふわらべ○羊ひくれきな○夕ぐれに
○たどる山みち○くさかひて○なくもあはれ○家路にたどる○草かるわ
らべ○月にかへる○つなとりて○松原わたる○はるゝ〳〵と○羊腸のみち
○山はいつしかたうがれて、ふもとの里にかへりくる、牛かひわらべの一む
れは。

○きりたちわたる野のみちを、うたひてかへる牛かひの。

○まきばにねむる羊の子、うぴらに花ぞちりかゝる。

○まきばにつどふ牛羊、めぐみあまねき春の日の、こどけき空にたはむれて。

### 蝙蝠 夕之部參照

○とりに似て○とりなきさとの○夕をまちて○かよふのきば○夜をわか
世○夕をまちて○柳がくれに○ひるがへりても○わらはべつどふ○月に

とぶ○しこめきかたち○しばしはいで○つばさにかけて○すごもりて
○三日月の○縦横にとぶ○むれゐて○さわぐかはほり○とりはねぐらに
かへる時○日のかたむけば○我世となして○そらたかく○軒にすむ○ふ
る寺の軒にすくふ○のきにひろむ○のきばの風の○すごしき夕べ○川べ
の里に○あつまりとびて○月くらき○折しもあれ○すごむ夕に○つばさ
はあれど○とりをまなびて○けものながらに○あはれなる○柳にくるふ
○かすめてとぶ
○夕ぐれさむき三日月の、影をかすむるかはほりの。
○ねぐらにかへる夕がらす、時きにけりとかはほりの、ところにがほに飛び
あがる。
○しこめるおもわはぢもせで、月にあ
るこう、みにくき人のうれならめ。
○くちにし杜の木のうろに、ひるはひ
○杜のこぐれをよるゆげば、右に左にかはほりの、とひかふさまも物さびし。
○ひるなほくらき洞穴の、やみをわが世のかはほり。

○柳のいとにたはむれて、うかれ心をつなぎもやらず、月をかすめてかはほ
りの、とびかふさまもあはれなり。

## 鯨 海、漁人之部參照

○うしほふく○三熊野のうら○くぢらゆく○あらなみよする○うしほさ
かまく○木の葉ぶね○とりめぐる○もりなげて○浪さかまく○大なだの
しほぢ○なみたかし○なだのしほ風○はしるくじらの○鯨とるふね○ひ
れふりて○水たゝく○舟はくだけて○なみ風れかして○のゝしりさわぐ
○なだのしほ風ふきあれて、なみまをはしるれほ鯨。
○浪間にのぼる水けぶり、うしほさかまくさまみれば、くぢらのゆくとれぼ
えたり。
○浪はさかまく三熊野の、沖ゆくくぢらすさまじな。
○沖合とほくうかびたる、くぢらのさまはさながらに、島のたゞよふこゝち
して。

## 蝶 春日、春野之部參照

○花の枝に○花のあたりに○花より花に○羽風ゆかしく○すゞしろ小田に○てふのとぶ○里のわらはに○わがものと○吹さそはれて○花のありか○春風に○なづさひて○なのはなに○とぶてふの○ふたつ三つ○あたりはなれず○ちる花の行くへおふ○てふの妹とせ○とまれるてふ○花にねぶれる○胡蝶とぶ○すゞなさく田○ありべるてふ○ゆめか見るらん○胡蝶のゆめ○羽風かろげに○ちりゆくはな○花にまがひて○花にやどる○花にくるふ○かろ〳〵と○花より花に○うかれごゝろ○花さくのべに○うちむれて○春のねぶり○さめはてゝ○荘子がゆめ○あとゝむらひて○ねむるゆふべ○ふきさます○朝げの風に○花の下かげ○花に酔ひて○たもとにくるふ○花の木の下○花みのむしろ○羽袖かろげに○春はつきじと○野べにたはれて○志づこゝろなく○むつれてくるふ○わかぐさもゆる○ゆめよりゆめに○春風ふきて○一つがひ○花にやどかる○花ぞのゝ夕まぐれ○千代のはる○うかれごゝろのはて○みちびきがほに○黄な



るてふ○白きてふ○あげはのてふ○てふ鳥の○春のれもひ○ながき日あかず○花ちりうめて○入日さす○野の末までも○かすみにまよふ○つみとる花に○志たひかゝりて

○やどのまがきの朝顔の、つゆのひるまをまちがほに、あはれ胡蝶のあさいして、たが身となれるゆめかみる。

○よを古塚のつゆとめて、秋ふく風にうせにけり。

○花に胡蝶の女夫づれ、くるふたもとものどかにて。

○花のうてなに眠りつゝ、いかなるゆめをかむすぶらむ。

○花かとみれば木の間より、とびくる胡蝶の一つがひ。

○花の中よりおのづから、ちるはこてふの一つがひ。

○風なくてちるはなびらは、ゆめおぞろきし胡蝶なり。

## 蛙 河、春日、山吹之部參照

○小山田○かすみの末の○夕ぐれに○をだのかはづ○なくかはづ○うき蚊のかはづ○あち小田に○こゑもをしまず○時きぬと○折志りがほに○

こゑたてゝ○野澤の水に○かはづなく○夕かはず○春の夕ぐれ○月になく○板井のかはづ○うつる櫻の花になく○すだくかはづ○なけるかはづ○こゑもさやけし○聲ひゞく○こゑ老いにけり○ころひこゑ○よごゑかまびすし○かすむ川戸○谷川に○上つせに○こゑうちうへて○池のこゝろ○こゑゞながるゝ○池水に○小雨ふる江の○雨りゝぐ○池のみぎはに○恋づが門田に○小なぎ咲く○夕かたまけて○花ちりかゝる○あぜこす水に○井手のうき艸

○蛙の聲におくられて、さをさしくだすたかせぶね。

○雨にやならむ月影の、かすむ玉江になくかはづ。

○井手のわたりの夕まぐれ、三日月細き川岸の、かすむみぎはに蛙なく。

○板井の水やぬるむらむ、底の蛙のこゑすなり。

○小田の水口水まして、ところえがほになくかはづ。

○のぼる堀江の水あさみ、み草がくれにかはづなく。

○あら田に水をまかすれば、うれしきこゑにかはづなく。

○山吹のちる川ぞひの里、春をとゞめてや蛙なく。



## 螢 夏夜、夏月之部參照

○聲もせで○おもひにもゆる○よもすがら○艸のは毎に○ちるほたる○あしべのほたる○すぎやらで○つゆをよすが○月うすき○もゆるほたる○艸ふかき○艸の上に○わたるほたる○影見にて○かくれあらはれ○玉かと見にて○とびかふ○かずあらはれて○ほたるとぶ○淺ぢにすだく○まるべにて○夕ぐれふかき○行くほたる○夏のよすがら○水くらき○くるればやがて○むねの火○身をのみこがす○みだるゝ○見にみ見にずみ○をすのほたる○川のべの○さは水に○もにあかすかげ○みだれとぶ○玉ぞちりかふ○袂にふれて○袖につゝむ○谷水に○木かげすゞしき○星にまがひて○きにやらぬ○池の玉ものゝたかくとぶ○すゞむたもとの○や り水に○うき艸にみだれて○秋ちかき○岩まがくれ○すがるほたる○ちし艸葉○あしやの里の○この下やみにとぶほたる○ひかりうふ夕のつゆ○人はおとせぬ道のべを○よるゆくほたる○こに入れてかへるさてらす○水のしら玉○のきのしのぶに○ほたるながるゝ池のれも○三日月の

ほのかに○なくむしよりも○あはれはまして○かず見ゐて○せきかけしにはのやり水○うつるほたるの○よもぎふのつゆ○うきくさのしげるあをぶち○れりたちかねて○たばしるたまの○ひかりかはして○うちまねく扇のつまも○空たかくあがる

○ほたるすだくや艸のつゆ、葉毎の玉のかゞやきて。

○檜扇さけるいさゝ川、堤の上にとぶほたる。

○うちてひろひてつゝみくる、子らがたもとにうれしさの、あまる光は螢なり。

○艸葉のつゆに羽生ひて、とぶかとみゆるほたるかな。

○螢來、螢と里の子が、唄ひつれても行く野邊の。

○夕風うよぐたかむらに、三つ四つ五つとぶほたる。

○もゐても影のすゞしきは、水の上ゆくほたるなり。

○つゆはこぼれてねきかはる、葉末の玉は螢なり。

○まねく扇の秋風に、いよ〳〵たかくとぶほたる、光はねなじむしなれど、あがれば人も仰ぐなり。



○かたむく月の下草に、のこる光やほたるなる。

○柳の糸をふく風に、亂るゝつゆはほたるなり。

○岸の捨舟よひ〳〵に、さすはほたるのひかりなり。

○澤邊の風しきよければ、ほたるもやがてはかられて、けふをあきとやまどふらん。

○なつの夜ふけていざりびの、またゝく影をみにつるは、浪にたはるゝ螢なり。

○なくむしよりもあはれてふ、むかしの人の言の葉も、すだく光にきらめきて。

## 蟬 夏日、暑之部參照

○せみの羽○なごりのつゆ○雨はるゝ○風にみだるゝ○秋ちかき○くれゆくにはに○なきすさぶ○杜のこずゑに○せみのなく○梢もたかく○あらしふく○すゞしくのこる○うつせみの○なくねもすゞし○むら雨の○すゞしくれつる○きほふ聲○外山の木々○木がくれに○こゑしきるなり

○一しきり○あつさをうへて○もろごゑに○蟬のはつごゑ○夕かぜに○風にみだるゝ○なつやまの○せみぞなくなる○なく〳〵せみの○木葉にすがる○朝の雨に○夕立のはれま○風たにて○こゑのしぐれ○あきかけて○羽にねくつゆ○こゑたかく○たきもとどろに○なつふかき○河ぢとに○なみだのつゆ○うちはへて○夕日かたむく○ゆする○羽にねくつゆ○こゑしきる○松の下蔭○夕日かげ○木葉にすがる○秋ぢもほゆる○あつさもよほす○もろごゑになく○日ぐらしなきて○山はくれて○夕日はのこる○竹ふく風○木々のしたつゆ○つゆをたづねて○ひるねの床○杉の下みち○ふきねろす○山下みちのつゆしげみ○松かぜたにて○いはせの水に○てる日のそらに○聲とよむ○夕立のは山をすぎし○夕日影のこるともなき岡のべ○すさまじくなく○蟬ないて漢宮秋なり○すゞしさも又一しほ○あぶらぜみなく○あせあゆる○たへかねて○なつの草葉にねくつゆを、いのちとたのむ蟬の袖、うすきを人やならふらむ。

○ゆめもすゞしき初秋の、ひるねをさますせみのこゑ。



○外面の竹をふく風に、夕すゞしきひぐらしのこゑ。

○ひるねのゆめもさめはてゝ、小窓に近き桐の木に、すゞしくもなくせみのこゑ。

○夕日かげろふ片岡の、杜にさびしきひぐらしの。

○つゆを命になくせみの、こゑもなき諸聲は。

○日をこりさふれ夏木立、木かげうごかぬ日ざかりに、あつさ催すせみの聲。

○せみのこゑよりくれりめて、夕べすゞしき山のいほ。

## 蟲（松虫、鈴虫、きり〳〵す、はたおり、くつわ虫、等秋なく虫）

秋野、秋風、秋夜之部參照

○むしのね○うき世の秋○草がくれ○こゑうらがなし○むしかご○むしのねかなし○ねになく○草むらごとに○こゝらなく○むしのなみだ○あさぢふ○枕の下に○つゆになく○なくねわびしき○野べ毎に○いろかはるのべ○おのがさま〴〵○ふりいでゝなく○たがあきを○松の名にねふ○月になく○こゑもすみゆく○草の原○ありかさだめず○おのがとき〳〵たれをまつむし○夜さむ○風にみだるゝ○

よわるこゑ○こゝろながくも○ふるさとに○花のねぐら○かごのうちに
○のはらのつゆ○つゆをいのちに○なきあかす○まつてふむしの○月にま
つ○子日せし野○まつむし○かりそめのやど○夕ざれば○名にはたがひ
て○こひまさり○ふりすてがたき○とはるべき○いはねに根ざす○こゑ
〳〵○たかのすぐむし○ふりたつる○ふりゆくまゝに○はなやかに○さ
やかなる月○いかならん○こゑふりたてゝ○たまさかに○つぎれさせて
ふ○きり〳〵す○こゑなつかしく○みだれゆく○小はぎがもとに○なく
こゑに○野べにならひて○ねざめとふ○かべの中なるきり〳〵す○夜を
さむみ○つゞりもさゝぬ○はたれりの○くだまくこゑ○たてぬきに○夜
さむをしる○からにしき○なきよわる○霜よの虫○とほくなるこゑ○し
もさえて○さやかなるこゑ○月になるよの○つゆふかみ
○うらかれまさるまつむしの、よわるかさむき秋風に。
○月かげふくる淺茅生の、しげみになくやきり〳〵す。
○ふけゆく月にくさむらの、虫の聲々すみわたる。
○空にみつよつ星の影、のきの松虫なきうめて。



○千草にすだくむしのねの、はたれるれとの、きりはたりちやう、きりはたり
ちやう、つゞりさせてふ蓑、ながきよすがらたがために。
○いろ〳〵になく聲の中に、わきてわれをやまつむしの、やさしきねこそ身。
にはしめ。
○われかとゆきてとふ人を、ながき夜すがらまつむしの、草葉にすだく聲ほ
うし。
○たれまつむしとたのめけん、こと、のは草の末のつゆ、かゝるやさしき名を
ばれふ。
○つゆけきのべにきてみれば、むかしにかはらぬ虫の聲。
○たれをまつむしくつわむし、ふりすてがたきすゞむしの。
○秋のうまやぢ月ふけて、馬れひ虫のこゑさむし。
○むしのねしげき眞葛原、わけてとひこん人もがな。
○月れもしろき庭のれも、ふむ方もなき虫のこゑ。
○こに入れられし虫は一つにて、千々のあはれをなきにけり。
○夜のはしねにつまも子も、いつしかいねて空高く、ふけゆく月に虫の聲。

○花さくのべの秋の夜は、虫のこゑこうちぐさなれ。
○しも夜をさむく月影に、つゞれさせてふ虫ぞなく。
○つゆのみこにてなくむしは、玉にこゑある淺茅原。
○ときはのかげもいまより、は、千代まつむしのねをうへて。
○村雨はるゝ草むらに、又ふりいでゝなくすゞむし。
○紅葉はちりてわが庭は、あれのみまさる秋のくれ、こゑもよわるかすゞむしの。
○いつまでもなけきりぐ〳〵す、よわれる聲もあはれなり。

## 蜻蛉 夏日之部參照

○野川のきしに○あきつ羽のうすき○とびかふあきつ○夕まぐれ○むれてとぶ○川のべの草にとまる○あきつゝる○里のわらべが○日もかげろひて○かきねにとまる○秋近きうら○ものさびしげに○水の上ゆく○河うひの野原○れひまはす○野澤のほとり○夕日にありぶ○うすき夕日の色○つゆをいのち○夏のけしきも○なかばなる○つばさならして○花を



たづねて○うらたかく○雲にまじりて○草の葉のつゆをいのちの○羽れともかろく○夕べさびしく○ひるねの床に○雨にまどひて○しげみにいこふ○こずゑにとまる○淺ざは沼のほとり○あかきいろなる○夕日うつりて○とびちがふ
○風にふかれて蓮の葉に、すがりもあへぬ蜻蛉の。
○ながれもゆるきいさゝ小川に、行く水をうつ蜻蛉の羽のれと。
○小草の先にとまりては、羽をならせる蜻蛉の。
○うらにあきつのむれとびて、秋もいつしかちかづきぬ。
○あきつむれとぶ里川の、つゝみつだひにはしる子ら。
○せゝのかきのみ赤らみて、生きのこりたる蜻蛉の、かきにすがるも力なし。
○まがきに秋の風たちて、いつしかあきつの影もなし。
○ひあふぎさける川ぞひの、草の小みちをわけゆけば、右に左にあきつとぶ。

## 蟻 勉强之部參照

○いうしむあり○蟻のたふ○ありのきづきし○れのがすに○日こと日ご

と○やすむまもなく○あつき日も○木々の枝に○小さけれども○たゆまで○をこたらずはこぶ○いのちのかぎり○力のかぎり○こともしまでもあまきにあつまる○あつまりてゐる○たゝかふさまの○かしこげに○冬はかくれて○冬はこもりて○なつのながきに○日すがらいうしむ○つとめはげみて○ねやある○人のいましめ○つかのまも○なにごとも○ものいふごとく○ゆきあひて○あらうふさまぞ○心をごりて○力つよく○あなどらず○さはにねよりて○いのちをすてゝ○たゞしきみちを

○こゑはありともきこえねど、いうがはしげにゆきあひて、物いふさまに見ゆるかな。

○つとめはげめるかひありて、世の冬がれのあしたにも、やすくこもれる蟻をみば、人のつとめもさとられん。

○よを日につぎていうしめる、蟻をしみれば人として、なにつかのまもいたづらに、けふの日かげをおくるべき。

○のちのやすきをのぞみなば、春はいうしみ夏つとめ、秋は收むるいだづきを、蟻のつとめにならへかし。



## 金魚

○水にありぶ○たはむれに○わらべのよりて○水にはなつ○うるはしく○尾ひれをふりて○心のどかに○水にひうみて○いけのおもに○うかぶ姿も○うろこのひかり○にしきをながす○くれなゐの○蜀錦のくれなゐふかく○むれてありぶ○すゞしげに○くろきしろき○とりぐ〳〵に○さゝやけき○瀧おとして○夏の日あかず○枕ちかく○水盤に入れて○かぜわたる○箱庭のいけのおもてに○小さき池になみたてゝ○心をこめて○日にひかる○かぎやきて○名にしおふ○こがねのいろに○手がひのうをの○こがねのひかり○水あふれて○こがねの鉢に○水晶の鉢○かなまりに

○すきとほりたる玉まりに、こがねの魚のありべるが、うなゐがともものたからなる。

○水さへきよき泉水に、ゆたかにありぶうをの魚を、うべ金（こがね）とはいひうめも。

○木のまをもるゝ日のひかり、水にうつりてかゞやける、中にありべる金魚（こがねうを）。
○水もみちたる銀盤に、はなつ金魚のうるはしさ。
○こがねをあらふうをのいろ、水うつひれもかゞやけり。
○年ごとにます池のうを、いづれわかちはあらねども、こがねといふを名におへる魚こゝろことに目にはたて。
○きよき泉を水晶の鉢にくみ入れて金（こがね）の魚（うを）先（ま）こう放て一つがひ。

## 龜 鶴、松之部參照

○池にすむ○みどりのかめ○文おへる○たからのかめ○大井川○かずそふかめ○かめの甲○かめのを○かめの上なる山○萬代もよもぎが島○浦しまが子も○めでたきしるし○みの毛のかめ○石かめ○あをがめ○松のみどりのうつる池水○池のみぎは○池のたまもに○うき木のかめ○萬代の友○よはひ久しき○なみまにうかぶ○あうぶすがたなみまに浮ぶ萬代の、みの毛のかめも君が代の、めでたきしるしの外ならず。



○海にいでたる川がめの、ありぶやたつのみやこかも。
○ひれふる魚をよりにみて、しづかにありぶ石がめの。

## 鯉

○よどのいけす○玉藻がくれ○うきてひれふる○末つひに龍の門をのぼる○いきほひつよく○さくらちるいけの水○むれゐて○水すふれと○ぎる水れと○池にうつる月○ひりみしこひの○手たゝくれともきゝわけて○よどこひ○よどむ淵○水はやみ○玉とちる水のしづく○つりにたるあみの人目をのがれては、水かくれくらす池の鯉。
○うかぶ上よりあみかけて、ぐがにあげたる釣人の。
○河瀬にありぶこひなれど、いつかのぼればたつのかど。
○いとゞもとぐかぬ淵にすむ、鯉のいのちぶ世にやすき。

## 鮎 河之部參照

○わかあゆ○あゆ子さばしる○あゆはしる○かつらあゆ○みをのぼる○

早瀬をのぼる○さでさして○瀬々のおちあゆ○やなせにねつる○のぼれぼくだる○あゆつるりで○いさごしろく○あゆ子くも子○ねちくるあゆ○せにふすあゆ○やなくづれして○きしの柳かげ○毛ばりにかゝる○水もいさごもしろき瀬に、さばしるあゆのいさぎよさ。○さでさしだして小あゆくむ、河の遊びのねもしろや。○石なめらに水ほとばしり、瀬々にさばしるかつらあゆ。○ねちゆくあゆもはじめより、のぼらざりせばくだらじを。

## 鱸、鯛 海、湖、漁人之部參照

○さくらだひ○鯛ひくあみ○ひくたひ○たひつる小ぶね○すゞきつる○入江のすゞき○さわ〳〵に○口ふとのすゞき○尾はたすゞき○しまかげに○いとたれて○海のどかなる○かゞみだひ○つりあげて○松江のすゞき○すゞきつり舟○ひくたひごとに○いうべにむれて○あざやかなるを○春ゆく浦のさくらだひ、かたみにけふはひくものを。○いはみどりなる島かげに、さくらだひつる日永かな。



○夕波よする湊江に、すゞきつる舟さしわたす。○月すむ浦の夕なぎに、花の小すゞきつりあげて。

## 龍 靈怪之部參照

○ねもひたつらし○たつてふかみ○くもねがくれ○くもをねこして○雲井にのぼる○くもさわぐみうら○天がけりゆく○いけみづにひりみし○雨ふり風あれて○いかづちどろく○あぎとの玉のひかり○雨をよぶ○うらかきくもり○天地震動○ひらめくいなづま○すさましなんどいふばかりなし○天地晦冥○くもきりわけて○つゆをあらはし牙をかみ○龍虎のあらそひ

○雲を起して天がける、たつてふかみの力こそ、くすしきものゝかぎりなれ。○雨ふり風あれて天地晦冥雲わきのぼりいなづまひらめく。○あぎとにひかるあかるだま、得がたきたからをたれかよく、天がけりてはうばひこん。

# ○植物部

## 梅 春風、春日、春山之部參照

○わがりでに○風かよひきて○咲つゞく○手まくら近く○折りてみる○匂ふあたりの○春の夜は○梅の初はな○きちとほに○さけるさかざる○ぬし知らぬ○春くれば○うめが香かをる○わがやどの○梅の匂ひを○わがくにの○梅になりゆく○くれなゐに○ひもとくうめの○たが袖のか○梅の夕ばえ○春ふく風○あまた梢の○吹れくる○梅の下かげ○風かよふ○かすみのうこ○立よりて○梅みがてら○いろうへて○ひとりさきだつ○氷容玉肌○里つゞき○袂にかをる○袖のうつりが○春やかの袖のか○わが袖ながらゆかし○風かをる○うつりか○きゐぬゆきとや○匂ひきて○梅が香ふかき○軒ちかき○くれなゐのこゞめの色○白きくれなゐさま〴〵に○なべてよを春になすの○かざしのうめ○うめさくころ○かをとめて○八重さくうめ○をすの外の○百木のうめ○羅浮の美人○清姿麗容○



花はゆきかと○折かざす○かすむ立枝○下ゆく水○さきこり匂へ○老かくる○かしらにかざす○まぎちかく○八重さくはな○袖のかをり○初花○枕にかをる○うぐひすのやど○まつ人の香○月もいろうふ○たぐひなきいろか○うぐひすの羽風○まがひしゆき○うぐひすのねぐら○うぐひすさうふしるべ○雪にたわまずあらしに折れず○わざもこに○水にうかべる○かきごしにさく○紅梅○ぬしなきやどの○水にうかぶ○里をあまたに○家づとにせん○うめさくろうの〻○風に笑へる姑射の松、雨にものいふ羅浮の梅。○松根に倚りてしりうたげすれば、千年の綠裾にみてり、梅花を折て頭にかざせば、二月のゆき衣にみだる。○たがりでふれし匂ひぞ、こへどこたへぬ花の香に、かすむや空に春の月。○香をだに匂へうめの花、いろはみゆきにうもるとも。○をやみなき雨にもあせず、吹きわたる風にもちらず、いろもかもいよ〳〵ふかき梅の花。○雪見の車とゞめつゝ、そばかりたゞる梅ばやし。

○ものゝねもふわが袖にのみかすむかげかと大かたの人にとはゞや春の月。
○梅さくやどは心せん、ねもはぬ人もとひくめり。
○月もかすめる梅のやど、ちぎらぬ人もとひくなり。
○いづこのやどにさく梅の、立枝をすぎし風ならん、匂ひゆかしく吹きくなり。
○門邊にたちてとふ人の、ふねもきこゆて垣のうちに、梅ちる風ぞおもしろき。
○棹のしづくもかつかをる、梅津の里の花ざかり。
○ひたすら風をうらみしは、梅が香さそふしるべとも、まだ知らぬ間の心なり。
○をちのかきねの梅が香を、軒ばにはこぶ春の風。
○流れの末をむすぶなる、人のたもとや匂ふらむ、梅の花ちる春の川。
○梅の初花さきたりと、うらふく風やつげつらむ、春めづらしく來つる君。
○匂ひを道のしるべにて、あるじも知らぬやど問ひて、梅の盛をめづるかな。
○うこはかとなく春の夜の、かすめる月にかをる梅。



○木の本しらぬ梅が香の、たよりとなれる夕あらし。
○よりのかきねの匂ひをも、木の下風のさそひきて、ふすまにかをる梅が香に、ねざめうれしきねやのうち。
○のきばの梅のほのぐ〳〵と、かをるゆふべは何となく、ときめかれぬる心かな。
○風をたよりにたづねばや、梅さくやどの花のぬし。
○風心あらば梅が香送れ、月情あらば昔をてらせ。
○梅が香きよく風さむし、春やむかしの月影に、とはゞやとはんこの夕。
○はだれのこれる庭のねも、はやさきうめし梅の花、風のまに〳〵かをるなり。
○梅の匂ひにかすみつゝ、くもるともなき月影の、ねぼろに匂ふ夜半のうら。
○紅にほふ梅の花、ふりつむゆきはかくせども、香をしるべにぞをられける。
○主はたれともしらねども、かきねの梅にのぞかるゝ、みちゆきぶりの住家かな。
○かをりにならぬ梅の花、匂ひをうつせ袖の上に、のきもる月の影もよし。

○たがうでふれし匂ひぞも、いろかゆかしきうめの花、春やむかしとこゝはざや な。

○あかぬいろかはむかしにて、れなじかたみの春の月。

○あさ戸出さむく吹く風に、たぐへる軒の梅がこは、つねよりきよきこゝちして。

○心をしむる花の枝に、たがなほざりの袖ふれて。

○朧月夜の影ふみて、かへるゆふべの小柴垣、ゆきすぎがたく梅かをる。

○梅さかりなる春のやど、香をとめてこゝろひきつれ。

○のきのうめが、年ごとに、かれなでにほへ幾春も。

○こゝろはじめてさきうめし、わかきのうめはうぐひすの、つまとも未だ知らざらむ。

○あかぬいろかはむかしにて、れなじかたみの春の月。

○春やむかしのうでの香に、かすめる月もやどるなり。

○みにこし人の人ごとに、たもとにしめてかへれども、つきぬは梅の匂ひなり。



○東風ふきうひてみやこまで、そほくしめのこ袖のうめ。

○れぼろづく夜の梅のはな、ゆきにうもれてみねねども、かをたづねてや折りてまし。

○朝戸をあけてれもひでの、何とはなしにきぬ〳〵のうらなつかしき梅が香や。

○春まだ早き山里の、かきねに匂ふ梅の花。

○風にほふなり山里の、まがきの梅の花さきて。

○梅の花笠雨やめば、月がやがてもさしてける。

○片山林梅さきて、うぐひすうたふ夕日影。

○鎮守の杜に雨はれて、とりゐのいろのくれなゐに、匂ふこぞめの梅のはな。

○いざ見にゆかむ山里の、うめにひかるゝ心には、車もまたでかちよりぞ。

○香をなつかしみとめきつゝ、こがみし友にあひにけり。

○世を忍びたるわがやどの、梅の立枝やみえつらむ、おもひの外の友ぞくる。

○春のよすがら手枕に、うめの匂ひのかよひつゝ、わがかたもとこゝもおもほえず。

○天ぎるゆきのふる年かけて、さきつる梅の花盛り、みちゆく人の心なく、手折りゆかむもはかられず。

○ひるはゆきかとあやまたれ、夜はた月とぬばたまの、あやなきものは春毎に、まつさくやどのうめのはな。

○梅の盛りにあこがれて、知らぬ家をもたづねきぬ。

○梅の匂ひにかすみつゝ、くもりもはてぬ月のかげ、

○いろこうまがへ白ゆきに、香やはかくるゝうめのはな。

○うめのあるじは知らねども、花をしるべにとひてみむ。

○うめの花ちる里川は、水の流れも香に匂ふ。

○雨もはれたるにはのおもに、こぼれてにほふうめのはな。

○ふけゆくまどの戸をあけば、さすやおぼろの月かげに、うこともなく梅かほる。

○志ろき肌は月にてり、きよきかをりは風をまつ。

○いろはつらなる千峰の月のかげ、かをりはちりぬ一籬の風のたより。

○門邊のやなぎ枝たれて、庭にはうめのはなざかり。



## 柳 春日、春風之部參照

○淺みどり○志だり柳の○わがゝどの○いとうめかくる○くりかへし○つゆちる柳○春風も○河ぞひ柳○白つゆを○染めてみだるゝ○風ふけば○春のやどりや○たちよりて○老木のやなぎ○のどかになびく○山本のさと○みどりの眉○舟つなぐ○かげふむ道○よる人も○風にまかせて○春のいろを○つゆ吹みだす○眉かきたるゝ○朝かぜに○なびくをみれば○長き日も○岸ねのやなぎ○くりいだす○風やよるらん○道のべの○吹きくる風○ふしなびき○風ぞたえせぬ○浪よれば○玉ぬきみだる○つゆの朝かぜ○ふかみどり○をちの柳の○糸はふりせぬ○玉かつら○玉のをやなぎ○みだれてなびく○玉やなぎ○手びきのいと○門のやなぎ○のどけき風に○つゆぬきとむる○いとうちはへて○かきつの柳○浪もてあらふ○新柳の髪を梳る○一もとやなぎ○うちたれかみ○新桑眉○川べにたてる○うちけぶる○ねくたれがみ○まつはるゝ○あれしまがきに○まゆごもる○なびく姿○つゆのたまちる○風による○いとのみだ

れ○よどの川瀬に○田中のみち○葉もむすばぬ○浪のあや○かすみのう
で○めづらしき○がたよりなびく○をちかたの○一もと柳○れば しまに
○清水にうつる○風をすがたに○朝ねがみ○花田のいと○いけのかぎみ
○いとももてぬける○波よるるきし
○住む人もなきふる寺に、けむるは春のやなぎかな。
○城頭葉をひるがへして養由を待ち、河岸枝をたれて行人を送る。
○岸のやなぎのいなむしろ、れりしく浪にまかせてん。
○世はれしなべてきのふけふ、春となりけり青柳の、かげふむ道に人つどふ。
○六田の堤の柳原、みどりもふかくけぶりつゝ、かすみに匂ふきのふけふ。
○かすみふきとく春風に、みだれてなびく柳原。
○百すぢ千すぢ淺みどり、いとよりかけてしらつゆを、玉とつらぬく柳かな。
○長き日ぐらし春風に、なびき〳〵てかすむ夜の、月に靜まるいとやなぎ。
○春のつき日もあさみどり、みだれもあへぬあをやぎの、いとをば風にまか
せつゝ。
○いとながくしてむなしく地をはらひ、まゆうすくして描くにたへず。



○ゆたかなるよのはるのうら、のどけき風のいとぐちは、やなぎが先はひき
てける。
○梅にいとひし春の風、柳のいとにまたれつゝ。
○のばらちりうく水のれもに、あやれりみだす柳かな。
○春さめそぼつこのごろは、水のけぶりもたちうひて、いよ〳〵かすむ川柳。
○かすみのころも綻びて、隙よりみゆる青柳の、花田の糸の綾羽ごり。
○みやびをのこの言の葉を、むすびとめつゝ道のべに、たてる柳のいとをな
し。
○かすみながらにうちけぶる、いとのふし〳〵つゆ見にて、柳に殘る夜半の
あめ。
○春ざりくれば又更に若きにかへる青柳の、いとうらやましくりかへし。
○池の鏡にかげうつす、柳はまゆやつくるらむ。
○かつむすぼゝれかつとくる、柳は風の姿かも。
○まゆごもりするにぎやなぎ、つゆふきみだす風もなし。
○門のあをやぎいとのどかにも、吹く春風にうかれたつ、心のこまぞつなぎ

えぬ。

○末央宮あたりかにして歌袖にまつはり、楊子江きよくして客舩をなやます。

○花はこゝりてふく風を、うらめどひとり青柳の、なびく姿ぞねもしろき。

## 躑躅 春日之部參照

○花つゝじ○うす花つゝじ○つゝじさく○初花つゝじ○白つゝじ○れくてのつゝじ○ひめつゝじ○きりしまつゝじ○もちつゝじ○さ月のつゝじ○つゝじ原○松の下つゝじ○岩もとつゝじ○つぼみのつゝじ○ふくめる○花の夕ばえ○花にほふ○花の八しほ○さきまじる○道もせにさく○岡つゝじ○袖にも似たる○夕日影さす○まくり手にして○夕日てる○つま木にもるゝ○かすみのいろ○こがる○紅くゝる水○丹めの花○いろこがる○紅くゝる水○丹つゝじ○下もてるまで○からにしき○もゆるつゝじ○春ふかみ○雨にしをるゝ○谷かげの○夕つゝじ○空もこがれて○雲をもうむる○れもひのいろに○つま木にさせる○火をきりて○もゆるばかりの○忍ぶが岡の岩つゝじ、いはぬおもひのいろにいでゝ、もゆかとばかり花ざさく。

○かねもてうてば火のいづる、いはほの上にもゆる火は。

○かすみこめたる松かげを、をぐらしとてや岩つゝじ、れのれうちいでゝ火をともす。

○春の山邊の杣人が、いこふあたりの焚火かと、みまがふばかりさくつゝじ。

○さすや夕日のかげれちて、山下てらす花のいろ。

○など佐ほひめのこれば かり、うめのこもけむ白つゞし。

○岸べにもゆるいはつゝじ、みなぎる水にきにもせで。

## 櫻 春日、春風、春月、春山之部參照

○わがやどの○花こうにほへ○春の日の○花まつころの○花ゆゑに○花ざかり○れしなべて○四方の山べに○花のいろに○尾上の花に○いたづらに○よもの梢に○春毎に○花をしみれば○匂はずば○にほふあらしに○花の香に○たかねの花に○みる春毎に○植れきし○雲もましらぬ○月

よりも○うき世の春に○花まつほどは○春風の○花と雲との○山かげに
○若木のさくら○さきにほふ○花の山ぶみ○さくら木○御階のさくら○
さくらさく○花の千もと○花の村くも○花のようめ○花の下風○花ごゝ
ろ○しづ心のはな○花のはやし○花のふぶき○花のあけぼの○花のしら
ゆふ○月とはなと○まだ花ならぬ○一枝は○咲きのをゝり○咲きのさか
り○盛りまだしき○家づとに○匂ひこよなき○うらさへにほふ○枝にこ
もれる○影うつす○枝もとをゝに○雨をいとふ○みくにの花○山のは毎
に○山ちかくして○山のかひより○夕ばえのこる○西施のねもかげ○楊
妃のすがた○はるのひかり○みれどもあかず○心づからにうつろふ○家
路わするゝ○ねぐらのとり○たづね入る○つま木のみち○花みるとき○け
ふはくらしつ○ふくめるはな○さうはれて○つぼめる花○御代の春○光
あまねく○さくらにくもる○咲きも殘らず
○みどりに匂ふ春のうら、かすみのころもほころびて、みねむろたへにさく
花の、あらしもをる夕日かげ。
○雲井にたかく峙てる、たかねに匂ふさくら花、心のみこうゆきてをれ。



○ほのゝかすむとほ山の、ふもとの里のこゝかしこ、おりゐるくもや櫻ばな。
○うの花もみえざりし、櫻は花にあらはれて、春をこゝわる常磐山。
○風もふきあへぬくも、井の庭、花ものどけき春のいろ。
○のどけき御代の春のいろ、花みてくらす大宮人。
○いく萬代にさかえ行く、はるを重ぬる九重の、花のさかりぞのどかなる。
○花をまつちの山の端に、このごろたゝぬ日はあらず。
○花のたよりにことよせて、たづねも入るか春の山。
○まださかぬまはたづねても、かひなきものとしる〳〵も、春の山邊にあこ
がれて、いくへかわくるみねのくも。
○こがみし花のおもかげも、うらにちりつゝいつしかと、心にいりぐ山ざく
ら。
○いたづらにのみながめして、花まつほどぞ日は長き。
○ひとり山路の花かげに、そばかり秋をとぐむれば、みやびたりとや人はみ
む。

○薪に花をこりうへて、かへる木こりに言とへば、高瀬のくもはさくらなり。
○みわたすかぎり野も山も、かすみに匂ふ花見月、心もうらにあこがれて。
○志賀のみやこはあれぬれど、春は櫻にかざられて、昔ながらの山のさま。
○山もかすみてみよしのゝ、奥は大ざらも、香にこう匂へ花のころ。
○朝日に匂ふ山ざくら、つれなくきえぬ白ゆきの、名殘のいろとまがふまで。
○山のさくらのあぢきなく、けふはくれぬと春の日の、ひかげかはらぬ朝夕は、なごふりはへてとはざらむ。
○風靜かなる雲の上、常磐に花もちらざらむ。
○さくら吹まく山風に、こまのゆくてもまどひつゝ、蹄うづむる花吹雪。
○軒もかきほもうづもれて、花のゆきふる山ざとの、春のゆふべぞわれもしろき。
○志賀の山ごえゆきならば、ゆくたび袖を拂はまし、花のふぶきと詠めけむ、むかしの春も志のばれて。
○ころもやよひのうらゝ〳〵と、かすめる空にあぐがれて、知るも知らぬもろともに。



○世をとざしたる柴の門、むつれて人のくるのみが、あたら櫻のとがなるや。
○たぐひあらしの山ざくら、花さくはるの朝な夕な、かつら大井の川なみも、堰に雪やかゝるらむ。
○入相告ぐるかねの音に、花のこのめも動きつゝ。
○くれてほどなき春の夜の、志らむは花のかげなれや。
○小倉の山の山かげに、匂ふ櫻の花の戸を、れしあけがたのうらの月。
○櫻が枝にゆきちりて、はなれうげなるみよしのゝ、春の恨ぞまづこもる。
○花のさかりと世はなりて、ほのぐ〳〵かすむうらのいろ。
○かさなる山をわけすてゝ、花やいくへのみねの雲、もすそにかけてはるばると、ふりさけみればかすむ里。
○花の木の間にありびつゝ、蝶の羽風を身にしめて、なく鶯のうたきゝて、春の神にや伴はむ。
○ふるのゝさくらたが植ゑて、春に紀念（かたみ）をねくりけむ。
○とほやまざりの志だり尾の、ながく〳〵しひもあかでみる、櫻の花の眞盛や。
○さくをまちこるをこしむといく年の、花に心をつくすらむ、花のたもとの

つゆぼかり、あはれとおもへ山ざくら。

○すぎこしかたの年月も、春の大かた花にのみ、心くだきてくらしけり。

○我ものながら花ざくら、ちるは心にまかせねば。

○夜ふけてひとりおりたてば、花の梢をめぐる月。

○くる春毎になづさひて、みれどもあかぬさくらばな。

○志のぶの岡の花のかげ、をしむさくらの梢より、はかなくおつる夕日影。

○遠の山のはしろ〳〵と、たなびく雲のうごかぬは、まがひもあへぬ山ざくら。

○まもるにとまる花ならば、春の夜すがらおきねつゝ、いをねでよたゞめでましを。

○たかねのさくら春たけて、あらしも白きあさぼらけ。

○さくらにかゝるうすがすみ、花もおぼろに匂ふなり。

○かすみのうではつゝめども、こぼれてにほふ花ざくら。

○春さりくれば志る志らぬ人もとふなる山里は、花こそやどのあるじなれ。

○めのとがをれる花みれば、なく子もゑみをつくるなり、なにのなさけをこめつらむ。



○花をたづねて春はたゞ、のゆき山ゆきうつら〳〵、うはの空にも日を送る。

○志賀の山越はるふかみ、花つみかへる袖もなく、なこりのせきの月ふけて、みちもせにちる花さむし。

○花の下ぶしおどろけば、おぼろ月夜にちるさくら、ゆめの行方もかをるなり。

○心のうつらぬ枝ぶなき、いづれをわけて折りてまし。

○堤は花の志らくもに、うづもれはてゝみちもなし。

○さきこぼれたる花のゆき、ちればしば芝生の花ざくら。

○有明の月にかすむや櫻、花風のすがたもかつ見にて。

○たるを知るてふ言のはゝ、花みぬ人やいひりめし。

○松の木末にきゐのこる、ゆきと見にしは花なれや。

○風にうごかぬ志らくもは、たかねのさくらやさきにけむ。

○うつろふはなのいろ見れば、かはるは此世のつねなるか。

○吹くとしもなき春風に、あわたゞしくもちるさくら。

○月は木の間に匂へども、まだくれやらぬ花の下。
○月にひかりをあらひて、匂ひまされる花のいろ。
○大宮人にかざゝれて、つやこそまされ花のいろ。
○花の八重山いろふかく、かすみをもるゝかねのこゑ。
○里より花はさくものを、なに山ふかくたづねけむ。
○おぼろ月夜のうすひかり、かすむ園生の花のいろ。
○花のゆきちる鐘楼に、のぼる法師のうでまろし。
○いろをむなしといふ僧も、花にはこゝろやそみぬらむ。
○幔幕はりて木の下に綺羅を争ふ花の宴。
○分け入るおくもくらま山、花こそ行くてのしるべなれ。
○人家花あれはたゞちにとふ、もとより貴賤と親疎とを論せず。
○山吹匂ふ小柴垣、折戸の上にちるさくら。
○かすみに匂ふくれなゐの、袖にもかゝる花ふゞき。
○あかつきふかき谷のくも、立いでゝみねのさくらばな、月に匂ひてほのぼのと。



○花のさかりは都人、袖ひきはへて、裳をつらね、いろめくさまもなつかしな。
○雲と棚引きゆきとちる、花こゝろ。
○うらものどけき花見ぶね、さをさす水に花いかだ。
○風にうごかぬおらくもは、今をさかりのさくらなり。
○はるのかけたる白ゆふは、杉の木のまのさくらなり。
○花の光にあけやすき、里とはなりぬきのふけふ。
○夜のまの風にまかせじと、手をるもをしむこゝろより。
○花のさかりの夜半のあめ、きけば心ぞ先はちる。
○花も木の根にかへる春、ふるすにいりぐちのこゑ。
○みこがくづける千早ふる、神のやしろの花ざかり、たゞおろたへにうづもれて。
○春雨はれてほろ夜の、月に匂へるさくらばな。
○花みる外は朝夕の、すさびもあらず昨日今日。
○八重に一重にほゝゑめる、はなはかすみのうす化粧。
○靖國上野隅田堤、老若男女おしなべて、いろめく春の花衣、袖をつらねてゆ

く末は。

○手ぶりまさる朽木のさくら、ことしばかりの花をだに、待ちてみばやのあらましも。

○花は流れに従て香の來ることくりし。

○いろさへ香さへ佐保ひめの、かざしと見ゆるさくらばな。

○れのが五十のいのちをも、ゆづらまほしき山ざくら。

○都大路は老、若の男女をとはずきかざりて、花にいうぐや春の風。

○よのことぐさもわすらるゝ、花こう人のいのちなれ。

○枝をりかざしてあうぶなる、けふぞわが世の花ざかり。

○花の下かげ半日のきやく、月さす軒の一時の主、うれさへよしみはあるものを。

○花かあらぬかとほ山の、尾上に見ゆる志らくもは。

○一むらかゝる白くもは、さきはじめたる山ざくら。

○昨日の雲はけふのゆき、あすかの山の花ざかり、いざみにゆかむちらぬまに。



○雲とゆきとにまがふなる、さくらの花の盛には、心もうらになりにけり。

○花の白くも峰に尾に、かゝる詠めを何にたとへむ。

○花のちりにしのちこうは、春の心もしづかなれ。

○かすみはこれて櫻さく、たかねにのこる花のゆき。

○花咲きをゝる山蔭の、清水を汲めばうつり香の。

○花に醉ひつゝなくうぐひす、花にうかれてまふ胡てふ。

○月のいるさの山ざくら、ちらぬもをしきはなのいろ。

○うつせみの世のあだ櫻、風吹ぬ間をいのちにて、ちぎるもはかな千代の春。

○くもらで影をやどさなむ、花の下ゆく水かぎみ。

○たゞてまたじとおもひしは、散るをゝしみし心にて、さかりをいうぐ山櫻。

○にほひはたかき高まの山、花みる人こうつどふなれ。

○花のたもとにひかれつゝ、下しかねたる花見ぶね。

○心をつなぐいとざくら、みだれて花のさくころは、くる人たにぬ春のくれ。

○花にうかれてかへるさの、ひさごにかろくふくや風。

○ともに老いきとれもへども、花は今年も初はなや、いろさへ香さへかはらず。

○仇にちりゆくはなごがら、れつれば水にいろうへて。

○青磁の瓶の一つがひ、君が手いけの花一枝、つゆの色さへ身にはしむ。

○光のどけき君が代の、春のめぐみに咲いでこ、あかぬさくらの花ざかり。

○空にまがへる天津雲、風の通路とぢはてよ、今ぞさくらの花ざかり。

○野路の春風心あらば、ふきとけ山の春がすみ今をさかりの花を見む。

○ものごねやみしれくにはに、たきすてられしかざりびの、火影にかすむ櫻ばな。

○ゆきかさくらか、かすみかくもか、れぼろ月よにほのぐ〳〵と。

○われにて知りぬ花盛り、心のどけき人はあらじ。

○はなの君ともみるべきは、わが日の本のさくらなり。

○みくにごさけるうれしさを、いろに匂へる花ざくら。

○のどけき春の心より、匂ひいでたる山ざくら。

○春の心を心にて、にほひいでたるさくらばな。



○春の手むけと成田山、みてらのにはの花ざかり、めぐみのつゆに袖ひぢて、まぬくる人も賑はしや。

○わが身ふりぬるながめより、うつらふ人の花ごころ、春うらめしきむかしかな。

○ありとも人にしらくもの、立まじらはぬ人にさへ、とはるゝ春の山里は、げにさくらこうあるじなれ。

○入相のかねにちるさくら、起きよ〳〵、ぬるこてふ、さめよ〳〵、酔へる人。

○水にちりうくいろみれば、花のいのちぞはかなきや。

○吉野あらしもなにならず、花の上野のれぼろ月。

○夕を殘す花のあたり、かねもむせびて日はくれぬ、いつしか匂ふ月かげに、又ひかりうふこずゑかな。

○ときはの松のかげにさく、花よみさをにならへかし。

○春の光はわかなくに、まだみよしのゝみねのゆき、よしうれも又けふよりは、待たるゝ花のれもかげに。

○いづれさくらの梢ぞと、見わたすうらに八重ひとへ、げに九重の春がすみ。

○いくとせ花になれ衣、はるくゝとひてぞありふらむ、ある時は愛岩たかを、又ある時は比良横川、よしのはつせのくまもなく。

○老若男女貴賤都鄙、たれをへだてのいろなきは、これぞまことに花の情、かゝらましかば人もまた。

○月の匂ひもふかみどり、かすみはてたる春のよは、おぼろ〳〵の花のかげ。

○いろかをめでゝをりし枝、おどろく袖のうつりがに。

○よしのゝ山の花ざかり、山もきのふの花ならず。

○初花ざくらほころびば、つげむといひし山ざとの、つかひはきたりいざうまに、鞍馬の山のやまざくら、みねにふもとにかりてまし。

○松ふく風も心せよ、木のまのさくらさきにけり。

## 遅櫻 櫻之部參照

○木がくれに○花かあらぬか○片山かげ○あをばがくれに○ちりのこる

○夏かけて○青葉にまじる○春におくるゝ○さきのこるらし○夏をより

なる○おそざくら○おくれてにほふ○おもひもかけず○深山にのこる



○何事もみなおくれては、物すさまじく見ゆるよに、夏の初の遅櫻、あはれをひとり身に志めて。

○をしむかひなく散る花の、あかぬいろ香を一本に、とりあつめたる遅ざくら。

○わけこし山のかひありて、わかばの中に一本の、いろも妙なる花ざくら。

○たもとつらねて時鳥、たづね入るさの山のくま、のこるさくらをみつるかな。

## 落花

○花さうふ○花のゆくへ○ちる花ごとに○花ちりて○さくらちる夜の○ちるとみて○ちるが上に○ちるはかぎりの○ちるまゝに○ちるをならひの○苔の上なる○かつちる○亂れてれつる○つひにちる○うつろふ○木の下毎に○いろきゝて○をしむほどなく○ふるゆきに○てふにまがひて○月も曇りて○さうはるゝ○心そらなる○山風つらく○あまぎる○をしまぬ人も○いかゞはすべき○志ひてこひしき○心づからや○春のかたみ

○殘りなく○あかなくに○あらしのつて○あらしふく夜○香をだにのこせ○吹きためて○ちるはゆきかと○ふめばをし○ちぎにくだくるこゝろには

○比良の山風吹くなべに、こぎゆく舟のあとさへも、花にかすみてほの〳〵と、海まで匂ふ夕ひかげ。

○花のふぶきにみちたにて、かへるさまよふ山路かな。

○風のまに〳〵はら〳〵と、ちりにまじりてちれどなほ、花は花なる春の庭。

○春の山邊を越ねくれば、道もさりあへずちる花に、ゆくべき方もまどひつゝ。

○よみさすふみの表をりとも、なれとやゝがてちりぬらん、學びの窓の軒の花。

○のりたる駒にむちあてゝ、花の下かげかけゆけば、春風一陣梢にわたりて、ちるやさくらの花吹雪。

○落花狼藉ふく風に、ちり〳〵かへる花見客。

○春風一陣らく花をまきて、水なきうらに浪ぞたつ。



○永き春日も入相の、かねにちりかふ花のゆき。

○芝生のそこに落花のふすま、いざ一夜ねんねぼろ月。

○入相のかねにちるさくら、必衰常離のことわりも。

○ねぼろ月夜にふるゆきは、れのづからちるさくらなり。

○つゝみのさくら散り初めて、中洲によする花のなみ。

○ながき春日に咲きながら、心みじかくちるさくら。

○風も夕べはのどかにて、かぜふばかりもちるさくら。

○嵐にきゆる花の雲、花のしがらみながるめり。

○花の下行く春の川、水にもきえぬゆきはあり。

○しづめる影の棺より、うかぶとみにてちるさくら。

○わしのつばさやふれにけむ、枝ごめつる櫻ばな。

○あらしは白しあさぼらけ、たかねのさくらちるなべに。

○わがものがほにをしめども、花にあるじはなかりけり。

○浪はやがてもかへるめり、ちるを限りの山ざくら。

○流水の曲をかなづれば、落花みだれて小簾にちる。

○あらしの山は名のみにて、松ふく風もたゆむ夜に、何をかごとにちる花ぞ。
○春山とほくわけくれば、馬の脊白く花ちりて。
○ちる花とむる關あらば、われも關守とならましを。
○しづ心なくふく風に、ちりにちりかふはなふゞき。
○ひかりのどけき春の日に、しづ心なくちる花を、いづくまでもとしたひゆく、こてふに身をやかへてまし。
○ふく風あらくたそがれて、みねのさくらはちりみだる。

## 花見

○上野あすか○けふもまた○さくらがり○友うちむれて○いざゝらば○うちつれだちて○をはつせの山○大井川舟さし下す○隅田堤の夕まぐれ○つくばれろしに○ちり〳〵と○ちりもあへず○さきみちて○風も薫る○木の下は○つどふ人々○老若男女○たふときもいやしきも○人たちこめて○わけのぼる○ふもとの方は○雲にかくれて○人知らぬところ○山のかげにて○いこふ人々○盃の中にうけて○うたひはやして○馬にくら



れけ○いそぐ人々○日ぐらしの里○あらしやま○しづこゝろなき○うたよみて○ともにみし○去年のしをりの道かへて○うかれくらしつ○あこがれて○花のむらくも○かへるやまぢの○心もはなに○風につれて○つま木のみち○たづね入る○心もそらに○さゞめきて○月にあゆみて○たをりてかへる○ひさごにうへて○かろきひさごに○都大路も○はる〳〵と○たづね入る山○山下いほの○くるゝも知らず○山めぐりして○とりなきうたふ○いひしらぬ○ながめもひろき○狂ふ胡蝶と○あそぶのべ○うたひはやして○うかれごゝろ○いそぎゆく○花まつほどの○たちまふうでに○まとゐして○酒くみかはし○むしろしき○親疎をいはず○花にむつれて○友ならねども○夕日にうつる○醉心地よく○花ふゞき○花ちりみだる○人は去りて○花の間を○月のぼる
○ものゝふは武士とぢ、たをやめは年弱女どち、ながきたもともみじかき袖も、なべてつどふや花の蔭。
○いざれもふとぢうちむれて、けふの日ぐらしありびてむ、くれなばなげの花の蔭。

○ころまち得たるさくらがり、山路のはるにいりがはし。
○去年のしをりのみちかへて、まだみぬ花やたづねまし。
○上のゝ山に月ぐらしや、あすは靖國あすか山、こゝろ〳〵にむかふ島、春のありびゞのどかなる。
○れもふ友どちうちつれて、花みてくらす心こり、げに春の日のめぐみなれ。

## 桃

○もゝのさく○もゝのさくころ○桃にほふ○もゝの花さく○桃の花ざかり○桃の花ぶさ○みちとせの○桃のひとむら○花かつら○桃のさかづき○八重もゝの○もゝのゑまひ○さける桃○千とせをちぎる○下てる桃○桃のはなゞの○もゝのしづく○くれなゐに匂ふ○もゝちたび○桃のよごと○からもゝ○九重のうてなのもゝ○もゝよろこび○桃ゞのゝむかし○ひめ桃○池のみぎはに○曲水の宴○ひなまつりする○かざしとなして○しらもゝの○源平桃○紅白のいろ〳〵に○雨にぬれて○いろますにほひ○ものいはぬ○桃李むかしをかたらず○下れのづから徑をなす



○三千とせふてふ物なるを、などもゝとしもなづけりむ、
○春のかざしのもゝのはな、くれなゐふかきいろにいでゝ。
○三千とせのはじめにさける桃の花、いざ折りて、君が代のかざしにさゝむ。
○桃の花さく春の山、みたにの水のみなかみに、なほわけ入りてながめてむ。
○いろもかはらで桃のはな、百とせ千とせみましかば。
○ゑまひめでたきわぎも子が、くれなゐふかき唇の、いろにもまがふ桃のはな。
○もゝさくそらもひるすぎて、かきねにうたふにはとりの。
○烟霞三月むかしたれかすみし、桃李ものいはねば何を以てか知らむ。

## 杏花 春日之部參照

○春のどかにも○春のねむりのさめはてゝ○閑庭にりゞく雨○いろもうるはし○みどりにうつる○さきりろひて○春雨はれて○くもる日の○枝を交へて○こぼれて匂ふ○もろくもれつる○風にちる○れともせで○曉告ぐる鳥の聲かまびすしく、春雨はれて杏花まれなり。

○拂はぬ春の庭のれもに、こぼれて匂ふ花のいろ。
○鳥は綠蕪にないて春やうやくたけたり、日は南縁にさして杏花盛りなり。
○春たけなわにして閑庭杏花ひらき、日は午にして綠蕪とりの聲をかくす。
○つゆもつ杏の花のいろ、さはらばゆびもりみぬべし。

## 新樹 初夏之部參照

○かげきよき○軒ばをぐらき○わかへで○わかばさす○かげすゞしき
○おなじみどりに○玉がしは○木々のあさ風○ふかみどり○わかばの志
げみ○このて柏○かげもよし○つゆちりて○みづえさす○葉守の神も○
志づくちる○にひかぶみ葉○かげひろき○楓のわかば○花のあとふ○
日をさふる
○おなじみどりになりぬれど、なほまがはぬは櫻なり。
○花には松もありま山、なべてあをばになりにけり。
○春は花みし藤の森、いろのゆかりもいつしかと、青葉に志げる夏木立。
○みどり志たゝるわかだちの、一本志げるすゞしさは。



## 橘 夏日、夏夜之部參照

○いにしへを○名殘をとめて○夕かぜに○むかしこひしき○にほひくる
○昔の人の○袖ふれし○夕ぐれの庭○たが袖に○志のぶならひの○むか
しがたり○たちよれば○匂ひゆかしく○りの葉さへ○ゆめはむかしの○
枕にかをる○妹が手まくら○わたるみはしに○ほとゝぎすの宿○雲ゐの
には○なつかしく
○はな橘のちりそめて、苔路のつゆも匂ふなり。
○山時鳥なのりして、空はれやらぬ夕ぐれに、匂ふもゆかしたちばなの。
○昔を忍ぶ橘の、かくのこのみもいつしかと、袂にかゝるつゆのまに、むかし
の人となりやせむ。
○草木ものいふ世なりせば、昔をとはむたちばなに。
○こがねの鈴を葉がくれに、かくるのみかは白金に、似かよふ花のかをりみ
ちたり。
○人もとひこぬ夕ぐれに、たがりでの香のなごりとて、花たちばなに風わた

る。
○花たちばなを何にかは、わがやど近くうゑにけむ、むかしのみこりこひしけれ。
○今年はじめてさきりめし、花たちばなのいかなれば、昔の香には匂ふらむ。
○なくほとゝぎす一聲に、おどろかされて戸をおせば、花たちばなのかをりきて。
○昔しゆかしみ立よれば、こたへがほなる立花の、ふかき香にこり匂ふなれ。

## 紅葉 秋山、秋日之部參照

○つゆしもの○もみぢしぬらし○ひき見にて○下葉のこらず○つゆ時雨
○山ひめの手ずめ○織りいたず○おくれさきだつ○いろふかき○いろの
むらさき○いろりむる○いくしほしぐれ○うすくこく○つゆにいろりふ
○正木のかつら○なべて木葉の○りめつくす○ふる雨ごとに○もみぢ葉
の○袖のてるまで○下枝まで○時雨にまさる○下もみぢ○匂ひりめけむ
山ひめの○花にもまさる○つたもみぢ○つゆのなごりや○夕日さす○き



のふはうすき○りめはてゝ○日も夕しほ○からにしき○初しほの○てる
日の光○はゝそばら○ちるかげさへ○千しほ○山はみながら○初しぐれ
○夕ぎりこめて○下てるかげ○打ふくからに○めもあやに○月のひかり
を○みる儘に○猶りめもとや○くれなゐの○から錦○ちらぬま○四方の
山々○紅葉がり○時雨をいろぐ○手折りつゝ○かざすもみぢ○月にかく
れぬ○にしきゝて○わけのぼる山の奥まで○車をとゞむ○楓林の晩○夕
けたくけぶりも見ゑて○山ざとのさびしき夕○うらさびしくも○ながめ
やる○風もさびしき○夜もみよとや○ふもとの里○たつたひめ○紅葉た
きて○けふもまた○山かげにして○ちらぬもみぢ○風にほころぶ○しぐ
れりめけり○人もこぬ○山さびしげに○蜀紅のにしき○青苔の地に敷く
○木々の梢は○紅葉手折りて○かへるもをしき
○ありての末は物ごとに、うきを常なる世の中に、ひとりならはでちりがた
に、錦あやなる紅葉ばや。
○まだき時雨の秋つげて、もみぢいろこき稲荷山。
○重なる山のみねつゞき、西よりりむる秋のいろ。

○秋をよろなる松尾山、みどりいろこき中にたゞ、一むらまじるはしもみぢ。
○もみぢながるゝ大井川、ぬせきに秋はとまりけり。
○いかなるいとにれりなして、山姫のれるにしきぞと、みるめもまどふ紅葉かな。
○かしこにこゝに薄くこく、見ゆる紅葉や山姫が、先こゝろみの手染にや。
○いろつく木々の初瀬山、風もうつろふうすぐもに、日影匂ひて一しほの、さかりも見ゆるあきのいろ。
○梢にかゝるからにしき、たつたの神の裳裾のはしか。
○ふもとの山の下もみぢ、夜のまのつゆやりめつらむ、朝のはらはきのふよりまばゆき迄にいろうひぬ。
○あらしの山をわけくれば、もみぢのにしき人ぞきる。
○ぬさと亂れて手むけ山、ちりにちりしく紅葉かな。
○端山しげ山いつしかと、時雨にうむる初紅葉、にしきのとばりかきわけて、いざやうかれん秋の山。
○時雨はれゆくとほ山に、匂ふ夕日はもみぢなり。



○ちしほにうめし木ずゑより、したゝるつゆも匂ひつゝ、ぬるゝたもとぞれもしろき。
○杉のみどりの木の間より、秋をあらはすつたもみぢ。
○しもに時雨の心もみえて、もみぢのいろはうすくこく。
○今さかりなりふもとなる、里の木のはのいろゞめて。
○山のしづくやうめつらむ、いはがきもみぢいろづきぬ。
○年ふる里の秋ふけて、のきのもみぢに月ぞてる、夜のにしきをきてもみよ。
○風のはふりに秋も又、すきまあらすな信濃路や、木曾山紅葉さかりなり。
○紅葉のいろのからにしき、秋の衣をたつた姫、ぬひもあへぬにふくあらし。
○山めぐりする時雨にぞ、木々の梢はいろかはる。
○わがのる駒の黒かみに、ねちてとまりぬ紅葉（もみぢば）の、こきくれなゐの二葉三葉。
○日かげさしうふきりのまに、ぬれてもみゆる初もみぢ。
○もみぢながれぬ水ぞなき、くれゆく秋やさうふらむ。
○秋の花野の盛はすぎて、山のにしきにうつる秋。

## 楓

○花ならぬ花○いろもよし○くれなゐふかく○みどりのうちに○珊瑚のいろ○雨はれて○からくれなゐに○かをりなき花○一枝手折りて○君がゝざしと○きさらぎの花にもまさる○るでの○いろふかく○ふかきこゝろも○花よりあかき○まだ早き○かへでの色は中々に、花とも見えて花よりも、匂ふもゆかし枝ぶりや。○香にちりたゝねくれなゐの、いろは花にもをとらじな。○まちにし君がゝへるでの、たよりきゝてはうれしさも、つゝむにあまる袖のいろ

○春雨はれし庭のもに、くれなゐふかくわかゝへで。

○みどりもふかき植込の、中にひともとわかゝへで。

### 落葉 木枯、冬夜、冬日之部參照

○木の葉ちる○木の葉ふりしく○はゝそばら○もみぢかさなる○落葉かく○葉守の神○正木のかつら○ならのもち葉○木の葉のふね○もみぢゝる○はらふ木の葉の○まゆみちる○しものくちば○ちりしける○袖にこき入るゝ○雨となる○つもるくち葉○冬のきて○うれにもぬるゝ○ちりはてぬ○梢さびしき○時雨かと○いづれかもろき○木からしの○なみだとゝもに○ふみわけて○風すさまじきくちる○吹みだる○ねざめてきけば○しふくなり○吹きすさぶ○いかなる風の○あらしにもろく○いやがうへに○あなたこなたに吹きよする、風のおとこゝろきこゆなれ、落葉やふかくつもるらむ。

○あらしの末の大井川、あたらしきまでちる木の葉。

○錦かざしてかへりけり、山路を通ふ杣人は。

○波にうきねのとりならで、うかぶはきしの木の葉なり。

○時雨はれてもをやみなく、ふるは梢の紅葉なり。

○月もるのきのいたびさし、ちるや木の葉にふかれつゝ。

○ねぐら爭ふ梢より、木のはもれのがねにかへる。
○閨の板戸をよもすがら、うちし時雨をけさみれば、半は木の葉ぞ交りける。
○時雨はれゆく柴の戸に、猶れとするはれちばなり。
○木梢に月はさねながら、雨とちりしく落ばかな。
○ゆめぢにきゝし山まどの、あらしのれとは木のはにて。
○やどるからすの數みねて、夕かせさむくちる木のは。
○みちはいつしかれちばにうづもれ、人目も草もかれはてぬ。
○いとゞさひしき夕ぐれに、れちばをしまく夕あらし。
○れちばをわくるれとすなり、たがふりはへて、たづねこし。
○書（ふみ）のうへてらす月影は梢にはれて、紅葉のまどに時雨るゝさよあらし。

## 松 冬日、鶴之部參照

○小松原千代も○ふる木のまつも○山まつかげに○岩がねまつの○松の木の間○友なき松○松の葉ごし○松原ごしに○松のけぶり○松のこゝろ○松のうら葉○松のはしら○松の戸ぼそ○うなれの松○一つ松○老松○杖つくばかり○いつ葉の松○松のみどり○ふかみどりなる○あしたづのやど○十かへりの花○松のみさをは○いろかへぬまつ○ときはのまつ○松のあらし○相生のまつ○かはらぬいろ○ときはなる○松の千年○松のこゝろ○まつのひゞき○岩ほに根ざす○松の下風○子の日の小松○千代ゆくすゑ○萬代までに○千代をへて○冬きても○しもにもかれぬ○木の葉ふり○山もあらはに○風さゆる○あらしにも折れで○外山なる○梢にさゆる○みさをは千代に○八たびれけどかはらず○としのさむさに○みねのまつばら○まどちかき一本松○あらふこゑも○みどりしたゝる○小松のいろ○千代萬歳○君が世の○さかり久しき○たづむれ遊ぶ○みぎはの松に○むらとりのやどる○朝けの霜に○冬はあらしのやどり○あとゝへは○いろしもさびし○いろながら○いづれの緒より○ふき合す○久しきものは○ひとりくだくる○みねにさびし○冬ふかき○春のきて○一しほのみどりもまして○門てふ門に○もてはやされて○春きにけりと○よはひ久しき○高砂の○枝もからさず○あらしすさぶ○春と秋との花紅葉、いろかにうまぬみさをこそ、千とせを松の心なれ。

○沖には老の波たてど、わかのうらわの姫小松。
○我見ても久しくなりぬ住の江の、岸の姫松いくよへて、昔ながらのふかみどり、末の世までも榮ゆらむ。
○花に紅葉にあらうはぬ松のみどりのけだかさよ。
○二葉のいろにれのつから、千世まつさまもあらはれて。
○飛鳥の山に立まじる、木の間をしめて咲く花に、ゆづらまほしき松の千代。
○春雨花を送りて心自ら清く、秋風ちりを拂ひて聲うたゝ朗かなり。
○山みなうむる梢にも、ひとりならはぬみねのまつ。
○ときはかきはにいろかへぬ、松にむつるゝ春風の、はなのためにはなどつらき。
○秦爵の冠にはゆきをいたゞきてをごり、呉人の劒にはしもをふみてさむし。
○紅葉を拂ひつくしても、松にのこれる夕あらし。
○嵐に堪ふる老松の、千世の操のいろたかし。
○野中にたてる一つ松、ふきしく風のやどりなり。



○千代をしためる園のうちに、所えがほの松一木。
○入江の松にことゝひし、むかしは知らず大井川。
○千丈ゆきを凌げるは稽康が姿、晩翠みどりをふくむは孔明がみさを。
○十八公の操はしもの後にあらはれ、ちとせの徳は雪の中にたかし。
○うらはれてなほ雨のねとを聞き、山たかくして且つ波のひゞきたかし。
○はふれて年をふるさとの、ふきばの松にことづてむ、あるじはよしやかれぬとも、枝をな嵐にまかせりよ。
○志賀のはまゝつふりにけり、たが世に曳きしなごりぞも。
○龍の尾山の岩根まつ、萬代かへぬわかみどり。
○軒端をめぐる松風に、うきよのちりを拂はせて、すむやたれなるきかまほし。
○よひの時雨のくもはみな、はらひはてたる秋風を、松に殘してふくる月。
○いづれの緒よりしらべけむ、わがひく夜半の玉ごとに、みねのまつ風かよふなり。
○まつふく風にたぐひつゝ、ふりくるねもひし村雨も、池の水かさのまさら

ねば。

○しもこうはおけゆきこうはふれ千とせかはらぬふかみどり、ときはのまつのさかえつゝ。

○みねのまつかぜおとたてゝ、とほきむかしのこゑずする。

○ときはのいろも一入の、みどりさしうふみねのまつ、春の光もあらはれて。

○千代田のみやの松の聲、いくよろづよの末かけて、ときはのいろをしめすらむ。

## 竹 涼風之部參照

○竹の葉山○ひとよのふしも○れとさやぐ○竹の葉すさぶ風○うきふしも繁き○竹のれちば○いさゝむら竹○れひとふ竹○竹のはやしのれくしめて○窓のくれたけ○心むなしき竹○つゆはらふ竹の下風○葉分の月○數となるまで○流れて千代も○うべこの君○むかしの人の○朝夕の友とし○まなびの窓の友と○下をれぬこそ○はわけの風○葉がへせぬみさを○まがきの竹○村雨のおとを學ぶ○ことし生ひ○やどのわか竹○月もらぬ○千代までなびく○ことしより○ずなをにのびよ○影さず竹の○かげをひろむる○うちなびく○まがきの竹の○竹の下かげ○影うふ竹の○竹の子の○庭のくれ竹○このかげ志めて○庭も小ぐらく○うらわかき○千ひろの底○風にさわぐ○年ごとにれひたつ○竹のよゝをへて○おきふし○すゞしさに○きのふよりけふはよながきくれ竹の○たれかはみむ○千代の末○君をいのる○かはらぬいろを○夏の夜の月かげもる○まどのなよ竹○つゆけきは○月さして○葉にたまるつゆ○世のうきふしは○志めおきし○まがきの外○たわめとをれぬ○人のみさをも○なよ〳〵なびくうつしうゑし○雀のやどる○つゆの玉ちる○月もるりこぬ○庭せばみ○まだ世こもりて○れや竹の○雪のうちに○風にふす○志もさゆる○昔うゑつるまどの竹、かげをしみればいつしかも、わが世とゝもに高くはなりぬ。

○すぐなる竹もほど〳〵に、つけてのふしはある世なり。

○學の窓のくれ竹の、直きを人の心にて、世に怠らずつとめなば、人に知らるゝふしもあらむ。

○共に千代へむ窓の竹、いや生ひつがむ竹の子に、千ひろの蔭をゆづりつゝ。

○笛にきられぬ一ふしは、團扇の柄とこゝろなりにけれ、ならすてもとはかはらねど、竹のよすがやいかならむ。

○千尋の木のあらましも、かつ〳〵みゆて昨日より、けふはのび立つ竹の子や。

○うれしきふしもうきふしも、こもる軒ばの呉竹は、世に立つからの習ひかも。

○子猷は一日もこの君をはなれず、白氏此友なければ片時もたのしまず。

○根に臥龍の文ありて雲つねにとざし、枝に鳴鳳のこゑありて風長へにふく。

○すみゑにゝてもほのめきぬ、竹の影さすまどの月。

○心すぐなるくれ竹に、よのうきふしのなどしげき。

○幾千代かけてかぎりなき、ふしをこめたる竹なれば、いろも久しくかはらじな。

○まどのくれ竹かげきえて、月の前ゆくむらしぐれ。



○いさゝむら竹ふく風に、れとかすかなる夕べかな。

○千ひろのかげにかくれつゝ、我もときけるときはにによをやへむ。

○かしこき人のいにしへに、めでぬときけむ竹むらに、うよげる風は心あり。

○嵐にゆきにたわめども、をれぬみさをのひとすぢに、なほき心や園の竹。

○葉末をゝかすゆきみぞれ、歳さむけれどいろかへず、ときはにしげるかげみれば、竹の心ぞゆたかなる。

○ふりつむゆきにたをれても、かりにもをれぬみさをにぞ、人の心はならふべき。

○風ふく時は玉琴の、ずがらき早きに似たりけり、雨ふる時は琵琶のねの、さゞめく聲にもかよふなり。

○あしたにかゞやくしものいろ、枝にかゝりて日影にきえ、夕に匂ふつゆのいろ、葉にむすびては月をやどす。

○あきふく風にもみぢする、草木にも似ぬくれ竹よ、みさをゝいろにあらはして。

○まがれどをれぬくれ竹の、一ふしあるがたのもしき。

○みどりかはらぬにはの竹、ときはのかげをみかは水、うつるもながき姿かな。
○いさゝむら竹ふく風の、れとれもしろき夕べかな。
○たわむとみれどたちまちに、又おきかへるなよ竹の、心の程ぞたのもしき。

## 杉 神社之部參照

○杉の一むら○杉の青葉○杉の葉かざす○こけむすまでに○杉のむらだち○せきの杉むら○しめはふる迄○しるしの杉○なほき姿を○ふるの神杉○杉の下枝○杉のふる葉○杉のふる木○杉ばしら○みつの神すぎ○神垣の御前の杉○杉たてる門(三輪山にいふ)○老木の杉○神さびにけり○神路山千枝の杉○杉生のれく
○はこねの山のみねの杉、冬はあらしのやどりかな。
○神ましけりとをもふまで、木ぶかくしげるほこすぎの。
○朝風さむき杉むらの、こけぢをゆけばつゆしげし。
○いつの宮木にひきのこされて、神さび立てるいはひ杉。



○かくていく世をすぎの庵、ひとりみむろのれくしめて。
○みどりかさなる枝と枝、月日のかげもつゆもれで。
○君が八千代のかぎりなき、ときはのいろもかつ見えて、風ゆたかなる杉むらや。
○風はやき夕べ梢にひゞく鑿々のひゞき、雨急なるあした苔路にしきる滴々の聲。
○たどるたもとにつゆちりて、ひる猶くらしゝげりたつ、杉の下みち風さにて。
○かとべにたかき一本杉、たれにとへとのしるしぞも。
○よにふる川の杉のもと、すぎしむかしを忍びつゝ、袂にかくる白波。

## 榊 神社之部參照

○さかき茶のときは○根ごしの榊○神代ながらに○ゆふかくる○玉ぐしの葉○さかきばの春さす枝○神のよせざる○いろもかはらぬ○とれどつきぬ○はがへせぬ○岩根にれふる○ときはかきはに○神のみまへに○榊

とり○あけの玉垣○しめはへて○いのる心は○日影さしうふ○眞榊木に
○みづくし○みしめなは○社の前に○神のはふりに○心をこめて○いつ
もみぎりの○かげしめて○神のまします○ゆきにかくれぬ○神路の山に
○鳥居の前に○宮の大前○拍手うちて○あふぎみる○神のみいづは○み
きたてまつり○しげる葉蔭に○千ひろのかげは○松にゆづらぬ○なみな
みならぬ。
○神のしめゆふ榊葉の、さかゆく御代にあひぬれば、われもときはの世をや
へむ。
○ゆふしでかけていのる身の、志げき言葉は榊葉の枝にも更にまさるらむ。
○霜にもかへぬいろはにて、榮にゆく世の榊葉は、君が千とせのいざしなり。
○みぎりかはらぬさかきばに、神のみいづもあらはれて。
○ゆきにもかくれぬほにはの、神のみまへのさかきばや。
○神路の山のさかきばの、ときはかぎはをいのりつゝ。
○神のいがきのうばにたつ、さかのきのみづえみづ〳〵し。
○いろもかはらぬ榊葉に、あけのたまがきうつりあひ、みるもきばゆき神の



には。

## 桐

夏日、秋風之部參照

○秋たちて○桐の一葉○あきつげて○けだかきいろにさく花の○かをり
ゆかしく○桐の花ちるゆふべ○黒き衣にれつる花○むらさきのゆかりの
いろに○雨にこぼれて○庭にちりしく○つゆれびて○志げるわかだち○
夏の日きよく○みづにさす○まどさへぎりて○あつさわするゝ○風にう
よぐ○日影をさへて○ひるいの友○窓近く○みはしのもとに○一葉々々
に○志もみえて○志も志ろく○かりなくころ○ちりうめて○こぼれうめ
て○秋の志もれもく○志をれかへりて○月の影さす○ほろ〳〵と○なみ
ださうふ○つゆしもに○枝よりれつる○いろかはる○秋きにけりと○秋
たけて○梢うごかし○枯葉のれとに
○庭の桐の木琴にきり、へだてし月のかげにならさむ。
○桐の一葉のれちうめて、大かたの世の秋が志る。
○窓をれほへる桐のわかだち、あつき日影をさゝへても。

○夕日は窓に影さして、桐のわかだち風わたる。
○のきばのいよすつゆちりて、桐のわかだち風わたる。
○きりのわかばのかげふめば、風はふかねど袖すゞし。
○一葉々々に秋つげて、きのふもけふも桐のはの、なみだと共にこぼれけり。
○夕日影さす庭のれも、桐の青ばの葉がくれに、雨よぶ蛙の聲すゞし。

## 楢

○ならかしは○ならしばのなるゝ○ならのひろば○ならのむらだち○風わたる○ならのれちば○ならの木かげ○ならの葉柏○葉守の神も○みぞりふかき○月の影さす○月しろき○風にみだるゝ○ならさぬにだ○風もふかぬ
○風もまづかに楢の葉の、ならさぬ枝ぞのどかなる。
○楢はいつかまもがれて月にれちばのれとばかり。
○ならのひろばにさす月の影まろ〳〵とれく志もの。
○あつき日影もさへられて、風わたるなり楢のかげ。



○庭にまげれるならの葉の、みぎりもふかき風のれと。

## 草苔 田野之部參照

○生ひたちて○茂り合ひ○のび立ちて○こけむして○こけにうづもれ○苔の香匂ふ○生ひはびこる○野となる庭○昔のあとをうづもる○昨日よりけふはまげる○苔又苔を生ず○生ひ茂り○みだれふす○わか艸○八千艸○なつ草○たけたかく生茂る○一むらの草の原○枯れはてし草○まもがれのこる○こけみどりなる○苔の花○いはにつく○草かりわらは○草の中道○草かご○つみ草○草かる子○草深野○野のみどり○かくるゝまでに○片野の春○秋にあひて○ひきむすぶ
○名に負ふ浦のすみよしや、世のうきこともわすれ草。
○末摘花よ末つひに、たが衣をかりめぬらむ。
○世のうきことをもわすれ草、住よしといふ里しめて、れのがきに〳〵生ひまげる。
○名ぞあはれなる耳な草、よのうきことをもきかざらむ。

○わすれ草とは名にたてれども、春は萠ゐいで秋はなさきて、時をしる社あはれなれ。
○かれどもかれど生しげる、れもひの草よ、よの中のうきこと草やたゐざらむ。
○谷のかけはし中くちて、苔ばかりこりはひ渡れ。
○たがのきばよりれひりめし、ありしむかしを忍ぶ草。
○松に千とせをちぎりつゝ、巖の上にれふる苔。
○わがのがれきてすむ軒に、忍ぶの草ぞ生ひしげる。
○たましく庭の苔の上に、ちりもすゑじとふく松風。
○いはほもゝのやれもふらむ、こけのころものつゆしげし。
○あらしをさむみ深山路の、岩ほはこけのころもきて。
○老曾の杜の下草も、春はみどりにわかゞへり。
○杜の下草しげり合ひて、ふかくも夏はなりにけり。
○みどりいろこきわか草の、めぐみの風になびくなり。
○千草々々はかれはてゝ、うづらの床もあらはれぬ。



○岩根にれふる苔むしろ、いくよかさねしみどりぞも。
○顔淵が巷にしげり、原憲がとぼりをとざす。
○名もなき野べのやち草も、時しきぬれば花さきて、秋しりがほに匂ふなり。
○ねよげに見ゆるわか草の、うすむらさきの藤ばかま、しをに龍膽われもかう、れもひのいろは岩つゝじ。
○ふかき心の底ひをば、人にもらすな水葵、池の澤潟眞菰草。
○あらふ田の去年のふるねのふるよもぎ、今を春邊とひこばえて。
○いくとせへにし石ぶみか、苔又こけの香もたかく、むかしのあとはうづもれぬ。
○もみぢゝりしくこけのうへ、みちはる〳〵とみわたせば、青地に織出すからにしき。
○こけのころもをかさねきて、あたゝかげなる石の肌。

## 若菜

○春菜○たがためのわかな○すゞしろ○山田の根ぜり○わかなつむ○老

せぬわかな○下もにわたる○菜つみにと○野べのわかな○せりふ○漬菜
○わかめつむ○ゆきわけて○まだうらわかき○こほる下根○裾野のわか
な○はゝこ草○生ひりむる○よもぎのさと人○をとめが友○一人はつま
ぬ○野守はみずや○たがためにつむ○打むれて○かたまもち○神に手む
くる○ふりはへて○雪かきて○袖にあまりて○野をやく○かすみしく野
○衣手さえて○もゆる春野○つきせぬめぐみ○よひの小雨に○沫ゆきが
ふる○淺澤水にかげみれば○つみはやす○春雨ふりぬ○春もまだ淺澤水
○雪かきわけて○鶴のねる○よはひをのべに○二葉なる○こゝろを野邊
に○澤水○まだ深からぬ
○萩のやけ原かきわけて、わかなつまむと誘へば、あなあやにくや小松曳。
○子の日の小松ひきつれて野邊のわかなもつみはやし。
○わかなもゝにぬ梅さきぬ、君がおとづれまつほどに、春もいつしかたけに
けり。
○來る春毎に野べにいでゝ、多くの年はつみつれど、老いせぬものはわかな
りけり。



○昔の人の心地して、春野のわかなをけふぞつむ。
○淺澤水に影みれば、ひとりはつまず初わかな。
○若菜洗へば水にうつる、我面影の老いぬるは、年をも澤につみてけり。
○栗栖の小野の燒原も、わかなつむべくなりにけり。
○千とせの春をつみうへて、君にさゝぐる若菜づな。
○尾上のゆきも村きえて、野邊はわかなのもえいでぬ。
○雪間をわけてねひりむる、わかなつまむと袖つれて。
○袖ふりはへてをとめらが、けふもひぐらしわかなつむ。
○野邊にはやどもあらなくに、くるゝもしらでわかなつむ。
○わかなつまむと占めし野に、きのふもけふもふりつもる雪かきわけてい
ざゝらば。
○野べはみどりにいろうひて、わかなつむべくなりにけり。

## 蕨

○山ざと○野べのさわらび○雨ふれば○春のさわらび○かきわけて○手

をりてゆかむ○山かつの○野べにくらして○下わらび○折もすぐさぬ○さわらび○をり〳〵は○手すさびに○家づとに○ゆくてのみちの○ほもいで〳〵○野べの行手○蕨つむ○花さかぬきの○蕨おふる○谷のさわらび○はつわらび○峯のさわらび○家づとに○れどろが下○妹とつむ○をりしる色○もとむる○手ごとに折る○折りつくす○松の木かげに○苔の上なる○柴人○谷かげに○片山かげ○うちむれて○分けこし山路○やけ野○きぎすなく○里人○かたみに入るふ○春たけて○妹とつむ○小松が下の

○しのびてをりし下わらび、下にもゆるをれもひてよ。

○野路の草はら分けゆけば、蕨はきぬを引とめて、裾ひるがへす裏摸様。

○いざうちつれて春の山、みねの早蕨をりてこむ。

○焼野の原の春雨に、いとゞ萠え出る初わらび。

○みつゝすぎにし言の葉を、家づとにしてかへるかな、さかしき山の初わらび。

○をりあはれなる早蕨を、袖につゝみてかへるさの、野べのかすみにたどりつゝ。



○かねてはやきし野邊にきて、つみこうはやせ初わらび。

○うなゐがつめる早わらびの、まだうらわかきいろ見れば、春の心ぞ豐なる。

○たるひの上のさわらびも、もねいづる春となりにけり。

## 菫

○すみれぐさ○すみれさく野○花すみれ○すみれ花さく○すみれつむ○垣ねのすみれ○こゝにすみれ○心すみれの花○ひとりすみれ○妹とすみれ○いろもむつまし○いろはえて○匂ひにならぬ○うすむらさきの○色もよし○妹がゆかり○まだはつかなる○草のゆかり○庭もせにさく○ゆるしのいろ○しめさすばかり○つみはやす○つみにくる人○きやぞる人○眞うでにつゝむ○つゆながら○露しげくとも○よもぎふ○つみてもゆかむ○もすりひく○袖たれて○しげみがもと○月もすみれ○ゆくてにつむ○春の野にいでゝ○ぬしなきやぞ○山ざとの○あら田のくろ○朝まだき○野をなつかしみ

○ゆかりわすれぬ武藏野の、一本菊の秋もあれど、すみれにうまる春ぞよき。
○とふ人もなきふる里に、何をまちてか菫さく。
○野となる庭の草むらに、ひとりすみれぐ春を知る。
○うすむらさきにさく花を、たれかすみれと名づけしも。
○あれて野となる里とへば、こゝやむかしの庭の跡、妹とすみれの花さけり。
○野をなつかしみ一夜ねし、むかしの人もあるものを、しばしかへずな春の小田。
○あれゆく庭にひとりねて、心すみれの花やみむ。
○菫つむとてけふも又、昔ありびし野邊にきて、うつら〳〵となかめけり。

## 山吹 河、蛙之部參照

○山吹きの○花さきりめて○行く水に○八重にのみさく○春ふかみ○花のしらつゆ○春のなごりを○咲うひて○底にぞうつる○蛙なく○いはぬいろにも匂ふ○井手のやまぶき○咲うろふ○八重山吹に○下ゆく水に○ゆく春を○里とほみ○妹にも似たる○春かぜに○かげゆく水に○口なしの○名にぬふ井手○うゑし世を○つゆにこぼれて○たづねきて○さける○をみれば○道のべの○にほひひ行く○咲こぼれたる○一重さく○こぼれてさける○香さへなつかし○人のかざし○かげれもはゆき○たき川の○筏さす川せ○つゆさへかをる○いひしらず○花のつゆ○底のかげさへ○垣ねふるさぬ○川よぎ
○八重山吹の花ざかり、一重にいろぞなつかしき。
○下す筏のみなれ棹、あやなくさしそ花ぞちる。
○賤がきねの山吹は、こがねのいろに咲きいでゝ。
○花みな八重にさきにけり、一重だにさへめでたきを。
○れとなし川のみぎはにぞ、口なしの花はさきにける。
○つゆをこがねにりめかへて、やぎすぎ姿もおもげなり。
○花の盛をいつしかと、一重にまちし山吹は、八重ながらこうちりにけれ。
○うつ石ならで斧の柄の、くちなしぞめの花のいろ、いざたちよりてみてゆかむ。

## 牡丹 庭園之部參照

○ふかみぐさ○はつか草○つゆの玉ふさ○さきしより○にほひみちたる○くれなゐの○てふもむつるゝ○ふゝむより○いひしらぬいろ○えならぬ匂ひ○つゆにさく○行く春のかたみ○ほころぶ○紅のいろ○かくれなきいろ○二十日さく○花の大君○富貴草○花の心も○ちりはつるまで○めもかれず○つゆもこゝろも○なほざりのいろとやは見る○うべも世に似ぬいろか○さける日頃○かきねにぎはふ○春もはつかになりぬ○むぐらのつゆも○つゆもてるばかり○大かたの花をすぐして○にぎはふ花のつやゝかに○春ふかき○庭をかざりて○花壇しつらふ○かきのもとの○しめおける

○みどりにしげるくさむらに、いろふかみ草さきそめて。

○とみてふ花の名もしるく、これぞうかべる雲ならん、二十日も待たで散りにけり。

○春の盛をよりにして、咲ける心やふかみ草、いろさへ香さへたぐらぬ。



○陽春樓閣春たけて、後苑にひらく花の名も、いろふかみ草富貴草。

○櫻もちりて春もやゝくれ方ちかき庭の面に、ひとり時めく花のいろ。

○光のどけき日の本に、うつりていろのふかみ草、かの唐人に見せばやな。

○花にゐくれてさくはなの、心のいろのふかみ草。

○つゆも心もふかみ草、たぐなほざりのいろならず。

## 藤 春日之部參照

○たちかへり○にほふゝぢなみ○池水に○よせてはかへす○むらさきに匂ふ○まつのみどり○しらふぢ○をのへの松に○松が枝に○かりゝて匂ふ○春の日に○梢より○岸のふぢ波○住吉の○糸よりかくる○花ざかり○花のあだなみ○雨ふれば○いくしほりめし○かげうつす○幾春かけて○春風にほふ○雲とのみ○春さへふかく○むらさきの雲○夏にかゝりて○うすく亂れて○うづもれて○夏にかゝりて○木だかき松に○はひまつはる○春日さく○谷のふぢなみ○藤のうら葉○藤の下行く水○ふぢのしづく○底もにほひて○空よりおつる波○雨にいろます○千とせをかけて

○夕日にほふ
○さくらは散りて藤のはな、夏を松にもかゝりけり。
○世をのがれたるわがやどに、何をまつにかかゝる藤。
○松より上の藤波は、かけはなれてゞ見ねにけり。
○松のみどりも紫の、色ゆるされて忽ちに、雲井の風になびくなり。
○末の松山うちこゆる、浪かと見しは山松の、梢にかゝる藤の花。
○春日祭もながき世の、ためしとほぎし藤のはな。
○ぬれていろますふぢのはな、姿つくろふ水かゞみ。
○藤のかゝれる老松は、わかむらさきにかへりけり。
○世々に榮ゆる藤の門、わかむらさきのいろはえて、今こそ匂へれのが春。
○藤の花ぶさもげなり、杖にやかすべき老松に。
○うらよりねつる浪かとも、みまがへらるゝ藤のはな、木だかき松にかゝる
なり。
○老いにしまつにまとひつく、わかむらさきのふぢのはな、かゝるためしも
れもしろや。



○はるも末葉のつゆちりて、なびくや松のふぢの花。
○老木のまつもふぢなみの、わかむらさきにかへるはる。
○はつもとゆひのむかしさへ、こひしきものは藤のはな、かざせる春のまど
ねなり。
○松にかゝりて藤なみの、なびくもいとゞのどけしや。

## 卯花 夏夜、夏月之部參照

○うのはなの○さけるあたり○卯花くだしふる雨○れとなきなみ○ゆき
とのみ○身をうのはな○ひとさかり○かきねつゞき○時ならぬ○月かと
見ねて○うつき原○賤が袖かき○月と見て○この下月夜○あなうのはな
○くれぬめり○さかりもしるし○ゆふしてと○枝白たへの○垣ねのしも
○花の中ゆく○垣根くづれて○井手こす波○卯花つく夜○月なれや○つ
ゆのひかりも
○咲く卯の花の月影は、やみこりわきて盛なれ、夜よしとつげむ友のがり。
○卯花づくよれもしろき、山路は夜こそ行くべけれ。

○やみに訪へども卯花の、咲ける垣根はしられけり。
○神のみまへにいつはりを、たゞすの杜の卯の花よ、月とゆきとになどまがふ。
○なげきこりつむ柴垣に、あなうのはなも咲きにけり。
○むら〳〵匂ふ卯の花は、木のまの月とまがはれて。
○くづれしかきにさくうつぎ、さかりのいろもすきがての、一あめすぎてにほふ月。
○月のひかりにしろ〳〵と、しらけはてたる卯の花の、かきねのもとにたゞずめば。
○卯の花かぎをたち去れば、いつしか日さへくれにけり。
○月のひかりもさしうひて、一しほにほふ卯つきがき。

## 菖蒲 燕子花、夏日之部參照

あやめぐさ○ぬれてもひかん○ながきね○枕にむすぶ○池みづに○末葉のつゆ○ひきかけて○あやめひぐらし○ひきむすぶ○あやめもわかぬ○



たれもけふ○袖にかをれる○あやめふく○かりふくのき○さはみづに○水がくれてしも○しげりあふ○しづくもかをる○花あやめ○かりねのとこ○あやめかる○あやめかたしく○ふく○ながきためし○花あやめ○かがふせやも○池の水にねなしためしのふきよせて○ふかき匂ひ○ほとゝぎす草のいほり

○けふはあやめの草のいほ、玉のうてなも賤が家も。
○ふる五月雨のしづくにも、かをるはのきのあやめぐさ。
○ゆふぐれちかき五月雨の、しづくにしめるあやめぐさ。
○なくやさつきのほとゝぎす、のきのあやめもかをる夜に。
○こけさへむせるわがいほの、のきばにふけるあやめぐさ。
○水がくれたりしあやめぐさ、香をたづねても人はひく。
○ひく手あまたのあやめぐさ、風になびくもうらにくや。
○小松ひきたる野邊にきて、ねなじためしのあやめひく。

# 百合

○ひめゆり○匂ひにならぬ○さゆりのはな○しげみにさける○草わけて○さゆり葉○露にほゝゑむ○花もてかしげて○物思はしげ○ゑまひのにほひ○一本ゆり○いろもなまめく○まばゆく○なつ草にまじる○なつの野に○袂にすがる夏虫○花もだれて○つゆにひもとく○妹がゝざしに○葉がくれに○つゆもてかざる○日ざかりに○水にかげみる○ちがやがもとに○鬼百合ときくもおそろし○くさむら毎に○道のべの○うしろめたくも○夕つゆに○人しのばしき○草ふかゆり

○岩うちこゆるあら波に、あてむはをしき百合の花。

○夏草しげきませ垣に、一枝さける百合の花。

○匂ふ早百合の花咲きて、あしたの原はあだめきぬ。

○草の袂にかくれつゝ、しげき思ひのありがほに、うちかたぶけるゆりの花。

## 燕子花 澤、沼之部參照



○春雨に○花さくいけの○ゆくはるの○いはがきつばた○いろふかく○にほふ澤べ○春のへだて○いろゆるされて○おもしなべて○むらさきにほふ○岩がきぬま○袖のつまずり○咲きそむる○池のさゞなみ○ぬま水に○あしのはまじり○かきつばた○いろもむつまし○いろにいでゝ○狩人の衣にする○影うつす○春をこめて○淺澤水に○波のあやれる○しめさして○水のみぎり○しらさぎの○石の間に○ふかきいろなる○花ゆゑ人に○いろこそ人をへだてざりけれ○妹がかゞみ○池のこゝろもうつろふ○をしの羽いろも○さきつらなれる○行水にかずかきつばた○波の花さへむらさきに立つ

○淺澤水にかげ見にて、色をあらそふかきつばた。

○花の盛は池水に、ふしきのいろを流すなり。

○ぬれていろまさかきつばた、さきかはしては池水に、ながすや春の花のいろ。

○ふれなは衣もりみやせん、こきむらさきのかきつばた。

○雨のなごりのつゆの玉、さはちば花のいろあせむ。

○君がためとてふる雨も、いとはで折りし花のいろ、ふかき心もむらさきの、ゆかりにさける燕子花。

## 夕顔
神祭、夏夕之部參照

○山賤が○やどりゆかしき○たそがれ○花のちぎり○こゝろあれや○月まちいづる○葉がくれ○よそめゆかし○さきかゝる○ひかりそへたる○色はえて○まゆひらけたる○花の名も○垣ねにつゞく○あばらやの○うすぎりに○のきの夕がほ○つゆきよく○ひとふさ折りて○草の戸に○くれりめて○ほの〳〵見ゆる○賤がふざし○かきねすゞしく○つまど○ゆかしくさける○なさけぶきける○草の葉なびく夕風に○となりもれなじ○扇にうつす○みすてがてなる○たちよりて○有明の月の影に○川づらの里に○花の名きかむ○三日月のあるかなきかに○ひかりさへ○たゞれ白し○志る人にあらぬものから○きよくも匂ふ○すがたもすゞし○蘆垣にあまりて○かやりたくやの○志ろ〳〵と○見にわたる○垣根に匂ふ夕がほや、月やあらぬとかこちけん、五條あたりのあばら屋を、



りこともいはず心あてに、ぼつかなくも尋ねつゝ。
○人まちがほにゆふまぐれ、ひもとく花の夕顔に、匂ひ加はる月のかげ。
○まかねど去年のたねちりて、垣根にさける夕顔の、花の匂ひのなつかしさ。
○風ふきわたる夕顔に、花白けたる月のかげ。
○たゞがれまちてひもときて、時めく花の夕顔に、匂ひをゝふる月のかげ。

## 朝顔
朝之部參照

○花の朝がほ○匂ふあさがほ○つゆの朝がほ○のきの朝がほ○かきの朝がほ○ねくたれがみの○かずゝふ花○あだなるはな○朝な〳〵咲く○花にやこかる○花のすがた○もろくさく○つゆにあらそふ○つゆにかゝれる○つゆよりげなる○夕かげまたぬ○れきいでゝみる○竹にまつはるあはれなる○いろもなつかし○あくるれどもしと○かきねの竹に○柴のまがき○柴のうでがき○きりのまがき○いろ〳〵の○しぼむ○東雲の○あかつきぬきの○妹がゝきねに○白つゆを○さかりみじかき○はかなしや○中垣のへだてなく○はひまつはれる○すゞしき朝○きゆるにやすき○

しづくを花に○しをれてかゝる
○さきぬやと見るなかぎきに、そむきてもさく朝がほの。
○つゆをいのちの朝がほに、いたはり知らぬ夏の日の、などさばかりもてらすらん。
○つゆに日影のやどるまを、志ばしいのちの朝がほや。
○朝戸あくればめづらしき、花をばかへて朝顔は、われまち顔にさきにけり。
○朝めづらしき朝顔の、垣根につゞるつゆの玉。
○あれたる庭のかきねさへ、咲く朝顔にかざられて。
○とざしすてたる柴の戸に、朝毎ひらく朝がほの。
○庭の志をり戸朝顔の、蔓にいつしかとぢられて。
○さかむともせぬ朝がほは、日影もりこぬ葉がくれを、まだあけずとやおもふらむ。

## 撫子

○しらつゆの○まがきにさける○とこなつの○いろもかも○めかれぬいろ○あかずみん○さけるなでしこ○咲しより○花のとこなつ○つゆふかく○ちりゆく○庭もせにさく○川原なでしこ○床なつの花○手にとりて○光さへうふ○うつくしと○たれにみせまし○こまにしき○夕ぐれのまがき○からにしき○やまと撫子○手もたゆく○おほしたてたる○妹がいへぢ
○言さへぐてふ名こりはおへど、色志めやかになつかしき、唐撫子ぞあはれなる。
○世のちりひぢをすゑじとて、鉢にうつし、撫子は、机の上にて咲きにけり。
○げにくれなゐのなでしこは園生にうゑてもかくれなし。

## 蓮 夏日之部參照

○池水の○にごれる水に○はがくれに○入江のはちす○風ふけば○池の心も○はすのうきはに○法のはちす○にごりにしまぬ○心すむ○きよらなる○風わたる○にほふ蓮葉○やどれる月○衣の玉○さゞれなみ○こぼれておつる○水きよみ○玉ゆりかくる○池のべの○つゆのいのち○こぼ

るゝつゆ○花はちす○紅白のいろ○かをるなり○たまれる水○いろもすゞしく○つゆつゝむ○たれかあざむく○いかなれば○ちるもをしき○この世のものとも○けがれなき○すゞしかりけり○水きよき池○水さへすみて○つゆのひかり○三日月細き○寺の古池○朝はやく○夜はまだのこる○朝戸いでゝ

○風にうごける蓮のはの、立葉のつゆはこぼれても、浮葉の玉となりにけり。

○この世のものとも見えぬかな、水さへきよき池のおもに、匂ひけだかくさく蓮。

○みうらの星の影ちて、うきばにやどるつゆのたま、手にもとられずきえもせず。

○とくれきいでゝねやの戸を、ひらけばひらくはなはちす。

○御堂をめぐる吉池に、さくも涼しき白蓮の。

○水のいろさへ清くさく、はちすのかをりうことなく。

○濁れる池にれひたちて、きよくもさける花はちす。

○葉にうちまろぶ白玉の、つゆもけがれぬ花のいろ。

## 薄、尾花 秋野之部參照

○花すゝき○ひとむらすゝき○うらなくも○たれまねくらむ○しのすゝき○すゝきみだるゝ○人まねくなり○いとすゝき○むすひ。

れくとも○しめ野○よするうらかぜ○穂にいつる○道もなきまで○あさつゆに○尾花が袖○ほにいでゝまねく○ほなみ○眞袖にぼゆる○しらつゆの○ますほのすゝき○わがうゑし○しらゆふをばな○末野○日もゆふぐれ○川きしの○たが袖見せて○まねかれて○入野○原野のすゝき○岡のべの○ふる里に○心ありて○初尾ばな○うゑてみる○月いりがたの○露にふす○ひともとすゝき○草のたもと○風たちさわぐ○下をれながらあれたる庭にひとりたつ、ひともとすゝきうなかぶし、つゆにうぼてる朝ぼらけ。

○草川堤ふく風に、れとせぬなみや枯尾花。

○秋の夕のわびしさに、堪へずやまねく花すゝき。

○尾花ながらのかやむしろ、うたてやこよひ敷きてまし。

○草のたもとにうき秋を、つゝみかねてや花すゝき、ほにいでゝ招くきのふけふ。

○風の行手になびき合ふ、尾花がほなみたちまちに。

○われをまねくか尾花のたもと、いざとてよればふく風に、又忽ちにあなたになびく。

○みし人を忍ぶが岡の花すゝき、なびくは招くにさも似たり。

○みしよのあるじは影もなく、あれしまがきに唯ひとり、われをまねけり花すゝき。

○野となる庭のこゝかしこ、むら〳〵たてるをすゝきに、夕風さむく吹きわたり、まねくたもともうらさびし。

○山田のくろのむらすゝき、しもさわたる秋の日に、かりのこされていろもなし。

○ふもとのゝべの花すゝき、ほのかになびくゆふまぐれ。

○たれかまねくとちかづけば、風にみだるゝ花すゝき。

○かりがねさむく秋つげて、のずゑのつゆに花すゝき、ますほのいろになびくなり。

○しどろもどろに花すゝき、風にみだれてさびしくも、野末にひとりまねくなり。

## 苅萱 秋野、秋艸之部參照

○をれふして○たがこゝろかやと○ふみしだく○秋風にしたをれまさる○うらがるゝ○つゆだにとめず○つかぬる○れとかるかや○ふくかぜに○末葉みだるゝ○ふきすさぶ○のべのかるかや○つまなれや○風のかるかや○つかねを○しげるまがき○かりにだに○れもひみだるゝ○下葉○しどろもどろに○つかのまも○ませゆふには○朝ゆくしかの○わけてゆく○野末にさびし○月すみて○ふきこす風に○れのづから○野路の夕ぐれ○つゆしげき○あさぎりに○みちほうく○つゆのしらたま○かれはてゝ○虫のねしきる○柩むしのこゑ○さびしさも○ながめやる○風さむく○月ほうくして

○上葉をわたる秋風に、下をれまさるかるかやの。

○人のこゝろはかるかやの、れもひみだるゝ下葉かな、
○朝ゆくしかやすぎにけむ、志ぎろに見ゆるかるかやは。
○つゆにぬれたるかるかやの、野路の夕をわがゆけば、もすそもぬれて秋さむし。
○三日月ほそき野の末に、ぬれてをれふすかるかやの。
○風のつよさにかるかやは、みな下をれてれそもなし。
○秋の野末にわけ入れば、志ぎろにみゆるかるかやの、れもひみだるゝながめかな。
○つゆのかるかやふみわけて、野末の秋の月影に、うづらの聲をきく夜かな。

## 女郎花 同上參照

○いろめく○こゝろれくつゆ○夕つゆの○えならぬ花○しをるゝ○あだし野の○よのまの風○しらつゆに○花にも葉にも○なびく○誰にちぎりて○うつしうゑし○ふるさとに○くねる○うしろめたく○をみなへし○打たれかみの○こゝろれく○なまめき立てる○露しげみ○秋にのみあふ



○ひとりのみ○たをやめの○野べに咲くらむ○やどりぬる○人しれずこう○あだなれば○秋かぜぞふく○むすぶなり○しめゆふやど○水かゞみ○風になびける○名にめでゝ○ものれもふうで○さきいでゝ○袖もつゆけき○野づかさに○一夜ねむ○名にしおはゞ○ゆきゝもちげき○入日さす野の○何れもふらむ

○うしと見つゝぞゞてゆく、男山邊の女郎花、心多かる花なれや。
○つゆに恨をかけわびて、いろあせにたる女郎花。
○なまめき立てる名にめでゝ、偕老の秋を契りけむ、昔の人も忍ばれて。
○なまめきたてる女郎花、うれも一時何しかも、かしがましくはとがもべき。
○なまめき立てる女郎花、風のまに〳〵なびくらむ。
○西に東になびきつゝ、心定めぬ女郎花。
○あやなく仇の名やたゝむ、道のゆく手の女郎花。
○一本松の蔭しめて、秋をとゞめし下草の、中にまじるや女郎花。
○秋風にひとりふかれて、女郎花やつるゝはなもあはれなり。
○枕さだめぬ秋かぜに、玉しくのべの女郎花。

○うらみもあへずあき風に、なれてもなびく女郎花。
○なまめくいろをてらひつゝ、なびくもうたて女郎花。
○たつあさぎりに女郎花、すきかげ見えてねもしろし。
○風をつらしとうらみても、なびく姿の女郎花、なまめくさまをながめては、
またなか〳〵にあはれなり。
○袖ふく風になぶられて、ねもはゆげなる女郎花。
○心の秋を知りながら、風にはなびく女郎花

## 萩 秋野之部參照

○立よりて○ま玉ぉら玉○つゆながら○ねきりふつゆ○つゆわくる○秋
萩のはな○朝つゆに○花になりゆく○分けゆけば○萩の下つゆ○つゆし
げみ○さきかゝる○見せばや人に○ふるさとの○野べの秋はぎ○には
せに○萩の初はな○からにしき○すりのゝ小萩○をとめ子が○枝もたわ
ゝにねく露○萩が花づま○玉ぬける○野守がいほの○いとはぎ○ひもと
くはぎ○小萩さく○秋の雨に○小野のぉのはら○さきつゞく○つゆのし



らたま○萩のありび○かざしのはな○花すりごろも○わかむらさき○つ
ゆながらみむ○枝もたわゝにさく○こむらさきなる○ほゝゑむはぎの花
○折りてみむ○下ばいろづく○匂ひこぼれて
○つゆを涙の秋はぎや、物ねもふ袖にくだけつゝ。
○折りこし萩の一もとに、秋のあはれも匂ふなり。
○かへさわすれてありぶ野の、萩の錦を我やどに、鹿のねながら移さばや。
○萩の上葉をふく風は、やがてあはれを送るなり。
○一むらさける小萩原、朝夕つゆのれきどころ。
○つゆのむすべるいとはぎは、中々花のほころびて。
○みる人もなきあらがきに、萩のにしきをれりかけて。
○いろなき草も匂ふまで、咲ける秋萩いろもよし、いざ月にこよかげもよし。
○吹けどふかねど秋風に、ちりしく萩の花よりも、もろきは露のすがたなり。
○あれしかきねも咲く萩の、花のにしきに包まれて。
○月影ふみていざゆかむ、今をさかりの萩寺の、花にくだくるつゆもみむ。
○一村萩の花ざかり、垣内の井戸は埋れて、かよふ道さへあとたえぬ。

○野となる庭にさける萩、花はむかしのまゝながら。
○妹がゝどべにたゞずめば、折しもかざやく稲妻に、一目見えけり庭の萩。

## 萩 秋風之部參照

○萩の葉の○風まつほどの○萩はら○萩の一村○萩のむと○萩のともずり○萩の葉わけ○萩の葉むけ○萩の上葉○萩の下葉○をぎのかれの○をぎの葉風○をぎふく風○庭のをぎはら○垣ほのをぎ○うともものをぎ○あしべの萩○末葉のつゆ○軒の下葉○つゆの下萩○松の下をぎ○片よりに○うよぐも寒し○風のやどり○れとづれりもる○風こうわたれ○風わたるなり○はむけの風○秋風さむし○夜半のあらし○つゆふきみだす○枕になるゝ○つゆの志らたま○ねざめにきく○ゆめもみはてぬ○むどろかれつゝ○ねざめのまどに○なれてもかなし○なみだもよほす○うらぶれて

○野分をおくる追風は、萩の波たつあくの原。
○夢むどろかしれとづるゝ、軒ばの萩の音きけば、草のかきはゝ今のよも、猶



ことやめずさやぐなり。
○寝覺の友とうゑおきし、軒ばの萩は中々に、袖に涙の露おくる、風のやどりとなりにけり。
○かりなきわたる秋風に、さやぐもさびしよはの萩。
○人はとひこでわが庭の、萩の上葉にふく風の、おとのみしげしきのふけふ。
○うらやあき風ふきぬれば、こぼれて匂ふ萩のつゆ。
○友ずれまさる萩のはの、ねざめのまどにおとたかく。

## 藤袴 秋風之部參照

○ほころぶ○ほころびわたる○うつり香匂ふ○野べを匂はす○草のまくらに匂ふ○いろむつまじき○ゆかりのいろ○つゞりさす○いとのとぢめ○たがぬぎすてし○さゝがにのいとに○折人の心のまゝに○人のかたみのゆのぬき○つゆはむすべど○匂ふもゆかし○こぼれて匂ふ○秋の風ふく○きる人なしに○ぬし知らぬ○主やたれ○かりにくる○きてみれば○つ○野をなつかしみ○りことも知らず○ぬぎすていにし○ぬぎかけし○名

もなつかしき○ほつれて匂ふ○いろもゆかしき○うれかとばかり○夕されば○さきほこりたる○すがりて匂ふ○わけゆくすゝきに○香もたかき○わか紫の花のいろ、秋をいろぐるふぢばかま。

○佐保ひめの紅葉の錦、れらもとてぬぎかけいにし藤ばかま。

○たれ秋の野にぬぎすてし、匂ひゆかしき藤ばかま。

○風こうかをれふぢばかま、たれぬきすてし秋の野に。

○ほころびぬらしふぢばかま、さてこう野にはすてつらめ。

○つゆはむすべぎほころびて、いろもゆかしきふぢばかま。

○ゆきすぎがてのいろにのみ、さくもゆかしやふぢばかま。

○たがぬぎかけし藤ばかま、ふく夕風にほころびて、裾野の秋にかをるなり。

## 菊 秋日之部參照

○きくの一本○きくのいろ〳〵○菊の花ずり○きくの花かづら○きくの匂だ○きくのきせわた○菊の上のつゆ○きくのしづく○菊の下水○菊うる市○千歳のきく○老せぬきく○白たへに○かざすしら菊○千代のしらぎく○岡べのきく○園生のきくを○はなゝきとき○さかり久しき○折るうで匂ふ○こがねのいろ○いくたびをりて○宮人のかざし○ぬれなばりでの○老てふことも知らぬ○千年まで○萬代の秋○仙人のいへ○九重のには○あまつ星○月影にいろみにまがふ○下葉の月の影○百草の花のとぢめ○長月にしも○いたぐくしも○しもにまがふ○きりのまがき

○秋を送りて唉くきくの、花よりのちの花はなし、みつゝくらさむもかれず。

○菊のあさつゆいろもよし、心してふけ秋の風。

○千草百草あともなく、枯れにし野べに唉きいでゝ、しもにをごれる菊のはな。

○庭にのこれる白きくや、南の海のはまびさし、久しくたもつためしとて。

○色もけだかき白ぎくは、いつの折にか仙人の、千とせをこめてうゑにけむ。

○ちることしらね庭のきく、げに千とせをもへぬべしや。

○しものうめたるきくのはな、いつれかもとのいろならむ。

○月のひかりに白ぎくの、いろはさながらまがへぢも、かくれぬものは花の香や。

## 萍

○ねざしとゞめぬ○根をたえて○みをうき草○よるべさだめぬ○水の上なる○水のまに〳〵○根さゝで生ふる○うきに朽ちゆく○池のみくり○けふはまた○うきにまかする○水の上に○うきを世の○たゞよふすがたに○いつまでか○よるべなぎさの○浪のまに〳〵○浪にまかする○うきつしづみつ○水きよき池の○世わたるみちも○影うつる○にごらぬ水に○流れよる○しげりあふ○浪にたゞよふ○魚のすむ○魚をどる○ふるいけの○ぬなはも生ふる○そこふかき○やすげにみゆる○あなたこなたのきしに○心さだめぬ○世のことわりも○世の人も○心うき居る○うき立つこゝろ

○身をうき草の根をたにて、さりふ水にやまかすらむ。

○水の上なる萍の、うきてたゞよふうき身には、なに世の中のつらからむ。



○水にたゞよふうき草の、うき世の中としりながら、のがれもあへずさまよひて。

○水のまに〳〵うきくさは、身を任せてもさすらへり。

○池のみぎはにうきくさの、よるかとみれば又さらに、風のこゝろにまかせつゝ。

○世をうきくさのさだめなき、ならひと人は知るやいざ。

○風にさそはれ水にうひ、ところさだめぬうきくさの、心やゝがてよのすがた。

○うきてたゞよふこゝろこそ、やがてよをふるすがたなれ。

## 笹篠 霞之部参照

○小篠原○さゝはら○つゆしげき笹生○しのやの軒に○れとさやぐ○笹葉かりしき○さゝわくる道○さゝわけ衣○笹まくら○をかのさゝはら○野路のさゝ原○汀の小笹○さゝのまろや○しのふく風○夜はふけて○つゆまろぶ○まなくひまなく○わけのぼる○さゝがきのへだて○しげくも

生ふる

○岡べの小笹風ふけば、つらぬきとめぬ玉ちりて、狹きたもとにあまるなり。

○北吹く風のはげしさに、さゝのいほりにちるつゆの。

○朝な夕なにしらつゆの、きよきすがたも見るものを、いたくなかりそ岡の篠。

○ふるやあられに聲たてゝ、庭にさわげるたま笹を、わくる人なきさびしさや。

○岩間の小ざゝひたすらに、忍びしふしはあらはれぬ。

○眞葛まじりの玉ざゝは、たまさかにかる人もなく、風にそよぎてあけくれの、つゆのみおもげくれきまさる。

○れくつゆおもげき小笹原吹く夕風にちら玉の、くだくるさまもれもしろし。

○小ざゝにれけるつゆのたま、風をまつまもはかなしや。

○あられたばしる小笹原、又ふきわたるこがらしに。

○まどの下なる篠のはに、をり〳〵さわぐ風のれと。

○何をかなしとなけれども、小笹をわたる夕風の、れとなふきけばうらさびて、袖もいつしかしめりけり。



## 芭蕉 神庵之部參照

○風にふかるゝ○れとなふは○まどの外なる○たゞがれて○草庵の門邊ぎり○やぶれたる○風にやぶれ○きよき風の○ふきやぶる○あめあたるれせば○まどちかき○隱士の家に○かくれすむ○世をのがれすむ○ふりしくあられ○ゆめやぶる○芭蕉のこる○このめにる庵の夕ぐれ○月白くうちかへしゆく秋の風○月ふけて○中庭にひろごる青葉○とひこし人の名○廣葉にかきし人の名○むかしなつかし○すみあれて○閑庭月は白し芭蕉の影

○芭蕉にれつる松の風、いたづらに葉や破るらむ。

○村雨はれて風さわぐ、のきの芭蕉の夕まぐれ。

○草のいほりにすむやたれ、のきの芭蕉葉風すぎて、いよすにかくるつゆの

玉。

○やぶれはてたる芭蕉葉を、なほうちかへしふく風に。

○雨には雨にわとうへて、風には風のわとはへて、いつもさびしき芭蕉葉や。

○夜ふく風に芭蕉葉の、ひるがへりては月影を、草にこぼすや秋の庭。

○柴門戸をとぢて茶烟あはく、中庭草ふかくして芭蕉みどりなり。

○ふる村雨のつゆうけて、まどにつたふる芭蕉の葉。

○とはれぬまどをめづらしく、たれか叩くと戸をあけせば、風に芭蕉のさわぐなり。

## 芝 庭園之部參照

○落葉の芝生○まばずりころも○芝生の床○芝生の上に○みちの芝草○庭のきり芝○みち芝のつゆ○はひふろごる○みどりいろまず○雨はれて○鳥あうぶ○あれはてゝ○生ひしげる○花ちりまがふ○花びらのちりしく○あとたえぬ○閑庭の芝生○月やどすつゆ○つゆまげき○朝しめり○ひとつみどりに生ひしげる、野べの芝生もまかすがに、わけにし人の跡みて。

○つれなき庭の芝生にも、春と秋とはりの色に、またれのづからあらはれて。

○みどりの毛布しきつめて、花見のむしろまけるる芝。

○庭の芝生の多がれを、たちまちつぐるまもばしら。

## 葵 祭典之部參照

○あふひかるる○あふひ草○あふひかざゝん○あふひのわかば○あふひのかつら○いづる日影○日かげに向ふ○氏の人○玉だれにかけて○もろ葉あふひ○今日にあふひ○たがためかけて○ゆふ禊あふひかけりふ○いく世をかけて○世々かけて○かけていのる○みあれひく○神まつる○かざし草○二葉をかけて○二葉草○かつらかざして○もろかつら○日影になびく。

○あはれとれもふ吾妹子に忍びあふひの花をれば、葉がくれてこう咲きにけれ。

○青々たる園中の葵、朝つゆ日をまちてかわく。

○てる日のあふひかざしては、ねるや都の神まつり。
○めでたきときにあふひぐさ、かつぐに千代のかげうひて。
○君が八千代の末までも、われまさきくてあふひぐさ。

## 芹 澤之部參照

○ねぜりつむ○澤田の水○淺ざは水に○水よどむ○ぬきとりて○家づと
に○君がためにと○心のいろ○まごゝろ○心のいろをつみて志れ○つむ
袖○ゆきふる日○野澤の水に○せりつむなげき○つみためて○れりたち
て○淺澤水の淺からぬ心○せりつみし昔の人○澤田のれもに○友うちつ
れて○水きよき○ながれゆく○田つらにれりて
○澤邊の根芹きて見れば、われより先にゆきぞつむ。
○淺澤水にかげみれば、ひとりはつまずのべのせり。
○君がためにとれりたちて、淺澤水の淺からず、つみしつらさはくみてしれ。
○いへづとにとて淺澤の、水にひたりてつむせりの。
○わがためにとてはるゝ〳〵と、つみてれくりし人心、なさけもみゆる野芹か
な。
○きよき野川のかた岸に、むらがり生ふる水芹の。
○里のわらはの魚とると、れりたつ澤のこゝかしこみ、づゝしくも生ふる
芹。

## 稻 田家、農夫、雀之部參照

○みのりして○秋風に○いろづく○れしね○門田のいねに○ゆたかなる
○黃金の波○千町田にかりてをさむる○穗波ゆたかに○打なびく○かり
入る○をさむる秋の○とよとしの○穗波よる○いなばをわたる○ふきし
く風に○秋まちし○人のいのち○民の力も○いうしめる○粒々辛苦○れ
ろりかにすな○民の涙にれひたつ○玉のをの命をつなぐ
○賤がこりほす稻の穗の、まげき足穗のうましいね、ゆたけき秋のいろ見え
て。
○とよあしはらのみづほ國、名もいちじるきうましいね。
○神のみまへのかけちから、みのりはまげきうましいね。

○千町の田にもふく風に、こがねなみよる夕まぐれ。
○れちほをひろふむらすゞめ、むらがるさまもとよとしの、すがたもみえて
ゆたかなり。
○黄金よ玉よ皆人の、寶と世にはいやせども、いのちをつなぐ八束穗の、足穗
のいねのなかりせば。

新體詩歌自在 終



明治三十一年十一月十九日印刷
明治三十一年十一月廿二日發行

定價金壹圓

版權所有

著者 中郵秋香
發行者 大橋新太郎 東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者 三井駒治 東京市日本橋區兜町二番地
印刷所 東京印刷株式會社 東京市日本橋區兜町二番地

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

佐々木弘綱 佐々木信綱兩君標註校訂

# 日本歌學全書

全部拾貳冊 洋裝美本
正價 ●壹冊金貳拾五錢 ●六冊金壹圓參拾五錢 ●全部拾貳冊金貳圓五拾錢 ●郵稅壹冊二付六錢宛

## 第壹編

- 古今集
- 躬恒家集
- 友則家集
- 貫之家集
- 忠岑家集

## 第貳編

- 後撰集
- 元輔家集
- 順家集
- 能宣家集
- 天德歌合

## 第參編

- 拾遺集
- 公任家集
- 紫式部家集
- 清少納言家集

## 第四編

- 後拾遺集
- 相摸家集
- 經信卿母集
- 高陽院歌集

## 第五編

- 金葉集
- 詞花集
- 堀川百首

## 第六編

- 千載集
- 永久百首
- 忠度集
- 後京極自歌合

## 第七編

- 新古今集
- 自讃歌
- 長明家集

## 第八編

- 林下集
- 山家集
- 賴政集
- 金槐集

## 自第九編

至拾壹編

- 萬葉集

## 第拾貳編

- 悅目抄
- 無名抄
- にいまなび
- 新學意見
- 歌がたり
- 歌ぶくろ
- 調の直路

佐々木信綱君編纂

# 續日本歌學全書

全部拾貳冊 洋裝美本
正價 ●壹冊金參拾五錢 ●六冊金壹圓九拾錢 ●全部拾貳冊金參圓七拾錢 ●郵稅壹冊二付八錢宛

- 第壹編 賀茂眞淵翁全集 上
- 第貳編 賀茂眞淵翁全集 下
- 第四編 本居宣長翁全集
- 第參編 香川景樹翁全集 上
- 第五編 香川景樹翁全集 下
- 第六編 小澤蘆庵翁全集
- 第七編 近世名家家集 上
- 第八編 近世名家家集 下
- 第九編 近世長歌今樣集
- 第拾編 桂園門下家集
- 第拾壹編 明治名家歌集 上
- 第拾貳編 明治名家歌集 下

公爵近衞篤麿君題辭　子爵福羽美靜君序文
伯爵東久世通禧君序文　佐々木信綱君著

# 増補 詠歌自在

全壹冊總クロース
金文字入堅牢美本
正價金壹圓
郵稅八錢

參議爲相の歌に曰く「是れのみは人の國より傳はらで神代を受けし敷島の道」、歌は我國風にして、神代の昔より明治の今に至るまで、相傳へ相詠じ、歌仙名匠輩出して、其道いよ〳〵盛なり。かるが故に歌に志す人其かず多かれども、初學を導くに便よき書少なきをもて、歌よまむ心は有りながらたゆたひをる人少なからず。

此書は故佐々木弘綱翁の著にして、息信綱君に増補を請へるもの、初學を導くこと最も懇篤也

**本書の特色**といふべきは**歌題を改良**して、當世に適せざるを省き**新題**を載せ、且つ作例の歌を精選せるにあり、而して**本書の體裁**は、まづ題の作法を示し、次に句の順序に順ひて歌詞を載せ、次に作例を擧げたり。

**附錄**の詞の栞は歌詞の辭典、假字の栞は假名の辭典にして、且つ當代の能書多田親愛先生の懷紙色紙短冊竪詠草等の書式を載す。これら實に錦上花を添ふるもの、歌に志す人は、必ず一本を座右に備へ給ふべし。



伯爵東久世通禧君題辭　文學博士小中村清矩君序文
男爵高崎正風君題詠　佐々木信綱君著
子爵福羽美靜君序文

# 歌の栞

全壹冊總皮本綴
金文字堅牢美本
正價金壹圓廿錢
量目四百匁

## 目次

總論、沿革、種類、
名所便覽、假字便覽、
作例名歌集、
法則、雅遊、書式、類題便覽、
冠辭便覽、歌詞便覽、作法類語集、

此書其上編に論ぜられたる沿革、種類、法則は、最も嚴密に最も見識高く、雅遊はあらゆる歌の上の遊を載せ、書式は當時の能書多田親愛君に請て名筆七葉を載せ、中編に擧げられたる類題、名所、假字格、冠辭、歌詞の諸課目は、歌を詠ずる者の必ず知らざるべからざる所にして、下編に載せられたる作法類語集、作例名歌集は、名題につきて其作法類語を懇切に說かれ、及び最も卓絶せる秀歌を示されたり。古來かつてかくの如く、歌に關する一切の事を網羅せる書なし。殊に戀歌をはぶきて新題詞書題を加へ、從來歌書の面目を一新せられたる新思想少なからず、これ實に編者が數年間の苦心より出たる結果也。世の歌人諸君並に歌に志す諸君、必ず一本を座右に備へられん事を。

第一高等學校教授 落合直文君著

# 新撰歌典

全壹冊洋裝
紙數六百八拾頁
正價金四拾錢
郵稅八錢

歌は文學の最も高尚なるものなり、月夕花晨、一たびこれを詠ずれば美感踊躍、其快樂實にいふべからず、本書落合直文君の著にして、一讀その面目の改りたるを知るに足らむ、和歌沿革の如き、作法の如きは最もれもしろく、類語は充分に精撰せられ、證歌は萬葉集を始め代々の撰集、家々の歌集、最近の歌人の歌に至るまで、その英華なるは漏すところなし。殊に長歌の如き、今樣の如き、りの他歌體の如き、皆これ感情の神美にして、大に見るべきものあり。而してかの戀歌といふものを減じ、更に人倫の部を設けられたるなど、最も苦心のところ、まして著者の經營慘憺たる意匠の深きを知らるゝなり。其他和歌書法、或は冠詞より、尚も和歌に關したることは、詳細漏すところなし、歌を學ばんとするもの、この書を措きて、また何かあらむ。

東久世伯爵題辭 井口隆太郎君著

◉歌學捷徑 正價拾五錢 郵稅六錢

宮澤春文君著

◉作歌自在 正價貳拾錢 郵稅六錢



華族女學校學監 下田歌子君著

# 詠歌之栞

全壹冊和裝
大判大和綴
正價金參拾五錢
郵稅八錢

目次 歌學に就きての必得 ◉歌の起源◉歌の沿革◉撰集◉歌の種類◉將來の國歌新たに起るべき理由◉文法 歌の式に就きての心得 ◉歌會の式◉歌の書式◉歌の奬掖 詠歌に就きての心得 ◉歌の精神◉歌の組織◉歌の姿勢◉題詠、畫賛、詞書等、作例

我國の歌は、實に女流の手に發育して、美花を着け、好果を結べるものなりと云へるも不可なきなり。故に今猶婦人社會に、之を學びて高尚優美の性情を養はん事を勉むる者少なからず。且其名聲の男子と伯仲し、或は之を凌駕するさへ無しとせず。然れども如何にせん、時勢の變遷は、曆數を變へ、名稱を替へ、亦其物質を增加せり。さるからに、日新の事物に伴ひて、起る所の感情を詠む、歌の栞も亦日々に新たにしてまた日々新たならざるべからず。されば爰には、其類題、歌詞、材料、作例、書式及び詠歌に就き、りの式法まで、其現今に行はれつゝあるものゝ中、最も必要なるべきを取り出でゝ、初學びのともがらのたづきとなさんとす。

伯爵東久世通禧君題辭
從二位北小路隨光君題辭
子爵福羽美靜君序文

佐々木弘綱君輯
佐々木信綱君校

## 詠歌辭典

全壹冊總クロース金文字入洋裝美本
正價金七拾五錢
郵稅八錢

現今辭書の出版、其數少なからずと雖、未だ和歌專門の辭書あることなし。此書は、詠歌社會に最も名ある、佐々木先生の編纂にして、萬葉集廿一代集の解し難き語、七千百六十字を載せ、**雅語俗譯辭典**には、共に歌よむ人のなつかひふべきもの、**假字格辭典**には、あらゆるかなつかひを載せ、**枕詞辭典**には、枕詞の解釋を掲ぐ、以上の五編に附錄として、**小文典**を添ふ。**本書の特色**は、解釋の懇切なる字數の多き、熟語を網羅せる、文典を添へたる等、體裁清楚にして、携帶に便なるに在り。



大和田建樹君著

## 應用歌學

金壹冊洋裝
正價五拾錢
郵稅六錢

有賀長伯翁著

## 和歌八重垣

全七冊和裝
正價四拾五錢
郵稅四錢

大和田建樹君編

## 作文寶典

全壹冊洋裝總皮本綴
金文字入千七百餘頁
正價金貳圓貳拾五錢
量目四百目

本書の價値は、作文の實習に便益なるに在り、作文の標準を明示するに在り、作文の摸範を與ふるに在り。詠歌の作法を教ふるに在り、其文は通俗、其說は懇篤。籠頭加ふるに、編者の文集、著者判定の歌合、編者翻譯の歐米詩林を始めとし、文學上の參考となるべき諸種の事項を以てす。眞に文學者必讀の書、寶典の名其實に背かざるなり。

大和田建樹君編

袖珍實用

## 作文寶典

全壹冊總クロース洋裝
金文字入袖珍千百頁
正價金七拾五錢
郵稅六錢

江湖の大喝采を博したる、作文寶典の中より、其要を摘出し、更に**新體詩作法**等を增補して一小冊子と爲し、名づけて袖珍實用と云ふ。蓋し教室に旅行に、學生をして、携帶に便を得せしむるに在り。燈下爐邊に讀者をして、索引に便を得せしむるに在り。

佐々木高行伯題辭
栗田寛先生序文

# 日本辭林

大宮宗司君編

全壹冊洋裝八百頁
上製正價金四拾錢
並製正價金參拾錢
上製並製各郵稅八錢

國文學の隆盛につれ、斯學に關する著書の出づること頗る多く、また寡なからず、而して其多くは皆な何れも大部のものなれば、普に得るに容易ならざるのみならず。見るに甚だ不便なり。故に初學者を益する事少なし、編者深くこれを歎き、大に奮ふて遂に本書を著はされたり。さて此書の體裁たる從來の辭書に異なる所なしと雖、その解釋を施すや、頗る從來の辭書に異なる所なしと雖、うの解釋を施すや、頗る叮嚀綿密にして、うの說の要領をつくせり。殊に編首には、文典大意を揭げて文法語法の諸規則を示し、また終りには、假名遣と冠詞とを載せて歌學者に便ず。うの注意實に至れりといふべし、今の世にはこの類の著書少なからずと雖も、本書の如く一切を網羅して、完全せるものはあらざるなり、されば尚も文學に志あるものは、よろしく一本を求めて坐右に供すべし。

# 假名交文典

子爵福羽美靜君校閱　田中澳乎君編

全壹冊和裝美本
正價金八錢
郵稅二錢



# 日本大辭典

大和田建樹君編

全壹冊總クロース洋裝
金字入千八百五拾頁
正價金七拾五錢
郵稅八

日本大辭典の特色は、組織の新案に在り、解釋の適切に在り、引證の博多に在り。插圖の緻密にあり、發音の明示にあり、索引の簡便にあり、故に學生用として、敎師用として、獨學用として、何れの社會にも利せざる處無かるべし。辭書の著世に多しと雖も、通俗雅馴兩つながら兼ね得らるべきは、抑も本書の右に出づるものなからん。

# 日本小辭典

大和田建樹君編

全壹冊總皮本綴美本
紙數千九百八拾餘頁
正價金貳圓貳拾五錢
量目六百目

本書の特色は、解說の簡約なるに在り、雅俗其中を得るに在り、搜索其宜しきに適するに在り、携帶の至便なるに在り、紙質善美にして印刷の鮮明なるに在り、著者は嘗て日本大辭典を編して世の好評を博したる、大和田先生なるを以て、其文學社會に、敎育社會に、專門社會に、普通社會に如何に歡迎せらるゝ良書なるかを知るに足らん。

大和田建樹君編

増補

## 謡曲通解

全壹冊背皮金字入
大判紙數二千餘頁
正價金貳圓五拾錢
量目六百匁

其文は自然其意は幽玄にして、神韻の掬すべきは謡曲に在りとは、大和田先生の持論なり、而して先生が謡曲文學の紹介者として、獨特の手腕を有せらるゝは、世人皆な之を知れり。此書は現存の謡曲を悉皆網羅して、註釋を附し、妙處を示すと丁寧反覆、而して專ら通俗を主とす。一讀以て神道佛法を學ぶべく以て歴史古實を諳ず可く、以て詩歌文章を知るべく、以て名所舊跡を探る可し。

大和田建樹君輯譯

## 歐米名家詩集

全參冊洋裝美本
紙數壹冊二百頁餘
正價壹冊金拾貳錢
郵稅壹冊四錢

西洋文學にのみ狂する者は、東洋詩歌の妙味を知らず、和歌和文にのみ偏する者は、歐米韻文の旨趣を解する者少なし。先生此に慨するあり、學東西を兼ねたる才筆を以て、此書を著はす。彼シエークスピアの情緒纏綿たる、ロングフェローの優美流調なる、バイロンの快活幽玄なる、シエリーの精妙巧緻なる。スコットの雄壯悲憤なる、ウヲーヅウヲースの多興多趣なる、寫し來て遺す處なし。燦然星の如きあり、馥郁花の如きあり。以て才子机上の珍と爲すべく、佳人座右の友と爲すに足らん。



文學士鹽井雨江君
文學士武島羽衣君　文學士大町桂月君合作

美文韻文

## 花紅葉

全壹冊總クロース
金文字入洋裝美本
正價金參拾錢
郵稅六錢

春花秋葉は天の文、人間亦美文辭なかるべけんや。鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月、三文學士の文名、夙に江湖に騒ぐ、其錦心繡腸、吐いて美文となり、發して韻文となれるもの、凡そ數十篇、集つて此冊子にあり、才華爛發、紙上珠を聯ね、地に擲たば金石の聲を發せんとす、洵に花紅葉を一時に看るの心地すべし。明治文壇の奇觀たると言を待たず、天下文を好むの士、願くは一本を備へて、讀誦に資せられよ。

大和田建樹君著

散文韻文

## 雪月花

全壹冊總クロース
金文字入洋裝美本
正價金參拾五錢
郵稅六錢

其文は清楚婉麗、趣味掬すべく、其歌は優雅流滑、奇想天外より來りて、句々風を生じ、言々花を降らすものは、大和田先生の筆と爲す、此編收むる所近作數百篇、蓋し落寞振はざる今日文學界中の旗鼓たるものは此書を措きて、他に又た何か在る。

# 帝國百科全書

每月三回發行
全部百冊
紙數一冊三百
廿頁以上洋裝
上製洋裝並製

定價（並製）一冊金三拾五錢〇六冊前金二圓〇十二冊前金三圓八拾錢〇廿五冊前金七圓五拾錢（郵稅一冊八錢）
（上製總クロース金文字入）一冊金五拾錢〇六冊前金二圓八拾錢〇十二冊前金五圓四拾錢（郵稅一冊拾貳錢）

專門學術の普及を計り社會智識の指導に供せんが爲に弘く知名の學士に請ひ其專攻の學術を編述せらるゝ者にして日進百科の學を通じて遺漏なからしむ。

## 本書既刊目次

第一編 世界文明史 文學士 高山林次郎君著
第二編 日本新地理 理學士 佐藤傳藏君著
第三編 東洋西洋倫理學史 井上文學博士閲 木村鷹太郎君著
第四編 肥料學 農學士 木下義道君著
第五編 宗教哲學 文學士 姉崎正治君譯
第六編 新撰算術 理學士 高木貞治君著
第七編 農產製造學 農學士 楠巖君著
第八編 萬國新地理 理學士 佐藤傳藏君著
第九編 支那文學史 文學士 笹川種郎君著
第十編 農學汎論 農學士 恩田鐵彌君著
第十一編 修辭學 文學士 武嶋又次郎君著
第十二編 論理學 文學士 高山林次郎君著
第十三編 栽培汎論 農學士 横井時敬君著
第十四編 植物營養論 農學士 稻垣乙丙君著
第十五編 邦語英文典 文學士 畔柳都太郎君著
第十六編 法律汎論 法學士 熊谷直太君著
第十七編 新撰代數學 理學士 高木貞治君著
第十八編 地質學 理學士 佐藤傳藏君著
第十九編 新撰幾何學 理學士 林鶴一君著
第二十編 森林學 林學士 奥田貞衛君著
第廿一編 民法親族編相續編釋義 法學士 上田豐君著
第廿二編 國際私法 法學士 中村太郎君著
第廿三編 倫理學 文學士 蟹江義丸君著
第廿四編 教育史 文學士 熊谷五郎君著

717

新古書籍
公古屋本
崇禮書館
青山書店